

# 風雷のヒーローアカデミア

笛とホラ吹き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

個性『疾風迅雷』を持つ少女、鳴神風華がオールマイトのような最高のヒーローを目指して邁進する物語。

# 目次

## 1章

プロローグ：鳴神風華は進路に悩む	1
鳴神風華：オリジン	4
風雷の高校入試	9
合格発表	15
高校デビューはテストとともに	20
個性把握テスト	25
戦闘訓練 その1	33
戦闘訓練 その2	38
不穩の幕開け	44
敵、襲来	50
赫く迸るモノ	57
赫災領域ーレッドゾーンー	65
赫き風を止めるのは	73
後始末	80
決意を新たに	86
個性研究所く体育祭に向けてく	92
個性研究所く課題を見つけようく	99
ワン・フォー・オール『フルカウル』	105
雄英体育祭、開幕！	113
第一種目：障害物競走	120
第二種目：騎馬戦（1）	128
第二種目：騎馬戦（2）	136
第二種目：騎馬戦（3）	144

340	期末テスト：その4	
331	期末テスト：その3	
323	期末テスト：その2	
315	期末テスト：その1	
308	備えろ期末テスト	
300	ワン・フォー・オールと期末テスト	
291	職場体験を終えて	
284	職場体験：その7	
276	職場体験：その6	
265	職場体験：その5	
256	職場体験：その4	
248	職場体験：その3	
241	職場体験：その2	
234	職場体験：その1	
227	いざいけ職場体験	
219	決めてけコードネーム	
213	最終種目：決勝	
206	最終種目：準決勝	
199	最終種目：二回戦(3)	
190	最終種目：二回戦(2)	
182	最終種目：二回戦(1)	
173	最終種目：一回戦(3)	
166	最終種目：一回戦(2)	
159	最終種目：一回戦(1)	
152	体育祭：幕間	

龍を墮とせ	544
生還	536
逆襲の関	528
嵐、来たる	521
会見と爆豪と	513
作戦決行	505
敗北	497
巨悪との邂逅	490
林間合宿：その10	482
林間合宿：その9	473
林間合宿：その8	463
林間合宿：その7	454
林間合宿：その6	444
林間合宿：その5	435
林間合宿：その4	428
林間合宿：その3	420
林間合宿：その2	411
林間合宿：その1	403
ワイルド・ワイルド・プツシーキャッツ	396
邂逅のあとで	388
インタビュー・ウイズ・緑谷&鳴神	381
合宿は事前準備が一番楽しい	374
期末テストを終えて：三度蠢く	366
期末テスト：その6	358
期末テスト：その5	348

ワン・フォー・オールと赫い助太刀	553
残火にさよなら	561
エピソード：終わりの始まり	569
1章：番外編	
鳴神風華の必殺技紹介	577
鳴神雷羽の交流日誌	583
2章	
プロローグ：入れ寮	593
必殺技作り	599
ワン・フォー・オールの暴走	607
個性制御訓練	615
緑谷出久VS爆豪勝己、三度	624
仮免試験、はじまり	631
仮免試験 その1	638
仮免試験 その2	645
仮免試験 その3	652
仮免試験 その4	659

## 1章

### プロローグ：鳴神風華は進路に悩む

秋の日は釣瓶落としと言うように。10月にもなれば、夏の長い昼間が嘘のように、あつという間に日は沈む。本日は雨模様ということもあって、まだ夕方の5時だというのに、空はすっかり夜のように黒みを帯びてしまっていた。

普段は構わず遊び回るような子ども達も、こうも暗くてはろくに遊べもしないと、それぞれの家へと帰っていく。普段ははしやぎ回る子ども達やそれを見守る母親で賑わうこの市民公園も、今日ばかりは静寂に包まれていた。

そんな静かな公園に設置された遊具の一つ。「100人の大人が乗っても大丈夫」な耐久性が自慢の大型ジャングルジムの頂上で、雨粒を浴びながら一人黄昏れる少女の姿があった。

薄汚れた黒いレインコートの下には中学校指定のセーラー服を身に付け、足下を包む靴は靴紐が見事なまでに千切れ、爪先が赤黒く染まっている。レインコートにはフードが付いているが、なぜか使っていない。

腰まで届く金髪の三つ編みに、宝石を思わせる翠緑の瞳。露出している肌はボロボロに荒れており、少女のケアへの無頓着さを伺わせた。

彼女の名は鳴神風華。公園のある校区の中学校に通う、三年生の生徒である。

目を閉じて、静かに雨に打たれていた風華。しばらくそのままにしていたが、おもむろにポケットから棒付きのキャンディを取り出し、封を開けた。ショッキングピンクなキャンディを口に咥え、ゴミを持ったままの左手を挙げる。すると、ゴミはひとりでに発火し、そのまま燃え尽きた。

燃えカスが風に攫われて流されていくのを目で追っていると、公園の出入り口に見知った人影が現れるのが分かった。レインコートに

長靴に傘と、雨風対策に重装備している姿を見て、そんな大袈裟など思わず苦笑する。

人影はジャングルジムの前で立ち止まり、頂上に座る風華を見上げた。当然だが、彼女に対して用があるのだろう。中学生の風華よりもさらに小柄なその人影は、彼女を咎めるように大きく声を上げた。

「お姉ちゃん！またこんな所にいて……！風邪ひくから雨の日に寄り道しないでって、いつも言ってるじゃない！」

「……雷羽」

怒声を上げるのは風華の妹、鳴神雷羽。雨の日になると、いつも濡れに行こうとする姉を連れ戻しにきたのだ。

「雨の日が好きだからって、何も毎回毎回濡れに行かなくていいじゃない……」

「好きなことはいつだってやりたいと思うものよ。いい加減あなたも諦めなさい」

「むう……！」

ジャングルジムから飛び降りて、雷羽の差し出す傘を受け取る。受け取ったそれを広げると、風華は雷羽の手を引いて中に入れた。そのまま二人で一緒に公園を出る。降り注ぐ雨は、風と共にその勢いを増していた。

「お姉ちゃん、もう進路はどうするか決めた？」

「まだまだ。先生からも催促されてるけど、これといってやりたいことも無いわけだし」

「お姉ちゃんなら、どこを受けても大丈夫だと思うけど。頭もいいし『個性』も強いし、あの雄英高校だってお姉ちゃんなら……」

「雄英高校……ヒーロー、ねえ……」

雄英高校ヒーロー科。雷羽の言葉を受けて、その道に進んだ自分を想像する。個性で敵を倒し、人々を助け、喝采を受ける自分。どうにも想像し辛くて臃げにしか浮かんでこないが、確かにそういう道も「ナシ」では無いだろうと思えた。

同時に、一人のヒーローを思い浮かべる。かつて地獄のような経験をした姉妹をそこから救い出してくれた、アメリカンなヒーロー。

風華の思う、最高のヒーローの姿。あの時の彼のように、その名だけで人々を安心させられるようなヒーローを目指してみるのも良いかもしれない。個人的にヒーローにはあまり良い感情を持っていない風華だが、彼だけは別であった。

「雷羽、着いたよ。いつものことだけど。ちゃんとおじさんたちの言うことを聞いて、良い子にしてるんだよ」

「うん、分かってるよ！それじゃお姉ちゃん、また今度ね！」

自分の家に着いた雷羽と別れ、風華は改めて帰り道に行く。すっかり暗くなつた路地には彼女以外に通行人はおらず、悠々と歩いて行ける。稲光が空に奔り始めるのも、勢いを増す雨が身体中を打ちつけるのも気にしない。雨模様を好む風華にとっては、むしろ心地良いとすら感じられていた。

「雷まで落ちてきたか。本格的に天気が崩れてきたなあ」

轟く落雷の爆音に、通りがかったトカゲ顔の主婦が全身を震え上げらせる。目の前を歩く少女に直撃したのだ、それは驚くだろう。それで何事もなかったかのように歩き始めたのを見れば、尚更。

己の身へと落ちてきた落雷を取り込んで、風華の身体は激しくスパークを起こしていた。しかし、本人はさして気にする様子もない。雷の落ちるような日にはよくあることだからだ。

翠緑の電閃が迸り、暗い夜道に光を灯す。鼻唄混じりに2本目のキャンディの封を開け、エメラルドグリーンなそれを口に咥える。風雨舞う夜を悠々と歩くその姿はまさに、現代の風神と呼ぶに相応しい姿であった。

## 鳴神風華：オリジン

「……オールマイト。わたしは……あなたのようなヒーローになれるかな」

帰宅した風華は玄関に置いてある写真立てを手に取り、そこに映る人物へと語りかける。かつて常に死と隣り合わせの地獄にいた風華と雷羽をそこから救い出してくれたヒーロー、「平和の象徴」オールマイト。写真に写っていたのは、恩人と、彼に頭を撫でられている幼い頃の風華であった。

あの日の出来事から、もう10年の月日が流れている。それでも、風華がオールマイトへの恩を忘れたことは1日としてなかった。

10年前、某県君沢市を襲った集団敵襲撃事件。

数千人の死者とほぼ同数の行方不明者、数万人もの重軽傷者を出して、人口20万人以上の大都市は一夜で廃墟となった。後にこの事件は敵集団の名乗った名前から「君沢の悲劇」と呼ばれ、語り継がれることとなる。幼い頃の風華は、そんな事件の渦中にいた。

幸せな家族だった。

頼れる父、優しい母。いつでも甘えさせてくれた祖父母。産まれたばかりの小さな妹。どんな時でも笑いの絶えない、仲の良い家族だった。

「ねえ……！お母さん！お母さんってば！おばあちゃんも……！ねえ、返事してよ！」

いくら呼びかけても、瓦礫の内側からは返事は返ってこない。当然だろう。中にいた二人は、既に家の残骸に押し潰されて事切れていたのだから。

たまたま、ぐずる雷羽を連れて、風華は庭に出ていた。たまたま、母と祖母が姉に妹の世話を任せて家事をしていた。たったそれだけの偶然が、家族の命運を分けてしまった。

「おお、ガキが生き残ってるじゃねえか」

「……!?誰だ……!!」

突然の別れにも、泣いている暇はなかった。泣きじゃくる雷羽の声

に釣られて、駆動鎧で武装した集団が現れたからである。悪意と殺意に溢れた声で先頭の男が話すのを聞いて、風華は警戒レベルを最大限上げた。

雷羽の小さな身体を抱きしめ、普段は禁じられている個性を発動する。翠緑の稲妻が全身を迸り、鎧の集団を威嚇した。

「リーダー、俺にやらせてくださいよ。花火大会も楽しかったけど、やっぱこういうのは、自分の手でやらなくちゃ!」

「……ああ、良いだろう。せいぜい派手に苦しめてから殺してやれ」

「オーケー♪」

「な……なんで」

なんでこんな事をするの。自分達を殺そうと前に出た鎧に風華はそう問いかける。一瞬、何を言っているのか分からないとでも言いたげに鎧は首を傾げる動作を見せたが、すぐに嘲笑を隠さない語気で彼女の疑問に答えた。

「なんで……か。決まってるだろ? そんなの。凄い力が手に入ったから、楽しそうだしみんなで試しに使ってみた。それだけだ。この町が標的になったのも、お前が巻き込まれたのも、単なる偶然さ」

「偶然……? そんな、そんなくだらない理由で?」

「そうだよ! 世の中つてのは理不尽なものさ! お前の言うようなくだらない理由で振るわれる力つてのがたくさんある! 楽しいぜ! お前のように理不尽を食らって絶望してるような奴の顔を見るとな、そりゃあ最高にスカツとするんだ!」

雷羽を抱く腕に力が入る。鎧の集団への怒りが、沸々と込み上げてくるのが感じられた。その怒気に呼応するように、全身を迸るスパークもその勢いを増していく。

「ま、俺達から言えることは一つだけ。お生憎様。お前は運が悪かった」

「……ぎけるな」

「は?」

「そんな、そんな下らない理由で……! 何かを壊したり、奪ったりしていいものか! ふぎけるな!!」

「へあう」

風華の身体を迸っていた稲妻が、怒りの叫びと共に飛び出していく。360度、半球を描くように翠色の電撃が閃き、数多の駆動鎧を貫いた。

先頭にいた鎧が、間の抜けた断末魔の声を残して倒れる。それを起点に、ドミノ倒しのように倒れていく鎧の集団。初めての大規模な個性の行使に肩で息をしながら、風華は辺りを見回す。ショートした部分小さな爆発を起こし、鎧の集団は肉と金属片の塊となって血溜まりに沈んでいた。

「はあ……っ！はあっ……！」

「ふやあ……いふやあ……！」

「大丈夫だよ……雷羽は……！絶対、お姉ちゃんが守るからね……！」  
弱々しく泣きじやくる妹を強く抱きしめ、風華は決意する。絶対に、この子を守って見せると。

指先に風を集めて圧縮し、弾丸として撃ち放つ。浮き上がった血溜まりが風に乗って舞い、アーチ状になったそれをくぐる。安全な地を求めて、風華は歩みを始めた。

その道のりは、長く険しいものであった。

駆動鎧の仲間や、生き残った市民達。悪意を以って迫り来るそれらを、恐怖と焦燥を以って襲いくる彼らを払い除けながら、隣の市を指す。時に無人となったスーパーやコンビニで食料を集め、妹のためにおむつやお湯を用意した。

最初に君沢市を襲った爆撃によって猛毒を帯びた空気は、個性による気流の操作で吸い込まないように。360度全てに気を張り続けながら歩いて、およそ10日が経った頃。幼い妹を抱え、常に個性を使い続け、張り詰めていた精神に限界が来ようとしていた。

「はあ……まだまだ遠い……いつたい、いつになったら隣町まで辿り着けるの……？」

近くの瓦礫に腰を下ろし、大きいため息を吐く。ここまでほぼ休憩も睡眠もなしに歩き続けてきたのだ、緊急時で火事場の馬鹿力的なものがあつたとはいえ、流石に消耗し過ぎである。肉体も、精神も、限

界に限りなく近付いていた、その時だった。

「お、見ろよ。こんな所にガキがいやがるぜ」

「……！また……！！」

新手の鎧の出現。その言葉に呼応し、そろそろと鎧の集団が奥から現れる。

腰が上がらない。個性もろくに使えない。眠気と疲労で視界が霞む。まさに絶体絶命の状況。もはやこれまで、と風華はこの後の自分と妹の末路を想像し、ギョツと目を閉じた。

「ギャアツ!?!」

「何だ、何がっ……！あっ！」

「うっ！」

「寄つてたかつてこんな小さな子どもを……人間の風上にも置けん奴らめ！」

もはやどうにでもなれ、と覚悟はした。しかし、想像した未来は一向にやってこない。聞こえた悲鳴を不思議に思い、そつと目を開ける。そこに立っていたのは。

「こんな所まで……よく頑張った！遅くなってしまったてすまない！だが……もう大丈夫」

「……オール、マイト？」

「私が来た！」

恐る恐る目を開けて、そこにあつた光景。立っていたのは日本が誇る平和の象徴。No.1ヒーローオールマイトの姿がそこにあつた。

それ以降のことは、記憶にあまり残っていない。

姉妹共に助かったことへの喜びに涙が止まらなかったことや、病院で目を覚ましてから、医者にいろいろと検査をされたことくらいしか風華の記憶には残っていない。

その後、家族を失った雷羽は叔父夫婦に養子として引き取られ、風華は生き抜くために使い続けたことで年齢に見合わぬ程に強くなりすぎた個性を制御するべく、個性研究所に入所することとなった。

姉妹は離れ離れになったが、2度と会えないわけではない。叔父夫婦は定期的に雷羽を連れてきてくれたし、風華の方から会いに行くこ

ともできた。そうした交流は、事件から10年が経った今でも続いている。近所では仲良し姉妹として有名である。

「……こうして振り返ってみると、懐かしいな」

断じていい思い出ではない。両親を失い、祖父母を失い、友達や近所の親しい人達、果ては故郷をも失ったのだから。それでも、今こうして自分が生きていけているからか。振り返った忌まわしきはずの記憶を、風華は妙に懐かしく感じていた。

事件を乗り越えて、個性は大きく成長を遂げた。個性研究所での制御練習の一環で、使い道も大きく増えた。

個性『疾風迅雷』に並ぶ者など、同世代ではあり得ないという自負もあった。

きつと、自分なら。オールマイトのようなヒーローに。あの安心をもたらず背中を持ったヒーローになれる。あの時助けられ、憧れた人のような者になれたなら。それは、どんな素敵なことなのだろう。

「……受けよう、雄英高校」

写真立てを元の場所に戻して、誰に聞かせるでもなくそう呟く。

ふわふわと、漠然としか将来像を見ていなかった少女が、己の望む未来を決した瞬間であった。

## 風雷の高校入試

「そうか、雄英を受けるのか……学力的には、何ら問題ない。けど、お金の方は大丈夫なのか？」

「問題ありません。個性研究所での実験は、報酬が出ますから」

翌日。今まで何も決まらなかったが故に、書いてもいなかった進路希望届を提出した風華。教師に金銭面の心配をされるも、実のところお金に関しては全く問題はない。個性研究所で被験者となる対価として、十分な量の報酬を貰っているからだ。

「雄英高校ヒーロー科は、受ければ倍率300倍は下らない超エリート校だ。ウチの学校はどこにでもあるような市立校の一つだから……そんなところから……俺の担任した生徒の中から雄英に合格したなんて奴が出れば、一生周りに自慢にできる。そんなこと言うのもなんだが……頑張れよ、鳴神」

「当然、最善を尽くしますよ」

不敵に宣言し、風華は職員室を出る。そのレインコートは室内では外せよなどと思いながら、教師はその後ろ姿を見送った。

く

それから月日は流れ、2月。受験シーズンとなったことで、雄英の入試も始まった。既に筆記試験は終わっており、二次試験の実技が本日と行われることとなっていた。

「今日から二次試験なんですよ？頑張ってきてね、お姉ちゃん！」

「もちろん。絶対、合格してくるから。雷羽もお姉ちゃんのことを応援しててね」

「うん！おじさんおばさんと一緒に応援するね！」

雷羽の応援を受けて会場に向かう。しばらくバスに乗ってから、最寄りのバス停で降りてそこからは徒歩。辺りを見回してみると、多くの自分と同じ受験生であろう中学生がいることに気付く。

この中の全員がライバルであり、今後高校生活を共にするかもしれ

ない仲間でもある。負けてはいられないなど、気を引き締めるため風華はキャンディの封を開けた。ワインレッドなそれを口に啜える。唐辛子の辛味がいっぱいに広がった。

「今日は、俺のライブへようこそ!!エヴァバディセイ!ヘイ!!」

会場に辿り着き、風華は「ボイスヒーロー」プレゼント・マイクから試験に関する説明を受ける。時折数千人いる受験生にジョークを交えて語りかけるもスルーされていたが、彼は構わず説明を続けた。これがプロのメンタルかと、風華はちよつとだけ感心した。

実技試験の内容はこうである。

町を襲う仮想敵(ロボット)を倒し、より多くのポイントを稼げ。制限時間は10分。他の受験生への妨害行為など、ヒーローにあるまじき行動は勿論禁止。一発で失格となる。

仮想敵には1、2、3、0とポイントが振られており、高ポイントのものを効率的に倒していくのがオススメされていた。また、0ポイントはいわゆる「お邪魔虫」というやつであり、プレゼント・マイクのジョークのようにスルー推奨であるということも説明された。

「……ってことで、俺からの説明は以上だ。最後にリスナーの君達へ我が校の校訓を贈ろう。かの英雄ナポレオン・ボナパルトは言った。真の英雄とは、人生の不幸を乗り越えていくもの!更PLUS ULTRAに向こうへ!それでは皆さん、良い受難を!」

「よしっ……!頑張るか」

事前に割り当てられていた会場へと向かうバスに乗り、景色を見ながら会場まで移動する。周りの受験生達は緊張や不安で押しつぶされそうになっているのが殆どだったが、風華をはじめ何人かは、自分は合格して当たり前でも言うかのように落ち着き払っていた。

会場に着いた風華達は、ビルの合間を抜けて所定のスタート地点に入る。いつでも始まっていいように準備を整えていると、プレゼント・マイクの間を抜けたアナウンスが響いた。

「はい、スタート!どうした、試験はもう始まってるぜ!走れ走れ!実戦じゃあカウントダウンなんてねーんだぞ!」

「おお……みんな慌てすぎじゃない?」

「あわ……あわわ……」

「あれ？君は行かないのかい？」

大慌てで駆け出す受験生達を見送りながら、風華は出遅れた緑髪の少年に話しかける。話しかけられたことで正気を取り戻したらしい彼が走っていくのも見送り、その間にも溜め続けていた電力を風華は解放した。

「準備完了、と。さて……わたしも行くか！」

そう言うと、風華は風を纏ってその身を浮かび上がらせる。突風がスタート地点に吹き荒れ、風華は最も高いビルすら越えて宙を舞った。そのまま会場を見下ろし、仮想敵の多い所を選定する。

「あの辺りが良いかな。そら……よつと！」

風を噴射し、その勢いでアタリを付けた地点を急襲する。着地した時に真っ先につけた右足が、仮想敵の一体を粉碎した。2ポイントであった。

そのままの勢いで、急に現れた自分に対応しようとするロボット軍団の中に飛び込んでいく。極大の電力を纏った左手による貫手が前に出ていた一体を貫通し、爆散させる。同時にスクラップとなったそれに触れ、機構を確認。どうやら、そこまで難しいプログラムはされていないようだった。

「これくらいなら、まあ……触れるだけでいいかな」

個性研究所で過ごしてきた長い年月の間に、『疾風迅雷』の電気を操る力は電化製品などへの干渉を可能としていた。その力を使えばさつきのように、大胆に電力を消費する必要もなくなる。一瞬だけ触れてやる。それだけでいいのだ。

「これで何ポイントくらいだっけ……？ま、いいか」

何体かの機能を停止させ、呟く。結構な数がいたために、いちいちそのポイントを把握していなかったのだ。

『残り5分だぜ！まだまだ気張れよ！』

「なんだ、まだそんな時間か」

アナウンスが制限時間の半分を過ぎたことを伝える。電力のチャージのために最も出遅れることとなったが、風華が思っていたよ

りも時間は経っていないかったようだ。

「おつと……危ない。大丈夫だったかい？」

「あ、ああ……おかげで助かったよ。ありがとう」

「別に。ヒーローは助け合いでしょ」

だいぶ仮想敵も減ってきて、次の獲物はどうするかと思考を巡らせていると、ロボットの攻撃を受けて血を流している受験生を見つけた。

指先に風を集めて固め、空気の弾丸として撃ち出す。ロボットが腕を振り下ろそうとしたところで空気の弾丸はその核を撃ち抜き、一撃で機能停止に追い込んだ。助けられた受験生が腰をガクガクと振るわせながら立ち上がり、礼を言う。

……ああ、そっか。ヒーローになるための試験だもんな。

礼には及ばないと返したところで、風華は気付いた。ただ敵を倒すだけがヒーローの仕事ではない。むしろ、その本分は救助活動。

少ない合格枠を賭けて争うライバルだって、困っているならば助けに行かなければならない。そういうところも、将来のヒーローとして、雄英で学ぶ者として相応しいか見られているのだということに。

「ま、ただの想像だけど……けど、そうと分かったなら」

「うおお!? た、助けられた……?」

「ま、こうするよね」

他の苦戦している受験生を助ける。ロボットの攻撃を受けてやられかけている者を遠隔でロボットを倒して助け、逃げようとしている者には、風で瓦礫を退かすなどして道を作る。怪我をしている者には、持ち込んだガーゼや包帯、消毒液などで応急処置を。

とりあえず、目についた助けられそうな者を助けていく。直接ポイントにはならないだろうが、アピールくらいはできるだろう。そんな打算の下で行いではあったが、助けられた者からは、風華は確かに感謝されていた。

『残り1分! ラストスパート、まだまだ頑張れ!』

「は……? デカ過ぎない? ホントにこれ使うの?」

残り1分。アナウンスが流れると同時に、3階建てのビル程の大き

さのロボットが現れた。見ると、頭の方にデカデカと0ポイントであることを示す数字が描かれている。

試験でこんなもの出るの？嘘でしょ？一步踏み出す度に衝撃で地面が揺れる。他の受験生達がパニックを起こす中で、呆れるように風華はそう呟いた。

流星に大き過ぎるし、アレを止めるのは少し時間がかかりそうだった。最初のやつのようにスクラップにしてやる。そう思い、風を掌に風を集めていく風華。0ポイントが攻撃しようとしている先に、瓦礫に足を取られて動けなくなっている少女が見えて、その行動はより早くなる。

『吹き荒ぶ大風』……!？」

「SMASH!!」

デカブツを粉々にしてやるだけの風は集まった。後はこれを撃ち出して0ポイントを穿つだけ。その直前で、空気を震わす叫び声が響いた。瞬間、0ポイントが粉々に砕け散る。叫び声と共に飛び出した少年が、パンチの一発でそれをやってのけたのだ。

「あの子、さっきの……つて！危ない！」

飛び出したのは、共に出遅れていた緑髪の少年であった。あの子にそんな力があつたのか。そう感心していた風華だが、彼が気を失って落下しようとしているのを見てすぐに集めていた風を撃ち出し、そつと地面に降ろした。

0ポイントが粉碎されたことに周りが騒つく中、風華は倒れたまま動かない少年の元へと駆け寄った。

『終了！お疲れ様！気を付けて帰ってくれよ！』

「酷い怪我だ……個性の反動？それにしてもえげつないというか……君の方も、怪我はない？」

「えっ、あつ、はい！ウチは大丈夫です！ウチなんかよりも、その人は大丈夫なんですか……!？」

「……わたしではどうにもできない。だから……」

「おおぅ!?年寄りに何すんだい！」

足はあらぬ方向を向き、0ポイントを殴りつけた右腕は見るも無惨

にぐしやぐしやになっていた。

一応、応急手当てができるだけの用意はある。が、それでは足りないことは一目瞭然だった。なので、治療ができる人を風で引き寄せらる。雄英高校が誇る看護教諭、リカバリーガールだ。

「突然すいません。この子の治療をお願いします、リカバリーガール。右腕と両足が酷いことになっていて」

「ああ……こりゃ酷い。体力が保てばいいがねえ」

そう言うと、リカバリーガールは口を針のように尖らせ、少年に突き立てる。『チューー!』という音と共に、みるみる内に少年の身体は元の様相を取り戻していった。怪我が治ったからか、少年も意識を取り戻す。

「意識が戻ったか。自分で歩くことはできる?」

「ん……大丈夫です……っ! そうだ! 試験は!」

「もう終わったよ。合否発表は一週間後だ。気を付けて帰るんだよ」

リカバリーガールのその言葉に、少年はショックを受けて顔を青ざめさせる。どうやらあの瞬間まで、あまり成果を出せていなかったようだ。

「ぐっ……くそっ!」

「そこまで悲観することはないと思うけど」

「え?」

「どういうこと?」

「……何でもない。『治癒』は体力凄い使うそうだから、ちゃんと帰って栄養と休養を取ってね」

悔しそうに地面を叩く少年に、風華はそう悲観することはないと告げる。キョトンとした顔になる彼を見て、別に想像を言う必要はないだろうと続く言葉を打ち切った。その代わりに彼を心配する言葉を告げて、その場を立ち去ろうと背を向ける。

「あ………さっきは助けてくれてありがとうごさいました!」

「う、ウチも! 合格してたらまた会おうね!」

二人の感謝の言葉に、背を向けたまま左手を上げて答える。振り返ることなく、風華は己の身を風に変えて会場を去っていった。

## 合格発表

実技試験の終了から一週間。時が経つのは早いもので、あっという間に合格発表の日がやってきていた。

「お姉ちゃん、いい？ スイッチ入れるよ？」

「ええ、お願い」

朝早くから届いた宅配便を受け取り、その中身が合格発表の通知であることを知った風華は、すぐに雷羽を呼んだ。前々から頼まれていたとおり、一緒に結果を見ることにしたのだ。

段ボールを塞ぐテープを剥がし、中の物を取り出す。段ボールの中には、小型のプロジェクターのような物が入っていた。プロジェクターにスイッチがあるのを見つけた雷羽が、風華にスイッチを入れていいかと聞く。当然そうしなければ結果が分からないのだから、風華は二つ返事で了承した。

『私が投影された!!』

「わあ……！ オールマイト！ 本物だ！」

「オールマイト？ どうして……」

まさかの人物の登場に、雷羽が驚きと喜びの入り混じった声を上げる。

プロジェクターによって映し出されたのは、日本が誇る平和の象徴オールマイトであった。どうしてオールマイトが、雄英から送られてきた映像に映っているのか。疑問に思う風華であったが、その疑問は意外と早く解決された。

『ハハハ、鳴神少女。君が今、何を思っているのか私にはよく分かるよ。どうして雄英から送られてきたこの映像に私が映っているのか、だろ？ それは来年度から、私が雄英に教師として赴任することが決まったからさ！』

「オールマイトが……!? 本当に!?」

「凄い！ オールマイトに教えてもらえるの!?!」

風華の疑問に答えたオールマイトの言葉、それを聞いた二人が驚きの声を上げる。平和の象徴が教鞭を取ることも、その授業を自分が受

けられるかもしれないということも。そんなことを聞いて、風華が興奮しないわけがなかったのだ。

『おっと、そろそろ本題に入るべきか。鳴神少女の試験結果を発表するぞ！まずは筆記試験だが……おめでとう！全科目で素晴らしい成績だったぞ！詳細な点数は言えないけどな！』

「まずは一つだね！」

「うん……」

筆記試験は、風華は結構自信があった。自己最点の結果も全科目9割を超えていたし、大丈夫だったということが改めて確認できただけ。問題は実技試験の方である。

『ま、ここまでできてるなら、筆記は大して心配してなかったかな!?お待ちかね、実技試験の結果を発表するぞ！知っての通り、実技試験は仮想敵となるロボット軍団を倒すことでそれに応じたポイントが手に入るわけだが！実はこの試験には、隠された第二のポイントが存在していたのさ！』

「へー、そうなんだ！お姉ちゃん知ってた？」

「二応、アタリは付けてたけど……」

風華は固唾を飲んで、オールマイトが次の言葉を紡ぐのを待つ。合格か、不合格か。第二ポイントの内容が自分の想像していた通りであったなら、きつと合格できているはず。小さくない不安に、嫌な汗が滲んでくるのが分かった。

『ロボットを倒して手に入る「敵ポイント」に続く第二のポイントとは……そう！救助活動をする事によって手に入る「救助ポイント」さ！この二つを合わせて鳴神少女が手に入れた総ポイントは77！敵ポイント24、救助ポイント53！』

「……」

『おめでとう！総合同率一位、文句なしの合格だ！ちなみに、こちらが総合トップ10の一覧となっているよ！』

「お姉ちゃん！合格！合格だって！凄い！」

「ええ……やった……」

雷羽が喜びのあまり風華に飛びついていく。自分のことのように

喜ぶ妹を頭を撫でて宥め、自分でもこの喜びを噛み締める。嬉し涙が流れていきそうなのを、グッと堪えた。

一覽を見ると、最上段に確かに自分の名前があるのが見えた。本当に雄英に受かったのだという実感が湧いてくる。

『……え、もう時間!?ゴメン、もうちよつとだけ喋らせて!まだ最後の激励やってないから!』

「段取り悪いね」

「そうだね」

『えー、オホン。では気を取り直して……と。合格おめでとう、鳴神少女。10年前に出会った少女が今、ヒーローとなるためのスタート地点に立つ瞬間に私は立ち会っている。なんだか、感慨深いものがあると思わないかい?』

「……わたしのこと、覚えて……?!」

合格発表が始まってから、何度目かの驚き。オールマイトが、日本の最高のヒーローが、10年も前に一度会ったことがあるだけの自分のことを覚えていてくれた。それが、たまらなく嬉しかった。

『私が教師となった年に、君が雄英に入学する。きっとこれも、何かの縁があったのだろうな!4月、高校生となった君に会うのを楽しみにしているぞ!さらばだ!』

「……終わっちゃったね」

「……そうだね」

投影が終了したプロジェクターは、雷羽に適当な場所にしまってもらい、風華は玄関の写真を手を取った。10年前に撮られた、オールマイトと自分の2ショット。

昔を懐かしむように写真を優しく撫でる。不思議と写真の中のオールマイトも祝福してくれている、そんな気がした。

「おじさん達が、合格のお祝いしてくれるってさ!お姉ちゃん、わたしのお家行こー!」

「……そうだね。行くかうか」

本当なら、この後は必要な書類を用意しなければならないのだが。

……今は合格のお祝いを優先、と。風華は面倒な作業から目を逸ら

し、叔父夫婦の家へ向かう準備を始めたのだった。

、

「まさか、敵ポイントだけで一位とはな！」

「そして、救助ポイントだけで八位」

「内容だけ見れば、どちらかに偏りすぎているということで時折いるものだけれど。どちらかのポイントしか取ってないというのは珍しいね」

時は少し遡り、雄英講師陣。纏められた実技試験の結果を元に、今年の合格者を決める話し合いをしていた。

真つ先に話題が上がったのは、総合同率一位の爆豪勝己と、総合八位の緑谷出久。片方は『爆破』という強力な個性と豊富なスタミナで多くのロボットを薙ぎ倒し、片方は凄まじい超パワーで強大なOポイントを粉碎してみせた。講師陣の注目が集まるのも当然と言える。

「そして、そんな爆豪勝己に並ぶ同率一位……鳴神風華。緑谷出久に次いで高い救助ポイントを稼いでいるな」

「途中で明らかに気付いていましたからね。少しアピールが過剰な面もありましたが、それでも人助けを行っていたのは事実ですから」  
「緑谷少年は、彼女に助けられていなければ危なかったな。しかし、まさか彼女が雄英に来ることになるとは……」

「オールマイト、ずっと気にしてましたよね。知り合いなんですか？」  
話し合いが進む中で、風華の話題が出てくる。彼女の名に対して反応を示したオールマイトに、教師の一人が質問をした。それに対して「まあ、昔ちよつとね」とだけオールマイトは返した。

多くの死者と行方不明者を出した君沢の悲劇を、より幼い妹を抱えて生き抜いた風華のことを、オールマイトはよく覚えていた。あの時自分が助けた少女が、ヒーローを目指して教師となった自分の下へとやってくる。なんだか感慨深いものがあるなあとオールマイトは思っていた。

「触れただけでロボットを機能停止させ、風による拘束や瓦礫を除去

して逃げ道の確保。怪我人の応急処置も、そこそこ手間取ってこそいたがしつかりとできていた。これから先学んでいけば、きっと彼女はいいヒーローになれますよ」

「その通り！金の卵にはしつかりと孵化して、羽ばたいてもらわなければならぬのさ！」

校長、根津の一言が風華への講評を締め括る。

まだまだ会議は終わらない。講師の注目は、次の生徒へと移っていった。

## 高校デビューはテストとともに

「お姉ちゃん……今日は晴れの日だよ？こんないい天気なんだから、今日はレインコートは要らないんじゃない？」

「無いと落ち着かないからね。室内でもない限りは着続けるよ。それじゃあ雷羽、行ってくるね」

「うん……いつてらっしやい」

雷羽が不満の声を上げる。風華がいつものようにレインコートを着けるせいで、雄英の制服を着ているのが見えなくなっているからだ。

憤慨する妹を宥め、風華は雄英へ向かう。今日から自分は高校生。制服に袖を通したことで、よりそのことを実感する。いったいどんな人間や授業が待っているのだろうか。まだ見ぬ高校生活を想像しながら、歩みを早めていくのだった。

雷羽の住む叔父夫婦の家から30分程歩いたところで、雄英の施設の一角が見えてきた。

……いつ見てもデカイ施設だ。

思いを馳せながら校門をくぐる。異形型の大柄な生徒でも問題なく入れるようになっているとのことだが、流石に、ここまで大きくする必要があるのであるかとも思う。

余計なことを考えている間に見つけた校内の案内図から、自身のクラスである1-Aの在処を探す。情報を元に、校舎の中を移動する。途中途中貼られている貼り紙の助けもあつて、風華はなんとか迷うことなく教室まで辿り着くことができた。

「……ドアもデカイなあ」

背丈の2倍はありそうなドアを開け、教室の中に入る。朝のHRの時間まで30分以上あるが、既に中には何人かの生徒が先駆けて入っていた。張り切ってるなあ、と風華は感心した。

「む、おはよう！……お、確か君は試験会場が一緒だったな！合格していたのか！」

「おはよう。そういえば、見たことのある顔だ」

「俺は聡明中学出身の飯田天哉！これからよろしく頼む！」

「鳴神風華。これからよろしく」

教室に入った風華に気付いた眼鏡の生徒が、挨拶と自己紹介をしにやって来る。飯田天哉と名乗る彼のことは、試験の時によく質問をしたりしていたのが印象に残っていたのを覚えていた。

出席番号順に並んでいる机を辿って、自分の席を探す。鳴神風華と自分の名前が書かれた席を見つけてそこに座る。しばらく時間潰しに本を読んでいると、勢いよくドアを蹴り開けて男子生徒が入ってきた。金髪、着崩した制服、全てに対して威嚇するような目つき。こういうのを不良とかいうんだらうなと思いい、風華は彼から視線を離れた。

少年は自分の席を見つけて鞆を置くと、そのままの勢いで座って机に足を乗せる。あまりの傍若無人な態度に、飯田が苦言を呈しに行こうとした。

「おい、君！机に足を乗せるんじゃない！その机を作った製作者の方に失礼だと思わないのか!？」

「ああ!?!思うわけねえだろモブが!?!てめえどこ中だ!?!」

「俺は聡明中が……「天哉」鳴神君!?!」

風華は少年に注意を続ける飯田を止め、代わりに少年の前に立つ。彼女の放つ怒気を感じ取ったか、少年は一瞬怯む。しかし、すぐに気を取り直して風華を威嚇し始めた。

「今度はどのモブだよクソが!?!てめーはどこ中」「口を閉じろ」

「ああ!?!」

「喧しいし、態度も悪い。お前がどこの誰かなんてどうでもいいけど、周りの迷惑になっていいるなら放ってはおけない。HRが始まるまで後10分くらいだが。お前はそんな短い時間ですら、大人しくしてられないのか?！」

「んだとお!?!」

「そして、机は学校の備品だ。乱暴に扱って破損したら弁償が必要になる。嫌ならその足は降ろせ。これ以上は言わないが……お前の考えるヒーローは、周りに迷惑をかけ続けて、それでもヘラヘラ笑って

「いられるのか？」

言い返せなくなったのか、少年は大きく舌打ちをして足を下ろした。不機嫌になってるのが態度でよく分かる。あまりにも雰囲気  
の険悪になった空間に、丁度入室してきた緑髪の少年が「何事!？」と  
素っ頓狂な声を上げた。

同時に入ってきた茶髪の女生徒を含めて、風華はその姿を見て「あ」と  
呟く。試験の最後、0ポイントを粉砕した少年と、瓦礫に足をやら  
れて動けなくなっていた少女。

……二人とも、合格していたんだ。よかったね。

怯えたような目でこちらを見ている二人に手を振り、「おはよう」と  
挨拶を交わす。しばらくはフリーズしていた二人だったが、なんとか  
再起動して挨拶を返してくれた。

「お……おはよう！確か、試験で僕を助けてくれた人だよ！あの時  
は本当にありがとう！僕もなんとか合格できました！あ、緑谷出久で  
す！」

「麗日お茶子です！あの時はありがとね！あ……！まだあなたの名前  
を聞いてなかった！」

「鳴神風華。これからよろしくね、出久、お茶子」

互いに自己紹介をして親交を深める。席が出席番号順になってい  
ることを伝えて自分の席に戻ると、丁度HRの始まりを示すチャイム  
が鳴った。

「もうHR始まるぞ。お友達ごっこがしたいなら他所へ行け。ここは  
ヒーロー科だぞ」

チャイムが鳴つてもしばらくはクラスメイト同士の交流が続けら  
れようとしていたが、壇上にあった寝袋から聞こえてきた一言によつ  
てそれは終わりを迎える。寝袋から出てきた小汚いという表現が適  
当な男は、自身が担任であると自己紹介をした。

「担任の相澤消太だ。よろしくね」

「担任!？」

「早速だが、机の中に君達の分の体操服が入っているはずだ。それを  
着てグラウンドに集合。10分で支度しろよ」

「先生、質問があります！」

「却下。10分きっかり、遅れないようにな」

担任教師の意外な姿に驚く声も、突然の指示に対する質問も全て無視して、相澤は必要な事項だけを伝えて外に出る。これ以上言うことがないならと、風華は体操服を持って更衣室に向かった。

「ちゃんと10分で集まったな。それじゃ始めるぞ。個性把握テストだ」

「テスト!? 入学式は!? ガイダンスは!?!」

「そんな非合理的なことをしている暇はない」

式典など非合理的と言い切り、ざわめく生徒達を黙らせる。静かになつてから相澤は次の言葉を話した。

「中学でもやってた体力テストがあるだろ? あの合理的じゃないテストをだ。ここではアレを個性アリで行う。……そうだな、爆豪。中学の時のソフトボール投げの記録は何mだ?」

「67m」

「んじや、個性を使つてやってみろ。円の範囲から出なければ何でもアリだ」

相澤にボールを手渡された爆豪が、ソフトボール投げの円の中に入る。個性を使える、それを聞いているからか、寧猛な笑みを浮かべていた。

「爆破の勢いをスイングに乗せる……死ねえ!!」

一流の投手のような豪快なフォームから、しっかりと己の個性を活かしてボールを飛ばす。爆風に乗ったボールは瞬く間に小さくなり、皆の視界から消えていった。しばらくして、液晶を眺めていた相澤が「705m」と記録を告げた。

「おお、すげえ!」

「個性使うところなるんだ! 楽しそう!」

「ほう……楽しそう、か」

楽しそう、聞こえてきた言葉を相澤は否定する。

「楽しそう……君達はそんな心算で3年間を過ごすつもりなのか? ならばこのテストでトータル成績最下位の者は、見込み無しとして除籍

するとしよう」

「除籍?! そんな横暴な!」

「雄英は自由こそが校風。それは教師が生徒の処遇をどうするかにも当てはめられる」

天災も、人災も、いづどこからだってあり得る。世の中は理不尽なことがたくさんあるのだ。ヒーローはいつだって、それらに備えていなければならぬのだと相澤は言う。確かにそうだ、と風華は彼の言葉に同意した。

「ピンチも理不尽も、超えていくのがヒーローだ。雄英は君達に試練を与え続ける。更PLUS ULTRAに向こうへ……全力で乗り越えて見せろ」

もちろん、目指すのは一番である。ここにいるクラスメイトの個性なんて一部しか知らないが、誰にだって負けるつもりはない。両の拳を打ち合わせ、風華は気合を入れるのだった。

## 個性把握テスト

### 第一種目 50m走

最初に走って見せた飯田が3秒台の好成績をマーク。個性『エンジン』の出す超スピードに皆が感心した。彼の言葉からして、これでもトップスピードではないというのだから尚更。

続いて、腹からレーザーを射出してその勢いで進む青山優雅に、足を凍らせてその上を滑ることで速度を出した轟焦凍。掌から放つ爆破で加速し、飯田には及ばないものの好成績だった爆豪。この辺りがしつかりと個性を活かし、普通ではないやり方で好成績を叩き出していた。

「風華ちゃん、ウチは負けないからね！」

「お茶子。速さを競う勝負ならば、わたしが負けることはない」

へ？と間抜けな声を上げる麗日。そんな彼女を見つつも相澤はスタートの合図を切る。その瞬間、走り出そうとした麗日の横で稲妻が迸った。

「……0.14秒」

「はあ!?速すぎだろ、何が起こったんだ!？」

「今、稲妻のようなものが……光の速さで動ける個性?」

「ウツソだろ……!俺、電気であんなことできねえぞ!上位互換かよ!」

電気は光とほぼ同じ速さを持つ。風華はスタートの合図と同時にゴールまで電気のラインを作り、その上に「乗っかる」ようにして移動したのだ。少し間違えれば光の速さで弾き出されてしまう割とりスクの高い技だが、10年制御を続けてきた風華にとっては、この程度は大した技ではなかった。

「鳴神さん、君の速度は凄まじかったな!俺は個性のおかげもあって、スピードには自信があったのだが!やはり上には上がいるということだな!思い知らされたよ!」

「まあ、光の速さに勝てる奴はそういないと思う」

自身の速さを上回った風華に、悔しさを滲ませながらも飯田は敬意を表する。そんな一場面を、なんとか走り切った麗日は見ていたのだった。

ちなみに。麗日は驚いて出遅れたこともあって、10秒台という遅めのタイムとなってしまった。

## 第二種目 握力測定

身体の部位を『複製』することのできる個性を持つ障子が500kgオーバーの記録を叩き出し、個性によって万力を『創造』した八百万が2tという握力計の上限値を出した。

「物使うってアリなんです?」

「個性で出した物だからな。問題ない」

そんなこんなで風華の出番。大量の空気を集め、握力計を握る右手に圧力をかける。結果は207kg。やり過ぎると手が潰れるので程々にしたが、なかなか満足のいく結果となった。左手でも同じようにして計った結果、213kgとなった。

「さっきみたいに電気のパワー?」

「いや、これは違うよ。わたしが操れるのは、電気だけではないからね」

「へえ〜!強い個性なんやね!」

握力に活かせる個性ではなかったため、平凡な結果に終わった麗日が風華に話しかける。50m走で見た光の速さだけでなく、握力測定でもいい結果を出せた風華の個性に羨ましそうに言った。

全員が測定を終えてから、コッソリと個性無しでも計ってみる。結果は右手54kg、左手61kgであった。

## 第三種目 立ち幅跳び

「浮いた!」

「これは……無限大だな。降りてきていいぞ」

麗日が両掌を合わせ、自身の個性を発動させて『浮遊』する。フワフワと宙を舞い続ける姿を見て、相澤は彼女の記録を測定不可能……無限大とした。インフィニティな記録が出たことに、見ていた生徒達が興奮と感嘆の声を上げる。

「今度は鳴神さんと一緒か！よろしくね！」

「出久か、よろしく。……多分、わたしも無限大になると思うよ」「え？」

スタートの合図と同時に、風を纏って宙へと浮かび上がる風華。疾風迅雷の本領の一つ、それは空気を操ること。その力を使えば、浮遊や飛行など造作もないことなのだ。

「緑谷は4m53cm……と。鳴神、お前はどれくらいその状態を維持できる？」

「意識が続く限り、いつまでも」

「オーケー。なら、お前も無限大だな」

2度目の無限大の記録に、生徒達が再び歓声を上げる。そんな中でも対抗心丸出しで轟は風華を睨みつけ、爆豪は聞こえるように大きく舌打ちをするのだった。

#### 第四種目 反復横跳び

ここでも風華は活躍を見せる。風を左右から起こして交互に自分をスライドさせることで、僅か20秒の間に127回を記録した。あれは跳んでないからダメでしょ！とクレームが相澤に入るも、個性を使った結果だから問題ないと彼はスルーした。

ちなみに、一位は頭の球体を『もぎもぎ』して左右に配置し、それに跳ね飛ばされることで200回以上跳んで見せた峰田であった。

「面白い個性だね。個性を活かしくそんな反復横跳びで負けるとは思わなかったよ」

「おおあつ……!?女子が、女子が俺に話しかけてきて……!?」

「おーい?どうした、大丈夫か?君の名前を聞きたいんだけど?」

自分に有利そうな種目で上回ってきた峰田に対して話しかけた風

華だが、ここでは彼と話すことは叶わなかった。生来の気性のせいで女子との関わりが少なかった峰田にとつて、自分から関わりに来られる女子というのは劇物も同然なのであった。

「おーい？あ、気を失ってる……」

「ほっとけ。さっさと次の種目いくぞ」

#### 第五種目 ソフトボール投げ

『吹き荒ぶ大風』……飛んできけ」

「なんつー風圧……台風かよ!」

「あれつて、試験の時の……」

左掌に集めた風にボールを乗せ、撃ち出す。視界に映らなくなつたつて、ある程度は風の操作は自由に効く。しかしどこかでボールは気流から落ちてしまったようで、記録は32567mとなった。麗日  
が再び出した無限大には及ばないまでも、凄まじい記録である。

「これ、確実に学校の敷地出ましたけど……」

「問題ない。回収はできるようになってる」

素材的に誰かに当たつても問題ないようになつてると続け、相澤は予備のボールを用意した。今度は緑谷の順番だ。

「ワン・フォー・オールを活かせるのはもうここくらいしかない……絶対に失敗はできないぞ、どうにかしないと……」

「はよやれ」

「デク君、大丈夫かな……ここまであんまりよろしくないみたいやけど……」

「デク?」

「ハッ!デクに結果出せるわけねーだろ!無個性なんだぜあいつはよ!」

無個性?爆豪は試験で緑谷がしでかしたことを知らないのだろうか。飯田がそう問い詰める中、相澤の「46m」という声が聞こえてきた。

「なんで……今、確かに使おうつて……!」

「個性は消した……つくづく、あの試験は合理性に欠ける。お前みたいな奴でも合格できちまうんだからな」

個性を消す……その一言で、緑谷は相澤の正体を理解した。メディア嫌い故に表に出てくることこそ少ないが、確かな実力を持つ「抹消ヒーロー」イレイザーヘッド。ヒーローオタクの緑谷だからこそ正体を察することができたが、風華をはじめ他の生徒達は「誰？」となるほどマイナーなヒーローでもあった。

自傷するほどの超パワー、制御も何もないまま使ったって、せいぜい一人を助けてお荷物になるだけ。そんな奴はヒーローになる資格などないと相澤は緑谷を叱責する。

「個性は戻した……ボール投げは2回だ。さっさと戻って続きをやりなれ」

「……はい！」

ソフトボール投げの円に戻った緑谷の表情は、どこか吹っ切れたようであった。すぐに投げる構えを取り、人差し指に個性を乗せて投げ放つ。反動で指がぐしゃぐしゃになるが、ボールは遙か彼方まで跳んでいった。

「先生……まだ、動けますー！」

「ほう……！」

反動が来てしまうのなら、その範囲をできる限り小さく。緑谷は相澤に言われた自身の課題を何とか越えてみせた。痛みを堪えて脂汗をかきながらも「まだ動ける」という緑谷に、相澤も感心したように結果を見せた。

液晶には「705m」と書かれていた。

「……どういふことだあーデクウ!？」

## 第六種目 持久走

個性を使って記録を出した緑谷に爆豪が詰め寄るといふアクションがあったが、相澤がすぐに拘束したことで事なきを得た。そのまま他の生徒もつつがなく測定を終え、今度は持久走。

一周1kmあるトラックを五周し、そのタイムを計る。走るのは得意分野だと飯田がひどく張り切っていた。

「出久、指は大丈夫？」

「一応……テストが終わったら、リカバリーガールの所へ行くつもりだけど」

「そうしな。こういう怪我はクセになるからね……早く、制御できるようにするといいね」

応急処置くらいなら風華でもできるが、ここにはそのためのも道具がないので流石にできない。テストには支障がないことを一応確認してから、風華はトラックに向かった。

……流石に、ちゃんと五周したって分からないと記録できないよね。

50m走の時のように、電気に乗って高速移動する技『雷上動』を使えば一瞬で終わる。しかしそれでは記録ができないだろうと、風華は別のやり方を使うことにした。

スタート同時に風を纏って浮かび上がり、クラスメイトを巻き込まない高さから風を噴射して高速移動する。速さに自信のある飯田と負けん気の強い爆豪、オートバイを創造して駆ける八百万が追い継るも、彼らをぶつち切り風華は圧倒的な速さでゴールした。

「あの高速移動はなぜ使わなかった？」

「流石に速すぎますから……機械でも追えないだろうと思って」  
ちなみに、二位は5秒遅れて飯田。三位は八百万であった。

## 第七種目 長座体前屈

これに関しては、個性の使い所がない。風でいくらでも遠くに飛ばすことはできるが、機械に手をつけていなければいけないからだ。

なので、ここは普通に行う。個性研究所で個性を扱うための訓練の一環ということで、体は常に鍛えてきている。それは柔軟性だって例外ではない。

「72cm……まあ、こんなものか」

「やっぱ個性の使い所無かった？」

「そうだね。個性使えてるの、あの蛙の子くらいじゃないかな」

「ケロケロ、蛙吹梅雨よ。梅雨ちゃんと呼んで」

舌を4m程も伸ばして圧倒的一位となった少女と、新たに交流ができる。動物系の個性はその動物のようなことができるというのが、『蛙』はどこまで蛙っぽいことができるんだろうと風華は考えた。

「よろしくね、梅雨」

「ちゃんまで付けていいのよ」

## 第八種目 上体起こし

これが最後の種目となる。電気を全身に巡らせることで身体能力を強化し、30秒に臨む。足を押さえてくれている麗日を感じさせないよう気をつけながら動き、記録は59回。バネを創造して65回の八百万、頭の球体で自身を弾いて62回の峰田に続く三位であった。「電気、大丈夫だった？」

「大丈夫よ。個性の扱い上手いんやね」

そういう麗日は50回で四位。自身の個性『無重力』で自重を減らし、その分高速化して叩き出した結果であった。

、

これにて全種目が終了となる。最下位はもれなくヒーロー科から除籍となってしまうが……皆の視線は一人だけを向いていた。ソフトボール投げ以外、大した成績の出せなかった緑谷である。

全員が集合したところで、相澤が纏めた結果をプロジェクターで投影する。ランキング形式になっているその最下層にあった名前は、やはり緑谷のものであった。

「ちなみに除籍は嘘な」

「へ？」

「君達の本気を引き出すための合理的虚偽」

「ええええええ?!?!?」

最下位という結果に俯いていた緑谷が、除籍されなくてよかったと安堵していた者達が驚きの叫びをあげる。そんな中で八百万が冷静に「除籍なんて嘘に決まってるじゃない……」と呆れるように言った。

いや、これは……本当に除籍するつもりだったな。

風華は察した。相澤は本当に最下位となった生徒を除籍するつもりであったと。緑谷がソフトボール投げでいいところを見せたからこそ、取り止めたといったところだろう。言葉にはせず、あくまで想像に留めておく。

「それじゃ、テストはこれで終わりだ。教室に時間割りとか置いてあるからちやんと目を通しておけよ」

除籍の危機を回避したことで、皆はホッとしたようにゆっくりと更衣室へ向かう。

風華もいきなり同級生が欠けることがなくて良かったと、安心してポケットからキャンディを取り出した。マゼンタなそれを口に加えると、ミックスジュースのような味が広がる。テストの後だからか、いつもよりも美味しく感じた。

## 戦闘訓練 その1

「午後からヒーロー基礎学だけ。どんなことをするんだろうね」

「基礎学ってくらいだし、座学中心なんやない？」

高校生活が始まって一週間くらい。割と普通な授業を乗り越えて、今日から初めてのヒーロー科らしい授業がある。風華は麗日と一緒に昼ご飯を食べながら、その内容について話していた。

「そういえばさ、風華ちゃんってどうしてヒーローになろうと思ったん？やっぱり強い個性があったから？」

「いや……そうじゃない。わたしがヒーローになろうと思ったのは、他のヒーローなんて信用できないからだよ」

オールマイト以外のヒーローなんて、信用できないからね。そう語る風華に対して、麗日は多くを言及することはなかった。いろいろあったんやね、とだけ言っておく。食後に風華から貰ったバイオレットなキャンディを舐めながら、残りの時間で雑談に花を咲かせたのだった。

、

「私が……普通にドアから来た！」

「オールマイト！」

「本当に教師になったんだ……！」

午後の授業、ヒーロー基礎学が始まる。扉から入ってきたヒーロとしてのコスチュームを着たオールマイトの登場に、クラスメイト達の色めき立つ。風華も態度にこそ出さないものの、オールマイトの登場に気分を高揚させていた。なんとと言ってもオールマイトはやはり、画風が違うのだ。

「今日から始まるヒーロー基礎学！本日執り行われるのは……コレだ！」

教壇に立ったオールマイトが、『ぼとる』と書かれたパネルを見せる。ヒーローっぽい授業きた、と皆が湧き立った。

「戦闘訓練！そしてそれに伴ってこちら！事前に君たちに提出してもらっていた個性届と要望に沿って造られたコスチュームだ！」

「おおー！」

「壁が動いてる……秘密基地みたい」

黒板横の壁から迫り出してくる大量のアタッシユケース。その中に入っているのは当然、全員分のコスチューム。あまりのテンションの向上に、立ち上がるどころか跳び上がる生徒さえ現れた。

「ちゃんと自分のコスチュームは持ったかな!?着替えたら随時、グラウンドβに集合だ！」

「はいー！」

ぞろぞろと更衣室に向かっていくクラスメイト達。それを尻目に、風華はまだ教室に残っていたオールマイトと向き合った。

「おや、鳴神少女。もうみんな出て行っちゃったが君は着替えに行かないのかい?」

「行きますよ。でも、その前に……ありがとうございます」

「ええ!?どうしたんだいいきなり!?」

突然ありがとうと頭を下げられて、困惑するオールマイト。あたふたする彼の前で風華は顔を上げ、次の言葉を紡いだ。

「10年前……あなたに助けられなければ、きつとわたしと妹は君沢で死んでいたでしょう。今のわたし達があるのは、ひとえにあなたのおかげです。ずっと、お礼を言いたかった。本当に……ありがとうございますございました」

「なるほど、そういうことか。礼には及ばないよ、私はヒーローとして成すべきことを成したただだからね。それでもお礼がしたいというのなら……たくさん勉強して、最高のヒーローになってくれー！」

「はい。もちろん、そのつもりですよ」

オールマイトにずっと言いたいと思っていたお礼の言葉を、風華は遂に言うことができた。

君沢の悲劇からの10日間、幼い妹を抱えて死地を彷徨い続けた日々。町のヒーローは自分のことで精一杯で、助けてはくれなかった。むしろ、自分が生きるために風華を襲おうとさえした。

誰も頼りにできない中で敵に囲まれ、心も身体も限界を迎えたその時に差し出された救いの手。ヒーローの存在価値を疑っていた風華でさえ、嬉しいと思わずにはいられなかった。

やっと、あの時の恩に報いることができる。オールマイトに無様な姿は見せられない。より一層の気合を入れて、風華は更衣室へ向かうのだった。オールマイトとの会話は短時間だったはずだが、既にもぬけの殻となっていた更衣室を見て、「……みんな早いな」と風華は感嘆の声を上げた。

く

「自分は今日から、ヒーローなのだと自覚する……そのためにも恰好から入ることは大事だぜ！みんなとてもよく似合ってる！」

「鳴神のコスチュームは恰好イイな！軍服みてえで似合ってるぜ！」

「ありがとう。妹にデザインしてもらったんだ」

速攻で着替えを終え、グラウンドβまで走った風華。オールマイトも既に着いており、最後の登場となった。

風華のコスチュームは黒を中心とした軍服状のものに、上から黒いローブを纏ったもの。本当はいつものレインコートを付けたかったが、脆いしボロいしで活動の邪魔になるだけだと雷羽からダメ出しを食らったので、仕方なく似たようなものを作ってもらったのだ。

初めて袖を通したが、昔から着慣れているかのようにしつくりくる。電気系統の個性ということで親近感を持っている上鳴から褒められたのも、妹を褒められたということで悪い気はしなかった。

「それじゃあ始めようか戦闘訓練！準備はいいかい有精卵ども！」

「オールマイト！戦闘訓練とは、どのようなことをするのでしょうか！」

「試験の時みたいなロボット相手？」

「いや……さらに二歩ほど先へ進む。屋内を使ったシミュレーションヤー！」

真に賢しい敵は闇に潜む。だからこそその屋内での戦闘訓練だと

オールマイトは言う。内容はこうだ。

それぞれがクジを引いていき、同じクジを引いた者同士でチームを組む。そして、ヒーローチームと敵チームに分かれて2VS2を行う。

シチュエーションは『核兵器を隠している敵が見つかったと情報が入った。ヒーローはアジトに潜入し、核兵器の確保もしくは敵の捕縛を行え』というもの。制限時間は10分。ヒーロー側の勝利条件は敵全員または核兵器の確保。敵側の勝利条件はヒーロー全員の確保またはタイムアップ。

核兵器は触れることで確保した扱いになり、ヒーローまたは敵は支給される確保テープを巻くことで確保した扱いになるというものであった。

「このクラスは21人だから、普通にクジ引きをすると一人余ってしまふ！なので、この内の3人には2回戦ってもらふことになるぞ！」  
「2回戦うのは大変だけど、より多くの相手と戦えるのは面白そうだね」

「ば、バトルジャンキー戦闘狂……?」

風華が笑いながらそう言うのを聞いて、軽く引く緑谷。しかし、クジ引きの結果2回戦うことはないと分かりしよんぼりしている彼女を見て、慰めの言葉をかけるのだった。

「わたしのチームは……実か。よろしくね」

「おっ、おっおおう！よろしくたのむうぜえっ！」

「思いつきり舌噛んだね……大丈夫かい？」

クジ引きの結果、風華とコンビを組むことになったのは個性『もぎもぎ』を持つ少年峰田実であった。頭の球体と同じ色のマスクに黄色いマントを羽織り、まさにヒーローという出立ちとなっている。

風華は不思議に思っていた。峰田は自分に限らず女子と会話をする時、必ずと言っていい程こんな風にもってしまふ。男子には普通に話せているし、女子相手でも風華と会話をする時程酷くなりはしないのだが。だから、この機会にその理由を知りたいと思っていた。

「実はどうして、女子と話そうとするところなるんだ？男子相手なら

普通に話せているじゃないか」

「女子だからダメなんだよ！お、オイラは……もう察してると思うけど性欲がヤベエ……！だから女子からは大抵キモがられてドン引きされるし、会話なんてほとんどしたことねえんだ！オイラからしたらなあ、キモがらない鳴神がおかしいんだよ！」

「なるほど、そういうことか」

自分の態度を不思議に思う風華の疑問に、峰田は割と気色の悪い告白をする。涙を浮かべながら迫真の表情で叫んでいるのが、より一層の気持ち悪さを醸し出していた。周りからも「うわあ……」とドン引きした声が聞こえてくる。

しかし、風華は動じない。もちろん「気持ち悪いなあコイツ」とは風華も思った。それよりも、彼のヒーローとしての精神は性欲なんかに負けたりはしないと信じることにしたのだ。

「どんなに気味悪がられようと、それでもヒーローを目指した実のことをわたしは尊敬するよ。今はまだ難しいとしても……君の心は性欲なんかに負けたりはしない。そうだろう？」

「なっ……鳴神い……!!オイラ、お前のこと一生崇め奉れるぜえ……!!」

「なら、一緒に頑張ろう。わたし達の力を、ここにいる全員に見せつけてやるんだ」

「おお！俄然やる気が出てきたぜえ！」

目線を向けるのは、自分達の対戦相手。目線に気付いた爆豪は威嚇するように睨みを返し、轟は一瞥だけして目を閉じた。

個性研究所で10年間磨いてきた『疾風迅雷』の力。オールマイトに見せつけてやるんだと、風華は気合を入れた。初めての実技授業、『戦闘訓練』の始まりである。

## 戦闘訓練 その2

10分間の戦闘訓練はつつがなく終わり、風華の出番となった。

それまでの間はずっと観戦。オールマイトによる訓練中の実況解説を聞いたり、講評で良かった点や問題点をみんなで洗い出したりした。緑谷が大怪我して保健室送りになるなどハプニングもあったが、それ以外は特に大した問題は起きなかった。せいぜい『尻尾』の尾白と『透明』の葉隠が、轟にレベルの違いを見せつけられたくらいである。

「さて……次はわたし達だ。頑張ろうね、実」

「おうよ！轟に勝てる気しねえけど、鳴神と一緒になら何とかなる気がするぜ！」

この訓練では鳴神・峰田ペアがヒーロー側。轟・爆豪ペアが敵側となる。敵側の二人が作戦タイムと事前準備のためにビルの中に入ったところで、風華達も作戦タイムだ。

「初日に一応聞いてるけど、もう一回お互いの『個性』について知っておこう。わたしの個性は『疾風迅雷』……風と雷の字が入っているけど、もっと正確に言うなら空気と電気を操る個性だ。空気の流れを操ったり、発電したりできる」

「改めて聞くとやっぱヤベエな」

「まあ、10年くらい鍛えたからね。今回の訓練なら、ビル内の気流から二人と核兵器の位置を割り出したり、核兵器までの最短ルートを保したりって使い方をすると思う。電気の方は核兵器への影響を考慮すると使い辛いかな」

「オイラの個性の名前は『もぎもぎ』だ。頭の房をもぎることができると。コレはオイラ以外の人や物に超くつつくし、逆にオイラに対してはめちやくちや反発する。房はすぐ生え変わるけど、やり過ぎると出血してダメージを食らっちゃう」

互いの個性について特性や出来ること、この訓練でどのような使い方を想定しているのかなどを擦り合わせていく。その上で、10分間の間にどうやって勝利までつなげるかを考える。

「確実に轟と爆豪を無力化する手段は有るには有るんだけど……室内の広さによつてはかなり時間がかかるから。並行して進められるもう一つのプランが欲しいところだね」

「じゃあよ、こんなことできるか？」

「……いいね、プランBはそれでいこうか。上手くいけば速攻で終わらせられる」

作戦の目処が立ったところで、オールマイトからの『作戦タイム終了だ！用意は大丈夫かい!?』のアナウンスが流れる。さつさと所定のスタート地点に着いて、二人は始まりの合図を待った。

少しの緊張こそあるものの、そこに不安や恐れは微塵も無い。今か今かと、開幕の合図を待ち構えていた。

『第1戦目……ヒーロー側、峰田・鳴神ペア！敵側、轟・爆豪ペア！戦闘訓練スタートだ！』

「よし、実は所定の位置に付いていてくれ」

「おうよ！索敵は任せませー！」

スタートの合図と同時に峰田はビルの壁前に位置取り、風華はその場から動かずじつと空気の掌握に勤しむ。

「鳴神の奴、動かないで何やってんだ？」

「索敵じゃない？」

モニタールームで観戦するクラスメイト達が、思い思いに感想を語っていく。刻一刻と制限時間が迫ってくる中、落ち着いてその場を動かない風華と峰田のことを気にするのは必然であった。

……このビルは五階建てになっていて、部屋は各階に2つずつ。核兵器は5階の階段奥の部屋で轟に守られている。爆豪は3階の階段を降りているところか。1戦目の時のようなやる気や覇気があまり感じられないね。核兵器の部屋にいないのなら、爆豪はスルーして構わないか。轟の動向をこのまま把握しつつ、予定通りプランAと並行してプランBを進めていこう。

「……オーケー。核兵器の場所と二人の位置は分かった。実は5階の窓付近にもぎもぎを使って待機していてくれ」

「分かった。待機場所は……ここから上まで登っていけば良いのか

？」

「それで良いよ。タイミングを見てその壁に穴を開けるから、突入して大量のもぎもぎを投げつけてくれ。頼んだよ」

「おう……任せとけ」

二人の考えた作戦、プランBとは。

まず、風華が空気の流れを掌握することで核兵器と敵二人の位置を把握。そのまま風の弾丸で核兵器の在処へ直接道を拓き、そこに峰田が突入。もぎもぎを使って敵を拘束し、その隙に敵または核兵器の確保をするというものである。

短い時間で考えたにしては、上出来な方ではないかと風華は勝手に思っている。轟は『半冷半燃』、爆豪は『爆破』と火力や範囲攻撃に優れた個性を持っており、これに対応される可能性は高いが……あくまでこれはプラン「B」なのだ。

「轟が核兵器から少し離れた……いくよ実、用意してくれ」

「お、おう……こっちはできてるぜ！」

「分かった。飛んでいけ……『吹き荒ぶ風』チーフストーム」

事前に渡した酸素マスクを峰田が付けているのを確認してから、風華は集めていた風をビルの壁へとぶつける。超速の空気の弾丸が、瓦礫すら落とさせずに文字通り風穴を開けた。そこへ間髪入れずに峰田が突撃。氷で壁を作り空気の弾丸を防いでいた轟めがけて、大量のもぎもぎを投げつけていく。

「つち、壁から奇襲かよー！」

「さっきの試合見た時は勝てる気しねえって思ってたけどよ……！  
今なら負ける気がしねえぜえ！」

「クソ……！爆豪！早くこっち来い！奇襲を受けてる！」

「アアツ……！命令すんじゃねえぞ半分野郎！」

床、壁、天井。峰田は辺一面にもぎもぎを投げつけていき、轟の足を奪ってから核兵器へと一直線に向かう。それを見た轟は爆豪へと連絡を入れつつ、氷で峰田の足止めをする。自身に反発するもぎもぎを踏んで大ジャンプを狙っていた峰田だったが、床を伝って目の前にいきなり現れた氷の壁を前にあえなく激突してしまった。

「へぶうつ!?!」

「あつぶねえ……!危うくこんなのに出し抜かれるところだった……爆豪?おい爆豪どうした、返事しやがれっ……!?!」

『何だ!?!爆豪の奴いきなり倒れやがった!』

『鳴神さんの個性でしようか……?いったい、何をしたというのでしよう』

『轟もなんか苦しんでるぜ!?!』

いきなり爆豪が苦しみ出したかと思えば、気絶して倒れる。すぐさま風華に確保されて2対1になったのを見て、モニタールームで見ていたみんなが驚きの声を上げた。オールマイトもこんなこともできるのか……と感心している。

「実、勝己は確保した。そっちはどう?」

「轟の奴気絶しやがった……けど、オイラ凍らされてて動けねえ。悪いけど、鳴神が捕まえてくれ」

「オーケー。すぐそっちに向かうよ。マスクはちゃんと機能してるかい?」

「バツチりだぜ。思ってたのとはちよつと違うけどよ、プランAは上手くいったな!」

駆け足で5階まで上がり、轟が気絶しているのを確認して風華は彼に確保テープを巻く。敵側の二人が確保されたことで、訓練はこれで終了。オールマイトの『ヒーローチーム、WIN!!』という、大音量のアナウンスが流れた。

『何が何だか、分からない内に終わっちゃまったな』

『何をしたのかは、後でオールマイトが解説をしてくれるはずさ!』

涙を流して喜ぶ峰田と、微笑む風華がハイタッチをしているのを尻目に、みんなはモニタールームを出る。入試トップの爆豪と推薦の轟を出し抜いた作戦がいったいどういうものだったのか、みんなの興味はそこに移っていた。

「今回のMVPは鳴神少女だ!開始前はしつかりと互いの個性を踏まえて作戦を立案し、始まってからは索敵に突入経路の確保、二人の確保と実に多くの仕事をこなした!突入作戦が失敗した時を見越して

別のプランを用意していたのもグッドだ！」

「ありがとうございます」

「峰田少年も良かったぞ！迅速な突入、個性を活かして轟少年の機動力を奪いつつ、核兵器へ向けての突貫！失敗こそしたものの、できることをしっかりとやり切っていたその姿勢は高評価だ！」

「お、おお、オールマイトに褒められた……！」

「すげえ鮮やかだったぜ！最初は何で動かないんだって思ってたけどよ！」

轟と爆豪が意識を取り戻したので、オールマイトは講評に移る。しっかりと仲間とコミュニケーションを取って作戦を立て、できることをやり切った風華と峰田の姿勢はオールマイトから高評価を貰っていた。

轟と爆豪も、瞬殺されて見せ場こそあまり無かったものの、互いの個性を活かして役割立てていたのは高評価をされていた。それを聞いていた轟は負けた悔しさに歯を食いしばり、爆豪はいつものように叫んだりもせず静かに下を向いていた。

「ところで鳴神さん、一つ質問いいだろうか！爆豪君と轟君を気絶させたのはおそらく君の個性によるものなのだろうが、あれはいったい何をしたというんだい!？」

「それ気になる！風華ちゃんアレどうやったん？」

「索敵する時に、ビル内の空気は掌握したから……空気中から酸素を奪っていったって、低酸素状態を作り出したんだよ」

「だから、オイラは始めから酸素マスクを付けていたわけだな！」

飯田がビシツと手を上げて、風華に質問をする。別に隠すことなんて何もないからと、風華は正直に答えた。

人間は酸素濃度が下がると、呼吸困難やチアノーゼをはじめとしてさまざまな障害が起こる。今回、風華はビル内の空気中における酸素濃度を低下させることで二人の換気を不十分にさせて、これにより急性の低酸素障害を引き起こさせたのだ。これこそがプランBで目眩ししていた本命の作戦、プランAである。

同じビル内にいる都合上、峰田も本来ならば巻き込んで気絶させて

しまうところであった。だが、そんな時のために風華はコスチュームの備品として、いくつかの携帯型酸素マスクを用意している。事前にこれを付けさせておくことで、峰田を巻き添えにすることを防いだのだ。

空気の低酸素化は、抗う術の少ない便利な技である。風華のそれは、広範囲になってしまつて味方や助けるべき人々を巻き込んでしまう恐れが今回のようにあるので、予め酸素マスクを作つてもらつたのである。

「本当に……君の個性はいろいろなことができるのだな。よければ今度、君が入所しているという個性研究所について、いろいろと話を聞かせてもらえないだろうか？」

「いいよ、時間がある時にね。……今回は、これを使う機会がなかったのが残念だったね」

「そういや、腰に下げてる武器あるな。大型のナイフか？」

講評も終わり、更衣室へと向かう中で話題は風華の腰に下げられた一振りの刃物へ向かう。ナイフかと質問する瀬呂に対して、風華はニヤリと微笑みながらその質問に答えた。

「そんなチャチなものじゃないよ。こいつは高周波ブレード……特殊な合金でできた刀身に、毎秒40万回の超振動を乗せることで、より斬れ味を高めたわたしの愛刀さ。鋼鉄だつて豆腐のようにスパツといけるし、わたしが電気を流せばスタンガンとしても扱えるんだよ」

「そ、そうなのか……」

「こいつの力もみんなに見てもらいたかつたね……見せ場がなかったのが残念だよ」

悪どい笑みを浮かべる風華。普段は無表情気味の彼女が珍しく表情を変え姿を見て、みんなは同じことを考えていた。

……このブレードを使うような、物騒な作戦じゃなくて良かった。

## 不穩の幕開け

「オールマイトの授業はどんな感じでしたか!? インタビューに答えてください!」

「……」

「お願い!一言、いや一言だけでもいいからさ……って危ない!」

群がるマスコミを無視して、風華は英雄の門をくぐる。尚もしつこく食い下がろうとした記者は、セキュリティシステム『英雄バリア』に阻まれてすぐごと帰っていった。「お高く止まりやがって」とか、「報道の自由を侵害している」とか捨て台詞が聞こえてくるも、それらも全て無視である。

「おはよう。みんな、何か疲れてるね」

「あ、風華ちゃん……おはよ。マスコミがめちゃくちやしつこくてさ……振り切るのが大変だったよ」

「やっぱオールマイトの話題性だよな」

正門で脱いだレインコートをロッカーにしまい、席に着く。先に来っていた飯田や緑谷、麗日達と雑談をしている間に空いていた席はどんどん埋まっていき、HRが始まる頃には全員が登校してきた。チャイムが鳴ると同時に相澤が入ってきて、それまで駄弁っていた生徒達が一斉に黙るのはもうA組のお約束である。

「爆豪、お前には能力があるんだから、二度と馬鹿みたいな真似はするな。ムキになって当たり散らして、負けたら今度は無気力になって……ヒーローがそんな調子ではいられねえぞ」

「……分かってる」

「そして緑谷はまた腕ぶっ壊して一件落着か。個性の制御はいつまでも「できません」のままじゃ済まされねえ……制御さえできればやれることは多くなるんだ、焦れよ」

「……!はっ、はい!」

昨日の戦闘訓練の結果のまとめを見たという相澤から、爆豪と緑谷が叱責を受ける。どちらも自覚はしつかりとしているようで、不貞腐れたりすることもなく相澤の言葉を受け止めていた。

「さて、それじゃあHRの間にお前達には学級委員長を決めてもらう」  
「学校はいやつキター！」

「俺やりたい！」

「わたしも！」

「ボクこそが相応しい」

叱責を終え、続く言葉は学級委員長を選抜せよとのこと。みんなこぞって立候補し、自分をアピールしている。そんな中で、一人飯田が「静粛にしまえ！」とみんなを黙らせた。

「学級委員長とは多を牽引する大事な仕事……周囲からの信頼あつてこそ務まるもの……ここは公平に投票で決めるべき！」

「思いつきりそびえ立ってんじゃねーか！何でやりたいのに発案した！」

「まだ知り合って日も浅いのに、信頼もクソも無いと思うわ飯田ちゃん」

「だからこそだ！」

「決まれば何でもいいと思うよ」

投票で決めるべき。そう言う飯田の手が立候補するためにそびえ立っているのを見れば、ツツコミは殺到する。立候補していなかった風華の決まれば何でもいいという言葉で、結局飯田の投票案は採用された。

「僕に……4票も……!?!」

「何でデクに……！クソがあ！」

「委員長緑谷、副委員長八百万か。これで決まったな」

投票の結果、最多の4票を獲得した緑谷が委員長ということになり、次点の八百万が副委員長になった。ちなみに、やりたがっていた飯田は0票。他の誰かに入れたようだ。

「天哉……何であんなにやりたがってたのに他人に票入れたんだ……？」

く

「今日は一人か……」

授業が終わって昼休み。普段は麗日などが一緒になつて風華と昼休みを過ごしてくれているが、彼女が今日は学食に行ったので風華一人で昼休みを過ごすことになる。朝夕の食事ならいつも一人なので大して何も感じないのだが、昼は友人達と食べることが当たり前になつていたので、なんだか寂しいものがあつた。

……そういえば、まだ名前を聞いてないのが何人かいるね。ちゃんと聞いておきたいけど、聞く機会あるかな……

弁当箱をつつきながら、クラスメイトのことについて考える。このクラスの風華を除いた20人とはもう一週間近い交流があるが、まだその中でも話したことや名乗ったことがない相手もいる。そう言う相手とも早く交流を持ちたいものだと思つていた。

今のところ、風華がクラスメイトに抱いている印象はこんな感じである。

出席番号1 青山優雅

個性『ネビルレーザー』

いきなり話しかけてきては返事をする前に会話を打ち切つて何も話さなくなるなど、掴みどころがなくてコミュニケーションを取り辛い相手。

出席番号2 芦戸三奈

個性『酸』

ピンク色の肌が特徴の快活な女子。コミュニケーション能力に優れ人とすぐ仲良くなれる、所謂『陽の者』である。

出席番号3 蛙吹梅雨

個性『蛙』

落ち着いた雰囲気だが、芦戸同様コミュニケーションが取りやすい。『梅雨ちゃん』とあだ名で呼ばれるのが好きらしい。

出席番号4 飯田天哉

個性『エンジン』

とても真面目なメガネ。いちいち動きがカクカクしていて、見るだけでも結構面白い。空回りしがちだが、良い奴。

出席番号5 麗日お茶子

個性『無重力』

名前の通りとてもうらかな子。ところどころで辛辣な面や毒気のある面があるが、基本的に優しく親しみやすい。

出席番号6 尾白猿夫

個性『尻尾』

尻尾がついている……それだけであまり特徴というものがない。それは欠点ではないので、強く生きてほしいと思う。

出席番号7 上鳴電気

個性『帯電』

自分と似たような個性に同じ金髪と、何かと親近感の湧く相手。自分にはできない速攻の放電を羨ましいと思っている。

出席番号8 切島鋭児郎

個性『硬化』

立ち上がった赤髪が目立つ熱血君。初日から臆さず話しかけてくれたのがとてもありがたい。

出席番号9 口田甲司

個性『生き物ボイス』

無口な見た目に威圧感のある異形系。手話でなら会話ができるが、面倒なので喋りがしたい。

出席番号10 砂藤力道

個性『シュガードープ』

ゴツくて強そうな見た目とお菓子作りが得意というギャップが強い。お礼に自分も作ってきたら、また食べられるだろうか。

出席番号11 障子目蔵

個性『複製腕』

礼儀正しくて落ち着いていて、良い意味で高校生とは思えない。複製された口と声が違うのが面白い。

出席番号12 耳郎響香

個性『イヤホンジャック』

ロックバンドなどが好きだという。自分とはあまり趣味は合わない。

いかもしれないが、好きなことを語る姿はかわいい。

出席番号13 瀬呂範太

個性『テープ』

一言で的確にツッコミを入れてくる。高周波ブレードを怖がっていたので、訓練で当たることがあれば積極的に使おうと思っている。

出席番号14 常闇踏陰

個性『黒影』

中二病的な物言いが目立つ。自分もそういうのをカッコいいと思うので、彼は自分の同類なのかもしれない。

出席番号15 轟焦凍

個性『半冷半燃』

No.2ヒーロー『エンデヴアー』の息子なのだという。ライバル視されているのか、見つめてくる視線がむず痒い。

出席番号16……は自分なので省略。

出席番号17 葉隠透

個性『透明化』

快活で人懐っこい少女。電磁波で輪郭だけは分かるが、きつと美少女なのだろう。コスチュームで裸になるのはどうかと思う。

出席番号18 爆豪勝己

個性『爆破』

素行不良の塊。流星に法に触れるようなものではないが、ヒーローとしてその態度はいかなものかと思う。

出席番号19 緑谷出久

個性『超パワー?』

自傷を躊躇うことなく人助けに向かえる精神性は尊敬できる。だけれど、もう少し自分を可愛がってもいいと思う。

出席番号20 峰田実

個性『もぎもぎ』

性欲の化身。一緒に戦ってみて力もちゃんとあることが分かったし、欲望を乗り越えてヒーローになってほしい。

出席番号21 八百万百

## 個性『創造』

言動の節々からお嬢様な育ちが滲み出ているのが分かる。あと、きつとこの子は天然だ。

あまり周りと絡もうとしない轟やコミニケーションに難のある青山、絡もうとしても無視するか吠えるだけで会話にならない爆豪、純粹にあまり話題がない尾白など、まだまだ交流の不十分な生徒はたくさんいる。どうにかして、みんなと交流を深められないものかと風華は考えていた。

これからみんな、3年間雄英で学んで"本物の"ヒーローとしての一步を踏み出す。きつと、風華が思うようなヒーローに彼らなら成ることができるとであろう。そんなヒーローの卵達とは、今のうちに仲良くしておきたいと風華は思っているのだ。

「……………ん？警報？」

「ヤベーな！鳴神、早く避難しようぜ！」

思案を巡らせていると、『セキリユティ3が突破されました！生徒の皆さんはすぐに屋外へと避難してください！』とけたたましく警報が流れる。校舎内に何者かが侵入してきたという合図に、教室に残っていたみんながざわめき出し、避難を試みようとする。

「ん……………？あれ、朝のマスコミじゃない？」

「マジじゃん！敵じゃなくてよかった……………」

「これなら心配する必要はないですわね」

風華も廊下に出ていき、窓の外から見えた光景をみんなに伝える。相澤とプレゼント・マイクに群がるマスコミを見て、みんなは敵の襲撃ということがなくて安心した、とホッと息を吐きながら教室へと戻っていった。

「……………でも、どうやって入ってきたんだ？」

風華のその眩きを拾った者はいなかった。マスコミの大群が入り込む先……………今後の不穏を映し出すように、雄英バリアーが見るも無惨に崩れ落ちてしまっていた。

## 敵、襲来

午後のヒーロー基礎学が始まる前、緑谷から一つ話があった。「学級委員長を飯田にやってほしい」というものだ。

何でも昼休み、食堂で警報が鳴り響いた時に起きた騒動を飯田が颯爽と解決したらしい。躊躇いなくそうした集団のための行動ができる飯田こそ、学級委員長に相応しい。緑谷はそう相澤に伝えた。

相澤の返答は「時間がもつたいないからさっさと進めろ」であった。ということ、反対意見も出なかったのも委員長は飯田に変わった。張り切る彼には、食堂での活躍から新たに『非常口』というあだ名が付けられていた。

「さて、今回のヒーロー基礎学だが……俺とオールマイト、そしてもう一人の3人体制で見ることになった」

「なった？」

「さっきの騒ぎを受けてな……念のためだ」

昼休みにあった、大勢のマスコミによる不法侵入からの強行取材。それを受けて、警戒を強めることにしたらしい。

今回行われるのは、災害、水難なんでもござれのレスキュー訓練。相澤が「れすきゅー」と書かれたプラカードを机に置いた。こうした状況での救助活動こそヒーローの半分であると、みんなが興奮気味に騒ぎ出す。

「コスチュームに関しては、今回は着用を強制しない。物によっては動きを制限するようなものもあるからな。少し遠くになるから、今回はバスで移動する。すぐに着替えてバスに乗れ」

「はいー！」

「伸ばすな」

騒ぎ立てる生徒達を眼光で制し、相澤は必要な事項を告げて教室を出ていく。彼の姿が見えなくなったところで、風華達もコスチュームを取って更衣室へと向かった。

「前の戦闘訓練の時も見ましたが……鳴神さんは割と筋肉質ですね」

「確かに！服の上からじゃあ、絶対わかんないよねこんなの！」

着替えるために服を脱いだことで露わになった風華の筋肉を見て、八百万と葉隠がそれに言及する。肉体の方も鍛えることで、個性はより制御しやすくなり、その汎用性を増す。昔からそう言われてきたので鍛えてきていると、風華は答えた。

「筋肉で見た目が膨れるのは、女子としてはどうかと思うし……鍛えてもあまり大きくなならない体質で良かったよ」

「そういうのもカッコいいとウチは思う！」

筋肉や鍛え方について、話に花を咲かせながら着替えを進めている。更衣室を出ると、ちょうど微妙な表情の峰田と風華は鉢合わせた。

「どうした？具合でも悪くなつた？」

「いや……ただ、華が見つからなかっただけさ」

そんなこんなで、目的地へ向けてバスに乗る。飯田が委員長として、席順を考えながら先導をしていたが、向かい合わせに座るタイプだったので無駄な努力と化していた。「こういうタイプだった、クソウ！」と落ち込む飯田を、「意味なかったなー」と芦戸が慰めていた。

「私思ったこと何でも言っちゃうの、緑谷ちゃん」

「え!?どうしたの……蛙吹さん？」

「梅雨ちゃんと呼んで。あなたの『個性』、オールマイトに似てる」

「待てよ梅雨ちゃん、似て非なるアレだぜ！オールマイトは怪我しねえしきー！」

「あつ、うん！そうだよね……っ！」

バスの中では、クラスメイト達の個性について話題が出る。反動で身体が破壊される程の超パワーは派手で羨ましいところもあると、『硬化』の個性を持つ切島は緑谷に言う。いかんせん地味な個性だと自嘲する切島だったが、攻防一体の強力な個性だと緑谷のフォロワーが入ると、彼は嬉しそうに少しだけ頬を赤らめた。

「しかし、派手な個性だったら轟に、爆豪……後はやっぱり鳴神だよな！きつとデビューしたら人気者間違いなしだぜ！」

「でも、爆豪ちゃんは性格がアレだからあんまり人気でなさそうね」

「んだとコラア!? 出すわ!」

「座りな」

「ほら、そういうところ」

クソを下水で煮込んだような性格と上鳴に例えられ、座席を立ち上がって怒る爆豪。隣に座る耳郎に座らされつつ、リアクションをみんなにオモチャにされる。

クソの下水煮込み……

周りのお喋りに耳を傾けながら、どんなものかを思い浮かべる。頭に浮かんだ汚いビジョンを振り払い、流石の爆豪もここまで酷いものじゃないと思ひ直した。酷いけども。

「勝己。大丈夫だよ……流石に、そこまで性格悪いわけじゃないさ」

「うるせえぞ鳴神イ! 俺を慰めんじゃねえ!」

「低俗な会話ですこと!」

「ウチはこういうの好きだな!」

「そろそろ黙れ。もうすぐ着くぞ」

相澤の一言で、バス内は一気に大人しくなる。窓の外を見てみると、巨大なドーム状の建物が見えていた。どうやら、あそこが今回の目的地らしい。

↳

「うおおおお! 広い!」

「USJみたい……!」

「水難事故、土砂災害、火事、e t c……あらゆる災害に対応するために、僕が作った演習場です。その名も『ウソの災害や事故ルーム!』さらに略してUSJ!」

「USJだった!!」

演習場の中に入ると、その多くのシミュレーション内容にみんなが大興奮する。説明のためにやってきた新たなる先生、「スペースヒーロー」13号が施設の名前を告げると、その名前は大丈夫なのかと総ツツコミが入った。

13号は、災害などでの救助活動を本分に活動するレスキューヒーロー。紳士的な物腰で女性を中心に人気が高く、A組の中なら麗日もそのフアンの一人である。その麗日といえ、テンションが上がって手をブンブンと振っていた。隣の緑谷が振り回される手に当たって「痛い」と小さく言っている。

「オールマイトは？ここで落ち合うはずだが」

「先輩、それが……通勤の途中で制限ギリギリまで活動していたみたいで……今は仮眠室で、ある程度動けるようになるまで休んでいます」

「非合理的な……仕方ない、始めるか」

相澤と13号が何かを話しているが、どうやらここで待っているはずだったオールマイトがまだ来れないらしい。その理由を察していた緑谷は険しい顔になるが、理由を知る由もない風華はただ「残念」と、そう思うだけであった。

「えー、訓練を始める前に、皆さんに小言を一つ、二つ、三つ……」  
「増えてる」

13号の講話が始まる。

彼女の個性『ブラックホール』は、その強い引力で何でも吸い込むことで災害現場から被災者を吸い出し、救助する。だがこの力は、触れたものを原子レベルで崩壊させる危険な力でもある。

生徒の中にも、人を簡単に殺してしまえる危険な個性を持つ者は多くいる。それこそ、生きるためにその個性で殺人も辞さなかった風華のように。

個性把握テストでは己の持つ力の『可能性』を、対人戦闘訓練ではその『戦うための使い方』を学んだ。だからこそ、みんなにはここで『助ける』ための使い方を学んでいってほしい。

みんなの中に宿る『個性』は、人を傷つけ悲しませるためのものではない。助けるためにあるのだと心得てほしい。そうやって13号は言葉を締めた。全員から盛大な拍手が送られる。

「それじゃあまず……!?!」

「あれ……? オールマイト、いないじゃん」

「一塊になって動くな！13号は生徒を守れ！」

相澤がこれから行うことの説明をしようとした、その時。中央に鎮座する噴水から黒い霧が湧き上がった。そして、その中から……いくつもの大いなる悪意が現れる。

「子どもを殺せば……来るのかな？」

「何だ？もう始まつてるパターン……」

「動くな！アレは……敵だ！」

黒い霧を纏う白スーツ。脳みそが剥き出しになっている、目の焦点が彼方を向いた巨漢。いくつもの「手」で己を包み込んだ小汚い格好の白髪の男。そして、その後ろに付き従う総勢300は軽く超える武装集団。

それら全員が、一介の学生の身には余りにも大き過ぎるほどの強大な悪意を放っていた。

命を救うための訓練の時間に現れた、途方もない悪意。学生達はここで、プロが何と戦っているのかを思い知ることとなる。

「敵!?ヒーローの陣地ど真ん中に侵入してくるなんて、アホでもやらかさねえぞ!」

「侵入者用のセンサーは!？」

「も、もちろん有りますが……!」

センサーが作動していない。恐らく、あの敵の集団の中に電子機器をどうにかできる類の『個性』の持ち主がいる。

ヒーローの本拠地に忍び込むようなバカではあるが、無策でいるようなアホではない。校舎から離れたこの施設に、A組という少人数が入ってくる時間帯を見計らったの襲撃。何らかの意図を以て行われた、用意周到な襲撃であると轟が結論付けた。

「訓練は中止だ！13号、あと上鳴は校舎へ連絡を試せ！その間は俺が奴らを食い止める！」

「え!?先生の戦闘スタイルじゃ正面からの戦いには……!」

「緑谷、一芸だけではヒーローは務まらない」

13号に生徒を任せ、相澤……レイザーヘッドは緑谷を諭すように力強く言って敵の元へと跳び降りていく。射撃隊と名乗った敵の

集団が、イレイザーを蜂の巣にするべく個性によって作られた銃口を向けるも、『抹消』によって機能する前に取り押さえられた。

「馬鹿野郎！アイツはイレイザーヘッドだ！見られると個性が使えなくなるぞー！」

「ほう……なら異形系の個性はどうだ!?!」

「いいや、そりゃ無理だ」

射撃隊が瞬殺されたことで敵は一瞬狼狽えるも、すぐにイレイザーの正体を看破して個性を消されることのない異形系の部隊で攻めていく。しかしもちろん、イレイザーヘッドはそんな相手も対策済みである。

元々、彼の個性である『抹消』は発動させたり変化させたりする個性相手にしか効果を発揮しない。異形相手には意味のない個性なのである。だが、異形系の強みは近接戦闘で発揮されることが多い。そのため、彼は自身の得物である捕縛布を用いて格闘戦を行うことで、異形相手の対策をしていた。

「凄い……多人数相手の集団戦こそが、先生の本領だったんだ！」

「緑谷、いいから早く避難だ！」

集団には、数の有利という大きなメリットができる代わりに連携の難化や同士討ちなどのデメリットもできる。イレイザーヘッドはゴーグルで抹消のための視線を隠し、「誰が個性を消されているのか分からない」状況を作る。その上で格闘戦にも強く、捕獲に長ける。集団戦で輝く無類の強さこそ、彼の本領であった。

「強いな、ヒーロー。有象無象じゃ歯が立たない」

「今の内に避難を！」

「おっと……そうはさせませんよ」

イレイザーヘッドが奮闘している間に、13号は生徒を集めて出入り口へと向かわせていた。もう少してUSJからみんなを出すことができる……そんなところで最悪の邪魔が入る。

白スーツを身に纏う黒い霧……黒霧と名乗る敵によって、終わりがけていた避難誘導は無理矢理中断させられてしまった。

「初めまして、ヒーロー及びその卵の皆様。我々は敵連合。僭越なが

ら、この度は……「平和の象徴」オールマイトに息絶えていただき  
いと思っております」

「は……？」

「情報によれば、この時間はここにオールマイトがいるとのこと  
ですが……カリキュラムに変更でもあったのでしょうか？まあ、そこは  
どうでも良いところですか。私の役目は……」

敵連合……そう名乗った目の前の集団の目的は、あろうことがオ  
ールマイトの抹殺。そんな大言壮語に緑谷が呆気に取られる中、13号  
が黒霧を吸い込んで捕獲しようとする。しかしそれは、爆豪と切島が  
射線に攻撃に入ったことで失敗に終わった。

「オールマイトの前に、俺達に負けるとは考えなかったのか!？」

「馬鹿野郎！二人とも邪魔だよ！」

「ふう、危ない危ない……そうでしたね、未だ卵と言えどあなた方も立  
派なヒーロー。ここは私の仕事を、大人しく果たしていくとしまし  
うか」

散らして、殺す。

21人を霧が包み込み、隠す。端の方にいた何人かがかろうじて逃  
れるも、残りは須く霧に飲まれて何処へと消えていった。

「ああ、そうだ……鳴神風華さん。あなたには特別な相手を当てがっ  
ております。どうぞお楽しみに」

「……!?何故わたしの名前を知っている!？」

「あなたでしたか。いえ、知っているのは名前だけでして。人相まで  
は把握していませんでしたよ」

「しまっ……」

もう遅い。『雷上動』を準備するよりも先に、霧は風華の身を包み込  
んでいく。

だったら、そいつは絶対に何とかする。黒霧の語る言葉に不信とえ  
もいわれぬ不安を感じるも、風華は決意した。彼女が特大の悪意と邂  
逅するまで、そう時間はかからない。

## 赫く迸るモノ

「ここはっ……！土砂災害ゾーン？」

自身を飲み込んだ靄が晴れて、風華が見たのは土に埋もれて崩れたビルの群れ。どうやら、風華は土砂災害ゾーンに飛ばされたらしい。辺りを見回してみると、少し遠い所に尾白の姿と宙に浮かぶグローブと靴が見えた。あれは葉隠だ。何十人という敵に囲まれていて、こちらに気付いていない。それに、戦っている内に段々と風華の所から遠ざかっていつている。あれでは協力は望めないだろう。

「あ〜！見つけた〜！」

「っ!?くっ……！」

「よく避けたね〜！オジサンびつくり〜！」

「……何者だ」

背後から感じた殺気と圧力を、咄嗟に横っ飛びしてやり過ぎす。転がってきた黒いボンレスハムを全身で表現するような巨体が、倒れたビルにぶつかって粉塵を散らした。

巨体は頑丈なビルにぶつかったことを苦にする様子もなく起き上がり、下品に笑いながら風華を見下ろした。舐り回すようなねちっこい視線が、とてつもない不快感を生み出す。

「えへへ……久しぶりだねえ……！何年振りくらいだったかなあ……10年振りくらい……！」

「何のことだ……!?わたしは、お前のことなんて顔も名前も知らない……！」

「はあああああ?!嘘だろお!?僕はずっと、ずうううつつと!!!君に復讐できる今日!!この時を待ち望んでたつてのにさあああああ!!!」

ボンレスハムのような男は叫ぶ。すると、大気を劈くような轟音が重く響いた。あまりの音圧に耳を塞ぐ。男はその隙を逃すことなく風華に向かって突進し、その巨体を叩き付けた。想定外の素早さに面食らうも、どうにかこれも回避する。それまで風華が立っていた地面は、隕石が落ちたかのように大きなクレーターとなっていた。

「くそ……なんて速さ……！」

「えへへ……忘れてるみたいだから、思い出させてあげるよ……！君沢でのトラウマをねえ！」

「駆動鎧っ……!?!」

ここまでのやり取りの間に作り出した電気を全身に巡らせ、身体強化を図ろうとしたその瞬間。男がかつて風華を苦しめた忌まわしき鎧を装着した。

それを見た瞬間、風華の脳内に「あの頃」の記憶が鮮明に蘇る。怒り、憎悪、嫌悪、あらゆる負の感情が噴き出していくような気がした。込み上がる吐き気を抑えつつ、風華は敵を睨みつける。さつきまでの憎悪はどこへ行ったか、男はまたしても舐り回すような汚らしい笑顔に変わっていた。

駆動鎧。

かつて某県君沢市を襲った爆破テロ事件『君沢の悲劇』で、この人災の被害者を襲った鋼鉄の悪意。爆弾が撒き散らした毒素によって死の大地となっていた君沢市をもものともせず闊歩し、生き残った者を見つけては取り付けられた武装を用いて、おもちゃで遊ぶかのように残酷に殺戮を行なった。

後にその殆どが怒れるオールマイトによって倒され、逮捕された。彼らの殆どは『無個性』であったという。

無個性に個性持ちを軽く屠れるだけの力を与えるこの駆動鎧は、多くの国民に衝撃を与えた。

こんなものが世に出回っては、個性を法律で規制している意味がなくなってしまう。敵に好き勝手をさせないためにも、絶対に、これ以上駆動鎧を世に出してはならない。警察の捜査も虚しく、製造元の尻尾を掴むことはできなかった。

たまたま、オールマイトが倒した敵の中に駆動鎧を製造していた者がいたことで、残っていた在庫も全て破壊され、駆動鎧は闇に葬られた。この敵が手元に置いていた駆動鎧の数は、裕に千を超えていたという。野放しにしていれば、いったいどれほどの被害が日本を襲っただろう。

呆気なく終わった話ではあったが……それまでに付けられた爪痕

は、めでたしめでたしでは済まない余りにも大きなものであった。

「どうしてお前がそれを持っている……！それはオールマイトが全て破壊したはずだし、それを持っていた奴は全員『無個性』だったはずだ！」

「そんな細かいことなんてどうでも良いじゃないかあ……今、大事なのはあ……これで君をどう躰るかさあ！」

「がっ……!?!」

余りにも、速い。

全身に電気を巡らせることで、その刺激によって身体機能を活性化させ強化する風華の技『纏雷』は動体視力や反応速度も強化する。それでも、男の動きに反応することができなかった。個性に駆動鎧が加わるだけで、脅威は凄まじいまでに増大する。かつてオールマイトや警察が危惧していた可能性が、この場で実現していた。

瓦礫に叩きつけられ、攻撃を受けた右腕がぐしゃりと潰れ曲がる。痛みには耐えきれず、か細い悲鳴が漏れた。残った左手で高周波ブレードを抜刀し、構える。スイッチが入って小刻みに震える刃を見て、男は拍子抜けしたように言う。

「はあ……！はあっ……！」

「剣なんて使っても無駄だよお！オジサンの個性は『反発強化』！そんな鈍ら刀の攻撃如きいくらでも弾いて……あんぎやあああああ!!?!」  
「このブレードは鋼鉄だって斬れるんだ……あまり舐めるな……!」

個性を誇示するかのよう、ブレードの攻撃を受ける男。その斬れ味は想定外だったようで、中身の贅肉ごと駆動鎧を斬られ悶絶する。電撃も撃ち込んでみるが、こちらは効いている様子がない。どうやら反発……電気抵抗も強化されているようだ。

斬撃の痛みに跳ねる男から離れ、風華は有効な手段を模索する。電撃は効果が見られず、斬撃はこれ以上は殺しかねないので使えない。ならばどうやって、この男を倒すべきか。

風の弾丸は使えない。貫通力が高すぎて失血死させてしまう可能性が高いからだ。かといって、低酸素症を起こさせるのは現実的ではない。掌握しなければならない空間が広過ぎる。その上、駆動鎧には

酸素を供給する機能がある。高所まで打ち上げて落下させるのも殺意に溢れすぎている。ヒーローとして使うべき技ではない。

ならば、抵抗できないくらいダメージを与えてから風で浮かせて拘束する。今できることといえ、これくらいしかないだろう。考えを纏めて実行に移そうとした、その時だった。

「あはっ……あははっ！死ぬところだった……もう少しで死んじやうところだったよお！」

「嘘、でしょ……あの傷で何で動けて……！」

四度の突進。駆動鎧の補助こそないが、純粹にその重みがプラスされた鉄の塊の一撃。動けることに驚き、そして右腕の痛みを抑えることに集中していた風華に避けられる道理は無かった。総重量400kgを超えるタックルが、風華の身体に激突する。

めき、ぐしゃ。

およそ、人体で鳴るべきではない音が鳴った。電流の途切れた身体は内側から血で赤く染まり、肺に骨が刺さっているのか口からごぼ、と血を吐いてしまっている。10人中10人の医者が、どう考えても手遅れだろう状態になってしまっていた。

「がぶっ……あ……う……」

「あれれええ？どうして生きてるのかな？オジサン本気で紙みたいにペラペラにしてやるつもりだったんだけどなあ！ああ……身体強化か」

「う……こ、の……！」

「うーん、いい顔になったね風華ちゃん！そうだ！こんなにしぶとい風華ちゃんには、オジサンが君を狙った理由を教えてあげるね！」

地面に赤く染みを作って倒れる風華に馬乗りになりながら、男は黒霧に風華を自分の元へと送ってもらった理由を語る。

男は元々、強盗や強姦などの罪を犯して逃げ回っていた敵であった。そんなことをしでかした理由は酷く単純。ただ個性を使って楽しく暴れ回ったかった、それだけのこと。後は働かずに金が欲しかったなどだ。

逃亡生活を続けていく中で、とある集団に誘われた。なんでもたく

さんの兵器を手に入れたから一緒に使う仲間を探していることだった。一つの町を爆弾で更地にして、生き残った者をたくさん殺して数を競うゲームをしよう。もちろん、二つ返事で快諾した。

そして計画は実行され、男は多くの人間を殺していった。個性を持つ自分にはハンデとして駆動鎧は与えられなかったが、それでも十分に楽しめていた。

爆弾の毒素も、予めマスクを貰っていたから何の問題もなかったし、むしろ生存者にたくさん深呼吸をさせて中毒死させる遊びができて面白い要素でしかなかった。

そうしてたくさん、思う気ままに殺して回って数日が経った頃、毒を纏って吹き荒れる旋風を見た。興味本位でさらに近付いてみると、そこには赤ん坊を抱えた幼女がいたではないか。

歓喜した。今までたくさん殺して回ってきたが、子どもを……それも幼い少女と赤ん坊を殺したことはまだなかったからだ。

どんな悲鳴を聞かせてくれるんだろう。どんな顔をしてくれるんだろう。妄想が膨らむ。顔面が紅潮していくのが分かった。その小さな身体で、いっぱいオジサンを楽しませてくれ。そう舌舐めずりをしたところで……男の意識は途切れた。

目を覚ましたのは、警察病院だった。男は意識を失っている間に逮捕されていたのだ。なんでも、頭を強く打ちつけていた上に顎や肩の骨が粉々に砕けていたらしい。病院に入院しているのも納得の重傷であった。

その後のことはぼんやりとしか覚えていない。覚えているのは唯一、自分にこの大怪我を負わせた少女の憤怒に染まった姿だけ。赫く弾ける稲妻を纏うその姿には、思い返しただけで戦慄させられた。同時に憎悪も湧き上がる。

この傷の恨み……絶対に晴らさせて貰うよ。

10年間、そのことだけを考えて生きてきた。どこで生きてるかも分からなかったし、出所できた後もヒーローによる監視はついていった。復讐のビジョンなんてものはなかったが、それでも生きる支えにはなった。

そして、チャンスはやってきた。男の前科に目をつけてスカウトに来た黒霧が持つてきた1—Aの名簿に載っていた名前の一つを見て、男は確信した。

……この子だ。鳴神風華ちゃん、かあ……！

見えたのは、そこにあつた名前だけ。それだけで男は、この鳴神風華という少女が己の復讐相手であると確信した。根拠なんてない。ただただ確信だけがあつた。

雄英襲撃に携わる一人であつた無個性が持っていた最後の駆動鎧を殺して奪い取り、自分の物として準備もできた。後は風華に絶望を贈るだけ。彼女が苦悶に、苦痛に、絶望に沈む姿を頭の中で描き上げ、男は黒霧の開く門をくぐつたのだった。

「どうだい？とつても心温まる、深くもいい話だつただろ？オジサンつてば、死にゆく風華ちゃんのために冥土の土産話をしてあげるなんて……ホントに優し過ぎて涙出てきちゃつた！」

「……！」

「無視してんじゃねえよ」

「あつ……!!」

苦痛に言葉も出せない風華を殴る。

「……ゆっ！」

「だからさあ、無視すんなつて」

何度も。

「うゅっ……！」

「人の話はちゃんと聞けつて教わらなかつた？」

何度も。

「ゆっ……！」

「はあ……お前、もういいや」

何度でも、殴り続ける。殴られ過ぎて、顔の原型が分からなくなるくらい歪んでしまった。骨格も筋肉もぐちゃぐちゃになり、目や鼻、舌はもう二度と機能しなくなっているだろう。喉の奥では、折れた歯が堰となつて血が溢れるのを留めていた。

それでも、目の光が消えていない。もう敗北と死が確定であるのに

も関わらず、往生際悪く抵抗しようとしているのが男は気に入らなかつた。そして、やがて風華を諦めた。

「こんなので遊んだってしょうがないや。オジサンはあっちの方で戦ってる尻尾と手袋で遊ぼっかな！」

風華の身体から離れ、未だ大勢の敵相手に抵抗を続けている尾白とそれを見ている葉隠の方に視線を向ける。風華の左手が男を止めようとするように上がるも、力のないその抵抗は男によって踏み潰されてしまう。

骨が、爪が、砕ける音が響く。

「いつまでも抵抗してんじゃねえよ！てめえはもう終わりなんだよ！遊び終わったんだからゴミらしく死んでればいいんだよてめえはよお！」

今度は踏みつける。入念に、骨ごと内臓を潰すように何度何度も。何十か、何百か繰り返して、息を切らした男は踏みつける足を止める。

「じゃあな。地面の染み」

「誰に向かって……そんな口を聞いてるんだ？」

男がトドメの一発を頭にくれてやろうとした、その時だった。何度も踏み潰して地面の染みにしてやったはずの風華の左手が、振り下された男の足を掴み、受け止めていた。

「は……う？」

「どいつも、こいつも……軽々しく命を「消費」しやがって……人生を、人の命をなんだと思ってるんだ？」

ぞわり。

本能がヤバいと判断し、男は5歩後ろに下がる。本当なら、このまま一目散に逃げ出せとも本能は言っていた。それでも、その光景から目を離すことができなかつた。

10年前。神をも恐れぬ敵だった男に初めて恐怖という感情を植え付けた赫き輝き。それが、あの時よりもさらに力と怒りを増して、目の前の死に体から迸っていた。

「なんだよ……なんなんだよ、お前は！」

言葉が、稲妻が。一つ言う度、一つ迸る度、潰れていたはずの身体

が生氣を取り戻していく。骨の破片が繋がり、筋繊維が絡まり合い、臓器は機能を取り戻し、再び血が巡った。その手に離れていた高周波ブレードが再び収まる。在るべき場所へ帰ったことを喜ぶように、超振動が小刻みに揺れた。

鳴神風華は元の様相を取り戻した。その身に纏う電気のスパークが、翠緑から赫へ変わっていることを除けばだが。

「軽々しく奪ってきた命の重み……お前のその身で思い知れ」

憤怒が空気を赫く染め上げる。今この瞬間より、USJは危険領域レッドゾーンに突入した。

## 赫炎領域ーレッドゾーンー

「え……何これ？」

「空が赤くなつてやがる！晴天だぞ！」

教室で授業を受けていたB組の面々が、空気の異変を感じ取る。外は雲一つない晴天の空であるというのに、赤々と色付いてきた自身の視界にえもいわれぬ不安が生まれる。

「静かに！原因ならハウンドドッグ先生をはじめ手の空いている先生達が調べてくれる！今は慌てず騒がず、平静な心で授業を受けるのだ！」

「は、はい！」

B組の担任、ブラドキング先生が未知の不安と恐怖に怯える生徒たちを一喝し、再び教壇へと意識を向けさせる。「そんなこと言われても」という言葉を飲み込んで、彼らは再び授業に取り組んだ。

「大丈夫なのかよ……」

生徒の一人、物間が窓から外を見ると、赤い空気の原因を探して奔走する先生達の姿が見えた。そこにはオールマイトの姿もある。きつとすぐに原因を見つけて、対処してくれるだろう。

不安は晴れない。それでも先生達なら、プロヒーローなら何とかしてくれると信じて、物間は黒板へと視線を戻した。

く

「うえ、うえ……」

「上鳴ーやられた、油断してた……！」

時は少し遡り、USJ山岳ゾーン。このエリアに飛ばされた八百万、耳郎、上鳴の3人は、それぞれの個性を生かして迫り来る敵を撃退し全滅させたところだった。その油断を突かれ、地中に潜んでいた敵によって上鳴を人質に取られてしまう。

「同じ電気系統の個性としては、殺してしまうのは心苦しいが。まあ、しょうがないな」

「電気の個性……恐らくこの方が、轟さんの言っていた通信を妨害していた敵なのでしょうね」

「伏兵の存在を考慮できてなかった……最後の最後まで警戒を続ける、そんな初歩的なことができてなかった……」

耳郎は悔しさに口元を歪める。自分と八百万を殺した後で上鳴も殺してやるという敵から、どうやって彼を奪い返した上で倒すか。妙な動きをするんじゃないと釘を刺す敵の注意を引くべく、彼女は語りかける。

「……上鳴もそうだけどさ。電気系統の個性持つてる奴って産まれながらの勝ち組じゃん？」

「耳郎さん？何を……」

「いや、純粋な疑問なんだけど？ヒーローでなくとも発電所とか色々仕事あるし、どこでも引く手数多じゃん。どうしてそれなのに敵なんかやってるのかなーって」

「……気付かれないとでも思ったか？」

会話で気を引きながら、耳に繋がるイヤホンジャックを伸ばして不意打ちを企んでいた耳郎。だが、その目論見は看破されていた。敵が抱える上鳴が、電流を纏った手刀を押し当てられて「ヴェイ!」と恐怖の叫びを漏らす。

こうあつては、イヤホンジャックは戻すしかなかった。不意打ちも失敗したことで、本格的に打つ手が無くなっていることを理解する。打開策のない現状に、二人が悔しげに声を漏らした。

「ヒーローの卵が、人質を軽視するなよ。お前達が死ぬのならこのアホだけは見逃してやってもいい。自分の命か、他人の命か……さあ、動くなよ」

「くそつ、上鳴………え？」

「上鳴さん………あ、あら………!」

「な、何だ………? 空気が、赤く………?」

敵が二人ににじり寄ったその時、赫い風が4人の身体を撫でた。ぞわり。

全身の産毛が総毛立ち、悪寒が電撃のように全身を迸る。いったい

何が起こっている。それを確認するべく、敵は背後を向いた。そこにいたのは、巨大な赤い塊を引き摺って歩く、赫灼の稲妻を纏った風華の姿だった。

「ころして……ころして……」

「ああ……こんな所にもいたのか」

赫雷が閃く。赫風が吹き荒れる。

絶対にコイツの相手をしてはいけない。人質にとっていた上鳴を捨てて、敵は一目散に逃げ出そうとした。そして背を向けたその瞬間、高周波ブレードが敵の頸動脈を斬り裂いた。

「は？あ……？」

だくだくと、血が噴き出す首筋に触れる。何が起きたのか、何をされたのかすら彼は分かっているまいだろう。間抜けな断末魔の声を残して敵は倒れ、地面を赤黒く染めた。

「鳴神さん……ですよ、ね？」

「風華……助けに来てくれたんだよね？」

風華は答えない。だが、返事が返ってくることは期待していなかったし、二人はむしろ返ってこなくてもいいとさえ思っていた。

シチュエーションだけを見れば、危機的状况にあるクラスメイトを颯爽と敵を倒して助けてくれた素晴らしい救援。であるはずなのに。どうしても二人は、風華に近づく気になれなかった。

一步、二歩、後退りする。生存本能が、今すぐにこの場を離れろと警鐘を鳴らしている。風華から強く感じるもの……敵の悪意とも、ヒーローの善意とも違う、赫々と滾る『怒り』に、恐怖を覚えずにはいられなかった。

「……」

「行った……？」

「ええ……どうにか、助かったようですわ……」

助かった。おおよそ味方に向けるものではない言葉が、八百万の口から放たれる。『雷上動』の電閃が敵達の現れた噴水のある方角へ向かうのを見て、二人は今しがた斬られた敵と、風華が引き摺ってきた敵の治療を始めた。

彼女を人殺しにしてはいけない。

風華はあまりにも躊躇いなく剣を振るつた。殺人も辞さない振る舞いなど、ヒーローとして認められるものではない。起きてしまったことが変えられないなら、せめて死なせないように。

八百万の『創造』が、矢継ぎ早に治療道具を生み出していく。今、自分にできることを。二人はヒーローの本分を全うする。仲間に道を踏み外させないためにも。

）

生徒が散り散りにされてからも、レーザーヘッドの戦いは続いていた。首魁らしき「手」の敵……黒霧が「死柄木弔」と呼んだ男も戦闘に加わり、激しさを増していく。倒しても倒してもキリなく次がやってくる状況に、流石のレーザーも疲労が隠せないでいた。

「髪が下がる瞬間がある……アクションが増えるごとに、その間隔は短くなっている」

「肘が崩れ……!」

「無理をするなよレーザーヘッド」

死柄木に掴まれた肘が、ボロボロに朽ちて崩れていく。即座に離れて顔面を殴りつけてやったが、死柄木はそれも大したことではないかのように起き上がり、ニタリと笑った。

「君が得意なのはあくまで『奇襲からの短期決戦』だろう……? 長期の格闘戦なんてのは、本当はお門違いなんじゃないか?」

「……」

「それでも前に出てきたのは、生徒に安心感を与えるためか? 先生だもんなあ。カッコいいぜレーザー。でもよ……」

崩された右肘を庇いながら、取り巻きをいなすレーザーヘッド。彼の奮闘を心の底から嘲笑うかのように死柄木は言葉を続ける。

どうにかしてこの囲みを抜けて、奴を捕らえる。隙を窺っていたイレーザーの影が、より大きな影に塗り潰された。

「本命は俺じゃない」

ぐしゃ。

イレイザーヘッドの顔面が、脳味噌を剥き出しにした大男によって地面に叩きつけられた。

「対 平和の象徴……改人『脳無』」

悪意が、嗤った。

）

見てしまった。イレイザーヘッドがなす術なく瞬殺されてしまうさまを。

緑谷も、蛙吹も、峰田も。水難ゾーンに飛ばされてから、そこにいた敵を撃退して合流しにやって来た。相手は自分達の個性を把握しておらず、個々の力もそれほどではないチンピラ。生徒の自分達でもどうにかなった相手なのだから、先生ならばもっと余裕な相手だろう。そう思っていた。

早い話が、侮っていたのだ。オールマイト抹殺を目的に掲げていたからには、その方法が有るはずなのに。敵の用意の良さを舐めてしまっていた。

「落ち着いて、二人とも。今はここで待機よ」

「分かってる……無策では飛び出さない」

「そ、そうだ……飛び出していったって、今できることなんて一つもねえんだ……応援が来るまで待つしか、ねえ……!」

息を殺し、気配を殺し、水の中に紛れて3人は様子を伺う。自分達を守るために戦っていたイレイザーヘッド先生が、腕を折られて顔面を叩きつけられても、決して自棄は起こさなかった。

逃げるにしても、戦うにしても、今この場で実行するのは現実的ではないのだから。そうして待ち続けていくらかの時間が経った頃。黒霧が死柄木の元に現れ、彼に何かを告げた。その報告を聞いた死柄木は首をガリガリと掻き始める。話の内容は、『13号を行動不能にすることは成功したが、生徒の逃走を許した』というものであった。

助かる？

誰がこの場を抜け出したのかは知らないが、じきにその生徒から話を聞いた先生方が駆けつけてくるだろう。3人は少なからず喜んだ。「帰ろうか」と言う死柄木の言葉が、更に彼らの気を緩めた。

「でも、その前に」

「……あ？」

「平和の象徴の誇りと矜持を……少しでもへし折って帰ろう！」

死柄木の手が蛙吹に触れる。レーザーヘッドが触られた箇所を崩されるのを、3人は見ていた。あれが今度は蛙吹の頭で引き起こされる。

やばい！やばいやばいやばい！！

「SMASASH!!」

緑谷は動いた。蛙吹を助けるため、腕の自壊も辞さずに個性を発動し死柄木に拳を放つ。個性によって超強化されたパワーによるインパクトが、爆風と共に煙を放った。

同時に、違和感を感じ取る。全力で殴りつけたのにも関わらず、腕が壊れていなかったのだ。力の制御に成功した？オールマイトの力に耐えられるようになった？この土壇場で限界を超えた？煙が晴れて大男の腹に突き刺さる自身の拳を見るまで、緑谷はそんな楽観的なことを考えていた。

「なっ……！無傷だと……!？」

「驚いた、スマッシュ……オールマイトのフォロワーかい？ま、そこで大人しく友達が崩れる様を見ておきなよ」

「くそ野郎！やめろよお！やめてくれえ！」

恐怖で動けない蛙吹の頭に、死柄木の五指がピトリと触れる。その瞬間、緑谷も峰田も蛙吹の死を覚悟した。だが、その時は訪れない。レーザーヘッドの双眸が、なけなしの力を振り絞って死柄木の個性を抹消していたのだ。

「ほんつとカッコいいぜ、レーザーヘッド。まあそれも、全部無駄な足掻きなんだけどな……何だ？これは……赤い風？」

「っ……！死柄木弔！警戒を！」

「鳴神さん!？」

「鳴神イーだめだ、こつちにきちや……!?」

赫い風が吹き、この場にいる全員を撫でた。最大限の警戒を求める黒霧の要請に応じ、死柄木が脳無を風上に向かわせようと指示したその時。

バチリ、と稲妻の弾ける音がした。瞬間、第六感が警報を鳴らす。

死柄木の目の前に現れたのは赤い風を従え、赤い稲妻を纏う少女。

……だめだ。コイツに関わっちゃいけない。

「黒霧、ゲート開け。帰るぞ」

「……いいのですか？平和の象徴の矜持をへし折るのでは？」

「んなもん中止だ！早くし……があつ!？」

「死柄木弔!おのれ、なんとという速さ……!」

己の直感を信じて、黒霧に帰り支度をさせようとした死柄木。問答をしている間に、目にも留まらぬ速さで少女の足が死柄木の腹を蹴り抜いた。うめき声と嘔吐した胃液を残滓として残り、死柄木は遙か後方へと吹き飛ばされていく。

黒霧も、脳無も、緑谷達3人も。その瞬間を呆気に取られて見ている。敵2人は、新たな強敵の出現に。3人は、あまりにも普段と様相の違う風華の姿に。それぞれがそれぞれの理由で、この場に現れた風華のことを見据えていた。

「2人、か……まあいい。そう時間はかからない」

「ゲホッ！舐めやがって……おい脳無！聞こえてるならソイツを殺せ！それはもう残酷になー!」

「……!!」

「操り人形……邪魔だ。どけ」

死柄木の指令に応えようと、風華へと視線を向ける脳無。風華は脳無が動き出すよりも先に、左手に持つ高周波ブレードを振るった。赫雷を載せた風の刃が、脳無の身体を真っ二つに斬り裂く。

「は……?脳無を斬った?嘘だろ?」

「鳴神さん……?」

何の躊躇いもなく脳無を二つに裂いた風華の姿に、緑谷が困惑の声を漏らした。

さつきから、彼女は様子がおかしい。もともと表情に乏しかった顔はより鉄面皮のように動じず、こちらの声にも反応を見せない。そもそも、彼女の扱う電気は翠緑の色をしていたはずだ。こんな鮮血や夕焼けを思わせるような赤色ではなかった。

それに何より、こうして背中を見ているだけでもひしひしと伝わってくる怒り。下手に声をかけたりアクションを取ったりすれば、自分達でさえも彼女の標的となってしまうのだろうと、嫌な確信を持ってしまった。

「鳴神……お前、大丈夫なのかよ……?」

「……峰田ちゃん、今は静かに」

二つに裂かれた身体が、再び組織同士を絡め合って復活する。具合を確かめるように首をゴキゴキと鳴らし、脳無は風華の方を見て雄叫びを上げた。

「再生するのか……面倒だな」

「……!!」

「あつ……そ、そうだよ！脳無の真価は『超再生』と『ショック吸収』の複合個性に加えて、オールマイト級の超パワー！圧倒的タフネスを誇る、サンドバッグ人間なのさー！」

「なら……死ぬまで、殺す」

風華は突き進む。赫災領域レッドゾーンに入った以上、彼女は決して後戻りはできない。

## 赫き風を止めるのは

風華が自分の進む道を選ぶに当たって、『君沢の悲劇』は大きなターニングポイントとなった。

大勢の人が狂い、死んだこの事件。当時僅か5歳の少女が生き抜くには、あまりにも苛烈過ぎる地獄であった。この地獄の中で風華の心を支え続けたのは、幼い妹をこんなところで死なせたくない、護りたいという気持ち……だけではない。

風華の心を強く支え続けてきたもの……それは、煮え滾るような『怒り』であった。

この惨劇を引き起こした敵への。自分のことしか見ようとしないう生き残り達への。我が身可愛さに何の仕事もしないヒーローへの。悪意と殺意、そして独善の蔓延の中で芽生え育まれた怒りは、風華の瞳と同じ色をしていた稲妻を赫く染めた。

悪意がその手を伸ばすなら、その手ごと撃ち落としてやろう。生き残り達が自分のためにしか動かないのなら、自分もそうしよう。ヒーローが助けることを拒むなら、己の手で安全を勝ち取ろう。

頼れるのは唯一、己の力だけなのだから。

く

脳無が遠吠えを上げて風華へと迫る。音を置き去りにする速さの突進は、並の者であればそう認識することすらできなかつただろう。だが、風華は光の速さで動くことができる。

「……!!」

「遅い」

突きつけられた拳を『雷上動』で避け、首筋をブレードで一閃する。胴体から斬り離された首が、血潮に押し出されて宙を舞う。切り口から伸びた肉が離れた首を掴み、元の姿へとくっ付ける。斬撃によってできたはずの傷は瞬く間に塞がり、脳無は何事もなかったかのように再び風華を向く。『超再生』は伊達ではないらしい。

鋭いパンチのコンビネーションが、ガトリング砲のように連発される。風華はそれを回避し、時にブレードで受けて拳の弾幕をいなしていく。その間に何度かカウンターの電撃が脳無を襲ったが、まるで効いていない。どうやら『シヨック吸収』は、電撃のダメージも低減してくれるようである。

赫炎領域レッドゾーンに入って出力が大幅に向上した電撃でも無意味にされてしまう事実には、風華が忌々しそうに舌打ちをした。

「面倒な個性だ。なら……これはどうだ？」

「チツ……マズいな。脳無、絶対に何とかしろ！」

『吹き荒ぶ大風』……塵も残さず、消え失せろ」

危険を敏感に察知した死柄木が、脳無に避けろと指示を出す。しかしあと一歩遅かった。

電気がダメなら、今度は空気。風華の右掌に赫い風が収束し、渦を巻いていく。幾重にも束ねられたカマイタチが放たれ、脳無の身体を斬り裂きその刃のように赫く染め上げる。まだまだ再生はされているが、やはり斬撃は有効なようだ。

少しずつ、脳無の再生は追いつかなくなってきた。最初は腕、その次に胴体ときて、足と頭。その命を詰めていくように、少しずつ。赫い刃は脳無を抉っていく。だんだんと原型を留められなくなっている脳無の姿を見て、風華の口元がニヤリと歪むのを緑谷は見た。

「鳴神さん……これ以上はもうダメだ……！」

「緑谷ちゃん、静かに……！」

止めなければならぬ。あの笑みを見た瞬間に、緑谷はそう確信した。無意識的に動こうとした彼を蛙吹が制止する。自分達が出た行ったところで、あの敵のように削ぎ斬りにされるだけだ。そもそも止める手立てもないのに割って入ってもしょうがないという蛙吹の言葉に、緑谷は頷くしかなかった。

「な、なあ梅雨ちゃん……止める手立てがあるなら割って入っていいらんだろ？」

「そうね……でも、どうやって」

「峰田君の個性……！上手く使えば、確かに鳴神さんを止められる

かもしれない……!」

二人のやりとりを聞いていた峰田が意見する。自分の個性ならば、風華を拘束して止めることができるかもしれないと。水難ゾーンでも待ち構えていた敵を退けるのに貢献した彼の個性なら、確かにいけるかもしれない。

それでいこう。緑谷も、蛙吹も風華を止める覚悟を決めた。

そもそも、現状はプロヒーローですら敵わなかった敵を風華が相手しているというものである。そこまで躍起になって止めるべきものではないのではないかと、聞いた者なら言うかもしれない。だが、風華の様子は明らかに異常だ。敵に強力な再生能力があるからまだそうなっていないだけで、もう並の敵なら何百……いや何千回は彼女に殺されている。

それではいけない。鳴神風華は英雄高校ヒーロー科の生徒、将来は社会を守り人々を救うヒーローとなるべき存在なのだ。その同輩として、彼女が敵の殺害というヒーローとしてやってはいけない行為に手を染めようとしているのは看過できない。

絶対に、止める。千載一遇のチャンスが来る瞬間を、固唾を飲んで見守っていた。

「……!!」

「まだそんな力が残ってたか。いい加減、面倒臭くなってきたな……」  
無限の斬撃を力任せに掻い潜り、這う這うの体で脱出を果たした脳無。みてくれこそ元のように戻っていたが、その所作にはイレイザーヘッドを完膚なきまでに叩き潰したときのような、凄まじいまでの力強さは見当たらなくなっていた。

脳無は動かない。死柄木から受けた風華を殺せという指令は今もまだ有効である。今までなら、再生が完了すれば脳無は直ちに命令の再履行を行なっていたはずだ。それができないということは、死柄木が人間サンドバッグと呼称する程のタフネスに限界が来ているということに他ならなかった。

赫き風を従えて、風華は脳無へと歩み寄る。大き過ぎる怒りを孕んだ足が一步を踏み出す。その度に空気がぬるりと肌を撫で、嫌が応に

も恐怖心を掻き立たせた。そんな恐怖心を振り払い、緑谷は風華に向かって峰田の小さな身体を投げつけた。

脳無はもうまともに動けない。死柄木と黒霧は状況を離れた所から静観している。倒れていたイレイザーヘッドは、風華が戦っている間に集まってきた他の生徒達が、隙を見て救出した。今ならば邪魔は入らない。風華を止めるチャンスが来たと、緑谷は信じて峰田を行かせた。

「今だ……！頼んだぞ、峰田君……！」

「おおお！やってやる、やってやるぜえ！」

「頼んだわ、峰田ちゃん……！」

投げられた峰田は怒号を上げながら風華に迫り、事前にもいでおいた大量の頭の房を投げつけた。緑谷と蛙吹では、この房はくつついてしまつて投げられない。だからこそ、この役目は彼にしか背負えないものであった。

死柄木は動こうとした黒霧を制止する。現状脅威として強過ぎる風華を形や成否はどうあれ止めてくれるというのは、彼にとつても大きなプラスだったからだ。

「ぐっ……!?!」

「へへ、捕まえたぜ鳴神い……！ずいぶんと視野が狭くなつてるみてえだなあ……！」

「くそ、離せ……！邪魔だ！」

「げぶっ！誰が……離すかあ……！オイラはなあ！お前が暴走するところなんて、これ以上見たかねえんだよお！」

もぎもぎを貼り付けた地面に押し倒し、風華を拘束してから峰田は説得を開始する。殴られても、赫雷に焼かれても構いはしない。もぎもぎの拘束力はかなりのものであるから。位置を固定されて『雷上動』を使えない今、風で地面を抉つて地面ごと離れるでもしなければ風華がこの拘束を逃れることは叶わないだろう。

そして、今の風華にはその方法が思い当たる程の判断能力が無いことは分かっていた。判断能力があったなら、そもそもこんな拘束はされる前に避けていただろうから。

不純な動機でヒーローを目指し、それ故あらゆる女子から忌み嫌われていた自分を初めて肯定してくれた人が、ヒーローにあるまじき行為を続けているということに耐えられなかったから。

「お願いだよ……オイラのヒーロー！こんな……！こんなことやめて、正気に戻ってくれよ……！」

「が……！あ、ああ……！」

「苦しんでる!?!」

「きつと、訴えが届いているんだわ……！」

「鳴神いい！こんな……こんな怒りなんか呑まれてんじやねええ!!」

「ああ……！あ……ああああ!!」

大音響。弾ける稲妻の音よりも、吹き荒れる風の音よりも大きく、USJのドーム全体を震わす轟音が響いた。次第に声が掠れて小さくなっていく。それと共に、迸る稲妻の色が赫から翠緑へと変わっていく。やがて稲妻は姿を消し、空気は元の色を取り戻した。

赫災領域を脱したことで、それまでの大暴れのツケが回ってきたのか。見るもの全てを恐れ震わせるような怒気は消え失せ、風華は気を失ってしまっていた。なんとか手遅れになる前に後戻りさせることができた、峰田は安堵の息を吐く。しかし、そう喜んでばかりではいられない。

「はは……大したもんだよ。あんな電気がバチバチしてる中に飛び込むなんて正気じゃできない。流星に、卵とはいえヒーローだな」

「て、てめえ！鳴神は崩させねえぞ！」

「ダメージでまともに動けないくせに……強がりも程々に……!?!」

風華が気を失ったことを確認し、死柄木はこれ幸いと彼女を崩すべく行動を始めた。峰田が阻止しようと間に立ち塞がるも、赫雷に焼かれた身体では立っているだけで精一杯。当然のように死柄木が無視して素通りしようとしたその時、緑谷が自身の超パワーを解放して飛び出していった。水飛沫をモ口に浴びた蛙吹が目を瞑る。

「二人から、離れろ……！」

「スマッシュの……黒霧」

「ええ。そう簡単に邪魔はさせませんよ！」

身体を壊さないように、脳無を殴った時のイメージを反芻して腕に個性を発動させる。躍動するパワーがオーラとなつて赤く腕にまとわりつき、力を与える。それを振りかぶったところで、黒霧の靄によつてワープさせられた死柄木の五指が緑谷の目の前に現れた。

まずい。本格的にそう感じるも、着地していない今は勢いを止められない。このままぶつかつてあの五指に触れられ、原型すら残さず崩させられてしまう。最悪の想像が脳裏を過つたその瞬間、突き出された腕を蛙吹の長く伸びる舌が弾き飛ばした。

「梅雨ちゃん！」

「危ないところだったわ。緑谷ちゃん、凄い勢いだったけど足は大丈夫？」

「なんとか……個性の制御に成功してたみたいだ」

「じゃあ、逃げるわよ。鳴神ちゃんも峰田ちゃんも頑張つてたもの、今度は私たちの番」

死を免れてなんとか着地した緑谷は、立ち尽くす峰田の元へと跳んで彼を抱えて後退した。少し遅れて蛙吹も合流する。緑谷が飛び出した時の水飛沫に紛れて、ちやつかりと近くまで来ていたようだ。

2対2。数の上では互角だが、こちらは怪我人と気絶者を抱えているハンデを負っている。やられたという13号とイレイザーヘッドを他のみんなが運び終えたなら、応援に来てくれるかもしれないが。いつ来てくれるか分からない以上、そこまであてにはしてられない。あまり分のいいといえる状況ではなかった。

「……黒霧。ゲート開ける。帰る」

「……よろしいのですか？平和の象徴の矜持を砕くというのはもう諦めるのですか？」

「流石にもう無理だろ。あの女生徒と脳無が戦つてる間に時間が経ちすぎたし、もういつプロが来てもおかしくない。肝心のオールマイトに会えなかったのは残念だがな」

「そうですね。では雄英のみなさん、さようなら」

靄が広がり、ワープゲートを作り出す。二人を飲み込んだ靄は残滓

すら残さず消え去り、辺りにはヒーローと倒された敵を残すのみとなった。

戦闘が終わった。その事実深く安堵し、へなへなと地面に座り込む緑谷と蛙吹。しかしその安心はまやかしであると語るかのように、近くで新たな轟音が鳴る。

「まったく、自分が情けない……だがもう大丈夫！ 私達が来た！」

「あ、オールマイト……敵、もう帰りました……」

「へ？」

出入り口の扉がこじ開けられ、中から怒り心頭といった様子のおールマイトが現れる。遅れて雄英に勤務する大勢のプロヒーロー達の姿も現れた。黒霧の妨害を掻い潜り、外に脱出した飯田が呼んで連れてきたのだ。

だが、少しタイミングが遅かった。既に戦闘は終わり敵は撤退したと緑谷が告げると、オールマイトは状況が飲み込めないといったように素っ頓狂な声を上げたのだった。

## 後始末

「まさかこれだけ派手に侵入されて、逃げられちゃうなんてね……」  
「本当に、なんてことだ……！」

集まってきた教師陣が、既に首魁の消え去った現状を前にして悔恨を漏らす。日本一のセキュリティを誇るとも言われる雄英に進入され、生徒に危害を加えられ、信用に大きな傷を付けられた。

完全に、虚を突かれた。しかし、そう悲観してばかりでもいられない。彼らはプロヒーローである前に教師。子どもの命を預かる者として、生徒の安否を確かめなければならなかったから。

「意識不明の彼女と……全身に火傷と裂傷を負っている彼を除いて、ほぼ全員無事か」

今回、敵の襲撃を受けたA組一同。死柄木や黒霧に脳無といった中心人物を除けば殆どがチンピラ同然の雑魚だったということもあり、せいぜい上鳴の頭がショットしたままというくらいで、ほぼ全員無傷で生き延びることができていた。通報を受けてやって来た警察官が、連行されていく敵の数を見て感心するように言う。

「刑事さん、相澤先生は……」

「両腕の粉碎骨折に、眼窩底骨をはじめとした顔面骨折。幸いにも脳の損傷は無かったようだが……眼の方には何かしらの後遺症が残る可能性がある……だ、そうだ」

「けろ……」

13号は自身のブラックホールに巻き込まれたことで背中から上腕部にかけて酷い裂傷を負ったが、命に別状はなし。リカバリーガールの治癒で十分に治せる圏内であった。

峰田は大量出血により貧血を起こしてしまっているが、傷自体は幸いそこまで深いものではなかったので治療可能。ただし、裂傷はともかく電流痕は残ってしまうとのことだった。

風華に関しては、身体の方に目立った傷はないどころか無傷の健康体そのもの。体力切れのために、身体が休眠状態に入っているのだからという診断が成された。点滴でエネルギーを補給していけば、じき

に目覚めるだろうと言われている。

「でも、やっぱり心配だよな……」

「うん……私、見ちゃったんだ。風華ちゃんがでっかい敵と戦ってポコポコにされてたところ。自分のことで精一杯で応援に行けなくて……空気が赤くなつた途端に無傷になつてたからビツクリしちゃつた」

「あれ、鳴神の仕業だったんだな……」

「……先生に聞いたけどよ、あの赤い空気はドームの外にまで広がつてたらしいな。こつちに來るのが遅れたのは、アレの原因を調べていたからでもあるそうだ」

風華が引き起こした赫い風のこととは、警察以外の全員がその光景を把握していた。肌を撫でる風から感じた、あまりにも大きな怒り。思い返すだけでも恐ろしいと、最も間近で風華を見た耳郎と八百万が身震いする。

「事情聴取をいきなりするわけにもいかないし、生徒のみんなは教室に戻っておいてくれ。校長先生、念のため校内を隅々まで見て回りたいのですが、よろしいですか？」

「もちろん、頼んだよ塚内君！とやかに言われることもあるが、権限は君たちの方が上さ！捜査は君達の分野！」

よろしく頼む、そう言つて校長は塚内と呼ばれた警察官が去るのを見送る。その後ろ姿を見て、生徒達も教室に戻るためバスに乗り込んだ。揺れ動く車内で、後で入院した二人のお見舞いに行こうなどと話があった。

「塚内君、手伝うよ」

「オールマイト、助かるよ。まあ正直言つてあんまやることないだろうけどね」

USJを出て付近を搜索していた塚内に、彼の手伝いをしようと同じく出て來たオールマイトが声をかける。ただ、不審な点がないか見て回るだけなので、あまり手伝いが必要なことはない。

なので今回現れた敵について、オールマイトなりの見解を聞かせてほしいと塚内は言う。生徒達からいくらか聞いていた情報を元に、

オールマイトは少し考えてから答えた。

「相澤君がやられてから、鳴神少女があのお脳味噌の敵……脳無とかいう奴と戦うまでをずっと見ていた子が言ってたんだ。なんでも脳無の個性を自慢げに話したり、相澤君に対してもっともらしい暴論を捲し立てたりしていたらしい……」

「それは、まあ……」

思いついたって普通はやらない大胆な襲撃。コマを集め、少人数が孤立する時間帯を調べ上げ、周到な用意がされていたのにも関わらず。個性不明のアドバンテージを簡単に放棄し、少し都合が悪くなる途端に苛つき始める。

もつともらしい稚拙な暴論に、自分の所有物の自慢。なんでも思い通りになると思い込んでいる思考や襲撃を決行した事実。それらの少ない情報を鑑みて、オールマイトは今回の主犯格……死柄木弔と呼ばれた男をこう評した。

「幼見的万能感の抜け切らない『子ども大人』か。成る程、力を持った子ども……見方によってはとてもなく厄介な存在だね」

「話を聞く限り、今回の襲撃に参加していた敵はどれも路地裏に潜んでいるようなチンピラだったそうさ。それらが全て、あの男の稚拙な思想に賛同して来たのだと思うと……頭が痛くなるね」

死柄木弔が『子ども』大人ということとは。子どもから真の大人へと成長する余地があるということ。もしもアレに優秀な指導者プレインでも付いたりしてしまったら……考えたくもない可能性に、オールマイトは頭を抱えた。

「今回は災難だったけど、プロヒーローの尽力のおかげで生徒達はみんな無事だった。それだけが幸いだよ」

「……それは違うよ、塚内君」

「ほう？」

生徒達もまた戦い、身を挺した。

まだ一年生の4月。こんなにも早く実践を経験し生き残り、大人の世界を……恐怖を経験したクラスなどあっただろうか。

敵も馬鹿なことをした。このクラスは必ずや強いヒーローになる

ぞと、オールマイトは確信するようにそう言った。それを聞いて、塚内はその将来を思い浮かべてフツと笑う。

「ずいぶんと買ってるんだな」

「もちろんさ。……そうだ、鳴神少女が目を覚ましたら脳無とやらについて話を聞かないといけないな」

「個性の複数所持……親の個性を両方引き継いだとかなら可能性としてあり得るはないが……」

オールマイトが突入した時、棒立ちのままピクリとも動こうとしなかった脳味噌の敵、脳無。風華がほぼ瀕死まで追い込んだからこそ生徒達への被害はなかったが、イレイザーヘッドを瀕死の重傷に追い込んだ化け物。しかも元々は、オールマイトを殺すために用意された秘密兵器だったという話ではないか。

自分を狙い撃ちにした作戦。複数所持した強力な個性。風華の言っていた『操り人形』という言葉。倒したはずの「宿敵」を思い浮かべ、その想像を振り払うようにオールマイトは首を振った。

……巨悪はもう、倒されたのだ。

そう。己の身体を犠牲として、オールマイトはかつて裏を牛耳っていた巨悪を討ち取った。もう、奴の毒牙にかかり不幸になる人間は決して生まれ得ないのだ。頭の中を過った悪い想像を、オールマイトは奥底へとしまい込んだ。

）

「完敗……だったな。脳無は倒されたし、手下共も瞬殺だった。オールマイトには、エンカウントすらできなかった」

『今回は見通しが甘かったね』

『うむ……ヒーローの実力を舐めていたな』

日本のどこかに存在する、死柄木の隠れ家。黒霧のワープによってそこに帰還した死柄木は、カウンターに置かれた目の前にあるモニターから聞こえてくる声の主と話をしていた。

『ところで、脳無はどうした？回収はできなかったのか？』

「回収は断念せざるを得ませんでした。多くの子ども達に警戒されている中で、そこまでの時間は取れなかった……」

『せっかく強い個性を付けて、パワーもオールマイイト並にしたのに。残念だなあ……まあ、嘆いても仕方ないか』

「パワー……：そういや、脳無を倒した女生徒もえげつない出力の個性だったけど、一人オールマイイトような奴がいたな」

死柄木のその言葉に、モニター越しに映る声の主は興味深そうに『へえ……』と呟いた。その後で、その二人はどんな生徒だったのかと情報を出すように死柄木へと促す。

「一人はスマツシユとか言つて、オールマイイトの真似事をしていた……もう一人、脳無を倒した奴は赤い風と電気を操っていた……今思いついても冷や汗が出るぜ」

あの邪魔が入らなければ、脳無は無事だったしオールマイイトも殺せたかもしれないな。そこまで残念でもなさそうに死柄木は言った。

『悔やんでいても仕方がない！今回の失敗だって決して無駄にはならない！精鋭を集めよう！じっくり時間をかけて！』

『我々は自由に動けん。だからこそ、貴様のようなシンボルが必要になるのじゃよ、死柄木弔』

『次こそは……君という脅威を知らしめよう！』

決して見えることのない水面下、悪意は新たなる破壊に向けてその力を蓄えようとしていた。

く

翌日。学校は再びの襲撃と生徒の心身の疲労を考慮して臨時休校となった。緑谷、耳郎、八百万の3人は、たまたまできたこの休みを利用してある病院の待合室にやって来ていた。

「峰田君と鳴神さん、ここに入院してるんだよね」

「そのはずですわ」

「大丈夫かな……特に鳴神。気落ちしたりしてないといいけど……」

「お、なんだお見舞いか？」

看護師に面会が可能かどうかの確認をしてもらうために待っていると、包帯で全身をぐるぐる巻きにした峰田が現れた。

いつもの峰田ならば、女子二人と共にやって来た緑谷に対して凄まじいまでの怒号をぶつけていただろう。しかし、今の松葉杖を支えに歩く彼にはそこまでの気力はなかったようだ。

「鳴神なら今は会ってくれないぜ。オイラに怪我を負わせたこととか、敵を普通に殺そうとしたこととかで、オールマイトに昨日こたま怒られたみたいだからな」

「オールマイトに？そりゃあキツイな……」

「オイラが会った時にはめちやくちや謝ってきたし、オールマイトに叱られてから少しは立ち直ってるみたいだけど。まだまだやったことと折り合い付けるにはかかるだろうな……あの暴走の記憶、思いっきり残ってるみたいだし……」

「それもキツイですわね……」

会えないというのなら仕方がない。緑谷は確認を終えて戻ってきた看護師からペンと紙を借りて、風華に手紙を書いた。宛名にはもちろん、耳郎、八百万、峰田も連名で。

『君が敵を倒したから上鳴君や梅雨ちゃんは助かったし、相澤先生も脳無に殺されずに済んだ。確かにやり過ぎではあったかもしれない。それでも、僕も含めて誰も動けなかったあの場で、君がいなければ少なくとも二人は殺されていた。どれだけ悔やんでいるのか知らないけれど。君は、ヒーローだ』

手紙が、心が届くかは分からない。罪悪感に潰されて、ヒーローを目指すのをやめてしまうかもしれない。それでも、彼女はまた学校に戻ってきてくれると信じて、緑谷は病院を後にした。

## 決意を新たに

敵によるUSJ襲撃から2日後。個性研究所の中にある自室の布団で、風華は目を醒ました。まだまだ夜は冷える季節だというのに、汗で全身がぐっしりと濡れている。どうやら、悪い夢でも見ていたらしい。

時計を見てみると、針はAM4:00を指している。風華が布団に入ったのがAM2:30頃であるので、せいぜい一時間半程度しか寝ていないことになる。頭がぐらぐらと揺れているように痛いのはそのせいだろうと風華は考えた。

「わたしは、ヒーロー失格……」

頭を枕の上に戻し、昨日一昨日にあつた出来事を思い返す。ボンレスハムのような敵に瀕死にさせられてから、ずっと抑えていた怒りを爆発させてしまった。敵に対して私刑のような真似をして、あまつさえ仲間にも手を掛けてしまった。八百万と耳郎が治療をして助けていなければ、脳無に再生能力がなければ、今頃自分は殺人犯となっていただろう。

悔しくて、同時に情けなかった。『君沢の悲劇』以来ずっと、個性をひけらかし暴れる敵に、いざという時に我が身かわいさに勝手に動くことしかできない名ばかりのヒーローに怒りを覚えていた。だが、風華は今回の件で、自分にそんな奴らに怒る資格はないと思ってしまうた。

個性を暴走させて暴れ回り、躊躇いなく敵の命を斬り捨て、それ止めようとしてくれた仲間すら手に掛けた。こんな馬鹿な女が、どうしてオールマイトのようなヒーローになるとほざけるのだろうか。この有様では、己が忌み嫌い、怒りを向ける者達と同じではないか。

『君がやったことは、確かにヒーローとしては失格だ。だけど、同時に忘れないでほしい。君が暴走していた中でも、確かに君に助けられた者がいるということ。君はまだ学生で、成長できる余地がまだまだたくさんあるのだということ。これからまた、その怒りと向き合いたくならヒーローとなる道を探ってほしい。私は、君は立派な

ヒーローになれると信じているよ』

「オールマイト……本当に、ごめんなさい……」

一昨日、目を醒ましてから最初に聞かされたオールマイトによる説教。憧れのヒーローに叱らせてしまったことを、風華は申し訳なく思っていた。病室を出る前、最後に見せてくれた笑顔が鮮明に思い返される。こんな愚かなことをしでかした生徒を、まだ信じてくれるということが申し訳なく思うと同時に嬉しかった。自分にそこまですべてオールマイトに合わせる価値などないと思っただけでも。

これからどうしよう。風華は頭を悩ませる。

相澤先生は、見込みのない生徒は容赦なく除籍する先生だ。USJでの自分の行動は、見込み無しと見做されても全くおかしくない。ヒーローの本質である人助けを完全に無視していたばかりか、敵を殺す気で戦っていたのだから。

除籍されるかどうかは、明日学校に行けば分かるだろう。退院はできたが今日は大事をとって学校を休むように言われているため、今日は風華が登校することはできないからだ。

「はあ……」

働かない頭で考えたところで、アイデアや結論などが出るわけがない。このまま二度寝できるわけでもないのに布団に入っただけでもしょうがないと、風華はいつもの黒いレインコートを羽織って外へと出かけていった。

く

まだ朝日の登っていない早朝の道を、風華は特にアテもなく歩いていた。ただの散歩だし、最初からどこへ行くことも考えてはいなかったのだが。

いつもなら行手を阻んでくる横断歩道の信号機が止まっていたり、車道に一台も車が走っていなかったり。通り慣れた道であるはずなのに、昼間とは全く違うのが少しだけ面白かった。

「……あれ？勝？」

「ああ？誰だてめエ……鳴神か？」

河原まで移動したら、奥の方から見覚えのある顔が近付いてきた。逆立った金髪に、自分以外の全てを見下しているようなキレイな瞳。風華の覚えている人の顔の中で、異形系でもないのにここまで人相の悪い人間は一人しかいない。

近付いてくる男に声をかけると、彼は足を止めて風華の顔を見た。そして、一瞬だけ考えてから風華の名を呼ぶ。普段は髪を三つ編みにしている風華だが、今は特に何も髪型をいじらずにいたので少し分かり辛かったようだ。

「……何してたの？こんな朝早くから」

「……走り込みだよ。もうすぐ雄英体育祭が始まるからな。いつも以上に負荷かけてんだ」

特段返事に期待はしていなかったが、風華の予想に反して爆豪は反発することもなく普通に返事をした。雄英体育祭に向けて、走り込みをしているところだったらしい。「ちようどいいからお前も付き合え」という言葉に、特にすることもなかった風華は応じることにした。「俺とてめエで選手宣誓があるからな。本番までに何を話すかちゃんと考えとけよ」

「わたしが？」

「……入試主席がやるのが伝統らしい。今年は俺とてめエの2人だったから、選手宣誓も2人でやるってわけだ」

「……そうかい。務まるとは、思えないけどね」

弱々しくそう呟く風華。USJでヒーローにあるまじき行為をしかした自分に、雄英を代表する資格など有るのだろうかと考えていた。そんな考えを察したか、爆豪が口を開く。

「……USJのこと、考えてんのか」

「……うん」

「ウジウジすんのも大概にしろよ。てめエはデクじゃねえんだからよ」

爆豪は語る。

入試で圧倒的一位を取るはずだったのに、風華に並ばれていてプラ

イドを傷付けられたこと。

個性把握テストで、自分の出した記録を軽々と上回られて悔しさに歯噛みしたこと。

今まで無個性でモブの一人でしかなかったはずの緑谷に戦闘訓練で負け、風華にも瞬殺され、アイデンティティが揺らいだこと。

轟や風華の個性を見て、自分では敵わないのではと思ってしまうこと。

八百万の評を聞いて、今まで自分が井の中の蛙であったことを思い知らされたこと。

USJで風華の<sup>レッドゾーン</sup>赫災領域に入れられて、感じた怒りに恐ろしさを覚えたこと。

プライドの高い彼がこんな弱音のようなことを言うなんて、風華は想像すらしていなかった。

なぜこんなことを自分に聞かせたのかと風華が問うと、爆豪は恥ずかしそうにぼりぼりと頭を掻きながら答える。

「……雄英に入ってから、俺のプライドは傷付けられてばかりだ！特にためエにだよ、鳴神！俺のプライドを簡単に粉々にして、井の中の蛙だっことを教えたためエが！こうしてウジウジしてるのを見るのが嫌だったんだよ！」

「勝」……そんなことを、思ってたんだ」

意外過ぎる告白に、風華はそんな単純な感想しか言えなくなる。周りを見下し、自分がトップに立つと公言して憚らない爆豪が、自分を励ましているということが信じられなかった。だが、そんな風華の感想など知らないとばかりに爆豪は言葉を続ける。

「明日、ちゃんと学校来いよ。今の俺よりも遥かに強いてめエが、くだらねえことで悩んでるなんて認めねえ。俺がNO.1になるつっ—道筋にはなあ！既にてめエを超えることも含まれてんだ！敗北感だけ植え付けておいて、勝ち逃げするなんて許さねえからな！」

『誰が何と言おうとなあ！お前はオイラのヒーローだ！』

『君のおかげで助けられた命があるということは、忘れないでほしい』  
「ああ……」

思い出される昨日の出来事。

オールマイトが帰った後、同じ病院に入院していたという峰田が見舞いに来てくれた。全身に痛々しく包帯を巻いた彼は、風華に付けられた傷痕に決して文句や恨み言を言わず、自分が風華に正気を取り戻させたのだと誇っていた。

『オイラのヒーローを取り戻したただけだ』

そう言っつて、誇らしげに自分の病室に帰っていく彼の姿はまさしくヒーローそのものであった。

面会しようとしないう風華のために、わざわざ見舞いに来てくれた緑谷、八百万、耳郎の3人は手紙を残してくれた。手紙には暴走したことで自体は咎めつつも、心配する文言が書かれていた。敵に人質に取られていた上鳴が、脳無にやられた相澤先生が助かったのは、他でもない風華が動いたからこそだと言っつてくれていた。

それとはまた毛色が違うが、落ち込んだ様子の風華を見て爆豪も彼女を自分なりに励まそうとしていたのだろう。不器用な言い方だが、それを口にする表情はこれからも学び舎を共にし、競い合うライバルを心配するものであった。

……みんな、わたしを心配してくれているんだ。

そうだ。飯田も、麗日も、蛙吹も、他のクラスメイト達も。風華のことを案じてくれている。風華のために心を砕いてくれている。それが堪らなく嬉しくて。気が付けば、風華の目からは涙が止めどなく溢れていた。

「おい、大丈夫かよ。必要なら使え」

「……ありがとう。本当に……本当に、みんなはヒーローだね」

その働きで、その存在で、人々を助け安心を与える。それが風華の思うヒーローの姿。風華は今まさに、クラスメイトのみんなから安心を貰っていた。

借りたハンカチで目元を拭いて。涙が引つ込んだ頃には朝日が昇り、空が紫色に輝いていた。

「ありがとう、勝己。おかげでもう一度、ヒーローを目指す決心がついたよ。みんなの心遣いのおかげで、わたしは立ち直れた。だから……」

みんなの心に恥じないヒーローになってみせるよ」

「ケツ、やつとそれらしくなりやがったな」

じゃあ俺は行くぜ。そう言つて、爆豪は再び走り出していった。風華の手に返しそびれた自分のハンカチを残して。しようがないから洗つて明日返そうと、そう思うのだった。

彼もまた、己と向き合つて自分を見つめ直した。そして、砕けたプライドと共に再び夢に向かつて歩むと決めたのだ。

粗暴で性格は悪く、変なところでみみっちい奴。それでも、彼は確かにヒーローであった。過ぎ去つていくその背中に、風華は臚げながらオールマイトを見た気がした。

「……朝日、綺麗だなあ」

明日、ちゃんと学校に行こう。オールマイトのようなヒーローになる、そのためにちゃんと勉強をしよう。みんなに改めて「ごめんなさい」と「ありがとう」を伝えよう。そう風華は心に決めた。

心を閉ざす靄はもうない。今の風華の心は、この昇る朝日のように晴れやかであった。

## 個性研究所く体育祭に向けてく

腰まで届く金髪はしつかりと三つ編みされ、枝毛の一つも出ていない。身に纏う制服はワイシャツからブレザー、スカートに至るまでしつかりとアイロンがけされており、シワの一つもない。一点の曇りもない模範的な学生の姿で、風華は2日ぶりの教室の門をくぐった。自分の背丈の2倍ほどもありながら大した重さを感じないドアを開くと、既に登校しているクラスメイトが何人か見えた。それら全員が、教室内に現れた風華のことを凝視している。

「おはよう、みんな」

「おはよう！もう体調は大丈夫なのかい!？」

「鳴神さん、おはよう」

「なんか凄い久しぶりって感じる！」

「風雷神の帰還……」

それぞれがそれぞれの言葉で、体調の心配をしながら風華の復帰を喜んでくれている。とても心配してくれているというのが伝わって、風華はなんだかむず痒い気持ちになっていた。気恥ずかしさに顔を赤らめる風華の姿を見て、何人かの男子がウツ、と胸を打たれるような衝撃を受ける。

「おはよう、HR始めるぞ」

「おはようございませすー!」

USJ襲撃の後にあつた事情聴取のことや、昨日学校であつたことなどをみんなに聞かせてもらっている内に、HRの始まりを告げるチャイムが鳴る。同時に相澤が教室に入ってきて、生徒達は自分の机に一瞬で戻っていった。

「……さて、鳴神。USJでの一件、お前はどう思っているのか聞かせてもらおうぞ」

「はい。……あれは、わたしの心身の實力不足が招いた事態でした。次は、こんなことにならないよう制御していきます」

分かつているならいい。相澤はそう言つて風華との会話を終わらせた。どうやら除籍は免れたようである。そのまま風華は壇上に立

ち、今度は自分の話を始めた。

「みんなには言っておかないといけない。まずは、暴走してみんなに迷惑と心配をかけたことを謝罪します。特に、直接傷付けてしまった実には。……本当に、ごめんなさい。そして、こんなわたしにまだヒーローになれると言ってくれてありがとう。これからはまた心機一転、ヒーローを目指して頑張っていくので、よろしくお願いします。……心配してくれて、ありがとうね」

「う、うん！これからもよろしくね！」

「大事に至らなかつたのは幸いですわ」

「あんな強い個性が無くなるなんて、損失でしょ」

みんなが風華の謝罪と感謝を受け入れてくれたのを見て、風華はホツと一息吐いた。言うべきことを言い終わって自分の席に戻る時に、偶然だが爆豪と目が合う。人相の悪さのせいで分かり辛いが、ライバルがちゃんと復帰できたことを嬉しく思っているようだった。

「鳴神。あの赤いやつ、ちゃんと制御できるようになればよ」

「分かってる。わたしの赫炎領域を越えなければ、真のNo. 1にはなれない、でしょ？」

「かっちゃんが普通に会話してる……!?!」

「デクウ！てめえ、俺がまともに会話もできねえ奴だと思ってるのかあ!?!」

だっていつも喧嘩腰じゃん。緑谷がそう言ったことで、火にさらに油が注がれてしまった。掴み合いの喧嘩になりそうになっていたが、風華はそれを無視した。復帰したばかりの彼女にとっては、いいBGM程度でしかなかったからだ。2人の喧嘩は、一限目の授業が始まるまで続いていた。

あと、ハンカチはちゃんと返しておいた。

く

「風華ちゃん、放課後一緒に特訓しない？ウチら放課後に体育館借りてるんだ」

「特訓はするけど。するなら研究所の実験室の方がいいかな」

「実験室!？」

「そういえば、鳴神さんは個性研究所に住んでいると言っていたな！俺も興味があるし、どうにか見学や体験をさせてもらうことは可能だろうか!？」

午前中の授業は大した山場もなく終わって、昼休み。昼食と一緒に食べないかと麗日に誘われた風華は、同席することになった緑谷、飯田と一緒に食堂に行っていた。昨日は休みの期間ということで食事はゼリー飲料で済ませていたので、約3日ぶりの固形物となる。無料で提供されているきゅうりの漬物を機械のように素早く口に放り込む姿に、3人が軽く引いていた。

友達と一緒に昼食といえば、ご飯を食べながら駄弁り合う雑談もその楽しみの一つである。今回の4人の会話内容は、雄英体育祭に向けての特訓をどのようにしていくかであった。

麗日は特訓のために、体育館の放課後利用許可を取って何人かを誘って一緒に使っているらしい。特に芦戸や葉隠、八百万などの女性陣が積極的なのだそうだ。

緑谷と飯田も、予定が空いている時は特訓に参加しているとのことだった。もつとも、まだ特訓を始めて一日しか経っていないのだが。

麗日は風華のことも特訓に誘うが、彼女は10年前から既に絶好の特訓施設を利用している。体育館が使えるからと言って、別に乗り換えるようなものではないと考えていた。

飯田は個性研究所の活動や施設などに興味があるという。見学や体験などは一応風華がいれば可能ではあるのだが、実験室は何人も同時に使えるようなものではない。体験に来るとしたら、この場にいる3人くらいで限界だろうと風華は予測していた。

「3人くらいなら、今日からでもいけると思うよ。流星にクラス全員は無理かな……」

「うーむ、それではまた後日に……」

「い、飯田君！これはチャンスだと思うんだ！自分の個性を見つめ直して特訓をして、新たな力を得て帰ってくる！そう、みんなを驚か

せるサプライズチャンスだよ！」

全員で行けないなら不平等になるかと、諦めようとする飯田を緑谷が何とか丸め込もうとする。彼も興味があるようだ。そこまで理屈は通っていないはずだが、普通に丸め込まれそうになっている飯田に風華は「こいつ大丈夫なのかな……」と思った。

「別に、強くなるのに周りに遠慮しなくてもいいんじゃない？プロヒーローになるんだから、天哉に強くなられて困ることはないでしょ」

「むう、それもそうか……ならば鳴神さん！今回の件はよろしく頼む！」

「ぼ、僕もよろしくお願いします！」

「ウチは今日は無理かな……」

麗日はずももとの予定だった体育館での特訓を優先するので、研究所に来るのは緑谷と飯田の二人となった。2人とも強力な個性を持っていて、研究員達も快く協力してくれるだろう。特に、己の個性で自壊してしまう緑谷には。

彼の超パワーのことは、風華も興味があった。もしも制御する方法があつたら？自壊せずに己の個性を扱えるとしたら？きつと、彼の實力は劇的に向上するだろう。その時に緑谷がどうなるのか、風華はそれを楽しみにしていた。

「それじゃあ放課後、予定空けといてね」

「ああー！」

「うん！」

）

放課後。授業は何事もなく終わって、風華は緑谷と飯田を呼んで個性研究所へと向かった。正門前のバス停からバスに乗って揺られることだいたい30分。途中でアクシデントなどが起きることもなく、普通に到着した。

「……が個性研究所か……！」

「写真で見るより大きいね!」

「外観ばっか見てないで入りなよ。わたしが一緒にいるから大丈夫」

雄英高校程ではないが、それなりに大きな敷地を持つ個性研究所の外観に大きく嘆息する2人。門の前で立ち止まる2人に入るよう促して、風華は一足先に中に入った。それに続いて飯田が、そして緑谷が慌てて中に入る。

中に入った2人が抱いた印象は、「とにかく清潔な所」であった。壁も床もしっかりと清掃が行き届いており、汚れている所など少しも見当たらない。「人の住む場所でもあるからね。ちゃんと掃除してるんだよ」と言う風華の言葉に、飯田が感心するように息を吐いた。

勝手を知っている風華の後について、2人はそれなりに多くの人が通る通路を歩いていく。道すがら見えた施設や実験の様子などに風華が解説を入れるのを、神妙な面持ちで聞いていた。

「ここで行われてある研究は、基本的には強すぎる個性の持ち主のその『個性』を解明して、健全な社会生活が送れるよう支援するものだよ。例えば、あそこ……彼は不感蒸泄が致死性の猛毒を有するという個性の持ち主なんだ。個性によって作られる毒は既存の血清では対応できないものがほとんどだからね。毒性の解明や血清、防護服の作成なんかが行われているんだ」

「なるほど……ただ生きるだけでも難儀な個性というのはあまり珍しいものでもない。そういう方々のために、健やかな生活を少しでも早く与えられるようにしているのか!」

「他にも、強いエネルギーを作り出せる個性の持ち主に協力してもらって効率の良いエネルギー源を創る実験とか、ヒーローや学生に訓練の場を提供するとか、個性がもたらす衝動を燻らせた人間に好きに暴れられる場を与えられたりとか、個性にまつわることをいろいろやっているよ」

「はあ……確かに。それだけ色々な実験とか業務をやってるなら、こんなに広いのも納得だね」

そして、個性のせいで社会で普通に生活できない者が入所する養護施設でもある。風華はもう個性のせいで不自由している訳ではない

が、空気と電気を操る個性の活用方法の模索や赫炎領域レッドゾーンの制御のこともあつて、今でも入所したままとなつている。

そうしていろいろと見ながら歩いてる内に、普段風華が使つていゝる実験室の前まで辿り着いた。カードキーを翳して扉を開けると、一面中真つ白な広い空間が現れた。

「荷物はそこに置いといていいよ。ちゃんと保護されるからね」

「壁が自動で動いてる……ウチの教室のコスチューム置き場みたいな感じなのかな？」

『あー、君達が今日のお客さんかい？風華ちゃんから話は聞いてるよ。ようこそ、個性研究所へ』

「うわっ!?驚いた、アナウンスか……」

「わー、綺麗な気を付け」

部屋の中に入ると、いきなり響いてきた声に飯田が驚きのあまり直立する。その見事なまでの真つ直ぐな立ち姿に、風華は思わず感心してしまった。上の方にある別室と繋がる窓を指差し、そこにいる人物が声の主であることを伝える。

『普段は風華ちゃんの担当をしています、研究員の立甲です。今日は、君達の個性を僕が見ていくからよろしくね』

「よ、よろしくお願いします!」

「立甲さん、本日はよろしくお願ひいたします!」

窓を隔てた先にいる男に、丁寧にお辞儀をして挨拶をする。立甲はそれを見て、『はは、深いお辞儀だねえ。うちの息子とは大違いだ』と笑つていた。

『それじゃあ早速始めようか。動きやすい服があるなら、それに着替えておいてくれよ』

「何だか、ワクワクするね!」

「そうだな……つて!俺達は見られててもあまり気にしないでいいが、鳴神さんの着替えはどうするんだ!」

「気にしないでいいよ。……ほら、着替えなんてすぐ終わるから」

目にも止まらぬ早着替え。創作で怪盗などがよくやる、服をパツと取つたら既に新しい服を着ているというやつである。昔、カッコいい

と思って練習していたのだ。制服から体操服に替えるくらいなら、練習を止めた今でも造作もないことなのである。

「何という早業……！」

「おみそれしました……！」

『男3人の前でやるのは感心しないけど。凄い技術だね』

漫画などでしか見れないような技が現実に見れてしまったことで、称赞の声を上げる3人。その声を聞いて、風華は得意げに微笑むのだった。

## 個性研究所く課題を見つけようく

『まずは緑谷君から行こうか。風華ちゃんから君らの個性はある程度聞いているよ。緑谷君は確か、全力を出すと身体が自壊する程の『超パワー』という個性だったね』

「はい！最近壊れない程度の出力で放つことがようやくできるようになったんですけど、なかなかその状態を維持することが難しくて」

「緑谷君の課題は、自壊の克服という訳だな！」

風華には後ろを向いてもらい、同じ空間に女子がいないがらの着替えに恥ずかしさを覚えながらも2人は着替えを終える。まずは先に着替えが終わった緑谷から見えていくことになった。

超パワーの制御に關してすることは、まずは最大でどれくらいの出力を出せるのか、制御可能な範囲はどのくらいかということの測定である。

白い地面が割れて、中から巨大なマネキンのような物体が出てくる。立甲がアウンスで『腕を壊してもいいから、それに全力で打ち込んでくれ』と語りかけた。腕が壊れることが当たり前というような言い草に、緑谷が抗議の声を上げる。

「全力ですか!?!」

「大丈夫だよ、あの人回复系の個性だからね」

「そ、そうなんだ……じゃあ……遠慮なく!」

風華の言葉をとりあえず信用して、緑谷はマネキンに近付く。大きく深呼吸を一つしてから、腕に力を込めていった。

大事ななのはイメージすること。緑谷の個性を使うイメージは、『レンジで温めた卵が爆発する』というものである。普段なら爆発する寸前で止めるような心がけているが、今回は全力で打つ必要があるので爆発させてしまう。

「DETRONIT……SMASH!!」

個性の全力を乗せて放たれた一撃が、マネキンの胴体部分にクリーンヒットする。マネキンはインパクトの衝撃で胴体から粉々に砕け散り、跡形もなく消えてしまった。

あまりの破壊力。その余波で近くで改めて観察しようとしていた飯田が吹き飛ばされ、風華が空気を押し固めて作り出したバリアは霧散してしまった。この状況を生んだ緑谷の右腕は、破壊力の反動を受けて青黒く腫れあがり焼け焦げてしまっていた。

立甲も、想像以上の破壊力に息を呑んだ。何せこのマネキンは、対戦車砲でも傷一つ付けられない硬度と柔軟性を持つている代物。それがただのパンチ一発で粉々になってしまうなど、想像できる訳がなかったのだ。

『……凄いね。僕は仕事柄多くの個性と出会ったけど、ここまでの超パワー個性は初めてだよ。治しに行くから少しだけ待っていてくれ』  
「はあっ……は、い……」

「出久の個性を見たのは、戦闘訓練以来かな。あの時も思ってたけど、凄いパワーだよな」

「うむーこれを制御できるようになった時のことを考えると恐ろしいな！」

実験室に入ってきた立甲が、ぐしゃぐしゃに潰れた緑谷の腕を取る。すると、桃色の光が彼の腕を包んだ。立甲の個性『ヒーリングパルス』である。

立甲の個性は掌から回復効果のある桃色の光を出して、それで対象を癒すというもの。生物しか治せないし、よほど重い怪我や病気は少しマシになる程度のものでしかない。しかし、緑谷の腕は少しずつ元の様相を取り戻していき、完全に回復した。

「光を出して直接触るのが一番効果有るんだよね。昔の風華ちゃんには、個性の制御ができずによく自爆していたから鍛えてたんだ」

「そういうことは言わなくていいから」

「鳴神君にも、そういう時期があったんだな！」

「データはしつかり取れた。次は、腕を壊さない範囲で個性を使ってみてくれ」

マネキンは派手に爆散したが、それでもデータはしつかりと取れていたらしい。新たなマネキンが地面を開いて現れ、さっさとこいと挑発するように聳え立つ。治された腕が違和感なくちゃんと動くこと

を確認してから、緑谷は再びマネキンの前に立った。

さっきのイメージは、レンジ個性に放り込んだ卵身体を爆発させてしまっていた。しかし、今度は卵を壊さないようにする必要がある。そのために、温めた卵が爆発する前に取り出すのをイメージする。

「レンジで卵が……爆発しないイメージ!!」

「今度は壊れてないね」

「それでも凄い衝撃だ……マネキンがぐらんぐらん身体に揺れているぞ！」

「よしっ、痛くない……！成功っ！」

身体を壊さず個性を使えたことで、緑谷がガッツポーズを取る。初めて成功したのがUSJで死柄木を殴ろうとした時で、それ以降使っていないから心配だったのだ。

「今の一撃もデータが取れたよ。本当なら何度も何度も同じことを繰り返して、データを貯めていくんだけど。そんな時間はなさそうだからすぐに結果言っちゃうね」

「ど、どうだったんですか!？」

制御に失敗した時のために、今度は近くで控えていてくれた立甲が測定された結果を伝える。最初に放った出力を100%とすると、今の一撃の出力は5%程。緑谷が無理なく扱えるのは、せいぜい全力の1/20くらいでしかないということが分かったのだった。

「1/20かあ……まだまだ遠いなあ……」

「緑谷君は確か、個性が発現したのがそもそも遅いということだったじゃないか！それで5%も使えるなら大したものだと僕は思うぞ！」  
「それに、『ここまでなら壊れない』っていう上限はまだ分かっているから。今度はそこを確かめていこうか」

「風華ちゃん……僕の台詞取らないですよ」

あくまでも5%とは『無理なく怪我せず出せる』出力である。少しの無理が必要になっても、怪我はしないというギリギリの範囲を次は確かめてみるべきだと風華はいった。出せる力が大きいに越したことはないのだから。

緑谷が個性を使う時にイメージしている『レンジで温められた卵が

爆発しない』というのを、レンジの出力を少しずつ上げていくという形で取らせる。そうしてギリギリを探っていくのだ。暴発しても、そこは立甲が治せるので問題はない。

「つぐ……痛い、けど……折れてない!」

「これは……だいたい12%くらいだね。これ以上出力を上げると、骨や筋肉に影響が出ちゃうね」

「12%……ここが、今の僕の限界……」

「よし!では次は俺の番ですね!」

自分の現状が分かったなら、そこから後は上げていくだけ。一步步、歩みは遅くとも確実に進んでいこう。オールマイトの後継として、相応しいヒーローになるために。緑谷は拳を強く握って決意を固めた。次は飯田の番だ。

「飯田君の個性は、足のエンジンを起動することで加速するというものだったね。最高速度や加速力を確認していこうか」

「はい!よろしくお願ひ致します!」

今度は床ではなく壁が開いて奥にある部屋と交わり、実験室がより広くなった。飯田が加速を存分に行えるよう、走行距離を広く取ったのである。

走り始めた時点で測定はできるから、走れなくなるまで存分に走ってくれと言われ、飯田は早速スタートを切った。排気筒から蒸気が噴き出して、走りに素晴らしい加速をもたらす。せいぜい数秒程しか経たぬ内に、彼の姿は彼方へと消えていく。戻ってきた頃には横腹を抱えてグロッキーとなっていた。この間だいたい15分くらい。雑談に花を咲かせるのには十二分な時間があった。

「……なるほど。結果が出たよ。飯田君は最高速度が76 Km/h、そこに至るまでに13秒かかっていた。最高速度を維持できていたのは40秒くらいで、個性による速度を維持したまま走っていたのは10分くらいだね」

「なるほど……俺の課題は加速力ですね!できれば一桁台で、最高速度になれるようにしたい!それに最高速度自体もより向上させたいですね!」

「体育祭まで二週間。見つけた課題を全部クリアできるような時間は流石に残ってない。だから、ここでは解決する課題を一つに絞っておこうか」

緑谷は5%の維持に慣れること。飯田は最高速度に達するまでの時間の短縮。それぞれが体育祭に向けて解決するべき課題を決めた。後は、ひたすら特訓あるのみである。

「今日はもう19時だし、特訓は明日からにした方がいいだろうね。緑谷君は個性を維持しながら風華ちゃんと組手。飯田君は加速力向上のためにスタートダッシュの訓練。風華ちゃんと一緒にくれば施設は使えるから、安心してまた来なさい」

「は、はいー!」

「本日はありがとうございます!」

「お礼なんていいさ。その代わり、本番ではいい活躍を見せてくれよ?」

「もちろんです!」

「わたしもしっかり付き合うよ。強くなってみんなをとびきり驚かせてやろう」

今日の個性分析のおかげで、緑谷と飯田は体育祭までに克服するべき課題が明確になった。わざわざ付き合ってくれた立甲に2人は礼を言うが、立甲はそれを受け取らない。代わりに体育祭で2人が活躍しているところが見たいと言う。

ならば、その期待に応えよう。2人は……特に緑谷はそう強く決心した。

緑谷出久はオールマイトに見初められ、選ばれた平和の象徴の後継者である。もうヒーローとして動ける時間が長くないオールマイトに変わって、新たな平和の象徴となる責任がある。その最初の一步である体育祭では、『君が来た!』ということを世の中に知らしめてほしい』とオールマイトから言われていた。

そのためにも、体育祭ではできる限り良い成績を残したい。しかし、ろくに個性を扱えない自分には難しいと思っていた。だから、今回の風華の提案は緑谷にとっては僥倖であった。

新たな平和の象徴となる、そのための一步を踏み出させてくれた。ならば尚更、彼は勝たねばならないのだ。オールマイトに、ヒーローになる道を進むことを許してくれた母に報いるためにも。

もう一度、拳を固く握る。オールマイトの個性、ワン・フォー・オール。受け継いだ個性の重みを改めて感じた。

「今日は本当にありがとうございます！また明日もよろしくお願ひします！」

「僕達はここで失礼します！鳴神さん、立甲さん！本日は誠にお世話になりました！」

「気をつけて帰ってね」

「また明日、学校でね」

帰っていく2人を見送り、姿が見えなくなってから風華と立甲は研究所へ戻った。自分の部屋へ戻る途中、2人で雑談などをする。その中身は風華がUSJで<sup>レッドゾーン</sup>赫炎領域に入ってしまったことや、課題を克服した緑谷と飯田がどのような成長を見せてくれるかということなど。10年の付き合いがある2人というだけあって、短い道のりの間にもかなり会話は弾んでいた。

「あー、そうだ。言うのを忘れてたけど、葵のやつが雄英の編入試験に合格したんだ」

「……え、マジですか？葵が？」

「マジ。多分クラスはB組になるだろうけど、学校で会ったら仲良くしてやってくれ」

「分かりました」

自分の部屋に着いた風華は、扉を開けて中に入る直前に、不意打ちのように立甲の問題発言を聞いてしまった。あまりの驚きにドアノブを握る手が固まってしまふ。正気を取り戻すのに、たっぷり1分もかけてしまった。

「あいつが雄英かあ……うるさくなりそうだなあ」

いつからになるのかは知らないが。個性研究所きつてのお騒がせ女が編入してくるといふ情報に、憂鬱になる風華なのであった。

## ワン・フォー・オール『フルカウル』

「それじゃあ鳴神さん。今日からの特訓、よろしくお願いします!」  
「オーケー。始めていこうか」

翌日。この日も授業が終わってから、緑谷と飯田は個性研究所に特訓に向かっていた。飯田は幅の長い部屋でスタートダッシュを特に意識しながらの走り込み。緑谷は風華と組手である。

真つ白な部屋の中で対峙する2人。右手に個性を発動させて構えを取る緑谷に、風華がまずは先制攻撃。下段蹴りで足元を注視させると、緑谷はパワーを足に移行させ跳んで避ける。着地際に再び腕にパワーを戻して殴りかかるも、あっさりといなされて背後に回られた。「っ!くそ、背後に……!」

「隙有り」

「目潰しっ!」

咄嗟に振り向くも、そこに合わせるように風華の指が眼球に迫ってくる。なんとか頭にパワーを移行させて目潰しは回避できたが、代わりに避けた先の左拳によるアッパーを食らってあえなくKOとなつてしまったのだった。浮き上がった身体が地面に叩きつけられ、天井を仰ぎ見る。ぐうの音も出ないほどの完敗であった。

その後も休憩を挟んで何度か組手を続けたが、その悉くで実力も出せないまま緑谷は風華に負け続けた。ただ組手をするだけでなく、個性を使って効果的に動くとなると、使う部位へのパワーの移行に脳のリソースを割かなければならなくなる。そのために、それだけに神経を集中させる必要が出てしまっていた。ただでさえ、今は5%を維持するだけでも難しいというのに。

風華はこの組手において、自分の個性を一切使っていない。なのに手も足も出ないことが、緑谷をさらに焦らせていた。

「また、わたしの勝ちだね。休憩しようか」

「はあっ、はあっ……!!鳴神さんって体術も強いんだね……技の選択肢が多彩だからどれも参考になるよ……!」

「出久も動きはいいんだけど、個性の維持に集中力を取られすぎてる

ね。それと、一つ気になったんだけど……どうして出久は一箇所ずつしか身体の強化をしないんだい？」

「それは……使う部位に対応させるようにって」

緑谷にとって、個性とは特別なものである。彼はもともとは無個性であり、15歳になって授かった個性も見に余る代物であった。そのため、幼い頃から個性が発現している他の者達と違い、『個性はあつて当たり前なもの』『単なる身体機能の一部』であるとは考えられなかったのだ。

とはいえ、多少の進歩はしている。それまで彼は必殺技を使うように、個性をここぞという時でしか発動させていなかった。しかし、今は移動や防御などにも個性を使うよう心がけている。

『個性が発現して嬉しいのは分かるけど。あんまり難しく考えすぎなくてもいいんじゃない？』

昨日、帰った後で個性の扱い方に頭を悩ませていた緑谷に、母のそんな言葉が気付かせた。個性は必殺技などではなく、あくまでいつでも使える通常技の一つでしかないのだと。それに気付いてからは動作の一つ一つに個性を対応させるように心がけていたのだが、それに対して疑問が出たことに緑谷は驚いていた。

「身体強化ならわたしにもできる。出久のそれとは原理が違うけどね。わたしの場合は、電気を全身に巡らせることで、身体機能を刺激して活性化させることで強化してる。使う電力によって出力は変わるけど……安定して使うなら出久の5%と同じくらいかな」

「既に僕の先の領域に……！」

「わたしと出久の違いは、強化が一部分だけか全身に及んでいるかかってところだね。足や頭を強化することはできるみたいだけど、その都度個性を切り替えるのは面倒じゃない？」

「た、確かに……全身にくまなく個性を行き渡らせることができれば、その分切り替えに使う思考のリソースを割かなくて済むしタイムラグもなくなる！そのためにはイメージが必要になるけど今まで通りのレンジで卵が爆発しないやつじゃあ……」

「出久？顔が怖いよ」

考え始めると周りが見えなくなる。緑谷の悪い癖である。今まで  
の卵のイメージは一部分のみの強化に使っていたため、全身くまなく  
強化するイメージとしては使い辛い。ならば新しいイメージの方法  
を用意するべきだが、それはどうすればいいのか。そこに頭を悩ませ  
ていると、風華が口を開いた。

「レンジのイメージを使うなら、冷凍食品とかが」

「冷凍食品！なるほど、レンジの熱で全体を温めていくことで解凍す  
るのをイメージ……！冷凍食品が僕で、レンジの熱が個性！熱を全体  
に広げて、僕自身を温めていく……！」

「おお……できたみたいだね……」

風華が最後まで言い切るのを待たず、アドバイスを消化した緑谷。  
しつかりと新たなイメージを作り出して、全身に個性による強化を行  
き渡らせた。

全身常時5%。オールマイトのお墨付きでもある地味なイメージ  
によって編み出されたそれは、しかし使いこなせれば今までの自分と  
は全く違ったものとなるだろう。

「早速、試してみようか」

「うん………！お願いしますー！」

「今までは、わたしに一矢報いることもできてなかったから……今回  
はとりあえず3分。わたしに一発でも当ててみせな」

不意打ち。ハイキックをガードした緑谷の左腕の強化が途切れる。  
そのまま風華は背後に回つてもう一発、強化の維持に気を取られてい  
る緑谷を蹴りつけた。ガラ空きの脇腹に突き刺さる前に、何とかこれ  
もガードする。そして、蹴りの反動に乗って距離を取った。

このままでは防戦一方。不意について先手を取ったアドバンテー  
ジを活かされたまま、何もできずに負けてしまう。ならば自分はどう  
すればいいのか。緑谷は考えて……壁の一部を引き剥がした。

「これでもっ………食らえー！」

「うわっ………でも、遅いよー！」

自身の身長をゆうに超える壁の破片を投げつけられ、驚く風華。し  
かし迫り来るその速度は大したものではないので、落ち着いて左に

跳んで避ける。その先には、風華の動きを先読みしていた緑谷が待ち構えていた。

「5%……デトロイトスマッシュ!!」

「わわっ……」

着地する瞬間の隙を狙って放たれた、緑谷の左ストレートが風華の腹部に迫る。目眩しに加えて態勢を崩させ、無理やり作り出した隙を逃すことなく活かし切る。

ここからは風華には何もさせない。そのつもりで緑谷は攻勢に躍り出た。この拳が防がれたなら、そのまま頭突きを食らわせる。避けられたならその方向に追従して追撃する。一分の動きも見逃さないように、相手の観察は怠らない。

次はどうくるか。考え、予測し、取るべき一手を組み立てる。ただでさえ経験でも技量でも劣っているのだ、思考を続けなければ風華を相手に勝機は得られないのだから。

「まだまだ……甘い!」

「上っ!」

迫り来る左の拳、風華はそれを着地した瞬間に大きくジャンプすることで回避してみせた。そのまま天井に足を付けて、蹴り出す反動で緑谷の背後に着地。再び優勢を奪い返す。ここまで組手をしてきて、何度もこのパターンは繰り返された。こうなったら最後、振り向いた隙にエンドレス背負い投げか、振り向く暇もないまま足を掛けられて地面に叩きつけられ関節を極められるかのどちらかである。

「うしっ……ろお!」

「……を取られて取られてる時点で、これまでと変わらないよ!」

「っ……いや!今度は違うぞ!」

背後に着地した風華が引っ掛けようとした足を、軽く跳ぶことで避けて勢いで振り向く。そのまま身体を一捻りして投げの態勢を作り出す彼女の手を掴んで、上に放り投げた。見た目よりはかなり重い風華の身体が宙を浮き、突然の上昇に手足を驚きのあまりバタバタと動かす。それを好機と見た緑谷は地面を蹴り、すかさず風華に向けて渾身の右ストレートを放つ。

5%では避けられるかもしれない。この大きな隙を狙うならばもつと先を目指してみよう。許容上限ギリギリを。腕を壊さずに済む、その範囲での全力の一撃を。

「12%……！デラウェアスマッシュ!!」

「衝撃波じゃあ……わたしには届かないよー！」

「んなっ……!?ぎやあっ！」

ただの組手で人体に当てるには、12%は大き過ぎる数値である。だからこそ衝撃波を攻撃方法に選択した。だが、それは空気を操る風華相手には最悪手であった。流れを掌握され、反転した衝撃波が逆に緑谷に襲いかかる。既に落下中であった彼に回避する手段はなく、吹き飛ばされて地面に叩きつけられる。頭を守るのが精一杯であった。

「……3分」

「はあっ……あと少しだったのに……！」

「最後のは、普通に殴るべきだったね。あの程度の衝撃波じゃあ反転させて終わりだよ。まあ、相手がわたしじゃなかったら決まっていただろうけどね」

「うーん、要反省……！」

着地した風華が倒れる緑谷に反省点を告げる。個性で全身を強化したことで、上がった身体能力と動体視力。それらを存分に活かしてそれまでとは比べ物にならない程に追い続けた。今まで使わせることすらできていなかった個性を、風華に使わせることができた。

「いい感じに戦法ができたし、これからはその状態を当たり前前に維持できるようにならないとね。せつかくだし、何か名前でも付ける?」「名前か……うーん」

個性による全身強化。もはやそれ自体が必殺技と言っても過言ではないのだから、名前があった方が格好も付くだろう。そう思って風華が話を振ると、緑谷は少し考えて『フルカウル』という名前を捻り出した。個性をバイクに取り付けるカウルに見立てて、それを全身に纏うからという由来らしい。

風華はバイクについて詳しい訳ではないので、そうなんだという感想しか出てこなかった。明らかな戸惑いを見て、落ち込む緑谷なので

あった。

「必殺技もできたし、出久が実験室に来る必要はあんまりないかな。これからはそのフルカウルを使いながら、たくさん動いて身体に慣らしていこう。ちょうど天哉が走りに行ってる所みたい、動くのにはもってこいなアスレチックとかもあるからね」

「うん。瞬間解放12%もできてたし、そっちも少しずつ慣らしていかないかね!」

「後は、身体が許容できる上限を増やすための基礎的なトレーニングもだね。家に帰ったらちやんとご飯を食べて、お風呂に浸かって、しっかり寝て身体を休めること」

今日も時刻は19時となった。学生は家に帰る時間である。様子を見に来た立甲が、緑谷と外での走り込みを終えて戻ってきた飯田にスポーツドリンクを渡す。冷たい甘味が疲れた身体に染み渡り、疲労を癒していくのを感じるのだった。

「わたしの分は無いの?」

「生憎、僕の手は2本しかなくてね。しかし君達はよく頑張るね。ウチの娘にも見習わせないと」

「娘さんがいるんですか?」

「うん、ちょうど体育祭の日に雄英に編入することになってるんだ」

えええ!?!と2人の絶叫が響いた。それもそうだろう、雄英に編入生が入るなんてそうそう無いことなのだから。

雄英の入試は受けていたが、実技で上手く動けて調子に乗ったせいで0ポイントにやられて不合格になったらしい。その後滑り止めで受けていた他の高校に合格、編入試験を受けて改めて雄英に合格したのだという。

本当なら、彼女も個性研究所を利用しているので顔を合わせられたはずなのだが。編入試験に合格したことで舞い上がって、車に撥ねられて入院しているのだと立甲は言った。体育祭の日が初雄英になるのはそのためだという。

立甲葵。その強力かつ暴走しやすい個性で、何度も研究所に大きな損害を与えてきた問題児。実の父親である立甲が、何度も実験を共に

した風華が。彼女がそれまでにやらかしてきた所業を思い出して頭を抱えるのだった。

なんて奴だ……。緑谷と飯田の考えていたことがこの時シンクロした。

く

「飯田君は加速の特訓をしてるんだったよね。進捗はどんな感じなの？」

「あまり芳しくはないが、そんなすぐに成果が出るものでもないからな。焦らずじっくりとやっていくさ。それよりも、必殺技の構想ができたんだよ！」

「必殺技?! いったいどんな！」

「秘密だ！」

「秘密か！」

帰り道を一緒に歩く2人は、今日行っていた特訓について会話を弾ませていた。緑谷は組手で何度も風華にボコボコにされたことや、必殺技ができたこと。飯田はひたすらスタートダッシュを繰り返したり、アスレチックコースで立体機動をしたり、必殺技を考察したりなど。

個性研究所に来てまだ2日目だが、お互いかなりの手応えを掴んでいるようであった。

「しっかし！立甲さんに娘さんがいて、なおかつ雄英に編入してくるとは！」

「聞いた話だと、かなりおつちよこちよいいな人みたいだけど……。どんな個性なんだろうね」

お互いの話を終えて、次に話題に出るのはまだ見ぬ新たなライバルのこと。『疾風迅雷』という強力な個性を持つ風華を以てして「強い」と評する彼女はいったいどのような人物なのだろうと、2人して頭を悩ませるのだった。

その後、実際に会ってから考えればいいと思いを打ち切る。ちよう

ど帰路が別れる所であった。

「体育祭まであと二週間。緑谷君……俺は君にも鳴神君にも、他のみんなにも勝つ。そして、一番になるぞ」

「うん……僕も、全力で獲りにいくよ」

ガツチリと握手を交わし、2人はそれぞれの家へと帰っていった。

）

参加種目の決定に、個々人の準備。二週間の猶予はあつという間に過ぎていった。そして、体育祭当日を迎える。

「入場検査長くない？」

「仕方ないさ、敵の襲撃なんて大事件があつたんだからな。今年に限っては、開催自体に懐疑的な声もあるし……」

始まる前の正門には、数多の報道陣が入場するための審査待ちをしていた。今年は例年の5倍の警備を動員した上での開催となっており、マスコミは不法侵入した前科もあるため厳しく検査されているのである。

「まあでも、『物議をかもしている』ということは『数字が取れる』ということよ！待っていないさい1年A組！今年が目玉！」

## 雄英体育祭、開幕!

「えっと、鳴神……その子は知り合いなのか?」

「一応ね……他人のフリしたいけど……」

「初めましてA組の皆さん! いやあ、やはり日本最高峰のヒーロー科に合格した猛者達だけあって、皆さん揃いも揃ってとても優秀そうな顔をしているではありませんか! こんな人達とこれから切磋琢磨していける僕は、何という幸せ者でしょう!」

開会式が始まるのを待つ控え室。A組の生徒に割り当てられたそこには、凄まじく声の大きな異物が紛れていた。異物は風華にまどわりつきながらA組の面々を観察している。戸惑いを隠せないクラスメイト達を見て、好きなものを見つけた幼い子どものように目を輝かせていた。

身長は150cm程で、天然のパーマがかかった首元まで伸びる青い髪と、同じくラピスラズリを思わせるような青い瞳が特徴的な女子。体操服を着ていることから雄英の生徒であることが窺えるが、ヒーロー科にこんな生徒はいなかったはずである。あまり関わりはないが、もう一つのヒーロー科であるB組でもこんな生徒は見たことがない。

ならば、普通科やサポート科の生徒だろうか。経営科という可能性もあるが、彼らは基本的に体育祭には参加しないので違うだろう。い加減正体を明かしたいと、代表して八百万が声をかけようとしたその時。彼女の正体に思い当たった飯田が、それを遮って代わりに話しかけた。

「もしかしてだが……君は、ヒーロー科に編入することになったという立甲葵さんではないか?」

「僕のことを知ってるんですか!? 先生達にも驚かせたいからと口止めしておいたはずなのに、もう情報を握っていたとは! 流石は雄英生と言ったところでしょうか!」

「んだよ飯田、知ってたのかよ!」

「鳴神さんの所で話を聞いていたからな!」

風華と緑谷、飯田の3人は彼女のことを知っていたということ、切島が驚きの声を上げる。彼女の正体を探ろうとしていた八百万が、風華に「どのような方ですか?」と聞いてきたので、風華は「まぬけ」とだけ答えておいた。

「間抜けとは何ですか!改めまして、本日より雄英高校ヒーロー科1年B組に編入することになりました、立甲葵と申します!」

「うん、よろしくね!それはそうとして……B組の所にいらなくていいの?そろそろ入場だよ?」

「はっ!そうでした、ふうちゃんに挨拶するために来たのに居座り過ぎました!それでは皆さん、今度は競技の中でお会いしましょう!」  
「行っちゃった……」

「嵐みてえな奴だったな」

やることはやっただと言つて、葵はB組の控え室へ戻っていった。騒音の化身がいなくなったことで静かさを取り戻した控え室の中、砂藤が一言漏らした感想に何人かが頷いた。

「まあそれはそれとしてだ。緑谷」

「それはそれって」

「マイペースが過ぎるぞ」

「この展開でよく切り出せたな」

「お前、オールマイトに目えかけられてんだろ」

「マジで話し始めたぞ」

嵐が去つてすぐ、周りのツツコミも気にすることなく轟は緑谷に話しかけた。緑谷がオールマイトから割と鼻根気味に気に入られていることに、思うことがあるようだ。

「客観的に見ても、今の時点では俺の方が実力は上だと思ってる。お前の何をオールマイトが気に入ってるのか、そこを詮索するつもりはねえが……お前には勝つぞ」

「おお!?推薦組が宣戦布告か!?!」

「どうしたんだよいきなり、喧嘩腰で」

「仲良しごっこをしてる訳じゃねえんだ、何だっぺいいいだろ」

現時点でA組でも1、2を争う最強候補からの宣戦布告。名指しで

呼ばれた緑谷は、「オールマイトそんな分かりやすいんだ」などと思いつながらそれに応える。

「君が何を思っつて、僕に勝つと言ったのかは分からない。強さだけならかつちゃんや、鳴神さんの方がよっぽど上だしね」

「……」

「そりやあ君の方が上さ。僕と君のどっちが強いかと聞かれたら、10人中10人が君の方が強いっつて答えるよ」

「緑谷もそんなネガティブな……」

「でも」

切島がたしなめるのも聞かず、緑谷は言葉を続ける。轟を見据えるその眼は、表情は、確かな覚悟を帯びていた。

「みんな、本気で天辺を狙ってる。上を目指す覚悟を持つてる。だから……僕だけ遅れを取る訳にはいかないんだ！僕も本気で、獲りに行くー！」

「……ああ！」

「ケツ！」

「はい、水を差さない」

ここで、1年生に入場の合図が出される。合図に従ってステージへと向かう中、緑谷はオールマイトに言われた言葉を思い出していた。

『君が来た！』ということを知らしめてほしい！』

「了解、オールマイト」

く

『雄英体育祭！ヒーローの卵達がシノギを削る年に一度の大バトル！どうせテメーらアレだろこいつらだろ!?敵の襲撃を受けたにも関わらず鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星！』

「鋼の……精神……」

「始まる前からダメージ受けてんじゃねえ！」

『ヒーロー科1年！A組だろおお!?』

入場の際して行われるプレゼント・マイクによるパフォーマンス。

鋼の精神と言われたことで約1名がダメージを負ったが、沸き立つ観客のボルテージにそんなことは関係なかった。

既に敵との戦いを経験しており、経験値という点では他のクラスとは一線を画すA組の登場に、会場は万雷の喝采で彼らを迎えた。この大勢の観客に見られている中でも、いつものようなパフォーマンスを出すことができるか。これもまた、ヒーローに必要な素養を身につける訓練なのである。

多くの期待の声に、爆豪や切島などは大きくテンションを上げていた。これまでの研鑽の成果を見せることのできる場、少しの緊張と大きな昂揚に胸を躍らせていた。

「俺らって完全に引き立て役だよな」

「たるいよねえ……」

続いてB組、普通科のC、D、E組、サポート科のF、G、H組が入場する。経営科は不参加。普通科の面々などは、明らかにヒーロー科の2組とは違う観客の温度差にテンションを下げていた。

「……だからこそ、下剋上が映えるんだよな」

そんな中でも、闘争心に燃えている者は存在しているのだが。

「選手宣誓！」

「お、今年の主審は「18禁ヒーロー」ミッドナイトか！」

「18禁なのに高校にいいものなのか」

「いいー」

「静かにしなさい！選手代表！」

18歳以下が当然の高校に、18禁ヒーローがいるのってアリなの？常闇が疑問を口にする、峰田が即答で答える。そんなやりとりを鞭でピシヤリと制し、選手宣誓をする代表二人の名を呼ぶミッドナイトなのであった。

「1―A組爆豪勝己！並びに鳴神風華！さあ壇上へ上がってきなさい！」

「2人でやるんだな」

「あの2人が入試一位だったそうだからな」

「ヒーロー科の入試な」

普通科の方から飛んでくる皮肉。しかし2人は気にすることもなく壇上に立った。

どんなことを言うのだろう。爆豪は特に何をしでかすか分からないため、みんな固唾を飲んで見守っていた。

「せんせー」

「……」

「俺が一位になる」

「やっぱやりやがったコイツ！」

方々から「調子乗んなA組!」「何故品位を損ねるような発言をするのだ!」「ヘドロヤロー!」などとヤジが飛ぶ。それに対して爆豪は、指で首を落とすジャスチャーをしながら「せめて跳ねのいい踏み台になつてくれ」と、さらに火に油を注いだ。

「そういうところは変わらないね」

「ほっとけ。次てめエの番だぞ」

「分かってるよ。……選手宣誓」

しん。と会場が静まり返った。気の引き締まる静寂の中、風華は言葉を紡ぐ。

「立ち塞がる壁も、ライバルも。全てを振り伏せてわたしが、体育祭の頂点に立つ」

「こつちもやりやがった!」

「どんだけ自意識過剰だよ!この俺が潰したる!」

「流石ふうちゃん!いい宣誓でした!」

爆豪に続いて、風華までもが自分こそが一位になると宣言したことで、会場はブーイングの嵐となった。降り注ぐ罵声を気にすることもなく、2人は壇上を降りて元いた場所に帰る。

……2人とも、自分を追い込んでるんだ。

緑谷は気付いていた。いつもの爆豪ならばこういうことは笑いながら言っていたが、彼は真剣そのものであった。風華にはオールマイトのようなヒーローになるという目標がある。そのためにも、体育祭でだって負けてはられないのだ。双方共に、このようなビッグマウスを叩くだけの覚悟を持っているのである。

……僕らを巻き込んだのは、まあ……かつちゃんらしいけど。

「早速第一種目の発表よ！」

「雄英ってなんでも早速やね」

「早速ではなくない？」

「お黙り！いわゆる予選よ！毎年ここで多くの者が涙を飲むわ！さて、運命の第一種目！それは……これよ！」

「障害物競走……！」

1年生の全クラスが総当たりで、4 kmの道のりに挑む障害レース。コースを外れなければ、何をするのも自由。さあ全員位置に付いて、とミッドナイトが言うのと同時にゲートが開いた。

『スタート!!』

合図と同時に、走り出した全員が一斉に狭き門へと殺到する。多くの者がつかえて抜けるのに手間取る中、風華と緑谷、飯田に轟がま  
ず抜け出した。

「雷上動を使うにはちよつと長過ぎるね……普通に走っていいこうか」

「鳴神さん、僕も負けないよ！」

「機動力なら俺に分がある！負けないぞ！」

「狭過ぎるスタートゲート……すなわちこれが最初の篩。悪いが足止めさせてもらうぞ」

ゲートで手間取る者達を、轟の氷が阻む。足下を凍らされて動けなくなった走者によって、即席の壁が作られた。

その間にも風華は『纏雷』で、緑谷は『フルカウル』で、飯田は『エンジン』で先を行く。現在は速度に優れる飯田が先頭となっていた。「鳴神さんならわざわざ『纏雷』を使わなくても、風で飛んだ方が速いんじゃないのかい？」

「それじゃあ面白くないでしょ？体育祭はエンタメでもあるんだから」

風華が、緑谷が、轟が。轟の妨害を躲したA組の面々が。ゲートを飛び出して次々と前へ繰り出していく。

A組のみんなは当然として、想定よりもだいぶ避けられてしまった。ならば仕方ないと、轟は後ろを気にするのをやめて前を向いた。

己の前で、既に3人が走っているのだから。

『それじゃあここから実況が入るぜ！解説ア—ユーオーケー？ミイラマン!』』

『解説じゃねえ。お前が無理矢理呼んだんذار』

『おつと無駄話はここまでだ！早速現在一位の飯田が第一関門に差し掛かったぜ!』

『聞けよ』

第一関門。見覚えのある巨大な影に、飯田は思わず上を見上げた。そいつがいたからではない。数が多過ぎたからだ。

「こいつは0ポイント……!」

「また見るようになるとはね」

「数が多過ぎない!?!」

「一般入試の時の仮想敵ってやつか」

「どこからお金が出てるのかしら……」

まず行く手を阻むのは、全長10mを優に超える数十体の巨大ロボットの群れ。

ー 第一関門『ロボ・インフェルノ』ー

「ふっふっふ……これは絶好のチャンス！僕の力を見せる時ですわね!」

体育祭はまだ、始まったばかり。

## 第一種目：障害物競走

走者の行く手を阻む最初の関門、一般入試でも使われた大量の仮想敵が、波となつて襲いかかる『ロボ・インフェルノ』。真つ先にそこまで辿り着いた飯田が、敵ロボットの最初のターゲットとなるのは必然であった。

「ターゲット、クロス！」

「ハカイスル！」

「貴様らのやり口は知っている！それに、俺はあの頃よりも成長しているぞー！」

『おーつとおー！先頭を駆けるA組、飯田天哉！敵ロボット妨害をもともせず駆け抜けていくぜえ！』

『速度に振り回されない身のこなし……この二週間ですいぶん鍛えたみたいだな』

避ける。避ける。ロボットから放たれる熱線や重厚なボディによる叩きつけを、持ち前の機動力を駆使して回避する。驚くべきはそうして細かく動いている間も、ほとんどスピードが落ちていないというところであった。

「アスレチックで培った加速維持と悪路走行！あの数をものともしていない！」

「ま、あれくらいはできるよね」

少し遅れて、風華と緑谷がロボ・インフェルノゾーンに突入する。飯田を妨害するのを諦めて襲いかかるロボットの大群を相手に、個性によって強化された身体能力で対抗する。

「吹っ飛べ……『吹き荒ぶ風』」

「瞬間解放、12%……！折れてくれるな『デトロイトスマッシュ』!!」

『A組、鳴神風華が風で敵ロボットを吹っ飛ばす！それに続いて緑谷出久だ！パンチの一発でロボットが粉々！こいつあ凄まじいパワーだぜえー！』

『緑谷はこれまで、自滅覚悟でしか個性を使うことができなかつた。準備期間ですっかりと制御してきたみたいだな』

『サラツと言ったな！そりやあ大した進歩だ！』

「緑谷、骨折克服かよ！」

「凄い、ぴよんぴよん跳ねとる！」

「俺の猿真似の動きじゃねえか！」

A組はそれぞれがそれぞれのやり方で、ロボ・インフエルノを抜けていく。入試の時は『避けるべき邪魔者』であったが、『倒すべき障害物』としてみれば鈍臭い鉄の塊でしかない。

B組をはじめ、他のクラスの走者の動きも悪くはない。だが、A組は立ち止まる時間が短い。

「避けちまえばただのデカブツよ！」

「這い上がれ黒影！」

上の世界を肌で感じた者。

「浮かせてしまえば……邪魔にならない！」

「中身がイカレれば動けないっしょ！」

恐怖を植え付けられた者。

「ほっ……ああたあ！」

「どうせなら、もつとすげえモン用意してほしかったんだがな。クソ

親父が見てるんだからよ」

対処し、凄いだ者。

『各々が経験を糧とし、迷いを打ち消している』

『はーっ！経験の差コエー！』

次々と敵ロボットの波を抜けていくA組に、会場の歓声がどんどん熱気を帯びていく。多くの応援を受けて、負けじと他の走者も走りについてそう気合が入ってきた。

「あそこ！凍らせられて道になってる！」

「よっしやそこ通れ！」

「やめとけ、不安定な態勢で凍らせたから……」

「ぎゃあああああっ!？」

「倒れるぞ」

『轟、攻略と妨害を一度に！こいつあシヴィー！』

「誰か潰されたぞ!？」

「死人とか洒落にもならねえぞ!？」

敵ロボットを凍らせて拘束し、その足下をくぐっていく轟に追従するように進む走者達。轟はもちろん、そんな便乗にも対策を講じていた。ワザと足を上げるなど態勢が不安定になったところで凍らせ、時間差で倒れるようにしていたのだ。

避け切れなかった者がいたようで、その瞬間を見てしまった普通科の生徒は狼狽し足を止めてしまっていた。

「轟のやつ無茶しやがって! 『硬化』できる俺じゃなかったら間違いないく死んでたぞ!」

「やることが派手だぜA組……! 俺の硬度がなければ死んでたぞ!」

「個性ダダ被りかよ!」

『おーつとA組切島、B組鉄哲! 潰されながらもしっかり復帰! しぶとい奴らだぜ!』

「ホント、いい『個性』だと思いますよ! ですが! この体育祭で一番になるのは僕ですから!」

「んなあ危ねえつ!?! 何だ今の、ドラゴンか!?!」

「おい立甲! 巻き込まれるところだったぞ!?!」

「それは申し訳ありません! お先に失礼します!」

『今度は何だあ!?! B組の立甲葵だ! 変身してるぜ何者だコイツ!?!』

『個性『蒼龍』か。良いパワーだな』

倒れたロボットをほじくって、何とか脱出を果たした個性ダダ被りの2人。全身を鉄の穴から解放したところで、それを蹴り砕く蒼い残像を見た。

全身に纏う蒼き鎧は、無数の鱗が重なって堅牢なる甲殻を成したものの。150cm程度しかなかった身長は、大きく膨張して2mを優に超えた。腰の辺りからは百足のそれを思わせるような三組の尻尾が生え、それらに上から覆い被さるように蒼炎の如き体毛がゆらめいていた。

顔も爬虫類のそれよりも、遥かに雄々しさと生命力に満ち満ちたものとなっている。まさしくそれは御伽噺の存在。幻想の頂点に立つ者、『蒼龍』の姿であった。

立甲葵、個性『蒼龍』。轟の妨害に綺麗に引つかかって出遅れた分を、すぐに取り戻せるだけの力が彼女には有った。

「ふうちゃんはもう第二関門の所まで行ってしまいましたか！それでこそ僕のライバルですね！」

「何か悪寒が……」

「き、気のせいだと思おうよ!？」

『トップ陣は早くも第二関門へ到達したぜ！第一関門は悠々突破されちまったがこっちはどうだ!?落ちたら奈落へ真つ逆さま！それが嫌なら這いずり回れ！天地を分ける一本橋！』『ザ・フォール』!!』

未だ先頭を走る飯田の前に、新たな障害が。底の見えない深い崖を繋ぐ細いロープを使って、対岸へと渡る『ザ・フォール』。細く不安定な足場に一瞬たじろぐも、飯田はすぐに気を取り直して進んだ。

「大袈裟な名前だが、所詮は綱渡り！兄さんも見ているであろうこの場で、この程度の障害に止められるようなカツコ悪い姿は見せられん！」

『カツコ悪いイー!』

「高速よちよち綱渡り……!」

「もう少し名前何とかならなかったの?」

飯田の兄、「ターボヒーロー」インゲニウム。憧れの存在に格好悪い姿を見せたくないという彼の想いが、小刻みにエンジンを起動しながらロープを伝い走るといってもじやないが格好悪い姿を生み出したのだった。

実況のプレゼント・マイクが、後ろでその姿を見ていた緑谷が、それぞれ感想を述べる。

そんなこんな言いながら、続いて風華と緑谷が第二関門に到達。風華に関しては崖など飛行することで対処できる。しかし緑谷に関しては、5%フルカウルの出力では、素直に綱渡りをしなければ対応できないだろうと察してしまっていた。

「こればかりは個性の相性の差だね。わたしは先に行ってるよ」

「もちろん！すぐに追い抜いてみせるよ！」

空気の流れを操って自身を浮かせ、ザ・フォールを難なく突破して

みせた風華。それに続くように緑谷も走る。一切スピードを落とすことなく走り続けて、崖の際スレスレのところで大大きく跳躍した。

ジャンプするその瞬間にのみ、脚部を強化する個性の出力を怪我<sup>1</sup>しないギリギリ<sup>2</sup>%まで上昇させる。それまで立っていた足場を踏み碎きながらの連続ジャンプで、緑谷は崖を丸々スルーした風華に追いついてみせたのだった。

「瞬間解放……12%!!」

「……流石出久だ。やるね」

『鳴神に続いて緑谷が飛んだ！何だよチクショーせつかくの崖が意味ねーじゃねえか!!』

『片や空気を支配して空を飛び、片や強力な身体強化で縦横無尽に跳ね回る。あいつらの個性なら、この程度の崖じゃあ障害にもならないな』

緑谷はこのまま12%を継続し、出力の差でこれまで互角だった風華を追い抜いていく。みるみる内に小さくなっていく緑谷の背中を見て、風華は感心するように小さく笑った。

そして、足を止める。

更に続いてやってきた轟が、氷結でロープの太さを補強することで楽々突破。次に爆破を続けてペースを上げてきた爆豪が、空中を飛んで崖をスルーして突破。他はまだ、もうすぐ第二関門に差し掛かるといったところ。上位者が誰になるかはこの5人の中で決まるだろうと、観客席ではそういった予想が立てられていた。

「これが最終関門か！一見、ただの直線のようにだが何かあるというのだ!?!」

『先頭の飯田が早くも最終関門に到達だ！コイツは一面の地雷原『怒りのアフガン』!!飛べる奴対策に対空砲も用意してあるぜ！ちなみに威力は大したことないから安心しろ!』

『地雷の位置は、よく見れば分かる。目と足を酷使してしっかり探せ』遠隔操作されたのか、デモンストレーションとばかりに埋められた地雷の一つが爆発する。大した威力ではないとはどういうことかと言わざるを得ない規模の爆発が、飯田の前で生じた。

「何というエンターテイメント……!」

「追いついた!足が止まつてるよ飯田君!」

「緑谷君!?もうここまで追いついてきたのか!」

地雷を見極めて慎重に渡る飯田に、遂に緑谷が追いついた。飯田の動きを見極めて、ある程度地雷の位置を把握した上で彼を追い抜いていく。

ここで初めて、先頭が入れ替わった。

「勝つのは俺だっ……!」

「てめえら、俺の前を走ってんじやねえ!」

「一着、獲らせていただきます!」

『おーつとおー!ここで足を止めた鳴神に変わって3人が最終関門へとやってきた!熾烈な一位争いは更に混沌を極めていくぜえ!』

『氷結、飛行、跳躍……三者三様に地雷原を無視する手段がある。先頭を行く2人よりも有利だな』

轟は地雷原を氷で覆い、爆豪は対空砲の標的にならない範囲での飛行。遅れて追いついた葵は思いつきりジャンプして地雷原を跳び越える。既に3/4は踏破していた2人に、瞬く間に追いついた。

「行かせは……しない!」

「一位となるのは俺だ!」

「……よし、いこうか。『雷上動』」

緑谷と飯田も負けじと跳ぶ。地雷原を越えて5人が着地したその瞬間に、翠緑の電閃が閃いた。

「なっ……!?!」

「あれは鳴神のっ……!?!」

『雷上動……距離的に長過ぎて使えないって言ったのに!』

『これは予想外の結末!足を止めて上位争いを脱落したはずの鳴神が、目にも止まらぬ早業で一気にゴール!!障害物競走一着は、A組に閃く雷神!鳴神風華だ!!』

『足を止めたのは、高速移動に集中するためだったということだな』

「走り続けければ、当然距離は短くなる……いつかは使えるようになるよね」

「はあっ……いやられた!」

「俺の個性で遅れをとるとは……!何たる不覚!」

争う5人を出し抜いて、一着でゴールしたのは風華だった。もともと距離が長過ぎて、準備に時間をかけ過ぎるため使えなかった『雷上動』を、ある程度走って距離が縮まったので使ったのだ。光の速さの前には、どれだけ速くても流石に届かない。

二着は飯田天哉。三着は緑谷出久。少し遅れて四着が轟焦凍、爆豪勝己、立甲葵の同着であった。

「いやあ、やられちゃいましたね!」

「四着か……クソ」

「またっ……また、デクに……!」

悔しがる四着の3人。それを押しよけるようにして後続が次々とゴールを通過していく。やがて最下位が決まり、障害物競走は終わりを迎えた。

「それじゃあ結果をご覧なさい!」

1. 鳴神風華
2. 飯田天哉
3. 緑谷出久
4. 轟焦凍
4. 爆豪勝己
4. 立甲葵
7. 塩崎茨
8. 常闇踏陰
9. 瀬呂範太
10. 泡瀬洋雪
11. 鉄哲徹鐵
12. 切島鋭児郎
13. 尾白猿夫
14. 蛙吹梅雨
15. 障子目蔵
16. 砂籐力道

17. 麗日お茶子
18. 八百万百
19. 芦戸三奈
20. 口田甲司
21. 耳郎響香
22. 回原旋
23. 円場硬成
24. 上鳴電気
25. 骨拔柔造
26. 拳藤一佳
27. 穴戸獸郎太
28. 凡戸固次郎
29. 小大唯
30. 心操人使
31. 黒色支配
32. 取蔭切奈
33. 庄田二連撃
34. 小森希乃子
35. 鎌切尖
36. 物間寧人
37. 角取ポニー
38. 吹出漫我
39. 葉隠透
40. 癈目明
41. 峰田実
42. 青山優雅

「以上、42人が予選通過よ！」

## 第二種目：騎馬戦（1）

「さて！予選通過者の42名も決まったところで、今度は第二種目の発表よ！早速これ！」

「騎馬戦……！」

モニターに表示される第二種目。そこには大きくギラギラと光るフォントで書かれた『騎馬戦』の文字が映っていた。

ルールは簡単。今から15分間のインターバルが取られるので、その間に2〜4名から成るチームを作る。個性の使用は自由だが、悪質な騎馬崩し目的での使用は禁止。普通の騎馬戦と違い、騎馬が崩れても失格にはならない。では、どう戦うのか。

15分間の制限時間の間に騎手が付けているハチマキを奪い合い、終了時に合計ポイントの多い上位4チームを除いて全てが失格となるのだ。

すなわち、次に進めるのは最大16人となる。

ハチマキに書かれるポイントは、チームメンバーの持つそれぞれのポイントの合計。42位から5ポイントずつ、個人の持ちポイントが増えていく仕組みとなっている。

「もちろん、単にポイントが上がっていくだけじゃ面白くない！ということで一位の鳴神さん！あなたの持ちポイントは……とても奮発して10000000ポイントよ!!」

「……へ？」

まさかの八桁。状況の理解を拒むように間抜けな呟きが漏れ、それに呼応してこの場にいた全員が風華の方を向いた。

「雄英にいる以上何度も聞かされるよ！上へ向かう者には更なる受難を『更PLUS ULTRAに向こうへ！』」

「ふうん……面白いじゃん」

「それじゃあルールは理解できた!?今から15分はチーム決めタイムよ！交渉しなさい！」

「この体育祭ってさ、社会の縮図だよな」

「そうだな。ヒーロー社会の縮図だ」

雄英体育祭は、生徒達にヒーローとしての気構えを云々というよりも社会に出てからの生存競争をシミュレートしている。

ヒーローの飽和するこの社会、一人前のヒーローとして生活もしっかりとしてくれたためには時に、他人を蹴落としてでも活躍を示さなければならぬ時がある。第一種目の障害物競走はそういった、ヒーローの生臭さを示していた。

「あれ心苦しいですよ」

「貴様、心にもないことを……！」

その一方で、商売敵と言えど協力していかねばならないという時も往々にしてある。今から始まる騎馬戦のように。

他人の個性を把握し、人間的な相性も考慮し、持ちつ持たれつ。自分の勝利がそのまま、仲間にした者の勝利にもなる。

「プロが当たり前前をやってることを、子どもの内から当たり前のように学んでいるんですね」

「大変ですねえ……」

サイドキックとの連携や、他のヒーロー事務所との合同個性訓練。それを衆人環視の中で行う。

プロならば当たり前前のようにこなしていなければならぬさまざまな生きる術を、子どもの内から学んでいる。雄英の子は大変だな、と今を生きるプロヒーローは溢すのだった。

く

誰とチームを組むか。それが問題だ。

風華の持つ1000000ポイントは、ずっと持ち続けているよりも終盤で奪ってからキープする方がよほど効率的である。今から積極的に彼女と組もうとする者は、流石にいなかった。

「ふうちゃん！僕と組みましょう！僕の個性ならば鎧袖一触ですよ

！」

「……考えさせて」

アホを一人除いては。

葵と組むのが嫌な訳ではない。むしろ実力的にはとてもありがたい話である。しかしそれでも、風華は葵と組むことを躊躇っていた。5歳で個性研究所に入所してから、葵とは10年以上の付き合いがある。だからこそ知っている。この間抜けはごく自然に大きなポカをやらかすということ。

龍化中にくしやみをして、その弾みで伸びた尻尾が実験室のガラスを突き破り、たまたま近くにいた研究員に怪我をさせた。

父親のために料理をすと言って、キッチンで大爆発を引き起こし、隣室の風華の部屋を跡形もなく吹き飛ばした。

実技入試で、0ポイントから受験生を助けた自分に酔っている間に踏み潰され、戦闘不能になって試験に落ちた。

その後すぐに編入試験を受けて、合格したもののその喜びに舞い上がって車道に跳び出した挙句、トレーラーに撥ねられ昨日まで入院していた。

これら全部、ワザとではないのだから恐ろしい。正直、他のライバルと組ませて共倒れしてもらった方がありがたいと思っていた。まあ、今日が雄英初日の葵に、風華以外で気安く話せる相手なんてそういないだろうが。

「……ま、いいか。わたしと組もう」

「ありがとうございます！皆さん初対面ですから、お話しし辛くて大変だったんですよ！」

「他に、組むべき人は……」

「無視しないでください！」

騒ぐ葵を雑に制して、風華はあと2人の組むべき人材を探す。視野が広がったり、対応力の高い者が望ましい。次々とチームが決まっていく中、まだフリーな者の中から条件に合う者を選び、風華は話しかけた。

「猿夫、踏陰。わたし達と組まないか？」

「鳴神。それに、後ろのは……」

「立甲葵です！よろしくお願ひします！」

「どうして俺らを？」

風華は語る。数少ない候補の中から2人を選んだ理由を。

まずは尾白。彼の個性『尻尾』はそれ単体でも高い馬力を誇る上、第五の手足として自在に振るうことができる。それに、彼は武術を嗜んでおり身体の動かし方や警戒心には定評がある。USJ襲撃の時もほぼ一人で敵を凌いだくらいだ。

そして常闇。彼の個性『黒影』は自分の意思を持った影を動かすことができるというもの。彼を引き入れることができたなら、そのチームは実質一人分の得をすることになる。騎馬の警戒網をきめ細かくするためにも欲しい人材であった。

「俺は別に構わないっていうか、むしろ誘ってくれてありがたいと思ってるんだけど」

「俺は……悪いが、お前達とは組めない」

「……理由を聞いてもいい？」

「実は、俺は他のチームにも誘われている。奇しくも俺を誘った理由は同じであったが……それならば俺は、より高い壁に挑戦したい」

常闇が顔を向ける先には緑谷と麗日、それにサポート科の女子生徒がいた。どうやら彼はあのチームに入るつもりらしい。フラれたようなので、風華は大人しく引き下がった。

「分かった。本番では容赦はしないよ」

「望むところ」

「……行っちゃった。あと一人、どうするんだ？」

「フリーの子、連れてきましたよ！徹鐵君、空いてるなら組んでもいいそうです！」

「おい、まだ何も言っただねえぞ！」

「君は、B組の……」

フラれたなら仕方ない。考えてきたプランからは修正が必要になるが、新しい人材を探そう。そう思ってフリーの生徒はどれくらいいるのかと見回そうとしたところで、葵が鉄哲を連れてきた。どうやら

無理矢理連れてきたらしい。

「こっちの作戦、聞く？その場合、君がわたし達のチームに入ることは前提になるけど」

「……一応聞いておくれ。そういやアンタ、俺がA組に行った時いなかったよな。B組の鉄哲徹鐵だ、よろしく」

「A組に来てたの？」

「鳴神さんが休んでた時にね」

ふうんとだけ言って、風華は解説を始める。方針は基本的に防衛と逃走。最も大きなポイントを最初から持っている以上、他のチームのポイントを取りにくい意味はあまりない。それ故、絶対に1000000000は死守する必要がある。

要となるのは、風華の空気掌握による空気バリアと葵の龍化による尻尾を使った防御。尾白のも含めて四つの尻尾という射程の長い武器で、迫り来る敵を打ち払い続けるのだ。

鉄哲はこの場合騎手となる。個性『スタイル』の硬度を活かして、相手の搦手を払い除けポイントを死守する役割だ。

「空気を掌握したら、酸素を奪って窒息させることもできるんだけど。それはみんなの騎馬が崩れちゃうから今回はやらない。わたし以外全員倒れちゃうからね。後は、巻き添えにしちゃうかもしれないから電気も使い辛いかな」

「崩し目的と見做されかねないもんね」

「……まあでも、ただ逃げ回るだけじゃお客さんはつまらないだろうから。最初にこんなことをしようと思ってるんだ」

ひそひそと、他のチームには聞かれないうちに大事な作戦を伝える。確かに、ただ100000000ポイントを抱えて逃げるよりもこっちの方が面白いとみんな賛成した。鉄哲ももう、立派なこのチームの一員である。

「……！」

「なんだ……？」

「ああ……？」

この時、嫌な予感を察知したのが3人程いた。

5

「さあ15分が経ったわ！みんなしつかりとチームは組めたかしら!?  
それじゃあ始めるわよー!」

「よっし!それじゃあ頼むぜ立甲、鳴神、尾白!」

「もちろんです!」

「勝とう」

「みんなで頑張ろうね」

チーム鳴神

鳴神風華 1000000ポイント

尾白猿夫 150ポイント

立甲葵 195ポイント

鉄哲徹鐵 160ポイント (騎手)

合計 10000505ポイント

チーム緑谷

緑谷出久 200ポイント (騎手)

麗日お茶子 130ポイント

常闇踏陰 175ポイント

発目明 15ポイント

合計 515ポイント

チーム轟

轟焦凍 195ポイント (騎手)

飯田天哉 205ポイント

八百万百 125ポイント

上鳴電気 95ポイント

合計 620ポイント

チーム爆豪

爆豪勝己 195ポイント (騎手)

切島鋭児郎 155ポイント

芦戸三奈 120ポイント

瀬呂範太	170	ポイント
合計	640	ポイント
チーム塩崎		
塩崎茨	180	ポイント
回原旋	105	ポイント
泡瀬洋雪	165	ポイント
骨拔柔造	90	ポイント
合計	540	ポイント
チーム蛙吹		
蛙吹梅雨	145	ポイント
障子目蔵	140	ポイント
峰田実	10	ポイント
合計	295	ポイント
チーム砂籐		
砂籐力道	135	ポイント
葉隠透	20	ポイント
耳郎響香	110	ポイント
口田甲司	115	ポイント
合計	380	ポイント
チーム円場		
円場硬成	100	ポイント
物間寧人	35	ポイント
宍戸獣郎太	80	ポイント
小大唯	70	ポイント
合計	285	ポイント
チーム拳藤		
拳藤一佳	85	ポイント
角取ポニー	30	ポイント
凡戸固次郎	75	ポイント
吹出漫我	25	ポイント
合計	215	ポイント

(騎手)

(騎手)

(騎手)

(騎手)

(騎手)

チーム心操	
心操人使	65ポイント (騎手)
青山優雅	5ポイント
庄田二連撃	50ポイント
合計	120ポイント
チーム黒色	
黒色支配	60ポイント
小森希乃子	45ポイント
取蔭切奈	55ポイント
鎌切尖	50ポイント (騎手)
合計	205ポイント

運命の15分が、始まる。

## 第二種目：騎馬戦（2）

『さあ上げてけ鬨の声！血で血を洗う雄英の合戦が今！狼煙を上げる!!!』

「……俺がお前達を選んだのは、これが最も安定した布陣だと思ったからだ」

「俺が機動力とフィジカルを活かして先頭」

「私が創造による戦闘補助」

「俺が発電することで相手を牽制！てことだな！」

「……そういうことだ」

騎馬戦開始直前。

これからチームとなる3人に、轟は自分が彼らを選んだ意図と作戦を伝えていた。自身の知る情報で考えつく、恐らく最強の布陣。これならば第二種目も通過は楽勝……いや、1000000000ポイントを奪取して、一位に成ることも十分に可能だろうと考えていた。

いや、十分に可能程度では生温い。轟には何が何でも頂点を目指さなければならぬ理由がある。

「そして、轟君は氷と熱で攻撃、並びに牽制という訳だな！」

「いや……戦闘において、熱は絶対使わねえ」

視線の先にいるのは、日本のNo.2ヒーローエンデヴァー。プロでも有数の知名度と実力を持つ、トップヒーローの一人である。そして彼は、轟の父親でもあった。

そう、彼は一位にならない。憎むべきクソ親父が見ているのだから。

『よーし、騎馬は組み終わったな!?準備はいいかなんて聞かねえぞ！残虐バトルのカウントダウンが始まるぜ！』

「A組と組んだのか。まあいい、恨みつこなしだぜ鉄哲」

「おうよー！」

『3！』

「狙いは……」

「一つ」

「だけど……!」

『2!』

「勝つのはオイラ達だぜえ!」

「やる気だな……峰田よ」

『1!』

「先手必勝……手筈通りにいくよ」

「準備はバッチリですよ!」

「今更だけど緊張してきた……」

『スタートオオオ!!』

「実質これは、100000000ポイントの争奪戦だよね……つてえ! 何これえ!」

「うわあ!? ハチマキが飛んでくう!」

「ふふ……みんなのハチマキ、貫っていくよ」

開始の合図と同時に、吹き上がった風が多くของทีมのハチマキを巻き上げた。気流に乗って流れていったハチマキはその全てが風華の手に収まり、チーム鳴神のポイントとなった。

風華は第二種目が発表された頃から、会場内の空気の掌握に神経を集中させていたのだ。最初から高いポイントを持つ風華は、より他者から狙われやすくなるリスクを抱えている。どんなに逃げ回っても奪われる可能性はゼロではない。ならば、最初からより多くのポイントを奪って保険にしておもうと考えたのだ。

『チーム鳴神、風の力で一気に大量のポイントをゲットだ! こいつはズルが過ぎるぜ!!』

『第一種目が終わってからずっと、掌を上に向けていたな。あれは確か空気を操る力を使っている時の仕草だった。こうなる可能性をどこか見越していたんだろうな』

「鳴神さんの空気操作……! 嫌な予感の正体はコレだったか!」

「デク君よく気付けたね!」

「危ねえ……他の騎馬を崩さずに、ハチマキだけを的確に奪い取る。なんて精度だ」

『疾風迅雷』……いつ見ても凄まじい個性だ!」

「だが、俺に小細工は通用しねえ！」

「嘘つけ、めちやくちや焦ってただろ！」

「あの3チームには防がれたか」

「十分だと思いますよ！」

獲ったハチマキを騎手の鉄哲に預け、風華は前方を警戒する。ハチマキを盗まれたチームが一齐に襲いかかってくるころであった。

「たくさん来ました！龍化しますので体格の変化にご注意ください！」

「尾白！右翼の警戒頼んだぜ！」

「合点！」

「さて、ここから15分……逃げ切るよ」

龍化した葵の3本の尻尾が鉄哲を覆い、右翼側を尾白が、左翼側を風華が警戒する。

まず来たのはB組の拳藤が騎手を務めるチーム拳藤と、葉隠が騎手を務めるチーム砂籐。『大拳』の個性で巨大させた掌で強引にガードを剥がす構えの拳藤と、透明で挙動の見えないアドバンテージを活かしてハチマキを奪わんとする葉隠。

それに対してチーム鳴神が選んだのは、当然逃げの一手。風華が気流を操作することでチーム全員を浮かせ、各チームが突撃してきたことで手薄になった場所へと降り立つ。

「気を付けて！峰田のもぎもぎがある！」

「隙間がだいぶ狭いね……葵、足場注意してよ！」

「了解です！着地しますよ！」

「あいつは……確か、A組の障子だったな!?!後ろから来てるぞ！」

敵のいない所を選んで飛んだはずだが、そこには峰田が仕掛けていた大量のもぎもぎがあった。アレの拘束力はなかなかなもの、一度触れてしまえば龍化した葵のパワーでも簡単には抜け出せなくなるだろう。そうなれば風華が風で無理矢理剥がすことになるが、もぎもぎを剥がせるだけの風力は尾白か鉄哲を吹き飛ばしてしまう恐れがある。そんな致命的な隙を乱戦の中で晒す訳にはいかないので、これは絶対に避けなければならない。

葵が尾白と風華を両脇に抱え、一歩ずつ丁寧にもぎもぎ地帯を抜け出していく。そこに鉄哲の叫びが警戒を呼びかけた。視界を確保するためワザと開けていた隙間から、蛙吹の舌が的確に入り込みハチマキを奪おうとする。呼びかけを聞いて振り返る隙を狙われ、ハチマキを一つ取られてしまう。なんとか舌を振り払うことには成功したが、奪われたハチマキは取り返せなかった。

「よっしゃー！一つ獲ったりいー！」

「流石だ、蛙吹」

「ケロケロ、これが私の仕事だもの」

声は聞こえてくるが、その先には障子しかおらず峰田とハチマキを獲った蛙吹の姿はない。背中を覆い隠すように組まれている障子の6本の複製腕、そこに隠れているであろうことは容易に想像がついた。

「体格の大きい目蔵に隠れてるんだね」

「実質一人で騎馬やってんのか、力持ちだなー！」

「パワーなら僕も負けてませんよ！」

「で、どうすんの。ハチマキ取り返す？」

もちろん、そんなことはしない。まだまだ奪ったハチマキはたくさんあるし、そもそももぎもぎ地帯をまだ抜け出せていない。ポイントは惜しいが今は脱出を最優先である。

障子達も深追いはしなかった。不意打ちだからこそ成功した作戦であるし、何より。

「地面が沈んでます！何ですかこれ!？」

「骨抜の個性だ！鳴神頼む！」

「オーケー……徹鐵！猿夫！上だよ！」

「上っ……爆豪！」

B組、骨抜柔造がその個性で地面を柔らかくして葵の身体を沈ませていく。龍化して体格が大きくなったことで体重も重くなっている葵は瞬く間に腰まで沈んでしまったが、風華がすぐに風を吹かせることで引つ張り上げた。その瞬間、爆破による空中移動で飛んできた爆豪が襲いかかる。

「クツソ……うぜエ尻尾だ……!」

「そりやどう……もっ!」

これは尾白が尻尾でガード。先端の毛が焼き払われるも大した損傷はなく、逆に薙ぎ払いで爆豪を撤退させた。体勢を崩した爆豪は、瀬呂がテープで回収して騎上に戻した。そのまま睨み合いになるか……といったところで、背後からの奇襲攻撃。それによりチーム爆豪のハチマキが奪われてしまった。

「アア!? んだてめエ、返せ!」

「誰が返すかってんだい。単純なんだよA組」

ハチマキを奪ったのは、チーム円場の騎手である物間。爆豪が1000000ポイントに気を取られている間に、綺麗に漁夫の利を得ていった。

「ミッドナイトが『第一種目』と言った時点で極端に人数を減らすとは考え辛くないかい?」

「だから僕達はおおよその予選を通過できる目安を仮定して、その順位以下にならないように予選を走ったんだ。そして、後方からライバルになる者達の個性や性格傾向などを観察させてもらった」

その場限りの優位に執着したって、対極的に見れば無駄でしかないのだから。人參をぶら下げられた馬のように、仮初の頂点を狙うよりはよほど建設的だ。

物間は煽る。頂点に立つことに拘る爆豪の神経をこれでもかというほど逆撫でし続ける。

「ああ、そういえば君って有名人だったよね。今度参考に聞かせてよ『ヘドロ事件』のこと! 年に一度敵に襲われる被害者の気持ちってやつをさあ!」

「おいおい、その辺にしとけ……!」

ヘドロ事件。それは、オールマイトを越えたヒーローとなる爆豪にとっての汚点。絶対に他人には触れられない逆鱗に触れられ、たしなめようとする切島を黙らせて爆豪は遂にキレた。

「予定変更だ……1000000ポイントの前にまずこいつらを殺

す……！」

堪忍袋の尾が切れた。もともとの目標だった10000000ポイントすら捨て置いて、物間へとその矛先を向ける。

「……ヘイトが逸れたみたいだ。今の内に巻き添え食らわないように離れよう！」

「了解です！しつかり捕まっけてください！」

「……そう簡単にや行かせねえよ」

残り8分。戦いは佳境を迎えようとしていた。

く

「どうして僕達を狙うのかは知らないけど……人数の不利が誤魔化せてないよ！」

「ハッ、それくらいどうにでもなるさー！」

混戦の中、チーム緑谷もまた戦っていた。相手は唯一の普通科からの刺客チーム心操。虚な顔をした青山とB組の庄田を従えて緑谷の持つポイントを狙っていた。緑谷を狙った理由は単純に、今ポイントを持っている中で一番与し易いと判断したからである。

最初に、彼はまず常闇に話しかけた。本当は裏から発目にも話しかけていたのだが、無視されていたのだ。問いかけに答えた常闇は意識を奪われ、足を止めてしまった。

急に動かなくなったチームメイトに動揺して動きが混乱している間に、青山のネビルレーザーの連射が彼らを補助するアイテムを破壊する。サポート科の発目が加わったことで生じたアドバンテージを、チーム緑谷は一瞬にして無にされてしまった。

「黒影のお陰で正気に戻れたが……あの時俺は一瞬にして意識を奪われた！警戒しろ緑谷！」

「そうです私のバイビーみんな壊されたからもう補助できないですよ頑張りましょう！」

「うん……何とか逃げ切ってみせる！」

「みんな、頑張ろうね！」

チーム心操と対峙しながら、緑谷は彼の個性について考えを巡らせる。相手の正気を一瞬にして奪ってしまう恐るべき個性、いったい何をトリガーとして発動しているのか。考えられるのはいくつか。

まず、相手の眼や姿を見ること。これはもう何度もやっているのだから恐らく違う。

次に、声を聞くこと。彼はさつきからしきりに話しかけている。一定時間で有効になるのか、もしくは確率で相手をハメられるということか。

そして、もう一つ。そこかしこで轟音が響いているせいで分かり辛かったが、さつきの常闇は何かに返事をしてから様子がおかしくなっていた。その様子を不審に思った黒影に頭を叩かれたことで正気を取り戻したが、もしかしたら競技中ずつとこのままだったかもしれない。

「聞いたんだ。普通科の心操君だったよね。君が青山君にレーザーを撃ってって命令してるの。さつきの常闇君の様子からも考えるに……君の個性は恐らく『洗脳』といったところかな？洗脳したい相手との会話をトリガーとするタイプの」

「……だったら何だってんだ」

「みんな、口を閉じてて」

……だったら、君とは何も話さない。

問いには答えず、緑谷は心の中で言う。ふるふると首を横に振ったことで個性を看破されたことを察したのか、心操の声に焦りが混じるようになってきた。

「クッソ！何でだよ！お前らなんかたまたま入試と相性のいい個性してたからヒーロー科に入れたんじゃないか！」

「……」

答えない。黒影に殿を任せ、踵を返して走り出していく。それを見て青山にレーザーを撃たせたが、それは黒影によって防がれた。

「俺だってヒーローに憧れたよ！でもこの個性のせいでスタートが遅れちゃった！お前らみたいなお誂え向きの個性を持って生まれた奴らには分かんないだろうけどなあ！こんな個性でも夢見ちゃうんだ

よ！」

「……！」

「言えよ！少しくらい反論したらどうなんだ!？」

答えない。彼の心からの叫びに思うところが無いわけではない。むしろ彼のその気持ちは、緑谷は痛いほど分かっていた。

自分は無個性だったから。スタートラインに立つことを許されることもなく、無個性というだけで諦めてしまっていたから。

でも、彼は恵まれた。

ヒーローになれると言ってもらった。得られることなどなかったはずの個性を貰った。緑谷出久は人に恵まれた。だからこれは、単なる独り言だ。

「……だから僕も、負けられないんだ」

「デク君……？」

その独り言を、心操が聞いていたかはもう分からない。彼の姿はもう、遠く離れた緑谷からは見えなくなっていた。

「……くっそお！」

チーム緑谷の消えたその場に、心操の震えるような叫びが木霊した。

## 第二種目：騎馬戦（3）

「獲るぞ1000万。上鳴は放電を、八百万は伝導の用意を頼む」  
「いいのか!?多分鳴神にや効かねえぞ!?」

「大丈夫ですわ上鳴さん。私達の相手は鳴神さんのチームだけではありませんもの!」

「よっしゃあ!それいけ障子!」

「奪われた分取り返す!」

「10000000ポイント、リベンジだー!」

そういうことなら、と上鳴はありったけの電力を作り出して放電の用意をする。バチ、バチと黄色い電閃が上鳴に纏わり付くのを見て、八百万は電撃を拡散させるための棒と巻き添えを防ぐための絶縁シートを創造した。

騎馬全体を覆うように絶縁シートを被せる。完全に電撃の影響を回避してから上鳴が放電を開始。漁夫の利を狙おうと迫って来ていた騎馬を何組か感電させて停止させた。

無差別放電、130万ボルト。上鳴にできる中でほぼ最大の電撃が、数多の騎馬を襲った。

「アバつ、アババババつ!」

「上……鳴い……!」

「残り時間は7分ちよい……絶対に獲るぞ!」

「面白れえ、かかってきやがれ!」

「足を止めないように!」

『上鳴の放電で動きを止めてから改めて凍らせて完全に拘束する。障害物競走で結構な数に避けられていたのを省みてるな』

『ナイス解説!』

電撃によって足を止められた騎馬を、今度は轟の生み出した氷が拘束する。足下を完全に凍らされてしまっただけでは、単体でも機動力のある爆豪のような騎手しか動けない。しかし、凍らされた中にそんな奴はいないということ轟は把握していた。

肝心のチーム鳴神といえば、電撃の時点からしてピンピンしてい

る。彼女らに向けて放たれた電気は全て吸収されてしまい、逆にあちらのパワーアップに貢献してしまっていた。そうなればもちろん、氷結攻撃も避けられている。最も対策しなければならぬ相手が健在となっていた。

ダメだったものはまあ仕方がない。そもそも周りの野次馬を留め置くためにやったことなのだ、チーム鳴神に対して効果が薄いことは最初から分かっていた。

「葵、尻尾で牽制！一本だけでいいから！」  
「分かりました！」

百足のようになる龍の尻尾の一つが、飯田のエンジンによって高速で近付いてくるチーム飯田を牽制する。すかさず八百万が分厚い鉄板を創造してそれをガード。騎馬の3人を巻き込んで拘束する試みだったが、失敗に終わった。

「個性『創造』……やっぱ厄介だな！」

「いや……猿夫、それ以上に天哉だよ」

「飯田を？」

「個性研究所での訓練の中で、天哉はとにかく走り込みを繰り返してた。その中で新しい技を身に付けたみたいだけど……それをまだ使っていない」

緑谷が個性研究所で5%フルカウルの維持とその状態でのごく自然な行動、12%の瞬時の引き出しができるように訓練していたように。飯田もまた自身に課題を設けて、それをクリアするべく訓練に励んでいた。

彼の課題は加速力の強化。スピードが最高に達するまでに少し時間がかかるという、自身の弱点を克服するべく走り込みを続けた。

ひたすら実験室の長い直線を。研究所外のアスレチックコースを。ひたむきに走り続けた結果、彼は一つの結論へと至る。

今の自分に、この課題はクリアできない。

もともと、一朝一夕でクリアできるような課題とは思っていなかった。だから一応仕方のないことである。だが、それならばどうするべ

きなのか。

飯田の出した答えは「初速」の強化。初速と最高速の差を縮めることで、擬似的に加速を早めることにしたのだ。スタートする際の姿勢やフォームなどにも気を配り、個性を使うことも怠らず。これにより彼はスタート及び個性の強化に成功した。

更にアスレチックの複雑な動きを強要する地形を走り続けたことで、加速の維持もある程度可能になっている。その伸ばした力は、障害物競走で遺憾無く発揮されていた。

そしてもう一つ。スタートダッシュ強化のためにひたすらエンジンを回し続けた経験が、彼に新たな技をもたらした。一緒に訓練していた風華にも緑谷にも見せていない秘密兵器。彼のしてきた努力を知っている風華を警戒させるには、十分なプレッシャーを持っていた。

「なるほどな、そりや警戒だ！」

「僕が天哉君を見張っておきます！」

「俺は引き続き漁夫の利を防ぐよ！」

警戒は怠らない。二強の対峙は続く。

く

「なるほど、爆発性の汗をかける個性か。なかなかいいものを持っているじゃないか！」

「がっ……!?!」

爆発。掌の汗腺から分泌される、爆発性の成分を含んだ汗を使って行われる爆豪勝己の代名詞。だがそれは今、爆豪ではなく物間の掌で行われた。

すかさず反撃を仕掛けるも、それを物間は攻撃を受けた箇所を硬化させることでやり過ぐす。またしても現れた己と似た個性に、切島が「また俺と被る個性かよー」と叫んだ。

「違エ、こいつ……個性を『コピー』してやがる」

「正解！まあ馬鹿でも分かるよね」

物間寧人、個性『コピー』。

触れた相手が持つ個性を、自身で最大5分間使うことができる。ス  
トックしておけるのは2つまでであり、同時に使うということはでき  
ない。それ故に状況を判断して的確に使う必要がある、テクニカルな  
個性である。

「おわあ!?!何だこれ、動けねっ……!」

「凡戸か……仕掛けてきたな!」

「B組の中でポイントを持っているのは、お前達だけだ!残り時間も  
あと少し……逃げ切れ!」

追い討ちをかけるように、チーム拳藤の騎馬凡戸が個性で切島を拘  
束する。芦戸の酸で何とか突破を試みるも、その間にも物間はどんど  
んチーム爆豪から距離を離していた。

「ま、悪く思わないでくれよ?最初に煽ってきたのは君なんだからさ。  
えっと……何て言ったっけ?最初のあの恥ずかしいやつ!」

「……!」

「ま、いいや!お疲れ様!」

俺が一位になる。

開会式で言い放った自らの言葉が、爆豪の頭の中で繰り返されてい  
た。怒りのボルテージが引き上げられていく。

「ただの一位じゃねえ……!俺が獲るのは完膚なきまでの、誰も文句  
のつけられない完璧な一位だ!」

「おいつ、爆豪!」

く

『チーム飯田が氷結と機動力であつという間で首位に躍り出る!かと  
思ってたよさつきまではな!』

『フィールドを氷で覆って一対一の状況を作り、その上で戦っていた。  
鳴神の風なら氷は剥がせるだろうが、そうしたら自分のチームを崩し  
かねないからやらなかったな。有利状況を作ったまでは良かったが、  
決め手に欠けていたのが残念だ』

「残り時間はあと1分……！この調子なら逃げ切れそうだが！」

「警戒は怠らない！」

周りの邪魔を排除してから、轟はチーム鳴神と自分達の周りを氷で囲い強制的な一対一の状況を作り出した。無理矢理な脱出は自分の首を絞める結果となるし、飯田がいるおかげで機動力でもこちらが勝っている。それに氷を使って空間を更に限定していけば、身動き取れなくなってポイントを奪取できるはずだった。

で、あるのに。残り時間が1分になるまでチーム飯田がポイントを奪うことはなかった。常に轟の右手側に位置することで氷攻撃に対しては飯田が巻き添えになるようにし、無闇な凍結では逆効果になるように仕向けられていた。

電撃で足止めをしてもらう目的でチームに引き入れた上鳴も、風華の前では充電器。八百万が創造した道具は葵に弾かれて意味を成さない。完全に手をこまねいていた。

「残り1分か……ならばもう、いいだろう」

「飯田？何か策が……」

「轟君、この後俺は使えなくなる。しっかりと捕まってポイントを獲得のに集中してくれ」

「くるよ！警戒して！」

「遂に切り札切ってくるか！」

「しっかりと掴まっている！絶対に獲ってくれ1000万！トルクオーバー『レシプロバースト』！」

超加速。トルクの回転数を無理矢理上げることによって反動でエンストすることと引き換えに、爆発力を生み出す飯田の切り札。効果時間は約20秒程で、早くなり過ぎるために複雑な動きはできない。

それでも、風華が咄嗟に作った空気の壁と、葵の尻尾をぶち抜いてポイントを奪取するには十分な速度であった。

『逆転ー！チーム飯田、飯田の超加速によって1000万を奪取し急転直下一位へ！てか飯田そんな技あるなら障害物競走で使っとけよ！』

『何かしらデメリットが有るんだらうな』

「鳴神さん……君に見せたのも初めてだな。これが俺の切り札『レシプロバースト』だ！」

「流石天哉だ……やるね……！」

「クソ1000万取られた！取り返すぞ！」

「いや……ここは退きましよう！」

葵は取られた1000万を取り返すよりも、このまま撤退するべきであると進言する。あのポイントがなくなったところで、チーム鳴神はチーム蛙吹に奪われた120ポイントと最初に奪えなかった3チームのポイント以外を全て持っている。その合計は1910。全体二位であり予選突破圏内。

ならば残り時間も少ない中で、無理をする必要はどこにもない。残ったポイントを死守して、確実に次へ進むべきだ。そう結論付けた風華は、葵の案を採用することにした。

「……！退いたか……！」

「私達も防御に専念しましょう！」

1000000ポイントを奪取して、一躍首位となったチーム飯田もその場を離れてポイントの防衛に徹する。この時点で、騎馬戦の順位は半分が決まったようなものであった。

残り2チーム、勝ち残るのは誰なのか。

）

『残り時間は1分を切って、現在の首位はハチマキ2枚所持のチーム飯田だ！ガン逃げするチーム鳴神から10000000ポイントを見事奪い去りやがったぜえ！』

現在の順位はこうなっている。

- 1位 チーム飯田
- 2位 チーム鳴神
- 3位 チーム円場
- 4位 チーム緑谷

既上位4チームは全員キープに専念しており、最早順位が入れ替

わることはないだろうという予想が立てられていた。

「待てい！待て待て待てい！」

「しつこいなあ、その粘着質はヒーロー以前に人としてどうかと思うけど……」

「待てい！勝手すなあ爆豪！」

切島の叫びに気付き、振り向いた物間。嫌味を口にしつつ振り返ると、そこには爆破の推進力で迫ってくる爆豪がいた。

「円場、ガード！」

「了解！」

円場硬成、個性『空気凝固』。空気を固めることで即席の壁や足場を作ることができる。その強度は爆豪の爆破も通さない程である。爆豪の進行方向壁を作って、激突させて攻撃を防いだのだった。

舌打ちを残して、爆豪は瀬呂に回収されていく。刻一刻と終了時間が迫ってくる中で、遂に彼はプライドを捨てた。

「もう一回行くぞ！次で終わらせる！」

「おい！」

「ポイント取り返して、1000万に行く！俺一人だけじゃあ踏ん張りが効かねえ、お前らの協力が必要だ！力を貸せ！」

「……へっ！お前にそこまで言われちゃあやるしかねえな！」

「しつかり獲ってきてよね！」

瀬呂が進行方向にテープを貼り、チーム円場を警戒させて足止めする。そこに芦戸が弱めの溶解液を塗って推進力に。最後に爆豪が、ありったけの力を込めて爆発を起こす。

3人で協力したからこそできた、120%を超える爆発力によって繰り出された一撃は、円場のガードすら打ち破ってハチマキを奪い返した。

『爆豪、容赦なし！アレだなあいつは、完璧主義者ってやつだな！』『常に上を狙い続ける者と、そうでない者の差。爆豪の執念が勝ったって感じだな』

物間は、ヒートアップしやすい爆豪が与し易いと見て彼を標的に選んだ。惜しむらくは、彼の勝利に欠ける執念の強さを考慮しきれな

かったこと。明暗を分けたのは、そんな想いであった。

「次！1000万獲りに……！」

『TIME UP!』

「終わった……？」

「逃げ切れた、かな……」

「し、しんどかった……！」

「何もできなかった……！」

「ケロ……これじゃあ足りないわね」

プレゼント・マイクの大声が、騎馬戦が終了したということ伝える。そのままの勢いで最終種目への進出チームを発表。

1位 チーム飯田 10001125ポイント

2位 チーム鳴神 1910ポイント

3位 チーム爆豪 640ポイント

4位 チーム緑谷 515ポイント

以上、4チーム16人が最終種目へ駒を進める。

## 体育祭：幕間

最終種目は午後から始まるため、一日間に昼休みを挟むことになる。会場を去ろうと心操に、緑谷は慌てて声をかけた。

「心操君！君は、どうしてヒーローに……？」

「……憧れちまったもんはしょうがないだろ？」

彼は語る。幼い頃、住んでいた町で活動しているヒーローに憧れていたこと。彼の勇姿を見て、自分もあんな風になりたいと思ったこと。この個性のせいで、ずっと「ヒーローよりも敵に向いてる」だの「悪用し放題」だの「人気が出そうにない」だのとレッテルを貼られてきたこと。それでも受けてみた試験では、その内容のせいで何も活躍を見せられずに不合格になったこと。

彼の個性は『洗脳』。洗脳すると意識して他者に話しかけ、それに相手が言葉を返すと成立。自分の意思では動けなくなり、心操の出す命令を聞くことしかできなくなる。尚、「死ね」などといった洗脳された者に傷が付く命令や、心操自身を傷付けさせるような命令はできないし、あまり複雑な命令もできない。人間にしか効かない個性である以上、ロボット相手には何もできなかったのだ。

「……前にも言ったけどさ。ヒーロー科は編入枠をいくつか設けている。俺は必ずそこに入り込む！お前らがしている以上に努力して、絶対に編入枠を勝ち取ってやる！……じゃあな、緑谷。2年生になった時にまた会おう」

観客席で競技を見ていた普通科の生徒から、心操の健闘を讃える拍手が起こる。それを受けながら入場ゲートをくぐり、闇の中へと消えていく心操の姿はどこか、晴れ晴れとしているようであった。

「……うん。待ってるよ、心操君」

）

「……悪いいな、時間取らせて」

「構わないよ。それで、話ってなんだい？」

騎馬戦が終わった後、風華は轟に呼び出されて彼と一対一の状況となっていた。何やら話したい事があるようだが、生憎風華にはその内容の見当もつかない。彼が話し始めるのを、その辺の壁にもたれかけながら待ち続けていた。

「間違ってたなら、謝る。その……お前の家って『個性婚』はしてねえよな？」

「……へ？」

「してない、のか。すまん、変に疑っちゃまって」

個性婚。超常黎明期、人々に個性が芽生えて以降第二世代から第三世代で問題となったもの。より性能の良い個性を持った子どもを創り出すことを目的として為される婚姻のことである。

轟の父、No. 2ヒーローエンデヴァーは超えるべき目標としてオールマイトを常にライバル視していた。やがて自分ではオールマイトを超えられないと悟った彼は、高熱を操る自身の個性と相反する冷気を操る個性を持った女性と結婚する。自身の欠点であった熱が籠ってやがて個性が使えなくなるという点を、冷却する個性で解決しようとしたのだ。

もちろん、そう上手くはいかない。何人も子どもができて、その度に失敗してきた。それでも諦めずに妻に子どもを産ませ続けて遂にできたのが末子の最高傑作、轟焦凍という訳である。

エンデヴァーは幼い轟に何度も何度も辛い訓練をさせた。妻の静止も聞かず、轟をNo. 1を超えたヒーローにするために。優しくかった母を追い詰めていった父のことを、轟はそれはもう憎んだ。

エンデヴァーを否定する。やがて家庭で唯一父から守ってくれた母も失ってからは、それが轟の行動理念となった。両親から受け継いだ氷結と熱の個性の内氷結の方だけを置いてNo. 1となり、エンデヴァーなど必要ななかったと証明する。轟焦凍という男のたった一つの目標であった。

「俺の左側が憎い。段々とあのクソ野郎に似てくる俺のことを怖いと思ってしまう。母はそう言って俺に煮湯を浴びせた」

「……」

「悪いな。気分悪くなる話だっただろ。それでもお前には聞いてほしかったんだ。同じオールマイトを超えようとする者として」

「……わたしは。オールマイトに命を救われた」

去ろうとする轟に対して、風華も話す。妹以外の家族を失い、オールマイトによって救われるまで地獄を彷徨い続けた時のことを。

そよ風を起こし、少し痺れる程度の電気しか作り出せなかった個性が、地獄の中で出力を増し、怒りによって赫く染まったことを。

轟は目を見開いて驚いていた。親元を離れているということはいくらまでの話から分かっていたが、どちらも既に亡くなっているとは考えてもいなかったから。何かを言おうと口を開いた彼を、風華は「君の過去を聞かせてもらったから。わたしも話しただけ」と制した。

「オールマイトだけじゃない……わたしが今日まで普通に生きてこれたのは、個性研究所や小・中学校のみんなが普通に接してくれていたから。妹が無事に育ってくれていたから。そうした助けがあるからこそ、今のわたしが在る」

「……」

「わたしがヒーローを目指すのは、わたしを助けてくれたみんなのように、人を安心させてあげられる人になりたいから。焦凍に比べれば、わたしの動機なんて大したものではないけど。それでも、わたしだって負けるわけにはいかない」

「……鳴神」

「最終戦、例年通りだと一対一のトーナメント形式だったね。もし焦凍と当たったとしても、勝たせてもらうよ」

返事はない。ただ、小さくなっていくその背中が「受けて立つ」と雄弁に語っていた。

）

『予選落ちしたりスナーに朗報だ！あくまでこれは体育祭！全員が参加できるレクリエーションだって用意されてるのさあ！本場アメリカからチアリーダーも呼んでいっそうの盛り上げを……！』

「……」

「どうしたの、A組……?」

『ありゃあ?』

『なーにやってんだ、あいつら……』

視線を集めているのは、A組の女子陣。何故だか知らないが、雄英が招待したチアリーダーに混じって同じ格好をしていた。全員、この世の全てを恨むかのようにどこか遠い目をしている。

事の発端は、上鳴の一言。みんながチアリーダーをしているところを見たがった彼が、騙されやすい上に衣装を用意できる八百万を言うるめて女子陣に着させたのだ。

騙していることに気付いた峰田が珍しく止めようとしていたが、「でもお前も見たいだろ?」という言葉に嘘は付けずに結局やらせてしまう。その結果この状況が出来上がったのだ。

『午後は女子全員でチアやって応援合戦しなきゃいけないんだってよ!』

『そんなこと、聞いていませんけど……?』

「信じる信じないは勝手だけどよ、これは……相澤先生からの言伝だからなー!」

「騙しましたわね、上鳴さん!峰田さん!」

「ま、まあ息抜きくらいにはなるだろうし……」

「お茶子ちゃん、庇わなくていいのよ!」

ちなみに、葉隠の「面白そうだし、衣装も勿体無いからみんなで踊ろうよ!」という鶴の一声で結局みんなチアリーダーイングをすることになった。上鳴と峰田は後で必ずシバく、と共通意識も持って。

こうして、レクリエーションは過ぎていく。ちなみに、風華は轟に呼び出されていていなかったので不参加であった。代わりに参加しようとした葵が、足を滑らせてドミノ倒しのようにチアリーダー達を転ばせる事件があったが、それもまた一つのエンターテイメントとなった。

「よし……できた!」

『おつ、遂に準備が終わったみたいだぜ!最終決戦の始まりだ!』

『よくそのテンション保てるよな』

最終種目は一対一のガチマッチ。白線で囲われた範囲の中でその身一つで戦い、優勝する一人を決めるトーナメント。

勝利方法は『相手の場外』『相手が戦闘不能になるか、降参する』『審判によって相手が試合続行不可能であると判断される』の3つである。アイテムなどの持ち込みは、これまで通り公正を期すためどうしても必要になるもの以外は禁止。相手を殺してしまうや降参しても尚攻撃を続けるなど、ヒーローに有るまじき行為も禁止である。

一回戦の対戦カードは、これだ。

第一試合

緑谷出久VS立甲葵

第二試合

爆豪勝己VS麗日お茶子

第三試合

常闇踏陰VS八百万百

第四試合

鉄哲徹鐵VS切島鋭児郎

第五試合

瀬呂範太VS轟焦凍

第六試合

鳴神風華VS上鳴電気

第七試合

尾白猿夫VS芦戸三奈

第八試合

飯田天哉VS発目明

クジ引きで決まった組み合わせ。最初に戦うこととなった緑谷と葵が互いに目を合わせる。風華も、一番当たりたかった相手に当たったことで喜びの表情を見せた。

「ひいひい……いきなり爆豪君と……！」

「おい麗日」

「はひいー！」

初戦から爆豪と当たることになってしまい、勝てる気の無さに絶望しかける麗日。そんな彼女に発破をかけたのは、他でもない爆豪自身であった。「全力で来い。俺も、お前を全力で叩き潰してやる」そんな爆豪からの宣戦布告。

彼は、自分が超えるべきと認めた相手しか名前では呼ばないし、敬意も払わない。そんな彼が、自分の全力を超えてやると宣言したということはつまり。爆豪は麗日を超えるべき相手として見ているということであった。

「……うん。でも、勝つのはウチだから！」

「へっ、いい顔するじゃねえか」

組み合わせも決まり、第一試合に出る2人以外はそれぞれに割り当てられた控室か客席へ戻る。後はミッドナイトの一言で緑谷と葵がフィールドに立ち戦いが始まる。

「出久、葵の個性について教えておくかい？」

「立甲さんの個性？確か自分の身体を龍に変えるってものだったよね」

試合が始まる少し前に、風華は緑谷に対して葵の個性について説明をしようとした。今日から雄英に入ったばかりの葵は、その個性や能力について誰も競技で見せた分以上の情報を持っていないというアドバンテージがある。そこを少しでも埋めてやろうとしたのだ。

葵もまた、風華とは別のベクトルでやれることが非常に多い。風華も彼女の個性を全て把握しているわけではない。それでも、少しは情報に差がマシになるだろうと考えていた。

「気持ちありがたいけど、いいかな」

「そうかい？」

「うん……やっぱり、自分の身で情報を暴き出して勝ってこそだと思っからね」

「なら、いいね。応援してるよ、頑張ってるね」

『さあ、第一試合を始めるわよ！戦う2人はフィールドに来なさい！』

風華の申し出を、緑谷は断った。これまでもいろいろなヒーローでやってきて情報分析には少し自信があったし、自分でやってこそだと

思ったから。それを聞いた風華は、彼のことを尊重してそのままミッドナイトと呼ばれていった彼を見送った。

「相對するのは、これで二度目でしたか。僕の手を見せあげますよ、出久君」

「…………お手柔らかに頼むよ」

ー 最終種目『ガチンコトーナメント』ー

1年生の頂点が、ここで決まる。

## 最終種目：一回戦（1）

「ルールはさつき説明した通りよ！相手を降参させるか場外にさせるか、私達審判に続行不可能と判断させることで勝利となるわ！準備はいい!？」

「大丈夫です!」

「僕も、大丈夫です!」

お互い所定の位置に付き、ミッドナイトによる合図が出るのを待つ。鞭が振るわれ、戦いの火蓋が切つて落とされた。

### 一回戦第一試合 緑谷出久VS立甲葵

開始の合図と同時に、葵の姿が変わっていく。宝石のように輝く鱗が何枚も重なり合つて堅牢な甲殻となり、腰の辺りからは3本の百足を思わせるような長い尻尾が生える。まるでそれ自体が意思を持つかのように、尻尾はぐねぐねと蠢いていた。

牙や爪はより鋭利に。四肢はより太く、力強く。2mを優に超えた体躯に、最早小柄な少女の面影はない。幻想の頂点に立つ者、『蒼龍』の姿がそこにあつた。

変身する様を観察していた緑谷は、終わったとみると自身も『フルカウル』を発動。出力を5%に設定した個性を全身に巡らせる。強化されていることが見ただけで分かるような緑色のスパークが迸り、身体は紅潮するかのように赤く染まっていた。

「いくぞ、立甲さん!」

「何処からでもどうぞ!」

まずは突撃……と見せかけて、緑谷は12%の力を瞬間的に解放。地面を思いつきり殴りつけ、粉塵をフィールド全体にばら撒いた。

突然の視界を遮る一撃に、葵が警戒体勢を取る。右、左と見回して、何処から来られてもいいように体勢を取るが、緑谷が来たのは上からだった。跳躍の勢いで足に個性を起動し、全力で蹴りを放つ。咄嗟に守りに入った3本の尻尾ごと、葵の巨体を吹き飛ばした。

「惜しいっ……！もう一発！」

「そう何度もやらせませんよ！」

『緑谷、不意打ちで先制の一発！そのまま追撃を仕掛けていったあ！』  
『だが、動きが直線的だな。あれではすぐに対応されるぞ』

葵が後退した方向へ向かって、追撃の回し蹴りを放った緑谷。それを横つ飛びして避けると、鞭のようにしなる尻尾を使って反撃の一打を放つ。ジャンプしてそれを避けると、2本目が今度は槍のように鋭く襲いかかってくる。それも受け止めたところで第三の尻尾が緑谷を絡め取った。

拘束に成功した葵は、このまま緑谷を締め付けて意識をオトそうとする。もちろん、突破されても場外に落ちるように位置を変えて。場外か、戦闘不能かの二択を突き付けようとしたところで、緑谷は個性の出力を更に引き上げることで拘束を突破した。およそ40%程。超過こそしているものの、脱出を果たせる最低限の出力へと。

場外ギリギリで何とか着地した緑谷は、再び『フルカウル』を今度は12%で発動。一気に葵の懐に潜り込み、取っ組み合いの形を作った。拘束を脱するために、一瞬とははいえ許容上限を超える出力を出さざるを得なかった。全身の筋繊維がぶちぶちと音を立てたのがまだ耳に残っている。

正直なところ、これ以上はとでもキツイと緑谷は感じていた。しかし負けてはいられない。最後まで力を振り絞る。

『緑谷、何とか拘束を脱した！だがめっちゃくちや苦しそうだぞ大丈夫か!？』

『上限を超える出力を出しちゃったんだな。見た目で分かるような怪我はしてないが、相当な反動を食らっただろう』

「12%……さっきまで使ったのが、制御可能な最大出力と聞いていたのですけど。いつの間に成長したんですか……!？」

「ちよっと……無理しただけさっ……!？」

膠着状態が続く。互いに手を掴み合って、相手を場外へと押し出そうと力を込め続けている。だが、12%に加えて個性の反動を受けた緑谷と肉体的にほぼ万全の葵では、力にかなりの差ができていく。実

際に緑谷の方が押され始めた。

抵抗も虚しく、じりじりと場外に向かって押し出されていく緑谷。全身に脂汗を垂らしながら踏ん張り続け、それでもライン際まできてしまった。

「ふふふ……後もう少しですよっ……!」

「ぐぎっ……!ぐぎぎいい……!!」

「やべえよ鳴神い!緑谷のやつ負けちまうよお!」

「……勝機は有るよ。葵のやつ、もうほぼ勝ったものだと思って油断してる。その隙を突くことができれば……」

絶望する峰田に、風華はまだ勝機は有ると言う。緑谷は拘束を解くために、許容上限を超えた力を使って全身にロクに力を込められない状態となっている。その上龍化した葵と12%の緑谷では、葵の方がパワーで勝っている。このまま押し合いが続けば、緑谷は確実に白線を越えて場外負けとなるだろう。そこに彼の勝機がある。

葵はもう八割がた勝利を確信し、力を若干緩めてしまっている。爪が甘く抜けている、彼女の欠点の一つだ。何故緑谷がまだ押し合いに耐えられているのかという理由がそれである。その隙を突くことができたなら、まだ緑谷は勝利できる可能性が有るのである。

『緑谷ライン際で踏ん張る!いつたいいつまで粘り続けるつもりだあ!?!』

「そろそろっ……観念したらどうですかっ!?!」

「諦めて、たまるものか……!僕は……負ける訳にはいかないんだ!」

「でも、流石にもう限界のはずです……!このまま場外押し出しで終わ……わわっ!?!」

「まだ……終わってない!そして、僕の限界はここじゃない!」

『緑谷、立甲の巨体を持ち上げたあー!ウツソだろお前何処にそんな力残ってたんだよ!』

『全身が黒ずんでいっている……あいつ、限界を超えて個性を使っつてやがるな』

「よし……!そのままいけ!」

「頑張れえ!緑谷あ!」

「ここで決めなきや男じゃねえぞ！」

ワン・フォー・オール100%。己の出せる安全圏をぶち切った出力を出して、緑谷は葵のパワーを超える。許容上限を軽く超えた力の代償に、その四肢が瞬く激痛を伴いながら間に黒ずんでいく。

だが、気にしない。ここで出し切らずに負ける方がよほど辛いことだから。緑谷は痛みを振り切るべく、叫んだ。

『僕が来た』って……知らしめるんだ！」

「わわわっ、ぬ、抜け出せない!？」

『デラウェア……スマッシュ』!!」

体育祭の前に、緑谷はオールマイトと話す機会があった。彼の『個性』の、そして平和の象徴の継承者として、「君が来た！」ということを知らしめてほしいと。そう、オールマイトに頼まれていた。

正直、あまりピンときていなかった。いくら弱っているとはいえ、オールマイトは未だ健在だし、一生ないはずだった『個性』を貰えたことやそれに関してオールマイトに指導をしてもらえていることもあって、自分は恵まれ過ぎていると思っていた。これまで歩んできた人生が基本抑圧されてきたものであったことも起因している。

『常に上を目指す者と、そうでない者。その心構えの差は社会に出てから……いや、出る前の段階から大きく響くぞ』

その言葉を思い出した。個性を貰って、オールマイトに指導してもらって。それだけで満足してはいけないのだ。

緑谷が目指すべきは、オールマイトのような平和の象徴なのだから。

『緑谷ああ!!アイツ、龍化した立甲の巨体を投げ飛ばしやがった!ドームの掲示板すら越えてってるぞお!』

『飛行系の個性でもない限り、自由には動けない空中へしっかり遠くを目掛けて投げる……お粗末だが有効な方法だな』

「へぶうっーきゆううう……」

「PLUS……ULTRA!!」

「立甲さん、場外!緑谷君の勝ち!」

その瞬間、万雷の喝采が起こった。勝った緑谷と負けた葵の、両者

の健闘を称えて。緑谷は完全に青黒くなってしまった両手を見て、喝采を受けるのもそこそこに、そそくさとリカバリーガールの元へと向かうのだった。

その間、油断して勝てたはずの試合を落とした葵が風華の正座説教を食らっていたのだが、それを知る者は何処にもいない。せつかく騎馬戦ではいつものような大ポカをやらかさなかつたから、良いところまでイけると期待していたのにと、風華の怒りの声が狭い通路の中で響いていた。

#### 第一試合 WINNER、緑谷出久。

ある程度の治療を終え、次の試合で戦う麗日の控室へ足を運んだ緑谷。そこには既に、同じく激励に駆けつけていた女子陣や飯田の姿があった。「どうして女子に混ざって飯田君が……？」などと思ったが、自分のように友達として応援に来たのだろうと納得する。

「う、麗日さん。次試合だね、応援するよ！」

「うん……が、ががががんばりゆ」

「大丈夫なの……？」

「ケロ、きつきからずつとこの調子よ」

だったら少しでも緊張を解せるようにと、緑谷は懐にしまっていたノートを渡した。ずっと付けてきたヒーローノート。爆豪の個性や戦法について記した巻であった。友人に対して少しでも助けになればたらと思つての提案だったが、それを麗日は「ありがとう。でも、いい」とはつきりと断つた。

「騎馬戦の時、デク君と組む時に仲が良い人とやった方がいいって言ったでしょ？でも、飯田君がデク君に挑戦するってチーム組むのを断つた時、ウチはちよつと恥ずかしくなった。仲良いからとか言つてデク君に頼つてたんじゃないかって」

「麗日さん……そんなことを考えていたのか！」

「やっぱり、自分の力でウチは勝ちたい。だから、デク君の申し出はありがたいけど受け取れない」

『さあ第二試合が始まるぜ！戦うリスナーはさっさと会場にレッツ  
ゴー！』

「……いつてくる」

「……お茶子。勝己にも言ったけど、君にも言っておくよ。頑張ってくれよ」

「うん！デク君……二回戦で会おうぜ！」

全力のサムズアップ。力強く立てられた親指が、彼女の覚悟を表していた。緊張に震えていた面影はもう何処にもない。今の麗日は、困難を打ち破ろうともがく一人の戦士であった。

『さあ両リスナーが揃ったところで、お客さんらに紹介をしてやるぜ  
！』

『何でそんな偉そうなんだ？』

『言動はやべえが成績優秀！今年的一般受験で同率の主席合格を果たした爆発ヤロー！爆豪勝己！』

「んだところア！紹介に悪意有んだろ！」

『俺はこつちを応援したい！無重力系キューティール！麗日お茶子！』

『依怙最頂が過ぎるぞ』

「きゅ、キューティール……!?!」

「おい、麗日。棄権するなら今の内だぞ」

「……!?!しない！」

「そうかよ……なら、ブツ殺す！」

爆豪の言葉に、会場から非難が巻き起こる。だが彼がそれを気にすることはなく、掌を小さく爆発させてより一層の気合を入れていた。

対する麗日は、深呼吸を繰り返しながら震える足を止めるよう努めている。覚悟を決めたとはいえどA組でも三指に入る強者との対決。緊張は避けられないようであった。

「それじゃあ2人とも、準備はオーケー!?!」

「ああ」

「……はいっ！」

「それじゃあ始めるわ一回戦第二試合！爆豪勝己対麗日お茶子のス

ターゲットです！」

一回戦第二試合 爆豪勝己VS麗日お茶子

## 最終種目：一回戦（2）

「試合始まりましたね。両者に詳しいふうちゃんはどう勝ちが勝つと見ていますか？」

「詳しい訳じゃないよ。……てか、何で葵は此処にいるの？B組のシートは向こうでしょ」

「良いじゃないですか細かいことは！僕は何処にも友達がいらないんですから、せめて知り合いの近くにいたいんですよ！」

「わたしは友達じゃないわけ？」  
「親友です！」

はあ……と一つため息を吐き、風華は爆豪と麗日の試合について語る。ちなみに現在は、スタートの合図と同時に放たれた爆破を麗日が回避して超低姿勢で触れようとしてから、そこから麗日がどうやって爆豪に触るかという展開になっている。

風華は語る。そもそもこの対戦カードは、身体能力や個性の試合適正などで上回る爆豪が有利。

麗日の個性『無重力』は、相手に五指で触らなければ発動しないが、発動さえできればほぼ勝ちが確定する凶悪なものだ。しかし爆豪の個性『爆破』は必殺性こそ少ないものの、長いリーチと衝撃やダメージなどを活かして常に麗日を引き離す立ち回りができる。

爆破の際に巻き起こる粉塵に紛れたり、体操服の上着を掴にしたり、自分を無重力状態にして近付こうとしたりと、麗日は工夫を凝らして爆豪を触ろうとしている。

しかし。爆豪の警戒心は、そんな創意工夫を一切寄せ付けなかった。大きな怪我を負わせないようにセーブされているとはいえ、何度も爆破を食らって麗日は少しずつボロボロになっていく。上着を掴に使うため脱いでいたこともあって、より生々しい傷痕が露出してしまっていた。

「……現状、お茶子が勝己に勝てる手段はあの一っだけだろうね。あれが失敗すればもう、勝ちの目はないと思う」

「なるほど……今はそのための布石を打っているということなんです

ね！」

「そういうことだろうね。ただ、受けたダメージが多過ぎる。このままいけば……切り札を見せる前にお茶子は力尽きるだろうね」

何とか触れようとする麗日に対して、爆豪は彼女の反応を見てから動いている。煙幕による目眩しも上着の囿も関係ない。爆豪の超人的な反射神経の前には最早成す術がなかった。

『休むことなく突撃してるけど……これじゃあ』

『戦法が通じなくて……ヤケ起こしてるよ……』

「アホだね……アイツ」

「止めなくて良いのか……？ だいぶクソだぞ」

「……」

「まだ……ね……」

蹴り殺すように、じわじわと麗日を追い詰めていく爆豪に、次第に会場からブーイングの声が上がってくる。お茶の間で見ている視聴者から、観客席の一般人から、ヒーロー科以外の生徒から、警備の間に見ているプロヒーローから。

「クツソ……！ 見てられねえ！ それでもヒーロー志望かてめえ！ そんなに実力差があるならさっさと場外にでも放り出せよ！ 女の子いたぶって楽しんでんじゃねえ！」

「そーだそーだ！」

『一部からブーイングが！ しっかし悪いけど俺もそうおも……B o o ！』

『今遊んでるつつった奴プロか？ 何年目だ？』

ブーイングの嵐。特にその起点となったプロヒーロー達のいる方向へ相澤は一喝する。

『素面で言ってるならもう見る意味ねえから帰れ。帰って転職サイトでも見てろ』

「相澤先生……』

「此処まで上がってきた相手の力を見くびってもないから、認めてるから警戒してんだろ。本気で勝とうとしてるからこそ、油断も手加減もできねえんだろが』

そう、まだだ。まだ麗日の目は死んでいない。何度も爆発させてやったのに、麗日は勝利を諦めていない。だからこそ、爆豪は手を緩めることができなかった。

こういう奴が怖いのだと、知っているから。

「そろそろ……かな」

「あア？」

「ありがとうね、爆豪君……油断しないでくれて」

「……爆豪はともかく、観客席で見ているながら気付かなかったプロは恥ずかしいね」

「常に低い姿勢を取って爆豪の意識をや攻撃をより低く向けさせ、絶え間ない突進や煙幕でカモフラージュしながら武器を蓄えていた」

「く・ら・え!!」

流星群。

爆破によって抉れたフィールドの瓦礫を、煙幕で隠しながら上空に集めていた。爆豪に悟られないよう常に意識を下に向けさせ、瓦礫が全体に降り注ぐように。

これだけの物量で攻めれば、迎撃するにしろ回避するにしろ、必ず隙ができるはず。そこを狙って距離を詰めて、爆豪を触って浮かせる。此処まで何度も傷付きながらも、狙い続けてきた作戦。

「絶対、勝あああああつ!!」

麗日が吼えた。

「おおーお茶子ちゃん、あんな捨て身の策を用意してたんですね!」

「大したものだよ、本当に……でも」

ドカン!

極大の爆撃が流星群を迎撃。一撃で全ての瓦礫を麗日諸共吹き飛ばしてみせた。余波で転がっていく麗日は、そのままフィールドを型取る白線の外まで押し出されてしまった。

爆豪は最後まで油断しなかった。麗日は小細工の得意な緑谷とよくつるんでるし、何かどでかい「やらかし」をしてくるだろうと身構えていた。だからこそ、流星群に対応できたのだ。

「勝ち相手には、まだ足りなかった」

「残念でした、ねえ」

「……麗日さん、場外！爆豪君の勝ち！」

ミッドナイトのコールが響く。しかし、先の試合のような歓声など少しも起こらなかった。

立ち上がれないまま涙を流す麗日が、救護用ロボットに担架に乗せられて運ばれていく。その光景を一瞥し、爆豪は静けさに包まれた会場を後にした。

『ああ、麗日……爆豪、一回戦突破オメ……』

『私情すげえな』

「……鳴神」

「おめでとう。次、出久とだね」

通路を渡る爆豪。その途中で労いに来た風華とかちあい、足を止める。彼女の言葉は二回戦の緑谷との戦いを思い起こさせ、爆豪の神経を逆撫でした。

「……けっ、誰が相手だろうと叩き潰すだけだ」

「無理でしょ。君と出久とは、いろいろあつたつて聞いているよ。二回戦は『試合』なんてもものじゃないきつと、派手な『喧嘩』になるだろうね」

「……何が言いたいんだ、コラ」

「思うことはいろいろあるだろうけど。全部しつかりと出し切りだよ。こんな機会、そうそうないんだからさ」

男と男の戦いを期待している。そう言っつて、風華はシートへと戻つていった。

「どいつもこいつも。どこがか弱いんだよ」

第二試合 WINNER、爆豪勝己。

「次は……踏陰君と百ちゃんですな！」

「有利なのは踏陰の方かな。黒影は近中距離戦なら殆ど無敵に近い個性だし、創造は知識さえ有るなら何でも作れるけど。その「作る」工程を経なければいけない上にその作った物も、使わなければ効果がな

いしね」

一回戦第三試合 常闇踏陰VS八百万百

「ゆけつ、黒影！」

「ぐっ……！きやああっ！」

「八百万さん、場外！常闇君の勝ち！」

『コイツあしヴィー！常闇、八百万の創造したアイテムをもつともせず正面から振り伏せた！』

『剣と盾で馬鹿正直に戦うからだ。戦闘力で劣るのなら、何かしら搦手を用意するべきだった』

第三試合は速攻で決着した。スタートの合図と同時に片手剣と盾を創造した八百万に対して、常闇が黒影を突進させる。黒影の攻撃を盾で防いだところで、剣を持つ右腕を常闇が抑える。そのまま2人で八百万を押し出し、場外で勝利した。

「こうも簡単に負けてしまうなんて……」

「お前を警戒したからこそ速攻で終わらせた。もしも長引いていたなら、勝敗は分からなかったさ」

へたり込む八百万に対して、常闇が手を差し出し彼女もその手を取って立ち上がる。第二試合とは異なり、暖かい拍手が会場を包み込むのだった。

「決着、早かったですねえ」

「だね」

第三試合 WINNER、常闇踏陰。

「次は誰でしたっけ？」

「鋭児郎と徹鐵だね」

「同じような個性の2人ですか……能力的にはほぼ互角みたいですし、結果がどうなるか予想がつきませんね」

一回戦第四試合 鉄哲徹鐵VS切島鋭児郎

「うおおおお!!」

「ああああああ!!」

『火花散り、鉄片が飛ぶ!凄まじい殴り合いだ!』

試合はドロドロの泥試合となった。お互い防御力が相手の攻撃力を上回っており、ダメージを入れるには先にどちらかが根を上げるしかない。しかしどちらにも根性の男、相手が踏ん張っている以上自分が先に根を上げるにはいかないと気を張り続けていた。

「はあ……はあ……!鉄哲うつ!そろそろ降参したらどうだ!」

「誰がするかってんだ!お前が降参しやがれ!」

その結果、もう10分は殴り合いをしている。既にお互いスタミナ切れでへらへら、自慢の硬度も見ると影もない。服も皮膚もズタズタに破れて身体中青アザに塗れていた。

精神が肉体を超越している。まさにそう呼ぶのが相応しい、根性と漢気の戦い。

コイツには負けたくない。その一心であった。

「ぐっ……」

「があっ……」

「……両者戦闘不能!引き分け!」

『ダブルノックアウト!この場合はお互いが意識を取り戻してから、何かしらの方法で決着を着けてもらおうぜ!』

「引き分け……!」

「ここまで互角とはね。大したもんだよ」

その後、2人は腕相撲で決着を着ける。ここでもほぼ互角の2人であったが、最終的には切島が勝利を収めた。観客に見られない個室で行われたことが惜しまれる、爽やかな決着であった。

第四試合 WINNER、切島鋭児郎。

「……どけ」

「醜態ばかりだな、焦凍」

第五試合、出番が来た轟はフィールドに向かおうとしたところで最も憎む相手に邪魔される。「フレイムヒーロー」エンデヴァー、父親であり超えるべき最低の屑。無視して行こうとした轟だが、エンデヴァーはそれを許さない。

「左の熱の力を使えば、障害物競走も騎馬戦も圧倒できたはずだろ」  
「……」

「いい加減、子どもじみた反抗はやめろ！お前にはオールマイトを超える義務があるんだぞ！」

「……！」

「分かっているのか!?お前は出来の悪い兄さんや姉さんとは違う！轟家の最高傑作なんだぞ！」

「うるせえっ……！」

反論するその声には、焦りが窺える。

「それしか言えねえのか、てめえは！俺は右の……お母さんの力だけで勝ち上がる！戦闘で、てめえの力には頼らねえ！」

「今は良いとしても……すぐに限界が来るぞ」

足取りが速くなる。頭の中を支配する憎悪を振り切るように、既に見えてきている限界を必死に振り払うように。その姿を見て、エンデヴァーはフン、と鼻を鳴らした。

一回戦第五試合 瀬呂範太VS轟焦凍

## 最終種目：一回戦（3）

「なあ鳴神、俺ら次だし移動しようぜ」

「いいかな。わたしはここから直接いけるからね。なんなら電気も一緒に送ろうか？」

「……遠慮しとくわ」

「そう」

そんな会話をしながら、フィールドで相対する瀬呂と轟を見る。観客の注目は、あのエンデヴアアの息子が戦うところが見れるというところで轟の方を集まっていた。瀬呂は殆ど見向きもされていない。

『それじゃあ、第五試合を戦うリスナーを紹介するぜ！予選四位、一位と強すぎるよ君イ！ヒーロー科轟焦凍！』

「……」

『そして優秀な成績のはずなのに拭い切れないその地味さ！同じくヒーロー科瀬呂範太！』

「ひでえ」

プレゼント・マイクの実況に、瀬呂が小さく抗議の意を表明する。観客の声援に掻き消され、誰にも聞こえていなかったが。

「ルールはこれまでと同じよ！2人とも、戦う準備はできてるかしら！？」

「オツケーっす」

「ああ」

「それじゃあ開始よ！スタート！」

ミッドナイトの合図により、始まる第五試合。しかし両者いきなり動くという事はなく、瀬呂などはリラックスするかのようには首をゴキゴキと鳴らしていた。

「うーん……正直、勝てる気なんて全然しねえんだけどよ」

「……」

「かと言って、負けるかもねえ！」

轟を見据え、一瞬で膝の先から伸ばしたテープでぐるぐる巻きにして拘束する。瀬呂範太、個性『テープ』。その射程や強度、拘束力など

は、地味な見た目とは裏腹にとっても優秀なものであった。

そのまま場外に向けて轟を投げ捨てようとする。実況のプレゼント・マイクが『推薦入学者への下剋上なるか!』と煽るくらいには、瀨呂の優勢は予想外だったようだ。歓声がざわめきに変わるのを聞いて、流石にそれはないだろうと瀨呂は苦笑する。その眩きが聞こえたのは、そんな時だった。

「悪いな」

刹那。フィールドの半分を、天を衝く巨大な氷牙が覆った。直撃した瀨呂と余波を食らったミッドナイトが氷漬けになり、スレスレを氷塊が通った観客達が押し黙る。極度の低音に晒されたことでテープは碎け散り、轟は場外に飛ばされる前に自由の身となった。

「瀨呂君……動ける?」

「動けるはずないっしょ……いてえ……!」

「せ、瀨呂君行動不能!轟君の勝ち!」

『轟、結局瞬殺だったな!』

『無駄にデカいの出しやがって』

「いやあ、すごい規模ですねえ」

「あれは、撤去するのに時間かかるだろうね。もう少しゆっくりしてても大丈夫そうかな」

「俺は……何もゆっくりできない……」

轟が「苛ついてやり過ぎた」と謝りながら、瀨呂を縛る氷を溶かしていく。その間、ずっと瀨呂に対して「どんまい」コールがなされていた。氷を溶かすその背中が、何だか寂しげな雰囲気を感じているように風華は感じていた。

#### 第五試合 WINNER、轟焦凍。

氷の撤去作業が終わって、第六試合を始められる用意が整う。風力で飛行しながら観客席から着地した風華に、会場は大いに沸いた。『さあ。お待ちせしました第六試合!今回対するリスナーの紹介だ!爆豪と双壁を成す、もう一人の主席合格者!ヒーロー科鳴神風華

！』

「よろしくね」

『そしてスパークキリングビリビリボーイ！同じくヒーロー科上鳴電気！』

「気張るぜ」

「立甲さん、だったっけ？鳴神と友達なんだよね。この勝負どう見てる？」

「正直言うと、鳴神がどうやって上鳴を倒すが気になるところだよな。横綱相撲、的な」

風華が去った後も、特に気にすることなくA組のシートに居座り続ける葵。いるならコミュニケーションを取ろうと耳郎と砂籐が話しかけてくるのを聞いて、葵は2人の質問に「まあ、瞬殺でしようね」と答えた。

「電気君の『個性』は、ふうちゃんにとって見れば人型のバッテリーのようなものです。放電を全部吸われて頭をショートさせて、そのまま戦闘不能というオチでしょうね。それでなくとも、あの大して広くもないフィールドで、電気君がふうちゃんの風を耐えられるとは思えません」

「そう言われてみれば……誰ならあの風を耐えられると思う？」

「轟とか？氷で壁作れるだろ」

「爆豪とかなら根性で耐えそうだな！」

「緑谷君も風に負けないフィジカルが有るぞー！」

「そうですね。今挙げられた3人なら、大丈夫だと僕も思っています。酸素を奪われて窒息する未来が浮かびますけどね」

フィールドで向き合う2人をよそに、A組のシートでは風華の個性に耐えられる者についての議論が加速する。最早誰も、試合に関心を向けていなかった。治療を終えて戻ってきた麗日の「あのさ、試合見なくていいの？」の言葉がなければ、この試合はスルーされていただろう。

「それじゃあ試合開始よ！」

「……わたしはね、いつでもいいから絶対に電気と当たりたかったんだ」

「それは……どういう意味で？」

「こういう意味だよ。そう言つて、風華は左手でかかつてこいのジエスチャーをする。その動作に一瞬ムツとした上鳴だが、すぐにその感情は消える。風が彼の身体を浮かび上がらせ、風華の前まで有無を言わず連れ去っていったからである。」

「うおっ、ちよ、ちよおっ……！」

「それじゃあ電気。君の充電……貫うよ」

「アバ、アババツ、アババババアアツ！」

『上鳴の大放電が炸裂……いや、これはっ！鳴神のやつが電気を吸収しているぞお！』

『風に囚われた時点で、回避する手段はなかった。まあ、しょうがないな』

「エグいことしやがる」

「ただ負けるよりキツイよ、アレは……」

「うっへえ……」

頭を抑えつけられ、痙攣しながら電気を放出し続ける上鳴。次第に彼の表情から知性が抜けていき、やがて放電が止まる。もはや「ウエイ……」としか言えなくなった彼の両手は、力無きサムズアップが成されていた。

動かなくなった上鳴を、風華は丁重に担ぎ上げて場外へ降ろす。「いい電力だったよ。ご馳走様でした」と伝えて、仰向けのまま微動だにしない彼に両手を合わせて礼をした。

「か、上鳴君、場外！鳴神さんの勝ち！」

「対戦、ありがとうございます」

決着は着いたが、拍手はない。余りにも無慈悲でキツイ結末に、同情するばかりであった。

第六試合 WINNER、鳴神風華。

「……よっしゃ！次、私達だよ！行こう尾白！」

「あつ……ああ、うん。行こう」

試合が終わり、アホになつたままの上鳴を担いで風華はリカバリーガールの元へ向かう。それを見届けた第七試合を戦う2人は、さっきの試合のことを忘れることにしてフィールドへ向かった。

一回戦第七試合 尾白猿夫VS芦戸三奈

「あ。お疲れ様です、ふうちゃん。電気君は大丈夫でしたか？」

「安静にすればじきに戻るつて。それよりも試合はどうなってるの？」

「これから始まる場所ですよ」

葵は風華に第七試合はどのように展開していくのかと予想を聞く。他のクラスメイト達も2人の話に耳を傾ける中、風華は答えた。

「射程で勝っている、三奈の酸による攻撃。これを猿夫がどう攻略していくのかっていう感じになると思うよ。一度触れれば爛れてしまうような強酸による遠距離攻撃は強力だけど、それさえ越えてしまえば接近戦では猿夫の方が有利だからね」

「ではどちらが有利、と？」

「三奈の方かな。射程のアドバンテージを持つてるし、身体能力も高いからね」

『よっしゃあ！第七試合を戦うリスナーを紹介してやるぜ！まずはビッドポイズンガール！ヒーロー科芦戸三奈！』

「優勝を目指して！」

『ザ・普通！同じくヒーロー科尾白猿夫！』

「え……それだけ……？」

「それじゃあ2人とも、試合開始よ！」

「えつちよつと」

「しやあ尾白！くらえー！」

尾白の抗議を黙殺して、ミッドナイトは試合開始の合図を送る。狼狽える彼に対して、先制の酸攻撃が襲いかかった。

辛うじて尻尾をバネにして避けるも、毛先が酸に掠って焼ける。融け爛れた地面を踏まないように気をつけながら、芦戸に向けて構える。気を取り直した彼に隙はなく、お互い思うように動けなくなっていた。

「……よし！虎穴に入らずんば、虎子を得ず！」

「近付かせるもんか！焼けちやえ！」

『尾白が突撃！芦戸の酸を避ける避ける！』

『落ち着いて芦戸の動きをよく見ているな。最初からこれをやっつけてっんだ』

どんな強酸も、当たらなければ意味はない。芦戸が酸を発射できるのは掌であり、一度に出せる量は限られている。彼女にフィールド全体を覆えるくらいの酸を出せるのなら、この試合はすぐに終わっていただろう。しかし尾白は、的確に攻撃を避けつつじりじりと芦戸との距離を詰めていった。出せる箇所と量が限られているのなら、いくらでも避けようはあるのだ。

距離を詰められて、少しずつ焦りを見せ始める芦戸。尾白を尻尾の射程内に入れてしまえば、一気に不利になってしまう。そうなる前になんとか決着を着けようと、逸ったのが運の尽きだった。

「最大出力、アシッドポンプ！」

「ふっ……！当たらないよ、そんなの！」

「わわっ！くっそお……！」

「懐に潜り込んだ！」

「ここからは猿夫の間合いだ。形勢逆転だね」

こうなっては仕方がない。芦戸は腹部に叩き込まれた尻尾の一撃を受け入れ……そして掴んだ。

驚愕する尾白。だが、芦戸の身体能力はなかなかのものがある。くる場所さえわかっていれば、相手の攻撃を掴んで受け止めるくらいのことではできるのだ。胃の内容物を一部吐き出しながらも、尾白の動きを止めることに成功した芦戸。そのまま彼の尻尾を引っ張って、酸で

焼け爛れた地面に叩きつけようとする。

「げぼっ……！変形一本背負いいい！」

「負け……ないよ！芦戸さん！」

遠心力で宙に浮かぶ尾白。このままいけば、彼は酸に塗れた地面に叩きつけられて浅からぬ傷を負うだろう。しかし、そんな未来が訪れることはない。

尾白猿夫、個性『尻尾』。強靱な筋肉で構成された第五の四肢は、むしろ手足以上に柔軟な活動を可能とする。そう、たとえば。

「ガハッ……!?!」

「俺の……勝ちだ！」

『尾白、尻尾のパワーで逆に芦戸を地面に叩きつけた！痛そうな音だあ！』

こんな風に。尻尾だけで全身の重量を支え、その上で自在に動くことも可能なのである。背中を強く打ち付けて肺の中の空気を全て吐き出してしまった芦戸の四肢と頭を抑え、拘束。完全に万事窮したことを悟り、芦戸は「参った」と力なく呟いた。

「芦戸さん、降参！勝者、尾白君！」

「あく、負けちゃった！」

「はあ……疲れた……！」

#### 第七試合 WINNER、尾白猿夫。

一回戦最後の試合は、ざわめきから始まった。その原因は飯田にある。

ヒーロー科の生徒は、他科との公平を期するためにコスチュームやサポートアイテムの使用を原則禁止されている。にも関わらず、彼はサポートアイテムでフル装備していたのだ。

「飯田君……？それは……」

「これは発目さんから渡されたものなのです！俺もルールについては分かっています！しかし彼女は自分だけがアイテムを使うのは不公平だと言い、自分のアイテムを俺に差し出したのです！その心意気を

無碍にはいけないと！そう思ったのです！」

『で、アリなの？』

「うーん……両者合意だしいいかな！」

『適当だなオイ』

「絶対あの子、明ちゃん。そんな殊勝な性格じゃないですよね」

「まあ、確実に何か裏があるだろうね」

#### 一回戦第八試合 飯田天哉VS発目明

葵が懸念した通り、発目にフェアプレイを心掛けようなどという殊勝な気持ちはなかった。ミッドナイトによる試合開始の合図と同時にアイテムの補助を受けて走り出した飯田。その姿を見て、彼女は思いつきり叫んだのだ。

「素晴らしい加速です飯田君！」

「へ？」

『マイク……？』

「普段よりも足が軽いでしょう!?それもそのはずそのレッグパーツが、着用者の動きをフォローしているのです！」

「何をっ……！」

「そして私は、油圧式アタッチメントバーで攻撃を楽々回避！」

アイテム有りの追いかっこの中、発目の視線は観客席を向いていた。その中でも、サポートアイテム開発会社の関係者が座っている席を。

発目明、個性『ズーム』。視界を名前通りズームすることができ。本気を出せば、5km先だったくつきり見える。目当ての人物達がいっかりと自分のアイテム紹介に食いついてるのを見て、発目は満足そうに微笑んだ。飯田のことなど忘れて。

「鮮やかな方向転換！私の作ったオート balancer あってこそそのものです！姿勢矯正機能のおかげで動きの無駄が限りなく少なく……」

『何だこれ……？』

『商魂逞しいな……』

「いろいろ作ってるんですねえ」

「よく口が回るものだよ」

「あれ見て言うことがそれだけ？」

解説付きの鬼ごっこは、その後10分もの間繰り広げられ。そして全てを語り終えた発目は、自ら白線を出て降参した。走り回り口を回し、やり切った彼女の顔はとても晴れやかであった。

「もう思い残すことはありません！」

「騙したなあああ!!」

試合とは名ばかりの、発目の製品PRの場となった第八試合。飯田の慟哭とミッドナイトの投げやりな「勝者、飯田君！」の言葉が、この場を雑に締めたのだった。

第八試合 WINNER、飯田天哉。

## 最終種目：二回戦（1）

「出久」

「あ、鳴神さん。どうしたの？」

一回戦の試合が全て終わり、次は二回戦。第一試合を戦う緑谷は、フィールドに行こうとしたところで風華に呼び止められた。どうやら激励に来てくれたらしい。

「聞いているよ。勝己とは昔、いろいろあったんだってね」

「うん……そうだね。かっちゃんとは小さい頃から一緒に幼なじみってやつでさ。昔からずっとあんな感じなんだ」

「そうなんだ……でさ、出久。君はちゃんと勝己に勝ちたいと思ってる？」

「えつと……そりやそうさ。どうして？」

風華は飯田や麗日を経由して、緑谷と爆豪の関係性について少しだけ理解していた。2人は所謂イジメっ子とイジメられっ子の関係で、緑谷はずっと爆豪に虐げられてきたのだと。

どんな形であれ、緑谷にとって爆豪は日常的に暴力を仕掛けてきた相手。対人戦闘訓練では味方がいたこともあつてどうにか戦えていたようだが、一対一のこの試合で彼がちゃんと爆豪と戦えるのか。そこを風華は心配していた。

「確かに、かっちゃんは嫌な奴さ。すぐ怒鳴るし、性格悪いし、すぐ人を見下すし、そのくせ妙なところでみみっちいし。でもね、オールマイトを超えるヒーローを目指して努力していたことも知ってるから。そこだけは素直に凄いと思ってるんだ。嫌な奴なことは変わらなくても……彼は、僕の憧れでもあるんだよ」

「そんなことを……」

「でも、僕だって誓ったんだ。絶対に最高のヒーローになるって。だから彼には負けられない。憧れるのはもう止める。せつかくここまですぐで一緒になつたんだから、これからは切磋琢磨し合うライバルでいたい……僕はそう思ってるよ」

「……ふふ、いい夢じゃないか」

緑谷の胸に拳を当て、頑張つてこいと言う風華。そして最後にもう一言だけ加えて、彼を戦うべきフィールドまで送り出した。

「勝己には言いたいことも、思うことも、たくさんあるだろうけどね。そういうのは全部、拳に乗せて送っちゃえ」

「……そうだね。応援ありがとう、鳴神さん。僕からも一つだけ、決勝で会おうね！」

「そうだね。いつてらっしゃい」

悠然と、フィールドまで歩いていく。いつものオドオドした雰囲気は何処にもなく、その背中は頼もしさを湛えていた。

「ああ、緑谷少年もう行っちゃった」

「……オールマイト？どうして此処に」

緑谷の姿が見えなくなつてシートに戻ろうとした風華の前に、オールマイトが立ち塞がる。どうしてこんな所にいるのかと聞くと、彼は「私も緑谷少年の激励に来たのさ！」と答えた。

そういえば、オールマイトはいつも緑谷のことを過剰なまでに気にかけていたなと思ひ返す。正直嫉妬心を覚えた風華だが、憧れのヒーローの前でそんな感情を表に出すような真似はしない。努めて平静に、オールマイトと会話を始めた。

平和の象徴は話が長い。ようやく風華がシートに戻れた時には、既に第一試合は終わっていた。

## 二回戦第一試合 緑谷出久VS爆豪勝己

『さあしばしの休憩も終わつて、始まるぜ二回戦！第一試合を戦うのはコイツらだあ！ヒーロー科緑谷出久！並びに、ヒーロー科爆豪勝己！勝利の女神はどちらに微笑むのか！』

『戦闘能力的には爆豪が上手だ。だが、ここまでで緑谷もだいぶ個性が成長していることが分かってるからな。それでどう差が埋まっているのかが勝負の分かれ目だな』

「……かつちゃん」

「ああ？」

「僕は、君に勝つよ。君に、挑戦させてもらう！」

「生意気言ってるんじゃないぞ、クソデク……！」

互いに構えを取り、戦闘開始に備える。2人の間にある微妙な雰囲気を感じ取ったのか、観客席からは応援も野次も聞こえない。静けさの中で、2人は勝利のために集中力を高めていた。

「それじゃ始めるわよ……試合開始！」

「先手必勝……デトロイトスマッシュ！」

「やらせるかよ、クソが！」

「因縁の戦い」

「どっちが勝つのかねえ……分かんねえや」

「爆豪有利だとは思っけど……緑谷も爆豪のことはよく知ってるし、対策立ててるだろうし。確かにどっちが勝つか分かんないかも」

「立甲さんよ、アンタはどう見てる？」

「あ、僕ですか？そうですねえ……より意地っ張りな方が勝つ。そう思っていますよ」

意地っ張りな方が勝つ。戦闘能力や相性を丸ごと無視した感情論に、質問した砂籐が首を傾げる。しかしそれに対して葵が解説を加えることはなく、ただ一言「見ていればきつと分かりますよ」とだけ答えた。

まずは緑谷の右ストレート。顔面狙いの一撃を爆豪が右フックで迎撃する。互いの攻撃の威力は互角のようで、この一撃は両者共に弾かれて痛み分けとなった。爆豪がすかさず爆速ターボで距離を詰め、反撃の一撃をぶちかますのを、緑谷もフルカウルで防御力を高めて受ける。そのまま爆破のために伸ばした腕を掴み、爆豪を背負い投げた。

受け身を取り、追撃を食らう前に離れる。一瞬の睨み合いの後に、2人は同時に駆け出した。

「がっ……!?!」

「こういう時は……右の大振りがくる！」

カウンター。爆豪の癖として、初撃に右の大振りを選びやすいというものがある。緑谷はそれを読み切って爆撃を掻い潜り、ボディブ

ローを右脇腹に突き刺した。肝臓を激しく揺さぶられ、爆豪が苦悶の声を漏らす。

さらに追撃。身体を「く」の字に折った爆豪の顎を目掛けてアツパーカット。下を向いていた頭を思いつきり跳ね上げた。

『緑谷、容赦なし！これはいいモン入った！』

『爆豪の動きをしつかり読んで動いているな』

『はあ……クツソがあ……！』

「どうしたんだい、かっちゃん。動きにいつものようなキレが無いよ！僕なんかには負けないんじゃないやなかったのか!? 対人戦闘訓練の時みたいにボコボコにしにはこないのか!？」

「うるせえっ……黙れ！」

「僕のが嫌いなんだから!? 体育祭で一番になるんだろ!? だったら何で、僕なんかには手こずってるんだ！」

「黙れって言うてんだらうがっ！」

爆豪が叫ぶが、緑谷は気にしない。自分の言葉を紡ぎ続ける。

「僕だって、君のことは嫌いだよ。言いたいことはたくさん有るし、勝つために君を蹴落とす覚悟だって決めてきた！なのに何で、君がその覚悟を決めていないんだ!? 開会式で俺が一位になるって言うてたのは嘘だったのか!？」

「うるせえっ……！てめエに俺の何が分かる！」

「怒鳴るな！そんなことばかり言うてるからいつも会話にならないんだよ！何年も同じ学校に通ってるのに、それでも僕らが分かり合えた時なんて一度もない！君がいつもそうやって怒鳴って、コミュニケーションを取ろうとしないからだ！言いたいことや伝えたいことがあるなら、ハッキリと言葉にしなきゃ分からないよ！」

緑谷が爆豪の襟首を掴み、地面に叩きつける。フルカウルによって強化された身体能力で強く打ち付けられ、肺の中の酸素を全て吐き出した爆豪。ゲボオ！と、酷い音が響いた。

倒した爆豪に馬乗りになりながら、緑谷は自身の心情を吐露する。2人は幼なじみでありながら、これまで腹を割って関わり合ったことがない。緑谷はこの試合をその機会にしようとしていた。

しかし、何故か爆豪の歯切れが悪い。これでは腹を割って話すこともままならないし、何よりいつも傲岸不遜で自意識過剰な爆豪が自分程度に遅れをとっているということが緑谷には許せなかった。

緑谷に、爆豪の心は分からない。だが、これではまるで爆豪が緑谷に対して何か負い目を持っているようではないか。

「がふっ!？」

「……俺は、ずっとためエのことが嫌いだった」

顔面に爆破を食らわせ、緑谷を引き剥がす。ゆっくりとした動作で立ち上がると、爆豪はぽつぽつと語り始めた。

「昔から、ずっと！無個性のくせに俺の前にでしゃばって！何の躊躇いもなく人助けができるためエが嫌いだったよ！何で俺を助けられる!？俺はためエのことをずっと遠ざけてたんだぞ！なのにいつもいつも、性懲りもなくヒーローの真似事しやがって！心の底ではヒーローになんかなれっこないって！無個性にヒーローなんか務まらないってずっと思ってたんじゃないのか!？」

「かつちゃん……」

「今までずっと、俺が一番だったんだ！ためエは俺の下だっただろうが！何でいきなり個性を出してんだよ！これからもずっと俺が一番で！オールマイトを超えるまで、誰にも負けるはずなんてなかったんだ！なのにてめエは俺と同じ土俵に立って！雄英ではためエにも鳴神にも轟にも八百万にも虚仮にされた！今日来たばかりのポツと出にも並ばれてB組のカスにも出し抜かれて！ためエから始まって俺の人生設計はもうめっちゃめっちゃだよ！」

『あー、こりゃミュートしとこうかな』

『体育祭は喧嘩の場じゃねえんだぞ……』

心情を吐露する爆豪。過激な叫びの数々は、プレゼント・マイクもミュートして聞こえなくすることを選択する程。そんなことも戦う2人が気にすることはなく、爆豪は心の底に溜まったものを吐き出し続けた。やがて、息を切らして肩を上下する。

「僕はね、かつちゃん。君の強さにずっと、憧れてきたんだいつも自信に満ちていた君の背中、僕はとてもかっこいいと思ってた」

「俺は、誰よりも強かった。誰よりも優秀だった。お前は一番弱くて、凄くなくて。だからお前が俺を助けようとするのが気に入らなかつた。誰であろうと助けるために動けるお前のことを、怖いと思つていた」

2人の顔は、憑き物が落ちたかのようである。

「もう、君に憧れるのはやめる」

「もう、てめエを怖がるのはやめだ」

個性が、躍動する。

「一番になるために！君に「てめエに勝つ！」

両者の意地が激突する。長年奇妙な関係でい続けた幼なじみであり、今は互いの夢のために乗り越えるべき相手。ライバルとして、鎬を削る。

「何だ、なんか言い合つてると思つたら！」

「いきなり続きを始めたな」

「腹に溜まった鬱憤を吐き出して、楽になつたんでしよう。ここからが本当の勝負ですね」

最早、試合とは名ばかりの殴り合い。駆け引きも何もあつたものではない。殴つて、蹴つて、爆破して。高校生の……それもヒーローを志すような者がやつていい戦いではなかつた。

「いい加減倒れやがれ！」

「そつちがね！」

「デクはデクらしく、やられてりやあいんだよ！てめエは這い蹲つてる姿がお似合いだ！」

「そう言うかつちゃんこそ、最近落ち込んでる姿がお似合いだつたよ！」

「んだとオ!？」

「事実じゃないか！」

『何だよこりや、ガキの喧嘩じゃねえか！』

『観客のいる中で何やつたんだか……』

「止めなくていいのか？」

「先生なんか震えてるぞ？」

「男の子の青春って、こんな感じなんでしょっか」

売り言葉に買い言葉。どちらかが相手を口汚く罵れば、応じて同じように罵声を返す。一緒に拳と蹴りをセットで添えて。

口元が切れ、青痣が広がり、身体中が腫れ上がっていく。決着が近いことを表すかのように、動きが段々と鈍くなってきた。

緑谷は爆破で上着が粉々になり、爆豪は顔面が歪んだ母のようになっていた。それでも尚倒れないのは、「コイツに勝ちたい」という意地が身体を突き動かしているからだろう。

「デトロイト……スマッシュ！」

A・Pショット  
「徹甲弾！」

渾身の右ストレートと、一点に集中させた爆撃が激突する。その結果、緑谷の腕が弾かれて大きな隙を晒した。爆豪はそれを見逃さず、頭を抑えつけて拘束する。馬乗りになって胴体も抑え、片手で細かい爆破を繰り返して脅迫するのも忘れない。

「がっ……！はあっ……！」

「俺の……勝ちだ！」

「そこまで！爆豪君の勝ち！」

「お疲れ様でした。いい勝負でしたよ」

勝利宣言と同時に、ミッドナイトによる試合終了のコールが為された。激しい喧嘩が終わって安心したのか、静まり返る会場で葵の拍手の音だけが小さく響いていた。

「負けちゃった、かあ……」

「おい、デク」

「何だい？かつちゃん」

「これで終わったわけじゃねえからな。次も、そのまた次も、勝つのは俺だ」

ニヤリと笑う爆豪。その表情にもう、試合前のような緑谷への忌避は感じられない。同様に、倒れたまま爆豪を見上げる緑谷の目にも彼への恐れや嫌悪はなくなっていた。

まだまだ、蟠りが完全になくなった訳ではない。それでも、少しは健全な関係に戻れただろう。共に同じ頂を目指すライバルとして。

「……いいや。次は僕が勝つよ」  
「言ってる」

第一試合 WINNER、爆豪勝己。

## 最終種目：二回戦（2）

「お疲れ様。どっちも酷い有様だね」

「バカにしに来たなら帰れ」

「しかし何も言い返せない」

試合後、風華はリカバリーガールの元へと運ばれた2人の見舞いに来た。治癒されたおかげで真っ黒焦げになっていた緑谷も、潰れた母になつていた爆豪も一応見てくれは改善している。しかし完治はどちらもしていないため、ベッドに入れられていた。

爆豪は試合後、直接生徒用シートに戻ろうとしたそうだが、救護口ポに強制的に連れてこられたらしい。試合後で個性も使えない程消耗していたために抗えなかったそうだ。

「2人とも、いい顔してる。仲が悪いって聞いているのが嘘みたいだね」

「まあ……あれだけ好き放題言えばね」

「仲良いように見えるのか？コレが？」

試合ということも忘れて、本音を出し合い喧嘩したからか。それまで2人の間にあった険悪な雰囲気はどこにもなくなっていた。教室内の不仲が少しだけとはいえ改善したことに、風華は安心したように微笑んだ。

「ごめんね鳴神さん。全部拳に乗せちゃえっていうアドバイス、実践し切れなかったや。それに決勝で会おうって約束したのも守れなかった」

「いいよ、気にしなくて。その分勝己に頑張ってもらうからさ」

「勝手に決めんな」

「それじゃあわたしは行くから。2人ともちゃんと試合見て休むんだよ」

救護室を後にして、自分の控室を目指す風華。その道の中で、意外な人物に出会った。

「おや、こんな所で会うとは」

「……エンデヴァー？」

日本のNo. 2、「フレイムヒーロー」エンデヴァー。轟の父親であ

り、先程悪評を聞かされたばかりの人物と遭遇してしまった。

警戒し身構える風華とは裏腹に、エンデヴァーは気さくに彼女に話しかける。しかし、その目は少しも笑っていない。何処かここではない遠い何かを見据える眼が、風華には酷く不愉快に感じられた。

「君の個性、凄まじいな。空気と電気を自在に操り使いこなす。高校生どころか、プロでもここまで強力な個性を自在に操れる者はそう多くない」

「……ありがとうございます」

「君の個性は、二つの個性の複合という点でウチの焦凍にそっくりだ」  
「……それが、何か」

「第三試合、君との戦いは焦凍の力を周りにアピールする良い機会となる。くれぐれも第一試合のような、無様な試合はしないように頼むよ」

エンデヴァーは言う。轟焦凍には最高傑作としてオールマイトを超える義務があると。そのためにも風華に踏み台になってほしいと。それだけのために彼は、わざわざ風華を探していたのだ。

なるほど、こいつはクソ親父だ。風華は昼休みに轟から聞いていたことが事実であると痛感した。

だが、それはそれとして。

「無様な試合なんてしませんよ。わたしが……この体育祭で、優勝するんですから。それに……」

「それに？」

「焦凍には、焦凍の人生が有る」

返事など、聞かない。風華も言いたいことだけを言って、エンデヴァーからそそくさと距離を離していった。

## 二回戦第二試合 常闇踏陰VS切島鋭児郎

『さあ第二試合は、ヒーロー科常闇踏陰VS同じくヒーロー科切島鋭児郎！黒き闇の使徒か、鋼鉄の化身か！軍配はどちらに上がるのか!?!』

『数に勝る常闇が一応有利だな』

「常闇！恨みっこなしだぜ！」

「当然！全霊で戦うのみ！」

「立甲さん！どっちが勝つと思う!?」

「お、私も聞きたい！B組目線の分析！」

「うーん、難しいところですね。本当なら踏陰君が勝つと言いたいですけど……彼は個性の使い方が勿体ないんですよ。その分上手く立ち回ることができたなら、鋭児郎君にも十分勝機があると思いますよ」

「勿体無い？」

葵曰く、常闇は『個性』の使い方に無駄があるという。せっかく自分とはほぼ切り離して動かせる第二の自分があるのに、そちらに戦闘をほぼ任せ切りにして『数の優位を取りやすい』というアドバンテージを放棄してしまっているのだ。

黒影は確かに強力だし、一回戦のようにそれ単体でも多くの手札を抱える八百万を一蹴できる実力がある。しかし、それにかまけているのかそれとも制御が難しいのか。黒影が動いている間、常闇自身は殆ど棒立ちであった。黒影が自由に動ける中距離の間合いなら勝ち目は無いだろうが、近距離まで寄ることができたなら十分勝機は有るだろうという見解であった。

「それじゃあ第二試合……始め！」

「おっしやあああああ！」

「ゆけっ、黒影！」

全身を硬化させ、突撃する切島。それを常闇の黒影が迎え撃つ。懐に潜られたらほぼ負けということを理解している常闇は、常に切島から距離を取るように立ち回る。

対する切島は、実体が薄く触り辛い黒影を相手に苦戦を強いられていた。相手からは普通に触れるのに、自分から触ろうとすると擦り抜けてしまう。その上力も強く、硬化による防御力の上昇がなければパンチの一発でも意識を刈り取られているだろう。八百万とは違い男子ということもあって、常闇も容赦がない。防御力を維持しつつ、何

とか黒影の突破を試みる。

お互い、一瞬でも集中力を途切れさせてしまった方が負けると分かっている。その一瞬を掴むために神経を研ぎ澄ませていった。

「……もう始まつちやってるか。どうなってる？」

「おかえりなさい、遅かったですね。黒影ちゃんと鋭児郎君が、我慢比べをしているところですよ」

「ちよつといろいろあつてね……踏陰め、せつかく自分はフリーなんだから黒影のサポートとかやればいいのに」

エンデヴァーとの問答を終えてシートに戻ってきた風華は、隣の方から簡潔な説明を受ける。常闇ではなく黒影が切島と我慢比べをしているというのを聞いて、「なぜ個性の方で呼んだのか」などではなく「やっぱりね」という感想を漏らした。

常闇の強みは、今回のようなシチュエーションで強制的に二対一の状況を作れることである。なのに戦闘は黒影に任せきりで、数の有利を彼は生かし切れていない。ちよつとしたダメ出しが出るのもそれに対して「なるほど」と返事が来るのも、ある意味当たり前のことであつた。

「おうらあー」

「くつ……黒影、背後に回れ！」

実体のない黒影の腕を振り払い、切島は決して自分を掴ませない。時に殴られ吹き飛ばされながらも着実に、常闇との距離を詰めていった。

指示によって背後に回る黒影。その僅かな間に切島は常闇目掛けて一目散にダッシュし、一気に接近していく。そうはさせまいと腕を伸ばした黒影をヘッドバットで退け、動揺した常闇に全力のタックルをぶちかました。

「おお、惜しい！」

「威力が足りなかったね。でも、もう終わりだ」

「悪いな常闇！これで……終わりだあ！」

「ぐふつ……！」

白線ギリギリで踏みとどまった常闇に、間髪入れずに膝蹴りを叩き

込む。右脇腹にクリーンヒットしたその一撃で、常闇は腹の中身を散らしながら場外へと転がっていった。ミッドナイトの「常闇君、場外！切島君の勝ち！」という宣言を聞いて、切島は大きくガッツポーズをした。

『決着うー！ベスト4の2人目の座は、切島鋭児郎が勝ち取ったあ！』

『少ない隙を、最小の動きで活かし切った。黒影の攻撃に耐え続けたタフネスの賜物だな』

「いい勝負だったね」

「どっちが勝ってもおかしくありませんでした！」

お腹を抱えて蹲る常闇に、切島は立ち上がれと手を差し伸べる。その手を掴んで立ち上がった彼に肩を貸し、そのまま2人はリカバリーガールの元へと向かった。その光景を見て、多くの観客が惜しみない拍手を送り両者の健闘を讃えたのだった。

「さて……次はわたしだ」

「応援してますよ。頑張ってきてくださいな」

第二試合 WINNER、切島鋭児郎。

『さあさあ始まるぜ第三試合！ここで優勝候補同士の激突だ！ヒーロー科鳴神風華と、同じくヒーロー科轟焦凍の登場だ！』

「悪いが……手加減はできねえぞ」

「へえ……じゃあ、左の力も使うのかい？」

「……」

「それとこれとは別って訳だ。……舐めるなよ」

「何だ、鳴神のやつ……怒ってる？」

「いつもよりバチバチしてんな」

「焦凍君と何かあったんでしようか？」

二回戦第三試合 鳴神風華VS轟焦凍

ミッドナイトが試合開始を宣言する。同時に轟が個性により多量

の氷を創り出し、風華に目掛けてぶつける。それを『吹き荒ぶ風』<sup>チーフストーム</sup>で迎え撃つ。暴風が氷を砕いて一面にばら撒き、風圧で轟を吹き飛ばした。自身の背後に氷壁を創って持ち堪えるも、その表情は厳しい。

間髪入れず、再び『吹き荒ぶ風』<sup>チーフストーム</sup>を放つ。今度は前面に氷壁を創ってガードするが、無意味だと言わんばかりに風の弾丸は氷壁を粉碎した。

「くっ……なんて風圧だ！」

「まだまだ……こんなものじゃないよ」

再三放たれる『吹き荒ぶ風』<sup>チーフストーム</sup>。前面と背面、さらに足元も氷結させて固定しなければ飛ばされてしまう風圧。戦法を殆ど完封されていることに歯噛みする轟だが、対策ができない以上は同じようにやるしかない。氷を生み出してぶつけるしかなかった。

しかし、どんなに大きく、分厚い氷を創っても風の弾丸が砕いてしまう。このままでは制限がきてしまうと、轟の顔に焦りが見え始める。

『氷が生えれば、風が刈り取る！カケラがキラキラ光って幻想的な光景ができてるぜえ！』

『今のところは鳴神が有利だな』

『轟君……何だか動きが鈍くなってる？』

『あんなバカスカ氷出してんだ、身体冷えんだろ』

個性は身体機能。爆豪の個性は掌から爆発性の汗を出すというものだが、やり過ぎれば汗腺を傷付けるし脱水症の危険がある。それと同様に、轟の個性も使い過ぎれば身体が冷えて身体能力が下がるといふ危険があった。事実、氷結攻撃の繰り返しで彼の身体には霜が降りている。

「焦凍、動きが鈍くなってきてるね」

「それがどうしたっ……!?!」

「氷の個性の弊害でしょ？身体に霜が降りて、白くなってるよ。でも、それって……熱の個性を使えば解決するんじゃない？」

「何が言いたい！」

『まーた何か喋ってんな。今度も喧嘩かあ？』

『体育祭を何だと思ってるんだ、こいつら……』

「みんな、一位を目指して本気で戦ってる。もう敗退した子も、勝ち進んだ2人も、わたしだってそうだ。この場で本気を出していいのは焦凍だけなんだよ。わたしは、本気でかかってきて欲しいよ」

「うるせえっ……!」

「それに、昼休みに聞いた話は……エンデヴァーを全否定する、そのために氷の力だけでN.O.1を目指すって話。アレを本気で言ってるのなら、焦凍を勝ち進ませる訳にはいかない。ヒーローが憎悪で動くなんて、あつてはならないからね」

「うるせえって言うてるだろ!?お前だって風ばっかりで、電気のを使つてないじゃねえか!それと俺の何が違うってんだ!」

全然違う。風華が電気のを使わないのは、せつかく上鳴に増やしてもらった電力を無駄遣いしないためである。

風華は0から電力を作り出せるが、一度に多くの発電はできない。そのため、『纏雷』や『雷上動』などの自家発電だけで十分に電力が賄える技以外を使おうと思えば、相応に時間を掛けるか外部からの充電に頼る必要があるのだ。轟が氷結攻撃しかしてこないと分かっている以上、無駄に電力を消費する必要はないのである。

温存と縛りでは、やっていること自体は同じでも大きな違いがあるのである。

「全然違うよ。君の舐めプと、わたしの電力温存が同じなはずがないだろ」

「舐めプだどっ……!?!」

「そうだよ。今だって互角なんだ、わたしが電力を解放すれば……」

「なっ……はっや……!?!」

風華が『纏雷』の身体強化を利用し、一気に轟との距離を詰める。轟は目の前に現れた風華を退けようと右手で触ろうとするが、間に合うはずもなく鳩尾、首、顎と連撃を叩き込まれ撃沈した。風華は倒れた轟の首元を押さえつけながら馬乗りになり、苦しそうに咳き込む彼に呟くように告げる。

「思い知ったでしょ?瞬殺だよ。君が熱の力を使っていれば、わたし

は炎の回避を優先してたからこんなことにはならなかったかもね」

「黙れ……俺は、親父を否定しなきゃならねえんだ！こんな忌まわしい力なんか無い方が良かったって、証明しなきゃならねえんだ！」  
「よつと……それも、君の個性だろう」

右半身から出した氷柱で、自身を拘束する風華を貫こうとした轟。しかし、身を翻して風華はそれを回避した。自由の身になった轟は首元を押さえながら立ち上がり、風華の言に反論する。いや、論にもなっていないただの叫びである。

風華は言う。その「元」がどんなに忌まわしい者であろうと、その力は他ならぬ轟自身のものであるのだと。それを出し切りもせず、オールマイトを超えてエンデヴァーを完全否定するだなんてふざけたことを言うなど。

「……あんな氷結くらい、お前ならどうでも対応できただろ。何でわざわざ避けたんだよ」

「本気でなければ、意味がないんだよ。本気の焦凍と戦って、その上で勝たなければ何の意味もないんだ。エンデヴァーの方ばかり見て、他を省みようとしない君に勝っても仕方ないんだよ」

「……それでもっ、俺は「焦凍」

「わたしの、眼を見てくれよ。今、君が戦うべきはわたしだ。ちゃんとわたしを見ろ！」

……ははっ。

そんな声が、聞こえた気がした。

「何で、こんなにするんだよ」

「言ったでしょ。オールマイトのようなヒーローになりたいって。わたしの理想像……命を守り、背中を支え、人々に安心を齎せる者。わたしは……君のことだって、支えたいんだよ」

「……ははっ、あははははは！」

轟音と爆炎が、周りに散る氷塊を散らした。

『何だこりゃあ!?爆発が起きたぞお!』

『散々冷やされていた空気が、いきなり高熱に当てられたことで膨張したんだ』

「左……戦闘では使わないと言っていたのに！」

「遂に、縛りを破った……！」

轟焦凍、個性『半冷半燃』。右半身で低温を、左半身で高温を操ることができる。シンプル故に応用の効く二つの個性が掛け合わさった、最強クラスのハイブリッド。今までずっと縛り続けてきた左半身の力を、彼は遂に解放した。

「敵に塩送るような真似しやがって……どっちがふざけてんだって話だ。勝ちたいんじゃないのかよ」

「……それとこれとは、話が別さ」

いつの間にか、忘れていたことを思い出した。

幼い頃に母と見た、オールマイトの勇姿。液晶越しでもひしひしと伝わる彼の強さに、幼い頃の自分は憧れたのだ。だから自分は、ヒーローになりたいと思ったのだ。No. 2の父から母を守るような強いヒーローに。

憎しみに……復讐に囚われている間に、こんな大事なことを忘れてしまっていた。

——なりたい自分に、なっていないんだよ。

「俺だって……ヒーローに……！」

「やっど、いい顔したじゃないか」

## 最終種目：二回戦（3）

「焦凍オオオオ!! ようやく己を受け入れたか! そうだいいぞここからがお前の真の始まり! 俺の血を継ぎ俺を超えて、俺の野望をお前が果たすのだ!」

『何だエンデヴァー激励か? 親バカ?』

『そんなもんか?』

遂につまらないエゴを捨て、左の力を解放した息子を最大の賞賛を以って祝うエンデヴァー。持てる力の全てが解き放たれて、『轟焦凍』がエンデヴァー……もとい『轟炎司』の完全上位互換となったことへの喜びを余すことなくぶちまける。

その勢いで彼を卒業後は絶対に自分の事務所に来るんだと勧誘するが、風華と相対する轟は彼のことなど意識もしていない。完全に無視されているともなれば、流石に黙るしかなかった。

「何だ、焦凍のやつ……笑っているのか?」

く

『焦凍、見るな。お前と兄さん達では、生きるべき世界が違うのだ』

『お母さん、私もうダメなの……! 焦凍の……あの子の左側が、時折とても憎く見えてしまうの!』

『おかあさんは?』

『お前に危害を加えたので入院させた。これからは大事な時期だというのに、まったく……』

『ふざけるな……お前のせいじゃないか……!』

思い返される、過去の記憶。

『個性というのは親から子へ……そして子から孫へと受け継がれていきます。しかし大事なのはそういった繋がりでなく、個性とは文字通り自分のものであるのだ! 自分の力であり血肉なのだと認識することです! そう意味もこの言葉には籠っているんですよ。……私が来た! ってね』

『オールマイト、カッコいいなあ！ぼくもあんな風になれば、おかあさんを守れるのかな……』

『ふふ……ありがとう、焦凍。でもね、そんなことを気にする必要はないのよ』

——いいのよ、お前は。エンデヴァーに……血に囚われることなんてない。

——なりたい自分に、なつていいんだよ。

「……凄い熱気だ。いい顔するじゃないか」

「何笑つてんだよ。どうなつても知らねえぞ」

冷やされ続けていた空気が大きな熱気を受けたことで膨張し、その反動で大爆発を起こす。風華自体はノーダメージだったが、攻撃ように保持していた氷塊は全て砕かれてしまっていた。

互いに最大攻撃を用意する。風華は大量の空気を押し固めて放つ『吹き荒ぶ大風』<sup>パンバーストーム</sup>を。それに電力を加えて、電気のを乗せる。

対する轟はといえば。両掌を合わせて真っ直ぐに風華へと向けていた。右の冷氣と左の熱気が絡まり織り重なって、莫大なエネルギーを内包した一つの塊となつていく。

イメージするのは、かつて見た映画。エンデヴァーに課された虐待じみた特訓の合間を縫って、母が見せてくれた昔の特撮。主人公が戦っていた怪物が自分と似たような力を持っていたから、印象に残っていたのである。

これは、その怪物が使っていた技。冷氣と熱気という相反する二つの力を合わせることで、その反発で莫大なエネルギーを生み出す。こうして生み出された莫大なエネルギーは、向かうもの全てを貫く強靱な槍と化するのだ。

「最強の一発で、決着を着ける。風で吹き飛ばして終わりよりはよっぽど面白いんじゃない？」

「……そうだな。ちゃんと生きてろよ」

「何というエネルギーの奔流だ……！」

「空気がめちやくちや揺れてるのが、こっからでも分かるよ……！」

「あんななんに向けるもんじゃねえって！」

「さて……どれ程のものか、見せてもらいますよ」

「いくよ……『吹き荒ぶ大風・荷電』」

「……超温差光線」

二つの膨大な力が激突する。万物を貫く氷炎の槍が、雷の速さを得た暴風をくぐり抜けて風華の頬を掠める。同時に暴風は轟に直撃し、背後に創り出された分厚い氷壁ごと彼を観客席まで吹き飛ばした。客が大事を取って離れていたことで、空席となっていた座椅子に頭をぶつけ、轟は意識を失った。

「轟君、場外！鳴神さんの勝ち！」

「……対戦、ありがとうございます」

「終わった、か……」

「いやあ、凄まじい威力でしたねえ……見て下さいよあれ、綺麗に穴が開いていますよ」

「轟君が飛ばされた所、粉々になつとるわ……」

『ベスト4も3人目までが決まったぜ！フィールドを修復するまで第四試合はお預けだな！』

『尾白と飯田はちゃんと用意しとけよ』

### 第三試合 WINNER、鳴神風華。

審判を務めたミッドナイトに一礼し、風華はリカバリーガールの元へと向かう。風華がこの試合で受けたダメージといえは、最後の超温差光線が掠った時の一つのみ。それも皮膚が少し裂けた程度で、流血すらしていない無傷のようなものだ。

「……当たってたら、死んでたね」

裂けた右の頬を触りながら、さっきの試合を思い返す。最後に撃たれた超温差光線とかいう技。アレは自分の『吹き荒ぶ大風・荷電』をバンパーストーム・ライトニングいとも簡単に貫き、その背後の壁に大きく穴を開けていた。充電の約

半分も使った超必殺技が破られたことは、流石に風華もショックであつた。

外れたからいいものの、身体に当たっていたなら確実に即死するレベルの一撃であつた。加減くらいしてくれ、と苦笑する。それでも轟が自分に課した枷を破れたことは、素直に喜んでいた。

「失礼します。焦凍、いますか？」

「ああ、アンタかい。そこで寝てるよ、用があるならその座椅子使いな」

「ありがとうございます」

「……鳴神か。俺は、負けたんだな」

ベッドに寝かされていた轟は、既に意識を取り戻していた。その薄い表情からはエンデヴァーへの憎しみや、風華に負けた悔しさなどは感じ取れなかったが、どうやら試合前のような不安定な状態にはなっていないようであつた。

壁際から座椅子を一つ取り、轟が横になっているベッドの隣に寄せる。落下防止用のベッド柵に膝をつきながら、風華は轟と会話をする。

「左の力、使ってみてどうだったかい？」

「……思ってたよりも、悪くはなかった。けどやっぱコントロールが甘えな。あの肝心なところで外しちゃった」

「むしろ外れて良かったよ。アレが当たってたらわたしはお陀仏だったからね。人に撃つ技はちゃんとそれ相応の威力にしくちや」

「……悪かった」

試合の内容やその反省点などについて話を膨らませていると、扉を勢いよく開けてエンデヴァーが入ってきた。ベッドに寝ている轟を見つけるや否や、風華のことなど眼中にないとしてもいうように彼の元へと駆けつけた。

「エンデヴァー……ここでは静かに……!」

「焦凍!よくやったぞ、コントロールはまだまだ危なっかしいが、これでお前は晴れて俺の完全上位互換となった!卒業後は俺の元へ来い!No.1への覇道を歩ませてやる!ようやく子どもじみた駄々を

捨ててくれたな！」

「……そう簡単に、捨てられるわけねえだろ」  
「!?」

「何年お前を憎んできたと思ってるんだ。そう簡単に覆せる訳がねえだろうが。でも……あの時だけは。あの一瞬だけは、お前を忘れられた」

エンデヴァアの眼を見ず、轟は語る。風華は邪魔をしないように静かに2人の話を聞いていた。

「それが良いことなのか、悪いことなのか、正しいことなのか……少し考える。治癒してもらった後で身体がダルいんだ、そつとしてくれ」

「……そうか。安静にするんだぞ」

「……案外、すんなり引き下がったね」

「流石に、自分の子どもだからね。それなりに気は遣うんだろうさ」

エンデヴァアが去った病室で、テレビから第四試合の始まりを告げるコールが流れる。見ると、次の試合を戦う2人がフィールドに揃い踏みしていた。

「それじゃあ、わたしは戻るよ。安静にしてね」

「ああ、わざわざ見舞いに来てくれてすまねえな」

#### 二回戦第四試合 尾白猿夫VS飯田天哉

『真面目な2人の対決だあ！ベスト4最後に滑り込むのはいつたいどっちだあ!』

『スピードで勝る飯田が有利ではあるが……上鳴VS芦戸、常闇VS切島の時のように、相性差を覆して勝つことも有り得る。それに基礎能力に優れる者同士……勝負がどちらに転ぶかは分からんな』

「それじゃあ始めるわよ！用意はいい!」

「はいー!」

「準備万端です!」

「あれ？鳴神のやつ戻ってきてきてねえのか?」

「救護所じゃないかな。ちようどさつきすれ違ったし……」

「ほう……戦いから芽生えるもの……」

「ないと思いますけどねえ」

構えを取り、集中する2人。尾白は尻尾を地面に付けて踏ん張りが効くようにして、飯田はエンジンを蒸していつでも最高のスタートを切れるように用意する。

「天哉君は恐らく、あのレシプロバーストとかいう技を使うでしょう。普通の格闘戦では、武術に長ける猿夫君に分が有るでしょうからね」

「勝負は飯田次第って訳か」

「どちらにせよ、勝負は一瞬……!」

「始め!」

「いくぞ尾白君! 『レシプロバースト』!」

「っ……! 来い、飯田!」

必殺の超加速を発動し、その推進力を利用した跳び蹴りを放つ飯田。腹部に狙いをつけた一撃を尾白は食いつつも、ガツチリと掴んで離さない。推力に押されてどんどん退がっていくが、尻尾をつつかえ棒代わりにして何とか持ち堪える。

押し込む飯田。堪える尾白。僅か数秒にも満たない攻防の末、軍配が上がったのは――

「尾白君、場外! 飯田君の勝ち!」

飯田であった。

「くっそ……ダメだったか!」

「いや、危なかった。足を完全に掴まれていた以上、押し切れなければ逆に負けていたよ」

「おお! 飯田が勝ったぞ!」

「ベスト4がこれで揃ったな!」

「爆豪! 次の試合は負けねえぜ!」

「ブツ殺す」

「うーん……やっぱり、こうして唯見ているだけというのは悔しいですね」

「来年が有るさ。まあ、今年の優勝はわたしが貰うけどね」

「そうしてくださいな」

互いの健闘を讃え、固い握手を交わす2人。これこそまさに青春の1ページだと叫ぶプレゼント・マイクに同調し、観客は2人に惜しみなく盛大な拍手を送った。

『これでベスト4が出揃ったぜ！何とその内訳は全員A組だとお!? しっかり期待に伝えてんなコンチクショー!』

『お前のテンションどうなってんだ?』

また少しの休憩を挟んで、準決勝が始まる。第一試合を戦う2人は、既に勝利に向けてイメージトレーニングを行っていた。優勝を目指すための用意はできているようである。

優勝者が決まるまで、あと三試合。

## 最終種目：準決勝

準決勝第一試合 爆豪勝己VS切島鋭児郎

『爆豪のカウンターが決まったあああああ！しかし切島ビクともしねえ！硬化凄えや！』

「ツチ、流石に硬えだけじゃねえな」

「効かねえつての！爆発さん太郎が！」

「切島ア！顎狙えアゴだア！」

「感化されてら」

爆豪と切島の試合は、激しい殴り合い叩き合いの様相を呈していた。切島の個性によって強化された拳を受ける訳にはいかない爆豪は、回避と反撃に徹することで何とか立ち回れている。愚直にパンチを当てにくるだけの切島と比べれば、高い技術があることが窺えた。

しかし、反撃したところで切島の硬度の上がった肉体を貫ける火力を爆豪は出せない。緑谷戦で負ったダメージが、今も尚後を引いていた。治癒で消費した体力が戻り切っていないのだ。

少しずつ、丁寧に攻撃を積み重ねていく。今は大した効果を見込めなくとも、どこかで必ず芽が出るように。次の舞台に立つため、爆豪は更に集中力を深めていった。

「どっちが勝つかな？」

「今のところ切島君が優勢のようだが……互角にも見えるな。今の段階では俺には分からん」

「攻撃多く当ててるのは爆豪だけど、切島には全然効いてないしね」

「鳴神はどっち予想？」

勝敗予想で盛り上がるA組。みんなが自分の考察を語っていく中で、横で聞いていただけの風華にも話が振られる。

風華の予想は「爆豪の勝利」であった。二回戦を戦った時の消耗がまだ癒え切っていないとはいえ、それでも尚動き続け、考え続けることができるだけのタフネスが彼には有る。実際、今でも切島の猛攻を上手く捌いて的確に反撃ができています。

「しかし、流石に爆豪君の方が先に力尽きるのではないか？あれだけ無駄撃ちをしているのでは」

「無駄なんかじゃないさ。爆発の威力は、鋭児郎もしっかり身体を硬化させてないと防げない。個性も身体機能……常に使い続けるには体力が要る」

「つまり、爆豪にとつちや持久戦って訳だ」

「そうだね。鋭児郎は何処を攻撃されるか分からない以上、全身を硬化させて対応するしかない。けどそんなことをしたら、必ず何処かが綻ぶ。そこを突けるまで粘れたなら、勝己の勝ち。それ以外なら鋭児郎の勝ちだね」

こうして話をしている間にも、2人の攻防は続いていた。爆豪は手先に震えが出てきて、動きも鈍くなっている。まだガードすることで対応できてはいるが、確実に消耗していた。

とは言え、切島もそれなりに消耗している。繰り出すパンチには腰が乗らなくなり、テレフォンパンチ気味になっていた。何度か直撃させることには成功しているが、爆豪を倒せる程のダメージにはなっていない。全身をガチガチに固めながら動き回るのは、集中力が要るということなのだろう。

「っはあ……！いい加減観念しやがれ！」

「てめエこそ、パンチが弱つちいんだよ！」

「……なあ、鳴神君。少しいいか？」

「天哉？」

試合が佳境を迎える中で、飯田が神妙な顔をして風華に話しかけてきた。随分と真面目そうな雰囲気にも、いったい何を話すつもりかと問いかける。

「俺は、兄がヒーローをやっている。「ターボヒーロー」インゲニウムというのだが、知らないか？」

「知らない」

「そうか……兄さんは俺の憧れなんだ。同じ個性を持ち、俺の何倍も強い。兄さんのような凄いヒーローになるために、俺は雄英を目指したんだ。確か、この話をした時君はいなかったな」

「そうだね。初めて聞いたもの」

インゲニウムの弟として、無様な試合をする訳にはいかない。だからお互い全力を尽くして戦おうというのが飯田の話であった。

ベスト4までは、辿り着くことができた。どうせなら、No. 1になつてから胸を張って兄に成果を報告したい。だから第二試合、必ず君には勝たせてもらおうと。飯田は至極真面目な面持ちで、自身の勝利を宣言した。

見てくれている兄弟のためにも、絶対に優勝を掴みたい。妹がいる風華には、その気持ちはよく分かつていた。

飯田もきつと、風華が雷羽に「見にいけないけど応援してるからね、お姉ちゃん!」と言われたように兄から激励を受けていたのだろう。その気持ちを無碍にすることは、その気持ちがよく分かつていた風華にはできなかった。

全力で戦うというのなら、それに応えよう。

「お互い、負けてられないね」

「そうだな。俺は全力を尽くさせてもらおうよ」

「わたしも、全力で戦うよ」

『おーっとおー!ここで遂に切島がよろけたあー!』

「おふたりさん、戦局が動きましたよ!」

「おおつ、切島君!」

「もう準備した方がいいね」

「がっ……!?!」

「ようやく隙見せたな!死ねえ!」

切島が顔面を狙って放った渾身の右ストレートに対して、クロスカウンターの要領で反撃を試みせた爆豪。ここまでロクなダメージにならなかつた爆破が、遂に切島の硬い装甲を貫いて彼に苦悶の表情をさせた。

全身にくまなく気を回していれば、いずれは必ず何処かが綻ぶ。そのいずれがきてしまった。

よろける切島に対して、爆豪は間髪入れず爆破の波状攻撃をぶつける。一度ダメージをいれてしまえば、後はリカバリーさせる暇もなく

攻撃してしまえばいい。息を吐く暇もない絨毯爆撃で、切島を場外まできつちりと押し切ってみせた。

「……つら、オラア！死ねエ！」

「がはっ……！」

「切島君、場外！爆豪君の勝ちよ！」

『決まったあああああ！最初に決勝の舞台へ駒を進めたのはA組の爆豪勝己だあ！』

『隙を見逃さず、しっかりと押し切ったな』

「……先行って待つてるよ」

「ああ。いい試合にしよう」

「い、飯田君、鳴神さん！頑張ってきてね！」

第一試合 WINNER、爆豪勝己。

『準決勝第二試合だ！この試合の勝者が決勝に進み優勝争いの資格を得るぜ！ヒーロー科鳴神風華と、ヒーロー科飯田天哉！勝利の女神が微笑むのはどっちだ!?』

「微笑まなくなたって、わたしが勝つさ」

「いいや、俺が勝つ！」

「それじゃあいくわよ！試合開始！」

準決勝第二試合 鳴神風華VS飯田天哉

合図と同時に、飯田がエンジンを起動した右足で渾身の中段蹴りを放つ。風華は『纏雷』を発動してそれをガード。しかしその反動で2歩程左へよろけさせられる。

体制を立て直すと、追撃のため近づく飯田の頭を掴んで宙返りのように背後へ回る。そのまま半回転して彼の右脇腹へ膝を突き刺した。手を掴んで回避を妨害することも忘れない。だが、飯田は直撃する前にエンジンを起動することで無理やり身を振って回避した。

「ぐっ……危ないところだった！」

「今のは入ったと思ったのに。やるね」

掴んでいた左手も振り払われ、再び向き直る。少しの膠着状態の中、風華は飯田に勝つための作戦を考えていた。

風華の勝ち筋は、『纏雷』が使える内に拘束するなり気絶させるなりして、飯田を戦闘不能にまで追い込むこと。彼の速さは『吹き荒ぶ大風』<sup>パンバーストーム</sup>の用意をさせてくれず、彼の体重をどうにかできるだけの風力はそう簡単には用意できない。

本当なら、纏う電力をそのまま使って攻撃することができたらいいのだが。今回、飯田が取っている戦法はヒットアンドアウェイ。普段はなるべく離れた所へ位置取り、攻撃の時だけエンジンの機動力で素早く近付いてくる。長く距離を取られている間は電気を伸ばしても大した威力は見込めず、近付いてこられた時はその速さに脳が追いつかない。単純な格闘術なら一步勝っていると言えるのだが、流石に相性が悪過ぎるのだ。

二回戦では、温存するつもりだった電力を轟相手にかなり使ってしまった。そのせいで『纏雷』の維持時間が予定よりも短くなってしまうている。

自家発電だけでは、飯田のスピードに対応できるだけの出力は維持できない。その上、彼には奥の手『レシプロバースト』がある。故に、風華はさっさと決着を着ける必要があった。

……さっき掴んだ時、電気を流してればよかったな。反省しないと。

制限時間がくる前に、レシプロバーストを使わせることなく飯田を倒す。大変だが、決勝に上がるためにはやるしかなかった。

まずは牽制程度に『吹き荒ぶ風』<sup>チープバーストーム</sup>を放つ。威力はどうでもいいので数だけは集めて。対処するために手を遅らせてくれれば儲けものだ。

「風かーだがこれくらいならば……問題ない！」

「まあ、そうなるか……」

『飯田、風の弾丸を突っ切って進む！』

数を重視して寄せ集めた程度の風では、飯田を吹き飛ばすどころか身じろぎすらさせられない。しかしそれで別に良かった。

「あふっ……」

「あつ……」

「眼鏡が……」

狙いは飯田本人ではなく、彼が掛けていた眼鏡であるのだから。

顔面に着弾した『吹き荒ぶ風』の一発が、飯田の目の前で弾けて眼鏡を吹き飛ばした。自分の足下に落ちてきたそれを躊躇なく踏み潰し、風華は飯田の視界を奪う。

「吹き飛べ……『吹き荒ぶ大風』」

「ぐはあああああつ!?!」

「飯田君、場外! 鳴神さんの勝ち!」

眼鏡を失くしたことで狼狽える飯田から離れ、その間に風力を左掌に掻き集める。気付かれても大丈夫なように、とにかく多く。そうして十分な風が集まったら、風華はそれをすぐに『吹き荒ぶ大風』として放った。

その規模は、フィールドの全てを包む程。絶対に逃しはしないという強い意志を感じられた。暴風に巻き上げられた飯田は何とか着地に成功するも、ミッドナイトの宣言を聞いて自身の敗北を知る。悔しさを隠そうともせずに地面を強く叩いた。

『決着ウー! これで決勝を戦う2人の生徒は爆豪と鳴神に決定だあ!』

『眼鏡が勝負を分けたか。これを機にコンタクトに鞍替えするってのもアリかもな』

「眼鏡を奪って勝つとはなあ」

「視力には個人差がありますが……眼鏡が失くなるだけであそこまで狼狽えるあたり、天哉君は相当な近眼だったようですね」

「アイテムが邪魔になっちまったか」

「負けてしまったよ、鳴神君。やはり君は強かったな……俺ももつと精進せねば」

「天哉……それ、瓦礫だよ……?」

一通り悔しさを発散させて、立ち上がった飯田は風華に握手を求めて手を差し出した。もつとも、彼の手を差し出す先には風華はおら

ず、そこにあるのは『吹き荒ぶ大風』<sup>パンパーストーム</sup>に巻き込まれて崩れた瓦礫なのであるが。

第二試合 WINNER、鳴神風華。

く

『こちら保須警察署！至急応援頼む！』

「どいつもこいつも……ヒーローなんか名乗りやがって……」

『インゲニウムがやられた！』

「てめえらはヒーローなんかじゃねえ……本物のヒーローは彼だけだ……！」

『「ヒーロー殺し」が現れた！』

「俺を殺していいのは……オールマイトだけだ！」

## 最終種目：決勝

「お前らは気付きもしない」

保須市で最も高いビルの上。貯水タンクの上から奔走する警察官とヒーローを見つめる人影。

40人以上のヒーローを殺傷した、巷で噂のヒーロー殺し「ステイン」その人である。

「偽善と虚栄で覆われた歪な社会……ヒーローを名乗る者ども……俺が気付かせてやる……」

「探しましたよヒーロー殺し……ステイン」

背後から聞こえた声に向け、瞬時に抜刀した刀を突きつける。確認すると、そこにいたのはスーツを纏った黒い靄。男とも女とも判別できないそれは、落ち着いた語り口で自分がステインの同類であると告げた。

「悪名高いあなたには、是非ともお会いしてみたかった。少々お時間よろしいでしょうか」

）

『さあこれが最後の戦いだ！名だたるライバル達を押し退けて決勝の舞台に立ったのは……ヒーロー科爆豪勝己と、ヒーロー科鳴神風華！』

『最後なんだ。悔いのないようにしろよ』

「勝己。悪いけど、わたしが勝たせてもらうよ」

「言ってる。全力のてめエを振じ伏せて……頂点に立つのは俺だ！」

「そろそろ始まるわよ！2人とも準備はいい!？」

戦闘態勢に構える爆豪を、風華はまじまじと観察していた。強がって去勢を張っているが、指先が震えているし肩で息をしている。ここまでで、かなり限界が近付いてきているのだろう。

それもそのはず。一回戦では麗日の流星群を迎撃するために最大威力を放ち、二回戦では緑谷相手に救護室送りされた。準決勝でも切

島の攻撃を何度も食らった上、彼の防御を突破するために身も心も擦り減らした。それでも尚立っていられるのは、単ひとえに彼のタフネスの賜物であった。

「それでは試合……開始よ！」

「ブツ殺す！」

「やれるものなら……やってみな！」

雄英体育祭、最後の戦いが始まった。

### 決勝戦 爆豪勝己VS鳴神風華

「これで、一年の頂点が決まるんだね」

「爆豪辛そうだし、鳴神が勝つと思うね」

「いや、それでもアイツの体力はやべえぜ！」

「僕達は、決着を見守るとしましょうか」

一発で決める。そのために爆豪は空高くまで飛び上がった。自身最強の必殺技『榴弾砲着弾』ハウザーインパクトの用意を始める。

風華が察した通り、爆豪は激戦続きでもう殆ど余裕がない。普通に個性の撃ち合いをすれば、確実に押し負けてしまうだろう。それに『爆破』は風華の風ととても相性が悪い。ここまで使ってきたような規模では、攻撃にすらならないだろうということは既に爆豪にも分かっていた。

だからこそ、風に遮られない大技一撃で決める。

単純明快な力と力のぶつけ合い。小細工を弄する暇も余力もない以上はこれが最適解。工夫もへったくれもないやり方だが、こういうのも爆豪は嫌いではなかった。

風華もまた、その心に応える。左掌の先に空気を集め固めていき、『吹き荒ぶ大風』パンパーストームの用意。爆豪がどんなに素晴らしい一撃を放とうと、正面から迎撃できるようにする。

実際のところ、風華に爆豪の必殺技を受ける理由はない。彼女は一回戦ではむしろ強化されたし、二回戦もほぼ無傷で勝ち抜き、準決勝は互いの速さもあり速攻で終わった。風華は爆豪と違い、リカバリー

ガールの世話になるようなことはなかった。大して消耗していないのだ。

だが、追い詰められた奴程怖いものだ。

油断はしない。爆豪の準備が終わるまでに、最大限に風を集める。彼の放つ最大の一撃を、真正面から押し伏せる。相手がどれだけ消耗していようとも勝利のためには躊躇わない。

「爆豪が回転を始めた……始まるぞ！」

「かつちゃん……鳴神さん……2人とも負けるな！頑張れ！」

「ケツ……！」

「ふふ……」

『麗日戦で見せた特大火力に、回転の勢いを加えている！まさに人間砲弾だ！』

『対する鳴神は、ここまで何度かやってきている空気の砲弾か。大量の空気を押し固めて放つ……シンプル故に強力な必殺技』

爆破で自らを回転させ、その力を推進力に急降下する爆豪。緑谷の激励を聞いたからか、その顔にはニヤリとした微笑みが浮かんでいた。

風華も、集められるだけ風を集め切った。迎撃の準備は万全、後は爆豪にぶつけてやるだけ。彼女もまた、不敵に微笑む。

勝つのは……自分だ！

『榴弾砲……着弾』インパクト オオオオ！！

『吹き荒ぶ大風』！！

爆豪が突撃するその瞬間に、風華は風を地面へと叩きつけた。圧縮から解き放たれた暴風が空高く駆け上がり、強烈な上昇気流を生み出す。

それにより、急降下していた彼の身体は一転高々と打ち上げられる。爆風は虚空を穿ち、視線は明後日の方向を向く。場外に向かって流される身体を立て直そうとする爆豪だったが、『纏雷』を発動した風華はそれを許さず追撃を仕掛けた。爆豪は咄嗟に防御の体制を取るが、そんな暇は与えない。

「いっつば……！あ……？」

「衝翠……『大雷』！」

おおいかづち

翠緑の稲妻を纏った蹴りが爆豪の鳩尾を貫き、腹の中の物を逆流させる。吐き出すまいと口を閉じて耐える彼に、更に追撃で鳩尾を突き刺す爪先から電気を流し込んだ。

人間スタンガン。電気抵抗を軽く超えるだけの大電力が全身へ流れ込み、爆豪の自由を奪った。

『ひい！あんなの俺食らいたくねー！』

『一歩間違えればそのまま感電死させる……危険な技だな。まあ、それも制御できるからこそやってるんだろが』

「これで……終わりだ！」

「ん……なわけ……！あるかよおおおお!!」

執念の一撃。電撃により全身を麻痺させられて動けないはずだったのに、爆豪はそれを使い越えて腕を振りかぶった。掌は真つ黒に焦げて煙を吹き出しており、その所作に気迫以上の力はない。それでも風華を逡巡させるには、十分な気迫であった。

ぼすり。振りかぶった腕は風華の掌にすっぽりと収まり、受け止められる。気力と体力を振り絞った最後の一撃が防がれたのを見て、爆豪の意識はそこで途切れた。意識を失い倒れる彼を、しっかりと受け止めて着地する。その一部始終を見届けて、ミッドナイトは審判として最後の宣言をした。

「爆豪君、戦闘不能！鳴神さんの勝ち！」

「ふう……対戦、ありがとうございました」

「かつちゃんに勝っちゃった……！凄い、凄かったよ鳴神さん！」

「風に巻き上げられて飛んできた爆風……凄まじい規模でした。あれだけ消耗していて尚、あの火力を出せたんですね」

『2人ともコングラッチュレーション！これで雄英体育祭は全ての種目が終了！一年生の頂点に立ったのは……A組鳴神風華だあ！』  
『おつかれさん』

救護ロボットが意識を失った爆豪を運んでいき、風華もフィールドを後にする。退場していく2人に対して、観客からは惜しみなない盛大な拍手が送られていた。

テレビで姉の勇姿を見ていた雷羽も、同様に家中に響くような絶叫をした。隣で一緒に姪っ子の戦う姿を見ていた叔父夫婦が、あまりにも声量の大きい高音に耳を塞ぐ。

「お姉ちゃん……おめでとー!」

決勝戦 WINNER、鳴神風華。

「さて、それじゃ表彰式の始まりよ!三位の子は2人いるけど、飯田君はお家の事情で早退することになりましたのでご容赦くださいな!そして……メダルを授与するのはこの人!」

「私が!メダルを持つてき!」我がヒーローオールマイト!」

「被った……」

「でも、今年的一年はいいよなあ」

「オールマイトに見てもらえるんだもんな」

タイミングが絶望的なまでに噛み合わず、オールマイトはショックでふるふると震えている。せつかくの登場シーンを台無しにしたしまったミッドナイトは平謝りしていた。

オールマイトには同情するが、それよりも緑谷は早退した飯田のことを心配していた。何せ早退した理由が『プロヒーローの兄が敵にやられて重傷を負った』というものだったのだから。

「……大丈夫だといいいけど」

「飯田ちゃん、張り切ってたのに残念ね」

しかし、今は心配していても仕方がない。勝ち進めた者達を見届けなければならぬのだから。心配に思う気持ちを振り切って、緑谷は表彰台の方へと向き直った。

「まずは三位、切島少年!強いな君は!」

「ありがとうございます!」

「攻防一体の個性はシンプル故に様々な応用戦術が取れる!これからもしっかり鍛えていけば、君は更に強くなれるだろう!」

「……はいっ!」

「そして二位、爆豪少年!」

「……おう」

「伏線回収ならず、残念だったな。だが激戦をあれだけ続けて尚も決勝で出したあの火力、素晴らしかったよ。この悔しさをバネに、更に強くなっていってくれ！」

「……言われなくとも！」

「そして、最後に鳴神少女だ！体育祭優勝、本当におめでとう！」

「ありがとうございます……！」

『疾風迅雷』……君の個性はとてつもない強力なものだ。しっかりと鍛え上げていけば、以前話してくれたように私のような素晴らしいヒーローになれるだろう！これからは是非、夢に向かって精進していってくれよ！」

「はいー」

表彰台に立つ全員にそれぞれメダルを授与し、オールマイトは観客席の方へ向き直る。憧れの人から直接プレゼントされた金色のメダルを見て、風華は横の爆豪が舌打ちする程にやにやと笑っていた。

「さあ、皆さん！今回表彰台に立ったのは彼らだったが、この場の誰もがここに立つ可能性は有った！ご覧いただいた通り、競い合い高め合い、次代のヒーローは確実にその芽を伸ばしている！これからは是非！彼らのことを応援してください！」

好敵手と書いて、「とも」と呼ぶ。よく漫画などで描かれる歯の浮くような言葉。誰もがそれを実感した日となった。

「こんな感じでそれでは最後に皆さん！ご唱和ください！せーの！」

「プルスウルト」おつかれさまでした!!!」

「えっ……」

「そこはプルスウルトラでしょー！」

「何やってんですかオールマイト！」

ぐだぐだな閉会の挨拶を以って、雄英体育祭は終了となった。オールマイトへの激しいブーイングが響き渡り、平和の象徴は威厳の欠片もなく狼狽えるのだった。

「ふふ……お疲れ様でした！」

## 決めてけコードネーム

「ふうちゃん！一緒に学校行きましょう！」

「いいけど……確か葵ってバイク通学にするんじゃないかなかったっけ？」

「後ろ乗せますよ！大丈夫ですよ、もう免許取って一年経ったので二人乗りもできますから！」

「まあ……そういうことなら、いいかな」

バス代が浮くし良いかなと、風華は葵のバイクに乗せてもらうことにする。投げ渡されたヘルメットを被り、葵に続いて後部座席に跨った。風華はバイクに乗るのは別に初めてではないが、運転するのがおっちょこちょいめで有名な葵ということで、やはり心配になるのであった。

まあ、運転中にドジを起こされてはたまったものではないため、親によってしっかりと必要な技術については叩き込まれているのだが。「それじゃあ行きますよ！ふうちゃん、落ちないようにしっかりと掴まってくださいよ！」

「そっちょこそ、安全運転で頼むよ！」

ブオン！とエンジンが重たく音を鳴らし、鋼鉄の車体を発進させる。葵の愛機『ブルドラ号』は雄英に向けて走り出した。

ちなみに。二輪車の運転免許は、普通は16歳になってからしか取れない。しかし、特別な事情があれば申請することで、特例として免許を発行してもらうことができるのだ。

葵はまだ誕生日が来ていないため、今は15歳。普通なら免許を取れる年齢ではない。では、どうやって彼女は免許を取ることができたのか。それには葵の個性『蒼龍』が関係している。

立甲葵、個性『蒼龍』。肉体を蒼い甲殻と3本の百足のような形状をした尻尾を持つ、約2mサイズの龍に変えるというもの。龍化する際は体格相応に体重も増える。

他の異形系の『個性』と比べても一線を画す程のエネルギーを、葵は普段身長150cm程しかない小さな身体に溜め込んでいる。龍化せずとも高い身体能力を得られるメリットこそあれど、それ以上に

大きすぎるエネルギーのせいで常に身体が高い熱を持っているという問題を抱えているのだ。

熱が42℃以上になると、身体を構成する蛋白質が変性してしまい元には戻らなくなる。熱が45℃を超えれば、それが僅かな時間であつても死に至る危険性がある。そんな問題を解消するため、エネルギーを「安定して」「大量に」消費する機会を作る必要があつたのである。

この問題に対して葵が出した答えが、自分のバイクを持つということであつた。選んだ理由は、ただ単に「カッコいいじゃないですか!」というものであつたが、乗り手のエネルギーを吸収して走る独自機構を備えた専用のバイクは、しっかりと葵の体温を下げるという役割を果たしてくれた。

効果があると認められたことで、国も特例による免許証発行をしてくれた。これにより、葵は公道でも人目や警察を気にせずバイクに乗ることができるようになったのだ。

龍化しなくても大量のエネルギーを消費できるこの専用機を葵は『ブルドラ号』と名付け、入手して以降研究所の職員や風華を後部座席に乗せて積極的に走らせていた。今はこうして、通学のために使われているのである。

「なーんか、ジロジロと見られてませんか? 歩道の方から視線を感じてむず痒いのですが」

「わたし達のことを見てるんだと思うよ。体育祭が終わってから、まだそんなに経ってないしね」

信号待ちをしていて、二人は通りがかかる通行人がこちらに視線を向けてくるのを感じていた。

理由はまあ、明白だろう。雄英高校の制服を着た女子生徒が、厳ついバイクで二人乗りをしているのが目立たない訳がない。それに、後ろに乗る風華は先日行われた雄英体育祭で優勝している。体育祭が終わってまだ2日しかたっていないのだから、ヘルメットから覗く金の三つ編みは、未だ多くの人々に覚えられていた。

「確かにそうですね。体育祭優勝したふうちゃんは一躍有名人になり

ましたものね」

「優勝効果か。ちよつと恥ずかしいね」

「一回戦で負けた僕への嫌味ですか？」

あれは勝てる試合で油断して負けたお前が悪いと受け流し、風華は道行く人々に視線を向ける。皆一様に期待や応援の眼差しを向けており、中には「体育祭凄かったよ!」とか、「これからもいろいろと頑張つてね!」と直接声をかける者もいた。

将来のヒーローとして、期待されている。その事実には2人は気を引き締めるのだった。

、

「それじゃあまた後で!」

「また後で。居眠りとかしないようにね」

「僕を何だと思ってるんですか!?!」

教室の違う葵とは別れ、風華は2日ぶりのA組の教室の扉を開けた。授業が始まるまでまだ20分程あるが、既に爆豪や八百万といった真面目な面子は揃っている。その中に飯田がいないことは、珍しいものであったが。

……お兄さんの件、引きずつてないといいけど。

飯田は体育祭の日、ベスト4に入れたにも関わらず表彰式の前に早退することとなった。プロヒーローとして活動する兄が、敵によって重傷を負わされたらしい。

あの時の狼狽ぶりは相当なものであった。尊敬する兄がやられたとあれば、弟として心配するのは当然だろうから理解はできる。風華なら、雷羽が敵に襲われたと知ったなら確実に赫炎領域レッドゾーンを暴走させるだろうから。飯田はそこまで短絡的な真似はしないだろうが……やはり心配なものは心配である。

「おはよう!みんな今日は早いな!」

「天哉……おはよう。あのさ……」

「分かっている。兄の件なら大丈夫だ。要らぬ心労をかけたようで済

まなかつたな」

「……なら、いいけどね」

席に着いてから10分程経ち、飯田は緑谷と共に勢いよく扉を開けて入室してきた。風華と話す彼はいつも通りの真面目な表情……のようではあつたが何か、激情を隠しているようにも見えた。

本人が大丈夫だと言っているなら、風華が無理に踏み込むこともできない。彼を心配に思う気持ちは有るが、それは心の内に押し留めた。

予鈴が鳴るまで、教室の中は登校する時の話で持ちきりになる。みんな道行く人々から応援なり激励なり、さまざまな反応をされたそうだ。瀬呂なんかすれ違った子ども達に「ドンマイ！」コールをされたらしい。

「おはよう」

予鈴と共に現れた相澤先生の姿を見て、話に花を咲かせていた生徒達は一斉に自分の席に戻った。姿勢もきつちりと正し、「おはようございます！」と挨拶も忘れない。

「相澤先生、包帯取れたのね。よかったわ」

「婆さんの処置が大袈裟なんだよ。そんなことよりも今日のヒーロー基礎学はちよつと特別だぞ」

「特別授業……!?!」

「まさか抜き打ちテストか!?!」

特別という言葉に、上鳴が唾を飲む。ただでさえ法律などに関しては苦手だというのに、小テストは勘弁してほしいところであつた。しかし、その心配は杞憂に終わる。

「コードネーム……ヒーローネームの考案だ」

「胸膨らむヤツきたああああ!!」

「うるさ……」

「というのも、プロからのドラフト指名に関係してくるからだ。指名が本格化するのには、経験を積み即戦力と判断される二年、三年から……つまり、今回の指名は君たちのこれからへの興味に近い」

今回この指名を元に、所謂『職場体験』に全員行くこととなる。A

組は一足先に経験することになってしまったが、プロの活動を実際に体験することでより実りのある訓練をしようということだ。

指名を受けている者はその中から。受けていない者も学校が用意した受け入れリストの中から行きたい体験先を選び、職場体験に行く。プロの現場に入る以上は、生徒であろうとも一人のヒーローとして扱われる。だからこそそのヒーローネームという訳なのである。

「だいぶ白黒ついてんなー！」

「爆豪と轟が2000越えで、鳴神は3000越えてんのか……めちゃめちや指名きてんなー！」

「爆豪より轟の方が多いじゃん」

「緑谷と喧嘩してたもんなあ」

ドラフト指名は、決勝トーナメントで大きな活躍を見せた者に偏っていた。風華の元にも3000件以上の指名が来ているようだ。これら全てが自分に課せられたハードルである。しっかりと応えなければならぬなど、風華は改めて気を引き締める。

「仮のモンではあるが、適当な名前は……」

「付けたら地獄を見ちゃうよ！この時付けた名前が定着して、プロ名になってる人多いからね！」

「ミッドナイト!?!」

「名前のセンスを判断してもらおう。俺にはそういう判断はできんから代理だ」

将来を強くイメージし、名前を付けることで理想の自分に近づいていく。それが「名は体を表す」ということである。

そう、『オールマイト』のように。

く

「そろそろみんなできたかしら？できた人から発表していつてね！」

「発表形式!?!」

「これは恥ずい……!」

まずは青山が壇上に上がる。ヒーロー名を書いたプラカードを机

の上に置き、それが見えるようにひっくり返した。

「輝きヒーロー『I can not stop twinkling』☆」

「短文!」

「キラキラが止められないよ……」

「そこは「I」を取って、「can't」に略した方が呼びやすいわね!」

「次は私ね!『エイリアンクイーン!』」

「2!?血が強酸性のアレを指摘してるの!?!」

「バカヤロウ……!」

「大喜利みたいな雰囲気になってる……」

先に発表した2人がとびきりの変なネーミングだったせいで、この場の雰囲気はほぼ大喜利のようなものになってしまった。次に発表した蛙吹が『フロツピー』という普通の名前を出さなければ、そのままボケ倒されていただろう。

「俺は『烈怒頼雄斗!』」

「漢気ヒーロー『紅頼雄斗』リスペクトね!」

「ヒアヒーロー『イヤホンIIジャック』です!」

「いいじゃない!」

「『テンタコル』」

「触手の意ね!」

「『セロファン!』」

「これもアリ!」

「『テイルマン』」

「そのまんま!」

「しゅ……『シュガーマン』」

「まさかの被り!」

「『ピンキー!』」

「こっちならいいかな!」

「『チャージズマ』だあ!」

「充電器!」

『インビジュアルガール』!」

「オーケー、いいわよ!」

『クリエティ』……この名に恥じぬ働きを」

「素晴らしい心意気!」

『シヨート』

「名前でもいいの?」

「漆黒ヒーロー『ツクヨミ』」

「夜の神様ね!」

『グレイプジュース』!」

「ポップ&キツチュ!」

「ふれあいヒーロー『アニマ』です……」

「うん!」

『爆・殺・王』

「そういうのはやめた方がいいわね!」

「何でだよ!」

「実は前から決めてたんです……『ウラビティ』」

「洒落てるわね!」

みんなが続々と考えた渾身のヒーロー名を発表していく。爆豪は考え直しになったが、概ね好評であった。

「さて、これでまだなのは飯田君と緑谷君、そして鳴神さんね!」

「僕は……名前のままで」

兄のことを聞いて、すぐに病院へ向かった。ギリギリのところを命を繋いだ、もうヒーローとしての活動は不可能らしい。

インゲニウムはここで終わりだ。だから天哉にこの名を受け継いでほしい。今にも消えいるような声でそう告げる兄に、飯田は応えることができなかった。多くの人々を救ってきたターボヒーローの名を継ぐ覚悟はできていなかった。

「それじゃあ、次はわたしが」

「鳴神さんね! さあ、あなたはどんなヒーロー名にするのかしら!」

「赫き空の下を駆ける風雷……赫嵐ヒーロー『フーライ』」

「赤き空……なるほどね」

風華のオリジン。赫炎領域。レッドゾーン。いつまでも制御できないままにはしない。アレもまた、自分の力の一つなのだから。

「僕のヒーロー名は……これです」

『『デク』……本当にそれでいいの?』

「はい」

今までずっと、そう呼ばれてバカにされてきた。けれどある日、その意味を変えてもらった。それはとても衝撃的なことで、嬉しいことだったのだ。

『頑張れ! って感じで好きだな、ウチは!』

いつまでも、雑魚で出来損ないの『木偶』のままじゃない。これからはそう、この名が平和の象徴となるのだ。

「これが僕のヒーロー名です!」

く

「爆殺卿!」

「そういうのもダメ!」

## いざいけ職場体験

「ふうちゃん、職場体験どこ行くか決めました?」

「いや……まだだね。決めかねてるよ」

午前の授業が終わって、昼休み。

食堂の陽当たりのいい窓際にある二人席で、職場体験についての話をしながら、風華と葵は一緒に昼食を食べていた。テーブルの上は持参した弁当箱とおにぎりを包んでいたラップの残骸で、一面全てを埋められている。

ちなみに、ゴミはちゃんと纏めてある。

体育祭を終えて風華には3547件、葵には1026件のドラフト指名がきた。その中から職場体験の行き先を一つ選ぶためには、学校側から渡された資料を元に情報を吟味していく必要がある。流石に四桁ともなれば、面倒な作業であった。

「ふうちゃんはどんなプロから指名がきてました?僕は『リユーキユウ』とか、『エンデヴァー』とかからもきてました!」

「プロからの指名……わたしのところには『ヨロイムシヤ』とか、『ベストジーニスト』とかから指名がきてたね」

「ビルボードでも上位に来るヒーローに人気を持たれてると思うと、何だか誇らしくなりますね!まあふうちゃんは、オールマイト以外のヒーローのことなんてどうでもいいと思ってるんでしょうけど」

「……今は違うさ。雄英の先生だってみんなヒーローだし、ヒーローの活動にもいろいろな形があるって分かってるからね」

風華にとつてのヒーローとは、オールマイトのことである。どんな時でも、どんな場所でも、どんな者であろうとも、必ず勝って助けるナチュラルボーンヒーロー。それ以外のヒーローは、ただそう名乗っているだけの偽物であった。

しかしその一方で、どんな動機でヒーローを名乗ろうと、しっかり人助けをしているならそれでいいじゃないかと思う心もあった。大事なのは行動することであり、その中で何を思っていようとも人助けをするということには変わりないのだから。

廃墟となった君沢市で、風華は我が身かわいさに幼児も平気で襲うヒーローに何度も遭遇した。

オールマイトの以外のヒーローがあんなのばかりであるとは、流石に思っていないが。それでもまだヒーローへ抱く不信感は拭えていないのだ。信用してやりたいと思う気持ちを、実体験が塗り潰しているのである。

「ちなみに、ふうちゃんは先生方のことはどう思ってるんですか？彼らもヒーローですけど」

「先生達は、ヒーローである前に教師だから。それに……USJでは、身体を張ってわたし達のことを守ってくれたんだ。アレを見たなら、先生が偽物とは言えないよ」

「なら、今回も見えていけばいいんですよ。せつかくの職場体験、知れること知りたいこと、何でも経験しなきゃもつたいないですからね。そして、信用できるようにしていけばいいんです」

「……そうだね。葵の言う通りだよ」

く

「オイラはMt.レディ！」

「邪な動機ね」

「ち、違いし!？」

昼休みと午後の授業も終わって、放課後。

A組の中でも、職場体験の行き先はどうするのかという話題は盛んに語られていた。多くのドラフト指名を受けた爆豪や轟、緑谷などは、風華と同じく資料と睨めっこをしていた。

「デク君もう決めた？」

「まずこのドラフト指名をしてくれた78名のヒーローらの得意な活動条件を調べて系統別に分けた後事件・事故解決件数をデビューから現在までの期間でピックアップして僕が今必要な要素を最も備えている人を割り出さないといけないなそもそもこんな貴重な経験そうそうそうないし慎重に決めるぞ他にも事件がない時の過ごし方と

か色々参考にしないといけないことも多く有るし見るべきところがいっぱいだああ忙しくなるぞうひょー」

「……ええ」

「芸だな、最早」

緑谷が最早お家芸となった早口をしている傍ら、轟も自分をドラフト指名したヒーロー達の事務所情報を見ていた。その視線は一つの事務所に注がれている。

『エンデヴァーヒーロー事務所』

「……」

「え、麗日さんはバトルヒーロー『ガンヘッド』の事務所!?ゴリゴリの武闘派じゃない!」

「うん、指名きてた!」

「てつきり、麗日さんは13号みたいなヒーローを目指してるんだと思ってた」

「最終的にはそうだよ!でもね、体育祭で爆豪君に負けて思ったんだ。強くなれば、それだけ可能性が広がる!やりたい方だけ向いても見聞狭まるってね!……てか、さつきからずつと震えてるね?」

なるほど、と納得する緑谷。麗日はそんな彼がさつきからずつと、小刻みに震えているのが気になっていた。意を決して聞いてみると、緑谷は何でもないことのように普通に答えた。

緑谷は授業のはじめからずつと、空気椅子状態でいたらしい。身動きが取れない状態でもできるお手軽なトレーニングということで、体育祭以降取り入れているのだという。わいわいと盛り上がる2人によそに、爆豪が「チッ!」と舌打ちをした。

「風華ちゃんはどこ行くか決めたの?」

「いや……<sup>レッドゾーン</sup>赫炎領域制御のためのヒントが有る所を探してるんだけど。なかなか見つからなくてね」

「レッドゾーン……USJの時のアレか」

「あのめっちゃおっかないやつ?」

ヒーロー名に赫の要素を加えた以上、その色の象徴である赫炎領域を制御できないままにしておく訳にはいかない。だから制御のため

のヒントが貰えたり、訓練ができるような場所が望ましいのだが。そういう都合のいい事務所は、なかなか見つからなかった。

必要なのは知識や経験、実力よりもメンタルコントロール。発動の鍵となる怒りの感情を制御する術こそが、今の自分に最も必要なものなのだ。風華は考えていた。

だが、精神修行ができるようなヒーロー事務所なんてそうそう有る訳がない。風華の事務所選びは難航を極めていた。

「……ねえ、出久。君はどういう基準で職場体験の行き先を選んでの？」

「えっ……あつ、僕!?僕は……自分にとって最も必要な技術や心構えなんかを備えてる所を選ぼうと思ってるよ。多分、鳴神さんも他のみんなも、だいたい同じなんじゃないかな」

「……なるほど。出久は、わたしが選ぶなら何処へ行くべきだと思う？」

緑谷の場合、個性によって強化される身体能力をより活かすための経験を積める所を選ぶつもりであるという。個性が出たのが中三からの緑谷は、身体遣いや戦闘技術などが他のクラスメイトと比べても拙い。その拙いところを埋められるようなヒーローの事務所を探しているとのことだった。

その話を聞いて、そういえば緑谷は重度のヒーローオタクであったことを思い出す。彼ならば風華が行くべき事務所に関して、何かしらのヒントを出すことができるかもしれない。少し期待して、風華は緑谷に問いかけてみた。

「うーん、難しい質問だね。僕は鳴神さんを指名したヒーローどんな人達か知らないし、鳴神さんがどんな需要を抱えているかも分からないからね。どんな所が良いかとか、抽象的でいいから聞かせてくれないう？」

「……精神修行ができる所がいいな」

「……なるほど。それならベストジーニストヒーロー事務所はどうだろう。彼の所は非行少年の更生事業なんかも行ってるからね。非行に走る子どもってというのは、心に何かしらの問題を抱えていることが

多いから。きつと精神面に関する何かしらのトレーニング方法とか、メンタルケアの心得とかが有ると思うんだ」

「……ヒーロー事務所って、そういうこともやってるんだ。知らなかったや」

ヒーローの仕事は、敵を退治して人々を救ってそれでおしまいというわけではない。

元来奉仕活動であるヒーロー業務は、例えば麗日が行くガンヘッドヒーロー事務所が、護身術教室を開いているように。蛙吹が行くセルキーヒーロー事務所が、夏場ビーチでライフセーバーをやっているように。オススメされたベストジーニストヒーロー事務所が、非行少年の更生事業や、それらに関する相談業務をやっているように。様々な副業が一緒についてくるのである。

人助けの形は、一つではないのだから。

「時間は少ないけど、焦ってても良い選択はできないと思うから……自分に必要なものは何か、ゆっくり考えてみればいいと思うよ」

「……そう、だね。ありがとう、出久」

何も決められないまま、ずっと居残っているも仕方がない。風華は資料を纏めて鞆に詰め込み、足早に教室を出た。

……わたしの目指すヒーロー像に必要なもの、しっかりと見つめよう。

「職場体験か」

「ええ、早い奴はもう希望出してますよ」

「ちゃんと考えて決めさせろよ。三年生なんか今になって後悔してる奴もいるからな」

「そうですね……」

相澤は既に候補を決めている生徒達の希望届けを確認していた。その中で、飯田の選んだ行き先がふと目に入る。

ノーマルヒーロー『マニュアル』のヒーロー事務所。彼をスカウトしていた事務所の内の一つであるため、選ぶこと自体に不思議はな

い。しかし、飯田はもつと実績のある事務所からも指名が来ていたはずであった。

マニユアルヒーロー事務所は、保須市に本拠地を構えている。飯田の兄、インゲニウムが敵にやられた地。そこにあるヒーロー事務所を選んだということは、つまり……

……杞憂だといいがな。

詮索はできない。生徒が自分の意思で決めたことに無理に反対する訳にもいかない。相澤にできることといえば、何も問題が起ころないよう心配するくらいであった。

）

職場体験、当日。

「コスチュームは持ったな？本来なら公共の場じゃ着用厳禁の身だ、落としたりするなよ」

「はいー！」

「伸ばすな。はい、だ。くれぐれにも先方に失礼のないように！じゃあ行ってこい」

「……」

無言のまま立ち去ろうとする飯田に、緑谷が心配して声をかける。体育祭後に聞いた、インゲニウムの事件。逃走中のその犯人は、過去に17人もヒーローを殺害し23人を再起不能に陥れた。

付いた仇名が『ヒーロー殺し ステイン』。神出鬼没の大悪党である。

「苦しい時は言ってくれよ。友達だろ？」

「……ああ」

「……天哉。わたしからも、一つ。職場体験と言っても、現場に出る以上はわたし達もヒーローだつてことを忘れないでくれよ」

「……分かって、いるさ」

足早に小さくなっていく彼の背中。もつと強くあの背中に声をかけるべきだったと、緑谷は後悔することになる。

「何でてめエが一緒なんだよ」

「知らないよ。そっちがわたしと同じ事務所を選んだんじゃないか」

駅でみんなと別れて、風華は爆豪と一緒に職場体験先のヒーロー事務所の玄関に立っていた。移動中ずっと不機嫌だったが、今はそれに輪をかけて不機嫌になっている。正直とても鬱陶しかった。

ぎゃあぎゃあ吠える彼を無視して、風華はインターホンを押した。聞き慣れたリズムから少しの間を置いて、スピーカーから声が聞こえてくる。

「はい、こちらベストジーニストヒーロー事務所です」

「雄英高校から来ました、ヒーロー科一年A組の鳴神風華と申します。本日から一週間、こちらで職場体験をさせていただくことになっています。よろしくお願いします」

一週間。長いようでとても短い、プロの現場を経験できる時間が始まった。

## 職場体験：その1

「正直言うとな、私はあまり君達のことを好きではないんだよ」  
「は？」

「どうせ、ウチを職場体験先として選んだのは私が日本で五指に入る超人気ヒーローだからだろ？」

「指名入れたのアンタだろうが」

ベストジーニストヒーロー事務所。ヒーロービルボードチャートJPで、堂々のNo.4に輝く男が経営するヒーロー事務所。

2人は更衣室に案内されてそこでコスチュームに着替えた後、ベストジーニストから開口一番好きではないと言われた。初対面であるのにこのあんまりな物言いに、爆豪が当然噛みつく。しかしベストジーニストはむしろそういった反応が欲しかったというように、ビシッと爆豪を指差した。

その後に風華のことも指差す。2人して問題児扱いされていることは遺憾だが、まあ爆豪に関しては事実なので不満げな表情を取るだけに留める。

「そうーその眼が気に入ったんだ。最近の子どもはみんないい子達ばかりでねえ……久々にグツと琴線に触れるような子に出会えたよ」

「ツチ」

「そうですか」

「君達のような凶暴な人間を矯正するのもヒーローの仕事だ。そのギリギリと輝く眼に、何が人をヒーローたらしめるのか……私の仕事ぶりを焼き付けてやろう」

改めて、一週間よろしくお願ひしますと深く頭を下げる。お辞儀をしようとしなない爆豪にも頭を押さえつけてやらせる。風華の職場体験は、あまりいいスタートは切れなかった。

く

「えー、ヒーローってのは国からお給金をいただいでる訳で。一応公

務員なんだけど、成り立ちからして他の公務員とは著しく異なるんだ」

「……！」

「何でお前がここに！」

「聞けや。指名は2票入れられるんだよ。んで実務が具体的に何かつて言うただね……」

「基本的には犯罪の取り締まりだね。個性を使った犯罪者……敵が出た時に警察からの応援要請が入ってくるんだ。逮捕協力や人命救助などの貢献度を申告してから、専門機関の調査を経てお給料が振り込まれることになっているよ」

「喋り方、カワイイ……」

「基本はまあ、歩合制だね」

「それにね、副業が許されているのよ。ヒーローの活動が公務と定められた当時は、だいぶ揉めたみたいだけど。市民からの人気と、需要に後押しされて生まれた職業であるが故の名残ね」

「……」

「という訳で、これからCMの撮影があるからあなた達も一緒に映りなさいな」

「もつと、こう……ヒーローらしい活動を体験してみたいんだけどなあ……」

「いえ、拳藤さん！こういうのもプロとなれば避けられぬ道ですわ！それに、良いとこなした私を見初めてくださっただんですもの……たんと勉強させていただきますわ！」

「気張ってるねえ……」

「ムニヤムニヤ！Z！Z！Z！Z！」

「寝てる……んだよな……!?」

他のクラスのみんなは、体験先のプロから活動の基本的なことを教えてもらいながら、パトロールなどの業務に帯同していた。緑谷は特に何も教えてもらっていないようだが。

グラントリノ。学生時代のオールマイトを鍛えた彼の師匠であり、緑谷を指名したヒーローの一人である。

事務所に入った当初、グラントリノの言動はまさしくボケ老人であつた。ネットで調べてみてもロクに情報が出てこず、オールマイトもあまり多くを語ってくれない。話している時凄く足腰がガタガタに震えていたので、相当厳しい人間であつたということは想像がついたのだが……今のグラントリノにそこまでの実力があるのか疑問に思っていた緑谷の思ひは、すぐに修正を余儀なくされる。

『ワン・フォー・オールの後継者……まだまだこの程度か。オールマイトのやつめ、教育に関しちやあてんで素人だな』

手合わせをして分かつた。圧倒的なまでのスピードに身のこなし。見た目や言動からは想像もつかない巧みな技術に翻弄され、緑谷は成す術なく地べたを舐めさせられてしまった。

自分に足りないもの、戦闘技術と経験。それらを高いレベルで持っていることが分かつた。彼から学んでその技術をモノにしたいのに。肝心のグラントリノは思いつきり爆睡してしまっている。

「一週間……時間は短い。自主練行かないと！」

悩んでいる時間はない。フルカウル状態を維持したままでの行動や出力の更なる向上など、やらなければいけないことはたくさんある。悩む前に行動あるのみ。緑谷は事務所をこつそりと抜け出し、人気がない所まで自主練へと向かうのだった。

、

「さて、各々の達成すべき課題だが……フライの課題は制御したい力がある、だったな」

「はい。やらなければいけないんです」

「爆豪は特に課題はないんだつたな。ならば自分が苦手なことやできないことを、ここを利用する中で見つけていくといい」

「おうよ」

管轄する町のパトロールを終えて、鳴神風華ことフライと爆豪勝己……ヒーロー名が決まらなかったので名前のまま。は、ベストジーニストが所有するトレーニング施設に来ていた。

個性研究所には及ばないものの、多くの設備があることに風華は感心した。自分の課題に役立つものが在るかは分からないが、期待はできた。

「では、何かを教える訳でもない爆豪は放っておくとして。フリーの課題を考えていこうか」

「よろしくお願いします」

「まずはその力がどんなものなのかを、できるだけ具体的に教えてくれ。例えば、名前や発動条件、発動した際の特徴、どんなことができるようになったってどんな弱点ができるのかなどが知りたいな」

「はい、まず名前は……」

風華は説明した。

赫災領域<sup>レッドゾーン</sup>。そよ風を起こし少しの電力を生み出すだけだった風華の個性を、「君沢の悲劇」の犯人達や利己的なヒーロー達への怒りによって天災にまで押し上げたもの。その発動経緯から、何かへの強い怒りや死を思わせる経験がこの状態となるトリガーとなっている。

発動することで、辺り一帯の空気を掌握して赫く染め上げる。発電能力が大幅に向上し、溢れた電力が全身でスパークして常時『纏雷』状態となる。

一度に集められる風力も増えて、常に空気を掌握した状態になるということで酸素濃度の操作や衝撃などの反射もよりやりやすくなる。遠い所から雷雲を呼び寄せることも可能だ。

今までできていたことがより早く、より高い出力でできるようになるのが赫災領域<sup>レッドゾーン</sup>に入ることによる恩恵である。しかし、その真髄はそんなものではない。肉体が傷付いた時、赫い風や雷を取り込むことで元通りに再生することができるのだ。

風華はそれに『風雷回帰』と名付けた。赫災領域<sup>レッドゾーン</sup>にいる間、彼女に死は有り得ない。USJで敵に殺されかけた時、それでも尚動くことができたのはこの力のお陰だったのである。

死地の中で、自分と妹の身を守るために成長していったことでこの力は身に付いたと研究所では言われていた。空気、そして電気と一つとなることこそが、『疾風迅雷』の本質なのであろうと。

当然、デメリットも存在する。赫炎領域レッドゾーンに入った風華は怒りに頭を支配され、敵も味方も区別しなくなってしまう。その上、相手の生死にも何一つとして頓着しなくなる。

上鳴を人質に取った敵の頸動脈を、躊躇いもなく掻き斬ったように。

再生する脳無に対して、普通ならば何千何万と死んでいるような攻撃を与えたように。敵と見做した相手に対して、一切の情け容赦を持たなくなってしまうのだ。

殺人などご法度なヒーローとしては、このデメリットは絶対にどうにかしなければならぬ。この怒りをコントロールすることが、風華が果たすべき課題であった。

「ふむ……なるほどな。その状態となることのメリットとデメリットは理解した。だが、君はその状態にならなくても体育祭を優勝できたように、十分な実力を今の内から備えている。今のまま強くなっていけばいいし、無理に暴走を克服する必要はないと思うのだが？」

「……それでは、ダメなんです」「ほう？」

怒りは、風華のオリジンである。

個性をひけらかし、欲望と衝動のままに破壊の限りを尽くす敵への怒り。

個性へのコンプレックスを爆発させ、傍迷惑な逆ギレを行う無個性への怒り。

ヒーローを名乗っておきながら、困っている人を助けようともせず自分のためだけに働くヒーローへの怒り。

この怒りの感情があったからこそ、風華はヒーローを目指した。こんな奴らが存在するから世の中は危険が多くなるし、人々は不安に怯える。

ならばせめて、自分だけでもそんなことはない人間になろう。オールマイトのような、そこに在るだけで誰もが安心するようなヒーローになろう、そう思ったのだ。

「わたしは、この力から……この気持ちから逃げてはいけません。」

この身に抱いた怒りと共に、ヒーローになりたいんです」

「……分かった。君に必要なのは、怒りを制御するための精神修行だな。これからはしばらくの間、君の職場体験は精神面の訓練に終始する。ある意味とてもキツいだろうが……しつかりと成し遂げてもらうぞ」

「……もちろん。覚悟はできています」

「よろしい。では、着いてきたまえ」

、

「DNA検査？脳無のかい？」

「ああ。捜査協力を依頼している訳ではないし、情報漏洩になるが……君には伝えなくてはならないと思ってね」

黒幕への手がかりだ、そう塚内は言う。

USJを襲った『敵連合』を名乗る集団。オールマイトの殺害を目的としていた彼らは、そのための秘密兵器として「脳無」という敵を用意していた。風華によって機能停止に追い込まれた脳無は警察に確保され、その後は何をしてもうんともすんとも言わなかったが……素性を調べるためにDNA検査をしたところ、悍ましい事実が明らかとなった。

「奴は文字通りの思考停止状態……特に暴れたりもしなかったし、検査は簡単に終わったよ。その結果コイツは」

「……いったい、どんな奴だったんだい？」

「傷害、恐喝の前科持ち……いわゆるチンピラってやつだな。そしてコイツの身体には少なくとも、全く別人のDNAが4つ以上混在していることが分かった」

「なっ……!?!」

人間なのか、それは。オールマイトが当然の疑問を口にする。その言葉に答えるように、塚内は説明を続ける。

「全身を薬物などで弄くり回されていたようだ。安っぽい言い方になるけど、つまりは『複数の個性使用に耐え得る身体に改造された強化

人間』ってところだな。脳の著しい機能低下は、その改造の負荷によるものというのが警察の見解だ」

「複数の、個性……」

「そう。問題なのはコイツが身体を弄られていたところよりも、複数のDNAを持つていたということだ。他人のDNAを内に取り入れたって、それが『馴染み、浸透する』特性でもない限りは個性の複数所持なんてことにはならない」

「つまりは、そういうことなのだな」

「ああ……恐らく、個性を与えることのできる個性を持つ者がいる」

冷や汗が止まらない。何度拭いても流れてくる額の汗が、悪い予感をさらに加速させる。

オールマイトの頭に浮かぶのは、一人の巨悪の名前。超常黎明期、たった一人で日本の裏社会を掌握した最悪の宿敵にして、ワン・フォー・オールの産みの親。

オール・フォー・ワン。

ここまで聞いてきた情報が、奴の存在を補強してくる。それでも、オールマイトは頭に浮かんだこの仮説を信じたくなかった。

「そんなことはないさ……そう、そんなことはないんだ。奴は、私が討ち取ったのだから」

## 職場体験：その2

「君の話によると、レッドゾーン 赫災領域と言ったな。その力は怒りを根幹として発動する。ならば君がここでするべきことは、その怒りを自在に引き出した上で理性によって制御することだ」

精神修行用の道場のような一室で、風華はベストジーニストから説明を受けていた。説明といっても風華が伝えたことの復唱のようなものであるが。

これからするのは、レッドゾーン 赫災領域に入るために必要な怒りを引き出せるようにする訓練。静かな道場の中で座禅を組みつつ過去を思い起し、怒りの原点を探る。記憶の底に埋もれた真のオリジンを引き出すのだ。そして、いつでも使えるようにする。

外では爆豪がトレーニングでガンガン爆破音を鳴らしているが、完全防音が成されているお陰で気にならない。座禅に集中するにはもってこいの環境となっていた。

「暴走の兆候は、身体に赫い閃光が迸り始めるというものだったな。そうなりそうだったら、その時は私が止める。安心して記憶を探ってくれ」

「はい。……それじゃあ、お願いします」

まずは床に座る。表面を滑らかに磨かれた木製の床が、靴下を脱いだことで地肌を露出した脚部に触れて冷んやりとした感触を伝えた。右足背が左の腿に、左足背が右の腿に付くように足を組み、腹の前で両手を合わせる。座禅におけるオーソドックスな体制を組み終えた風華は、記憶の底深くは潜るべくゆつくりと目を閉じた。

「雑念が見えたらこの棒で肩を叩く。辿り着くべき記憶が今から遠ければ遠い程、記憶に潜るべき時間は増えていくからな。くれぐれも、焦らずゆつくりと探したまえ」

……もう聴こえていないか。

大した集中力だ。座禅を組んですぐに意識を深く閉じた風華に対して、ベストジーニストはそんな感想を抱いた。「これは棒は要らなかつたかもな」とは思いつつも、彼女の背後でしっかりと様子を観察

し続ける。

聞いた話が本当なら、万が一風華が暴走した時は周囲に甚大な被害をもたらすだろう。それは彼女の人生をも巻き添えにする程に。日本No.4のプロヒーローとして、子どもの矯正や更生を行う専門家として、そんな未来をもたらす訳にはいかない。実物を見たことのない未知の脅威に対して、ベストジーニストはデニムのベルトを引き締めて気合を入れるのだった。

「っしやあ！次、こいやア！」

「さつきからずつとこれだ……はあ、どんだけ体力有り余ってんのさ」「私達、もう終業時間近いんだけどねえ」

「るっせえわ！プロヒーローが後輩の育成する手間惜しんでんじゃねえ！」

風華が過去の記憶に潜り始めた頃。爆豪はといえばベストジーニストのサイドキック達を相手にひたすら模擬戦を繰り返していた。それはもう、入試の時のようにタフネスを發揮して。

他にもいろいろ仕事あるんだけどなあ……そんなサイドキック達の嘆きは、爆豪によって黙殺されるのであった。

く

わたしの記憶……オリジン……

意識を深く集中させ、15年の半生を振り返っていく。少しずつ遡っていくように、人生の記憶を掘り返していくのだ。

——平和の象徴、オールマイトに息絶えていただきたいと思っておりました。

——今回はゲームオーバーだ。帰ろっか。

USJを襲撃した敵連合。あまり時間が経っていないため、記憶にもまだ新しい。平和の象徴……市民の心の拠り所をゲーム感覚で殺しにきたチンピラの集団。かつての事件の生き残りや、人間の尊厳をとことん踏み躪った兵器までもが存在した。

故人『脳無』。生きた人間を素体として作られた最悪の兵器。どこ

までも命というものを踏み躪ったその在り方が、赫災領域レッドゾーンに入った自分の怒りをさらに助長させたことを覚えている。

この記憶は違う。

この時点で、風華は赫災領域レッドゾーンに入れるようになっていた。最も新しい記憶であり、原点ではない。

更に深く、潜らなければ。

——何だよアレ……！入試なんかで出しているようなヤツじゃねえだろ!?

——に、逃げなきゃ……あんなの絶対勝てる訳がないって……！

高校入試。実技試験の終盤で妨害用の0ポイントがその姿を表した時、多くの受験生が尻尾を巻いて逃げ出していった。逃げ遅れた者や、何らかのアクシデントで逃げられなくなった者を見捨てて。

非道い奴らだ。これでも本当に、ヒーローを目指して受験したのかと思つた。ヒーローの本分は敵を倒すことでも、報道で映えるような華やかな活躍をすることでもない。困っている人を、自分の持てる力で救い出すことなのだ。

逃げ遅れた者を助けようともせず、我先にと逃げ出していくコイツらに、ヒーローの仕事が務まるものかと怒り……というよりも憤りを覚えた。

この記憶も違う。

逃げ出す受験生達に対しては、怒りというよりも憤りの方が強かつたし、我が身の犠牲を顧みずに0ポイントに挑み、そして粉碎してみせた緑谷に対して尊敬の念を抱いていた。これもまた、原点となる記憶ではない。

まだだ。更に深く、潜らなければ。

「……いたっ」

「まだオリジンは掴めていないようだな。だがもう遅い時間だ。保護者の方も心配するだろう、今日はもう帰りなさい」

「……はい。また明日、よろしくお願いします」

肩を強く叩かれ、風華は記憶の流れから無理矢理引き戻された。時計を見ると、針は21時を指している。本来の終業時間は19時で座

禅を始めたのは17時であるため、実に四時間も記憶の海を彷徨っていたようだ。

ふと腕を見ると、大量にかいた汗でコスチュームのシャツが腕にくっついてしまっていた。喉もカラカラに乾いていて、口の中が水分を採れと盛りと主張している。ただ座って過去のことを思い返していただけなのに、どっと疲れが溜まっていた。

く

「一日、やってみてどうだった？」

「大したことねえな。こんなんがN.O. 4の仕事ってんなら拍子抜けだぜ」

「ま、今日体験した分だけじゃ絶対にならないと思うけどね」

事務所を後にして、駅までの道のりを一緒に歩く風華と爆豪。別に一緒に帰らなければならぬ決まりはないのだが、行き先は同じということで自然に一緒になっていた。

一緒に帰るのなら、何か話題がないとつまらないだろうと職場体験のことを話題に出す。爆豪の返事はとてもぶっきらぼうなものではあるが、無視したりもせず返事はしてくれていた。

今日行ったことといえば。ベストジーニストとサイドキック達への挨拶にはじまって、町のパトロールと帰還後のトレーニング。この事務所ならではの業務というのを体験することは、残念ながらできなかった。

まあ、ベストジーニストも不良・非行少年の更生というデリケートな業務に、学生を携えることはしないだろうから仕方ないが。それでも残念なものは残念であったが。

「俺らはあくまで『お客様』だからな。危険なことやプロでも難しいことはさせられねえんだろ。プロをトレーニングの相手にできるところぐらいしか今のところ良いところねえぞ」

「慣れてきたら、パトロール中に敵が出た時とかにわたし達に出番をくれるかもしれないけど。確かに今のところ、勝己はプロらしいこと

させてもらえてないよね」

「るつせえわ、てめエがベストジーニストの関心を独占してるからだろうが。俺はあの野郎にダメ出ししかされてねえんだぞ」

「そこは勝己の態度の問題だったじゃないか」

パトロール中、ヒーローは市民に声をかけられることがままある。その時はちゃんと町の安全を守りますとアピールをして安心してもらう。いわゆるファンサービスをするのだが。

しかし、爆豪は声をかけてきた市民を怒鳴りつけて追い返してきた。そのせいで何度もベストジーニストに叱られていたのである。もともと爆豪を指名した理由が『その凶暴な性格を矯正する』であっただけあり、かなり厳しく叱られていた。

『敵を倒すだけがヒーローではない。市民と交流してヒーローが健在であることを示し、安心感を与えることもまた大事なことなのだ。君のように誰彼構わず怒鳴っているのは市民は萎縮し、こんなヒーローには助けられたくないと感じるようになるだろう。なんなら君が助けに来て、それを拒否するようになるかもしれない。人を助けられないヒーローはどんなに強かろうと価値はないぞ』

お前にヒーローとしての価値はない。そう断言されてぐぬぬと歯を食いしばっていた爆豪の姿が思い返される。以降は声をかけられなくても怒鳴らなくなったので、ある程度は効いたようだ。

風華としても、体育祭で準優勝した彼がこんなくだらない理由でヒーロー失格とされるのは嫌だったので、態度を直してくれて安心していた。怒鳴らなくなっただけで、直ったとは言い難いが。

「……」

話題がなくなる。初日ということもあってそう多くを語れるようなことはしなかったため、気まずい無言の空気が流れていた。この空気だけは風華にも操ることはできない。駅まではまだまだ遠く、この空気が続くのは避けたい。

何か、話題を作れるものはないか。そう思って鞆の中を探っていると、風華がいつも食べているキャンディが出てきた。たくさん入って

いた内の一つを差し出し、爆豪に分け与える。

「……食べる？」

「チツ」

爆豪はキャンディを受け取ると、乱暴に包み紙を剥がして口に啜えた。舐めて味を確認し、「ん？」と怪訝な顔をして首を傾げる。彼の髪と同じ金色のキャンディから滲み出たよく分からない味に、いったい何を食わせたのかと詰め寄る。

「おいてめエ、これ何味なんだよ」

「金箔味だね。何袋かに一つしかないレア物だよ。ラッキーだったね」

「良くねえわ！百味ビーンズのハズレだつてもっとマシな味してんだぞ?!」

味に文句をつける爆豪を受け流して、風華も自分の分のキャンディを口に啜える。スカーレットな色をしたそれからは、トマトの味が広がっていった。

「……クソ。おい鳴神、あの赫災領域レッドゾーンとかいうやつぜつてえ習得しろよ」

「……勝己が応援？珍しいじゃない」

大ハズレを噛み砕いて飲み込み、その味の酷さに悪態を吐く。口直しに水を飲んでから、爆豪は風華のしているトレーニングに対して激励をした。珍しいこともあるものだと言おうと、彼は素直になれない子どものように激昂して続きを叫んだ。

「応援じゃねえわ！てめエの全力がああな赫い姿つてんなら、俺はそれさえも超えていかなきゃいけねえんだよ！いつまでも暴走するから使えませんがこつちが困るってんだ！一番への踏み台は、何よりも高くなくちやいけねえだろ!」

「ふふ……確かにそうだね。職場体験が終わるまで後6日あるし、それまでに何とか制御できるようにしてみせるよ」

「そうしろ。でなきや俺が超えるべき壁として張り合いがねえからな」

「偉そうに」

キャンデイから始まった話題のおかげで、何とか駅に着くまで黙らずにいたことができた。また明日と挨拶をして、二人はそれぞれの買った席へと向かうのだった。

く

「なるほどなア……お前達が雄英を襲撃したという奴らだったか……  
そして、その一団に俺を加えようというのか」

「ああ。頼むよ大先輩」

「……目的を聞こう」

「取り敢えずは、オールマイトを殺したいな」

敵連合の本拠地。人の来ることがないとあるビルの一室で、死柄木  
吊とステインは出会った。

自分を仲間にしようとする死柄木に、ステインはどんな理由があつて自分の力が欲しいのかと問いかける。死柄木は一枚の写真を取り出してステインの前に差し出し、「オールマイトだけでなく、こういうクソガキとかもさ……全部ぶつ殺してやりたいんだよ」と答えた。写真には体育祭の時の表彰される風華が映っている。

「興味を持った俺が浅はかだった……お前は、俺が最も嫌悪する人種だ」

「は?」

「子どもの癩癩に付き合えと? ハア……信念なき殺意に何の意味がある?」

死柄木の答えを一蹴し、両腰に備え付けたナイフを抜くステイン。それを見た黒霧がモニターの向こうにいる「先生」に助けを求めるが、先生は取り合わなかった。

「せ、先生……止めなくていいのですか!」

『これでいい! 答えを教えるだけでは意味がない。至らぬ点を自分で考えさせる! 教育とは、そういうものなのだよ』

ステインとの出会いが、死柄木吊に更なる成長を齎すと信じて。

### 職場体験：その3

「何を成し遂げるにも、信念……：思いが要る。それが無い者や弱い者は淘汰される……：当然だ」

「ちつくしよう、痛え……：！」

「だから死ぬこころなる」

「ハハツ、強過ぎだろ何だよコイツ……：！おい黒霧コイツ元の場所に返せ！早くやれ！」

死柄木の肩を突き刺し、首元にもう一つの刃を添えるステイン。生殺与奪を握られた死柄木は彼を元の場所へ返すよう黒霧に言うが、黒霧はステインの個性によって身体の自由を奪われていた。

指一本動かせず、個性も使えない。これでは死柄木を助けに行くことはできないと舌打ちする。

「ヒーローが本来の意味を失い、偽物が蔓延るこの社会も……：徒に力を振りまく犯罪者も……：全て粛清対象だ」

「！おいおい待て待て……：この掌はダメだ」

「……：！」

「強いていうのなら……：オールマイトだな。あんなゴミが祀り上げられてるこの社会を、めちやくちやにぶつ壊したいなあとは思ってるよ」

首元に突き立てたナイフを動かし、死柄木の首を掻き斬ろうとしたステイン。顔を覆う掌に刃が触れたところで、死柄木は慌ててそのナイフを鷲掴みにする。皮と肉が裂けて血が滲むのも構わず握りしめていくと、五指が触れたことで個性の影響を受けたナイフは粉々に崩れ去った。

目先の危険を排除した死柄木は、ステインに反撃の平手をぶつけようと右手を横薙ぎに振る。ナイフが崩れたの見ていたステインは、その掌に触れるまいと大きく跳んで回避した。その結果、拘束が解かれて自由になった死柄木が再び立ち上がる。

「こちとら、あのクソガキにやられた傷が癒えたばかりだつてのに……：ウチにはヒーローなんていねえんだよ。どう責任とつてくれる

んだ?」

「なるほど。それがお前か……」

「は?」

「俺とお前の目的は対極にあるようだが……今を壊すというその一点においては共通している」

お前はいずれ始末するが、それはお前がどう芽吹いていくかを見届けてからでいい。ステインはそう結論付けた。

先程までは、死柄木の真意を試していた。死を前にすれば、人はその本性を表す。異質で歪なものではあるが……死柄木の中には確かな信念の芽があることを、ステインは感じ取ったのだ。

「結局始末すんのかよ……こんなイカレ野郎がパーティメンバーとか嫌だぜ俺は……」

「死柄木弔、ステインの存在は我々にとって大きな助けとなる。交渉は成立した!」

「用は済んだだろう……俺を保須へ戻せ!あそこにはまだ『やるべきこと』が残っている……!」

所変わって、保須の町。

「いやあ、こんだけ町中が警戒モードだと、敵だつて出てこれないよね」

「……そうでしょうか」

パトロールを終えた飯田と彼の職場体験先のヒーロー『マニユアル』は、事務所に戻って休憩しているところだった。

ヒーロー殺しが現れたということで、町の中は厳戒態勢。もはや敵どころか、鼠一匹だつて出てこれないだろうとマニユアルは言う。しかし、飯田は情報を調べる中で、ヒーロー殺しは再び保須に現れるという確信を持つに至っていた。

ヒーロー殺し『ステイン』が現れたのはこれまで7箇所。その全てで最低4人のヒーローを殺傷していた。

目的があるのか、そういうジンクスに則っているのかまでは分から

ないが。ステインが保須で手に掛けたのはインゲニウム1人のみ。ならばあと最低3人のヒーローを殺すために、ステインは再び現れるだろう。それが、飯田の出した結論であった。

来るなら来いヒーロー殺し。兄さんの敵……俺がこの手で始末してやる。

）

### 職場体験2日目。

今日も前半はパトロール、後半は課題達成のためのトレーニングというスケジュールである。爆豪はサイドキック相手に大立ち回りを繰り広げ、風華はベストジーニストと共に怒りのオリジンを探る。

爆豪はベストジーニストとも戦いたそうにしていたが、少しだけ不満げな顔をする。とすぐに去っていった。風華に優先させてやる、ということなのだろう。さっさと赫災領域レッドゾーンを制御できるようになって、より超える甲斐のある踏み台となれ、と。その好意に甘えて、風華は道場へと足を運んだ。

「今日は、昨日よりも更に深く潜ってみよう。君のオリジンはきつと、相当記憶を遡らなければ見つからないはずだ」

「そうですね……やってみます」

「では、昨日のように」

座禅を組み、精神を統一する。頭の中に眠る記憶を少しずつ遡っていった、赫災領域レッドゾーンの原点を見つけ出すのだ。

昨日は初めてということもあり、あまり前まで遡ることはできなかった。ある程度慣れた今日ならいけるだろうと、風華は確信している。

赫災領域レッドゾーンは絶対に制御してみせる。改めて気合を入れ直して、風華は自身の記憶の底深くへと潜っていった。

——ダメだ、俺の『個性』じゃコイツ相手には何もできない！

——アタシだって打つ手ないんだけど!?

——こんなの、応援を待つしかないじゃないか!

記憶を遡っていったら、次に見たのは中学校に上がったばかりの頃の記憶だった。身体から離れた老廃物が爆発するという『個性』を持った敵が街中で暴れ回ったことで、十余名の死者とその五倍の怪我人を出した上にヒーロー2人が殉職した痛ましい事件であった。

当時、風華はその場面に立ち会っていた。妹と一緒に買い物に出掛けている時に、偶然巻き込まれてしまったのだ。

敵自体は、相性の良いヒーローが駆けつけたことですぐにお縄となったのだが。問題なのはそのヒーローが来る前である。

避難誘導もせず、建物を保護することもせず。ただ敵を睨みつけていただけの役立たずしか現場にはいなかったのだ。そのせいで抑えられたはずの被害は恐ろしく拡大し、罪なき市民が何人も命を散らすこととなってしまったのだ。

この時の風華は、怒りというよりも呆れや憤りを強く感じていた。ヒーローを名乗っておきながら何も動こうとしない役立たずに。そして当時はまだ個性の修行中であり、助けに行く訳にはいかなかった自分の不甲斐なさに。

この時も、違う。まだまだ深く潜らなければ。

——良いじゃないですか、レッドゾーン 赫炎領域。僕はカツコいいと思いますよ。ちゃんと制御できてたなら、もっとカツコよかったですけどね。

違う。

——無個性に価値なんてないって!

——わー! 無個性菌が感染るぞー!

——ははっ……ざまあ、みやがれ……！

これも、違う。

——てめエのことなんてどうでもいいんだよ！いいからそのガキを寄越せって言ってんだろ!? いつもいつも『無個性』を虚仮にしやがってよお……ストレス発散くらい気持ちよくさせてくれよ！

——せっかく強い『個性』持って生まれたんだからさあ……！ちやんと活用しなきゃ損じゃないか！自由を謳歌するのは最っ高に楽しいよ！

これだ。

廃墟となつた君沢市で、まだ赤ん坊だった妹を抱えて彷徨っていた風華を襲つた敵。この町で敵に襲われたことなんて何度だつてあるが、コイツらに共通していたのは。風華ではなく、雷羽を狙っているというところであつた。

無個性だつたせいで、社会に虐げられてきたから個性を持った赤子を殺す。

強い個性を持って生まれたせいで、社会に適応できなかつたから快樂のために赤子を殺す。

あまりにも下劣な人間性。自分よりも弱いと見做した相手を、片や自尊心、片や欲望を満たすために殺そうとする矮小で品性下劣な敵。君沢市を市の町に変えた下手人を倒すために出力を増強させた風華の個性は、ここでその色を赫く染めた。

こんな奴らに雷羽を殺させる訳にはいかない。

こんな奴らのために死んでやる訳にはいかない。

こんな奴らを、生かしてはおけない。

——何でだよ……ずるいぞ、ちくしょう……！

——えへ……凄い個性……快、感……☆

——仕方ないだろ？俺だってプロである前に一人の人間なんだよ。だからこれは。仕方のないことなんだよ。

こんなゴミが生きることなど認めない。

逆恨みと嫉妬で狂う無個性も。

徒に力をひけらかす敵も。

我が身かわいさに、その本分を果たそうともしない偽物のヒーローも。

全部。全部この手で殺してやる。

こんな社会では、安心して——

「……痛っ」

「座禅はこれで終わりだ。明日からは次のステップへと進むとしようか」

「次のステップ……？つまり」

「赫いスパークが迸っていた。驚いたよ……長年ヒーローとして活動している私が、その片鱗だけで戦慄させられた。もしも抑えるのに失敗していたと思うと……ゾッとするな」

思考が染まりそうになったところで、ベストジーニストに現実へと引き戻される。どうやら、風華は赫災領域<sup>レッドゾーン</sup>へ入りかけていたらしい。引き戻されるのが少しでも遅れていれば、理性を失った風華によつてこの辺りは大惨事となつていたであろう。

じつとりと肌張り付く汗を拭い、投げ渡されたボトルから水分を補給する。その間も、怒りの記憶は頭の中で反芻していた。

これからは、この記憶を起点とすることで瀕死の大怪我などを必要とせず<sup>レッドゾーン</sup>に赫災領域<sup>レッドゾーン</sup>に入ることが出来る。少しでも進歩はあつたようだ。

明日からは、次のプロセス……即ち、赫災領域<sup>レッドゾーン</sup>に入った状態でも意識を保ったまま動けるようにする訓練に入る。とても危険な訓練に

なるだろう。それを抑える役に回る、ベストジーニスト達プロヒーローにとつてはだが。

「暴走は私達が抑えると約束しよう。君も、全力で取り組みなさい」  
「もちろんです。絶対に……モノにしてみせます」

明日……もしも風華が赫炎領域レッドゾーンの制御に失敗したら、その時点で彼女のヒーローとしての道は閉ざされてしまう。今後の人生を占う大事な試練。流星に緊張が強くなってきていた。

不安はある。USJで峰田を大怪我させてしまったように、赫炎領域レッドゾーンに入れば敵味方の区別はつけられなくなってしまふ。暴走した自分を抑えるためにヒーロー達が動くとなれば、確実に風華は彼らを敵と見做して殺そうとするだろう。今からでも、そこは確信を持てた。

絶対に、そんなことになつてはならない。震える腕を無理矢理掴んで留め、風華は改めて気合を入れ直した。

く

「うーん……これ以上俺ばかりと戦つてたら変な癖が付いちまうかもなあ。よしっ！今日は外出して敵退治といくか！」

「えっ、今からですか!?!」

「今からだ！夜中は小競り合いが多くて楽しいぞ！渋谷辺りが特に多いな！と言う訳で向かう先は渋谷だ！着いてこいよ！」

「は、はい！」

職場体験3日目。

ここに来てからの日課となつていたグラントリノとの組手を終え、緑谷は彼に連れられて一緒に渋谷へと向かった。

新幹線に乗つてグラントリノから駅弁を受け取ると、スマホを取り出してメッセージを送る。相手は飯田だ。渋谷行きのこの新幹線は途中で保須を通るため、ふと彼のことか心配になったのである。

「座りスマホ！これだから最近の若者は！」

「おかしい。返事が来ない……?？」

グラントリノの戯言は無視して、緑谷は液晶に注目する。いつものならば送信から長くとも20秒以内には返信をくれていたのに、今は3分経っても返信が返ってこない。普通なら大したことのない出来事であるが、相手が相手だけあつて緑谷の不安は更に増していった。

……飯田君、大丈夫かな。

緑谷はまだ知らない。この後すぐ、飯田と共に死地を駆け抜けることになることを。

この時の彼は、まだ知らない。

## 職場体験：その4

とあるビルの屋上に、漆黒の靄が広がる。ワープゲートと化したそれから現れるのは、3人の人影。敵連合首魁、死柄木弔。その補佐役、黒霧。そしてヒーロー殺し、ステイン。ある目的を果たすために再び、保須市へと姿を現したのだ。

「ここが保須か……思ったより栄えてんな」

「この街を正す……そのためにはまだ犠牲が要る」

「……以前に仰っていた、やるべきことというやつですか？」

黒霧がそう質問すると、ステインは機嫌良さげに「お前は話分かる奴だな」と褒めた。言外に話の分からない阿保と言われた死柄木弔が、聞こえるように舌打ちをする。ステインはそんな彼を気にすることもなく話を続けた。

「多過ぎるんだよ……英雄気取りの拝金主義者が！ヒーローとは、偉業を成した者にのみ許される『称号』であるにも関わらずだ！」

「それで？」

「世が自ら誤りに気付くまで……俺は現れ続ける」

「ケツ……やってることは草の根運動かよ」

健気で泣けちゃうね。ステインを皮肉ろうとする死柄木弔だったが、それは「……そう馬鹿にできたものでもありませんよ」と黒霧が諫めた。

ステインが今まで現れた街は、その全てで犯罪率が約4%軽減されている。『ヒーロー殺しの存在がヒーローの意識向上に繋がっている』と分析してバッシングを受けた評論家もいる。

ヒーローを殺し、危機意識を持たせることでその質を向上させる。ヒーロー殺しはヒーローブリーダーでもあるのかと死柄木は言った。そして、何とも回りくどい話だと吐き捨てる。

「やっば、合わねえよな本当。黒霧、脳無出せ」

「……承知」

「人に刃突き立てておいて、タダで済ませてたまるかってんだ……何が今を壊すだよ。壊したいなら勝手にそうすりゃいいんだ。大暴れ

競走といこうぜ。ステージは保須だ」

あんたの面子と矜持、潰してやるぜ……大先輩。

黒霧のワープによって現れた、3体の脳無を保須の空へ解き放つ。その姿を見送った死柄木の顔は、悪意によってぐにやりと歪んでいた。

）

3日目も無事にパトロールを終え、トレーニングの時間である。しかし、今日はいつもの道場ではなく広大な雑木林の中にいた。サイドキックや爆豪も一緒であった。

「今日からフーライの訓練はここで行う。理由は説明した通りだ。爆豪は……本当にいいんだな？」

「ああ。どうなっても振じ伏せてやるよ」

「頼もしいもんだね、まったく」

「ああ!? どう言う意味だこらア!?!」

いつものトレーニング施設が在るのは、ベストジーニストヒーロー事務所の地下。街中にある施設で暴走されては、人やモノに甚大な被害を出してしまう恐れがある。そのため、今回は同じくベストジーニスト所有の雑木林でのトレーニングとなった。

なるべく広く、それでいて無関係な人を巻き込まない都合の良い場所は此処くらいしかなかったのである。

爆豪に関しては、自主トレをするか先に帰ってもいいということになつていたのである。

本人が赫炎領域に入った風華との戦闘を強く希望していたため、暴走時の鎮圧要員の一人として起用されることになったのだ。

今から期待に眼をギラつかせ、両の拳を強く打ち合わせている。骨が砕けてもおかしくなさそうな程の重く鈍い音が、静かな林に響いていた。すぐに遠方での待機をベストジーニストから命じられ、物凄くない不機嫌になつていたが。

「……全員のスタンバイが完了したようだ。いつでも始めてくれて構

わんよ」

「分かりました。……では」

電話から連絡を受け、サイドキック全員の準備が終わったことを確認する。電気の使用というところで、火災を防ぐための消火要員。暴走を抑えつけるための戦闘要員。そして広域に及ぶ赫い空気が敵のものではないことを周知するための連絡要員。普通なら学生一人のために用意するような規模ではないが、ベストジーニストは相当レッドゾーン赫災領域の力と危険性を警戒しているようであった。

怒りの記憶を呼び起こす。身勝手に力を振るう敵への、そして本分を果たそうともしないヒーローへの怒りを。その記憶によって、思考は怒りに染まっていく。

赤く、赫く。染まっていく。

こんな奴らがのさばる社会なんて認めない。この手で全て、壊してやろう。まずは目の前にいる――

——こいつらから。

「始まるぞ。気を引き締めていこう」

「シユア！ベストジーニスト！」

く

『お客様、座席にお捉まりください！緊急停止いたします！』

車掌による、ひどく狼狽した様子のアナウンスが流れる。いったい何事かと緑谷が思考を巡らせようとする前に、爆音と共にヒーローが新幹線の中に投げ出されてきた。

「ヒーロー!?!」

「皆さん下がってて！敵だ！」

「あ、あいつ……脳無!」

ヒーローに続いて現れたのは、脳味噌を剥き出しにした上裸の大男。脳の中に埋め込まれた4つの眼がぎよろりと動いて乗客を見回し、誰を襲うべきかを見定めている。

なぜ、こいつがここに？

緑谷は、USJで見た脳無が振るった猛威を思い出していた。もしもあいつがあの時と同じようなタイプの奴なら、甚大な被害を出してしまうかもしれない。オールマイトにすら匹敵するような力を持っていた奴だ、対処できるヒーローは相当限られるだろう。ひとまずこの場合は、乗客が取り乱さないように声掛けを優先して――

「小僧！座ってろよ！」

「グラントリノ!」

そう結論付けて行動しようとしたところで、グラントリノが脳無に突撃してその巨体と共に遠くまで飛んでいった。いきなりの行動に彼らが飛び出していった穴から外を見ると、あちこちで火の手が上がっている。どうやら何か、大きな事件が起きているようだ。

この街……、確か保須だったよな。飯田君は大丈夫か……!?

考えるより先に、緑谷は走り出した。

「こんな(時世に……馬鹿かよ!現場に行くよ天哉君!走って!」

「は、い……?」

飯田は走った。マニュアルが示す方向とはまったく違う方向……目線の先にある路地裏へ。

「騒々しい……阿呆が出たか?まあ、そっちは後で始末してやる……今は、俺が成すべきことを成す」

人気のない路地裏で、一人のヒーローがその命を喪おうとしていた。左の肩口からはじくじくと血が流れており、顔を驚掴みにされて宙に浮かされている。下手人はヒーロー殺し、ステイン。正しき社会のための犠牲の一つとして、彼はこのヒーローを選んだのだ。

「身体が……動かねえ……ちくしょう、クソやろう……死ぬ……!」

「お前もヒーローを名乗るなら……死に際の言葉は選べっ……!?!」

生かす価値なし。そう断じてステインは右手に握る刀を振りかぶった。そして、それを自身の背後に向けて振り払う。刃はヘルメットを掠めて闖入者の頭から離し、その人相を露わにした。代償として、捕らえていたヒーローを奪われてしまったが。

「スーツを着た子ども……何者だ?ここは子どもの立ち入っていない領域じゃない」

「血のように紅い巻物に……全身に携帯した無数の刃物!お前がヒーロー殺しステインか!俺はお前を追ってきた!」

「……言葉には気を付けろよ。場合によつては……子どもでも標的になるぞ」

動けないヒーローを自身の背に隠し、闖入者はステインを睨む。その眼に向けて、刃を突きつけて問いかけるステイン。

お前は誰だ?死ににきただけの馬鹿のか?新手のプロか?それとも……本物のヒーローたり得る逸材なのか?

飯田は言葉に詰まった。何せ、ほとんど条件反射で動いたようなものだったからだ。兄の仇を見つけたから倒すために動いた……本当にただそれだけのことだった。やられそうになっているヒーローがいるのに気付いたのも、飛び出してからだ。どうして助けられたのかなんて、自分でも分かっていない。

身体が、勝手に動いたのだ。

では、この問いにどう答えるべきなのか?

——天哉。職場体験といつても、現場に出る以上はわたし達は一人のヒーローなんだってこと、忘れないでくれよ。

「では聞け……ステイン」

「……」

そうだ。自分はヒーローなのだ。

「俺は、お前にやられたヒーローの弟だ!彼の名を継ぎ……代わってお前を捕らえにきた!」

「……ほう」

「俺の名を、教えてやる……インゲニウム！お前を倒し……この人を守るヒーローの名だ！」

「そうか」

「天哉君!?何でこーんな時に限ってどっか行っちゃうんだよもう！」

「あれは……マニユアル!?飯田君の職場体験先のヒーロー……」

「邪魔だよ！ここはプロに任せて避難しな！」

「えっ、あつ、すいません！」

飯田はどこに消えた？保須市は今、緑谷が乗っていた新幹線を襲った一体に加えて、目の前で大勢のヒーローを相手に暴れている二体の計三体の脳無によって大惨事となっている。

あの生真面目な男が、こんな大事件を前にして逃げ出すようなことがあるだろうか？それは即ち何か別の問題があるということ——

——保須市……

——脳無らしき奴ら……

——飯田君……!

——ヒーロー、殺し……!!

心臓の鼓動が早まるのが分かる。断片的に持っていた情報が、線で繋がっていく。抱いていた疑念は確信へと変わっていく。

一刻も早く、向かわなければ。目の前で繰り広げられている激戦に背を向けて、緑谷はフルカウルを発動。全速力で走り出した。

「くっそ……何なんだこいつら……!?!」

「ザ・フライがやられたぞ！どうなってんだ……何が目的なんだこの化け物共は!?!」

「やっぱ、いいね……脳無」

「参戦しなくていいのですか?」

「馬鹿言え、怪我してんのに出れるかよ」

先生に貰った三体の脳無。その暴れっぷりを見て満足そうに笑う死柄木。ヒーロー殺しが気に食わないから、奴の矜持を壊す。英雄を襲撃した時程のやつはいないが、それでも十分な話題性になるだろうと考えていた。

お前の世直しなんて、世間は脳無に忘れさせられているぞ。両手を掲げ、死柄木は高らかにそう宣言した。

どうする? 動けない大人を一人抱えて、相手は40人ものヒーローを殺傷した大悪党。対する自分はヒーロー科に入って二ヶ月程度のひよっ子。

自慢のスピードは対応された。背後には守るべき人がいて、相手には自分を殺すことへの躊躇いは一切ない。不利にも程がある戦場。

「やめろ! お前だけでも逃げてくれ! 相手はあのヒーロー殺しだぞ!?!」

「だからといって……何もしない訳にはいかない! 俺はインゲニウムの、兄の名を継ぐ……そう決めたのだから!」

ヒーローの静止を振り切り、飯田はステインに立ち向かう。無数の刃物で武装した相手に対して接近戦など愚策だが、遠距離攻撃を持たない飯田にはこれしか手立てがない。

速さを活かして、速攻でケリを着ける。そのためにエンジンを無理矢理全開まで持っていった。

振り下ろす刀を掻い潜り、一気にステインの懐まで潜り込む。腹を目掛けてパンチを一発くれてやろうとして……即座に抜いたナイフで防御しようとしていることに気付き、腕を引っ込める。

カウンター目的で振られたナイフが空を斬ったその一瞬の間……そこを見逃さず、横っ飛びして一気にステインの視界から外れる。見失った飯田を探そうと、ステインの視線が上に向けられたその時。重

厚な白い鎧に包まれた足の爪先が、彼の眼前に飛び込んできた。

「レシプロ……バースト!」

「ふっ……危なかったな。なかなかいい攻撃をするじゃないか」  
躲された。

視界外から渾身の一撃を食らわせて昏倒させる作戦だったが、ステインの驚異的な反応速度がそれを上回った。ヒーローを助けた時と同じ……否、それ以上の反射神経。攻撃を回避する、ただそれだけでステインの強さの一端を見せられてしまった。

ニヤリ。笑みを浮かべながら、ステインはナイフの刃を舐める。鋼と錆の色の中に、薄らと見える赤い色……飯田の手の甲を掠めた時に付いた血を舐めたのだ。

その瞬間、飯田の身体は金縛りにでも遭ったかのようにピクリとも動かなくなった。どんなに念じても動いてくれない。脳からの命令が、身体に伝わらない。

「動かない……! 相手の血を舐めることで、身体の自由を奪う個性か!」

「視界から外れ……確実に仕留められるよう画策していたな。そういう動きだった。口先だけの人間などいくらでもいるが……お前はコイツとは違うな。生かす価値がある」

「くそっ……止めろ! 止めてくれ!」

唯一動かせる口で、飯田は悠然と自分の横を通っていくステインに向けて叫ぶ。その叫びを聞き入れた——訳ではないが、ステインの動きは確かに止まった。

——ダンッ。

——ダンッ!

——ダンッ!!!

『『20%』……デトロイトスマッシュユ!』

「ぐっ……!?!? 何だ、今度は……!?!?」

連続して聞こえてきた地響き。ステインが動きを止めたのは、だん

だんと近付いて大きくなつていくその音を警戒したからだ。その警戒が功を奏し新手による不意打ちを防ぐことに成功する。

拳を防いだ刃が折られ、拳圧によつて後方へと勢いよく吹っ飛ばされるステイン。体勢を立ち直しているうちに、新たなる援軍によつてまたしても標的を奪われてしまった。

「間に合つた……！助けに来たよ、飯田君」

## 職場体験：その5

——考え過ぎかもしれない。

——確証も全くない。

——だからって、動かない訳にはいかない！

ヒーロー殺しが現れた街で、脳無のような敵が暴れている。保須にいる者の中で恐らく、緑谷だけが考えられる仮説。

敵連合は、ヒーロー殺しと繋がっている？

ということとは、つまり。ヒーロー殺しはこの街にいるのではないか？あの真面目な飯田が現場におらず、監督するプロの目からも離れてしまっているのは……ヒーロー殺しを、見つけてしまったからではないか？

「よかった……ビンゴだ」

自分の推測が当たっていたことと、殺される前に2人を救出できたことで安堵する緑谷。倒れる飯田とステインの間に立ち、進路を塞ぐように構えを取る。

「緑谷君……!?!何故君がここに!?!」

「ワイドショーでやってた。ヒーロー殺し……被害者の6割が人気のない街の死角で発見されてる。だから騒ぎの中心から、ノーマルヒーローの事務所辺りを風潰しに回ってきた！大通りに出ればヒーローが応援に来れるかもしれない！動けるかい!?!」

「ダメだ、身体が動かせない……恐らく、相手の血を取り込むことで身体の自由を奪う個性……!」

「血を取り込む……だから刃物か!」

血を取り込むために、何が何でも相手に傷を付けさせる。身体中に備えた無数の刃物は、そのための装備らしい。

つまり。緑谷はあの刃を掻い潜りながら、2人をどうにかして大通りまで運び出す必要があるということ。相当な不利状況だが、切り抜けるためにはやるしかない。唇をキュツと引き締めて、緑谷はファイティングポーズを取った。

「仲間が「助けに来た」か、いい台詞じゃないか。だが、俺にはコイツ

らを殺す義務がある。ぶつかれば当然、弱いものが淘汰されるだけだが……どうする？」

「緑谷君……悪いことは言わないからここは逃げてプロを呼べ！俺のスピードにも、簡単に対応できる出鱈目な身体能力……肉弾戦特化で遠距離がない君では分が悪過ぎる！」

静かに燃える、思想犯の眼。USJを襲ったチンピラなんかとは訳が違う殺人者の眼。敵としてのレベルの違いが、緑谷の本能にその危険を分かせてしまった。

ステインに応戦しようとする緑谷を、どうにか止めさせようと叫ぶ飯田。力量の差を感じ取っているのか、忠告を聞く深緑のコスチュームに包まれた身体は小刻みに震えている。

「……そんなこと言ったら、ヒーローは何もできなくなるじゃないか！」

確証のない推測でも何でも……緑谷はプロを説得して、一緒に来てもらうべきだった。焦り過ぎていたことを反省する。

ここからは身動きの取れない2人を守りつつ、1人で時間を稼ぐ必要がある。もしくはヒーロー殺しを退ける必要がある。

「君にも、言いたいことは色々有るけど……それは後にする。オールマイトが言ってたんだ……余計なお世話はヒーローの本質なんだって！」

「ハア……！」

できる、できないの問題じゃない。やらなければいけないのだ。

先制必勝。右手をデコピンの形にして、左手で手首周りを掴んで固定する。ワン・フォー・オールの出力を20%に調整し、『デラウエアスマッシュ』を撃ち放つ。空気を揺るがす程の超パワーによって放たれた衝撃波は、真っ直ぐにステインを目掛けて駆けていった。

遠距離はない。そう叫ばれた矢先に飛んできた衝撃波に、流石にステインも面食らったのか大きく後退りする。

ワン・フォー・オール。脈々と受け継がれて来た正義の結晶。

緑谷の未完成な器では到底扱い切れぬ代物。個性研究所で自分の限界や使い方を知り、少しずつその扱いは前進してきた。毎日の弛ま

ぬ研鑽のおかげで器も僅かではあるが強度を増してきていた。平和の象徴を継ぐ者として、完成しつつあるのだ。

現状、安定して出せる出力は9%。そして怪我をしないギリギリが20%である。単純に身体能力が向上しただけに留まらず、出力上限が15%を超えたことで、アクションに風圧が付随するようになった。それにより、風圧を活用した遠距離攻撃が可能となったのだ。

『アラウエアスマッシュ・エアフォース』

発現したばかりでまだまだ制御も甘く、射程距離も実際に遠距離と言える程長くはない。それでも、相手を近づけさせてはいけないこの戦いにおいては頼りになる新戦法であった。

「チツ……あるじゃないか……遠距離」

「これ以上は近付かせない……彼らは殺させないぞヒーロー殺し！」

「良い技だ……だが、まだ甘い」

刀を構え、ダッシュで近付くステイン。再び距離を開けようとエアフォースで牽制するも、一度見た技など食らわないとばかりにあらわれてしまう。あつという間に、あと数歩で刀の間合いというところまで詰め寄られてしまった。

「ツ……い9%、『フルカウル』！」

「長物に対し間合いを詰める……良い判断だ」

エアフォースはもうダメだ。有効打にならない新技には見切りをつけて、緑谷は9%でフルカウルを発動。全身に強化を巡らせた。そのままの勢いで強く地面を蹴り、自分から間合いを詰めにいく。

ステインは腰に備えられた二つの鞘——うち一つは既に中身が入っていない——から残ったもう一本のナイフの柄を握り、引き抜く。懐まで潜り込んできた緑谷目掛けてナイフを振るが、緑谷はそこから更に前進して回避しつつ背後を取った。

機動力のアドバンテージを活かし、相手の死角に入ること、無理矢理一撃を入れるための隙を作り出す。飯田もやっていた戦法、ステインは二度同じ手を食らうような馬鹿ではない。その動きを先読みして、視線は既に緑谷を捉えていた。

身体を捻り、背後に回った緑谷を右手の刀で斬ろうとする。対する

緑谷も、地面に手を付いて踏ん張りを利かせながら両足の出力を20%に上昇。『マンチエスタースマツシユ』で迎え撃った。その結果ステインの刀は中程からへし折れ、宙を舞った刀身がビル横の排水管に突き刺さった。

「良い動きをする……」

「そりゃあ、どうもっ……!」

息吐く暇を与えないよう、ステインの腕を掴んで背負い投げの体勢を取る。虚を突くためとはいえ背後を取ったことで、ステインを動けない2人に近付かせてしまっていた。投げてやることで、再び距離を取らせようとしたのだが……密着したことは仇となった。

「がっ……!?!」

「道具を使う敵に対して……不用意に触れば怪我をするぞ。このようにな」

「暗器……!隠し持っていたのか……!?!」

投げるために掴んだ、二の腕に巻かれた包帯の中に隠されていた小型のナイフ。その刃に思いつきり触れてしまい、緑谷は手袋ごと掌をザックリと切り裂いてしまった。不意に感じた痛みで、思わず腕を離してしまう。これ幸いと緑谷の血が付着したナイフを掴み、その刃を舐めようとして――

「やらせは……しない!」

「っ……!時間か……!」

――拘束から解放された飯田が浴びせた蹴りによって、ナイフは弾き飛ばされた。ステインの手からこぼれたナイフは緑谷が回収し、粉々に叩き折って使えなくする。血の付いた刃は路地の外へ投げ捨てて、拘束される危険を排除した。

「緑谷君……助けに来てくれて、ありがとう。ここからは、俺も一緒に戦わせてはくれないか」

「あいつは……ヒーロー殺しは、君のお兄さんの仇だよ。本当に大丈夫だって、言えるのかい?」

「大丈夫さ……コスチュームを着て、ヒーロー名を名乗ったからには、俺はヒーローだ!私怨は置いておく……ヒーローとして、奴を倒す

！」

「2対1……一筋縄ではいかないな」

肩を合わせて構えを取る緑谷と飯田。ステインの発するプレッシャーがより深く、重くなっているのを2人は感じ取っていた。

ステインは、緑谷がここに来た時にスマホで誰かしらに連絡しているのを見ていた。彼との交戦を始めてから既に3分は経過しているが、未だに地べたに這い蹲る偽物……ネイティヴは殺せていない。

いつ応援のヒーローが来てもおかしくない。ただでさえ妙に強い子ども……英雄の資質を持つ者相手に苦戦しているのに、そこにプロまで来られたらいよいよマズい。

強引にでも邪魔を掻い潜り、ネイティヴを殺してここを抜け出す必要がある。雰囲気ので分かり辛い、ステインもかなり焦っていた。

「来るぞ飯田君！ 氣い引き締めてよ！」

「分かっているさ！ 援護頼むぞ！」

飯田を前衛に、緑谷がエアフォースで遠距離から援護する構え。左右に衝撃波を飛ばして真ん中を飯田が塞げば、ステインは全てを避けるためには上に跳ぶか後ろに退がる必要がある。選択されたのは前者。隠していた折り畳みナイフを三つ投げて飯田の動きを牽制し、血を採られることを警戒させる。

動きを止められては敵わないと、飯田はナイフを拳で叩き落とし、同時に折れた刀を飯田の足元へ投げつけて貫通させ、右足を地面へ縫いつけた。

衝撃波で動きを制限してくる自分を優先した動きを受けて、緑谷は連射するのを止めて狙いを引き絞る。空中にいる間は大した身動きは取れなくなる。着地しようとするその瞬間を狙い撃つ。

チャンスは一瞬。撃ち損じは許されない。

ステイン側も、今が緑谷達にとって最大のチャンスであるということとは当然分かっている。ならばするべきことは、衝撃波を撃たせないこと。

脇腹に携帯するナイフを抜き、自分に狙いを付けている右腕に向かって投げつける。ナイフは命中して苦悶の声を上げさせるが……緑谷は額に脂汗を浮かべながらも、決して腕を下げなかった。

コイツっ、腕を……！

敵ながら、天晴と思う程の精神性。己の犠牲を厭わず戦うその姿は、ステインの理想とするヒーロー像そのものであった。緑谷に対して尊敬の念を抱いたその一瞬が、ステイン最大の間隙となる。

「デラウエアスマッシュ……エアフォース！」

「がつ……！」

「ヒーロー殺し……お前を倒そう！復讐のためではなく……ヒーローとして！」

「ごあつ……！」

エアフォースが直撃し、体勢を崩されたステインを飯田の蹴りが追撃する。奥の手レシプロバーストの更にその先、超必殺『レシプロエクステンド』。代償として、数秒と保たずにエンストする程の超加速は宙ぶらりん状態のステインに避けられるようなものではなかった。

蹴りは顎に直撃し、破碎音を響かせる。力を失った頭部がぷらりと動き、その重みで身体を地面に落とした。横たわった身体はピクリとも動かず、ステインの意識がなくなったことを伝えていた。

「ハアツ……ハアツ……勝つ、た……？」

「まだだ……！油断せずに縛り上げるまで……！」

「そう、だ……捕まえるまで……油断してはいけない……！」

「っ！顎を砕いたはずだぞ……まだ動けるのか!？」

「なんて、タフネスだ……！」

ステインは意識を失った。衝撃波に全身を打ちつけられ、飯田によって顎を砕かれて。普通なら立ち上がれなくなる程のダメージを受けたはずなのに。甚大なダメージを受けたその身体で、ステインはゆっくりと立ち上がった。理不尽レベルのタフネスに緑谷が思わず愚痴を漏らす。

緑谷は右腕が使えず、飯田はエンジンが使えない状態。ステインの方も満身創痍だが、それでも勝てるとは思えない重厚なプレッ

シャー。いよいよ覚悟を決めるべきかと悲壮な決意をするが、ステインの方に戦う意思はもうなかった。

「お前達には……本物の英雄たる素質が有る。これからきつと……素晴らしい英雄となることだろう。その覚悟に免じて……ここは、引くでしょう」

「何だどつ……!?!」

「これからも……研鑽を重ねていけつ……!?!」

「ム、ムカデ……!?!」

英雄たり得る者の覚悟に免じて、この場を去るというステイン。言葉通りにビルを伝って小さくなっていくその姿を、蒼い百足が叩き潰した。反り上がった顔に向けて、追撃の炎が浴びせられる。燃焼によつて酸素の減った空気を吸ったことで、ステインは失神。今度こそ倒すことに成功した。

「緑谷……こういうのは詳しく書くべきだ。お陰で説得に無駄に時間かけちゃった」

「2人でヒーロー殺しを倒したんですね……凄いです!」

「轟君……立甲さん!」

「どうして君達がここに……!?!」

ステインに引導を渡した援軍は、エンデヴァーヒーロー事務所で職場体験をしているはずの轟焦凍と立甲葵であった。

これまでの事例に則るなら、ヒーロー殺しは再び保須に現れる。そう判断したエンデヴァーが出張を決めたことで、2人は共に来ることになったのだ。到着してすぐに脳無への対処に追われ、その中で緑谷から送られて来た位置情報だけのメッセージ。それを『ピンチだから応援を呼んでくれ』ということだと解釈した轟は、同行した者の中で最も機動力に長けた葵を足にまでやってきた。

最も。到着した頃には、ヒーロー殺しとの戦闘は終わっていたのだが。

「氷結じゃあ起きた時に身体割っちゃうかも知れねえからな。取り敢えず縛つとくぞ」

「すまねえなお前ら……プロの俺が完全に足を引っ張ってた。運ぶの

は俺がやるよ、ありがとうな」

「いえ……」対一で、ヒーロー殺しのあの個性じゃほぼ勝てないと思います。強過ぎた……」

「そういや……君は俺より後にやられたのに、俺より先に動けるようになってたよな。どういう条件だったんだ?」

「僕はヒーロー殺しが個性を使う瞬間を見てないので、あまり深く考察はできませんが……血を取り込むことで動きを止める個性、考えられるのは摂取量や鮮度……あとは血液型などですね」

血液型、それで正解である。

ヒーロー殺しステイン、個性『凝血』。他者の血を取り込むことで、最大8分間身体の自由を奪うことができる。止めていられる時間は血液型によって決まっており、O  $\times$  A  $\times$  AB  $\times$  Bの順で増えていくようになっていいる。ちなみに、ステイン自身はB型である。

もっとも、緑谷がそれを知る由はないのだが。

「俺の速度と緑谷君の遠距離、どちらかが欠けていれば相手にもならなかったからな……あなたを殺すことへの執着と、俺達への手加減がなければ負けていたのはこっちでした」

「ほんとそうだ……大したもんだよ」

「焦凍君、ちゃんと武装は外しましたか?」

「ああ、その辺は抜きねえよ」

気絶するステインを轟の持っていたロープで拘束し、ネイティヴに担いで運んでもらう。ビルに光を遮られて暗かった路地裏から出ると、夕暮れの紅い陽射しが5人を出迎えてくれる。暖かな光を浴びたことで、何だかどつと疲れが出てきたのを緑谷は感じていた。

「子ども……と、ヒーロー? 担いでるのはヒーロー殺し!? あなた達が倒したの!?!」

「エンデヴァーさんに言われて来たけど……大丈夫だったのか!?!」

「小僧!?! お前座ってろつただろうが!」

「すみません!」

轟がエンデヴァーに場所を伝えたことで、応援に来てくれたプロヒーロー達。その中に混じっていたグラントリノは、ステインを担い

で出て来た一段の中に緑谷がいるのを見つけて彼に蹴りを食らわせる。ボフツ、と枕投げをする時のような音がした。

「まったく、まあ無事なら良かった……伏せろ！」

「えっ？あつ……脳無!？」

「敵!?エンデヴァーさんが取り逃した!？」

グラントリノが安心したのも束の間——翼を備えた脳無が一団に強襲を仕掛け、緑谷を掴んで飛び去っていった。くり抜かれた片目の眼窩から溢れた血が何人かに付着する。

このまま行かせてはならない。グラントリノは大きく息を吸って個性を発動しようとして、すぐにその動きを止めた。

「偽物が蔓延るこの社会も……徒に力を振りまく犯罪者も……肅清対象だ……ハア……ハア……」

「ゴイツ、また……!」

「全ては……正しき社会のために」

武装を全て外し拘束していたはずのステインが。どこからか取り出した折り畳みナイフを使って拘束を自ら解き、近くにいた女性ヒーローに付いた脳無の血を舐めて動きを止めた。そして飛べなくなつて落下する脳無の頭を貫き、絶命させて緑谷を救出した。

ここまで全て一瞬の出来事。誰も反応することすらできていなかった。

「助けた……?」

「バカ言え、人質取ったんだよ!」

「躊躇なく殺しやがったぜ」

「いいから戦闘態勢とれ!取り敢えず!」

再起動したステインを見て、少し遅れます戦闘態勢を取るヒーロー達。別件を終わらせて加勢に来たエンデヴァーが、一カタマリになっている彼らを見て「何をボウつと突っ立っている!？」と叱り声を飛ばした。

そのエンデヴァーも、ステインがいることに気付いて炎を盛んに燃え上がらせる。既に息も絶え絶えになっている以上、すぐに終わらせられるだろう。そう判断して一瞬で気絶させようとして――

「待て轟！」

「!?」

「エンデヴァー……!」

——グラントリノの声がエンデヴァーを止めた。

この間静止していたステインが立ち上がり、騒ぎの元となっているエンデヴァーの方を向いた。戦闘でボロボロになっていた目隠しが外れ、その素顔が露わになる。

「偽物……!」

ザッ。

「正さねば……誰かが、血に染まらねば……!」

ザッ。

「英雄を取り戻さねば!」

ザッ。

「来い……有象無象の偽物ども!俺を殺していいのは……オールマイトだけだ!」

殺気……いや、鬼気。ステインの持つ狂ったヒーローへの執着が、ヒーロー達の足を止めた。オールマイト以外のヒーローには、絶対に倒されも逮捕されもしないという執念。

顎どころか、身体中の骨がイカれてしまっているはずだ。衝撃波に脳を揺らされて、立つこともままならないはずだ。焼けた空気を吸って、肺の中も焦がされたはずだ。

なのに。

なのになぜ、動けるといふのだ。何がお前をそこまで突き動かすというのだ。ナイフを構えて跳びかかるステインに、誰もがそんな思いを抱いた——

——その時、世界が赫く染まった。

「なん……だ……!?ぐはうっ……!」

「ふう……本当に、しぶとい奴でしたねえ……」

赫に染まった空気、気を取られ空を見上げたステインを、葵が発現

させた尻尾で締め上げた。全身を締め上げられたことで掛かった圧力に苦悶の叫びを漏らし、三度失神するステイン。今度こそ、完全な捕縛に成功した。

「肩貸しますよ。出久君、大丈夫でしたか？」

「う、うん……でも、これって……」

赫く染まった世界の中で、唯一それに気を取られず動くことができた葵が、倒れたままの緑谷を起き上がらせる。2人とも……いや、飯田と轟もこの赫い世界の正体には気付いていた。何せ、この光景を作り出せる人間を知っているのだから。

「お前、この赤いのこと知ってんのか!? そうってんなら情報を共有してくれ!」

「……少なくとも、敵の仕業ではありません。原因もこの近くにはいないでしょう。いるとしたら……隣県でしょうね」

「隣県!？」

恐らく、この赫い世界を創り出した元凶があるであろう方向……ベストジーニストヒーロー事務所のある方角を見ながら、葵は冷静であろうと努めるグラントリノの質問に答える。

「ふうちゃん……頑張ってくださいよ」

緑谷も、飯田も、轟も。葵のその眩きに心の底から同意した。ステインの鬼気から間髪入れず怒りを孕んだ赫い空気に触れたことで、腰を抜かす者まで出てくる中。この怒りを知っている4人は、風華が制御に成功することを心から祈るのだった。

## 職場体験：その6

「まさか、これ程の力とはな……何とんでも制御したいと思う訳だ」  
「それでこそ、超える甲斐があるってもんだア！」

保須のヒーロー殺し戦とほぼ並行して、隣県のある雑木林ではベストジーニストヒーロー事務所の総力を上げた戦いが起こっていた。赫災領域に入った風華が、雑木林を越えて街まで被害を及ぼさないようにするための戦いが。

始まりと同時に、警戒していた前衛の3人が赫い雷の直撃を浴びて戦闘不能となった。それを受けたベストジーニストが自身の個性で風華を拘束し、後衛のサイドキック達が拘束用セメントガンの一斉掃射を仕掛ける。命中した灰色の弾丸は瞬時に固まって風華の全身を覆うように拘束したが、土を抉りながら吹き上がる赫い風によって全て剥がされてしまった。

拘束を脱した風華は、ベストジーニストの個性によって身体を縛る枷に成り下がった服を『雷上動』で脱ぎ捨て、素肌を露わにしながらセメントガンの射程外まで飛び上がる。冷たい翠緑の瞳——怒りを孕んだその眼で敵を見下ろす風華。もともとそこまで表情の豊かな人間ではないが、今は普段にも増して鉄仮面となっていた。

怒りを根源とする力だけあって、赫く染まった空気からは風華の強い怒りがこれでもかという程肌に伝わってくる。身も心も引き締め、常に最善を尽くせるよう教えているサイドキック達が、いちいち疎んで動きを鈍くしてしまう程に。

ベストジーニストは、風華がどんな半生を送って来たのかを知らない。知らないからこそ、16にも満たない少女がこれ程の怒りを抱えるような人生とはいいたい、どのようなものだったのかと考えてしまう。サイドキック達も同様。そんな思考をしてしまうことで、更に連携が拙くなってしまうことには意識がいなくなっていた。

「どいつもこいつも……考えすぎなんだよなあ！」

「っ……！待て爆豪！勝手に飛び出すな！」

「足が疎んで動き辛いんだろ!? だったら俺が時間稼いでやるから、そ

の震えさつさと止めやがれ！プロヒーローの名が泣いてんぞ！」

「ふっ……好き勝手言ってくれ！」

尻込みするヒーロー達に喝を入れながら、爆豪が飛びかかっていった。赫い風が爆豪を撃ち落とさんと吹き荒れるが、彼は風対策として十分な量の汗を籠手の中に溜め、推進力として使っていた。掌から逐一出していたのでは、いつか必ず間に合わなくなる。だからこそ、準備は万全にしておいたのだ。

爆豪が飛び出して行ったのを見て、ベストジーニストは慌てて風華が身に付けている下着の繊維を手繰り寄せ、きつく締め上げる。細かい繊維が皮膚を越えて肉にまで食い込んでいき、血管をブチブチと切り裂いて赤い染みを作った。

No. 4 ヒーローベストジーニスト、個性『ファイバーマスター』。様々な繊維を操ることができるという、必ず服を着なければならぬ人の社会においては、絶大な力を誇る個性である。

とはいえ。彼にできるのはあくまで、締め上げて何とか動きを鈍くする程度のもの。火力役として頼りにしていたサイドキック達は初っ端から戦闘不能となり、拘束用セメントガンも簡単に脱出されてしまった。プロとしての建前上勝手に飛び出すなどは言ったものの、今は爆豪の火力も頼りにしなければならぬ状況であった。

「セメントガン、私の分をくれ！爆豪！この際仕方がない、フーライの足止めは任せるぞ！」

「分かってらァー！もともと、そのために俺はここにいるんだよ！」

どんなにダメージを与えようと、『風雷回帰』が風華を元の状態に戻してしまう。しかし、それはそれで構わない。どんなに身体に付いた傷を元通りに治すことができても、その時に失った体力は戻ってこないはずなのだ。

あの肉体に変換される赫い風と雷が、体力も回復できるといふのなら話は別であるが。

悲観的な想像はやめて、攻撃を続ける。いつか必ず動きは止まる。そのときつと、こちらの声が届くと信じて。

「爆豪、君は確か以前にもあの状態のフーライを見たことがあるそう

だな！些細なことでもいい、何か弱点と呼べるようなものは知らないか!？」

「二人の相手に集中していると、他の奴が目に入らなくなる！俺がヘイトを稼いでおけば、いい時間稼ぎになるだろうよ！」

「……号赫、『裂雷』」

「つ……!?!全員、避けろおおっ!」

意識を自分に向けるため、爆豪が再び飛び出していこうとしてそれを見た風華は、左手に持った高周波ブレードを掲げた。柄から鋒へと赫い電流が流れていき、激しくスパークする。莫大なエネルギーを抱えたそれを、地上に固まるヒーロー達に向けて振り下ろした。

号赫『裂雷』。赫雷により射程が大幅に向上した斬撃は、杉の木ごと地面を深く抉り取った。ベストジーニストが察知して回避させていなければ、全員これでやられていたであろう。

『吹き荒ぶ大風』……散れ」

「させるかっ……てんだ、よォー!」

「チイツ……邪魔だ!」

「んな電撃が効くかよ!こちとら絶縁装備だ!」

溜めの短くなった『吹き荒ぶ大風』。これを撃たせてはいけないと、爆豪は片手の籠手に貯めた汗を全て解放して阻止した。『吹き荒ぶ大風』が不発に終わり拡散した風が木々を薙ぎ倒していくが、そこは気にはしていない。

近づく爆豪を撃ち落とさんと電撃を放つが、それを籠手で防ぐ。爆豪の籠手は、貯蔵した汗が誘爆しないように様々な衝撃に強くなるように造られている。もちろん、電撃への耐性も持っている。いくら電力が増大しようが、爆豪にダメージを与えるには至らないのだ。

電撃は通らない。そう判断してブレードを振ろうとした左手を掴み、右掌を抑えて個性の起点を塞いだ。暫しの膠着状態を作り出した爆豪は、いつものカッカするような語りを自制して風華に話しかけた。

「なあ、鳴神。お前が何に怒ってるのかなんてどうでもいいけどよ……それで八つ当たりをするのは違うんじゃないか?」

「……何が言いたい」

「何に怒ってるのか思い出して、レッドゾーン 赫災領域に入れるようになったのはいい。でもなあ……お前、そこで満足して、『何で』怒ってるのかまでは思い出さなかったんだろ？」

「……!？」

ここで初めて、明確な反応が見えた。ベストジーニスト一行を殺すためだけに動いていた意識が、爆豪の言葉に向かう。今が好機とばかりに、彼は言葉を捲し立てていった。

「関心が向いた……いいぞ爆豪!そのまま話しかけ続けるんだ!」

「めっちゃ近いですけど……大丈夫ですかね!？」

「うるせえぞ外野ア!黙ってる!……続きだ。お前が巻き込まれた事件……『君沢の悲劇』だったか。調べればすぐに情報が出てきたぜ、随分と派手に敵をぶっ殺してたそうじゃねえか」

「……」

「レッドゾーン 赫災領域が覚醒したのはこの時だろ? USJでのやつは、どう見ても初めてそうなった時の反応じゃなかったからなあ。後は過去に起こった事件を調べれば、自ずと答えは見えてくらア」

雄英体育祭で。風華が轟に呼ばれて、2人きりで話をしていた時。爆豪はたまたまその会話を聞いてしまっていた。

その時に、風華がかつての重大事件に巻き込まれた被害者であることを知る。『君沢の悲劇』……あの事件のことは、オールマイトが解決した事件の一つとして覚えていた。町一つが滅ぼされた、オールマイトの台頭以降最大の事件。あんな事件を解決できたらカツコいいだろうななどと、子ども心に思っていたものだ。

調べれば詳細はすぐに出てきた。敵グループの人数や個性、武装、犯行動機。犠牲者や怪我人、行方不明者の数。事件を受けて解決に当たったヒーロー達のインタビュー。虚実入り混じった様々な情報を、調べる中で手に入れることができた。

中でも爆豪の気を引いたのは、君沢市跡地で見つかった敵やヒーローの遺体に赫イスパークが迸ったというもの。そして、赤ん坊を抱えて5歳の少女がオールマイトによって救出されたというもの。そ

れがどちらも風華のものだということは、簡単に察せられた。

いろいろなものを見てきたのだろう。いろいろと思うところがあつたのだろう。そうでなければ、当時5歳の少女がこんな大きな力を身につけるなんてことなどなかったはずだからだ。

オールマイトに救われてから、レッドゾーン 赫災領域は形を潜めるようになった。USJで命の危機に瀕して再発するまでは、どこのニュースでも世界が赤に染まったなんて報道はしていなかった。それなりに、平和に過ごせていたのだということなのだろう。だからわざわざ、怒りの根源を探し出す必要があつた。

「生存者の証言で……君沢のヒーローは市民を助けようとせず、むしろ敵のような振る舞いをしてたつてあつたな。お前が怒ってるのは、そういう身勝手な奴らなんだろう？」

「そう……！あんな屑がのさばれる社会は、絶対に許しておけない……！」

「じゃあよ……『何で』お前は、そいつらに対して怒りを覚えたんだ？」「え……？」

何に怒っているかは分かる。じゃあ、何故そいつらに対して怒りを覚えたのか？風華は答えることができなかった。そんなところまで、思い出していなかったからだ。原因を探り出したところで止まって、その理由にまで意識が入っていなかった。

「何で……って……！わたし、は……？」

「原因まで思い当たつたんだろ!? こうしてまたレッドゾーン 赫災領域に入れるようになったんだろ!? だったらすぐ思い出せるはずだ！この怒りが何のために生まれたものなのか……思い出してみやがれエ！」

「う……うるさい！黙れ……黙れえ！」

「誰が黙るかア……！俺は離しやしねえぞ！」

「全員、セメントガン発射！」

「シユア！ベストジーニスト！」

狼狽えるままに、風華は赫風を吹かせる。刃のように鋭い風が、爆豪の身体を斬り裂いていく。コスチュームを越えて皮膚と肉が断たれるが、それでも爆豪は風華を掴む手を離さない。むしろ傷が増える

たびに、その力は増していつていた。

それを見たベストジーニストが、サイドキック達に命令してセメントガンの一斉掃射を行う。灰色の弾丸は風華の全身に命中し、その重みで宙に浮かぶ彼女を墜落させた。爆豪に気を取られていた風華には、反応することさえできていなかった。

「何度だつて言つてやらあ……！鳴神イ！てめエの本当のオリジン……思い出してみやがれエエ！」

「わ、たし、は……！」

記憶に霧がかかっている。誰かの姿が浮かんでいるはずなのに、それが誰なのかが分からない。

怒り？何故？何故わたしは怒っているの？

「セメントを絶やすな！常に拘束し続けるんだ！」

「ダメです……こつち側、弾丸が弾かれています！」

「ならばここまで回つてこい！弾丸を弾かれない所まで移動しろ！」

「う……うう、あああ……！」

「まだダメかよ……いい加減、思い出しやがれ！」

「頭突き!？」

「なんて乱暴な……！」

頭突き。個性も戦術もクソもない、とても乱暴な一撃だったが……それが、風華の頭にかかった霧を払った。

——ほぎや、ほぎや……！

——大丈夫だよ、雷羽……泣かないで。あなたのことは、お姉ちゃんを守るからね。

——ふえ……

そうだ。風華は守りたかったのだ。

家族が全員死んで、ようやく首が据わったばかりの幼い妹と二人きりとなったあの時。爆音に怯えて泣き出した雷羽をあやすために、四苦八苦したのを思い出した。赤ん坊の小さな眼で見つめられたあの時、絶対に守り切つてみせると誓ったのだ。

だから、力が欲しかった。幼い自分でも妹を守り切れるだけの力が  
必要だった。悪意と死が蔓延する街の中で、それぞれの欲望を以って  
あの子を奪おうとする輩への強い怒りが。風華のその想いに応えて  
風雷を赫く染め上げた。

怒りを以って、数多の悪意から妹を守る。それが赫災領域レットゾーンの真の才  
リジンであった。

「ああ……そうだ。思い出した。雷羽を……あの子を守るために、こ  
の力は生まれたんだ」

「ケツ……やつと、正気に戻りやがったか……遅えんだよ、クソ女。力  
を制御した気分はどうだ」

「……最悪だね。今でも気を抜けば、怒りに吞まれそうだよ」

「へっ、気を付けろ」

「どうやら……成功したようだな。構えよし」

「ふう……マジで殺されるかと思いましたよ」

風華の身体を覆うセメントを、爆豪が破壊して自由にさせる。立ち  
上がった風華は、赫災領域開放レットゾーンの反動でふらふらになりながらもベス  
トジーニスト達ヒーローの元へ歩み寄る。身を粉にして戦ってくれ  
た彼らに、感謝の意を伝えるのだった。

空気の赫みは消えてなくなり、夜空は正常な色を取り戻した。雲一  
つない黒い夜空は、数多くの星が輝いて美しい光を放っている。優し  
い光はまるで、大きな戦いを終えた風華らを労っているかのよう。  
ゆっくりと空を見上げ、一身にその光を浴びた。

「あー、フーライ。夜空が綺麗だから鑑賞したいのは分かるが……君  
はまずこれを羽織りたまえ」

「あ……服……！」

ベストジーニストからタオルケットを手渡される風華。戦闘中、彼  
の個性から逃れるためにコスチュームを脱ぎ捨てていたのだ。下着  
まで全部繊維からバラバラにされているため、着ていた服は全て使い  
物にならなくなってしまっている。

即ち……今の風華は、全裸なのである。

「……！」

「男性陣、あまり見てやるなよ。事務所に戻ろう」  
赫炎領域制御のための戦い。その最後を締め括ったのは、この場に  
いる全員に裸体を見られたことへの羞恥であった。

## 職場体験：その7

「今日は……どつと疲れた……」

「お疲れ様です。赫災領域レッドゾーンの相手をさせるのは大変だったでしょう？よく引き受けてもらえましたね」

職場体験も3日目が終わわり、個性研究所に帰ってきた風華はソファに寝そべり息を吐いた。

赫災領域レッドゾーンに入った反動で、帰ってくるまで葵に肩を貸してもらわなければ真っ直ぐ歩くこともままならなかった。今ももう、ソファから起きあがろうとする気力が湧いてこない。明日も職場体験で朝早いののに、頭が入浴も自室に帰ってから休むことも拒否しようとしていた。

「そつちこそ……ヒーロー殺しと交戦したってね。どんな奴だったの？」

「僕らは最後の一足をしたくらいで、特に何もしていませんけどね。ヒーロー殺しを倒したのは、出久君と天哉君の功績ですよ」

「へえ……あの2人がね……凄いじゃない」

「そうですね。それで、ヒーロー殺しがどんな奴であったかと聞かれれば……僕の印象的には、『強迫観念に囚われた病人』でしたね」

……病人、か。

赫災領域レッドゾーンに入った時の自分と、同じような感じだったのだろうか。そんなことを考える。

自分の中の感情を絶対的なものとし、それ以外の全てを悪と断じて、排除しようとする。赫災領域レッドゾーンに入った風華の見えるものを全て敵と見做すあの思考と、オールマイイト以外のヒーローを全て偽物として排除しようとするヒーロー殺しの思考は、似たもの同士なのではないか。そこまで考えてから、風華は首をブンブンと振ってその思考を振り払った。

もう、あの力は制御できる。何に対する怒りだったのかも、何のために怒っていたのかも思い出すことができた。これからはもう、間違えずにこの力を使うことができる。

狂気じみた思考の果てに、ヒーローの排除という外道を選んだヒーロー殺しとは違うのだ。

「ヒーロー殺しの逮捕……きつと全国で大きく報道されるだろうね。葵達も一躍人気者かな」

「いやあ……どうでしょうか。エンデヴァーに個性使用の許可を貰ってから出て行った、僕と焦凍君はともかくとして。出久君と天哉君は、プロの許可を得る前に飛び出していったそうですから。法律的に2人が行ったことは重大な違反です。むしろ処罰を下される可能性の方が高いでしょうね」

法律により、『一部の例外』を除いてプロヒーロー以外の人間は私有地以外での個性使用を禁じられている。今回の緑谷と飯田が行ったヒーロー殺しとの戦闘は、この法律に違反した行為である。

超常黎明期、個性の発現によってそれまでの社会は完全に崩壊した。秩序を失った社会の中で、警察は統率と規格を重んじて、個性を『武』に用いないこととする。ヒーローは、その穴を埋める形で台頭してきた職業である。

個性とは、容易に人を殺められる力。本来ならば糾弾、排斥されて然るべきこの力が公に認められているのは、先人がモラルとルールを遵守してきたからである。

個性を扱う資格を持たぬ者が、個性を用いて保護管理者の許可なく危害を加えることは……例えばヒーロー殺しが相手であったとしても、立派な法律違反なのだ。

善行のためとはいえ、秩序は一度乱されてしまえば歯止めが効かなくなってしまう。だからこそ2人には厳罰が下される必要があるが……正しい行いをした者を『違反だから』と問答無用で裁くこともまた、秩序を乱す要因となってしまうであろうことは容易に考えついた。

「あー、そうか……そうなる前に何か、細工はしてくれと思うけど……やっぱり心配になるね。立場もそうだけど……怪我も」

「そうですねえ……明日、僕はお見舞いに行くのでその時にいろいろ聞いておきますよ。ふうちゃんも職場体験頑張ってくださいね」

「わたしも勝己も……心配してるって伝えておいてくれよ。それじゃ、おやすみなさい」

「おやすみなさい。また明日」

明日からは、赫炎領域を正気を保ったまま制御する訓練に入る。パトロールにもより一層気合を入れてかからなければならぬし、クライアントからの依頼があるなら、相談業務の見学もさせてもらえることになっている。やることはこれまで以上にいっぱいだ。

緑谷達のことには葵に任せて、風華はソファから立ち上がって自室へと戻っていった。

）

『ヒーロー殺し逮捕！エンデヴアーお手柄』

【保須市で暴動徒党組んでの犯行か】

昨夜八時頃、保須市にて3人の敵による暴動が起こった。死傷者はおよそ60人を超えたとされているが、街への被害は甚大であり今後更に増える可能性が高い。この3人の陰で犯行に及ぼうとしていた全国指名手配犯、赤黒血染（敵名：ステイン）が現行犯で逮捕された。全国各地に神出鬼没に現れて、17名ものヒーローを殺害した男の逮捕に日本中が安堵している。

【ヒーロー殺しの最後】

これまで多くの犯行が人目のつきにくい路地裏などで行われてきたが、今回捕まったのは江向通りの真ん中だった。その場に居合わせた7名のヒーローと、4名の高校生が向かい合っていたところを駆けつけたエンデヴアーが仕留めた形だ。

【エンデヴアーお見事 雄英生にも称賛の声】

エンデヴアーヒーロー事務所で見に行ったエンデヴアー。会見中の対応は普段と変わらず冷静であったが、その表情は曇っていた。保須市は管轄外であったが、ヒーロー殺しのこれまでの犯行傾向を分析して動向を把握したことで応援に駆けつけることが可能となったことを明かす。自分だけでなく、最後に逃げようとするヒーロー殺し

を捕獲したという雄英からの職場体験生に対しても称賛してほしいと言っており、謙虚な一面を見せていた。

『3人の敵はいずれも住所・戸籍不明の男。その外見的特徴とNH A テレビが捉えた二人の男の姿から、先日雄英高校を襲った『敵連合』との繋がりを指摘する声も上がっています』

『オールナイト台頭以降の単独犯では、最多の被害者数。犯罪史上に名を残すであろう敵、ヒーロー殺しステインの犯行の詳しい動機など追ってお伝えします』

「何処もかしこもヒーロー殺し……脳無のことはついでかよ……」

——ハハハ……夜が明ければ、世間はアンタのことなんか忘れてるぜ。

「忘れるどころか……俺達がオマケ扱いか」

「昨晚発生した、保須市での事件……みんな気になっていることだろう。ああ私も当然、大いに気になっている」

「……」

「人は大きな事件に目を奪われる。しかし、こういう時こそヒーローは冷静でいなければならぬ。混沌は時に人を惑わし、その根底に眠る凶暴性を引き摺り出そうとしてくる」

「……!!」

「という訳で、今日もピッチリ平常運行。タイトなシーズンズで心身共に引き締めていこう」

「シユア！ベストジーニスト！」

「髪型……戻らないね」

「来る場所……間違えた……」

時は流れて、職場体験7日目。

「今日も頑張ってるね！お疲れ様！」

「ありがとうございます。これからも応援よろしくお願いしますね」

「爆豪君も、コスチューム似合ってるよ！まるで敵みたいだ！」

「誰が敵だこの野郎！せめてもう少し普通に褒められねえのか!？」

市民に当たり散らすなど、爆豪がベストジーニストから叱られる。流石にこれは理不尽じゃないかと風華は思ったが、爆豪の口が悪いのはいつものことなので黙殺する。パトロール中声をかけてくる市民が爆豪をいじってくるのを黙って聞いていた。

サイドキックが赫炎領域レッドゾーンのことを周知してくれていたおかげで、風華は特段腫れ物扱いされたりすることもなく周りに受け入れられていた。雑木林から被害が広がらず、街に被害がなかったことも一因である。

プロの働きがあつたからこそ、風華は排斥されることもなく職場体験を続けられている。彼らを君沢のヒーローのような偽物だと思うことは、風華にはもうできなかつた。

「……本当に、ありがとうございます」

「そう何度も言わなくていい。どうしても礼がしたいというなら、そうだな……卒業後はサイドキックとしてウチに来るといい」

「……はい！」

オールマイト以外のヒーローなんて、すぐに化けの皮が剥がれる偽物だと思っていた。けれど、少なくともベストジーニストヒーロー事務所の面々に関しては間違いだったと思い知った。

この恩はいつか、返さねばなるまい。ベストジーニストのサイドキックへの勧誘を、風華は二つ返事で受け入れるのだった。

「話しはこの辺にしておこうか。フライ、爆豪！次の場所へ行くぞ！」

「はい！」

「おうよー」

「緑谷出久！まったく……おかげで半年間の減給と教育権の剥奪だ！  
まア、いろいろと情状酌量あつてのこの結果だがな。取り敢えず身体  
が動いちまうところとか、本当にお前そつくりだよ俊典！」

「申し訳ございません……いやはや、私の教育が至らぬばかりに……」  
「ま、教育権なんぞどうでもいい。もともとお前を育てるためだけに  
取った資格だったからな」

「その節は本当にお世話になりました。あなたの教えがあるからこ  
そ、今の私があるのです」

「その割には忘れてたらしいな」

いくらかゴタゴタも収まって。グラントリノはオールマイトと電  
話をしていた。内容は言わずもがなヒーロー殺しの件である。

グラントリノがヒーロー殺しと相対したのは、時間にして数分もな  
い短い時間。それでもあの殺気には戦慄させられた。強い思想……  
強迫観念からくる威圧感。オールマイトの持つ平和の象徴としての  
思想と似たような『カリスマ』があった。

今後取り調べが進む度、ヒーロー殺しの思想は各メディアやネット  
で垂れ流されるだろう。今は良くも悪くも抑圧された時代である。  
必ず奴の思想に感化された人間は現れてくる。

「しかし……個々で現れたところで、今回のようにヒーローが対処す  
るでしょう？」

「そこで『敵連合』だよ」

繋がりが示唆された……この時点で敵連合は『雄英を襲って返り討  
ちに遭ったチーマーの集まり』から、『高潔な思想ある集団』であると  
して、世間に認知される。

受け皿は整えられていた。個々の悪意は小さいものであっても、集  
まればそれは何倍にも何十倍にも膨れ上がる。

着実に外堀を埋めて、己の思惑通りに状況を動かそうというやり  
方。このやり方好む者を、2人はよく知っていた。

「俺の盟友であり、お前の師を殺し。お前の腹に穴を開けた男……  
オール・フォー・ワンが再び動き出したとみていい」

「信じ難い事実です。よもやあのような傷で生きていたとは……」

「ワン・フォー・オールの全て……ちやんと緑谷に話しておけよ」

バラバラだった悪意が、一つの熱に当てられて敵連合へ向けて動き  
始めている。今後の日本を襲う未曾有の危機……今回はまだ、その  
きっかけに過ぎない些事であるということとは、オールマイトは考えな  
いようにしていた。

## 職場体験を終えて

「一週間ありがとうございました。……ほら、勝己もちゃんとお礼言って」

「……チツ、ありがとうございます」

最終日を終えて、風華と爆豪は事務所の前でヒーロー達に別れの挨拶をしていた。「一週間お疲れ様でした」や「将来が楽しみだ」などと労いの言葉がサイドキック達からかけられる。それを聞いていたベストジーニストも、力強く頷いていた。

「次に来る機会があるとしたら……いや、それはその時になったら聞かされるか。一週間、よく我々について来ることができたな。お疲れ様。最後に、お前達には一言ずつ残しておこう」

「何でしょう」

「早よ言え」

「よし、爆豪！お前は敵を積極的に倒そうとする姿勢や今の時点での実力、知識共に申し分ない水準に達している！しかし市民に対する態度が悪過ぎる！我々プロヒーローは公務員であり、その活動は市民の皆様への血税にやって賄われているということをやめゆめ忘れるな！ファンサービスをしろという訳ではない、真摯に声を受け止めろということだ！分かったか！」

「……ああー！」

「そしてフリーライ……いや、鳴神！お前は<sup>レッドゾーン</sup>赫炎領域を制御できるようになったのはいいが、制御しようという意識が前に出過ぎていて出力が大幅に落ちてしまっているぞ！あの赫い世界がこれからのお前の象徴的なものになるのだから、無意識レベルで制御できるように常に訓練に励むこと！使い古された表現だが、大いなる力には大いなる責任が伴うということを忘れるなよ！」

「……はいー！」

ベストジーニストからの激励の言葉。一息で捲し立てられたその言葉を2人は真摯に受け止め、力強く返事をした。

「お前達が卒業し、プロヒーローとして大成するその時を楽しみにし

「ているぞ！以上だ！」

「ベストジーニスト、ありがとうございませう！」

「……ありがとう、ございませう！」

事務所を後にして、駅へと向かう。そんな2人の後ろ姿を、ベストジーニスト達ヒーローは見えなくなるまで送り出していた。

「終わった、ねえ……」

「……個性研究所って、俺にも使えんのか」

「わたしが一緒なら使えるけど……まだまだ動き足りないうって感じかな？」

「ツたりめーだろが。習ったこと学んだこと、反芻して自分のものになくちやなんねえ。てめエの所ならソレができんだろ」

流石の上昇志向だな、と感心する。

感心はしつつも街中でイキリ立つなど嗜め、爆豪の口にキャンディを一本突っ込んだ。ブラウン色のそれから放たれるとてもキャンディが出していいとは思えない味に、爆豪は深く咳込む。

「何しやがんだこの野郎！つてか、てめエの渡してくる飴玉全部クソ不味イんだよ！今度は何味食わせやがったんだ、言え！」

「これは納豆味だね。わたしは結構好きだな。まあ街中でうるさくする奴には丁度いいでしょ」

「んだとてめエ！」

「そのうるさいのは、研究所で解放しなよ。欲しいなら相手だつてしてあげるからさ」

上等だア……！潰してやらア！とおよそヒーローがしていい表情ではない顔になる爆豪。ワナワナと身体を震わす彼を置いて、風華はそそくさと駅まで早足で歩いて行った。

その後。

個性研究所に殴り込んだ爆豪は、風華と葵のコンビと2対1で戦いコテンパンにのされたことを追記しておく。流石に赫炎領域と爆破の通らない甲殻持ちを同時に相手するのは、職場体験を通して得た経験を活かしても不可能であった。

「クソア……いつか必ず潰すツ……！」

「正直、済まなかったって思ってるよ」  
「ま、頑張ってくださいな」

「みんな、職場体験どうだった？」

「あんまり踏み込んだことはしなかったな」

翌日。

職場体験が終わって初めての登校となれば、当然話題は職場体験のことである。

基本的にできたことといえば、事件発生時の避難誘導やプロの後方支援くらいで直接敵と戦闘するということはなかったというのが大半であった。

しかし、中には派手に活動できた者もいた。蛙吹が行った『セルキーヒーロー事務所』では、隣国からの密航者を捕えるという出来事があり、しっかりと当事者として関わったそうさ。

「凄い活躍してるじゃん！」

「それ程でも。お茶子ちゃんはどうだった？」

「とても……有意義な時間だったよ……！」

持て囃されて気恥ずかしくなったのか、麗日の方に話題の転換を試みた蛙吹。話題を振られた麗日の様子からは、闘気のようなものが滲み出ている。

バトルヒーロー『ガンヘッド』の元で身につけた格闘術の一部を披露してみせる。腰をしっかりと入れた正拳突きは空気を切り裂き、音を置き去りにして真っ直ぐに線を描いた。

「バトルヒーローのどこ行っただっけ」

「目覚めたのね……お茶子ちゃん」

「オーラヤバいわ」

「たった一週間で変化やべえな……」

「変化？違うぜ上鳴。女つてのはなあ……元から悪魔のような本性を隠してるモンなのさー！」

「Mt. レデイの所で何を見たんだお前は……あと爪噛むの止める。汚ねえぞ」

「いったい、何が彼をそこまで追い詰めたのかはどうでもいいこととして。上鳴は爪を齧るのを無理矢理手を離して止めさせると、話題を最もキャッチーな3人……ヒーロー殺しの事件に関わった飯田、緑谷、轟の3人に変換した。」

「そうそう、ヒーロー殺しだよ!」

「……心配したんですわよ」

「命があつて何よりだぜ、まったくよ」

「エンデヴァーが助けてくれたんだってな!流石はNo. 2ヒーローだぜ!」

ヒーロー殺しとの交戦によつて、緑谷は右腕に大きな数を負い、飯田も右足をやられていた。幸い神経に傷は付いておらず、病院に出張に来てくれたリカバリーガールの治療によつて回復はしたが……一歩間違えていれば確実に死んでいた。クラスのみんなが心配するのも当然である。

最も、ヒーロー殺しに2人を殺す気はなかったのであるが。本物のヒーローの資質を持つ者を殺さないポリシーに、あからさまに『生かされた』のだ。

それが分かっているからこそ、「うん……」と言うだけに留めていた。

「俺、ニュース見たんだけどさ。ヒーロー殺しって敵連合とも繋がってたんだろ?もし、あんな恐ろしい奴がUSJに来てたらと思うとゾツとするよ。立甲さんもよく最後捕まえられたよね」

「でもよ……確かに怖えけどさ。尾白、動画見た?アレ見ると一本気つていうか、執念っていうか……カッコいいって思っちゃわねえ?」

「か、上鳴君……!」

「あつ……悪りい!」

無神経ともとれる上鳴の軽率な発言を、緑谷が嗜める。彼もすぐに自分の失言に気付いてすぐに謝罪を口にしたが、飯田はそんな上鳴を

咎めようとはせずに「気持ちちは分かる」と流した。

「確かに……奴は信念の男だった。アレがカッコいいとか、クールだ  
と思う人が出るのも分かるよ。だが！奴は信念の果てに肅清という  
間違った道を選んだ！どんな高潔な考えがあつたとしても……そこ  
だけは間違いないんだ。だからこそ、俺は奴が肅清を選ばずとも済むよ  
うなヒーローを改めて目指そう！」

「飯田君……！そうだよ、頑張らないとね！」

「いいぞ委員長！」

「さあ、そろそろ授業が始まるぞ！みんなそろそろ席に着くんだ！」

「うるさい……」

「なんか……すんませんっした……」

「……出久、ちよつといい？」

「あ、鳴神さん。どうしたの？」

飯田が着席を促すのは一旦無視して、風華は緑谷に話しかけた。事  
の当事者となった葵から、風華はあらましを幾らか聞いていた。その  
時に緑谷と飯田には、何らかの処分が下るのではないかという話が出  
ていたのだが。ヒーロー殺し逮捕の功績が全てエンデヴァーに被せ  
られている件も合わせて、より詳しい事情を知っているであろう当事  
者本人から話を聞いておきたかったのだ。

「……知ってるんだね。秘密にしなきゃいけないからあまり大きな声  
じゃ言えないけどさ。取り敢えずこっちは大丈夫だったよ」

「……そう。なら、良かったよ」

「そつちこそ、レッドゾーン 赫災領域のことがニュースになってたよ。ヒーロー達  
が総出で情報を周知してたって報道されてたけど……どうだったの  
？」

「わたしの方も……大丈夫。もつと精進していかなくちやならないけ  
どね」

周りに知られないように、緑谷は多くは語らなかつた。しかし察す  
ることはできる。エンデヴァーに功績を全て被せて自分達はあくま  
で『たまたまヒーロー殺しと相對した』とすることで、保護監督なし  
で個性を人に使った事実を抹消したのだろう。

でなければ、『規則を踏み倒してでも人助けのために戦った』として処分と称賛を受ける立場にいるだろうから。

そしてあの日、レッドゾーン赫災領域はベストジーニスト所有の雑木林を越えて保須を含む多くの都市を跨いでいた。空気が赫に染まったあの世界は、風華が内に抱える怒りが具現化されたようなもの。それに触れただけで人によつては凄まじい恐怖を呼び起こすような厄物である。

緑谷がヒーロー殺しと交戦したあの日、レッドゾーン赫災領域は奇しくもヒーロー殺しを捕える最後の一助となった。そして、腕の治療で入院することになった緑谷はその後のことを何も知らない。USJでの暴走した彼女を知っているからこそ、街中でレッドゾーン赫災領域が発動したことを不安に思っていたのだ。

風華の方も大丈夫だと言ったことで、緑谷はその言葉を信じることにした。特に誰かに被害が出たとかいうニュースはなかったし、風華はこうして今も学校に通えている。つまり、レッドゾーン赫災領域に関して何かしら進展があったということなのだろう。

でなければ、あんな力を街中で使つてタダで済む訳がないのだから。

「これからも……頑張っていこう」

「うん……そうだね」

どうせニュースになるならば、正規の活躍をして堂々と紙面を飾ろう。

そう誓い合う2人であった。

く

運動場γ

「はいっ！私 came。つてことでね、やっていくよヒーロー基礎学！久しぶりだな少年少女！元気してたか!？」

「ヌルツと入ったな」

「パターンが尽きたのかしら」

「む、無尽蔵だっつーの！職場体験の直後つてことで今回は、遊びの要

素を含めた救助訓練レースをするぞ！」

パターンの地味さを突かれたオールマイトが、それに反論しながら今回の内容を説明する。救助訓練をするならばUSJがいいのではないかという飯田の質問に対して、「これはレースだぜ！」と一喝した。

今回は、工業地帯を模して造られたこの運動場γで5人4組……1組は6人に分かれて訓練を行なっていく。運動場の何処かに陣取ったオールマイトが救難信号を発したらスタート。外から誰が最も早くオールマイトを助けられるかを競うのだ。

「勿論、建物への被害は最小限にね！」

「指差すなや」

「じゃ、初めの組は位置に着いて！私の準備が終わり次第すぐに始めるぞ！」

「はい！」

風華は最初の組に選ばれた。相手は緑谷・飯田・尾白・芦戸・瀬呂の5人である。ちなみにヒーロー基礎学の授業であるが、風華は体操服だ。ベストジーニストに破壊されたので修復中なのである。

「誰が勝つと思う？俺は瀬呂！」

「芦戸も運動神経凄えぞ！」

「機動力なら飯田じゃん？いや……体育祭から緑谷も何か上手くなってるよな！」

「流石に鳴神だろ！あいつ瞬間移動できるぜ！そうでなくとも風に身体強化でめっちゃ速いぞ！」

「大穴で尾白だ！」

見学のみんなで一位が誰かを予想し合う。最も多く予想されていたのが風華で、次点が瀬呂。その次に飯田と緑谷が続いて、芦戸と最後に大穴で尾白という予想となった。

『スタート!!!』

一斉に飛び出していく……風華を除く5人。瀬呂がごちゃごちゃと入り組んだ地面を避けて上を進んでいき、緑谷がパルクールのようなアクロバティックな動きでそれを追い越していく。残った3人が

地道に地面を進みながら彼を見上げる中、風華は一人スタート地点から動かずに手を胸に当てて精神統一を図っていた。

「おいおい、早く行かなくていいのか？」

みんなが心配し始める中、ゆっくりと閉じていた風華の瞼が開かれる。その瞬間、運動場γは赫い空気に支配された。

「レッドゾーン 赫災領域!？」

「暴走……して、ない……!？」

「暴走克服かよ!？」

「よし……『雷上動』」

みんなの驚愕をよそに、オールマイトの待つゴールに向けて手を翳した風華。そのまま『雷上動』を発動し、コースを進んでいた5人を置き去りにして一直線にゴールまで辿り着くのがあった。

「……お待ちせしました。助けに来ましたよ、オールマイト」

「……暴走、克服したんだね」

「はい。まだまだ暴走時のような、圧倒的な出力を出すことはできませんけど……一歩だけ、踏み出すことができました」

「おめでどう!ここからが鳴神少女の、真のスタートということだな!これからも頑張っていけよ!そして助けに来てくれてありがとう!優勝商品の贈呈だ!」

オールマイトから『助けてくれてありがとう』と書かれた襷をかけられ、風華は嬉しさが分かりやすい笑みを浮かべる。そしてレッドゾーン 赫災領域を解除して、ふう、と一息を吐いた。

まだまだ暴走時のように出力を全開で扱うことはできないし、制御に意識を向けなければならなかったため範囲もかなり狭まった。ここから正気を保ったまま暴走時と変わらぬ出力を出せるようにするには、かなりの時間と努力を要するであろう。

ここからが、本当のスタートライン。人々をその存在だけで安心させられるヒーローになるための最初の一步。過去と向き合い、怒りを乗り越えて、風華はようやくそこに立ったのだ。

「はあっ……負けてしまった!やっぱり、こういうレースで雷上動はズルいな!」

「レッドゾーン 赫炎領域……制御できるようになったんだね。僕も負けていられないや」

「ふふ……わたしだって、負けるつもりはないよ」

## ワン・フォー・オールと期末テスト

——君に話さねばならないことがある。私とワン・フォー・オールの秘密についてだ。

レースの後、こっそりとオールナイトから耳打ちされた話。緑谷は授業を終えて更衣室で着替えをしながら、その内容について考えていた。

何か覚悟を決めたような、改まった言い方。少しだけ、聞くのが怖いと感じた。

「久々の授業で汗かいちゃった☆」

「俺、機動力課題だなー」

「情報収集で補っていくしかないか……」

「それだと後手に回んだよな……お前とか瀬呂みたいな奴らが羨ましいぜ」

「おいおい緑谷！ちよつとこれ見ろよ！」

「どうしたの、峰田君？」

他のみんなは、着替えをしながら今回の授業で見つかった自身の課題やクラスメイトの長所について話をしていた。そんな中で、峰田が何やら酷く興奮した様子で緑谷に話しかけてきた。いったい何事かと峰田の方に視線を向けると、彼は更衣室の壁に空いた小さな穴を指差していた。

男子更衣室の隣は女子更衣室。そして穴の存在を指摘したのがA組の性欲こと峰田実。これだけ情報が揃っていれば、この人為的に空けられたであろう穴がいったい何のために存在しているのかなど、容易に想像がつくというものである。

「峰田君、止めておきたまえ。ノゾキは立派な犯罪行為だぞ！」

「オイラのリトル峰田はもう立派なバンザイ行為なんだよお！八百万のヤオヨロオツパイ！芦戸の腰つき！葉隠の浮かぶ下着に麗日のうちらかボデイそして蛙吹の意外オツパ」

「み、峰田君！そんなことしたら鳴神さんが悲しむよ！君の精神を信じている彼女の心を裏切るつもりかい!？」

「ハッ……！……そうだ……オイラは鳴神の……ああああ……！！  
やめとく……！！」

——実のヒーローとしての精神なら、その有り余る性欲だつて凌駕してくれるはずさ。わたしはそう信じているよ。

かつて風華に言われたことを思い出し、血の涙を流しながらノゾキを諦めた峰田。クラスメイト達がせめて、人としての尊厳だけは失わずに済んだことに緑谷は安堵の息を吐いた。

ちなみにこの後、風華の話題が出たことで反応してしまった爆豪が上鳴や瀬呂にしつこく追及されるのだが。彼はその件に関しては、完全黙秘を貫いて追及を退けていた。

「ふう……人の心はまだ失っていないかったか」

「ですが、何と卑劣な……塞いでしまいましたよう！」

「ウチだけ……何も言われてなかったな……」

覗くつもりなら、イヤホンジャックを突き刺して眼から爆音を流してやるつもりだった耳郎。自分だけ特に話題に挙げられなかったことに、密かにショックを受けていた。

「実……これからも、頑張つていきなよ」

）

「失礼します……オールマイト、僕にしなければならぬ話つて……  
いったい何なんですか？」

「……まずは、かけたまえ」

いつもの雰囲気とはまるで違うオールマイトに、緑谷は思わず息を呑んだ。

「色々大変だったな。師匠だというのに近くにいてやれず、済まなかった」

「そんな……オールマイトが謝るようなことじゃないですよ！それよりワン・フォー・オールについてのお話つて……！！」

「そうだね……君が職場体験で会敵したヒーロー殺し。あれは確か、血を舐めることで身体の自由を奪うという個性だったね」

「はい。それが……何か？」

「ワン・フォー・オールを譲渡した時に、私が言ったことを覚えているかい？」

そう言われて『食べ……』と、髪の毛を唐突に千切られて食べさせられた時のモノマネをする。そのクオリティを褒めつつも、オールマイトは重要なのはそこじゃないと注意した。大事なものは、『DNAを取り込めるなら何でもいい』というところだ。

オールマイト並びに緑谷出久、個性『ワン・フォー・オール』。連綿と受け継がれてきた平和の象徴たる個性。何代にも渡って人から人へと受け継がれ渡っていき、その度に持ち主の力を蓄えてきた。緑谷の時点で、継承者としては9代目である。

譲渡するには、持ち主のDNAを継承者が取り込む必要がある。血液や皮膚、そして髪の毛などから継承するのがポピュラーな方法だ。そしてこの継承に関して大事になることが、『渡す側にその意思がなければ継承は成されない』というものである。

普通なら、個性は親から子への『遺伝』という形でしか受け継がれることはない。ワン・フォー・オールという個性は、その成り立ちからして特別な個性なのだ。

「もともと、ワン・フォー・オールはとある一つの個性から派生して生まれたものなんだ。オール・フォー・ワン……他者から個性を奪い己がものとし、そしてソレを他者に与えることのできる個性だ」

「みんなは、一人のため……」

オール・フォー・ワン。明らかにワン・フォー・オールと関係のある名前に、緑谷は漠然とその意味を口にした。

超常黎明期……個性の発現によつてそれまでの社会は崩壊した。秩序を失い無法地帯となつてしまった日本……ある人物はそれを、己が個性を用いて纏め上げていく。個性のせいで居場所を失った者からは個性を奪い、逆に個性がないせいで居場所を追われた者には個性を与える。そうして人々を服従、或いは屈服させていき……瞬く間に

裏社会の筆頭へと男は成り上がっていったのだ。

「ネットでは噂をよく見ますけど……創作じゃないんですか？教科書でも見たことないですし……」

「裏家業の所業を教科書には載せんさ。力を持っていると、人はそれを振るえる場を求めるから」

「その話が、どうワン・フォー・オールに繋がってくるんですか？」

「言ったら？与えることもできるって。そうして個性を与えられてきた者の中には、負荷に耐え切れずに廃人となるような者もいた。そうなったら物言わぬ人形……ちようど、脳無のようになってしまう者も多かったそうだ」

しかし一方で、与えられたことでもともと持っていた個性と混ざり合い新たな個性が生まれるというケースもあった。

男には、『無個性』の弟がいた。彼は身体小さくひ弱だったが……正義感の強い男だった。彼は裏から日本を支配しようとする兄の所業に心を痛め、抗い続けていた。

ある時、そんな弟に男は『力をストックする』という個性を与えた。その理由が何だったのかは知る由もないが……弟には個性が宿っていた。個性を他者に与えるという、気付けるはずのない、それだけでは何の意味もない個性が。

「彼がもともと持っていた『個性を他者に与える』個性と『力をストックする』個性が混ざり合い一つの個性となった！これがワン・フォー・オールのオリジンさ。皮肉なものだよ。正義はいつも、悪より生まれ出す」

「ま、待ってください……オリジンのことは分かりましたけど……どうして今さら、そんな昔の悪人の話を……？」

超常黎明期はもう百年は昔の話だ。どうして今さらそんな昔の話をするのかという疑問は、出てくるのも当然であろう。

「個性を奪えるんだぜ……？何でもありだ。成長や老化を止めるみたいな個性を奪ったんだろう。そうして奴は生き永らえ、悪の限りを尽くした。弟はそれに抗うも、力及ばず……敗北した彼は、いつか必ず兄を止められる者が出てくると信じて力を次に託したんだ」

「……」

「そして、私の代で奴を討ち取った！そのはずだったんだが……どう  
いう訳か奴は生き延びて、再び敵連合を隠れ蓑に力を伸ばしている」  
「……………!!」

「ワン・フォー・オールとは言わば、オール・フォー・ワンを倒すため  
に受け継がれた力！君はいつか奴と……あの巨悪と対峙しなければ  
ならなくなる時が来る……かもしれないのだ。酷な話になるが……」

「ぼ、僕は……頑張りますよ！」

オールマイトがいてくれれば、自分はきつと何でもできるよにな  
る。そんな気がすると、緑谷はオールマイトを励ますように言った。

拳は強く握り締められて、小刻みに震えている。超常黎明期を纏め  
上げた巨悪と、いつか対峙する時が来るかもしれないという恐怖はあ  
る。それを踏まえても尚、次代の平和の象徴としての責任感と自負が  
彼の心を固めていた。

……………言わねば。言うんだ、オールマイト。

オールマイトは口を噤んだ。緑谷に伝えなければならぬことが  
あるのに、口がそれを言おうとしてくれない。

「……………ありがとう」

その言葉しか、出てこなかった。

「オールマイト……嘘、でしょ……？」

たまたま、聞いてしまった。

オールマイトからの呼び出しに慌てていて、自分の荷物を忘れて  
いった緑谷。相談室は近いからと届けに行つた風華は、少しだけ隙間  
の空いていた扉から2人の話を聞いてしまったのだ。

合点はいった。緑谷の身体を壊してしまう個性のことや、オールマ  
イトが雄英に教師として赴任した理由など。個性の継承者を探して  
いたオールマイトは雄英をそのための場所として選び、しかし先に緑

谷を見つけてしまったことで彼に譲渡された。

つまりは、そういうことなのだろう。

来たばかりを装って忘れ物は渡したので、会話を聞いていたことはバレていないだろうが……オールマイトすら逃した巨悪が存在するというところに、驚愕せずにはいられなかった。

「……誰にも言わないようにしないとね」

聞いてしまったところで、今の風華に何かができるといふ訳でもない。できることといえば、この秘密が自分から他所に漏れないよう口を閉じることくらいであった。

、

「えー、雄英もそろそろ夏休みだが……もちろん君達が30日間丸々休める道理はない」

「まさかっ……!」

「夏休み、林間合宿やるぞ!」

「知ってたああああ!! やったあ!!」

「肝試し!」

「ふ……やめとく!」

「花火」

「カレー……だな!」

「自然環境となりますと、また活動条件がいろいろと変わってきますわね!」

「如何なる環境でも正しい選択を……か。面白い!」

「寝食をみんなで! ワクワクしてきたあ!」

わいわいガヤガヤ騒ぎ出す面々を、相澤は目力で黙らせる。そして「ただし合宿に行けるのは、期末テストを無事に終えられた者のみ……ダメだった奴は学校に残って補習地獄だ」と脅しをかけた。特に中間テストで成績の悪かった面々が一気に慌てだす。

「みんな頑張ろおおおぜ!」

……そういえば、オールマイトは自分の話はしてなかったな。

風華は騒ぎに加わる余裕はなかった。昨日聞いてしまった緑谷とオールマイトの話の内容が、ずっと頭の中をグルグル回っていたからだ。

個性の話はしていたが、オールマイトは個性を手にした自分の話はほとんどしていなかった。どういう経緯で手に入れたとか、手放した後はどうなるのかとか、聞いてしまった以上知りたいことはいろいろあるが……風華はそこで思考を打ち切った。

どうなるにせよ、やることは変わらない。オールマイトに報いるために、これからも最高のヒーローを目指して精進していかねばならない。

どんな凄い話が隠れていようと、日常はこうして進んでいくのだから。

）

「ヒーロー殺し。まさか捕まっちゃうとは思わなかったけど……概ね想定通りだね」

何処かで、巨悪がそう言った。

暴れたい奴や、思想に共感した奴など。様々な人間が衝動を解放する場として、敵連合を求めてやって来ている。ヒーロー殺しが逮捕されるなど少々の誤算こそあったものの、想定通りに事が進んでいるとほくそ笑んだ。

「そして……死柄木弔は、そんな奴らを統率しなければならぬ立場となる！」

「できるかね、あんな『子ども』に……ワシはアンタが直接出向いた方が、早く事が進むと思うが」

「ハハハ……なら、早く僕の身体を治してくれよドクター」

「無茶を言うない。死亡確実の状況から救い出せただけでも御の字だというのに。ああ……『超再生』を手に入れるのがあと5年早ければなあ！傷が癒えてからでは意味のない、期待外れな個性だった」

自分が出ることはできないが、それでいい。死柄木弔にはたくさん

苦勞をしてもらおう。自分からあらゆる悪意を取り込んで、彼が次なる「巨悪」<sup>ほく</sup>となるために。

「あの子はそう成り得る……「歪み」<sup>なみ</sup>を持って産まれた子だよ。今の内に甘受するがいいさ……オールマイト。仮初<sup>茶</sup>の平和<sup>番</sup>をね」

## 備えろ期末テスト

時は流れ、6月最終週——……

……期末テストまで、残り一週間で切っていた。

「まっつっつったく！勉強してねええええ！」

「あははー」

叫ぶ中間テスト最下位、上鳴電気。それに同調して乾いた微笑みを浮かべる20位、芦戸三奈。ここ最近では体育祭やら職場体験やらイベント続きでまったく勉強に身が入っておらず、今から既に特大の絶望感を漂わせていた。

「確かに……イベント続きではあったがな」

同意するのは常闇踏陰。中間テストでは15位であった。彼もまた、結構テストが危ない組の一人である。

「中間テストはまあ、入学したてだったから範囲も狭くて特に苦労はしなかったけどなあ……行事がいろいろあったのもあるけど、期末は中間とは違つて」

「演習試験が有るのも辛いところだよな」

そう。13位の砂籐が言うように、中間テストは対して苦労するよきな難易度がある問題は特になかった。12位だった口田も、コクコクと首を勢いよく縦に振つてその言葉に同意する。

そしてその言葉を引き継ぐように、10位の峰田が期末テストに存在する演習試験の存在を明らかにする。「アンタは同族だと思つたのに！」と芦戸が裏切られたような気持ちで峰田に向け、「お前みたいなのは馬鹿だからこそ愛嬌が出るんだろうが……！どこに需要があるんだよ！」と上鳴が叫んだ。

「“世界”……かな」

「ムカつく！」

数少ない、峰田が優位に振る舞える機会。彼はこの機会を存分に堪能していた。

「あ……芦戸さん、上鳴君！弱音を吐く前にまずは頑張ってみようよ！やっぱりみんなで林間合宿行きたいから……ね！」

「うむ！言葉の前に行動だぞ！」

「普通に授業受けてりやあ、赤点なんてあり得ねえだろ。ちゃんと家で休めてんのか？」

「クソア！お前ら言葉には気を付けろ！」

中間テスト5位、緑谷出久。

2位、飯田天哉。

6位、轟焦凍。

励ましのつもりだっただろうが……成績上位者である彼らのその善意の言葉が、余計に上鳴と芦戸の心を深く抉ってきた。胸の痛みを鎮めるように、上鳴が拳を胸に当てて悶える。

「お2人とも……私、座学ならお力になれると思いますわ。演習の方はからきしでしょうけど……」

「……？」

「や、ヤオモモ〜！」

「女神……！」

最後の方で自虐をしていたが、それは聞かなかったことにして。中間テスト成績1位の八百万から出たありがたい申し出に、ビリとブービーの2人は遠慮なく飛びついた。

「お2人じゃないけど……ウチもいいかな？二次関数のところちよつと躓いててさ……」

「え」

「悪い！俺も頼めるか八百万！古文マジで苦手なんだよな！」

「え？」

「俺も……一応お願いしてもいいかな」

「えっ!? まあ……！良いテストモ!!!」

友達に頼られて、とても嬉しそうな八百万。大勢からの『勉強教えてください！』の申し出を、全て二つ返事で引き受けるのだった。

8位、耳郎響香。

18位、瀬呂範太。

9位、尾白猿夫。

それぞれ苦手科目があったり、どれもそこそこできるけど所詮はそこそこ止まりだったり。期末テストは中間など比にならないくらい難しくなることを考えると、勉強を教えてもらうに越したことはない面々は喜びを隠さずに両手を上げて喜んだ。

「この人徳の差よ」

「人徳なんざ俺にもあるわてめエ！教え殺したろうかア!？」

「おつ、ありがてえ！頼む！」

そんな微笑ましいやり取りを見て、15位の切島が4位の爆豪を煽るように言った。当然の権利のように煽りに乗った爆豪は、切島の狙い通りにテスト勉強の面倒を見させられるのであった。

「……みんな、楽しそうだね」

「羨ましいなら、混ざりに行ったら？」

「……やめておくよ」

人に物を教えるという経験があまり無い風華は、彼らが楽しそうにやり取りをするのを後ろから眺めるだけに留めていた。ちなみに、風華の中間テスト成績は飯田に並ぶ2位である。

）

昼休み、食堂。

「筆記試験は、授業の範囲から問題が出るから何とかかなると思うんだけど……やっぱり、演習試験の内容が不透明なのは怖いね」

「そう突飛なことはないと思うがな……」

「筆記は何とかなるんやねえ……」

食卓をみんなで囲みながら、演習試験の内容について予想を立てていく。「筆記はまだどうとでもなる」と言う緑谷と飯田の余裕ぶりに、14位だった麗日は羨ましそうに呟いた。

「一学期で学んだことの総合的な内容」

「としか相澤先生、教えてくれないんだものね」

「一学期でやったことといえは……戦闘訓練とか救助訓練、あとは大体基礎トレだよ」

相澤が演習試験に関して生徒達に教えたことは、『一学期で学んだことの総合的内容』ということだけであった。飯田が言っていた通り、あまり突飛な内容は来ないと思っっているが……一学期でやってきたことは麗日が挙げた通りそう多くない。これだけでは内容を考察するのには不十分であった。

「まあ、内容が何にせよ……僕らがするべきことは試験に備えて、勉強も体力面も万全にしておくことくらいで……」

「あ、演習試験の内容ですか？」

「おや、立甲さん！何か知っているのか!？」

準備は万全に。そう言っつて緑谷が不毛な考察を締め括ろうとしたその時、B組の面々と食事をしにやってきていた葵が話に割り込んできた。職場体験以来の顔合わせということもあって、飯田が久し振りでだなど気さくに声をかける。

「演習試験は、入試の時のようなロボット相手の実戦になるそうですよ。一佳ちゃんが先輩から情報を聞いてきてくれたんですよ」

「いち……ああ、拳藤さん。B組の委員ちよ……」

「君らヒーロー殺しに遭遇したんだってね！」

「君は……えっと、物間君！」

葵から齎された演習試験の情報。その出所となった生徒の名を緑谷が言おうとしたその時、大きくて無神経な声がそれを遮った。

B組の負の面、物間寧人。何かにつけてA組を目の敵にして突っかかってくる、ハッキリ言っつて傍迷惑な男である。

「USJ襲撃とか体育祭とかに続いてほんと注目を浴びる要素ばかり増えていくよねA組つてただその注目つて決して期待値の高さとかじゃなくてトラブルを惹きつけるとか引き起こすとかそういう意味での注目だよ」

「!？」

「あー怖い！いつか君達が呼んだトラブルに巻き込まれて僕らにまで

被害が及んでしまうかもしれないなあーそういうことを君達といたら想像してしまうよくわばらくわばら」

「洒落にならん……飯田の件知らないのか？」

「ゴフツ！」

「あ、一佳ちゃん」

相変わらずA組に対して対抗心を向け、ここぞとばかりに捲し立てる物間。段々と言いがエスカレートして洒落にもなくなってきたところで、B組の姉御こと拳藤一佳による制裁が入った。

首筋に手刀を一発。目にも止まらぬ早業で物間の意識を一瞬で昏倒させ、倒れ込む彼から持つていた料理の乗ったプレートを奪い取った。そのままそれを机の上に置き、意識を失った物間をしっかりと椅子に座らせる。鮮やかな手捌きに、その一幕を見ていた周りから拍手が巻き起こった。

「ごめんなA組。こいつちよつと心がアレなんだよ」

「心が……」

「まあ、物間のことはいいや。それよりも演習試験の内容、葵から聞いた？」

「あ……そういえば、一佳ちゃんにみんなに話していいか許可を貰っていませんでした。勝手に話してしまいました、ごめんなさい」

「いいよ別に、どうせ伝えるつもりだったし」

勝手に情報を伝えて済まないと謝る葵に、それをあつけらかんと笑って許した拳藤。さっきの物間とのやり取りも踏まえて、やはり拳藤こそがB組の姉御的存在なのだなどみんなが思った。

「先輩に聞くのは、ちよつとズルいと思ったけど」

「いやいや、ズルくなんかないよ！内容の不透明な試験に関して情報をどうやって集めるのかっていうのもきつと試験の一環として練り込まれていたんだと思うなそうだよ先輩なら去年同じ試験を経験しているはずなんだから内容を知っているに決まってるじゃないか何でこんな初歩的なことを思いつかなかつたんだろうそこは本当に悔やまれるぞいやそういえば僕は勉強とかトレーニングとか個性研究所での特訓ばかりで上級生や他の科の生徒と交流する機会をほと

んど得ていなかったなそういう縦や横の繋がりもしっかり大事にしていかなくちや」

「……！大丈夫、なんだよな……？」

「うん。スイッチ入るといつもこうなの」

「……ッハ！良いのかい拳藤!?情報のアドバンテージは大事なんだぞ！勝手に情報を横流しした立甲はしつかりと咎めるべきじゃないのか!?こういう機会こそ、憎つくきA組を出し抜くまたとないチャンスだというのに……！」

「憎くはないっつーの」

意識を取り戻し、再び毒づいた物間の首を手刀で落とす。そのまま彼の身体を食事の乗ったテーブルに向けさせ、自分は「それじゃあ」と挨拶をして友人の待つテーブルへと消えていった。

「それじゃA組の皆さんも、試験頑張ってくださいね」

「あ、ああ……」

く

「何だよー！ロボ相手なら楽勝だぜ！」

「やったー！」

「お前達は、対人だと個性の調整が難しそうだから……」

B組から入ってきた情報を聞いて、安心したのか高らかに笑い喜びを表現する2人。上鳴の帯電と芦戸の酸は、どちらも対人戦で使うにはとても神経質にならざるを得ない個性。それが相手がロボットで気を使わなくて良いともなれば、テンションが上がってくるのもまあしょうがないことだと言えた。

「ブツパでラクチン！」

「イエーイ！」

「勉強もヤオモモに教えてもらってな。これは期末テストもバッチリ全員合格かあ？」

「これで林間合宿は確定したようなものだぜ！」

「ケツ……相手が人だろうがロボだろうがブツ飛ばすのは同じだろ。」

何がラクチンだよアホが」

「アホとは何だアホとは！」

「るっせえな！個性の調整なんざ、意識しなくても勝手にできるものだろうがよ！だからアホだっつってんだよ！なあ!?鳴神イ!？」

「いや、そんなことはないと思うけど」

高笑いする上鳴に、アホなことを言ってるんじゃないと突っかかる爆豪。突如向いた矛先を、風華はごく自然に受け流した。実際、勝手に制御できるような個性なら苦労はしていない。

「体育祭のような半端な結果はいらねえ……次の期末なら、個人成績で否が応にも優劣がつく！完膚なきまでの差をつけて！俺が頂点だって証明してやらあ！逃げんじゃねえぞ、鳴神……！」

「……荒れてるなあ」

「デクウ……轟イ……！てめエらもなあ……！」

「俺もか」

「っ……!!」

教室から出ると、爆豪は開いていたドアを勢いよく閉めて帰っていった。バアンと大きな音を立てて閉まったドアは、そのまま反動で再び元のように全開となる。いきなりキレ出した爆豪に対して、それを見ていたみんなは困惑の表情を浮かべていた。

「何であんな荒れてんだ……？」

「久々のガチバクゴォだったな……」

「焦燥……?いや、或いは……」

「職場体験が終わった後で……葵と2人で、勝己をボコボコにしてやったからかな?」

「それだろ！」

## 期末テスト：その1

勉強して、トレニングして……およそ一週間という短い準備期間を終えて、遂に期末テスト当日がやってきた。

先にあつた筆記試験は、八百万による集中講座の力もあつてほぼ全員が無事に終えられた。ここからは最大の鬼門……演習試験が始まる。

「それじゃ、これから演習試験を始めていくぞ」

校門前にコスチュームを着て集まつたA組。勢揃いした一年生担当の先生達を前に、これから明かされる演習試験の内容を心して聞く。もつとも、情報を事前に聞いているからか何処か余裕が見て取れるのだが。

「えー。みんな分かっているとは思うが、演習試験にも当然赤点はある。林間合宿に行きたかつたらみつともねえへまはするなよ」

「何か、先生多くないですか……？」

先生の人数を数えていた耳郎は、その多さに当然の疑問を抱く。相澤は直接その疑問に応えることはせず、次の話を始めた。

「諸君らなら、事前に情報を仕入れて演習何をするかは知っていると思うが……」

「入試の時みてえなロボ無双だろ！」

「花火ー！カレーー！」

「残念！諸事情あつて、今年からは試験の内容に変更が入つたのさー！」

「校長先生！」

上鳴が勝ち誇るように言い、芦戸がこれなら受かつたも同然と林間合宿での楽しみを挙げていく。筆記試験を乗り越えたからか、それとも演習試験が思っていたよりも簡単そうな内容だと知つたからか。2人の気の緩みは最高潮に達していた。

しかし、そんな甘い話など有るわけがない。相澤の首に巻かれた捕縛布からニュツと出てきた根津校長が、その緩みをバシツと切り捨てた。そのままの体勢で固まる2人。風華が試しに上鳴に触れてみると、まるで鋼にでも触れたかのようにガチガチに固まってしまつてい

た。

「内容の変更……ですか？」

「そう。試験内容については、職員会議でずっと話し合いをしていたのだけどね……」

く

試験の少し前

「敵活性化のおそれ……か」

「もちろん、それを未然に防ぐことができたなら最善ですが。学校としては万全を期したい」

「これからの社会、今まで以上に敵犯罪が活性化すると考えると……やはり、ロボット相手の訓練は実践的ではない」

例年ロボットを使っていた理由は、『試験という場でヒーローの卵に他人に危害を加えさせるのか』というクレームを回避するための方便として使うためである。相澤曰く「言いたいだけなんだから無視すればいい非合理的な話」だが、そうもいかないのが辛いところであった。

しかし、今ならば情勢を方便とすることでより実践的な内容で訓練や試験を行うことができる。

敵の被害の増えてきている現状、これからのヒーローにはより高度な戦闘力が必要とされてくるであろう。

ならば、学校側は対人戦闘、活動を見据えたより実践的な教えを重視していかなくてはならない。ロボットに頼らねばならない時期は、とうに過ぎていつているのだ。

「やはり、試験内容は変更するべきなのさ」

く

「……と、いう訳で！君達にはこれから、二人一組でここにいる教師一人と戦闘を行ってもらおう！」

「へえ……先生方と」

ペアとなる生徒同士と、戦う教師の組み合わせは既に決まっている。戦闘時の行動や性格の傾向、それぞれの親密度、成績や個性の相性など、諸々の要素を踏まえて教師陣による独断で決定された。

「まずは轟と八百万がチーム……相手は俺だ」

「……」

「私と……轟さん……？」

「そして」

「緑谷少年と爆豪少年のチーム！君たちの相手をするのは……私だ！」

「オールマイト!?まさか、あなたと……!?!」

「へっ……上等じゃねえか!」

「全力で……勝ちにこいよ、お2人さん!」

こうして、組み合わせと対戦相手が続々と発表されていき。10組20人と、10人の対戦相手となる教師が発表された。A組の人数は21人。それは即ち、誰かがまだ余っているということ……

「あの……わたしはいったい誰とペアを?」

「おっとー!そういうえば鳴神少女はまだペアとなる者がこの場にはいないのだったな!もう少し待っていてくれたまえよ!ちなみに、君が戦う相手は緑谷少年達と同じく私だ!」

「わたしも、オールマイトと……!」

「すみません!B組の方に出て遅くなりました!」

タツ、タツ、とアクロバティックな足取りでやって来たのは、B組の生徒であるはずの葵だった。颯爽と集まる皆の前に降り立ち、無駄に格好つけながら立ち上がる。そんな彼女を、風華は呆れた目で見ていた。

「ふうちゃん!今回のテストは僕とあなたでチームだそうですよ!一緒に頑張らしましょうね!」

「そうだね……相手はオールマイトだ。気を引き締めていこう」

「対戦相手が被っている鳴神・立甲チームは緑谷・爆豪チームの試験が終わってから始める。それ以外の10組は、各々のステージまで移動

してから一斉にスタートだ」

「試験の概要については、それぞれの対戦相手となる教師から説明されるのさ！移動は学内バスで行うからすぐに移動するのさ！」  
組み合わせは以下の通りである。

根津VS芦戸・上鳴

13号VS青山・麗日

プレゼント・マイクVS口田・耳郎

エクトプラズムVS蛙吹・常闇

ミッドナイトVS瀬呂・峰田

スナイプVS葉隠・障子

セメントスVS砂籐・切島

パワーローダーVS飯田・尾白

イレイザーヘッドVS轟・八百万

オールマイトVS緑谷・爆豪&鳴神・立甲

「さあ4人とも！移動するからバス乗りな！」

）

車内にて。

「……しりとりとか、する？」

「……」

静まり返る車内で、オールマイトは気不味さを感じながら職員会議のことを思い出していた。試験内容が対人さんに決まってるから、ではどのような組み合わせで試験を行うのかという話し合いの時だ。

『まず、轟と八百万ですが……実力的には一通り申し分ないですが、全体的に力押しで小細工の扱い方に疎い傾向があります。八百万は万能的な対応力がありますが、咄嗟の対応や応用力に欠ける……2人ともその強みをほとんど個性に依存しているため、俺が相手をします。個性を消して、近接戦闘で弱みを突きます』

『意義なし！』

『そして、芦戸・上鳴。良くも悪くも単純な性格で考えるより先に身体が動くことが多いです。校長の頭脳でその弱点を抉り出していただきたい』

『オツケーなのさー！』

相澤が選んだ組み合わせと対戦相手が続々と発表されていき、それに異議が唱えられることもなく順調に進んでいく。担任として生徒の性格や行動をよく見ている相澤の観察眼に、オールマイトは尊敬の念すら抱いた。

『緑谷と爆豪ですが……この2人は能力や成績ではなく、仲の悪さを考慮して組みました。体育祭で大喧嘩して以降、ある程度はマシになったみたいですけど油断はできません。緑谷のことがお気に入りなんですよね？相手は頼みましたよオールマイト』

『ああ！任せてくれたまえよ！』

『そして、鳴神とB組の立甲のペアですが……この2人は育った環境のおかげか、実力についてはなかなかのものです。しかし鳴神は<sup>レッドゾーン</sup>赫炎領域の暴走の危険を孕んでおり、立甲も油断や不注意で自ら不利を作り出してしまう弱点があります。この2人の相手もオールマイトをお願いします。現No.1の力を思い知らせてやってください』

『連戦か……活動時間保つかない……？とかほんとはよく見てるね君……尊敬するよ』

『どうも』

ヒーローとしては後輩だが、教師としては自分の大先輩。相澤の鮮やかな手腕を見て、オールマイトは感動に打ち震えていた。

「着いたぞー！ここが我々の戦うステージだ！」

「市街地……ですか」

「ここって、入試の時の……？」

バスから降りて見えた景色は、数多のビルが群立する街並み。緑谷と風華はこの景色を覚えていた。入試の時に、自分達に割り当てられた会場がここだったからだ。

「あのー！そういえば戦いつて……オールマイトを倒すとかそんな感じになるんですか……？そんなのどう足掻いても無理だと思っんですけど……？」

「消極的なせつかちさんめ！そういうところを今から説明するから、ちゃんと聞いておけよー！」

「制限時間は30分！君達の勝利条件は『捕縛用ハンドカフスを教師に掛ける』若しくは『どちらか1人がステージから脱出する』の二つ！」

「戦闘訓練と似てるんだな！」

「逃げてもいいんですか!？」

「その通り！」

「何しろ、戦闘訓練とは訳が違うからな！お前らの相手はチョー絶格上！」

「格……上……？イメージないんすけど……」

「ダメツ！ヘイガールウォッチャウユアマウスハアン!？」

「今回は、極めて実戦に近い状況での試験。僕らを敵そのものだと考えてください」

「会敵したと仮定し、そこで戦い勝てるならそれで良し。だが……」

「彼の実力差が大き過ぎる場合、逃げて応援を呼んだ方が賢明だ。轟……お前ならよく分かってるはずだがな」

「？」

「……！」

「即ち、この試験は……」

「逃げて勝つか……戦って勝つか……！」

「そう！君達の判断が試されるぞ！でも……こんなルール逃げの一択じゃね!?って思うよね」

「そうですね。個性の強さ出力はともかく、経験や使い方などには大きな差があります」

「という訳で作られました！超圧縮錘！」

サポート科によって作成されたハンデ用アイテム『超圧縮錘』。教師陣それぞれの体重の半分の重量を誇るこの錘をつけることで、動きを制限して戦闘を視野に入れさせるためのアイテムである。オールマイト曰く「あつ、思ったより重……」らしい。

ちなみにデザインはコンペで発目明が出した物が採用されている。体育祭でお世話になった緑谷と騙されていいように使われた飯田は、揃って微妙な表情を浮かべた。

「戦闘を視野に入れさせるためか。ナメてんな」

「ハハハ！どうかな!?さあまずは緑谷少年と爆豪少年からだ！私は中で準備を済ませてくるから、今の内に作戦でも練っておくんだな！鳴神少女と立甲少女は、バスの中でも待機しておいてくれ！車内のモニターからなら、2人の戦いの様子を見学することができるぞ！」

「分かりました」

「それじゃあお2人とも、ご武運を祈ります！」

「さて……今日は激務になりそうだねえ」

各会場からアクセスし易い立地に、出張看護所を建てたりカバリーガール。これから始まる激戦とそれに伴う自身の激務を予感し、静かに一息吐いてからお茶を一啜りした。これからは始まりと終わりの合図や合格者が出た時のアナウンスもしなければならぬ。喉をしつかりと潤してから、業務に臨むのだった。

「我々はステージの中央からスタートか」

「逃走を成功させるなら、指定されたゲートを通らなきゃいけないだったわね。となると、先生はゲート付近で待ち伏せかしら」

「腕が鳴るぜ！」

「ぜーったい林間合宿行くんだい！」

「やってやるぜえ、見てろよミッドナイトオ！」

「うるせえ」

「逃げるか、戦うか……間違えはしないぞ」

「……張り切ってるな、飯田」

「……大丈夫。ウチはやれる……！」

「僕のキラメキで華麗に合格さ☆」

「漢を見せるぞ！」

「パワーでゴリ押し！」

「八百万、話し合った通り頼むぞ」

「ええ……」

「マイク相手なら、そんな心配ないと思うけど」

「……！」

「職場体験でパワーアップした私を見せるよ！」

「……せめて、コスチュームは着けてくれ」

「かつちゃん。今だけは……いがみ合いはナシだ」

「……ああ。分かってらア！」

『全員所定の位置に着いたね!?それじゃ英雄英高校1年の期末試験を始めるよーレディ……ゴー!』

「始まったね」

「全員……合格できるといいですね」

一学期を締め括る大事な場。これまで過ごしてきた数ヶ月の集大成を見せるべく、クラス全員が一斉に動き始めた。

## 期末テスト：その2

【蛙吹・常闇ペア】

『レディ……ゴー!』

「っ!先生がたくさん……!?」

「待ち伏せしてくるかと思っていたが……奇襲攻撃を仕掛けてきたか!」

「言い忘れていたが……我々教師陣は、君達を全力で叩き潰す所存」

リカバリーガールによる開始の合図と同時に、蛙吹と常闇は8体のエクトプラズムに囲まれる。試験の構造上、待ち伏せしてゴール付近での不意打ちを狙ってくるものだとばかり思っていた2人は虚を突かれる形となった。

「黒影!蛙吹を喰えろ!済まないが投げるぞ!」

「ええー常闇ちゃん、捕まって!」

完全に囲まれる前に、常闇は黒影に指示を出して蛙吹を遠くまで投げさせる。投げ出された蛙吹は舌を伸ばして常闇の身体に巻きつけ、一緒に自分が飛ばされた方向まで引き寄せた。

「ホウ……ウマイナ」

「ヤハリ戦闘ハ避ケルカ」

鮮やかな手腕と連携で不意打ちの危機を脱した2人に、エクトプラズムは高評価を付ける。

コミュニケーション能力とは、ヒーローにとって地味だがとても重要になる能力である。例えば、災害や敵による被害から民間人を救い出す時には彼らを不安にさせないよう振る舞う必要がある。それに仕事中は、自身の雇ったサイドキック以外にも他所のプロヒーローや警察などとの連携もこなす必要がある。

特定の相手と抜群の連携を取れるよりも、誰とでもある程度以上の連携をこなせる方がヒーローとしては良しとされるのだ。

「蛙吹・常闇ペアはその辺問題なさそうだね。まあ一番コミュニケーションに問題がありそうなのは、この2人かねえ……」

リカバリーガールが、あるペアの映ったモニターに目を向ける。最

もコミュニケーション能力が心配される2人の映るモニターを、少しばかりの不安を抱えながら眺め始めた。

「さて……緑谷・爆豪ペアはどう転ぶか」

く

【緑谷・爆豪ペア】

「……分かっていると思うけど。今の僕達の実力ではオールマイトには絶対勝てない。躍起になって挑む分だけ、丸々時間と体力の無駄だ」  
「だからってよ、最初から逃げの一択つつー訳にもいかねえだろ。オールマイトの速さなら、俺らが全速力出しても普通に追いつけるぞ」

「つまり、牽制が重要になるってことだ。かっちゃんの爆破なら、閃光や爆音で目眩しも聴覚への妨害も一度にできる。そうして、少しでも怯ませてから僕が遠くに吹っ飛ばして逃げる隙を作るよ」

「てめエにできんのか？オールマイトはパワーだけじゃねえ、タフネスだって相当なモンだぞ。いくらてめエに身体強化の個性が有るとはいっても、そう簡単にできるようなことじゃねえだろ」

リカバリーガールの心配とは裏腹に、緑谷・爆豪ペアは意外と建設的なコミュニケーションを取ることができていた。ハンデがあるとはいえ、自分達とオールマイトの実力は隔絶している。それをどうやって覆し、尚且つ勝利のための布石を置くか。

緑谷が爆豪に対して抱いていた苦手意識は、体育祭での殴り合いを経てある程度解消されている。今なら臆さずに、爆豪と対等にコミュニケーションを取ることでできていた。お互いの個性の特性を考慮して作戦を立案することができている。

爆豪の方も、直前に上鳴に突つかかっていた時のような不安定さは鳴りを潜めていた。緑谷の考案した作戦に対して、自身の見解を含めて内容に訂正を入れたり、疑問をぶつけたりできている。

「オールマイトがいつ動き出すか分からないし、作戦を話し合うのはこの辺にしておこう」

「ああ。てめエ、しつかり作戦通り動けよ」

「分かってるさ。……かつちゃん、君がこの前上鳴君に突っかかっていたのは、鳴神さんの赫災領域レッドゾーンを間近で見ってしまったからなんでしょ？」

「……それがどうした」

「まだ何か喋ってるね」

「仲悪いそうですからね。何かしら、大事なことがあるんでしよう」

作戦の話だけでなく、緑谷は再び荒れ始めた最近の爆豪の態度についても言及した。職場体験を終えて以降の彼は、苛ついているのが目に見えて分かるくらい荒れていた。その原因はきつと職場体験……一緒に参加していた風華に関するものだと緑谷は予想していた。

実際、爆豪は以前にも真つ先に風華に対して苛立ちの矛先を向けていた。その時はついでのように自分と轟にも流れ弾が来ていたが……職場体験明けで赫災領域レッドゾーンを使っていた通り、彼女は今まで暴走させていた力の制御を可能としている。

爆豪は上昇志向の強い男だ。そして、同時に酷くプライドの高い男でもある。膨らみ切った彼のプライドは、緑谷との戦闘訓練の時に破裂させられ多少はマシになった。それが、あの向かう者全てに怖気を与えるような力を目の当たりにして再発してしまったのだろう。

戦闘訓練を終えた後、彼は風華や轟には勝てないと思ってしまうたということと言っていた。あの時点では自分の方が下だと認め、絶対に追い越して見せると努力した。だが、職場体験で大勢のプロ相手をものともせず無双した風華の姿を見て、その後レッドゾーンに力を探れるようになった姿を見て。再び勝てないのでは、と思ってしまうた。「……あん時は悪かったな。どうシミュレーションしても鳴神に勝てるビジョンが浮かばなくて、焦ってたんだ」

「かつちゃん……君が謝るなんて珍しいね」

「るっせえ！てめエが何を言いたいかなんて自分でもう分かっただよ。分かってるよ……俺は勝つ。全てに勝つ！オールマイトも、鳴神も、轟も、お前も！全部超えて一番になってやるんだよ！てめエも付き合え！まずはここで……オールマイトを超えていく！」

「……それでこそ、かつちゃんつて感じだ！」

もう、迷わない。爆豪は全てを乗り越えて一番になるという覚悟を決めた。

ベストジーニストが言っていた。No.1ヒーローとは、ただ強いだけの者に得られるような称号ではないと。自分に愛想はない。ファンの気持ちなんて、いちいち考えられるような人間じゃない。今の爆豪はまさしく、ベストジーニストの言うただ強いだけの者だ。

ならば、これから成ってみせよう。その強さだけで全てを引っ張り上げるようなNo.1に。強さを突き詰めて、誰もがこの背中に着いて行きたくなるようなヒーローに成ってみせよう。

ずっと、自分の在り方について考えていた。自分がなりたいヒーローとは、自分が憧れたオールマイトとはどんなヒーローなのか。職場体験からではなく、戦闘訓練の時からずっと考えていたこと。多くの葛藤を乗り越えて、爆豪は答えを出した。

ここからが、爆豪の新たなスタートなのだ。

「ツ………来たぞ。覚悟はできてるか？」

「もちろん……僕だって、オールマイトに挑む！」

「話は終わったみたいだな！随分と待たされたぞ！さあ、脅威わたしが来た。真心込めてかかってこい！」

多くのビルを薙ぎ倒しながら、オールマイトは悠然と2人の前に現れた。ただそこに立っているだけだというのに、底知れない威圧感がひしひしと伝わってくる。

これがNo.1ヒーロー。最強の男。今から自分達はこの男に挑むのだということ、強く自覚した。

「試験だなんだと考えていると痛い目を見るぞ！今の私は敵だ……街への被害などクソくらえよ！」

「くるぞデク！作戦通りやれよ！」

「ああ！足止めは任せたよ！」

「いくぜオールマイト『閃光弾スタングレネード』！」

「うおっ、眩しっ！」

「まずは目眩し！」

「相変わらず多芸だね」

先制必勝、まずは爆豪による目眩しでオールマイトの視界を奪う。強い閃光を避けるために目を瞑ったところで緑谷が背後に回り込み、フルカウルの出力を20%に上昇。最高威力の回し蹴り『セントルイススマツシユ』をぶちかました――

――と思いきや。オールマイトは伸び切った緑谷の足を掴んで蹴りを無理矢理止めさせ、振り下ろして地面に叩きつけた。アスファルトが緑谷の形に砕けて大きな亀裂を生み、彼の肺に溜まった空気を全て吐き出させる。

「げっほうう……!」

「デクウ!そのまま腕抑えとけ!」

「うっお、コレはマズいな……!?!」

話し合いの最中でも手榴弾型の籠手に貯蔵しておいた、自身の分泌する爆発性の汗。オールマイトにそれを向けながら安全ピンを抜き、一斉に起爆させる。緑谷を巻き込まないように胸より上を向けて放たれたその一撃は、見事にオールマイトを怯ませて緑谷を掴む手を離させた。

爆風の衝撃で短くない距離を吹っ飛んだオールマイトを横目に、爆豪は倒れた緑谷を担いで出口へと向かっていく。べちべちと気絶している緑谷の頬を叩いて起こし、自分の足で歩かせる。

「一瞬の間にいろいろありましたね」

「みんな速いから目まぐるしいね」

「クツソ、氣い失ってた……!かっちゃん、今の状況ってどうなってるの!?!」

「出口に向かっているとところだ!とは言え、オールマイトのことだしすぐに追っかけて来るだろうがな!何か良い作戦立てろやデク!勝つために頭回せ!」

「起き抜けに無茶な……!ああもう!かっちゃん、籠手片方貸して!」

「路地裏に逃げ込んでから出てこないね」

「隙を窺っているのでしょうか」

観戦している2人が、動きの少なくなったモニターを見てそんな感想を言う。実際今モニターに映っているのはオールマイイトだけで、緑谷と爆豪は少しの気配も感じられなかった。画面の中のオールマイイトも、完全に息を潜められたことで探しあぐねているようだし、思いもよらぬ隠密性を2人して発揮していた。

——まあ、姿を隠したつてことは戦闘を避けようとしてるつてことだし！出口の方まで向かえば何処かでカチ合うよな！

そんなことを考えながら、出口に向かって走っていくオールマイイト。スーパーカーよりも速いその脚力で一気に……行こうとしたその時、背後から聞き覚えのある叫び声を聞いた。

「どこ見てんだアオールマイイト！」

「おっと、背後だったか……」

叫び声に反応して、即座にオールマイイトはその声のした方向へ振り向いた。だが、この叫び声は爆豪なりの陽動である。

「デク！撃てエ！」

「何っ……!?!」

爆風で目眩しをしながら、横に回り込む。ただ動いただけではない。それは、緑谷に付けさせた籠手の範囲から逃れるためのものがあった。

「ごめんなさい……オールマイイト！」

「撃つたら走れ！すぐ追いついてくんぞ！」

「分かってる！『9%』……フルカウル！」

先程の会敵で分かったのは、緑谷による直接攻撃は防がれてしまうことと、爆豪の最大威力なら吹き飛ばすことができるということ。そしてゼロ距離からなら、オールマイイトでもこちらの攻撃に対処することは難しいということ。

だが、爆豪は片方の貯蔵を使い切り、もう片方を使おうにも次は確実に警戒されてしまうだろう。ならばどうすればいいか。その答え

が、「爆豪は陽動に徹して緑谷が撃つ」であった。

一度目よりもさらに接近しての一撃。保証された確かな破壊力で、オールマイトを遥か彼方まで吹き飛ばすことに成功した。余波を受けた爆豪は派手に転がされたが、すぐに起き上がって再び出口に向かって走り出す。

緑谷も、慣れない道具を使った反動で腕を痺れさせながら、爆豪に追従して走り出す。フルカウルの身体強化の恩恵で、出遅れてもすぐに前を行く爆豪に追いつくことができていた。

「うーん、やられたね……!」

爆煙を振り払いながら、オールマイトはそんな感想をポツリと溢す。あらゆる面で圧倒的に勝る自身を相手に、ダメージを与えつつも逃げるための時間を稼ぐ妙策。即席で考えたにしては機能した作戦に、心の中で赤丸を贈った。

その上、街に与える被害もオールマイトが既に破壊した場所に重ねることで軽減している。

かつて戦闘訓練の時に指摘したことがあった。ヒーローでも敵でも、守るべき牙城に徒に被害を与えるのは愚策であると。しっかりと教えたことを実践できていることに、心の中で更に花丸を加える。

2人とも、本来ならクレバーな男。これまでは合わさると途端に破綻してしまっていたが……今は機能することができている。そのことに少なからず安心を覚えていた。

——羨望、嫌悪、追走。

——畏怖、拒否、自尊心。

話を聞く限り、お互いに様々な想いが重なっているようであった。そのまま、時間だけが過ぎていき、互いにどう接したらいいのか分からなくなってしまうのだろうか。

体育祭を経てある程度マシになったとはいえ、そう簡単に解決する

ような問題ではない。しかし、こうして『協力』したところこそが……必ずや2人にとっての大きいなる一歩となるだろう。オールマイトはそんな確信を持って、力強く身体を伸ばした。

「さてと……先生、頑張っちゃうぞー！」

### 期末テスト：その3

【轟・八百万ペア】

「八百万。相澤先生は、近付けば絶対に抹消を使ってくるはずだ。だから、来たことが分かりやすいように何か小物を絶え間なく生産していてくれ」

「はい……」

「一応、狙いはゲートを通つての脱出だ。会敵した時どうやって戦えばいいかあまり適当な作戦が思いつかなかつたからな……ちやんと考えとかねえと」

「……」

今回の2人の立てた作戦は先に相澤を見つけて先手を取り、轟が引きつけている間に八百万がゲートまで逃げるといふもの。そのため個性の使用状況が分かり易くなるように、轟は何でもいいから創造を使い続けていてくれと指示を出していた。

轟の指示に従い、八百万は小物を作り出す。彼女のコスチュームは肌の大部分を露出しており、そこから大量のマトリョーシカが生み出されていく様は割と不気味な光景であった。

「いや、小物作ってくれとは言ったけどよ……それ何を作つてんだ？」  
「マトリョーシカですわ。私、これなら特に意識せずとも創り出すことができまするんですの」

「そうか……じゃあ、引き続き頼んだ」

「ええ……流石ですわね、轟さんは」

何が流石なんだ？と轟はそう聞く。その質問に対して、八百万はどこか悔しさを表情に滲ませながら答えた。

「相澤先生相手の対策もさることながら……状況に対して選択を即決できる判断力ですわ」

「……これくらい、普通だろ」

「普通、ですか……私達はお互い、雄英高校の推薦入学者です。スタートは同じはずでしたのに、ヒーローとしての実技において、私は轟さんとは違って何の結果も残せていませんわ……」

USJの時は、風華が敵を倒していなかったら人質に取られていた上鳴を助けられなかった。体育祭の時は騎馬戦では轟の指示通りにしか動けず、本戦では常闇に簡単にあしらわれて負けた。

いったい、どこで差がついてしまったのか。同じ推薦合格者同士、スタートラインは同じだったはずなのに。

「八百万……マトリョーシカは？」

「え？あつ……！」

「クソ……来るぞ！構えろ！」

「は、はいっ！すいませ……」

『来る』と思ったなら、すぐ行動しろ」

轟は八百万の葛藤には口を出さず、ただマトリョーシカの生産がさねなくなっている事実だけを指摘した。無意識でも作れるマトリョーシカが作られなくなっているということは、つまり。近くに相澤先生が潜んでいるということ——

——身構えたのは少し遅かった。電線に捕縛布を巻き付けて空中を移動する相澤を2人が視認したその瞬間に、相澤は轟の目の前に降り立ち彼を捕縛布で包み込んだ。

「チツ……」

「遅い」

抵抗しようと試みて腕を振った轟だが、あまりにも虚しい抵抗であった。降った腕は空を切り、轟は反動で体勢を崩す。このまま身動き取れなくなる前にと、彼は大声で八百万に呼びかける。

「八百万、行け！走れ！」

「……あつ！は、はい！」

「そういうアレか……まあ、好都合だ。もともと、攻撃的なお前から捕まえるつもりだった」

捕縛布が轟を堅く縛り上げ、電線にぶら下げて蓑虫のような状態にしてしまう。宙に浮いた轟を眺めながら、相澤はポケットから目薬を取り出して乾いた両眼に点眼する。轟はその間も何とか拘束を解けないかともがいていたが、堅く自身を縛る捕縛布を解く手段は彼にはなかった。

……個性を使えば、話は別であるが。

「これで、俺を捕まえた……つもりですか？こんな布くらい、俺の火力なら普通に燃やせますよ。氷結で砕いてもいい」

「どっちでもいいが、落ちる先には気をつけるよ」

「撒菱……忍者かよ」

「俺はお前の個性を知ってる。八百万の個性もそうだが……情報をしっかりと仕入れていて迎撃体勢はバツチリの敵だ」

目薬を浸透させるために、相澤はパチパチとまばたきをした。封じられていた個性は復活し拘束を抜けることは可能となったが、しかし抜けた場合は多大なダメージを受けてしまうという状況を作られてしまう。迂闊に動けなくなった轟を見上げながら、相澤はダメ出しをしていく。

「随分と負担の偏った作戦だな。女の子を慮るのは立派な心掛けだが……もう少し、内容について話し合っても良かったんじゃないか？」  
「話し……」

轟の返答は待たず、すぐに踵を返して八百万を追いかけに行く。空中を飛んでいけば、八百万はすぐに見つかった。まだ、あまり遠くへは行っていなかった。

——脱出ゲートまであとどのくらい？私はこれでいいの？残り時間は大丈夫？轟さんは無事？時間をかけてでも移動用アイテムを作るべき？私はこれでいいの？このまま逃げ切れるの？

——私、どうしようとしてるの？

考えが纏まらない。自分がどうすればいいのかが分からない。自分が何をしているのか、何をしようとしているのかさえも。

混乱する頭をどうにか落ち着かせようとしても、混乱してグルグルと思考が回り続ける。今の八百万にできていることといえば、ただ走って脱出ゲートを目指すことくらいであった。

「体育祭以降、自信の喪失が見てとれる」

「えっ……もう轟さんを!？」

八百万に追いついた相澤は、捕縛布で彼女の手を縛り上げて自身の元へと引き寄せる。

相澤先生を相手に、自分では方に一つの勝ち目もないと諦めかけた八百万？しかし個性が抹消されていないことに気付き、縛られた腕に車輪を創造することで拘束を抜け出すことに成功する。自由の身となった彼女はすぐに踵を返し、轟の元へ走った。

「判断を委ねに行っただか」

八百万は轟と自分を比べて、轟の方が自分よりも格上だとしてしまっている。良くも悪くも迷いが少なく判断の早い轟を見て、自分の考えに自信が持てなくなってしまう……というところかと、相澤は推論を締め括った。

高潔な精神を持つとはいえど、まだまだ15歳の子どものものだ。

どうにか自信を取り戻させてやりたいが、それは今の相澤がするべきことではない。失ったものは、自分で取り戻すべきだろう。息を切らしながら走り去っていく背中を見て、相澤は追跡を再開した。

「そういや……俺ばっかり喋ってて八百万の意見は聞いてなかったな……」

——もう少し、内容について話し合っても良かったんじゃないか？

轟はぶら下げられている中、相澤に言われた言葉を頭の中で反芻していた。自分だけが作戦を立てたり喋ったりして、八百万の意見を何も聞いていなかった。チームとしてコミュニケーションを取ることを怠っていた。

「轟さ……轟さん!？」

「八百万」

「すいません……私、やつぱり……!」

「相澤先生来てるぞ!」

振り返ると、恐ろしい勢いで迫ってくる相澤の姿が見えた。思考がパニックに陥り、轟を助けるかこの場から逃げるか相澤と戦うのか自分でも分からなくなってしまう。

「八百万！何か、作戦があるんだよな!？」

八百万の堂々巡りする思考を断ち切ったのは、轟の言葉だった。「お前にも聞くべきだった、すまねえ。ちゃんとこれでいいのかって確認を取るべきだった！何かいい作戦あるんだろ!?喋りたそうにしてたのに、俺がずっと喋ってたから言えなかつたんだろ!？」

「で、ですが……私の作戦なんて……轟さんの作戦も通用しなかったんですのよ……?」

「いいから早くしろ！こういうのでは、お前の方が適任だつて言ってるんだよ！お前、学級委員決める時二票入つてただろ？その内の一票を入れたのは俺だ！こういう時に力を出せる奴だと踏んだから、お前に投票したんだ!」

「轟……さん……」

口内にグツと力が入った。奥歯が擦り合わさつて不協和音を奏でている。

格上だと、そう自分で決めつけていた轟が。自分のことを認めてくれている。

——ああ、なんてみつともないんだろう。

——けど。

——けれど!」

「轟さん、目を閉じてくださいな!」

「!?何だこれ……!」

懐に忍ばせていた、大量のマトリョーシカを投げつける。それを相澤が手で振り払うと、壊れて中から手榴弾が現れた。

それはすぐに爆発し、辺りに強烈な閃光を撒き散らす。至近距離でモロに光を浴びた相澤が怯んで動きを止めた隙に、八百万は轟を縛り上げていた捕縛布を解いて彼を救出した。

「あります、轟さん。私ありますの!相澤先生に勝利するための、とつておきのオペレーションが!」

「とつておきの……オペレーション?」

「ええ!私、本当は最初から考えてましたの!」

「教えてくれ、俺はどうすればいい?」

「さて、USJの後遺症……発動時間の短縮とインターバルの増加。気付いて突いてくるようなら上出来だが……どうだ？」

「炎で迎撃する……いや無理か！」

「轟さん、まずは隠れますわよ！」

USJ襲撃で脳無にやられて以来、相澤の個性は少なからず弱体化してしまっていた。八百万はそのことに気付いており、轟に対してその事実を伝えたが……作戦のキモはそこではない。

「一旦、視界から外れなければなりません。今から作戦をお話ししますので、常に氷結の発動確認をお願い致します！」

「……分かった！」

「無闇矢鱈に走るだけじゃ……追いつくぞ」

八百万曰く、『相澤に見られている間、個性が使えないというのは悪い思い込み』である。相澤の個性は性質上、必ず何処かで隙が生じるようになっていいる。瞬きしてから、再び個性を使えるようになるまでのその一瞬。

それだけで、轟にはできることがある。

「……轟の最大出力か！狙ってきたな。それでいい……痛いところは突いていけ」

体育祭の時に瀬呂に対して撃ち放った、天を穿つ程の大氷壁を作り出すことができる。

冷気は相澤が機動力の要としている捕縛布を絡め取って砕き、凍った部分を切り離すために無駄な時間を浪費させる。氷壁は相澤の視界を遮って2人の姿を隠し、探すために回り込まなければならなくなるという時間稼ぎを行っていた。

「復活した瞬間に遮ったから、これで個性も問題なく使える。今の内に作戦の全容を……って、それは相澤先生の武器か……？」

「ええ。素材や詳しい製造過程を知らないので厳密に同じものを創ることはできません。その代わりにある素材を混ぜ込んだ、私仕様の捕縛布ですわ」

住宅街である以上、建物への被害はなるべく抑えなければならぬ。最初は超温差光線で氷壁を溶かして、水責めにも考えた

が……浸水被害が酷くなってしまっているので取り止めた。

その上で、相澤の強みを挙げていく。捕縛布を使った立体起動と個性を抹消する眼。そして拘束や相手の無力化に長けた立ち回り。

素早く捉え辛い上に、妨害が巧い。敵に回せばこれ程厄介な男はそうそういないだろう。

「……これなら、先生から逃げ切るよりも成功確率が高いはずですわ。勝負は一瞬……覚悟はよろしいですか？」

「……ああ。文句なしだ」

「つたく……」

脱出ゲートは相澤の背後にある。下手に探して動き回るよりも、2人の出方をじっくりと伺っている方が賢明だ。

——私ありますの！相澤先生に勝利するための、とっておきのオペレーションが！

そう言うからには、試してやろうではないか。

そうして待っていると、黒い布で全身を覆った二つの人影が姿を現した。この空間にいるのは3人、自分と轟、そして八百万のみ。即ちアレは轟と八百万ということ。布で全身を覆っているのは、抹消されるのを嫌ったからだろう。

確かに、見えなければ抹消はできないが……

「アメリカットの方がデカいだろ、それは」

全身を覆う黒い布。それはつまり、自分の視界すらそれで塞がれているということに他ならない。そんな状態では前の確認がせいぜいで、後ろにいる相澤まで注意を向けることは到底できない。

相澤は捕縛布で人影の首部分を縛り、その頭部同士をぶつけさせた。人影の片方から「痛っ！」という声が聞こえ、もう片方の布が外れてその中身が露わになる。

声は布が外れていない方から聞こえてきた。ならば姿が見えるよ

うになったのは八百万のはずで……

「マネキンかよ」

「やることは……」つー！

互いの頭をぶつけさせたと思っていたが、八百万の方は本人ではなく上半身だけのマネキン。本体は相澤の方を向きながら屈んで、不意打ちの用意を始めていた。

何かを発射するためのカタパルト。発射するための引き金を引くのに失敗したことで何が出てくるのかは分からなかったが、まあ何だろうと危険なことに変わりはない。今の内に距離を取ろうと、相澤はバックステップで八百万から離れていく。

「逃がしは……しませんわー！」

「コレは……攪乱かな？」

「轟さん！お願いしますー！」

「ああ……任せろー！」

カタパルトから飛び出してきたのは、相澤が装備しているのと同じ長い捕縛布であつた。それは円を描くように相澤の周りを囲み、包囲網を作る。そしてそこに、黒布を破って放たれる轟の炎。

自分ではなく地面を狙って放たれた炎。いったいどういう狙いがあるのかと考えを巡らせようとしたその時。ギチツ……と、相澤の周りを囲む捕縛布が軋むような音を立てた。

「先生を相手に、個性での攻撃を決め手とするのは不安が残ります。ですから用意しました……ニチノール合金を……存知ですか？加熱することによって瞬時に元の形状に変形する……」

「……！」

「形状記憶合金ですわー！」

轟の放った炎によって、捕縛布は急速に縮んでいき相澤をきつく縛り上げた。

ニチノール合金。相澤の物と全く同じアイテムは創れないため、自分仕様のものとして加えたオリジナルの素材。加熱することで瞬時に元の形状に復元される、形状記憶合金である。元の形状を、ちょうど相澤を縛り上げられるように調整していたのだ。

「……大したもんじやないか」

動けなくなつた相澤に、八百万が背後に回り込んでハンドカフスを掛ける。試験の合格条件を満たしたことで、リカバリーガールから『轟・八百万ペアが合格だよ!』とアナウンスがなされた。

「何だかんだ、甘い男だこと」

## 期末テスト…その4

「こうもすんなりといくモンなのか……」

「いえ、しかし……」

言おうかどうか逡巡したが……八百万は正直に自分がミスを犯していたことを告白した。カタパルトを発射する時、一度目で引き金を空振りしてしまっていたのだと。

相澤はそのミスに気付いた上で距離を取った。あんな大きな隙、カタパルト発射を防ぐことも容易であったはずなのに。

「先生は……故意に私の策に乗ったように見受けられました」

「隣の轟を警戒してただけさ。お前のことは見えていたが、轟は布を被ったままだったからな。氷結がどこかのタイミングでくると考えていた」

「……」

「俺は、あそこで退くのが最善手だと思ったから退いた。でもそれは、お前のプラン通りだった訳だ」

轟は八百万に言われていた。『このプランは時間さえあれば、確実に勝利まで導いてくれる』と。そして実際に、その通りになった。

「ありがとな、八百万。お前のおかげで……？」

「……………!!」

「どうした？ 気持ち悪いのか、吐き気には足の甲にあるツボがよく効くらしいぞ」

「な、何でもありませんわ！」

自分の作戦が上手くいった。自分がチームを勝利に導くことができた。

自信を失っていた八百万にとっては、このことがとても大きな成功体験となるだろう。きつと、これからの彼女は自分を見失うこともなく確かな成長を遂げるだろう。的外れな助言をする轟とそれに言い返す八百万の掛け合いを見ながら、相澤はそんなことを考えた。

「しっかし、超温差光線。マジで使いどころがねえな……エンデヴァーのトコで制御する特訓したんだけどよ、見せられなかったな」

「まあ、流石に威力が高過ぎますからね。鳴神さんの『吹き荒ぶ大風』すら貫ける破壊力を対人で使うなんて危な過ぎますわ。被災地で瓦礫を除去するなど使い道はありますが……対人で使うならもう少し何か、破壊力を抑えた適当な新技を開発する必要があると思います」  
「だな……八百万。何か、そういうののヒントとか思い浮かぶか？」  
「えっ、私ですか？」

轟は八百万にヒントを求めた。職場体験の時も一緒に事務所にいた葵に「必殺技にするにしても、もう少し使いやすい方が良いんじゃないですか？」と言われていた。

轟も自分で色々と考えてみてはいたが、1人ではあまりいい考えが浮かばなかったのだ。だが八百万ならば、相澤を拘束する手段を考えついたように何かいい案があるかもしれない。轟は既に、八百万の出すアイデアを信頼していたのだ。

「でしたら、まず氷結の方は——」

その信頼に応えるべく、八百万は自分が考えついたアイデアを轟に伝えていく。轟も真剣にそれを受け止めようと耳を傾けていたが、相澤の言葉によつて話し合いは中断された。

「……話し合いの前に、これ解いてくれ」

「あつ……も、申し訳ありません！」

「そういや、相澤先生捕まえたままだったな……」

【緑谷・爆豪ペア】

「素晴らしいぞ少年達！折り合いの悪い相方でも協力して強大な敵に挑むその姿勢……ただ！2人とも！」

「ゲホツ……！」

「がつ……ハ、ア……！」

「それは今試験の前提だからね、って話だぞ！」

試験終了まで、あと20分程残っている。その間どうやって、この暴れ馬2人を拘束しておこうと頭を悩ませるオールマイト。

いったい、何をされたのか。地に叩き伏せられた2人には、それさえも分からなかった。

それは、数十秒前のこと。

「あそこだ……脱出ゲート!」

「無駄に装飾が凝ってんな。まあいい、どつちかでもアレをくぐるこ  
とができれば試験クリアだ!」

爆風でオールマイトを退けた2人は、一目散に脱出ゲートを目指して走っていた。オールマイトが建物や舗装を破壊しながら真っ直ぐ進んできていたことで、ほとんど一本道であった。

……オールマイトの放った爆風は、一回だけだったはずだ。つまり、ほぼゲート前から俺らのいた中央まで爆風を届かせたってこと……!

「ふざけた威力だぜ、マジでよ……!」

「オールマイト、追ってこないね。まさかさっきの一撃で気絶しちゃったんじゃない……」

自身のお株を奪うオールマイトに、嫉妬混じりの愚痴を漏らす爆豪。緑谷はそれを聞きながら、オールマイトが追ってこない現状に疑問を抱きそれを口にしていた。

爆風でオールマイトを吹き飛ばしたあと、彼がどうなったかは2人とも確認していない。そんな手間と時間を惜しんでも、脱出ゲートに向かうことを優先したからだ。

「てめエ、散々オールマイトを倒せる訳がねエって言うておいて何を言ってるんだ。あんなんが一発当たったぐらいで、どうにかなるようなタマじゃねえだろうが」

「それもそうか……だとしたら何で」

「どうでもいいわ、そんな理由。次オールマイトが追いついてきたら、今度はまだチャージが終わってねえから対応ができなくなんぞ!無駄口叩いてねえでさっきと脱出しねえと」

「うんうん。それでそれで!」

「!?!」

「デッ……デトロイトッ、「やらせんよ!」

走りながら話し合う2人。その中にオールマイトは割り込んできた。面食らった爆豪が籠手を向けて迎撃しようとするが、小パンチ一発で籠手を破壊された挙句膝蹴りを腹に受けてしまう。

爆豪がやられたのを見て、足を止めてしまった緑谷も同じように籠手を破壊されてしまう。そのまま反撃のために振りかぶっていた左腕を掴んで、彼の身体を宙に浮かせた。何とか抜け出せないかともがいてみる緑谷であったが、オールマイトはビックともしない。倒れた爆豪の方も踏みつけられて抑えられており、完全に2人ともやられてしまった。

『報告だよ。最初に条件達成して、轟・八百万ペアが合格だよ!』

「ほう……驚いた、相澤君がやられたとは!こっちもウカウカしてられないな……埋めるか!」

「クソがあ……!」

「速……過ぎる……!」

圧倒的なスピード、パワー、タフネス。

シンプル故によく分かる、彼我の格の違い。敵として対峙したからこそ改めてよく分かる。オールマイトは……この男は世界一のヒーロー、世界一高い壁なのだ。

「まったく、なんて顔だよ少年……最大火力で私を引き離しつつ、脱出ゲートをくぐる。これが君達の答えだったようだが、その最大火力はもうない。これで終わりだよ!」

「うるッ、せえ……!」

「なっ……!?!」

籠手の最大火力と遜色ない威力の爆破を撃ち、自身を踏みつけていたオールマイトの足を引き離した爆豪。ズキズキと痛む掌を握り締めながら、「ブツ飛ばす」と緑谷を掴んで脱出ゲートまで思いつきり投げつけた。

「スツキリしねえが……今の實力差じゃまだこんな勝ち方しかできねえ!」

「痛った……!マジかよかつちゃん!」

いきなりの暴挙に驚いた緑谷だったが、すぐに落ち着きを取り戻し

た。さっきの爆破によってオールマイトは身体を浮かされた。着地してから立て直すまで一秒か二秒……それだけあれば十分、ゴールまで届くだけの飛距離が稼げる。合格できる……!」

「ニューハンプシャー……スマッシュ!」

「おぼつぶ……!?!」

「チイツ……!」

「甘いぞヒーロー! ゴールには行かせんよ!」

オールマイトの必殺技、風圧で自身を砲弾として撃ち放つ超速のタックル『ニューハンプシャースマッシュ』。それを背中でモロに受けてしまい、緑谷の背でメキメキと嫌な音が鳴り響いた。

それを見た爆豪は、目論みが失敗に終わったことを舌打ちして悔しがりながらも飛び込んでいく。タックルを受けて飛んでいった緑谷に追撃を仕掛けようとするオールマイトを弱い爆撃で止めてから、再びの最大火力を撃ち放った。

「バカだったぜ……そもそも籠手は最大火力をノーリスクで撃つための物だ。ノーリスクでアンタに勝てるはずなんて、無かったわな!」  
「ぐおおっ……!」

「行け、デク! さっさと走れ!」

三度目となる最大火力。最早腕もイカれて、まともに動かすことから辛くなっているはずなのに。爆豪は限界を超えて尚、オールマイトに食らいついていた。

「早よしろ! 近接格闘なら、まだ俺の方に分があるんだよ! 役に立てやクソカス!」

発破をかけられた緑谷は、オールマイトを足止めする爆豪から目を逸らして脱出ゲートのある方に目を向ける。20%フルカウルならば一つ跳びで迫り着ける距離、しかしオールマイトがそれを見逃されくれることなんてないはずで……

……走れ! よりゴールに近い僕を、オールマイトは無視できない! かつちゃんなら、そこを突いてくれるはず……!」

ゴツ

「寝てな、爆豪少年。そういう身を滅ぼすようなやり方は……教師として看過できない」

実際その通りに隙を突こうとした爆豪は、逆に頭を掴まれて地面に叩きつけられた。その衝撃でアスファルトは砕け、爆豪の首辺りからピシッ……と嫌な予感を感じさせる音が鳴る。

「痛っ!？」

「折れて……」

それでもまだ、心まで折れてはいなかった。

「折れて……折れて!自分を捻じ曲げてでも選んだ勝ち方で……!それでもまだ敵わないなんて……嫌だ!」

「かっちゃん……!」

「おっと……行かせないぞ緑谷少年……!?!」

緑谷は踵を返した。全身にフルカウルを20%で発動させ、思いつきりオールマイトを殴りつけて爆豪から引き離す。そのまま吹っ飛ぶ方向に向けて前進し、追撃の一発——踵落としを上からではなく下から繰り出す『マンチエスタースマッシュ』を顎にぶつける。

オールマイトは両手でそれをガードしたが、攻撃の反動を受けて空中高くへと飛ばされた。これはマズいと着地しようとするその瞬間を見逃さず、緑谷は更に構える。

自身唯一の遠距離攻撃、『デラウエアスマッシュユエアフォース』。職場体験で習得して以降、サポート科に作成してもらったアイテムで押し出す風圧に指向性を持たせることに成功していた。これにより射程、威力共にそれなりの安定感を得たが……既にガードを固めているオールマイトを貫ける程の威力なんて、到底出せるはずもない。

「デラウエアスマッシュ……エアフォース!」

「構わず撃つたな……!」

そんなことはどうでもいいのだ。大事なのは、エアフォースを防ごうとするその腕に——

「コレは……！」

「はあっ……はあっ……！オールマイト……僕達の勝ちです……！」  
「……やられたね！」

——ハンドカフスを掛けてやることなのだから。

オールマイトは攻撃をガードする時、両手を合わせて防御態勢を取る。両手を合わせているということはつまり、ハンドカフスを掛けるには絶好のチャンスという訳で。身動きの取り辛い空中に浮かせて顔狙いでエアフォースを放つことで、緑谷は顔面を守らせて視界を塞いだ。エアフォースに乗せたハンドカフスの存在を、悟らせないために。

『緑谷・爆豪ペア、合格だよ！』

嫌だった。

ただ、嫌だった。

勝利のみを好む男が、自分のプライドだけは絶対に曲げようとしなかった男が、自分を曲げようとする姿なんて見たくなかった。だから緑谷は、脱出ではなくオールマイトに挑むことを選んだ。爆豪のプライドを曲げさせたくなかったからだ。

自分を曲げてしまえば、それはもう爆豪勝己ではなくなってしまうから。

「思いつきり殴ったね……まったく、あと一歩だけでも駆けていれば、それでクリアできていたかもしれないのに！」

「それは……そうですけど……」

「ま、君はそういう人間だったな！君は誰だろうと助けてしまう！そしてその時……そこに相手との関係がどうか、実力差がどうか、そんな壁は一つもないんだ！君はそういう人間だった！」

「はは……は、は……」

脱出ゲートに書かれていた「頑張れ！」の文字が「よくぞ！」に変わる。それと同時に合格して気が抜けたのか、負ったダメージに耐えるのが限界を迎えたのか、緑谷も倒れて気を失った。

オールマイトは、倒れた2人を両脇に抱えてリカバリーガールの元へと運んでいく。緊張の糸が切れて眠るように気絶する2人を抱

えて歩くオールマイトの姿をモニターで眺めながら、風華と葵は激戦を制した緑谷と爆豪に惜しめない拍手を送る。

「お疲れ様でした！」

「2人とも、凄かったよ。次はわたし達の番だね」

## 期末テスト：その5

「あ……治療ありがとうございます……リカバリーガール……」  
「まったく、アンタは本当に加減を知らないね！もう少し強くやったら、2人とも怪我が取り返しのつかないことになってたよ！特に緑谷の腰！神経が傷付いてたらアタシでも治せないんだからね！」

試験を終えて、緑谷と爆豪はオールマイトに連れられてリカバリーガールの治療を受けていた。途中で意識を取り戻した緑谷は、オールマイトがリカバリーガールにきつく説教をされているところを見てしまっていた。憧れの人が叱られて縮こまっている姿を見るのは二度目だが、やはり何とも言えない気持ちになる。

「爆豪の方は、まだしばらくは目覚めないだろうから校舎内のベッドに寝かせておきな。緑谷、アンタももう少し治療したら移動させるよ。先に合格した轟達も、そっちで休んでるからね」

「あ……リカバリーガール。僕、ここで見てちゃダメですか？」  
「フラフラなってるんだろ、しっかり休まんと……」

「いやーこんなじっくりプロとみんなが戦っているところを見れることなんて、そうそうない機会だと思うので……！」

いや、割と機会はあるだろう。そうツツコんだりリカバリーガールだったが、無茶なことはしないという条件で承諾した。許可を貰えたことで緑谷はすぐにベッドから起き上がり、身体をモニターの正面に向ける。動きが速過ぎたのか、背中に激痛が迸って「イツヒ！」と叫び声を上げていた。

まったく……強くなるよ、君は。

そんなやり取りを微笑ましいもののように眺めながら、オールマイトは心の中でそんなことを思った。

見るのはそこそこに、気絶している爆豪を抱え上げて校舎内のベッドまで運んでいく。いつも騒がしい男が大人しくなっているのは、それをさせたのが自分とはいえ不思議な気分であった。

そして爆豪少年……君もだ。

入試で多くの仮想敵に当たった時。USJで敵連合の襲撃を受け

た時。体育祭で緑谷や風華のような強敵と対峙した時。爆豪は、困難や高い壁を前にした時こそよく笑う。

自分の前に立ち塞がる壁など、成長のための糧でしかないと言わんばかりに。

「運び終わったら、私も休まないとな！鳴神少女と立甲少女を同時に相手取るのはキツツイぞ……！」

あと20分もすれば、オールマイトには次なる戦いが待っている。それに備えて、今は休もう。爆豪を運ぶ道すがら、そんなことを考えるのオールマイトなのであった。

「あの……今回テストとは言いつつも、各々の課題を意図的にぶつけてるんですよね？」

「そうさね」

「何となく分かる組もあるんですけど……僕らみたいに仲が良くないとか。中には見ただけじゃあんまり分からない組もあって……」

蛙吹・常闇ペアの映るモニターを見て、緑谷は疑問を口にした。コミュニケーションにも問題はなく個性の使い方も上手い蛙吹と、黒影との連携でほぼ無敵の状態になれる常闇。緑谷では、この2人にどんな課題があるのかというのがいまいち想像できなかった。

エクトプラズムの個性は『分身』。口からエクトプラズムを飛ばすことで、任意の位置に自分の分身を送り込める。一度に出せる人数はだいたい三十二くらいであり、喉の調子が良ければ更にそれ以上の数を出すことも可能となる。

「先生の個性は確かに強いけど……あの2人にとっての天敵だとは思えなくて……」

「いや、天敵さね。特に常闇にはね」

「すまん、黒影！」

「キリがないわね」

黒影の真価は、中距離戦で発揮される。それは裏を返せば近距離戦では脆いということ。

間合いに入らせない射程距離と、素早い攻撃速度。黒影の耐久力や耐性なども相まって強い相手にはとことん強いが、間合いに入れる相手に対してはほとんど無力なのだ。

「なるほど……それで、数と奇襲性のエクトプラズム先生なんですね。常闇君の個性って、ほぼ無敵のようなものだと思います」

「その一方で、蛙吹梅雨……彼女の方は課題らしい課題のない優等生だね。故に、今アンタが言ったように『強力な仲間の僅かな弱点』をもサポートできるか否かかってところが見られている」

「常闇ちゃん……見えてきたわ。恐らくご本人」

「ゴールもあるな……ここが正念場か」

「アノ数ヲヨクゾ凌イダナ……ダガ、コレナラドウカナ？」

脱出ゲート前までやって来た2人を見て、エクトプラズムはその実力を讃えながらも最後の関門となる必殺技を発動した。

『強制収容ジャイアントバイト』

複数に分けられていた分身を一つに纏め、それによって超巨大な一つの分身を創り出す。その大きさと言えば、生成されたその瞬間にもう2人の元へ辿り着くほどであった。

「避けっ……！」

「……」

避けようとしたが、それは不可能である。巨大な分身の口に一瞬にして飲み込まれ、肉の中に拘束されてしまった。

「数ハ出セナクナルガ……視認デキルナラバコノ一体ダケデ事足りル。分身ノ解除ハ、我ノ意思デノミ行ワレル……サア、ドウスル？」

「何たる……万能個性！」

「フミカゲ、動ケネエ！」

「ゲコ……」

拘束された常闇は、せめて黒影だけでも脱出ゲートをくぐれるようにと彼を向かわせる。しかし当然エクトプラズムはそれを阻み、突破しようとする黒影と阻むエクトプラズムで千日手となった。

「やはり、プロを相手に真正面は無理か……！」

「でも、届いてる。これならチャンスはあるわ。黒影ちゃんに先生にバレないようにこれ持たせてちょうだい、常闇ちゃん」

「コレ……どれだ？」

「あんまり……見ないでね。先生にバレちゃうしそれに……とつても醜いから」

「ギャン！」

「アト10分弱……コノママ続ケルカ？我が欲スルノハ、逆境ヲ打ち崩スヒーローノ瞬キ」

エクトプラズムの蹴りによって、常闇の元まで飛ばされた黒影。蛙吹から渡されたそれを受け取って再び突撃。エクトプラズムにぶつ

けた。  
「身動きを封じられたら、勝機がコレだけになっちゃうから……咄嗟に飲み込んだのよ。私の胃袋は物の出し入れが可能だから」

「ナルホド……！」

黒影がぶつけたのはハンドカフス。ジャイアントバイトに捕まる前に咄嗟に蛙吹が胃袋の中に隠していたことで、拘束された後でも問題なく黒影に渡すことができていたのだ。

これにより、蛙吹・常闇ペアも条件達成。3組目の試験合格チームが誕生した。

「カフスは掛けることさえできればクリアだ！常闇君と梅雨ちゃん、両方の個性を巧く活かした！」

『蛙吹・常闇ペア、条件達成だよ！』

く

【芦戸・上鳴ペア】

「上鳴く放電で何とかできない!？」

「無茶言うな!どこに潜んでるかも分からないのに無駄撃ちなんてできねーよ!そんなに足手纏いが欲しいのか!？」

「いやい……どわあ!？」

「何処を壊せば、どう連鎖していくか！そんな計算は紅茶を美味しく淹れるよりも簡単なことさー！そして君達は気付かない……脱出ゲートへの道は着々と封鎖されていつていることにね！」

——頭脳派敵は高みの見物さー！

根津は高笑いしながら紅茶を飲むが、まったく喉を通っていない。かつていろいろと人間に弄ばれた過去がある根津は、こういう時になるとうっかり素が出てしまうのだ。

根津、個性『ハイスペック』。人間以上の頭脳という個性が発現した動物である。世界にも類を見ない唯一無二の存在だ。

「これは……あの2人にはキッツいぞ……！」

「根津……私怨が出てるよ……！」

【切島・砂籐ペア】

「壊しても壊してもキリがねえ……！」

「うう……眠い……ダルい……！」

「おおい砂籐！しっかりしろお！」

砂籐力道、個性『シュガードープ』。糖分10gにつき、3分間パワーが5倍になる。しかし個性の使用後は、糖分不足で次第に脳機能がダウンしていつてしまう。セメントスのどれだけ壊してもキリがないセメントの壁の波状攻撃に、個性の限界を迎え始めていた。

切島の方も、かなり限界に近い。何処から来るか分からないセメントの硬さを突破するために常に気張らなければならず、自慢の硬度には既に綻びが出始めていた。

「……君達は、消耗戦に極端に弱い。速攻で僕を抑えるべきだったね。戦闘つてのは、どれだけ自分の得意を押しつけられるかだよ」

最早、打つ手なしである。

【飯田・尾白ペア】

「くけけ……足場が悪いなら、そもそも地面に立たなきやいか。い

い発想だったぜ」

「お褒めに預かり光栄です！」

「飯田……せめて土中から出な？」

パワーローダー、個性『鉄爪』。自慢の硬い爪で土中を掘り進んで足をガタガタにし、落とし穴をいくつも作って2人を埋めるつもりであったが、飯田が『レシプロエクステンド』によるエンジンの超稼働を空中に浮かびながら使ったことで、接地することのない高速の平行移動——擬似的な飛行を可能として目論見は崩されてしまった。

いや、それだけでは2人が脱出ゲートまで届くことはなかった。飯田1人分の重量ならばともかくとして、今回は尾白を背負っていたことで2人分の重量がエンジンにかかっていたからだ。

脱出ゲートまでは僅かに届かず、飯田は落とし穴にすっぽりとハマってしまった。しかし背負われて尾白が、付近で唯一の安定した足場である飯田の背中を使って尻尾による跳躍を行ったことで、パワーローダーに捕まる前に脱出ゲートをくぐる事ができた。両者の個性をしっかりと活かしたことで、見事に条件を達成することができたのだった。

「尾白君……引っ張り上げてくれないか。上がろうとしたら土が崩れて上がれんのだ」

「締まんないなあ……」

【瀬呂・峰田ペア】

「ちくしよおおおおお！羨ましすぎるぞ瀬呂てめえこの野郎おおおお!!」

「グレープジュース……そっちじゃないわ。そっちはゲートとは反対方向よ？」

ミッドナイト、個性『眠り香』。身体から放たれる香りで、強制的に相手を眠らせる。男性の方が女性よりも効きやすい。

瀬呂は真っ先にこの香りを食らい、ミッドナイトの膝の上でダウンしてしまっていた。今は試験など忘れてグースカと寝息を立ててい

る。峰田はその様子を、血涙を流しながら見ていた。当然、眠り香の範囲外に逃げることは忘れていないが。そのせいで脱出ゲートとは反対方向に行ってもいた。

『青山・麗日ペアが条件達成だよ！』

「んだよ……ギリギリでどこクリアしていきやがって……！何でオイラの試験はこんなクソゲーなんだよ！一嗅ぎすりやその時点で瀬呂みてえにゲームオーバーだぞ?!」

この少し前に、障子・葉隠ペアが条件を達成したという報告もされている。そのことが少なからず峰田を焦らせていたが……実のところ、彼は合格するための策を実行している最中であった。

モテたいと、思っていた。この小さくてあまり格好良くはない体格のせいで、この公衆の面前に出していいようにはできていない性根のせいで、峰田はモテるところか異性とコミュニケーションを取った経験すら殆どなかった。

ヒーローになれば、ヒーローはカッコいいものだからモテるだろうと漠然と思っていた。

——君のヒーローとしての心は……性欲なんかには負けたりしないって信じてるよ。

——戦って……勝つこと！

そう、思っていたのだ。

「ホギャアツ!?!」

「時間いっぱいまで、ゲート前で粘るってのも考えてたけど……やっぱりそんなのあんまりよね」

「もう追いついてきたのかよ……!」

「こんなに、ピーピー喚きながら逃げられちゃうとあたし……嗜虐心が疼いちやって仕方ないの」

逃げる足を背後から飛んできた鞭が止める。起き上がりながら峰田が背後を振り向くと、そこには笑みを浮かべたミッドナイトの姿があった。嗜虐的にペロリと舌を舐めぐる姿は、まるで野生の捕食者の

それを彷彿とさせるよう。峰田は、自分がコレから捕食される獲物のように感じられていた。

「やっべ……!」

「そう……鼻でも口でも、一度でも吸い込んでしまえば昏倒する!その状態で、あなたにいったい何ができるっていうのかしら?」

「~~~~」

「そうよね、逃げるしかないわよね!」

ヒーローは、カツコいいからモテるのだとずっと思っていた。でも、それは違うと知った。

USJで本物の敵の悪意に晒された時、緑谷は自分にできることを探してそれをやり遂げた。蛙吹は常に冷静でいるように努め、暴走する風華をここぞというタイミングで抑えられるよう仕向けた。

その姿を見ていたから、その場に自分も立ち会っていたからこそ分かった。ヒーローだからカツコいいのではなく、カツコいいからヒーローと呼ばれるのだと。

自分も、そうなれると言ってもらった。今までまともに女子と話した経験なんてなかったのに、その女子は峰田に、「君はヒーローになれる」と言ってくれた。

あの時、誓ったのだ。彼女の言葉に恥じないようなヒーローになつてみせると。

「あと2分ちよつと……その間ずっと、息を止めてるつもりかしら!」

「違えんだよなあ……! オイラが、アンタみたいなドスケベヒーローのファンじゃない訳がねえだろ! ここまで逃げてきたのも! 弱音ぶちまけてたのも! アンタの嗜虐心を煽ってここまで引っ張ってきたのも!」

「へえ……!」

「全部! カツケえ男になるためなんだよなあ!」

岩陰に隠れ、一旦鞭の射程から外れる。ミッドナイトの煽りを流しながら、峰田は着々と勝つための用意をした。そして覚悟を決めて――自身の決意を込めて叫んだ。

「手の内ってこと!?! いいよ、させたげない!」

「アンタの香りも……これなら効かねえ！」

「これは……瀬呂君のテープ!? でも、そんな窒息状態でちゃんと戦えるのかしら!？」

「戦う必要は……ねえ！」

飛び出した峰田は、事前に瀬呂の個性で出してもらっていたテープを口に巻きつけて眠り香を嗅ぐのを防いでいた。しかし、これでは呼吸をすることができずにいずれ窒息してしまうだろう。そこを指摘しながらミッドナイトは鞭を振るったが、そうさせることこそが峰田の狙いであった。

もぎもぎを大量にちぎって投げつけ、ミッドナイトの足元や手元、振われた鞭にくっつける。鞭や靴に付いたもぎもぎはミッドナイトをしつかりと地面にくっつけ、離せなくした。その瞬間を見届ける前に峰田は全速力で瀬呂の元まで走り、彼を担いで共に脱出ゲートをくぐる。嘔吐しながらも必死に酸素を補給し、残り時間数十秒というところで条件達成と相成った。

「ゲートから離れた所に張り付けて、眠り香の射程範囲外に……！」

「器用だねえ……あたしやすっかり騙されたよ！」

モニターで見ていた緑谷とリカバリーガールも、太鼓判を押す程の名演技。『モテたい』も突き詰めれば一つの目標である。ゲートをくぐる峰田を見てリカバリーガールは、彼への評価を上方修正するのだった。

「今回ばかりは……オツパイお預けだぜ！」

『瀬呂・峰田ペア、条件達成だよ！そしてタイムアップさね！期末試験これにて前半終了だよ！』

終了を告げるアナウンスが流れる。この試験で一步前に進んだ者も、壁に阻まれた者も。悲喜交交の中で20人の山場が終わった。

「あれ……前半？」

「まだ終わってないのがあるだろ？」

「あ……そうだった！鳴神さんと立甲さん！」

前半終了、という言葉に緑谷が疑問を唱える。リカバリーガールはその言葉に対して、呆れたようにそう答えた。これからさつきまで自

分達が戦っていたあの場所で、再び戦いが始まるのだ。一緒に行つたのに忘れてたとは薄情な、と。

「うう……これもちゃんと見とかないと！」

「オールマイトの戦い……直に経験するのが側から見ているのではまた違うからね。見るならちゃんと見ておくんだよ！」

「は、はい！」

「……よし。いこうか」

「ええ、合格してやりましょう！」

## 期末テスト：その6

先に試験を受けた10組の時間も終わり、次は風華と葵の番である。受験生の初期位置である会場中央まで移動してから、2人は試験が始まるまでの時間で作戦会議を行った。

「さて、相手はあのオールマイトですけど。僕達はどうかやって彼と戦えばいいと思いますか？」

「そもそも、戦いにしちやいけないと思う。動きを止めて距離を取って、基本的には脱出を狙う。オールマイトを確保するのは、出久がやった時みたいに相当な隙がないと無理だろうね」

「雷上動は禁止されましたしねえ」

「ホント、機動力の要を封じられたのは痛い……」

会場入りする少し前、風華は相澤から「試験中はあの、雷上動……だったか？それ使うのは禁止だ。あれを許可すると、オールマイトと戦って勝つ選択肢を取らなくて良くなっちゃうからな」という通達を受けていた。

まあ、当然の措置だろう。雷上動は風華が電気のラインを伸ばす限り、際限なく何処へだって行くことができる。レッドゾーン 赫炎領域を使えばそのラインを伸ばす手間すら一瞬で終えてしまえるのだから、それでは戦って勝つか、逃げて勝つかの判断力を見るという試験の趣旨に沿わなくなってしまう。

禁じられた理由は納得する。だからといって使い慣れた必殺技を使えないのはもどかしい。仕方ないので雷上動抜きで作戦は考えるが……モヤモヤしたものは、心の中に残ったままであった。

「会敵した時は、僕が盾になってふうちゃんがその後ろから攻撃。この形が一番、オールマイトに対抗しやすいでしょうね。オールマイトの攻撃、僕どのくらい耐えられると思いますか？」

「知らないよ……自分のことですよ。わたしは風雷回帰があるから、一応ダメージ自体はなんとかできると思うけど……それでダメージ↓再生のループに持ち込まれたらどうしようもなくなるね」

「うーん……あ、じゃあこんなのはどうです？」

「作戦思いついた？聞かせてもらおうじゃないの」

別に誰かに聞かれるという訳ではないが、風華の耳元に口を当ててコソコソと話す。聞かされた作戦の内容は、お互いかなりの負担を強いられる過酷なものであった。

「本当に、できるの……？葵、この作戦じゃあなただけが攻撃を受けることになるよ」

「いいんですよ、それで。僕は耐久力だけなら、オールマイトよりも高いと自負しています。何十回も耐えるというのは流石にキツイですが……勝つためならばこのくらいの負担、軽いものです」

「いや……でも、これじゃ流石に」

「そもそも個性の性質上、僕が盾役を務める方が適当です。ふうちゃんは再生はできても、耐久力は人並みのままですからね。纏雷でも上げられるのは身体能力だけで、耐久力はそのままでしょう？」

お任せください。葵はそう言い、ドンと胸を叩き自信満々であることをアピールする。赫災領域レッドゾーンを使うのだから、風華にも相当な負担がかかるだろうということも付け加えて。

そこまで言われては折れるしかない。風華は葵の立てた作戦を使って、オールマイトを攻略することを承諾した。

『さあ、用意はいいかい!?演習試験、後半の部を始めるよ!』

「……赫災領域、展開」

「龍化します!」

『制限時間は30分……スタートだよ!』

リカバリーガールによる合図と同時に、遙か彼方から爆発音が聞こえてきた。オールマイトがスマッシュで、辺りの建物や道路を吹き飛ばした音だ。規模自体は一発で中央まで届かせていた緑谷達の時よりも小さいが、先に一戦して消耗しているとは思えない程の威力である。

「ふうちゃん、暴走は大丈夫ですか!」

「大丈夫……暴走は抑えられてるよ。このまま作戦通りいこう。潜赫

……『伏雷』」

風華は地面に手を付き、そこから赫い雷を広げて電撃のダメージ

ゾーンを作った。会場全てを包めるほどの範囲はないが、脱出ゲートまで延ばせていればそれで十分である。

その作業を終えると、風華は龍化した葵の背中に飛び乗った。赫風で巨体を浮かせ、擬似的に飛行能力を与える。耐久力に優れた、迎撃機能付きの運船の出来上がりだ。

「わたしは風の操作で手一杯になるから……オールマイトの迎撃は任せよう！」

「お任せください！果たすべき責務は、しっかりと果たしてご覧にいきましょう！」

オールマイトが対応してくる前に、このまま脱出ゲートまで直行してしまえばいいが……葵の巨体を空高く浮かべながら、風華はそんな甘いことを考える。もちろん、そんな甘くはいかないであろうことは分かっているが……上手くいってくれと願わずにはいられなかった。

「ふふ……足場となる所を電撃で塞ぎ、その上を飛行していくか！いい考えだが、私にはこの程度の電力は効かないぞー！」

「オールマイト……！ヤバイ、伏雷ふしいかづちの中を普通に突っ切つて来てる！」

「本当ですか!?まだ見えて来てませんけど……」

「既にこの会場の空気は全部、わたしの支配下にあるからね……この赫い空気の中なら、どんなことでも手に取るように分かるよ。ていうか、酸素マスク着けてる！窒息対策しちやってるよ……！」

「うわあ……用意周到ですね！」

辺り一帯の酸素を奪って窒息させてやることも考えていたが、オールマイトは酸素マスクを着けてバッチリ対策していた。これでは酸素剥奪を実行しても、葵だけが被害を受けることになってしまう。

用意の良さに呆れていると、一際大きな赫いスパークがこちらに向かってくるのが葵の眼にも映るようになった。常人なら触れただけでもショックで昏倒する程の電撃を、そんなこと知るかと言わんばかりに突っ切つて超スピードで近付いてくる。そのまま赫雷を振り切つて飛び上がり、その拳を振りかぶった。

「テーキサーズ……スマツシュ!!」

「防ぎます!」

「おおつ、硬いな!これが蒼龍の力か!」

「邪魔は……させない!『吹き荒ぶ大風』!」

オールマイトの渾身のパンチ、大きく振りかぶって放たれる右ストレート『テキサスマツシュ』を葵は腕十字ブロックで防いだ。風華は衝撃の余波でよろける身体を立て直し、葵の背に手を着いてそこを起点に吹き荒ぶ大風を放つ。風の砲弾はオールマイトをしつかりと巻き込んで地面に着弾し、巨大なクレーターを造った。

「やってくれるな!だが、次はそうはいかんぞ!」

「もう一回来てる!葵!」

「分かってますよ!迎撃します!」

「おつと、言っただろ!?!次はそうはいかないつてな!」

まずは運船を墮とす。オールマイトはクレーターから再び飛び上がって2人に近付き、迎撃のために振られた尻尾を掴んで葵を地面に向かつて思いつきり投げ込んだ。「あわわわあ!?!」と狼狽えた叫び声を上げながら葵は地面に叩きつけられて、赫雷を全身に浴びてダウンしてしまった。

風華は自ら浮くことで何とか耐えたが、頼みにしていたメイン盾が一瞬でのされてしまった。このままでは風雷回帰の再生ループに、制限時間いっぱいまで持ち込まれてしまう。気絶してしまった葵がいつ目覚めるかは分からないが、そうなってしまえば合格はもう絶望的だ。

伏雷を解除し、腰に下げている高周波ブレードを抜いて強襲に備える。

オールマイトでも空を飛ぶことはできない。制空権がこちらにある以上は、それを活かさない手はないだろう。吹き荒ぶ大風で接近を牽制しつつ、それでも突破されたならブレードで応戦する。

ここからは独りでの戦い。オールマイトよりも有利な部分を活かして!どうにか勝ち筋を拾っていかなければならない。格の違う相手であるが……勝つためには、やるしかない。

「鳴神少女、油断は良くないぞ！確かに私には空を飛ぶことはできないが……空を歩くことはできるのでからね！」

「嘘でしょ……そんなこともできるの!?!」

「ミズーリー……スマツシユ!!」

「ぐっ……」

空から遠距離攻撃を続けて、どうにかしようと考えていたのは甘かったということを思い知る。オールマイトはさっきまでの二回のような一つ飛びのジャンプではなく、空気を蹴り上げて登るように風華との距離を縮めてきた。

そのま超パワーを纏った水平チョップ、『ミズーリースマツシユ』を放つオールマイト。風華はそれをブレードで受けるが、その衝撃でブレードは刀身が砕け、反動で左方向へと飛ばされた。せめて脱出ゲートに近くなる後方へ飛ばされたならよかつたのだが。そんなお優しい気遣いは当然、してくれないようであった。

「ふざけたパワー……愛刀だったのに」

「それは済まなかつたね、ハハハ！だが、敵にそんな恨み節をぶつければたつて意味ないぞ、鳴神少女！」

へし折れたブレードの柄を投げ捨て、風華は纏雷を発動する。赫い雷が全身を迸り、身体能力を大いに底上げた。それでも尚、オールマイトを相手にするには不足だろうが……やらないよりは、遥かにマシであると判断した。

空中での肉弾戦。オールマイトの激しい攻撃を捌いていく中で、コツソリと脱出ゲートに近付くことを試してみているが、それには気付かかっているようであった。オールマイトは決して風華が脱出ゲートのある方角に向かえないように、巧みに立ち位置を調整していた。凌げては、いる。No. 1ヒーローオールマイトといえど、滞空したままの戦闘はそうそう経験していないらしい。錘の負荷もあつてか動きは纏雷込みで対処できるレベルに留まっていた。

もっとも、それでも攻撃が激し過ぎて反撃する暇が無いのであるが。

「へいへい、どうした鳴神少女！受け流しの技術は一丁前みただけ

ど、それだけじゃあ私に勝つことは到底できないぞー！」

「無茶なことを……言ってくれますね！」

「おっと！危ない危ない。今のはちよつとだけ肝が冷えたぜ！」

「何で避けられるんですかっ……！」

振り抜かれた拳を下に向けさせ、自分に当たることは何としてでも阻止する。余波がアスファルトを砕き、風華は衝赫『大雷』おおいかつちでカウンターを図る。腕は抑えたし姿勢も不安定、それに攻撃の後隙を狙っているからこれなら当たるはず……そう確信して放った一撃だったのに、オールマイトは普通に回避してしまった。

渾身のカウンターをスカされ、忌々しそうに呟く風華。しかし赫風の流れから何かを察知し、眩きはすぐに不敵な微笑みに変わった。

「これはっ……！立甲少女の尻尾!？」

「ふふ……オールマイト、僕はまだやれますよ！」

「何の……これしきっ！」

「十分だよ……いい時間稼ぎだった！」

風華が微笑む理由を探ろうとしたオールマイトに巻きついた、蒼く巨大な百足。意識を取り戻していた葵が、風華に集中しているオールマイトの隙を突いて巻きつけたのだ。

オールマイトは百足を引き千切り、何とか拘束から脱出する。地面の方では、尻尾を千切られた痛みで葵が呻いていた。しかしこれが、形勢逆転の大きな一助となった。

「少しだけ、止まってもらいます。……『エアーズロック』」

「うおっ……だが、この程度！」

「この程度でいいんです！衝赫……『大雷』！」おおいかつち

「グハアツ!？」

対象の周りの空気を固めて、即席の檻を作る必殺技『エアーズロック』。これで一瞬だけオールマイトの動きを抑え、ありったけの電力を込めて重ねた両拳を撃ち下ろす。赫いスパークがオールマイトの胸元で激しく炸裂し、莫大なダメージとなって彼を襲った。

腕を振り切り、オールマイトを地面に墮とす。衝撃で建物や電線が砕けて倒れ、アスファルトの地面にクレーターが出来上がる。これで

もまだ、オールマイトは倒れないと薄々分かってはいたが。土煙が晴れた時にはもう起き上がっているのでは、電力を消費し切った甲斐がないというものであった。

「スピード、パワー、タフネス。基礎能力の全てが超一流……だからこそそのNo. 1。やっぱりあなたは最高のヒーローですよ。いや……今は、最悪の敵でしたね」

「ハハハ……それで、これ以上の火力が鳴神少女にはあるのかな!？」

「火力はもう要りませんよ。仕込みなら『大雷』おおいかづちであなただを叩き落とした時点で、既に終わってしまいましたから」

「ほう……うっ!？」

着地はせず、滞空したまま風華はオールマイトと会話をする。勝利のための布石は、既に打ち終えていると彼女は言った。ならばその成果を見せてもらおうではないか……オールマイトがそう言おうとした瞬間に、彼の身体を赫いスパークが迸った。

衝赫『大雷』おおいかづち……それは纏雷状態で行われる打撃のことである。纏雷による身体能力の強化はもちろんのこと、電撃が付随することで電気ショックの追加効果を得られる。そして、その真骨頂は打撃と共に放った電撃を相手に帯電させることができるということとところである。

伏雷の中を突っ切ってきたオールマイトは、ダメージゾーンに入っただけは、ショックをモロに浴びて硬直してしまっただけだ。だから、継続的ではなく断続的に電撃を与えて一瞬の硬直を連続で起こさせる。いくらオールマイトが超人と言えども、強い電気を浴びて硬直するという生理現象には逆らえない。葵のサポートのおかげで、オールマイトの動きを大きく制限することに成功した。

「そして……僕の尻尾は、一本だけでは……ないんですよ!」

「やっっちゃえ、葵!」

「クソ、力が入らな……おわああああ!!」

「オールマイト……綺麗な星に成りましたね」

断続的に放たれる電撃で、行動を著しく制限されてしまう中でも。オールマイトは諦めずに風華をどうにかしようとする。電撃が放た

れていない僅かな時間の間に、一気に距離を詰めて……そう思って実行に移そうとしたところで、今度は2匹の蒼百足に阻まれた。

電撃のせいでまともに力を入れられず、オールマイトは一度目とは違って、成す術なく巻きつかれていく。そのままきつく締められて、天高くへと放り投げられた。今の状態では、空気を蹴って宙を歩くやり方はとてもできない。落下してくるまで、そのまま空の旅を楽しむことになるだろう。

ここで、事実上の決着が着いた。

「ほら……龍化解いて。担い上げるからさ」

「ありがとうございます……」

龍化を解き小柄な少女に戻った葵を背負い、脱出ゲートに向けて走っていく。

纏雷を再び発動して、身体能力を強化することは忘れない。ありつたけの力で天高くまで飛ばしてやったとはいえ、いつ戻ってくるかは流石に分からないのだから。そうして速さを意識して壊れた街並みをつつ切つていった結果、オールマイトが戻ってくる前に脱出ゲートをくぐることができた。

『鳴神・立甲ペア、条件達成だよ！』

## 期末テストを終えて：三度蠢く

「やられた……！まさか、雄英高校が豆粒に見える程高くまで投げられるとは思わなかったよ！そういうえば立甲少女は？尻尾引き千切っちゃったけど……大丈夫なのかい!？」

「大丈夫……ではないですけど。龍化した時の傷は栄養と休養をちゃんと摂れば治りますよ」

風華と葵は、試験を終えてすぐにリカバリーガールの治療を受けてベッドに寝かされていた。

風華の方は治療が必要になるような傷は負っておらず、赫炎領域の反動で身体が怠いくらいで済んでいる。しかし葵の方は地面に叩きつけられ、電撃のフレンドリーファイアを食らい、尻尾の一本を引き千切られてかなりの重傷を負ってしまったっていた。試験を終えて気が緩んだことで、気を失ってしまったくらいには消耗していたのだ。

そのため葵はリカバリーガールの出張保健所ではなく、校舎の中にある通常の保健室の方で寝かされていた。自由落下から戻ってきたオールマイトが真っ先に心配したのも、ここにいるはずと思って来た出張保健所に葵の姿がなかったからである。

「よかった……消えない傷にならなくて」

「そうだよ！再生するものだって、後から分かったから良かったようなものの！アンタ、教え子に一生消えない傷を負わせるところだったんだよ！緑谷と爆豪の時もそうだったけど……やり過ぎだ！」

「申し訳ない……そこは本当に申し訳ない！」

「その言葉は葵に言ってやってください。あの子もわたしと同じ……オールマイトに憧れて、ヒーローを目指したクチですから」

それもそうだな！と、オールマイトは爆速で踵を返して葵のいるであろう保健室へと向かった。移動の余波で生じた、凄まじい風圧がリカバリーガールを襲う。風華が個性で風を避けたことで、二倍の被害を受けてしまっていた。

「まったく、あの男は……！」

「そういうえば、リカバリーガール。試験はクリアしましたけど……そ

れでも赤点になることってあるんですか？」

「ああ、立甲が心配かい？確かにあの子は、試験の大部分で気絶してたままだったからねえ……試験をクリアしても、その内容次第では赤点になることは普通にあるよ。今回の場合は最後にオールマイトを退ける活躍をしたし、大丈夫だと思っただけだね」

「そうですか、よかったです……」

その言葉を最後に、風華は深い眠りに落ちた。オールマイトと話をするために、何とか気合を入れて起きていたが、流石に限界だった。

初めて会った時と比べて、どれくらい自分が成長したのかを聞いてみたかったのだが。そんな思考は睡魔に流されて消えていった。

「……お疲れさん。ゆっくり休むんだよ」

）

所変わって……某所の人気のないバーで。雄英では悲喜交々の期末試験が終了した一方で、敵連合が三度、動き出そうとしていた。

死柄木は独り、三枚の写真を眺めていた。写っているのは雄英体育祭の時のもの。緑谷と爆豪、そして風華が戦っているシーンだ。写真を見つめるその眼には、いつものような忌々しさといった感情は見受けられなかった。

保須でステインの邪魔をするために脳無を派遣して以降、考え事が多くなっているのだ。

「死柄木さん、お久しぶりだな。こっちの方じゃ連日アンタの話で持ちきりだぜ。何かでさえこと始めるんじゃないかってな」

「……で、そいつらは？」

バーの扉が開き、見知った顔が1人と見知らぬ顔が2人現れる。どちらも堅気ではない、見るからに敵と分かる顔ぶれだ。

1人の方は、闇のブローカー。敵連合を情報提供や必要なアイテム、人員の確保などでサポートする役割の男である。

2人の方は、この男が連れて来た新入り候補。どちらもステインとの繋がりがあった敵連合を求めてやって来た、所謂シンパという奴ら

である。

「生で見ると……気味悪いいな」

「うわぁ手の人！ステ様の仲間だった人だよね!? 私も入れてよ、敵連合！」

見ていた写真を握り潰し、塵に変える。2人の顔を見上げながら、死柄木はとて不機嫌そうに黒霧に「コイツら帰せ」と命じた。

「俺の大嫌いなモンがセットで来やがった……ガキと、礼儀知らず」

「はア？」

「まあまあ死柄木弔……せつかくご足労いただいたのですし、話だけでも伺いましょう。義爛……あの大物ブローカーの紹介ですし、戦力的に間違いはないでしょう」

「何とでも呼んでいいけどよ、紹介料はしっかり頼むよ黒霧さん」

気に入らない相手とは会話もしたくないとコミュニケーションを拒む死柄木を、紹介してきた相手が相手だと黒霧が諫める。金に関してはがめつく言っておきながら、義爛は自身が太鼓判を押す2人の紹介を始めた。

「ま、紹介だけでも聞いときな。まずはこっちの可愛らしい女子高生。名前も顔もしっかりとメディアが守ってくれちゃいるが、連続失血死事件の容疑者として追われてる」

「トガです！トガヒミコです！世の中は生きにくいものです！生きやすい世の中になってほしいと思っています！そして、ステ様になりたい！ステ様を殺したい！だから入れてよ弔くん！」

「意味が分からん……破綻者か？」

「会話は一応成り立つ。きつと役に立つよ」

自己紹介の機会に預かり、自身の決意と欲望をプレゼンするトガ。主張の訳の分からなさには、同じ破綻者である死柄木も困惑せざるを得なかった。

「次は、こっちの彼。目立った犯罪を犯した訳ではないけど、えらくヒーロー殺しの思想に固執してるんだ」

「不安だな……本当にこの組織、大義はあるのか？このイカレ女、入れる気じゃないだろうな」

「おいおい、そのイカレJKすらできていることがお前にはできてない。初対面相手なら、まず名乗れ大人だろう」

「今は茶毘で通してる」

通すな本名を名乗れと、死柄木は茶毘と名乗った目の前のツギハギ男に説教をする。自分も説教をできるような人間ではないくせに、こういう時だけは一丁前であった。

茶毘は死柄木の説教を面倒臭そうに聞き流し、心底ウンザリしたとでも言いたげな顔で小さくため息を吐いた。

「出すべき時が来たら出すさ。とにかく……ヒーロー殺しの意思是、俺が全うする」

「聞いてねえよ……聞いてないことは言わなくていいんだよ。どいつもこいつも、ステインステインと繰り返しやがって……」

「……！いけませんよ、死柄木弔！」

「良くないな……気分が、良くない！」  
ふらり。

「駄目だ……お前ら」

ゆつくりと椅子から腰を離し、死柄木は幽鬼のように虚ろな眼と満天の殺意を2人に向けた。背筋にゾクリと衝撃が迸るのを感じ、ナイフを抜き腕を掲げてそれぞれが臨戦態勢を取る。一触即発の状況をどうにかしようと、黒霧が何とか場を収めようとする努力も虚しく、3人の敵は、黒霧の静止を気にすることなく戦いを始めた。

五指が触れたものを崩す死柄木の手。

トガの手に握られたバタフライナイフ。

個性を発動しようとした茶毘の手。

それぞれが互いの敵を殺すために振られ、そして黒霧のワープゲートによって空を切った。出鼻を邪魔されたことで、3人とも手を引つ込める。

「落ち着いてください、死柄木弔。あなたが望むままを行うのなら、組織の拡大は必須。奇しくも世間の注目を集めている今こそが、その組織拡大の絶好のチャンスなのです」

「分かってるよ、そんなこと」

「今はどうか、排斥ではなく受容を」

状況の全てを利用しろ。ステインの遺した影響やその思想も含めて、全てを敵連合のために。そして己の望むままを成すために。黒霧は死柄木に受け入れることが大事だと嗜める。

しかし、こういった小言の類は死柄木が最も嫌う言葉である。

「うるさいー」

「おい、どこ行く」

「どこだっていいだろ……うるさいー」

ガチャリ。無駄に強くドアを閉めて、不機嫌さをアピールしながら死柄木はバーから出ていった。衝撃で僅かに震える扉を見て、義爛は「取引先に言うことじゃないが、まだまだ未熟で青臭い」と死柄木を評する。

トガは「殺されるかと思った」、茶毘は「気味の悪い奴」と、それぞれが一連の流れから死柄木に抱いた印象を語った。おおむね、組織のリーダーとして良い印象は持たれていないようだ。

「返答は後日でもよろしいでしょうか？死柄木弔も自分がどうすれば良いのかは分かっているハズ……だからこそ、何も言わずに出ていったのです」

「ああ？」

「へえ？」

「ホオ」

リーダーがいなくなったのでは、新入り候補をどうするかなんて決められるはずがない。黒霧は死柄木の勝手な行動を代わって謝罪し、どうか返答は待つてほしいと言った。

「雄英襲撃、そして保須のヒーロー殺し。既に彼は二度も鼻っ柱を折られている。……必ず、導き出すでしょう。納得するお返事を……」

「……だと、いいがねえ」

「良いお返事を期待していますー！」

「ま……こっちは待てるさ。死柄木さんがちゃんと答えを出してくれるまで、いくらでもな」

死柄木弔……USJ襲撃の時の様子から、オールマイトより『子ど

も大人』の評を受けた男。そんな幼稚な精神をした男にも、悩み考えて……成長するべき時がきていた。

翌週。期末試験を終えて休みが明け、最初の登校日となったA組の教室はお通夜のような重苦しい雰囲気となっていた。

「うっぐ……ひぐう……！みんなのお土産とお話を楽しみにして……待ってるから……！」

「ま、まだ分らないよ!?個性把握テストの時みたいなどんでん返しがあるかもしれないよー！」

「緑谷……それは口にしたらなくなるパターンだ」

「試験で赤点取ったら、林間合宿には行けずに学校でずっと補習！そして俺らは演習試験をクリアできなかった！これでまだ分からんのなら、貴様の偏差値は猿未満だ！」

どうどう、荒ぶる上鳴を嗜める瀬呂。彼は試験をクリアしているが、それでも不安が残っている。彼は試験中ほぼ寝ていただけであり、峰田がいなければ詰んでいたからだ。

「それに……採点基準は明かされてないから。まだ赤点の発表がされてない以上は、希望を捨てるのは早いと思うよ」

「同情するならなんかもういろいろとくれ！」

「予鈴が鳴ったら席に着け」

「全員着いておりませう、相澤先生！」

風華も上鳴を落ち着かせようと、瀬呂に助け舟を出そうとしたが。精神状態が通常のものではない彼には無意味であった。

どうしたものかと手をこまねいていると、授業開始5分前を知らせる予鈴が鳴り響く。同時に相澤が勢いよくドアを開けて入室し、更に同時にクラス全員が自分の席に戻っていった。相澤の合理主義に適応した、いつもの形である。

「おはよう。今回の期末テストだが……残念ながら赤点が出た。したがって……」

空気が重くなる。演習試験をクリアできなかった芦戸・上鳴・切島・砂籐は、この後に続くであろう言葉を想像して唇を噛んだ。

空気を操る個性の持ち主として、この状況の重さを何とかしてやりたいと風華は考えていたが。流石にこんな概念すらどうにかできる程、風華の個性は都合の良いものではない。せめて補習が何とかなるレベルのものでありますようにと、祈るくらいしかできなかった。

しかし、相澤先生である。

「林間合宿には全員行きます！」

「大どんでん返してきたあああああ!!」

「赤点は筆記の方ではゼロ。演習で芦戸・上鳴・切島・砂籐、あと瀬呂が赤点だ」

「やっぱりい！」

誰も、演習試験はクリアできなかったら合格とは一言も言っていない。クリアできずに不合格よりもよっぽど恥ずかしいと、瀬呂は恥で赤らめた顔を隠すように手で覆った。

「今回の試験、我々は生徒達に勝ち筋を残しつつどう課題と向き合うかを見ていた。でなきや課題がどうかの前に詰む奴ばかりだったろうからな」

「じゃあ、全力で叩き潰すつてのは……」

「追い込むためさ。そもそも……林間合宿は君達の力を高めるための強化合宿だ。赤点とつちまった奴こそ、ここで力をつけてもらわなきゃならん。合理的虚偽ってやつさ」

「ゴーリテキキョギイー!!」

確かにそうだ。試験の時、オールマイトが時間いっぱいまで脱出ゲート前に陣取っていたら風華達に勝ち筋はなかった。わざわざ戦いに来てくれたからこそ「オールマイトを振り切って脱出する」ではなく、「戦って脱出する隙を作る」戦法を取ることができたのだ。

教師陣は全力は尽くしていても、最善を尽くしてはいなかったのだから。まだまだ、経験も地力も足りないということを思い知らされた。

……林間合宿、頑張らないとな。

演習試験未クリア組が林間合宿参加できる事実には沸き立つ傍で、風華は密かに決意を固めた。

## 合宿は事前準備が一番楽しい

「合理的虚偽……またしてもしてやられた！しかしこうも虚偽を重ねられては、信頼に揺らぎが生じてしまうと思います！」

「わあ、水差すね飯田君」

合理的虚偽によって、何とか林間合宿への参加権利を得ることができた不合格組＋瀬呂。彼らが感激に咽び泣く中で、飯田は委員長として嘘を何度も重ねるのはよくないと相澤に忠言した。

相澤には個性把握テストの時も嘘をつかれていたこともあって、二度も騙されたことへの悔しさがあるのだろう。

「確かにそうだ。省みるよ。ただ、全部が嘘って訳じゃあない」「え？」

「赤点は赤点だからな。お前らには合宿中、別途で補習時間を設けてある。ぶっちゃけ、学校に残っての補習よりもキツイからな」

「——！！」

押し黙る不合格組。いったい補習ってどんなことをするんだとか、キツイってどれくらいのことを言ってるのとか、いろいろ言いたいことはある。だがそんな葛藤を無視して、普通に合宿のしおりを配り始めた相澤の姿を見れば、口を噤むしかなかった。

「ま、何はともあれ。林間合宿全員で行けるようになってよかったな」

「一週間の強化合宿か……！」

「一週間分となると、結構な大荷物になるね」

「水着とか持ってねーや。パンツとかも履き古したの持っていく訳にもいかねーし……いろいろ買わないといけないか？」

着ていく服やタオル、自由時間に思いつき遊んでやるための水着など。一週間分の荷物ともなれば必要なものはかなり多くなる。買わなければいけないものが多くなるなどという上鳴の言葉に、それならばと反応した葉隠がクラスに提案をした。

「じゃあさじゃあさ！明日は祝日でお休みだしテスト明けたばっかだ

しぎ……A組のみんなでお買い物に行かない？」

クラスのみんなまでシヨツピング。こういったプライベートな場で全員が集まったことは、これまでは一度もない。初めてのクラス会的な催し物の提案を受けて、ほぼ全員が乗り気となった。

「良いね！何気に初めてじゃんこういうの!?!」

「おい爆豪、お前も来いよ！」

「誰が行くかよ、かつたりイ」

「轟君も一緒に行かない？」

「悪いな……休日はお母さんの見舞いだ」

「ノリが悪いよお！空気読めやお前らあ！」

わいわい、がやがや。周りと積極的にコミュニケーションを取る気がない爆豪と、用事があって行けない轟以外はみんな参加することが決定した。後はそんな騒ぐ彼らの様子を、何だかソワソワとしながら眺めていた風華だけ。

「風華ちゃんは、どう？一緒に行く？」

「うん……こういうのは、初めてだから。ちよつと楽しみにしてるんだ」

「なら鳴神イ！オイラが着いてってやるぜ！」

「それはいいかな……」

「何でだよ!?!」

風華は中学までずっと、プライベートの時間は個性研究所での訓練に当ててきた。関わりがあった相手といえば、葵をはじめとする研究の面々や雷羽と叔父夫婦くらいであり、クラスメイトと一緒に何処かへ出かけるという経験はこれまで一度もしたことがなかったのだ。

故に、葉隠の提案に対して風華は少なからず期待を寄せていた。

「じゃあ明日、11時に現地集合ね！」

く

「お姉ちゃん、明日はお休みだったよね！一緒にどっか遊びに行こうよー！」

「ごめんね、雷羽。明日はクラスのみんなと一緒に買い物に行くことになってるんだ」

「A組も皆さんで一緒に買い物ですか？」

放課後。

研究所に遊びにきた雷羽が、明日は一緒に遊びに行きたいと風華におねだりする。しかし風華は既に約束を取り付けているので、雷羽の願いを聞くことは叶わなかった。雄英に入ってから姉はとても忙しそうであり、一緒に遊ぶ機会も昔と比べてかなり減ってしまった。

久しぶりに一緒に過ごせると思ったのにと、頬を膨らませて不満を露わにする雷羽。風華はそんな妹の頭を撫でて、宥めてやるのだった。

「しよがないですね……雷羽ちゃん、明日は僕と一緒に遊びに行きましょう！何処でも行きたい所に連れてってあげますよ！」

「あれ……さっきの口ぶりだとき、B組もみんなでお買い物に行くんじゃないの？」

「僕はもう必要な品は揃えてありますから。一緒に買い物に行かずとも良いですよ。という訳でふうちゃん、雷羽ちゃんは僕が見ておきますから、安心してお友達との交流を深めてきてください」

「ありがとう、葵。助かるよ」

準備の良い葵のアシストも受けて、明日は何も気にすることなく出かけられるようになった。強いて言うなら、預ける相手が葵であるというのが不安要素であるが……小学生相手ならば、いつもより用心深くなるであろうし大丈夫だろう。

もう10年以上、葵との付き合いはかなり長い。風華は彼女のことを信じることにした。

「お姉ちゃん、行こっ！葵お姉ちゃんも！」

「もう帰るの？叔父さんもまだ迎えには来ないはずだけど……」

「ちーがーうよ！明日、お姉ちゃんが着てくれためのお洋服を買いに行くの！お姉ちゃんはいっつも訓練ばかりで、よそ行きのお洋服なんて制服くらいしか持ってないでしょ？だから買いに行くよ！」

「今から？それに、僕も行くんですか……？」

問答無用！と、雷羽に連れ出されて2人は研究所の外に出ることになった。時間はまだ夜の8時くらいなので余裕はあるが……ファツシヨンなどには疎い風華と葵は、姉にオシヤレをさせようと張り切る雷羽によつて二時間程振り回されるのだった。

「さ、まだまだ回るよ！」

「強引過ぎですよ……いつたい、誰に似たからこうなつたんですかまったく……！」

「叔父さんじゃないかな……あと、しつかり付き合つてくれてありがとうね」

「……帰りに、コーヒーでも奢ってください」

〽

翌日。

「つてな訳でやって来ました！県内最多の店舗数を誇るナウでヤングな最先端！木榔区ショッピングモール！」

「昨日はここじゃなかったからな……こんな大きいショッピングモールなんて初めてだよ」

「マジかよ鳴神！」

「じゃあ、今日は特別な日だね！」

結局爆豪が参加することはなく、当初の予定通り轟と爆豪を除いた19人がショッピングモールに集合した。風華は初めてということもあり、遊園地に来た幼児のように、目を輝かせて辺りをグルグルと見回していた。

昨日雷羽に服屋を連れ回されたことで、よそ行きの服装もバツチリ決まっている。買い物に行くための買い物をするのはどうなのかと昨日の時点では思っていたが、こうしてみんな普通にオシヤレをしているのを見てしまえば、ちゃんと買い物に行つて正解だったと思うものだ。

もしも着ていく服がないからと、制服で風華がこの場にいたなら

ば。その浮きつぷりは尋常ではないものとなっていただろう。

「腕が6本のあなたにも、ふくらはぎがゴツゴツしてるあなたにも！きつと見つかるオンリーワン！」

「個性の差によって生ずる多様な個々人の差や形態をただ数でカバーするという訳じゃないんだよねティーンからシニアまで幅広い世代の感性に合ったお店の様式やデザインが集まっているからこそその県内最高の売り上げや集客数を誇っているんだ駐車場を見たら家族連れが乗るような大きめの車ばかりでそれはつまり大人から子どもまで誰もがこのモールにニーズを持っているという訳で」

「緑谷、幼児が怖がるぞ。よせ」

「え、アレ雄英生じゃん!?一年の！みんな体育祭カツコよかったよー！ウエーイー！」

「うおお……まだ覚えてる人が！」

「取り敢えずウチ、大きめのキャリアバッグ欲しいんだけど何処に売ってるかな？」

「一緒に回りますか？私、このモールには何度も足を運んでおりますので。案内できるかと」

「マジ!?よろしくヤオモモ！」

「ピッキング用品とか、小型ドリルとか暗視ゴーグルとかって何処に売ってるんだ？」

「やめなさい」

「俺はアウトドア系の靴が欲しいな！」

「あ、それ私も欲しいかも！」

「いや、しかし靴は履き慣れた物の方が結局は快適だということもままあるぞ！それに履き慣れた物にしろとしおりに書いてあ……いや、しかし成る程用途に合わせるべきなのか……？」

「みんな欲しいもの違うっばいし、時間決めて自由行動ってことにするか！」

切島の鶴の一声で、ワイワイ買いたい物や揃えておくべき物について話し合っていたみんなは一斉に散開した。

ポツン、と3人が残される。独りぶつぶつとモールの凄いところに

ついでに呟いていた緑谷と、特に買いたい物が多くない麗日、そして浮かれている間にみんながいなくなっていた風華だ。

「みんな、行動早いな……」

「だねえ……」

「2人はどうするの？わたしは昨日で衣服系は買い揃えたから、後は容量の大きな蓄電池とかあったら買いたいんだけど」

「蓄電池……何に使うん？」

「葵の熱を発散させるためのものがね。あの子は個性を使わないと身体にたくさん熱量を溜め込んでしまうから、定期的に何かしらして発散させないといけないんだよ」

普段はバイクのエネルギーとして消費することで熱量を発散しているが、合宿中にバイクを運転する訳にもいかない。個性を強化するための林間合宿であるし、個性が使えないということはないはずだとは思っているが……それでも、用意しておくに越したことはないだろうと考えていた。

「はあ……立甲さんも大変なんだね。僕は、新しいウエイトリストとかのトレーニング用具かな。麗日さんはどうするの？」

「ウチは虫除けを……」

緑谷に話しかけられ、彼の顔を見つめる麗日。その目は何だか熱を帯びているようで、それはまるで恋する乙女の――

——君、緑谷君のこと……

「虫除けえ——！」

「えっ……麗日さん!?麗日さん!?」

「……行っちゃったね」

演習試験の時、ペアとなった青山に言われた言葉が頭の中から離れてくれない。そんな感情じゃないはずなのに。言われてからずっと緑谷のことを意識してしまっている。

違うのだ。別に、そういうのではないのだ。

本当に……

「せっかくみんなで来たのに、2人だけになっちゃったね。どうする？わたし達も買い物しに行く？」

「あつ……そうだね！行こうか鳴神さん！」

「おー、雄英の人じゃん！スゲー！」

「……」

もう誰もいなくなってしまったが、自分達も必要な物をちゃんと買いに行こう。そう風華が提案して2人が動こうとしたその時、背後から現れた黒いパーカーの男が声をかけてきた。

緑谷はその声を聞いた風華から、沸々と怒りが湧き上がってきているのを感じた。赫災領域は展開されていないはずなのに、怖気と鳥肌が止まらなくなってしまうている。いったいこの男に何があるというのだろうか。振り返って確認しようとしたその時には、男は馴れ馴れしく2人と肩を組んでいた。

「んで確かさあ、保須でヒーロー殺しと遭遇したんだって!?!よく無事でいられたよなあ！」

「よくご存知で……?？」

「……」

「いや、ホント信じられないぜ。まさかこんな所でまた会うとは！」

「は……?？」

「ごごまでくるとさ……運命とか感じちゃうよ」

違和感を感じた時にはもう遅かった。男は緑谷の首筋に中指以外の4本の指を当て、左手でも風華に対して同じようにしようとしたが……そっちは逆に手を掴まれて失敗に終わる。

「ははっ……痛ってえ」

「……何をしに来た？死柄木弔」

「しっ……!?!」

「しー。別に、何か企んでる訳じゃねえよ。今回はただお前らと話をしてみたかっただけだ。お茶でもしようぜ……緑谷出久。鳴神風華」

大勢のお客さんで賑わう、休日の大型ショッピングモールではあり得ないはずの邂逅。始まりとなる雄英襲撃以来……敵連合の首魁、死柄木弔と期せずして二度目の相対をするとなった。

## インタビュー・ウイズ・緑谷&鳴神

——信念なき殺意に、何の意義がある？

深くフードを被って顔を隠しながら、死柄木はショッピングモールの中を練り歩いていった。ステインとの邂逅以来、ずっと心に引つかかっている疑問の答えを探すために。

「……見てみるよ、ヒーロー殺し。お前のやったことなんて、この中の誰にも響いちやいねえ」

ヒーロー殺しの行った所業など、大多数の一般市民にとっては対岸の火事……いや、そうとすら思ってもいないだろう。

何処で、誰が。どういう信念を抱いて何を壊し殺そうとも、そんな事情など知る由もない一般市民はヘラヘラと笑いながら生きている。よくて金儲けのためのオモチャとして使われるくらいだ。

「うっわ……良いのかよコレ？」

「ヒーロー殺しのコスプレセット……こんなん絶対問題になるだろう！」

「チョー不謹慎じゃん！面白！」

「ハハハ、すっげえ！」

その一方で……偽物のヒーローを間引き、危機意識を与えることで、ヒーローと社会をより良いものとする。そんなステインの思想とおおよそ遠いところで彼のシンパが生まれている。彼の主張に熱いものを覚えた、彼の最も嫌悪する人種が、こぞって敵連合に向けて動き出している。

——何なんだ？

やったことは同じだ。ステインも死柄木も、自分の気に入らないものを壊そうとしただけだ。結局2人のやっている所業は、根っここのころでは同じものであつたはずなのだ。

——いったい、何が違うというんだ？

ショッピングモールの真ん中で、ポツリと2人して佇んでいる緑谷と風華を見つけたのは、そんな問に答えを出そうとしている時であつた。

「俺に気付いたのは、大したモンだが……今はごく自然に、旧知の友人と再開した時のように自然に振る舞うべきだ。決して騒ぐな。落ち着いて呼吸を整えろよ。さっきも言ったが……俺はお前達と話をしてみたいんだよ」

「……！」

「少しでもおかしな動きを見せれば……この中指もお前に触れさせる。俺の個性についてはもう知ってるだろ？五指で触れたものを崩壊させる……喉の皮膚を起点に、1分も経たない内にお前の全身は塵と化すんだ。鳴神、特にお前は気を付けろよ」

「こんなつ、人混みで……！そんなことしたらすぐヒーローが駆けつけてくるぞ……！」

だろうな。死柄木はそう言つて、緑谷の言葉を肯定する。その後でジェスチャーを使って周りにいる客を見渡させ、言葉が続けた。

「見てみるよ、コイツらを。いつ誰が個性を振りかざしてもおかしくないつてのに、どうして笑つて群れていられる？法やルールつてのは、つまるところ個々人のモラルが前提だ。『誰も、こんなところで凶行に及ぶ訳がない』つて……そう思い込んでいるのさ」

「……！」

「ヒーローが駆けつけてきて……捕まるまで20人いや、30人は殺せるだろうなあ……」

「そんなこと……わたしがやらせると思ふのか？」

死柄木の手を掴む腕に力が入る。自分が人殺しはさせないと凄む風華だったが、死柄木はそんな風華を恐ろしいとは言いつつも、しかし怯むことはせずに飄々と言い放った。

「お前の個性ならイチコロだろうな……俺も。でもお前は個性を使えないだろ？ヒーローになる人間が率先してルールを破るなんて、あっちゃいけないことだからなあ……」

「……」

「卑怯な……!」

「ま、ここはおとなしく俺と話をしてくれ。アテもなく歩き続けるのも何だし、どっかに腰掛けてまったりと話そうじゃないか……」

中心にある円形のベンチに3人で座り、死柄木はおとなしく話し合いに応じる意思があることを確認してから本題に入った。

緑谷も風華も、死柄木の一举一動を見逃さないように観察する。ここで下手に行動を起こせば、奴は必ずここにいる一般人を道連れにして逮捕されていくだろう。今のところそのような気は起こしていないようなので、刺激しないように話に応じるしか手段はないのだ。

個性を使えたなら、緑谷は死柄木の五指が触れる前にその手を振り払えるだろうし、風華ももの一瞬で意識を刈り取れるだろう。だが、そうすることは学生の身分には許されていない。己の無力を噛み締めながら、おとなしく敵の狙いに乗るしかない現状に悔しさを覚えていた。

怒りを鎮め、死柄木の言葉に耳を傾ける。できることが会話しかないのならば、それをやり遂げなければならないのだから。

「俺は、だいたいどんなモノでも気に入らないだけだよ。今一番腹が立つのはヒーロー殺しだ」

「ヒーロー殺し……仲間じゃなかったのか?」

「世間じゃあそういうことになってるな。俺はそんなこと認めちゃいないが。問題はそこさ。ほとんどの人間が、ヒーロー殺しに目を奪われてる」

「それが……何だっというんだよ」

雄英を襲撃したのも、保須で3体の脳無を放ったことも、全てヒーロー殺しの話題に関心を持っていかれてしまった。

「誰も俺を見ないんだよ。何故だ?」

ステインは、死柄木と会った時にいろいろと能書きを垂れていたが。結局は自分と同じで、気に入らないモノを壊していただけだろう。なのにどうしてこうも差がついた? どうしてステインは、世間の関心を集めることができたのだ?

——死柄木弔と、ステイン。いったい何が違うというのだ？

「なあ……何が違うと思う？緑谷、鳴神」

「ムムム……動揺して、ついつい全速力で走って行ってしまった」

デク君も風華ちゃんも、訳分からなかっただろうなと自身の奇行を反省する麗日。紅潮して熱を帯びる顔に手扇で風を当てながら、誰に聞かせるでもなく心の中で言い訳を重ねた。

悪いことしちゃったなあ……うん……だから戻って謝りに行かんとなあ……うん……戻らんと……いや違うけど？戻って謝るだけやし？ウチのせいで変な空気になっちゃっただろうことを謝りに戻るだけやし？

うん……うん、そうやん別にデク君と2人だけでお買い物に来た訳ちゃうしそういうんとは違うもんそもそも別に同じヒーロー志望として凄いなあってなっただけやしうん戻ろう青山君に言われたこととか全然関係ないし違うし青山君うんホントちゃうってちゃんちゃらおかしいわさーて戻る戻るぞ本当にもう変なこと言わないでほしいわ2人ともまだそう遠くまでは行ってないよねさー戻ろー

緑谷の呟き癖が伝染したかのような、心の中での物言いをしながらいき返す麗日であった。

「何が……違うかって……？僕はお前のことなんて理解も納得もできないけど……ヒーロー殺しのは少しだけ、理解できたよ……」

保須での事件の際、ステインは脳無に何処かへと連れ去られそうに

なった緑谷を助けた。正しき社会を実現する……そのためにやるべきと思つたことをやっていたのであり、少なくとも気に入らないモノを壊したいだけという訳ではなかった。

死柄木が雄英を襲撃した時のように、勝ちの目がなくなったからといって徒にしかしたことを投げ出すような真似もしなかった。

「僕も、ヒーロー殺しも……始まりはオールマイトだったから……アイツは……やり方は間違つてたけど、理想に生きようとしてたんだと……思う」

「ヒーロー殺しの動画……何度もアップされては削除されてるやつはわたしも観た。オールマイトの姿に当てられて、その背中の中の心強さを自分で再現しようとして、それができなかつたんだ……だから粛清という、間違つた道を選んだ」

「気持ち……分かるんだ。オールマイトのようになるって言うのは、口にするだけなら簡単でも実行するのはとても難しいことだから……」

「ああ……なるほどな」

「!!」

「!？」

ゾワリ。死柄木が身に纏っていた殺気や狂気といった類のものが、爆発的に膨れ上がっていくのを2人は実感した。何かに気付き、考え続けていた間に答えを出せたその顔はとても晴れやか……には到底思えない程歪んでいた。

「ああ……何かスツキリした。点と点が繋がって線になったような気分だ……どうしてヒーロー殺しがムカつくのか、どうしてお前らを鬱陶しく感じるのか、分かった気がする」

「……」

「全部、オールマイトだ」

「ハッ……」

結局は、そこに辿り着くのだ。何を悶々と考え事なんてらしくないことをしていたんだと、死柄木は何かを愚弄するように笑う。

「ゴイツらがヘラヘラ笑って過ごしてられるのも全部、オールマイ

トがヘラヘラ笑ってるからだ」

「うっ……！」

「っ……止める、死柄木弔！」

「オールマイトが……あのゴミが！救えなかった人間など誰一人としていなかったかのように！ヘラヘラと笑ってるからだよなあ！」

緑谷の首に当たった手に、力が籠っていく。風華がそれに気付いて止めようとするのも構わず、感情が昂ると共に更に力が入っていった。

息苦しさに緑谷がもがこうとするが、死柄木はその抵抗を許さない。周りの一般人を巻き添えにしてもいいのかと脅し、強硬策に2人が出られないようしつかりと釘を刺した。

「ああ……話せてよかった！ありがとう2人とも！良いんだ！俺は何ら曲がることはない！皮肉なモンだよなあ、ヒーロー殺し……！」

死柄木の表情が、更に歪んでいく。

自分の理想とは対極にある自分を生かしたステインの理想や信念は、全て踏み台となる。悪意と嘲笑を孕んだ笑みを、死柄木は更に深めた。首を絞められている緑谷の顔が苦痛で歪み、風華が無理矢理にでも止めさせようと右腕を伸ばしたその時――

「デク君？」

――救いの手が、やってきた。

「お友達……じゃないよね。手、離して？」

「麗日さっ……!?!」

「お茶子……来ちゃダメだ！コイツは……！」

「ああ、連れがいたのか！ごめんごめん」

雰囲気悪さを察し、緑谷から手を離させようとする麗日。緑谷はその来訪に驚き、風華は下手に死柄木を刺激してはマズいとその歩みを止めようと叫んだ。しかし、そんな2人の考えなど知ったことかとはばかりに死柄木は手を離れた。わざわざ、悪意を隠した作り笑いを浮かべて。

「ゲホッ……ゴホッ！」

「デク君！大丈夫……！」

「んじゃ、俺は行くわ。もしも追ってきたりしたら分かるよな？」

「待て……ゲホツ！死柄木……『オール・フォー・ワン』は、何が目的なんだ！」

緑谷のその言葉に、ギョツとしたように死柄木を見る麗日。その死柄木は緑谷の問いには知らないと返し、そのまま消えていった。

「気を付けとけよ。次、俺がお前らと会う時は……殺すと決めた時だろうからな」

「違う……次会う時は、お前が捕まる時だ」

「へっ……よかったな。俺の機嫌が良くて」

理想も信念も、最初から死柄木の中にあつた。やるべきことも、やりたいことも何も変わりはないが……これからの行動には全て、繋がる一つの想いがある。

——オールマイトのいない世界を創り、正義とやらがどれ程脆弱なモノであるかを暴こう。

今日からそれを、信念と呼ぼう。そうこれまでの問いに結論付けて、死柄木は人混みの中へと消えていった。

「もしもいつ、警察ですか!? 敵が現れたんです！今……木椰区のシヨツピングモールで……」

「ゲホツ……がっ……い……ふう……！」

「落ち着いて、出久。大きく息を吸って、吐いて」

麗日が警察に連絡している間、風華は首を絞められて呼吸できいなかつた緑谷を、自身の個性による空気操作で助けていた。公の場で資格を持たない者が個性を使うことは禁じられているが、こういった小さな使用くらいならば、見て見ぬフリをされて許される。

……オール・フォー・ワン、か。

呼吸補助をしている間、緑谷が最後に問いかけたその名がずっと頭の中を回っていた。以前に忘れ物を届けにいった時、期せずして耳にしてしまった巨悪の名前。

——全て……オールマイトだ。

因果は、繋がっている。

## 邂逅のあとで

「緑谷君！鳴神さん！」

「敵連合の奴がいたって……大丈夫だったか!？」

麗日による警察への通報からしばらくして。木柵警察はすぐに部隊を引き連れて現れた。雄英襲撃や保須市での事件もあり、警察は敵連合に対して特別捜査本部を設置していた。そうして対策していたからこそできた、迅速な対応であった。

ショッピングモールは一時的に閉鎖。区内のヒーローと警察が協力して捜査に臨むも、結局死柄木の姿はおろか何処に逃げたのかという痕跡すら見つかることはなかった。

風華と緑谷は警察署に連れられ、署で顔見知りであった塚内刑事から事情聴取を受ける。死柄木弔の人相や会話内容から分かる性格や思想など、伝えられる限りの情報を伝えた。

「ふむ……君達の話を聞く限りは、敵連合の内部も一枚岩って訳ではないみたいだね。オールマイト打倒という考えも変わらず……か。よし、取り敢えずこの辺にしておこうかな。捜査への協力ありがとう。緑谷君、鳴神さん」

「ごめんなさい。わたしが個性を使っても止めていれば……むぎむぎと奴を逃すこともなかったはずだったのに……」

「そ、そんなことないよ!？僕の方こそ時間稼ぎができてれば、ヒーローや警察が来るのに間に合ったかもしれないのに……!？」

風華も緑谷も、互いに責任を感じていた。あれだけ近くに世間を騒がせた敵がいたのに、緑谷は締め殺さかけて風華はそれを止められなかった。もちろん、下手に刺激したら周りにも被害が及ぶことが分かっていたからこそ動けなかった訳だが。何もできなかったことを歯痒く思う気持ちに、2人とも嘘はつけなかった。

そんな気持ちを察してか、塚内は悔しさと無力感で俯いている2人を励ますように言った。実際のところ塚内としては、迅速に通報する判断を下した麗日と共に、この2人に対しても高い評価を与えたいと思っていたということもある。

「そこまで悲観することはないさ。寧ろ自分や周りの一般人の命を握られていながら、よくぞ耐えてくれたと言いたいよ。君達が冷静に行動して死柄木の機嫌を損ねないでいてくれたからこそ、一人の犠牲者も出さずに済んだんだよ」

「そう……ですか」

「ありがとうございます」

「普通なら、あんな状況になったらパニックになってもおかしくない。学生の身分でできることも限られている中で、君達が取った行動はほとんど最適解と言ってもいい。一警官として……君達の勇気に感謝の気持ちを伝えるよ。ありがとう」

死柄木弔を逮捕できていれば、確かにその結果は最良の結果と言えただろう。しかしそんなこと不可能と分かっている中で、危機に晒されていた2人が最適解を取ったことで、誰一人として犠牲者を出さないうという最善の結果を得ることができた。

無力感に歯噛みするのはいいが、そのことだけは分かっている。そう言つて、塚内は事情聴取を終えた。外に出ると、空は既に太陽が西に沈んで紫がかり、三日月が浮かんでいた。

「緑谷少年！ 鳴神少女！」

「オールマイト？ どうしてここに……」

保護者の迎えを待っていると、それよりも先にオールマイトが現れた。どうしてここに？ と風華が疑問を口にする、個人的に話したかったから呼んだんだ」と塚内が答えてくれた。

「2人とも、無事で何よりだよ。助けてやれなくて済まなかったな」

「あ……はい」

「出久？」

「……どうした緑谷少年？ 何かあるのかな？」

——あのゴミが、救えなかった人間などいなかったかのよう！ へラへラ笑ってるからだよなあ！

「オールマイトにも……助けられなかったことかあるんですか……」

？」

「あるよ……それも、たくさんね」

死柄木の言葉が頭をよぎった緑谷は、オールマイトにそう尋ねてみた。帰ってきた答えは予想通りのものであったが。

今もこの世界の何処かで、誰かが傷付き倒れているかもしれない。どんなに強くとも、オールマイトも所詮は一人の人間である。目や手が届かないところにいる人間は救えないのだ。

だからこそ、オールマイトは笑って立つ。

「正義の、平和の象徴が……人々の、ヒーローの、そして悪人達の心だって常に照らせるようにね」

「……死柄木の言葉を気にしてるね」

オールマイトが現場に来て、救えなかった人間など一人としていない。救われなかった人間は言い方が悪いが、運が悪かったのだ。自分が助けられた側であるからこそ、風華はそう思った。

誰だって、一人でできることには限りがある。だからこそ人は助け合っていくのだ。死柄木弔の言うことは単なる、逆恨みのようなものであるろう。助けられるということは、当たり前前に起きるようなことではないのだ。

「お、迎えが来たようだよ」

「お母さんー！」

「出久……もうやだよ……お母さん心臓が保たないよ……！」

「ごめんね……でも、僕は大丈夫だったよ。何ともないから泣かないだよ。ヒーローも警察もしっかり守ってくれたから大丈夫だよ」

息子の無事に安堵したのか、それとも息子が知らぬ間に危機に陥っていたことに恐怖したのかは分からないが。緑谷の母……引子はハシカチも意味を成さなくなる程泣きじやくっていた。涙の理由が何であれど、息子を心配して泣いていたということには変わりない。心配してくれている母親がいるということ、風華は少しだけ羨ましく思った。

「出久……これ、あげるよ」

「あ、ありがとう……キャンディ？」

「わたしのお気に入りでよ。今日はいろいろあつて疲れたでしょ。それ舐めて、元気出しなよ」

「うん……ありがとう、鳴神さん。また明日ね」

塚内の命令で、猫のような顔をした三茶という刑事が緑谷親子を送迎する手配をする。三茶に着いて行つて小さくなる緑谷の姿を見ながら、風華は緑谷が死柄木に対して問いかけた名前のことについて考えを巡らせていた。

オール・フォー・ワン。超常黎明期から恐らく現在までを生きる、不滅の犯罪王。個性を奪い、そして与えることのできる個性を持ち、今も尚死柄木弔を使つて裏で暗躍する巨悪。

オールマイトが『討ち取つた』という、殺人など御法度であるヒーローらしからぬ表現さえ使つていた相手。きっと近いうちに、風華もこの巨悪と相対することになるのだろう。

「……オールマイト」

「どうした？ 鳴神少女」

「……オール・フォー・ワンとは、いったい何を目的としているのでしょうか」

「……!? どこで、その名を」

緑谷との話を聞いていたことを、風華は正直にオールマイトに打ち明けた。もともとそんなつもりはなく、偶然であつたことも付け加えておく。

オール・フォー・ワンの名は、話のほとんど初めの方から出していた。その名を風華が聞いているということはつまり、そういうことなのだろう。秘密にしておかなければならないことが知られていると悟つたオールマイトは、自身の不用心さにため息を吐いて言葉を続けた。

「奴の目的は私にもよく分からない。ただ一つ分かっていることは、奴は絶対に倒さねばならない悪だということだけだ」

「オールマイトの……そして出久の個性は、その巨悪を倒すために生まれたんでしたよね。いずれはきつと、わたし達もそのオール・フォー・ワンと相対することがあると思います。その時……オールマ

イトでも倒すことができなかつたその敵を、わたし達が倒すことはできるのでしょうか？」

「できるや」

「え……う？」

オールマイトですら倒せなかつた巨悪。いつか相対するとして、勝てるのだろうか。そう不安を口にする風華に対して、オールマイトは鼓舞するかのようサムズアップして言った。

「USJでの襲撃事件に、職場体験では暴走する力の制御。そして今日、再び大きな悪意に晒されても冷静さを失うことなく、最適な判断を下して犠牲者をゼロに抑えられた！こんな経験、私だって学生の時にはしたことがなかつたぞ！経験は、人を大きく成長させる……そして更に、君には叶えるべき目標もある。きっと……いや、確実に君は強くなれる！この私よりも確実に、素晴らしいヒーローになれるだろう！教師として保証するよ！」

「オールマイト……」

「君も迎えが来たみたいだぞ。ほら、保護者の方も心配しているだろうし元気だというところを見せてやりなさい」

「風華ちゃん！大丈夫だったかい……!?!」

息を切らしながら走ってくる、立甲研究員と叔父夫婦の姿を指差すオールマイト。風華が大事なさそうにしているのを見て、ホツとしたように小さく息を吐いていた。息切れする3人の後ろから、ひよつこりと葵と雷羽も出てくる。こちらの2人も風華に何事もなかつたことで安心しているようだった。

「USJの時の主犯が出てきたんですって？本当に災難でしたね」

「お姉ちゃあん……無事でよかったよお……!」

「ごめんね。心配かけちゃって……」

「ホントだよお！気が気じゃなかつたんだから！」

塚内がもう一人警官を呼び、彼に案内されてパトカーまで着いている。最後にもう一度、塚内から捜査協力と犠牲者ゼロの感謝を告げられて風華は個性研究所へと帰っていった。

パトカーが出ていったのを確認してから、塚内はオールマイトに彼

を呼び出した本題を語る。それは雄英高校への警告でもあった。

「今回は偶然の遭遇だったようだが、今後彼ら……ひいては生徒が狙われる可能性は低くない。警察も引き続き警戒体制を敷くが、学校側も思い切った方がいいよ。光が強い程、影はより濃く、大きくなっていく。雄英を離れることも、視野に入れておいた方がいい」

「……教師生活、まだ三ヶ月とちよつとだぜ？」

「ははっ、だから前に向いてないって言ったろ。オール・フォー・ワン、今度こそ捕えよう」

「ああ、今度こそ……！またよろしくな、塚内君」

かつては共に、巨悪を追い詰めた仲。命を長らえて再び動き出そうとしているオール・フォー・ワンを今度こそは捕えようと、2人は既に太陽が完全に沈んだ夜空の下で誓い合った。

）

「葵……わたしと勝負してくれない？」

「何ですかいきなり……まあ、構いませんが」

個性研究所に帰還した風華は、帰ってきて早々葵に勝負を挑んだ。葵もその突然さに驚き呆れこそしたが、快くその申し出を受け入れた。

研究室の扉を開き、中の灯りを点ける。一面中が白で囲まれた広い空間は、多くを巻き添えにしやすい2人にも十分な広さを誇っていた。

「準備できた？」

「ええ。バッチリです。……いきますよ」

風華は赫炎領域レッドゾーンを広げて、葵はその身を強靱なる蒼龍のそれへと変えていく。互いに戦闘する準備を終えて……まずは葵が先手を仕掛ける。

龍の身体能力で間合いを詰め、正拳突きを一発思いつき振り抜く。風華は纏雷で強化した動体視力でその動きを見切り、腕を取ってその上でバク転をするように背後に回る。着地する際には尻尾を踏

みつけて反撃を妨害しつつ、首筋に向けて吹き荒ぶ風をぶつける。それを葵が踏まれなかった尻尾で弾いたことで、霧散した暴風が風華の身体を浮かせて尻尾から離した。

身体を翻し、葵は風華の方に向き直る。ついでに的を大きくするだけの龍化は解除した。力はある程度制限されるが、風華を相手にするならばやはり小回りの効く方がいい。

的が小さくなったことで、牽制のために撃った吹き荒ぶ風が外れて壁を深く抉る。風を再装填する隙を狙って、照準を合わせるために伸ばす左手に向けて上段蹴り。避けられるタイミングではなかったはずだったが、風華は雷上動で二歩分後ろに退がることで回避して見せる。

今度は風華が躲せないタイミングでの吹き荒ぶ風を三連で放つ。直撃すれば大怪我は避けられないその攻撃を、葵は上段蹴りの勢いを殺さずに身体を捻ることで再び上段蹴りを放つことで相殺した。

しばしの睨み合い。膠着状態が続く中で、風華は不意に葵に対して語りかけた。

「やっぱり強いね、葵は」

「それはどうも。しかし、何故今戦いを？」

オールマイトの言葉を聞いて、今よりも更に強くならねばならないと思った。ああ言われて行動に移さないと、違うと思った。だから風華は葵との戦いを望んだ。風華の知る中で、最も戦闘能力が高い相手は彼女だったから。

素晴らしいヒーローになれると、そう言われた。ならばその言葉を真実にするために、自分は努力しなければならぬだろう。そんな思いがあったことを、風華は正直に話した。

「なる程。そう言われたなら、確かに努力しないとイケませんね。いいでしょう！どこまでだって付き合いますよ！」

「ありがとう……流石、わたしの親友だよ。本当にどこまでだって付き合ってもらおうからね！」

言葉を交わすのは終えて、風華と葵は戦闘を再開した。夜が明けて疲労の限界になった2人が同時に寝落ちするまで、とても長い間戦い

は続いた。

## ワイルド・ワイルド・プツシーキャッツ

「とまあ……一昨日の件があつて。敵の動きを警戒して、例年使わせていただいていた合宿先は急遽キャンセル。行き先は合宿当日まで明かさなない運びとなつた」

「えー！」

合宿先が分からなくなるという相澤の言葉に、生徒達は不満の声を上げる。既に親に行き先を伝えてしまったという瀬呂や、使う予定だった合宿先を調べて楽しみにしていた風華などは、かなりのショックを受けていた。風華に関しては、当事者なのでショックを受ける筋合いはあまりないのだが。

「面白そうなたコだったのに……」

「マジかよ……親にもう言っちゃつてるよ」

「故に……ですわね。話が誰に、どう伝わってるかなんて学校側も把握し切れませんもの。思い切つたやり方ですが、スマートですわ」

「でも合宿自体はキャンセルしないの、マジで英断過ぎるだろ!」

「デク……てめエ何で逃してんだよ。こういう時には刺し違えてでも殺しとくモンだろうが」

「いやいやかつちゃん、無茶言わないでよ……」

「ちよつと爆豪! 緑谷と風華の状況がどんなだったのか聞いてないの!?! そもそも、公共の場での個性使用は原則禁止だし!」

「知つとるわだが骨は折れろ」

わいわい、がやがや。相澤の苛立ちが最高潮に達して強制的に終わらせられるまで、葉隠と爆豪の言い争いは続いていた。

こうして濃密だった前期は終わり、夏休み。林間合宿当日の朝を迎えた。

「え? A組補習いるの? つまり赤点取つた奴がいるつてこと? ええ!? おかしくないそれっておかしくない!? A組つてB組よりもずっと優秀なクラスなんじゃかつたっけ!? あれれれれえっ……」

「毎度ごめんなA組。コイツ最早、対抗心が疾患のレベルに達してんだ」

「物間、怖ア……」

「体育祭じゃあ、なんやかんやあつたけどさ。まア改めてよろしくね、A組」

集合場所に辿り着いて早々、風華はA組の面々に突つかかる物間の姿を見た。そして拳藤の早業で沈められる姿も。風華がこの光景を見たのは先日の終業式も含めて二回目だが、実際は結構な頻度で見られるありふれた光景らしい。

意識を刈り取られるのが、ありふれた光景……？

思っても口には出さない。変に突つかかってくる奴など、黙ってしてくれた方が助かるからだ。物間が拳藤に引き摺られてB組の列に戻される光景を見ながら、風華はその光景を頭の中から排除してB組女子陣の挨拶を受けるのだった。

「B組……よりどりみどりがよ……！」

「お前、ダメだぞそろそろ」

「切島君峰田君、A組のバスはこっちだぞ！席順に並んで乗りたまえ！」

B組の女子達をまじまじと見つめながら、峰田はそのレベルの高さに涎を垂らして喜んだ。人としてダメな域に達しようとしているぞという、切島からの冷静なツッコミも入る。そんな状況を知ってか知らずか、飯田からの催促も入った。

それでも峰田は興奮を抑えられないまま動こうとしなかったが、切島が風華の名前を出したことで正気を取り戻した。峰田にとっては最早、風華の名前は精神安定剤のような扱いであった。

「一時間後に一度止まる。その後はしばらく……」

「音楽流そうぜ、何か夏っぽいやつ！チューブとかモンゴル800とか！」

「バツカ野郎、夏といえばキャロルの夏の終わりが一番だろ！」

「終わんのかよ」

「しりどりの『り』！」

「り……りそな銀行！『う』！」

「う……ウン十万円！あつ……」

「はい、負けー！」

「ねえねえ、ポツキーを一本ちようだいな！」

「仕方ないにやあ……大サービスで二本あげる！」

「ワオ太っ腹あ！」

「みんな、席を立つてはいけないぞ！走行中は危険だから静粛にして立つべからずなんだ！」

「飯田君？君も立ってるけど……」

「人のこと言えないじゃん、天哉……」

「しまった……委員長たる者、率先して規範となる行動をしなければならぬのに！クソウー！」

「……まあ、今くらいはいいか」

騒がしいのを注意しようとして、相澤は出かけた言葉を喉の奥へと引つ込めた。わいわいと楽しく騒いでいられるのは今の内だけ。ならば、今くらいは楽しみの中に浸らせてやろう。そんな、せめてもの親切心からの判断であった。

そして、一時間後。休憩のために一時停車したバスは、パーキングエリアではない何処かに停まっていた。当然訝しがる生徒達だが、峰田だけはトイレを求めてもぞもぞと股を動かしていた。

「ここ、パーキングじゃなくね？」

「アレ？B組はいないの？」

「トイレ……何処……？」

この時点で、風華は何かロクでもない企みがあるのだろうかということを悟った。何をさせられるのかは知らないが、警戒するに越したことはない。周りの様子から何が始まるのかを予想しようと、辺りをぐるりと見回していると、相澤が「注目」と言っつて生徒達の注意を向けさせて話を始める。

「あの先生……？トイレ……」

「目的もなく、ただ合宿所に向かうだけでは意義が薄くなってしま  
うからな。……来たぞ」

「ようらいれいザー！」

「ご無沙汰してます」

ザツ……と足音がした方を振り返ると、ヒーローコスチュームを身  
に着けた2人組がそこにいた。そしてもう1人、恐らく一般人である  
う幼い子どももそこに。いきなりの登場に生徒達が唖然として固  
まっている、彼女らはその気不味い空気を知ってか知らずか自己紹  
介を始めた。

「煌めく眼でロックオン！」

「キュートにキャットにステインガー！」

「……」

「ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ！」

「猫……だったんだ」

「ウサギとかだと思ってたや」

バッチリセリフとポーズを決めて、自己紹介を成功させた2人の  
ヒーロー。風華はその決めポーズを見て、「自分がプロになったらあ  
あいうポーズ作ろうかな……」と考えた。どうやら心の琴線に触れた  
らしい。

「今回お世話になるプロヒーロー、『プッシーキャッツ』の皆さんだ」

「連名でヒーロー事務所を構える4名一チームのヒーローだ！ワイプ  
シ！山岳での救助活動を得意とするベテランチームだよ！キャリア  
はもう今年で12年にも……」

「心は永遠に18歳！」

「へぶっ……すいませんでしたー！」

キャリアまで言おうとしたところで、緑谷は顔面を抑えつけられて  
阻止された。アイアンクローを継続したまま、心はいつでも18歳と  
復唱させて刻み込ませる。

その焦りに焦った姿を見て、女子陣は「ああいう大人にはならない  
ようにしよう……」と心に決めるのであった。

「ちなみに、この辺一帯はウチらの私有地なんだけどね。あんたらの

宿泊施設はあの山の麓ね」

「遠っ！」

指差された先を見ると、そこは本当に建物などがあるのかと問い詰めたくなる程の緑であった。あまりに遠い道のりに、みんなで口を揃えてツツコミを入れる。流石にこの辺りで、みんなひしひしと嫌な予感を感じるようになってきた。

「じゃあ……何でこんな半端な所に？」

「いやいや……まさか、な」

「バス……戻ろうぜ？な？」

「現在時刻はAM9:30……早ければ、だいたい12時くらいには辿り着けるかしらん？」

「ダメだ……おい……！」

「戻ろう！早くバスに乗り込もう！」

「12:30までに辿り着けなかったキティはお昼抜きだからね！」

「そして、悪いが諸君……合宿はもう始まつてる」

「あんぎやああああ!!」

「やつぱり、ロクでもないことになったね」

「やるねえお嬢ちゃん！今みたいに、私有地につき個性の使用は自由だからね！……ここから三時間！自分の足で施設までおいでませ！このプツシーキャッツ謹製『魔獣の森』を抜けて！」

大慌てでバスに乗り込もうとした生徒達を、プツシーキャッツの片割れが個性で起こした山津波で飲み込んでいく。風華は土の中に埋まったクラスメイト達を風を操って引つ張り出し、そのまま流されていくのを防いでみせた。

抜けていけと言われた森の入り口に救出したクラスメイト達を置き、安全に着地させる。山津波に飲まれた瞬間に全員を助け出せた判断力、土を剥がした上で20人＋自分を浮かせられる出力と範囲、そしてしっかりと地に足付けた状態で降ろしてやれる操作精度。プロヒーローからお墨付きの言葉が出る程に、この時の風華は冴えていた。

こういうの初めてだし、張り切ったなあ……

風華は小学校、中学校とこういつた行事に参加したことがない。当時はまだまだ個性の制御が未熟であり、何かあった時に対処できる研究員が近くにいなくてはならなかったからだ。

中学校の修学旅行があったのは二年次で、風華が十分に個性を制御できるようになったと認められたのは三年次。ギリギリ、修学旅行に参加することは叶わなかったのである。それ故に、初めてのクラスのみんなとの宿泊学習ということで、風華はとても張り切っていた。今回いち早くみんなを救い出せたのは、その張り切りで精神がとても冴えていたからなのである。

「魔獣の森……？」

「何だ、そのドラクエめいた名称は……」

「雄英こういうの多過ぎやろ……！」

「文句ばつか言ってもしょうがねえや。何が出てこようと思ってくきゃねえだろ！」

「耐えた……オイラは耐えたぞお……！」

「あつ……実！止まって！」

いきなりの山津波にも、風に浮かせられたのにも耐えることができた。森の中ならばもう大丈夫だろうと、峰田は用を足せる場所を求めて腹を抱えながら走り出していく。その目の前に化け物が現れたのに気付いて、風華は峰田の足を止めさせようと叫んだが……遅かった。

「あつ……☆☆」

「ま……マジユウだー!?」

「静まりなさい獣よ、退がるのです！」

「口田ー！」

峰田を見つめて唸り声を上げる魔獣を遠ざけようと、口田が自身の個性を発動する。

口田甲司、個性『生き物ボイス』。その声で動物を従え、使役することができるとは……目の前の魔獣に対して、効いている様子がない。爪を振り上げてむしろ、口田を傷付けようとしていた。

土くれ……そうか！

魔獣の身体から崩れ落ちた土の欠片から、緑谷はその正体に気が付いた。同時に正体を看破した轟と爆豪、飯田も動き出す。

「しっかし、無茶なスケジュール組んだよね。子ども達耐えられるの？イレイザー」

「まア……例年なら二年の前期から『取得する予定のモノ』を、前倒しで取らせるつもりで来ましたので。どうしても、無茶をしなければならぬ部分が出てきますね」

緊急時における、個性行使の限定許可証。ヒーロー活動認可資格、その『仮免』を取らせるための無茶なスケジュール。

「敵が活性化した今……生徒達にも自衛の手段が必要になります。引き続きお願いしますよ、ピクシーボブ」

「お任せ！くうー、逆立ってきたなあ！」

「洗汰、行くよ」

「……ふん、くだらん」

ピクシーボブは魔獣を難なく撃破したA組の面々に鳥肌を立たせ、もう一人のマンダレイは連れ添っていた子どもと共に施設に帰還する。既に進んでいって見えなくなつたA組の進路を見つめ、子供……洗汰はくだらないと彼らの努力を吐き捨てた。

その表情には、確かな侮蔑が刻まれていた。

## 林間合宿：その1

「さて……この数を相手にどうする？」

「どうも何も、正面突破しかねエだろ！」

土と蔓で構成された大量の魔獣を前にして、風華はクラスメイトにどうやってこの森を抜けていくのかと聞いた。爆豪が全員を代表して真っ先にその話に噛みつき、また魔獣の方を見やる。

風華は自分の個性を使えば、魔獣の群れも鬱蒼と木々の生い茂るこの森もスルーできる。とはいえ協力する必要があるだろうし、自分一人だけがさっさとクリアしてしまうのも心証が悪い。ならば、自分はどう立ち回るべきなのか。

「なら、道を拓くくらいはしてあげるよ」

「おおっ！一気に木々を薙ぎ倒して……！」

「風華ちゃん、行かなくていいの？ウチらに協力なんかしなくても、風華ちゃんの個性ならどうとでもなるんじゃない？」

「確かに、雷上動なら一瞬だけだね。それでわたし一人だけゴールするってのは違うでしょ。ヒーローは助け合い、だよ」

吹き荒ぶ大風バンバーストームで進行方向の木々を薙ぎ倒し、一直線の道を拓く。そもそも道のり自体がとても長いものであるため、どちらにせよゴールまで凄まじい負担がかかるだろうが。それでもいきなり目の前に魔獣が現れるだとか、木々を乗り越えて進んで行かなければならないとかよりは幾らかマシであろうと風華は考えていた。

しかし、たったこれだけで妨害を全て排除できた訳ではもちろんない。ピクシーボブの土操作によって創り出された土壁や、脇道から湧いてくる魔獣がやはり道征く彼らを阻む。これらの妨害を全て乗り越えていかなければ、風華達がゴールまで辿り着くことはあり得ないのだ。

「土壁はわたしがどうにかするから、魔獣の相手は任せてもいいかな？」

「道造りをありがとう、鳴神さん！おかげでだいぶ楽になるよ！」

「その通り！さあみんな、突き進もう！」

「おう！」

脇道から湧いてくる魔獣は、耳郎や常闇の黒影が索敵して緑谷や爆豪などの火力自慢が迎撃。土操作による妨害は、轟が地面を凍らせることで氷の膜を張って対応。更にその上から、風華が風で土を散らすことで壁を創らせないようにする。残りの全員で討ち漏らしの排除や、背後からの不意打ちを警戒する布陣となっていた。

魔獣を倒し、土を散らし、そうして対応するのも一苦勞な妨害を幾度となく乗り越えて。A組のみんなが宿泊施設のところに向き着いた頃には、時刻はPM3:30となっていた。

「やアーつと来たにゃん」

「ハアツ……ハアツ……！やつと着いた……！」

「メチャクチャ長かった……鳴神が道の舗装やってくれてたのにこの体たらく……！あの距離で12時までに向き着けるとか嘘だろ!？」

「ごめんごめん！アレはウチらなら、だったね！」

「腹減った……死ぬう……！」

「実力差自慢……ちくしょうめ！」

「アハハ！取り敢えず、お昼は抜くまでもなかったねえ！」

数多の妨害を乗り越え、道なき道を征き。A組の面々はようやく宿泊施設まで辿り着いた。正直もつと時間がかかると思っていたとピクシーボブは言うが、ここまで散々苦勞させられたA組にはただの自慢にしか聞こえなかったであろう。

「私の土魔獣が、思ってたよりもだいぶ簡単に攻略されちゃったや。いいね君達……特にその男の子達とお嬢ちゃん。躊躇いのなさは経験値によるものかしらん？」

「あ、ありがとうございます……？」

「今の時点でこれとか、3年後がマジで楽しみになっちゃうじゃない！今の内にツバつけとこー！」

「やめてください」

みんな3年後が楽しみだからと、ピクシーボブはツバをつけておこうとして風華に阻止される。かなり厳しめのトーンで拒否されて分りやすく心にダメージを負うのを見て、相澤は変なモノでも見てし

まったかのように指を差した。

「マンダレイ……あの人あんなでしたっけ？」

「彼女、焦ってるのよ。適齡期的なアレで」

「適齡期と言えば……」

「言うな！」

相澤とマンダレイの会話を聞いて、緑谷は何かを思い出したかのように話題を振った。ここまでずっと一言も話さずに、流れを静観していた少年が何者なのかを尋ねたのだ。

「さつきからずつと気になってたんですけど、その子はどなたかの子さんなんですか？」

「ああ違う、この子は私の従甥だよ。洗汰！ホラ挨拶しな、一週間一緒に過ごすんだから」

「あ……えと、僕は雄英高校ヒーロー科一年の緑谷出久っていうんだ。よろしくね、洗汰君」

「ふんっ！」

「ああっ、緑谷君！おのれ従甥！よくも緑谷君の陰囊を傷付けたな！」  
「ちよつと洗汰!?何やってんの謝りなさい！」

「ヒーローなんざ目指してる連中とつるむ気はねエんだよ。邪魔だからさつさと帰れや」

「つるむ?!いくつだ君は?!」

緑谷に挨拶された洗汰は、その挨拶に対して股間を殴りつけることで返事をした。不意打ちで陰囊にダメージを負った緑谷は悶絶して蹲り、声にならない声を上げて倒れた。

緑谷をノックアウトした洗汰は、そのままスタスタと走ってこの場を去っていった。マンダレイが謝れと静止するのも聞かず、そのまま森の奥へと消えていく。その際に吐き捨てた捨て台詞は、とても幼い子どものものとは思えない程にマセていた。

「マセガキめ」

「お前も似たようなもんじゃねえか？」

「ああ!?誰が似てるだとオためエ轟イ!?!」

「悪い。でもやっぱ似てるな」

「茶番はいいからバスから荷物下ろせ。今日はもう荷物を置いたら夕食の準備。その後に入浴してから就寝だ。本格的な合宿のスタートは明日からになるぞ、さあ早く用意しろ」

用意と言っても、既にプツシーキャッツの面々が用意してくれていた作り置きものを配膳したりするだけなのだが。

相澤に急かされて、みんなは先に着いていたバスから自分の荷物を運び出す。指定された男子と女子の部屋にそれぞれ別れ、そこに荷物を置いて食事スペースへと移動した。

ちなみに、男子の部屋は大部屋。女子の部屋は何人かで1組となる小部屋である。風華の同室はA組からは耳郎と葉隠、B組は塩崎、角取、取陰の6人部屋となっていた。

「いただきます！」

みなで手を合わせて、朝食ぶりの食事を思いつきり頬張る。大皿に盛られたおかずを取り、丼いっぱい盛られた白米を掻き込み、ご飯が食べられるという喜びを五臓六腑に染み込ませていく。泊まる部屋のことなどで話題は尽きぬも、彼らの箸が止まることは微塵たりともなかった。

「へえ！女子部屋は普通の大きさなのか！」

「男子の大部屋ってどんな感じなん？あとで見に行ってみてもいいかな！」

「おー、こいこい！」

「つしやあ、お部屋訪問だあ！」

「魚に、お肉に、お野菜……！贅沢の極みなり！」

「……取り過ぎじゃない？食べ切れるの？」

「そうだと麗日君！たくさん走って疲れているのはよく分かるが、よそののならば食べ切れる分だけにすべきだ！」

「まあ、たくさん食いたくなる気持ちは分かる！」

「美味しい……お米が美味しい……！」

「五臓六腑に染み渡る……！ランチラッシュの飯に匹敵する粒立ち！」

「いつまでも噛んでいたい！まさかこの食感……土鍋!？」

「土鍋なんですか!？」

「そだよー。ていうか、お腹空き過ぎてテンションおかしくなってるね」

空腹に染み渡る旨い飯の味。食事の世話を焼くのは今日だけだし、お腹いっぱい食べなとおかわりを用意してくれる。それもすぐにもんなが群がることでなくなっていく。

「洗汰、そこのお野菜運んどいてね」

「フン……」

「気になるの？」

「えっ？ああ……うん。まあね」

「今は見守るくらいにしときなよ。知らない相手にでしゃばってこられても、気分悪いだろうし」

「うん……そうだね」

洗汰のことが気になってる様子の緑谷。風華は余計な真似をして悪感情を抱かれないようにと釘を刺しておく。

一応、納得はしたようだが。それでもやはり気になるようで、緑谷は食事時間中ずっと洗汰のことを目で追っていた。

く

「まア、まア……飯も美味しかったですけどねえ、ぶつちやけこのメーンイベントに比べりゃあどうでもいいことなんスよ。求められていんのってそこじゃないんスよ。その辺のコト、オイラはちゃあんと分かかってるんスよ……」

「二人で何言ってるの、峰田君……」

「求められているのは……この壁を隔てた向こうの景色なんスよ……」

食事の時間が終われば、次は入浴時間。何やら様子のおかしい峰田が、女子の入浴している隣の壁を凝視しながら不穏なことを呟いていた。壁に耳を当てて、隣の声を聞き取る。「熱いお風呂が気持ちいいねえ……」「こんなトコに温泉があるなんてサイコーじゃん……」などと、入浴を楽しむ女子陣の声が聞こえてくるのだ。

「ホラ……いるんすよ。今日日男女の入浴時間をズラさないなんて、それはもう事故……そう、事故なんすよ……」  
「……！」

聞こえてくる女子達の声。その壁を隔てた先で行われているであろう戯れを想像し、誰かがゴクリと生唾を飲んだ。峰田の発言により情景を想像させられた面々は、己の煩惱を恥じて振り払うかのようにブンブンと首を振る。

「峰田君、やめたまえよ！君がしていることは己も女性陣も貶める耻すべき行為だぞ！」

「やかましいんすよ……！壁つてのはなあ！超えるためにあるんすよお！プラスウルトラア！」

「速っ!!」

「何い!?!というか校訓を穢すんじゃないよ！」

この時。この時のために、峰田はここまでの長く険しい道のりを越えたと云っても過言ではない。

もぎもぎを壁に貼り付けて、ボルタリングの要領でスイスイと壁を登っていく。一つ一つと登っていくたびに涎が垂れ落ち、煩惱を更に加速させる。こうなってしまうえば、いつものように風華の名を出したところで峰田は止まらないだろう。このまま連帯責任で女子達からの折檻を食らってしまうのか——と男子達が覚悟したその時、救世主は現れた。

「洗汰君!?!」

「ヒーロー以前に……人としてのあれこれから学び直せ！」

「クソガキいいイイ!!」

「ふん……自業自得だ」

「やっぱり、最低なこと考えてたわね」

「ありがとーね、洗汰くーん！」

「わっ……」

「あっ……危ない！」

女子陣の尊厳を守るため、峰田をしつかりと突き落としてやった洗汰。呼ばれて振り向き、女湯の方を向いてしまったのが悪かった。

うら若き大勢の乙女の裸体。年端も行かない無垢なる男児には、とても刺激の強い光景であったのだろう。あまりの衝撃に深くのけぞってしまった冼汰は、そのまま台から足を踏み外して落下しようとしてしまった。

いち早く気付いた風華が風で彼を浮かせ、頭から落ちていくのを防ぐ。それをフルカウルで落下地点に先回りした緑谷がすぐさまキャッチ。失神してしまった彼を、医務室まで運んでいくのだった。

ちなみに、同じく落下した峰田の方は飯田が何とかしてくれた。落ちてくる尻を顔面で受けたことで凄まじい顔になっていた。その表情はさながら、潰れた男梅のようであったという。

「落下の恐怖で失神しただけだね。イレイザーから一人性欲の権化みたいな奴がいるって言われてたから、見張ってもらってたんだけど……最近の女の子って発育いいからねえ。助けてくれてありがとう」とにかく、何ともなくて良かったですよ」

「よっぽど慌ててくれてたんだね」  
「……冼汰君は、ヒーローに否定的ですよね」

本人が気を失っている内に、気になっていたことを聞いてしまおうと緑谷は口を開く。流れをぶった切っていきなり聞かれたマンダレイは、当然のように「ん？」と聞き返した。

「僕の周りは昔から……あ、僕もなんですけど。ヒーローになりたいって人ばかりで。この歳の子ならヒーローに憧れてても何らおかしくないと思うんですけど、珍しいな……と思って」

「そうだね……当然、世間じゃあヒーローのことをよく思っていない人もたくさんいるけど。普通に育ってれば、この子も君の周りの子達みたいにヒーローに憧れてたんじゃないかな」

「普通に……？」

「そう。マンダレイのいとこ……冼汰君の両親ね。彼らはヒーローだったんだけど……2人とも、殉職しちゃったんだよ」

殉職……その言葉が意味するものに、緑谷は思わず息を呑んだ。つまり冼汰は、天涯孤独ということになるのだから。

冼汰の両親、『ウォーターホース』という2人のヒーローは二年前、

凶悪な敵から市民を守るために戦い、そして殉職した。ヒーローとしてはこれ以上ない程立派な最期であったし、その死は市民を守っての殉職という名誉ある死だった。

しかし……物心ついたばかりの子どもにとつてはそんなことは関係ない。幼い子どもにとつては、両親こそが世界の全てだからだ。

『自分を置いて、逝ってしまった』

それなのに、世間はウォーターホース夫妻をととても良いこと、素晴らしいことをしたとひっきりなしに褒め称え続けた。遺された息子とのことは、何一つ配慮もせずに。

「私達のこと、よく思っていないみたい。他に行くところもないからおとなしく従ってるだけ……って感じ。洗汰にとつて、ヒーローってのは理解できない気持ち悪い人種なのかもね」

——オールマイトが……あのゴミが！救えなかった人間などいなかったかのよう、ヘラヘラ笑ってるからだよなあ！

思い出すのは、死柄木の言葉。

人間、誰もが全く同じ価値観を共有できるということはあり得ない。とてもありきたりで、無責任な言い方になるが……この世の中には色々な考えの人がいるのだ。

立て続けに思い知る価値観の相違。緑谷は聞かされた洗汰の境遇に対して、何の言葉も絞り出すことができなかった。

「それより君……早く服、着な？」

「あつ、すみません……」

## 林間合宿：その2

翌日、AM5:30。まだ日が昇ってすぐという早い内から外に集められた生徒達は、寝惚けた瞼を擦り乱れた髪を手櫛で整えながら相澤が話し始めるのを待っていた。

「おはよう諸君」

「おはようございます……」

本日より、林間合宿が本格的に始まる。

目的は全員の個性及び自力の強化、そしてそれによるヒーロー仮免の取得。より具体性を増しつつある敵の脅威に対して、立ち向かえるようにするための準備である。

「爆豪、こいつを投げてみる」

「個性把握テストの時の……?」

相澤は爆豪にソフトボールを投げ渡した。それは個性把握テストの時に、ソフトボール投げの種目で使用されたもの。

爆豪のその時の記録は、705.2mである。そこからおよそ三ヶ月が経過した現在、いったいどれ程の成長を果たしているのか……それを確かめてみると相澤は言った。

「おお、成長具合か!」

「この三ヶ月、いろいろあってめっちゃ濃密な期間だったしな!1kmとかいけるんじゃない?」

「いったれー!爆豪ー!」

「んじゃ、よつこら……くたばれエ!」

くたばれ……

グツと力を入れて、相変わらず綺麗なフォームでボールを投げる爆豪。爆風の衝撃に乗って急速に打ち出されたボールは、瞬く間に森の奥深くへと消えていった。掛け声に関しては、もう言及しない。

そしてやがて、相澤が手に持ったタブレットに今の一撃の記録が表示される。そこに映し出された記録は、とても意外なものであった。

「……709.6m」

「あれ……?思ったより、全然……」

「変わってないね」

「入学から今日まで、約三ヶ月くらい……君達は確かに成長してはいるが、それはあくまで精神面や技術面の話だ。あとは……多少の体力的な成長はしているかな？そして、『個性』そのものは今実演してみせたように大して成長していない」

——だからここで、『個性』を伸ばす。

この三ヶ月で、A組の生徒達は一年生にはできないような多くの経験をして成長した。脅威を前に立ち止まらず動ける精神や、自分の個性を活かすための応用法や戦法など。そしてあとは成長期なども加味した、多少の肉体的な成長。

しかし今上げられたように、そもそもの個性自体が強くなったという訳ではない。緑谷に関しては確かに出力の向上が目覚ましいが、彼はそもそも自分の個性を100%で扱えないため、個性が強くなったとは言い難い。風華も<sup>レッドゾーン</sup>赫炎領域への突入による限界突破ができるが、それも地力が上がったとは言えない。

仮免試験は、本来ならば二年生に上がってから挑戦するものである。それを前倒しして挑戦することになる以上は、今のままの個性出力では力不足となってしまうのだ。

「死ぬ程キツイので……くれぐれにも死なないようにな」

「上等……」

「やってやろうじゃないの」

「ここで……更に強くなってみせるー！」

相澤が脅すように言っても、それに対してA組の生徒達は真剣にぶつかっていく。

ヒーローには強さが要る。どんなに強大で凶悪な敵が相手でも、それに屈することなく敵を挫き人々を救えるだけの力が。なればこそ、力を高めるための訓練に対して妥協はできない。誰もが真摯に、そして真剣に個性強化訓練に臨んだ。

「個性を伸ばす……!?!」

「そうだ。A組はもう始めているぞー!」

A組が個性伸ばし訓練を始めてから少し時間を空けて、B組の生徒達も担任のブラドキング先生の号令の下訓練を始めようとしていた。

前期では話題や世間の関心をいろいろとA組に持つていかれてしまっていたが、後期ではそれを逆転させてみせようと張り切っている。生徒を想うその姿を見て、B組の生徒達は不甲斐ない教え子で申し訳ないと闘志をたぎらせるのであった。

「でも、単に個性を伸ばすって言っても……21名21通りの個性があるんですし……何をどう伸ばしていくのかとか分かんないんですけど……?」

「確かに、具体性が欲しいよな!」

「それに関しては、ちゃんと説明するさ!」

筋繊維が酷使することで破壊され、治る時により太く強靱になるように。個性も使い続ければ強くなっていき、でなければ衰える。

即ち、やるべきことは一つ。

「そう……限界突破だ!」

「何だこの地獄絵図……!?!」

「もはやかわいがりですな!」

「個性を短期間で伸ばすなら……これくらいはまあ普通にやりますね」

ブラド先生によって示された、A組が個性伸ばし訓練をしている様子。悲鳴や嗚咽がひっきりなしに飛び交うその光景は、まさに地獄絵図と形容して差し支えないものであった。

「許容上限のある発動形は、その許容上限を底上げしていく。異形型やその他の複合型は、個性に由来する器官や部位の更なる鍛錬。通常ならば、肉体の成長に合わせて行うものだが……」

「いかんせん時間がないものでな。B組もさっさと準備しな」

「でも……私達が入ると42人だよ?そんな大人数の個性、たった6人だけで管理できるの?」

「だからこそ、彼女らさ」

生徒数はA組とB組を合わせて42名もいるのに対して、それを引率する大人は先生とプロヒーローを合わせても6人しかいない。たったそれだけの人数で管理し切れるのか?という疑問は、当然ながら出てくる。

そして何か疑問があるのならば、その答えも当然出てくるものだ。

「煌めく眼でロックオン!」

「猫の手手助けやって来る!」

「どこからともなくやって来る……」

「キュートにキャットにステインガー!」

「『ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ!』」

「完全Ver.!?」

ラグドールの個性『サーチ』で全員の情報を丸裸にし、ピクシーボブの『土流』でそれぞれに適した鍛錬の場を形成。マンダレイの『テレパス』は離れた所にいる人間にもアドバイスができる。

「そこへ我が殴る蹴るの暴行よ……!」

「いや。いろいろとダメだろ!」

「単純な増強型の個性を持つ者は、全員我の元へと来い!我ーズブートキャンプは……もうとっくに始まっているぞ」

「ひい……!」

増強型の個性を持つ者には、虎の我ーズブートキャンプによる肉体的な鍛錬が施される。ちなみに現在餌食となっている緑谷は、全身から滝のように汗を吹き流しながら喘いでいた。

古い……そしてキツそう……!」

全員の意思が、ここでシンクロする。先ほど例えに出していたように、これで何度も何度も筋繊維を千切っていくのだろう。息も絶え絶えな緑谷からその内容を想像し、グツと息を呑んだ。

「さあ今だ!撃つてこい!」

「はい……! 『22%』デトロイトスマッシュ!」

「ようし、まだまだキレキレじゃないか!筋繊維が千切れていない証拠だよ!」

「イエッサー!」

「声が小さい！」

「イエツサア!!!」

「ノリが怖え……!!」

「おいおいプルスウルトラだろお……!?!しろよ!ウルトラア!」

この人だけ、性別もジャンルも何もかもが違うんだよなあ……B組の意思は再びシンクロした。

雄英高校はとにかく忙しい。他にも多くの生徒を預っている以上は、ヒーロー科1年だけに人員を割くということは難しい。それ故にブッシーキャッツの4人の実績と、広範囲のカバーが可能な個性は短期間での底上げに最も合理的だ。

「ほらほら、もっとたくさん発電しな!上鳴君から吸収することも忘れちゃいけないよ!」

「分かって……ますよ……!」

「ウエ……ウエーイ……」

「喋ってないで手を動かす!地力が強くなるからこそ、奥の手が活きてくるんだからね!」

風華の訓練内容は発電力の底上げ。風の操作に関しては今の時点でも十分に強力と呼べる水準に達しているため、空気よりも限界が来るのが早い電気の方を強化していくのだ。

赫災領域なら発電力の弱点は解消できるが、それでは意味がない。素の状態でも、強い電力を創り出させてこそその赫災領域にするのだ。そのため継続して発電をしつつ、同じく電力の許容量を増やすために発電を行なっている上鳴から、創った端から電力を根こそぎ貰っていく。そうやって、同時に帯電量も増やしていく。

「電気……アホになってる暇はないよ!」

「ウエイツ!」

「さあさあ、頑張れ若人達よ!何かあったら私に声掛けてね!」

「はい!」

「世話を焼くのは今日だけだつて、昨日にちやんと伝えたよね!?」  
という訳で自分で食べるものは自分で作れ!」

「いえっ……さあ……」

「アツハハハ! 全員、全身の筋肉ブツチブチに千切られたねえ! だからと言つて、雑にねこまんまなんて作つちやダメだよ!」

「確かに……災害時など、避難先で消耗した人々の腹と心を満たすのも救助の一環! 流星は雄英やることに無駄がない! 世界一美味いカレーをみんなでつくろうじゃないか!」

「お……お……」

プツシーキヤツツが用意してくれた材料を前にして、その狙いに気付いた飯田が生気を少しだけ取り戻して号令をかけた。心身ともに消耗し切っているみんなの返事は、力ないものであったが。

そんな光景を見て、相澤は「相変わらず都合よく解釈してくれるし、飯田って便利だなあ」と口には出さずとも思うのだった。

「轟ー、こつちに火イちようだい!」

「爆豪お前爆発で火イ点けれね?」

「できるわクソが!」

「ええ……」

「まったく……皆さん火を起こせる方々に頼ってばかりでは、火の起こし方を学べませんわよ!」

「ヤオモモ……人のこと言えなくない?」

「いや、構わねえよ……」

「わー、ありがとー!」

和気藹々と、役割分担をしながらみんなで協力してカレーを作っていく。風華は風で火が消えないように、空気を管理する役割を担った。

みんなでわいわいと料理をするのは、とても楽しいものだと思つていて思う。辛い訓練の初日を乗り越えた後ということもあつて、風華の表情は終始穏やかなものであった。

「いただきますーす!」

「店とかでコレ出されたら微妙だけど! 状況と苦勞が相まってメチャ

クチャ美味え！」

「切島言うな！野暮だぜ！」

「ヤオモモがつつくねー！」

「ええ、私の個性は脂質を様々な原子に変換することで創造を行いますので。たくさん脂質を蓄えればそれだけ、たくさん物を創造できるのです」

「うんこみてえ」

「瀬呂オ！今、何食ってんのか分かってて言ったんだろうなお前え！」

カレーを食べている時に、下を連想させる話題を出すことは絶対にNGである。その禁を破ってしまった者には、同席する全員からの厳しい制裁が下されるのだ。

「何が個性だ……くだらん！」

「あれ、冼汰君……？」

「追って行ったら？一人じゃ危ないでしょ」

「うん……そうだね」

食事スペースを抜け出して、冼汰は森のどこかへと消えていく。その場面を目撃した緑谷は、風華に自分が食べ終わった皿を渡し彼の分のカレーを持って冼汰を追いかけた。

森の中を抜けて、小さな洞穴を抜けて。ようやく姿が見えてきた冼汰は、崖の前で座り込んでいた。

「……お腹空いたでしょ？カレー、持ってきたけど食べるかい？」

「っ……!?てめエ、何故ここが……!？」

「追いかけてきたんだよ。足跡を追ってね。ご飯も食べずにどっか行っちゃったから、心配だね」

「いいよ、いらねえ。お前らとつるむ気なんてねえと言っただろ。俺の秘密基地から出て行け」

何が個性だ。そんなに力をひけらかしたいのか。

気持ち悪いと、冼汰はハッキリと言った。ヒーローに対する嫌悪感  
は筋金入りのようである。

「君の両親ってさ……水の個性のウォーターホースなんだよね？」

「……マンダレイか!？」

「いや、予想。話は聞いてたけど、名前は出してなかったから情報を元に推理したんだ。……どうやら正解だったみたいだね」

「うるせえよ……頭イカれてるよ、みんな」

馬鹿みたいにヒーローだとか、敵だとか言って殺し合って。個性だとか言って見せびらかしてるからそうなるんだと。洗汰は自分の両親を馬鹿にするかのように言った。その声は……込み上がる感情を抑えつけようとするかのように、小刻みに震えていた。

ヒーローだけではない。洗汰が憎んでいるのは個性そのもの……この超人社会そのものなのであると緑谷は理解した。

「何だよ！もう用ないんだろ!? だったら早く出てけよ！」

「いや……友達だ。そう、僕の友達さ。親から個性を引き継がなくてさ。」

「は……？」

「先天的なもので、稀にあるそうなんだけどね」

友達の話ということにして、緑谷は自身の経験を洗汰に向けて話す。

ヒーローに憧れたが、そもそも今の社会でヒーローとは個性を自由に行使して治安の維持に努める者を指す。個性がなければ、そもそもヒーローになるためのスタートラインに立つことすらこの社会では許されないのだ。

だけど、受け入れられなかった。しばらくはそのことを受け入れることができずに、ずっと個性を出そうと練習をしていた。

「物を引き寄せようとしたり、口から火を吹こうとしたり……」

「……」

「個性に対して、いろいろな考えがあるのは当たり前のことだから。一概には言えないけど……そこまで否定するのは、君が辛くなるだけだと思っよ」

「うるせえ！何も知らない癖にズケズケと……！さっさと出てけよ！  
てめエみてえな奴、顔だっけ見たくねエんだよ！」

言葉は響いた、だからこそその拒絶。もう今何を言っても彼に届くこととはないだろうと、緑谷は取り留めのないことしか言えなかったこと

を謝罪して、カレーを置いて去っていった。

「うるさいんだよ……どいつもこいつも……！」

その声は、震えていた。

く

「疼く……疼くぞ……！早く行こうぜ……！」

「まだ早いよ。それに、死柄木の奴は派手なことはしなくていいって  
言ってたでしょ」

「ああ……急にボス面始めやがってな」

今回はあくまで狼煙だ。

「やるなら経験豊富な少数精鋭……決行は12人が全員揃ってから  
だ」

虚に塗れた英雄達が地に堕ちる……そんな輝かしい未来のための。

## 林間合宿：その3

3日目、昼。

「補習組、動きが止まってるぞ」

今日も昨日と変わらず、地獄の個性伸ばし訓練の続きである。期末テストで赤点を取って補習になった5人は、眠気と取れない疲労で動きがほとんど止まってしまっていた。

「オス……！」

「すいません……すっごい眠くて……！」

「昨日の補習が……」

「だから言ったら、キツいつてな」

上鳴と砂籐は許容量が直接パフォーマンスに関わるため、その上限の底上げ。その許容量を上げるためには、反復して使い続けるのが基本だ。

瀬呂は出せるテープの量の増加に加え、テープ自体の強度や射出速度の強化。芦戸も溶解液を長時間出し続けると、皮膚が融解して自傷してしまうので耐久力の強化。切島は筋力トレーニングや攻撃を受けることで硬度上げとの相乗効果を狙っていく。

「そして何より……期末テストで露呈した立ち回りの脆弱さ！お前達が何故他より疲れているか、その意味をしっかりと考えて動け！そして……麗日と青山！」

「はい……？」

「お前達もだ。赤点こそ逃れていたが、それでもギリギリだったぞ。30点が合格ラインだったとして、35点くらいだ。」

「心……外……☆」

何をするにも、意識しておくべきは己の原点。何のために汗水垂らして、何のためにこうしてグチグチと言われているのか常に頭に入れる。相澤は既にフラつき始めている生徒達に檄を飛ばす。

向上というのは、そういうものなのだ。

「そういえば相澤先生、もう3日目ですけど」

「言ったそばからフラつくな。何だ？」

「あ、いや……今回はオールマイトとか、他の先生方は来ないのでしょうか？」

合宿前にも言っていたが、今回は敵に動向を悟られないようにするために人員は最低限。出先のプロヒーローもなるべく少人数で済むように、把握力に優れた個性を持つプッシュシーキヤッツを選んだ。

オールマイトに関しては、その殺害が敵連合の目的の一つであると推察されている以上は来てもらう訳にはいかない。その目的を実行するために、生徒が巻き添えを喰らう恐れがあるからだ。

「良くも悪くも、目立つからなあの人……」

「悪くもの割合、メチャクチャデカそう……」

「あ、そうそう！それよりみんな、今日の夜はねえクラス対抗肝試し大会を開催するよ！すっかり訓練した後は、すっかり楽しもう！飴と鞭は使い分けが大事だよ！」

「ああ……そんなのあったね」

「怖いのだ……」

「イベントらしいこともあるんだな」

「対抗ってトコが気に入ったね」

「という訳で！みんな全力で励みな！」

「イエッサア！」

鞭の後には飴が待っていると分かれば、みんなのやる気もいくらか取り戻されていく。ちよつとだけ生氣と元気が戻ってくるのであった。

「いつまでも……ウエイ……」

「電気……進歩がないって相澤先生に怒られるよ」

く

「爆豪君、包丁使うの上手いね!？」

「ああ!?意外とは何だためエ包丁の使い方に上手いも下手もねエだろうがクソが!」

「出たよ久々の才能マン」

「お前変なところで多才だよな」

「オールマイトに何か用あんのか？ さつき相澤先生に質問してただろ」

「うん……洗汰君のことだね」

「だれだ？」

「えっ、あの小さい子……っっていない!？」

轟が知らないと言うので見てみると、洗汰はもう姿が見えなくなっていた。恐らくはあの秘密基地に行ってしまったのだろうと緑谷は推測する。

洗汰にどう声をかけるべきか、緑谷はいい答えを出せずにありきたりなことしか言えなかった。だからこういう機会を多く経験しているようなオールマイトに質問してみたのだが……合宿に参加する訳にはいかなければ仕方がない。緑谷はその代わりに、轟に質問をぶつけてみることにした。

「……場合による」

「それはそうだけでも……!」

素性も分からない通りすがりがいきなり正論を言ってきたても、それは煩わしいだけだ。大事なのは何をしたら、何をしてる者に言われるか。

言葉単体で動くならば、所詮はその程度の重さというだけで。言葉には常に、行動が伴うものであると轟は締め括った。その言葉を聞いて、緑谷はオールマイトと初めて出会った時のことを思い返す。ワン・フォー・オールを継承するきっかけとなった、あの時のことを。「そうだね……確かに。通りすがりに何を言われたって、煩わしいだけだね」

「お前が、そいつのことをどうしたいのかは知らねえけどよ。デリケートな話題にズケズケと首を突っ込むのは危ねえぞ。お前意外と、そういうトコ気にせずにつっ壊してくるからな」

「なんか……すいません」

「そこの君達、手が止まっているぞ！ 最高の肉じゃがを作る作業に戻りたまえ！」

飯田からの注意を受けて、2人は話すことを止めて肉じゃが作りの作業に戻っていった。爆豪の意外と器用だった手先や風華の空気操作による絶妙な火加減調整などがあって、肉じゃがは素人作品とは思えない程美味しく出来上がるのだった。

「さて……腹が膨れりや、お次は……!?」

「肝試しー!」

「その前に、大変心苦しいんだが……補習連中はこれから俺と補習授業だぞ」

「嘘だああああ!!」

芦戸の慟哭が響き渡る。何とか肝試しに参加しようと抵抗する補習組であったが、相澤に捕縛布であつという間に捕獲されてしまった。そのままズルズルと引き摺られて連行されていく。勘弁してくれと泣きながら身を振るのにも、相澤が聞く耳を持つことはなかった。

「すまん。日中の訓練が思っていたよりも疎かになってたから、こつちを削つて補う」

「勘弁してくれええ! 試させてくれええ!」

「風華あ! 助けてえ!」

「……ままならないものだね」

風華は見捨てた。涙目になっている芦戸達5人が引き摺られていくのを見送ってから、肝試しのペアを決めるためのクジを引く。ペアとなったのは緑谷であった。

ルールは以下の通り。

先行、脅かす側であるB組は森の中でスタンバイしてA組が来るのを待つ。A組はクジで決めた二人一組になって3分おきに出発する。一回りできるルートの中に、自分の名が書かれた札が置いてあるのでそれを取って戻ってくる。

驚かす側は、直接の接触は禁止。個性を活用した多種多様な驚かしネタを披露してくるであろう。そうした創意工夫の元、より多くの人数を失禁させた方が勝者となるのだ。

「闇の狂宴……」

「また言ってる……」

「賑やかしメンバーがいないから、みんな神妙な空気になってるね」

「成る程……競争させることでアイデアを推敲させその結果、個性の使い方に更なる幅が生まれるという訳なのです！流石は雄英……何という抜け目のなさだ！」

轟とペアになった爆豪や、尾白とペアになった峰田がそれぞれ交代を強請るなどのアクシデントはあったが。それは尾白のプライドが深く傷付いたくらいで、大した問題にはならなかった。

「それじゃあお次ー、行ってこーい！」

「怖いよお梅雨ちゃん、そこかしこでめっちゃ悲鳴上がってるよお！」

「響香ちゃんと透ちゃんね。私は平気だから一緒に手を繋ぎましょ、そうしたら少しは紛れるわよ」

「カツカツカ……小大、お前の脅かし今のところ全員がビビってたぜ」

「体張るなあー！」

「ん……」

「爆豪と轟とかマジでウケたよねー」

森の中に隠れて、やって来るA組を脅かしていたB組の面々。思いの外反応の良かった自分達のアイデアを称賛し合っていた。特に轟と爆豪のペアは反応が良く、普段クールなキャラで通っている轟の驚いた表情などは一生額縁に入れて飾っておけるレベルのものであった。

そして、違和感。轟と爆豪が通っていった後から漂い始めた煙や焦げ臭さを訝しむ。驚いたあまりに爆豪辺りが個性でも使ったのか……そう言って冗談めかそうとしたところで、骨抜が倒れた。

「骨抜!?……っ、唯、吸っちゃダメだこの煙！」

「んっ……!?!」

「有毒だよー！」

骨抜が倒れたのを見て一瞬驚いたが、拳藤はすぐに落ち着きを取り戻して小大を自身の手で包み毒煙を吸わせないようにする。同時に火の手が森中から巻き起こり、黒煙を吹き上がらせた。

「なに……？この、焦げ臭いの……」

「黒煙……何で？」

木々を燃やして回りながら、茶毘は持ち場に回った仲間達に誰に言うでもなく告げた。

——ヒーローの威信を、地に墮とせ。

「始めるぜ……敵連合、開闢行動隊」

魔の手は黒煙を疑問視し、全員を一塊にして警戒に当たっていたピクシーボブにも及んだ。背後からの不意打ちを後頭部に食らい、血を流して倒れるピクシーボブ。倒れた彼女を踏みつけにして、敵は嘲るようにニヤリと笑った。

「邪魔な飼いやんだから、始末しないとね」

「何で……万全を期したんじゃないのかよ！何で敵が出てきてるんだよあ!？」

「ピクシーボブ!？」

「そうだ、出久……洗汰君は!？」

風華に言われて、緑谷はハツとした。今の洗汰は一人で秘密基地にいるはずであり、そこに彼を守るものは何一つとして存在しない。

もし、そこに敵が来ていたら？洗汰は何も抵抗できずに、悪意にその命を奪われるだろう。そんな最悪の事態を起こしてはならないと、緑谷はマンダレイに洗汰の居場所を知っていると伝えて彼の元へと一目散に駆け出した。

「マンダレイ！僕、洗汰君の居場所知ってます！」

「っ……分かった、任せていい!？テレパスで緑谷君のことは伝えておくから!」

「ありがとうございます、行ってきます!」

「虎、わたしは出火元を探してきます。アレを放置してたら、中にいる

みんなが危ない……！わたしの個性なら飛んですぐに探せます！」

「そうか……ならば、任せていいか!?この敵共は我々が何とかする！」  
「分かりました、お願いします！」

緑谷が駆けていくのと同時に、風華も出火の原因を探して空を飛んだ。自分ならば毒の煙を吸い込む心配もないし、空気操作で燃えるだけの酸素を回収すれば消火もできる。火元を探す役目としては適任であろうと自ら申し出た。

「おっと……行かせないわよ！」

「ぐっ……磁力か！こんなもの……効かないよ！」

「あら、逃げられちゃった」

「いいさ、あれは茶毘が何とかするだろう。ご機嫌麗しゅう……雄英高校の諸君！我々は敵連合、開闢行動隊！」

飛行して森に向かおうとする風華に、サングラスを着けたオカマの敵が手に持った金属製の長い得物を向けた。すると、飛んでいた風華の身体が得物に引き寄せられていく。

風華はそれを磁力によるものと看破し、電気で磁力を相殺することで難を逃れた。そのまま森の中へと消えていった風華を見て、オカマの敵……マグネは口惜しそうに口笛を吹いた。

そして、もう一人のトカゲのような姿をした敵によって自己紹介が為される。彼らは自分達のことを『敵連合開闢行動隊』と称した。

「どうする？この子の頭潰しちゃう？」

「させぬわっ、この……！」

「まあ待てマグ姉。虎も落ち着け！ヒーローの生殺与奪は全て、ステインの仰られた主張に則って行われるべきもの！まだその確認ができていない以上は殺すには早い！」

「ステイン……当てられた連中か！」

飯田がそう言うと、トカゲは彼の方を殺意に満ちた目で睨みつける。保須市にてステインの終焉を招いた一人である飯田に対しては、確実に殺すつもりで来たのだと告げた。

「申し遅れたが、俺の名はスピナー。ステインの夢を紡ぐ者だ」

「虎！他の生徒の安否はラグドールに任せて、私達はコイツらをどう

にかしよう！委員長に従ってみんなは逃げて！」

「しよ……承知致しました！みんな、行こう！」

「お、おお！」

布に包まれ、隠れていた得物を抜いたスピナーとマグネ。重量を感じさせる巨大な金属の棒と、無数の刃物がベルトや鎖で繋ぎ合わされた歪な大剣がその姿を露わにする。

ヒーローと敵……両者が臨戦態勢を取ったことでこの場は、肌を指すような緊張感に包まれた。マンダレイの指示で、飯田が場を離れた2人以外を施設まで避難させていく。生徒達の姿が完全に小さくなって見えなくなったところで、マグネが口を開いて2人を挑発した。

「アンタ達もすぐ、この飼い猫ちゃんみたいにしてあげるわよ。今回はそれが、お仕事だからね」

「どうでもいいが、貴様らなあ……！その倒れてる女……ピクシーボブは最近、婚期を気にし始めていてなあ。女の幸せ掴もうって……いい歳なつちまつたけど頑張ってたんだよ！」

「ハア……？」

「そんな女の顔をキズモノにして……男がヘラヘラ笑ってんじゃねえよ！」

「ヒーローが人並みの幸せを夢見るか！」

虎の怒りと、スピナーの嘲り。この二つによって戦いの火蓋は切つて落とされた。雄英高校……そしてプロヒーローの威信を賭けた戦いが、ここに始まりを告げる。

## 林間合宿：その4

「あうう……肝試ししたかったよお……!」

「飴と鞭って言ってたじゃん……!」

「この際サルミアツキでもいい……飴が欲しい!」

「サルミアツキ美味いだろ」

サルミアツキとは、世界一不味いと言われている北欧のお菓子である。基本的に人の味覚には合わないような味をしているそうだが、相澤はこのサルミアツキがお気に入りであった。

施設の扉を開け、ぐるぐる巻きにしていた補習組を解き放って入らせる。あまりにも絶望的な顔をしていたので、相澤は仕方なしに彼らがやる気を出せるよう励ましてみた。

「今回の補習では、非常時での立ち回り方を叩き込んでやる。周りに遅れを取ってるって自覚を持ってねえと、どんどん差が開いてくぞ。広義の意味じゃこれも飴だ、ハツカのな」

「ハツカは美味しいですよ……!」

「あつれえ!?おっかしいなあ、優秀なはずのA組から赤点が5人も出てるんだ!?B組は一人だけだったのにおっかしいなあ!」

「おめーのメンタルどうなってんだ!」

もうここまで来たからには、大人しく補習を受けていくしかない。抵抗するのをやめて教室の中に入ると、B組で唯一の赤点となつてしまった物間がここぞとばかりに煽ってきた。クラスの中で補習となつたのは自分だけであるというのに、いったいどういうメンタルをしているのだと当然のツッコミが5人から入る。

ちなみに、彼は昨日も全く同じ煽りをしていた。図太いと言うべきか、恥知らずというべきか。クラスの恥部すらA組への煽りに変換できる、その鋼メンタルは見習っていききたいものだと思つたのであった。

「ブラド、今回は演習も入れたいんだが」

「俺もそう思ってたぜ、言われるまでもなくな!」

『みんな!』

「何だ……?」

「マンダレイのテレパスだ」

「これ好き!ビクツてするよね」

「交信できる訳じゃないのが困りものだ」

「静かに」

突然届いたテレパスを聞き届けるため、生徒達を黙らせる相澤。静寂に包まれた教室内で響くマンダレイの叫び声が伝えていたのは、敵の襲来と施設への避難勧告。そして生徒は決して交戦することなく撤退すること、というものであった。

もちろん、教室内は困惑に包まれる。それもそのはずだろう、この場所は生徒の家族にも伝えていない秘密の場所のはずなのだから。

——ならば、どうして敵の襲撃が?

考えたくはない最悪の可能性が頭をよぎった相澤は、教室の警護をブラドに頼んで自分は生徒の保護に向かう。物間が「ここは誰にもバレないはずではなかったのか」と疑問を呈するのにも構わず、一目散に施設の外へと駆け出していった。

「火の手……マズいな!」

「心配が先に立ったか、イレイザーヘッド」

「——ブラド!」

「邪魔はよしてくれよ、プロヒーロー。用があるのはお前達じゃないんだからな」

森にたなびく黒煙を見て、これは一刻を争うと判断した相澤。生徒……特に肝試しのために森に入っているB組の面々を最優先に決めて、救助に動き出そうとしたその瞬間。

相澤の前で、蒼炎が弾けた。

↳

「拳藤!」

「鉄哲!茨!どうしたのそのマスク!」

個性で大きくした手で倒れた骨抜と小大を抱えながら森の中を彷徨

徨っていた拳藤は、そこでガスマスクをつけた鉄哲と合流した。同じくガスマスクを着けて倒れた塩崎を抱えている。

「マスクはA組の八百万に作ってもらった！今は泡瀬がB組の待機場所にみんなを案内して救助にあたってる！お前らも持ってろ、予備をたくさん預かってるからな！」

「ありがと、早く施設に戻ろう！敵がどこに潜んでるかも分からないし危ないからね」

「いや……俺は戦う。だから拳藤は骨抜と塩崎を頼んでいいか？」

「は!?!いや、交戦はダメって……!」

ガスの犯人と戦うと言う鉄哲。拳藤はそれを止めようとしたが、「お前はA組との差を感じたことがないのか!？」と聞かれて言葉を詰まらせる。

いつもはA組を煽る物間を嗜める立場だが、拳藤とてそのことを感じなかった訳ではない。同じ入試で雄英に入学して、同じカリキュラムの授業を受けてきた。なのにA組とB組には、拭い難い大きな差があるとされている。それは何故か？

「アイツらにあつて俺達にはなかったもの、それはピンチだ！」

「ピンチ……!」

「アイツらはUSJの時も、こんなピンチをチャンスに変えて成長していった！当然だ！人に仇為す連中を前にして、どうしてヒーローが背を向けられるだろうか!？」

「鉄哲……本当に行くつもりか!？」

もちろん、そのつもりである。鉄哲には拳藤がどれだけ強く止めようとも、止まるつもりは微塵もなかった。先程言ったように、ヒーローとして敵に背を向けられないというのが理由の一つ。そしてもう一つ……どうしても、早急にガスの原因となっている敵だけでも倒さなければならぬ理由があった。

——グオオオオオ!!

「何っ、今の……咆哮……!？」

「……コイツも敵だ。それも相当ヤベエ、な。今は立甲が足止めしてくれちやいるけど、それがいつまで保つか分からねえんだ」

「葵が……！大丈夫なの!？」

「分からねえ！俺から言えることは、ソイツは立甲よりも更に禍々しい龍だったってことと、既に2人やられてるってことと、足止めがある間にガスをどうにかしないといけないってことだ！一年B組ヒーロー科として、俺はここで更に向こうへ突き進む！」

鉄哲達がいた所には、葵が『龍化』した姿を更に禍々しくしたような敵が襲ってきていた。その葵が敵を抑えたことで何とか逃げ果せることができたのだが、ガスを吸ってしまい塩崎がダウン。たまたま遭遇した八百万から、ガスマスクを作ってもらっていなければ。その時は最悪の事態になっていたかもしれないなかった。

そのことが、たまらなく悔しかった。危機を前にして何もできずに自分だけ逃げ回り、仲間が倒れていくのを見ていることしかできない自分が嫌で嫌で仕方がなかった。だからせめて、自分にできることを成し遂げていく。このガスを起こしてる元となっている敵を倒し、これ以上ガスの被害者が出るのを食い止めてみせる。鉄哲はそう決意していた。

「……なら、しゃーない！私も行くよ！」

「いいのか!？」

「もちろん！私だって、指啜えて見てるだけなんてできないよ！唯、倒れた奴ら頼むね！」

「ん……！」

気絶している骨抜と塩崎を運ぶのはガスマスクを着けさせた小大に任せて、鉄哲と拳藤はガスの元を断ちに向かった。

この危機を乗り越えて、更に向こうへ。ここでの2人の意思是、完璧に一致していた。

「グアアアウウウウウ……!!」

「皆さん、避難できましたかね……コイツの相手はそう長くは保ちませんよっ……!!」

蜚匣のような光沢のある黒い身体に、大剣の如く変化した右腕と、大百足を思い起こさせる10本の伸縮自在な尻尾。体躯が数倍は大きいことと四足歩行になっていること、そしてその身体が漆黒に染まっていることを除けば、それは葵が龍化した姿とほぼ同一であった。

いや、その姿を龍と呼ぶのは憚られる。仮に呼び名を付けるならば、この敵の呼び名は『山椒魚』とでも呼ぶのが正しいだろう。

強さの次元が違う相手。何とか鉄哲達を見えなくなる所までは逃がすことができたが、だからと言ってここに放置する訳にもいかない。山椒魚は葵を敵と定めており、ここで葵が撤退すれば施設まで追ってくるであろうことは、残念ながら容易に想像がついてしまったからである。

龍化した葵の強み。それは巨大な体躯と強大な身体能力に加えて、伸縮自在の尻尾や高い回復力などが挙げられるが……山椒魚はそれらの葵が持っている強みに加えて、大剣に変化した右腕や触れただけで強烈な痺れを与える吐息など、葵が持ち合わせていない能力まで備えていた。

「いったい、僕の遺伝情報なんて何処で手に入れたんですかねえ……!!」

「ガアアアアアア!!」

山椒魚は何も答えない。大気を……そして大地を揺るがす咆哮だけが、森の中に木霊していた。

↳

「人影を見かけたので来てみたのですが……まさかこんな幼児と出会うことになるとは。珍しいこともあるものですね」

「あ……あ……!!」

尻餅をつきながら後退りする淘汰。言葉は声にならず、足は震えて思うように動いてくれない。全身を黒と仮面で覆い隠した誰かの放つ圧倒的な殺意を前にして、心が竦んでしまっていた。

マンダレイから、大変なことになっているから施設に戻ってこいというテレパスが来ていた。彼女らは淘汰の秘密基地がある場所を知らないため、助けに行くことができないからと。森中で立ち昇る黒煙を見て、異変が起きている事を知った淘汰はその言葉に従おうとした……その矢先で起こってしまった出来事であった。

「ああ、仮面が怖いのですか？それに關しては申し訳ありません……私のような新参加者は納期が間に合わないからと、こんな大して格好良いとも言えないデザインの物を渡されているのです」

「あつ……ああつ……！」

「おつと……逃がす訳にはいきません」

「いだつ……!?!」

身体を無理やり翻して、四つん這いになっても逃げようとする淘汰を踏みつけにする敵。その身体には薄っすらと、真紅色のスパークが巡るように迸っていた。

——ウォーターホースは素晴らしいヒーロー達でした。しかし2人の輝かしい人生は、たった一人の心ない犯罪者によって絶たれてしまいました。

両親を失ったあの時に、耳にタコができる程聞いたニュースを思い出した。街で暴れていた敵を止めようと戦いを挑んだ両親は、そのたった一人の敵によって返り討ちに遭い命を奪われた。

状況こそ全然違うが……淘汰もまた、一人の敵によってその命を散らそうとしていた。恐怖で全身がガクガクと震え、歯がカチカチと音を鳴らす。具体的にどうされるなんて知らないが、これから自分がどうなるのかなんてバカでも分かる。

「パパあ……！ママあ……！」

「痛みはありません。神経が麻痺して痛みを感じることもできなくな

りますからそれでは……哀れなる幼き命に、さようなら」

紅雷を右腕に纏わせると、敵は五指をまつすぐに揃えて冼汰に向け  
る。祈るように……若しくは憐れむように別れを告げると、その手を  
冼汰の後頭部めがけて振り下ろした。

「デアウエアスマツシュ……エアフォース！」

「ぐっ……！何者です……!?!」

貫手が冼汰を貫くことはなかった。ギリギリのところまで辿り着い  
た緑谷が、エアフォースでその身体を弾き飛ばしたのだ。

そのまま『セントルイススマツシュ』で追撃を入れつつ、2人の間  
に挟まるように立ち冼汰を守るようにする。避けぎまの反撃でス  
マホを破壊されてしまったが、顔面には大きな一発が入った。敵は蹴  
り碎かれた仮面を捨て、素顔を露わにする。

肩甲骨の辺りまで届く白い髪に、身体の左半身を伝う電子機器の回  
路のような紅い紋様。そして一際緑谷の目を引いたのは、風華とほぼ  
瓜二つという敵の顔立ちであった。

一瞬血縁を疑ったが、風華からは妹以外の家族は亡くなっていると  
聞いている。目の前の敵はどう見ても自分と年代代くらい。風華の  
妹ということは流石にないだろうと緑谷は判断した。

「あなたは……『リスト』に顔がありましたね」

「……！」

冼汰を敵と接触させないようにするために来たはずだったのに、ま  
さかピンポイントで敵がいたとは何という不運だろうか。

スマホはさっきの攻防で壊された。この場所を知らせることもし  
ていなかったため、増援が来ることには期待できない。

一人で敵を退けて、冼汰の安全を確保しなければならぬ。できる  
かどうかは関係ない。今、ここでやるしかないのだ。

「大丈夫だよ……冼汰君。必ず救けるから」

何としてでも敵を倒して、この涙を止めなければならぬ。

## 林間合宿：その5

「見つけた……お前達が火元だな」

「ああ……？目敏いガキがいるじゃねえか」

「何だコイツ!?何で隠れてたのに俺達の居場所が分かってるんだよ天才かよ！馬鹿だな！」

「支離滅裂な言動……いかにもって感じだね」

空を飛び回って火元を探していた風華は、ようやくその火元を発見することができた。

全身をゴムスーツで覆った男と、人工皮膚をピアスや糸で縫い留めた火傷男。そして黒いローブと仮面で姿を隠した大男。この内火傷男の掌から、蒼い火が燃えているのを風華は確認していた。つまりはこの男こそが放火犯。電撃で意識を刈り取ってやろうと指先を向けて電気の弾丸を放ったが、それはローブの男に防がれてしまった。

「危ねえ危ねえ……いきなり攻撃かよ。随分と騷のなつてないヒーローがいたもんだぜ」

「電気の個性か！強個性だな！雑魚がよ！」

「おい茶毘！約束通り俺はコイツで遊んでいっても良いんだよな!?もう我慢の限界だぜ!」

「ああ……俺は場所を変える。ソイツは追いかける元気もなくなるくらいには遊んでやれ。くれぐれも頼んだぜ……マスキュラー」

マスキュラーと呼ばれた大男は、ローブと仮面を外してその人相を露わにする。金に近い茶髪と左眼に嵌った義眼、そして裂けた頬。これから行われるであろう蹂躪劇を想像してか、裂けた頬をニヤリと歪ませた。

茶毘とゴムスーツ男を逃がしはしまいと、電撃の弾丸を再び射出する風華。しかしそれはまたしてもマスキュラーに受け止められる。飛びついてやろうにも巨体が壁となって抜けられず、手をこまねいている間に逃走を許してしまう。

「お前の相手は俺だよ！死柄杓から渡された『優先殺害リスト』、てめエの名前が載ってたぜ……確か鳴神だったか？正直言ってな、お前

と戦うのを楽しみにしてたんだよ！」

「がっ……!?!」

腕に個性で増やした筋繊維を纏わせ、マスキュラーは地面を割りながら踏み込んでくる。腕をクロスさせさせて顔面を守る……その前に拳がクリーンヒットして、風華は勢いで木に叩きつけられた。

——速い!

眼で追うこともできなかった。命令を受けなければ動かなかったUSJの脳無とも、錘を着けて手加減していたオールマイトとも違う、圧倒的な速さとパワー。

今の状態では勝ち目がない。木を支えにして倒れた身体を起こしながら、風華はこの戦いの結末を察してしまった。相手は恐らく万全の状態、自分は昼の訓練の疲れが残っていて動きが鈍い。ただでさえ殺す気でいる敵と殺し御法度なヒーローで、戦いには大きなハンデが付き纏うというのに。その上で実力的に劣っているにも関わらず、体調のハンデまで背負わなければならない。結果がどうなるかなど火を見るよりも明らかだろう。

「……マスキュラーとか言ったな。そんなに遊びたいっていうのなら、お望み通り遊んでやるよ」

「おおっ、これが赫災領域レッドゾーンってやつだな！これだよこれと戦ってみたかったんだよ！できるだけ長続きすることを願ってるぜ！」

「ほざけ……その前にお前は倒すさ！」

風華はマスキュラーのことを知っている。いつかは忘れたが、ニュースでヒーローを2人殺して逃走した敵がいたというのを見たことがある。その時に公開されていた顔写真では、両眼がしっかりと揃っていたし頬の傷も無かったが。その人相は、まさしくマスキュラーと同一であったから。

ここで奴を逃がせば、あのニュースの時のように暴れ回って最悪の被害を叩き出すだろう。それだけは相対した者として、阻止しなければならぬ。

赫災領域レッドゾーンを展開し、次に備える。さつきは不意打ちだったこともあって追い切れなかったが、最初から警戒しているならばギリギリ追

える。どうにかしてここでマスキュラーを倒し、火の手を広げている2人組を追わなければ。

——やるしか、ないよね。

覚悟を決めて、風華は一步を踏み出した。全身で纏雷を発動し、赫い雷を纏った蹴りを放つ。しかしマスキュラーはそれを身を翻して避け、宙に浮いた風華の身体を再び木に叩きつけた。

肺に溜まっていた酸素を吐き出しながら、風華はやはり格闘では勝てないと結論付ける。ならば遠距離攻撃で……といきたいところだが、マスキュラーが身に着けているのは絶縁性のラバースーツ。電気ではダメージを与えるどころか、反応させることすらできないだろう。

「あ、そうそう……居場所を知ってたらで良いから教えてくれよ。爆豪っていうガキは何処にいる？遊んではかりでないで、一応は仕事もしなくちゃあなんねえからな……」

「勝己……!?!」

「答えは『知らない』でいいか？いいよな!?!よし仕事は最低限やったし、また遊ぼう!」

「ガツハア……っ!」

宙に浮いた身体が地に墮ちる前に、マスキュラーは風華の足を掴んで自分で叩きつける。バウンドしてガラ空きになった腹に向けて、蹴りを一発。周りの木々を薙ぎ倒しながら吹き飛んでいった。

……恐らくは、筋肉を肉体に収まり切らない程に増やす個性!パワーもスピードも段違い……!」

「良いなあ!血だ!これが楽しいんだよなあ!もつと遊んでくれるんだろ早く立てよ!」

爆豪のことを狙っていると公言されて、何故という思考で頭がいっぱいになってしまう。だがそれではいけない。目の前敵に集中しなければ、この場の勝利は得られない。

『吹き荒ぶ風』……食らえ!」

「何だア!?!空気の弾丸か!いい速さだがパワーが足りてねえな!」

「ぐあっ」

「教えてやるぜ、俺の個性は筋肉増強！皮下に収まんねえ程の筋繊維によつて、増強されるパワーとスピード！何が言いてえかって!?自慢だよ！空気と電気を操れる……魅力的な言葉だが！圧倒的で純粹な力の前では、ゴミも同然よ！」

個性をひけらかし、歴然と示された力の差を前にして高らかに笑うマスクュラー。わざわざ勝てないと分かっている勝負なんかしないで、尻尾を巻いて逃げればよかつたのにと風華を嘲った。

勝てないことは分かっていたはずだ。合宿の最中で疲れが溜まっているのだから。逃げ出したいと思っていたはずだ。殺人すら厭わない敵と見習いの自分では、勝負にすらならないことは歴然としていたのだから。そんな気持ちを押し殺してまで、戦わなければならぬということとはなかつたはずだと。

「なあ鳴神！自分に正直に生きようぜ！」

「ヒーローを殺したつて時も……そんな風に考えていたのか？」

「ああ？ああ……ウオーターホースか！しっかりと覚えてるぜ……俺の眼を、義眼にした2人だ。別に恨んでる訳じゃねえが……まあその通りだな！俺はあの時もやりたいことをやった！そしてあの2人はそれを止めたがつた！そして俺が勝つて、最後までやり遂げた……ただそれだけの話さ」

「人の命を奪つて……お前は何も……本当に、何も感じなかつたのか!?」

ただ快樂を貪るためだけに、壊して殺して全てを奪っていく敵。風華にとつては、その存在自体が逆鱗に触れているような相手。込み上げてくる怒りと共に風の弾丸をぶつけるが、マスクュラーにはまるで効いた様子もない。

ヒーローが感じてほしいと思うような感情など、何一つとして持ち合わせてはいない。風華の怒りを更に煽るように、マスクュラーは宣言した。

「感じたさ……楽しいつて気持ちになあ！」

「だったら……人の痛みを思い知らせてやる！」

「面白え、やってみろよ！」

同時に飛び出していく2人。このままぶつかり合えば風華が吹き飛ばされるのは自明であるが、それでも構わずに突撃した。

「馬鹿の一つ覚えだ……何っ!？」

「馬鹿はどっちだ……言っただろ、お前に人の痛みつてものを教えてやるってね!」

マスクュラーが振りかぶった拳をフルスイングするその瞬間に、風華は雷上動で背後に回る。標的が消失して拳が空を切ったその一瞬、作り出した決定的な隙を逃さず……ガラ空きになった背中に向けてありつただけの風力を込めた吹き荒ぶ大風をぶちかました。

風の暴威がマスクュラーを巻き込みながら多くの木々を薙ぎ倒し、役目を終えて霧散する。これで終わっていてくれと願いながらも、風華は追撃の必要性を確認するべく近付いていった。

「あー……痛つてえなあ!今のは効いたぜ!」

「嘘だろ……!?!何でそんな……!」

そして風華が見たのは、大したダメージもなさそうに首を回すマスクュラーの姿であった。

「ピンピンしてるのかって?!いいぜ、折角だから教えといてやるよ!今の風は確かに凄え威力だったけどなー!アレは俺が増強した筋繊維を弾き飛ばしただけに過ぎない!本体はこの『対衝撃・斬撃・電撃スーツ』によって完全に無傷!お前は単純に体力を浪費しただけって訳だな!」

「インチキ効果も大概にしなよ……!」

ゲラゲラと笑いながら、マスクュラーは義眼を新たな物へ付け替えてマスクを被る。風華の空気操作の力を失念していたことを思い出したのだ。『マスタード』が操作している毒ガスから、肺を守るという意図もある。

義眼を付け替えたのは、気分だ。マスクュラーは気分によって、着けている義眼を入れ替えることがある。これまでは『遊び』の義眼……そしてここからは、『本気』の義眼。血狂いマスクュラーという敵の、本領発揮である。

「はっや……!今までののは本気でも何でもなかったのか……!?!」

「こつからは本気……遊びは止めだ！お前思ってたよりもだいぶ強えもんな！手加減なんてしてやらねえで、全力でぶっ殺してやるよ！」  
「このっ……出鱈目な奴め……！」

「出鱈目、俺がか!?俺みてえに行動原理が単純な奴なんて、そうそういねえと思うけどな！俺は思いっきり羽を伸ばして暴れ回って！個性をぶっ放せれば何でもいいんだよ！」

成す術なく、叩き伏せられる。

その宣言の通り……義眼を付け替えてからというものの、マスクユラーのパワーは先程までとは比べ物にならない程上がっていた。もともと纏雷を全開にしても尚大きかった力の差が、更に絶望的なまでに広がってしまったている。

遊びだったのだ、本当に。マスクユラーは完全な遊び感覚で風華を殺そうとしていたのだ。風雷回帰の再生能力がなければ、本当に遊びで風華は殺されていたのだろう。地面に転がされながら、そんなことを風華は考えた。

思い返せば、赫災領域レッドゾーンに入った風華が手も足も出ないというのは初めてのことである。君沢の悲劇の時も、研究所で暴走した時も、USJが襲撃された時も、職場体験の時も、期末テストでオールマイトと戦った時も。赫災領域レッドゾーンは風華の力として、多くの場面でその真価を發揮してくれていた。

それが今はどうだろうか。風華は無様に地べたを這い蹲り、敵は勝利と自分の死を確信して下婢たニヤケ面を浮かべている。制御のために多少出力を落としているとはいえ、赫災領域レッドゾーン下でここまで虚仮にされた経験は初めてのことであった。

——やっぱり、おっかなびっくりでマトモに使いこなせるような力じゃないね。

暴走を恐れて制御に気を回すことで、安全に扱うことはできてもその分出力が下がってしまう。もしも今までのような暴走状態だったなら、この状況ではマスクユラーなど敵でなかっただろう。

だが、それではいけない。マスクユラーを倒すことはできても、その後の問題があり過ぎる。ベストジーニストやサイドキック、そして

爆豪の頑張りを無駄なものにしてしまう。

「お前を殺したら、次は他の奴らだ。緑谷とかいう奴が面白そうだったんだよな!」

「行かせると……思ってるのか?」

「は?」

「言っただろ……お前はわたしが倒すってね!」

——冷静に、怒れ。

マスキュラーは、その存在自体が風華の逆鱗に触れているようなもの。相対しているだけで、強烈な怒りが込み上げてくる相手だ。怒りを力の根源とする<sup>レットゾーン</sup> 赫炎領域の出力を、際限なく上げることができらるう。

だが、同時に忘れてはならない。この力は怒りに吞まれて暴走しながら振るうものではなく、守りたいものをあらゆる敵の悪意から守り切るために振るうものであるということ。大きな力を持つ者として、そこだけは間違えてはならないのだ。

それに……制御できているからこそ、しっかりと使える新たな力もある。

「よっしやーじゃあ……やってみやがれ!」

「みんなの元には……絶対に行かせない!」

三度、激突する2人。怒りによつて纏雷の出力が増大したことで、先程までとは違って互角にまで持ち込んでいる。しかし互角止まりな上、それも一瞬だけのこと……風雷回帰の反動とこれまで受けたダメージで既に消耗し切っている風華と、ほぼ元気そのものなマスキュラーでは、そもそも互角以上になれる道理などないのである。

「どうしたア! さっきの風の方がよっぽど痛かったぜえ! もう限界なんじゃねエのかア!」

「うるっ……せえ……!」

均衡は崩れ。風華の膝が折れて地に着き、大きなクレーターを作った。窪みに着地した瞬間、マスキュラーはここぞとばかりに筋肉を増強させてラッシュをしかける。うぎったい再生能力をここで終わりにしてやろうとスパートをかけたのだ。

「血イ……見せろやああああア！潰れちまえエ！」

「うるっ、せえ……つつてんだろうが！」

赫く、風華の身体を迸るスパークがその勢いを急激に強めていく。それに呼応するように、風華のパワーも少しずつ上がる。

地面に埋め込もうとするように、風華を殴るマスキュラーの腕。ただ受け止めて耐えるしかできなかったそれを、風華は遂に捕まえて引き寄せ……天高くまで放り投げた。

赫災領域レッドゾーンの能力の一つ……あらゆる外的要因を発電のためのエネルギーとして利用できる。ここまで散々殴られ続けて負ったダメージ、それらを全て電力に変換し、纏雷を強化したのだ。マスキュラーの筋肉増強によるパワーすら、軽く上回ってしまえる程に。

諸刃の剣、危険な賭けだった。必要な電力を生産し切る前に、風雷回歸の限界を迎えるかも知れなかった。先に意識を失って、赫災領域レッドゾーンを途切れさせてしまうかもしれない。だが……諦めずに何度も必死に攻撃を受け止め続け、風華はこの危険な賭けに勝利してみせたのだ。

「こんなっ、程度でどうにかなるとっ！」

「衝赫……『大雷』！」

「グッガアアッ……!?!」

強化された蹴りが、筋繊維を貫きラバースーツの防御性能を超えてマスキュラーに大きなダメージを与える。

「号赫……『裂雷』！」

「ギャッ……!?!」

握り込んだ木の枝に赫き雷の力を与える。ただの枝は鋭利な剣へと変わり、ラバースーツを障子紙のように容易く斬り裂いた。

「潜赫……『伏雷』！」

「あつぎゆうっ……!?!」

堪らず落下したマスキュラーを襲う、赫き雷の洗礼。地を這う稲妻に巻かれたマスキュラーは、極大の電圧を浴びて狂ったように痙攣する。

「響赫……『鳴雷』！」

「みゆっ……!?!」

雷鳴が全身を震わせる。電撃により麻痺した筋肉に続いて、音を通してやすい血液に向けて爆音による追撃が行われた。

「燎赫……『火雷』!」  
ほのいかづち

「ぼっ……ぼぼっ……!」

雷によってラバースーツの残骸とマスキュラーの体毛が発火。それほど多くもなかった髪の毛や陰毛を燃やし尽くしていく。

電撃のフルコースでマスキュラーを滅多打ちにする風華。ここまでの電力を溜められる程のダメージを受けた鬱憤を晴らすかのよう  
に、何度も何度も執拗に攻撃を加えていく。

別に、恨みを晴らしている訳ではない。この手の増強系の個性を持つ者は、総じてタフであると相場が決まっているものだ。手を緩めれば反撃が来るかもしれないとあれば、妥協はできないのだ。

『吹き荒ぶ大風・荷電』……!」  
バンバーストーム・ライトニング

「………つ!!」

最後に、風華はありつただけの風力と電力を込めた吹き荒ぶ大風を撃ち放った。洗濯機に入れられた服のようにグルグルと回転したマスキュラーは、それが終わると地に伏せて動かなくなった。

息はあるが、意識はない。風華がおぼつかない足取りで近付いてみても、何の反応も示さない。これは即ち……風華がこの戦いに勝利したということに他ならないのだ。

「勝っ……た……!」

勝利の余韻に浸る暇はない。荼毘と呼ばれていたツギハギの敵と、ゴムスーツの男を追わなければならないのだ。恐らく今、あの2人の存在を知っているのは風華だけ。風華だけが、奴らを対処していくことができる。

ならば、休んでいる暇などない。風雷回帰の反動で身体を動かすこともままならないが、そんな動かない身体を風華は無理矢理風で浮かせ、2人の消えた方向へと進んでいった。

## 林間合宿：その6

「冪汰君……絶対に僕より前に出ないでくれ。君は必ず……必ず僕が助けるから！」

「威勢のいいこと……嫌いではありません、しかし力の差を分かっているのはいけませんね！」

フルカウルを発動し、冪汰を始末せんと飛びつく敵をカウンターで蹴り飛ばす。再び冪汰との距離を離して、彼の安全を確保した。

未知の敵の前に、緑谷は集中力を高めていく。身体中を迸る紅色のスパークから察するに、この敵の個性は風華の『纏雷』のようなもの。全身に電気を巡らせることで、身体能力を大幅に強化することができるとシンプルに個性。『電気を操る』個性の一環という線もなくはないが……いや、風華にそっくりな容貌のことを考えれば、その可能性はかなり高いと言えるだろう。

敵の個性は、『電気を操る』系統のもの。緑谷は思考にそう結論付けて、再び敵を見やった。

「緑谷出久……あなたは『優先殺害リスト』に名前が載っていました。ここで相対した以上、私はあなたを殺さなければなりません……そして後ろにいるその幼児もです。覚悟はよろしくて？」

「覚悟ならできてるさ……お前を倒す！冪汰君には指一本だって、触れさせてやるものか！」

緑谷はフルカウルを現状の最大出力、22%まで上昇させる。纏雷を使った風華とは、個性研究所で何度か戦ったことがあるが。その時の彼女は自分に合わせて出力を抑えてくれていた。

だが、コイツはそんなことお構いなしに最大出力で向かってくるだろう。相手の出力上限が分からない以上は、自分も最大出力を維持しなければやられる恐れがある。骨が軋み、筋肉に痺れが迸るような感覚に顔を歪めながら、緑谷は覚悟を決めた。

戦えるのは自分だけ。先生達に連絡して、応援に来てもらうこともできない。負ければ自分もろとも冪汰が殺されてしまう。

——僕一人で……やるしかない！

「いくぞ、敵！」

「敵、ですか……そんな一括りにするような呼ばれ方は嫌いです。私には『天威』という名がありますので、そう呼んでください」

敵と呼ばれたことに憤慨して、『天威』と自身の名前を宣言する。ムツと頬を膨らませると、紅い雷を纏って白い髪をたなびかせた。そのまま徐ろに腕を上げると、緑谷のデトロイトスマツシュを正面から受け止めてみせる。

「何っ……!?!」

「身体能力を強化できると言っても、私の足元にも及ばない程度のものですか。この程度では……遊び相手にもなりませんよ！」

「アツガ……アツ……!?!」

「それっ……飛んでいきなさい！」

掴んだ拳から電撃を流し込まれ、緑谷は強制的に動きを止められてしまった。一瞬身体が麻痺したことで、次への対応ができなくなる。

拳を掴んだまま緑谷を振り上げ、岩山にその身体を叩きつける。衝撃で硬い岩が緑谷のシルエツト状に砕け、破片を散らした。

「ガハッ……!」

「必ず助ける……でしたっけ?ヒーローというのはどいつもこいつも……あなたのように、何処にでも現れては正義ヅラをするのでしょうか」

「クツソ……なんて馬鹿力だ……!」

「私、造られたばかりです。社会のことはあまりよく分からないのですよ。よろしければ……後学のために、色々と私に教えてくださるととても助かるのですがっ！」

岩山から抜け出そうともがく緑谷。その隙を逃しはしまいと、天威は追撃を仕掛けていく。鞭のようになやかに振るわれた裏拳を左腕で受けると、骨が碎ける嫌な音がした。更にそこへ、鳩尾に爪先を突き刺す中段蹴りがクリーンヒット。

腹の中の物を吐き出しながら、むせることもできずに悶絶する緑谷。左腕が使い物にならなくなった上に、鳩尾に綺麗に一発を貰ってしまったせいで下半身に力が入らなくなっていた。

——ケタが、違う！

赫炎領域レッドゾーンに入った風華とほぼ同質の紅い雷によって強化されたパワーとスピード。更には攻撃を食らう度に一緒に流されてくる電撃。フルカウルで耐久力や抵抗力が上がっているおかげで、一瞬麻痺する程度で済んではいるが。少しでもフルカウルを途切れさせてしまえば、瞬く間もなく感電死させられるであろう。

「ああ……そうだ。私は、爆豪という生徒を探しているのですが。心当たりはありませんか？」

「かつちゃん……!?!」

「答えは『知らない』でいいですか？ならば、このままあなた達を殺すとうしましよう」

「だから……させるかって、言ってるんだ！」

敵の狙いは爆豪勝己。そのことを聞いてしまった緑谷の思考は、「何故」「どうして」という疑問に支配されていく。

——ダメだ！かつちゃんのこととは考えるな！

思考を打ち切り、目の前の敵に集中しろと自身に言い聞かせる。生半可な覚悟や思考で、この敵を打ち崩すことは不可能なのだから。

「テキサス……スマッシュ！」

「身体能力を強化する、フルカウル……でしたか？パワーもスピードも私未満……先程も言いましたがこの程度では、私の足元にも及びませんよ！」

「ぐあつ！」

「私の個性は『威紅』……紅き雷の力を、思うがままに操ることができません。身体能力の向上効果だってあなたのソレ以上……！あなたは私の、完全なる下位互換なのですよ！」

スパークをより強く迸らせ、天威は彼我の力の差を知らしめようと高らかに宣言する。下位互換が勝てる道理など、あるはずがないと。

フラつく身体を無理矢理起こしながら、緑谷はその言葉に反論しようとするが……膝がガクガクと震えて上手く立つことができない。このままではマズいと焦りが出てき始めたところで、悠々と歩を進める天威のこめかみに小石がぶつかった。

「やつ……やめろっ……！」

「冼汰……くん……？」

「おや……驚きましたよ。あなたがでしゃばって来るとは思っていませんでしたからね。そんなに死を急がなくてもいいでしょうに」

「お前みたいな奴のせいであつ！ パパ……ママもつ！ お前みたいな奴に殺されたんだつ！ 人を甚振るのがそんなに楽しいのかつ！」

石を投げたのは、場所を変えて遠ざけていたはずの冼汰であった。両目に涙を溜めながら、それでも毅然とした態度で立っている。

来てはいけない、逃げてくれと緑谷は本気の声量で叫ぶも、冼汰は聞く耳を持たない。両親を敵に殺された恨みをぶつけることで、頭がいっぱいになってしまっていた。

天威は倒れる緑谷を踏み越えて、ゆっくりと冼汰に近付いていく。あまりにも強すぎる殺意を間近で受けて、恐怖に股を濡らす冼汰。しかしそれでも目を逸らすことはせず、強がる姿勢を崩さない。目の前の敵に対して恨み言を繰り返す。

「お前みたいな奴のせいであつ……いつもいつもこんなことになるんだ！」

「言っている意味が分かりませんね。話を聞く限りあなたの両親はヒーローだったのでしょう？ ならばその死の理由は、当人の力不足以外の何物でもないでしょうに。責任転嫁ばかりしては、ロクでもない大人にしかありませんよ」

「そんなこと……ある訳ないだろ！」

「つと……そう来ますよね、当然！」

冼汰の恨み節を鼻で笑いながら、天威は右の手先に紅雷を集約させてその身体を貫かんとする。そして雷の迸るその手先を、冼汰ではなく背後に迫っていた緑谷へと向けた。

不意打ちは読まれていた。このまま激突し合えば確実に、こちらがやられるだろう。そうして自滅することだけは、絶対に避けなければならない。

——スピードでも、パワーでも劣っている！ このままではダメージを与えることもできない！ この敵は強い！ 助けだつて期待できない

！自分一人だけでこの窮地を脱しなければならぬ！ならば、勝つために……守るために！僕は何をするべきだ!?

勝利のために、緑谷は頭を回す。痛む頭で思考を巡らせ……そして一つの答えに辿り着いた。それは捨て身の賭けに近い愚策だが、この状況で考えられるたった一つの対応策。通じなければ、淘汰と諸共に未来を失う特攻。

「これで……速さは関係ない!」

「……それで、何ができると?力不足ということが理解できていないのですか?」

ボタ、ボタ……と、貫手が直撃した左腕から血が零れ落ちていく。使い物にならなくなった腕を犠牲にして自分と天威の位置を固定し、回避を許さない状況を作り出すことに成功した。

しかし、それがどうしたと天威は笑う。緑谷の攻撃くらい簡単に受け止められるし、たとえ直撃させられたとしてもそれでダメージを食らうというものはあり得ない。結局は力不足、これ以上のことなどできはしないと笑うが……緑谷にとっては、できないというのは何の問題にもなりはしない。

「できる、できないの問題じゃない!やらなければいけないんだよ!ヒーローってのは……命を賭して綺麗事を実践するお仕事だ!」

「なっ……!?!何です、この力はっ……!?!」

『100%』……デトロイトスマッシュ!」

フルカウルを習得して以降、久しく使っていなかったワン・フォー・オール100%。貫かれた左手で天威の右腕を握りつぶし、怯んだところに全力のスマッシュを撃ち放った。

「うわああっ!ああっ……!?!」

衝撃の余波が岩山を砕き、淘汰の小さな身体を浮き上がらせて転がしていく。強烈な土煙も巻き上がっていく中で、転がっていった淘汰はそのまま崖から落ちそうになってしまう。

落下死の恐怖で泣き叫ぶ淘汰だったが、緑谷が間髪を容れずとどめを打った。

「あ……あり、が……!?!」

「はぁ……はぁ……」

引き上げてもらった冼汰は、お礼を言おうとして緑谷のボロボロになった身体を見てしまった。全身から血を流し、右腕は100%の力を出した反動で青黒く染まり、左腕は筋肉を貫通させられて骨が露出してしまっていた。

意味の分からないものを見てしまったと、冼汰は言葉の出ない口をパクパクと開かせる。どうしてこんなにボロボロになってまで、他人のために戦うことができるのか。冼汰にはどうしても、その考えを理解することができなかつた。

「何で……」

「施設に戻ろう……ここからは距離もそう遠くないし、僕の個性ならすぐ……に……?」

「ふう……危ないところでしたね」

「は……?ウソだろ……100%だぞ!」

——オールマイトの、力だぞ!?

ワン・フォー・オールの100%を、オールマイトの力の直撃を受けたにも関わらず、天威は大したダメージなど負っていないとも言うように平然と立ち上がった。服に付いた埃を手で払って、危なかつたと小さく息を吐いた。

天威はまだ、全力を出していなかったのだ。故に緑谷の全力を受け止めるだけの余力と防御に集中するための余裕があり、殆どノーダメージでいられたのである。

「咄嗟に出力を上げていなくなったら、危ないところでしたね。テレフォンパンチでしたが……死を覚悟したのは初めてです」

「クソツ……近寄るな!」

「嫌です。近寄りますよ」

「何が……何がしたいんだよお前らは!?敵連合はいつたい何を考えているんだ!」

首を回しながら悠々と近寄ってくる天威に、何かいい考えが浮かばないかと時間稼ぎをしようとする緑谷。しかし考えは纏まり切らず、天威を射程範囲に入れてしまう。

「訂正しますよ……あなたは私の下位互換ではなく確かな実力を持っていると。敵連合の目的とは何かと聞かれれば、今の社会を壊し混乱に陥れるとだけ言っておきましょう」

「っ……！・洗汰君、ごめん！」

「えっ……ああっ!？」

「目的のために、あなたの存在は邪魔です……ここからは全力で、あなたの排除に当たります」

更に増大するプレッシャー。嫌な予感を感じ取った緑谷は、咄嗟に洗汰を突き飛ばして自分達から距離を取らせた。その瞬間、それまで緑谷がいた場所に爆風が巻き起こる。

ギリギリのところ、緑谷は思いつきりジャンプすることでその攻撃を回避していた。岩山に足を着けて次の行動保証をしようとしたところで、天威の追撃が迫り来る。足を踏み出してそれも何とか回避に成功したが……砕けた岩の破片を背中に受けて、地面に叩き落とされてしまった。

「ぐっ……うー！」

「おっと……まだ避ける元気がありますか」

——ダメだ……ダメだ！恐れるな！

施設まで逃げ果せば、相澤先生に天威の個性を抹消してもらえらるだろう。だがここから施設までの距離を、追いつかれることなく踏破することは可能なのか？

ただでさえ、合宿の疲労が溜まっている。逃げるならば洗汰を背負って行かなければならない。獣道は悪路で渡り辛く、その上逃げる間は背中を見せることになってしまう。

——考えるな。無理だなんて思うな！今、ここで戦って……勝つ以外にお前に道はないんだぞ、緑谷出久！

——救けるために。今ここで、限界を超えろ！

「下がっててね、洗汰君……でも離れ過ぎると的になるから、7歩くらいがいいかな……うん。そしてぶつかったら……全力で施設まで走るんだ」

「ぶつかったらって、お前まさか……！無理だよ逃げよう！お前の攻

撃効いてないじゃん！それにその両腕、もう使い物に……！」  
「……………大丈夫！」

岩山を蹴って加速する天威。ここまでで一番のスパークを見せる紅雷を纏わせ、緑谷をこの場で葬り去らんと腕を振りかぶった。

緑谷も迎撃の用意をする。再びの100%……限界を超えた一撃で迎え撃つ。自身最高の一撃『デトロイトスマッシュ』で。

ぶつかり合う二つの衝撃。拮抗する間もなく緑谷の膝が崩れ、紅い電撃が彼の全身を蹂躪した。

迸る痺れと痛み。神経が狂ってしまったのか、涙が溢れるのも身体が震えるのも止まらない。殺意に満ちた雷に蹂躪される中で……緑谷はそれでも自分より、洗汰のことを案じていた。

「大丈夫……これから後ろには絶対行かせない！だから走れ！全力で走れえええええ!!」

「このっ……いい加減くたばりなさい！」

「うるっ……せえええええええええ!!」

「何処までも……しつこい！」

……ごめん、お母さん！ごめん、オールマイト！

緑谷の頭に浮かんだのは、母と師匠への謝罪の言葉であった。同時に今までの人生の記録が思い返されていく。これが走馬灯というやつなのだ、確信することができた。

——ヒーローとは、常にピンチをぶち壊していくものだからね！

幼い頃に見たニュース。オールマイトが凶悪な敵を倒し、その取材を受けていた時のものだ。その時のことがなぜか頭に思い浮かんだ。他にも思い出なんてたくさんあるはずなのに、ピンポイントで思い出した記憶が何故これだったのか。

常に、ピンチを。

そう……このピンチだって、ヒーローならばぶち壊していかなければならない。だが既に満身創痍の緑谷に、そこまでの力は残っていない。

爪が、骨が砕けて。皮膚が、血管が裂けて。電撃の痛みで痙攣する身体に力を入れることに精一杯の緑谷では、実践できない教えであった。

「これで……終わりですよ！」

「やつ……やめろおおおおお！」

「幼児……あなたもすぐに、後を追わせてあげますから！ここは待っていて……!？」

「殺つ……させてええ……！たまるかあア!!」

トドメの一撃、最大電力『大雷』をぶちかまして終わらせようとした天威。しかし腕を振り下ろすその瞬間に、大規模な放水を受けて電気を散らされてしまった。

水の飛んできた方向を見ると、それをやったのは洗汰であることが分かった。涙を溜めて足を震わせ股間を濡らしながら、それでも緑谷を死なせまいと勇気を振り絞ったのだ。

そして……洗汰が命を賭けて気を逸らした一瞬の隙が、緑谷に限界を超えさせる。

痺れる身体を起こして、ワン・フォー・オールの出力を100%以上に取り上げ、天威の腕を掴んで目の前まで引き寄せる。

「まずっ……!？」

『1000000%』……！デラウエア・デトロイトスマッシュ!!」

「ガハッ……!？」

デラウエアスマッシュ……デコピンで鎧のように纏っている紅雷を剥がし、デトロイトスマッシュで投げ飛ばす連撃。纏雷の護りが薄くなった腹部に向けて放たれた掌底がクリーンヒットし、岩山へ天威の身体を叩きつけた。

「何も……知らない癖に……!」

——洗汰。アンタのパパとママ……ウオータホースは確かに、アンタを遺して逝ってしまった。でもね……2人が身を呈したお陰で守られた命が確かにあるんだよ。

決着。

その瞬間を見届けて、洗汰は尻餅をつく。

——アンタもいつか、分かる時が来るよ。命を賭してアンタを救う……アンタにとつての……

「何でー！」

涙が溢れて止まらない。それは命が助かった安堵からくるものか、それとも何か別のものか。

「何で……そこまで……！」

分かっている。あのボロボロの背中に対して抱いた気持ちということとは分かっている。

きっと、ウォータホースもこうして救けられた経験があつたのだと思う。自分の命すら厭わずに誰かのために動き、そして救い出す。そんな経験をして自分も、他の誰かのために動こうとした。今ならば洗汰にも分かる。こうして救けられたからこそ。

血塗れになって、右腕は青黒く染まり、左腕は骨が露出してしまっている。いつかにマンダレイが言っていた、命を賭して誰かを救う者。緑谷出久という男は、まさしく洗汰にとつての——

「ありがとう……！」

——僕の、ヒーロー。

## 林間合宿：その7

「本当に、彼らだけでよかったのですか？」

「うん」

開闢行動隊による、林間合宿襲撃と同時刻。

死柄木はいつものように、アジトで写真を眺めていた。襲撃に参加しなくてよかったのかと黒霧が問うが、自分が出る幕ではないと即答する。

「ゲームが変わったんだよ。今までは言うなればRPG……装備や道具だけは万全で、レベル1のままラスボスに挑んだ。……もつとも、ボスに辿り着く前に負けてたけどな」

「そして、今は何をプレイするべきだと？」

「やるべきはSLGだったのさ。俺は駒の一つではなく、あくまでプレイヤーであるべきで。使える駒を使って、少しずつ格上を切り崩していくべきだったんだ……」

「そのために、超人社会にヒビを入れると」

開闢行動隊……彼らの犯行は、失敗しても成功してもどちらでも構わない。そこに現れたという事実そのものが、ヒーローを脅かすのだから。

捨て駒という訳ではない。少数精鋭、それ故に奴らの強さと悪意は本物だ。向いている方向こそバラバラだが、死柄木にとっては頼れる仲間なのだ。

一応、失敗しても別に構わないのだが。それでも死柄木は、開闢行動隊が目的を果たして帰ってくることを願っていた。

「法律で雁字搦めの社会……抑圧されてるのは何も敵だけじゃない」

「……成功を、願っておきましょうか」

く

「あつ……おい！」

「大丈夫……まだ僕には、やらなきゃいけないことがあるから……！」

「そんなボロボロになつてんのに……その上、まだ何をすつて言うんだよ……!」

「さっきの攻撃……防御されることは分かつてた」

あの速さと反応速度、どんな攻撃をしようと対処されることは分かっていた。だからこそ緑谷は全力をぶつけた。実際……限界を超えた出力でも、纏雷を剥がし切ることは叶わなかった。

思っていたよりも、遥かに強い敵だった。もしもこの夜襲に参加している敵が全員天威と同じくらいレベルなら、みんなの命が危ない。

その上、爆豪のことを尋ねてきたように狙いは生徒かもしれない。知った以上は相澤やブツシーキャッツに伝えに行く必要がある。

「僕が動いて、救けられるなら……僕は動かなきゃいけないだろ」  
「……!」

浮かぶのは、クラスみんなの笑顔。

凄み、と言うべきか。緑谷から感じた得体の知れぬ雰囲気、洗汰は思わず息を呑んだ。腕はボロボロになつて、あちこちから出血して、それでも戦う意思だけは途切れさせない。そんな姿を幼い子どもが見て、何も思わない訳がないのだ。

「ひとまず……天威<sup>アイツ</sup>は放置しておくよ。鳴神さんと違って、コイツは『風雷回帰』みたいな再生能力を持ってないようだから、すぐには起きないだろうし起きてもマトモに動けないと思う」

「でも……大丈夫なのかよ!？」

「何よりまず……君を守らないといけない」

「え？僕を……?」

子どもだから、という理由だけではないのだろうと察して、洗汰はならば何故と問いかける。質問を受けた緑谷は、動かない腕の代わりに頭を振つて火の手が上がる森の方を指した。

あの火を消すために、放水ができる個性を持つ洗汰の力が必要になるのだと緑谷は言った。膝を落として視線を合わせ、優しい瞳で彼を見据える。

「あの火が回れば、僕らはここに閉じ込められてしまう。君の力が必

要だ」

「俺の……力……?」

「そう、僕らを救けて。さつきみたいに」  
「……」

洗汰は何度目かの息を呑む。緑谷の言っていることを本当にやるなら、洗汰の役割はとて大きなものになるだろう。この場にいる50人弱の人間の命がかかっているともなれば、緊張して震えてしまうのも無理のないことである。

「……うん！」

「さ、行こう！おぶるから背中に乗って！」

「は!?!いや……そんな怪我で動けるのかよ!?!」

「大丈夫、そのために脚は残した！」

あの激しい攻防の中で、緑谷は脚だけは消耗しないように気を付けて立ち回っていた。どんなに激しい戦いになったとしても、その後身動きが取れなくなるということを対策していたのだ。

天威は爆豪を標的にしていた。その目的が殺害なのか拉致なのかは分からないが……爆豪だけが標的とも限らない。例えそうだったとしても、アドリブで誰かが攫われるということもあり得る。

——嫌な予感がする……早く行かないと！

痛みなんて、今はどうでもいい。この危機を絶対に乗り切ってみせると、緑谷は意気込んで森の中を駆け出した。

く

「まア……こうなるよな！」

「出ねえよ」

緑谷と天威の戦いが決着する数分前。

施設の前では、相澤と茶毘の戦いが繰り広げられていた。掌から放たれる蒼い炎を間一髪で回避した相澤は、その個性を『抹消』して一直線に捕縛布を投げつける。

今度こそ焼肉にしてやると手を翳す茶毘であったが、炎は不発とな

り捕縛布に身体を抑えつけられてしまった。もがこうとしたその瞬間、相澤は茶毘を手繰り寄せて身体を浮かせ、自由に身動きを取れないようにする。

顔面に膝蹴りを一発。怯んだところで捕縛布を引っ張って浮いた身体を回転させ、うつ伏せになる体勢にしてから頭を地面に叩きつけ、腰と腕を抑えて完全に拘束した。

「目的・人数・配置を言え」

「何で？」

「こうなるからだよ」

「……っ！」

茶毘を抑えたまま、相澤は尋問を開始する。飄々とした態度を崩さずシラを切ろうとする茶毘であったが、即座に掴まれていた左腕をへし折られた。

答えがなければ、相澤は次は右腕を折ると脅すと茶毘を脅す。しかしそれでも茶毘が情報を吐くことはなく、口から出る言葉はただただ挑発と愚弄のみであった。

「何だ……？」

「先生ー！」

「あつ……敵……!？」

「よつと……ああ、痛つてえ」

茶毘の右腕をへし折ったその時、同時に二つの方向から轟音が鳴り響いた。どちらからも赤い稲妻のようなものが空に向かって飛んでおり、恐らくはどちらかに風華がいるのだろうと察する。実際片方は空気が赫く染まっており、赫災領域を発動しているのが見て分かった。

——ならば、もう一つの稲妻は誰の……？

そうして思考を始めたところで、生徒が自分を呼ぶ声が耳に入ってくる。声の主は飯田をはじめとするA組の一部と、何人かのB組の生徒であった。

その声に気を取られたことで茶毘を拘束していた手が弛み、その隙に脱出を許してしまう。捕縛布を解かれることは阻止したものの、不

気味な微笑みを絶やさないう茶毘に警戒は緩めない。

「そろそろ……ダメか。流石に雄英の教師を務めるだけはあるな。舐めてたぜイレイザー」

「動くなっ……!?!」

「必死だなア……そんなに生徒が大事か?」

「崩れっ……!?!」

再び個性を抹消し、捕縛布を手繰って茶毘を引き寄せようとした相澤。しかし捕縛布は茶毘の身体を貫いて、それだけが帰還してくる。さっきの炎とはまた違う、明らかに個性による力。瞬きはまだしておらず、抹消は機能しているにも関わらず起きたこの事態に、流石に困惑の色を隠せなかった。

「守り切れるといいな……また会おうぜ」

「先生っ、今のは……!?!」

「……中、入っつけ。すぐ戻る」

さっきまで茶毘だったモノは、ヘドロのような液体となって崩れ落ちやがて消滅する。それがいったい、どのような『個性』によるものなのかは分からないが。分からないものを考えるのに費やせる時間など今はない。

——この状況、施設を狙ってきたこと……そしてあの火傷野郎の言い草的に、奴らのターゲットは明らかに生徒。ならば、やむを得まい!

これは生存率の話だ。抵抗すらできずに逃げ惑うよりかは、戦い己の身を守る術を与える。後で処分を受けるだろうが……生徒の命の方が大事だ。

重要事項を伝達するため、相澤は森の中を駆けてマンダレイの元へと向かう。彼女のテレパスを使えば範囲内の誰にでも、情報を一方通行で伝達することができる。いちいち相手を探して回るよりも余程楽で早いため、一刻を争うこの状況ではどうしても必要なことであった。

「あ……相澤先生!よかった……!」

「緑谷……っ、お前!」

「大変なんです……！伝えなければいけないことがたくさん、あるんです……けど……！取り敢えず僕、マンダレイに絶対に伝えなきゃいけないことがあって……！」

「おい……おい！待て緑谷！」

森の中を走っていると、洗汰を背負った緑谷と遭遇した。無事に戻ってきたことを喜んだのも束の間そのあまりにも酷い怪我が目に入る。

言葉の順序がめっちゃくちゃだし、抽象的なことばかりで要領を得ない。しかし意識はつきりとしているようで、相澤の言葉を無視して洗汰を預けるとマンダレイの元へ向かおうとする。頭がハイになっ

てしまっているようであった。

「その怪我……お前またやったな？」

「あつ……いや、これは……！」

恐らくはあの轟音のした方向のどちらかで、敵と交戦したのだろう。何を言われているのか心当たりはあるようで、緑谷は幾らか落ち着きを取り戻して立ち止まった。

資格を持たぬ者が、例え相手が『敵』であろうとも個性を用いて人に危害を加える……これは立派な規則違反だ。だからこそ、やらなければならぬ処置がある。どうせマンダレイの元へ向かうつもりであるのなら、連絡は緑谷に頼んで自分は施設の防衛に専念するべきだと相澤は判断した。

「この子は俺が責任持つて守る。だからお前はマンダレイにしつかりと伝えろ……——つてな」

「つ……はい！」

伝言を受け取ると、緑谷はフルカウルを発動して一目散に駆け出していく。伝えたらすぐに戻れと言い忘れていたことに気付くのは、その姿が完全に見えなくなってしまうからであった。ホウレンソウのホの字もないなど自嘲するが、それも程々にして洗汰を抱えて施設に戻っていく。

緑谷がああ負傷で尚動いているのは、エンドルフィンがドバドバと分泌されることで痛みが麻痺しているからだ。目的を達成したら、落

ち着いてしまつて動けなくなるだろう。相澤としては、施設までの帰還を目標とさせることで動けなくなるのを先延ばしにしたかったのだが……

「おじさん……アイツ、大丈夫かな」

「ん？」

「僕……アイツのこと殴つたんだ。なのに、アイツ僕のこと救けてくれたんだよ。あんなにボロボロになつてまで……！僕まだ……ごめんなさいも、ありがとうも言つてないんだよ……！アイツ、大丈夫かなあ……!?!」

「大丈夫さ……アイツも死ぬつもりなんかないからボロボロになつても戦つたんだ。俺はそのことを叱らなくちゃならんがな」

この騒動が終わつたら、「ありがとう」の方に力を込めて言つてやつてくれ。そう言つて、相澤は自分の胸の中で泣きじやくる洗汰を慰めた。

——後で処分は受ける……！だから、こんな訳も分からんままやられるなよ……卵ども！

く

「あーん近いわ！アイテム拾わせてよ！」

「ゴイツっ……！」

「こんのっ……しつこい！」

「しつこいのはお前だっ……！いい加減に肅正されちまつ……!?!」

「マンダレイ！洗汰君は無事ですっ！」

「君……」

アイテムを叩き落として弱体化させたまではいいものの、自身のキャットコンバットを読んだ動きをされて攻めあぐねる虎。そしてスピナーの振るう大量の刃物のせい、迂闊に動けないマンダレイ。

防戦一方になっている内に、足を滑らせて隙を晒してしまう。その隙を目敏く突こうとするスピナーであったが、振り上げた大剣は乱入してきた緑谷によつて蹴り砕かれた。丹精込めて造り上げた武器を

瞬く間もなく破壊され、スピナーは「へ……？」と間抜けに呟いた。

「ちよつと君！何て酷い怪我っ……!?!」

「あっ……!?!相澤先生からの伝言です！テレパスでみんなに伝えてくださいー!」

「ちよつと!?!ああもう何!?!」

「A組、B組総員——」

——プロヒーロー『イレイザーヘッド』の名において戦闘を許可する！

「伝達ありがと！でもすぐに戻りな！君のその怪我尋常じゃないよ！」

「いやっ……すいませんもう一つ！敵の狙いは少なくとも一つ……！  
かっちゃんを狙われてる！これもテレパスをお願いしますー!」

「かっちゃん……誰!?!待ちなさいちよつと!」

「何で知って……まさか、マスキュラー!?!」

情報を漏らすような奴は、マグネの中で心当たりはマスキュラー一人だけ。さっきの地鳴りのような轟音はつまり、緑谷に情報を漏らした上で負けたということなのだろうと判断する。

マグネの中で、緑谷への警戒心が最高レベルにまで膨れ上がる。それと同時に今ここで始末しておくべきだと飛び出すが、それはあろうことか味方であるはずのスピナーに阻止された。

「ちよつとスピナー!?!あの子優先殺害リストにあつた子なのよ！何で邪魔すんの!?!」

「アイツはステインが救った男。即ち英雄を背負うに足る人物！ならば俺はその意思に従うっ……!?!」

「やつといいの入った!」

「ようやく捕まえたぞ!」

仲間割れした隙に、スピナーの顔面目掛けてハイキックをクリーンヒットさせる。せめてあだ名ではなく本名を言ってほしかったが、もう行ってしまった以上は仕方がない。マンダレイは諦めてあだ名の

ままテレパスで敵の狙いを伝えた。

『敵の狙いが一つ判明！生徒の『かつちゃん』！かつちゃんはなるべく戦闘を避けて！単独では動かないこと！分かった!?かつちゃん!』

「爆豪……?」

「バクゴ―君が……!?」

「かつちゃんかつちゃんうるせエんだよ……人の頭ん中でよお……!クソデクてめエ、何かしたなオイ!」

「不用意に突っ込むんじゃないやねえ!爆豪、お前が敵に狙われてんだぞ!」

テレパスを受けて、『かつちゃん』が誰を指しているのかを知っているA組の面々は分かりやすく困惑した。本人も戦えと言われたり戦うなど言われたりが立て続けに起きて、かなり苛立っていた。一人だけ感情の方向性が違いすぎる。

「肉……見せて?」

「見るからにヒヨロガリの癖しやがって……!」

「地形と個性の使い方が巧えんだ、クソ」

前方の敵、後方の毒ガス。そして背中には気絶した同級生。分かりやすく縛りをかけられている現状に、轟と爆豪は歯噛みしていた。

「立甲……逃げろっ!巻き添えになる前に!」

「無理ですよ……放っておくなんて、できる訳がありません。それに……逃げられるような状況ではないでしょう?」

「それはっ!そうだがっ……!」

「グウワアアアア!!」

「踏陰君、黒影。一緒に戦ってくださいか?」

「そうっ……したいのっ!だが!」

戦いは、佳境を迎える。

## 林間合宿：その8

「聞いたか拳藤！ぶん殴る許可が出た！」

「待ってって鉄哲！お前、このガスがどういうものか分かって進んでるんだらうな！」

「ヤベエ……ってんだろ？俺も馬鹿じゃねえさ」

「バカ野郎！」

ガスの元を絞めようと、元凶となる敵を探して森の中を彷徨う鉄哲と拳藤。流石にこのガスの性質と敵の居場所くらいは、おバカな鉄哲でも予測がついているだろうと思って拳藤は質問したのだが。予想以上のおバカな答えが返ってきて、呆れ半分にツツコミを入れるのだった。

ツツコミついでに、ただただ適当に走り回るくらいならばと自身の見解を伝える。ガスの流れについて感じた違和感と、敵の個性の考察を。できる限り分かりやすく、噛み砕いて伝えた。

「マンダレイはさっきのテレパスで、このガスについては少しも触れてなかった。つまりは広場から分かるところまで、このガスは広がっていないってことになる。変なんだよ……普通こういうガスや煙の類ってのは、発生源から拡散していくもんなんだ。なのにこのガスは、一定方向に向かってゆっくりと流れてる。この辺が分かりやすいな。見ろよ、私達がさっきまでいた所よりも、この辺のガスが濃ゆるなってるだろ？」

「つまり……どういうことだ？」

「発生源を中心に渦を巻いてるんだ。台風みたいな感じでさ」

「なるほど……！つまり台風の目の部分に、ガスの原因となっている敵がいるって訳だな！」

そういうことだ。鉄哲が言いたいことを理解してくれたことに、拳藤は安堵の息を吐いた。この調子なら着いてきて正解だった、と。

足を止めるのは程々にして、拳藤は改めてガスマスクを触りながら語った。渦の中心に向かう程ガスの濃度は上がり、ガスマスクも機能する時間が短くなってしまふ。速攻で敵を見つけて速攻でカタを着

けなければ、返り討ちに遭うだろうと。

「速攻勝負か！ならば俺に策がある。お前にばかり頭使わせ続けるのも申し訳ねえからな！」

「何だ、いい案があるのか!？」

「ああ！こんな感じで——」

「——成る程。こりや責任重大だな」

鉄哲から作戦の概要を聞き、役割の重さに拳藤の額に汗が伝う。成功すれば確かに速攻でカタを着けられるが、敵の情報がほとんどない以上、失敗するリスクはかなり高い。

だが、やるしかない。

まだ森の中には逃げ遅れた生徒や、自分達の知らない敵と戦っている生徒がいるかもしれない。このガスを対処することは、そんな彼女らへの大きな助けとなるだろう。だからこそ、失敗する訳にはいかない大事な戦いとなる。

「……葵のやつ、あの黒いバケモノとまだ戦ってるんだろうな。チャチャつと終わらせて、そつちの加勢にも行かなきゃな！」

「ああ！こつちもやベエが、あつちもメチャクチャバそうだったからな！立甲がああのバケモノを足止めしてくれてなきや、鱗や角取は死んでたかもしれねえ！立甲の捨て身に応えるぞ！」

「……やっぱ、気付く奴は出てくるか」

ガスの揺らめきから、『マスタード』はこちらに真っ直ぐ向かってくる者がいることに気付く。

雄英高校の生徒は、やはり優秀だ。自身の学歴に大きなコンプレックスを抱くマスタードは、嫉妬や嘲笑の混じった笑いを溢す。口元を下卑た微笑みで歪ませながら、学ランの内ポケットから黒光りする凶器を取り出した。

どんなに強い個性を持っていようと、人間である以上は絶対に殺せ

てしまう絶対の武器――

「いいいたああああ!!」

「哀しいなあ……どれだけ優秀な個性があつたって人間なんだよね」

――ピストルの銃口を、ガスを切り裂いて現れた鉄哲に向ける。放たれた銃弾は鉄哲のマスクを撃ち抜いて、彼の素顔を晒させる。マスクはそれを見て、ニヤリと口元を歪ませるのであった。

常闇踏陰の『個性』は、それ自体が一個の人格を持つというとても特殊なものである。光がある内は弱く従えるのも容易だが。闇が増していくごとに力を増していき、完全な暗闇の中では常闇自身でさえ制御できなくなる程に凶暴化するという、厄介な性質を抱えていた。

今日の夜は満月で、陽が落ちた後でも結構な光量があつたために制御が取れていたのだが……肝試しのために森の中に入ったこと、遭遇した敵にペアを組んでいた障子を傷付けられたことで忘我し、完全に制御が効かなくなってしまっていた。

「鎮まれっ……鎮まれ、黒影!」

「イヤダネ……!モット、モットモットオレサマヲアバレサセロオ!」

夜闇によって強化されているせいで、鎮めようにも手綱を握ることができない。暴走に障子を巻き込まないよう離れるのが精一杯のまま、常闇は木々を薙ぎ倒しながら森の中を彷徨っていた。

「……踏陰君?」

「お前はっ……立甲か!?何だその怪我は……」

森を彷徨う中で自分を呼ぶ声に振り返ると、そこには足取りの覚束ない葵がいた。服はズタズタに引き裂かれ、全身から血を流し、右眼が抉られて無くなってしまっている。

何があつたのか……そう聞くまでもなく、下手人は葵を追って常闇の前まで現れた。

全長15mはあろう体躯に、ムカデのように蠢く七対の尻尾。右腕

には大剣のように肥大化した爪が月明かりに照らされて、血塗れたその刃を妖しく輝かせていた。

色こそ違うが、体育祭で葵が見せた龍の姿と酷似しているそのバケモノに驚く常闇。何かしらの関連性を疑うも、すぐにその思考を打ち切った。黒影を制御しなければならぬ中、そんな余裕はない。

「もう……追いついてきましたか。申し訳ありませんが……踏陰君。奴を倒すため……僕に力を貸してくれませんか？」

「力をつ……うだがっ、今の俺はっ……！」

「そちらにも……何か問題があるようですね。恐らくは黒影の制御が効かない……と、言ったところででしょうか……ぐうっ!？」

「立甲!？」

力を貸してくれと言われ、しかし今の自分にはそんな余裕がないと常闇は言った。今の体たらくでは協力どころか、むしろ同士討ちする危険の方が高いだろうと申し訳なさそうに言ったその瞬間。バケモノの爪が葵の肩を貫いた。

痛みに呻き声を上げる葵を見て、更なる激情が自分の中で高まっていくのを常闇は感じた。バケモノは甚振るように爪をぐりぐりと回し、肩肉を少しづつ抉っていく。

「クソッ……やめろオッ！」

「待つて……ください。今、動いては……また暴走してしまいますよ。しっかり落ち着いて……個性を制御してください」

「この状況でっ……！本当に落ち着いていられると思うのか!？」

「大丈夫ですよ……ぐっ！ううっ……っ！少しだけ黒影と……お話をさせて貰えますか？」

どれ程の痛みが葵を襲っているのか、常闇には分からない。一つだけ言えることは、彼女は死に体になっても諦めていないということ。敵を退けて生き残ることを、決して諦めていないのだ。

黒影と話がしたいというのも、そのために必要なことなのだろう。ならば、自分が余計な真似をして邪魔になつてはいけない。片方が潰れても尚輝きを残す瞳を見て、常闇はグツと口を閉じた。

「黒影……あなたは踏陰君の個性……彼と同じ存在です。彼と同じ時

間を生きて……同じ人生を過ごしたはずです。なのに、何故……  
ううっ！こんな仲を裂くようなことが……できるのですか？」

「オナジデハナイ！アクマデオレハダークシャドウデアツテ、トコヤ  
ミフミカゲデハナイノダ！オレトフミカゲハチガウ……ナニモシラ  
ンクセニ、ワカツタヨウナコトライウナ！」

「同じ……ですよ。ヒーローに憧れて……ヒーローになるために、今  
日まで共に……2人で歩んできたのでしょうか？ならば……あぐうっ  
！はあっ……あなたはっ……分かってるはずですよ。今ら……自分  
がどうするべきなのか……ヒーローとして……！何をすべきなの  
か……！」

「ウルサイツ……！ダマレトイツテイル！ワカツタヨウナコトライウ  
ナトイツタダロウガ！」

「立甲っ……！黒影、貴様ア！」

「ウルサイツ……ダマラナイカラダ……！」

——ダメだ！おとなしくしろ黒影！

——ダマレエツ！オレニサシズスルナア！

苦しみ出したかと思えば、黒影は腕を振り上げて葵を思いつきり殴  
りつけた。肩を刺していたバケモノの爪が肉を千切り、葵は木に激突  
してそれを根本からへし折る。

どうにか立ち上がろうとするが、身体の何処にも力が入っていない。  
文字通りの満身創痍、呼吸すらマトモに行えなくなっている。

このままここに居させては命が危ない。一刻を争う緊急事態に、常  
闇の方もマトモに頭が回らなくなってしまうていた。

「立甲っ！逃げろ死ぬぞ！」

「無理ですよ……はあっ、コイツをこのまま放っておくなんて……僕  
にはできません。それに……今は逃げられるような、げほっ……状況  
では……ないじゃないですか」

「だが、それではっ！」

「だから……踏陰君。そして……黒影。僕独りでは歯が立たなかった  
相手……一緒に、戦って……くれますか？」

「グオオオアアアア!!」

「マズいッ……黒影、立甲を助ける！力を貸せ！」

「ダメレト……イツテイル！」

雄叫びを上げ、バケモノは今度こそ葵の息の根を止めてやろうと足を動かす。常闇はそれを見て助けに行こうとするが、黒影が止まったままでいるせいで動けない。どうにかして主導権を握って動かそうとしても、口答えをするだけ。

——早く！早くしないとっ、手遅れに……！

状況が常闇を更に焦らせる。黒影を抑え込むのを怠れば暴走するし、抑えている今は今でバケモノに葵が殺されるところを、見ていることしかできなくなってしまうている。動けない原因である黒影への憎悪が募り始めた、その時であった。

「この通り……僕はもう動けません。お願いしますよ、ヒーロー。どうか……僕を助けてください」

「……黒影！ああまで言われて、尚もお前は駄々をこねて暴れるのか！？言ってみろ！お前がその力を振るうべき相手は！この場にいるいったい誰なのか言ってみろオ！」

「ダメレ……！オレハ……！」

「俺は何だ！？お前は誰だ！？お前は黒影！常闇踏陰という男の個性であり、共にヒーローを目指す無二の相棒！それ以外の何だというのだ！？」

常闇は魂を込めて叫ぶ。個性が発現して以降常に苦楽を共にしてきた相棒に向けて。

同じ目標を抱いた。同じものに憧れた。常闇踏陰と黒影は一心同体の存在である。ならばこの場ですべきことが何かなど、黒影にはこうして言わずとも本当は分かっているはずなのだ。

ただ、闇のせいで暴走しかけているだけ。そこをどうにか抑えることさえできれば、2人はあのバケモノを倒すことができる。成すべきことをちゃんと見ると、常闇は全霊を込めて叫んだ。

「ヒーローがするべきことはっ……徒に力をひけらかして暴れることか！？違うだろう！」

「アアッ……！ソウダ……オレタチハ、ヒーローニナルンダツタナ！」

スマネエナフミカゲ！メイワクヲカケチマツタナ！」

「御託はいい！やる気になったのならば……俺達の全身全霊をぶつけるぞ！」

「アア……ヤツテヤルゼー！」

目の前で傷付いて、失われそうになっている命があるのならば。ヒーローがそれを見て見ぬフリをされていてはいはずがない。ようやく心を一つにした常闇と黒影は、山椒魚のバケモノを倒して葵を助けるべく必殺技を撃ち放った。

黒影を「纏う」ことで常闇自身の戦闘能力を増大させる、緑谷のフルカウルや風華の纏雷から発想を得た『深淵暗軀』。そしてその状態で、黒影の闇の力を一点に集めて撃ち放つ必殺の正拳。

「バケモノ、俺達の全身全霊を食らえ！『ドゥームクラウン』！」

「ガッ……!?グワアアアア!!」

深き闇の一撃が、山椒魚の巨体を周りの木々ごと地に沈め落とす。振り下ろされていた爪はギリギリのところまで葵から逸れ、何とか凶刃から彼女を守ることになった。

「ヤッタ……!?」

「ああ……」

這い上がってくる様子はない。何とかこの一発でノックアウトさせることに成功したようだ。

深淵暗軀を解除して、葵の元へと向かう。倒れたまま動かない彼女であったが、意識はハッキリしているようだ。潰れていない左の目で、常闇と黒影に向けて下手くそなウインクをしていた。

「ありがとうございます。助かりました……」

「シヤベルナ！ヤスンデロヨ！」

「そうだ、傷が深過ぎる。その状態では動くこともままならないだろう。肩を貸して……!?」

「キエタ!?ナンデ!」

肩を貸そうと常闇が手を伸ばした瞬間に、葵の身体は彼の目の前から消失した。黒影が驚愕の声を上げたのと同時に、常闇も視界が暗転して身動きが取れなくなってしまう。

どうやら、自分達は球状の何かに閉じ込められてしまったらしい。張り上げた声が近いところから跳ね返るのを聞いて、常闇は確信した。そしてこの状況を打破する手がないことも、黒影にも破壊できていないことから察してしまふ。

「棚ぼた棚ぼた。まさか、『御雷入道』を一発KOできる奴がいるとはな。お兄さんビビッたぜ」

何処からか気配もなく現れた男。

派手な服装に嘲るような表情の仮面、そして背高のシルクハット。まさしく奇術師とでも呼ぶべきその男……『Mr. コンプレス』は、自身の個性の力で幽閉した2人をポケットにしまい、次なるターゲットの元へと向かっていくのであった。

地面に埋まった御雷入道を見ると、その身体には無数の切り傷や打撲痕が付いている。あのKOされた一撃だけでは、到底説明などできない程に大量に付いた傷痕。自分が観察を始めた時には既に瀕死だったこの少女も、それだけの力を持っているということなのだろう。

——よく分らんけど。死柄木じゃなくて先生がターゲットとして選ぶ辺り、このお嬢ちゃんも相当やべえんだろうなあ……

仕事をやり遂げる中で、そんなことをコンプレスは想像して背中をゾワリと震わせるのだった。

）

「何でっ……銃弾を弾いただけと!?!」

「そんなんっ、もんがあ!効くかア!」

放たれた凶弾は鉄哲の頭に命中し、そして弾かれ宙を舞った。鉄哲の個性『ステイール』の防御力を極限まで高めた、絶対防御態勢『ステイルオブオートレス』の前には、例え大口径のマグナムや榴弾だろうと無力と化するのだ。

絶対に殺せると確信して、マスタードは発砲したにも関わらず。秘密の一撃は呆気なく無効にされてしまい、狼狽える間もなくガスマス

クを貫いた正拳突きによって気絶させられる。これにより森を蝕んでいたガスは晴れ、マスクが不要となる。

「しゃあ！作戦通りやったな！」

「お前の必殺技で無力にできる程度の奴で、本当に良かったな……私も結局いらなかつたし」

「何言ってるんだ！拳藤がガスを散らしてしてくれたおかげで、俺はここで戦うために必要なだけの深呼吸ができた！瞬殺したのはあくまで結果論！お前がいなけりゃガス吸って御陀仏だったかもな！」

「役に立ったならいいや。お疲れ鉄哲、やることはまだまだたくさんあるけどね」

2人の立てた作戦はこうだ。まず速攻でカタを着けるために、中心部にいるであろう敵に向かって直進していく。この時最もガスの濃度が上がる中心部でも攻撃役の鉄哲が動けるよう、拳藤がガスを払って深呼吸ができるようにしておく。拳藤は個性で腕を大きくすることで、一気に広範囲のガスを払うことができる。なのでこれはどうしても、拳藤にしかできない役割であった。

そうして動くのに十分な酸素を確保したら、鉄哲を前衛として中心部に取り込む。ガス以外の攻撃手段が未知の相手と戦うには、防御力に優れた鉄哲の個性がちょうど良かった。

後のことは今の通り。顔面狙いの一撃をクリーンヒットさせてKOし、ガスの流出を阻止することに成功した。

「まだ戦ってる音がする所がある。早く加勢に行こうぜ拳藤！まだガスにやられてる奴も残ってるかもしれないねえからな！」

「ちよつと鉄哲、待ってば！音だけじゃあ何処に行くべきかなんて分からないだろ!?考えなしに走ってないで止まれって！」

「っ……！ガスが晴れたぞ！誰かがガスを留めてた奴を倒したんだ！」

「へっ、やる奴もいるじゃねえか！轟イ！もうガスを気にする必要もねえだろ、いい加減しつこいミノムシ野郎ぶっ殺すぞ！」

「殺しはしねえよ、そもそも当てねえからな」

「そういう意味で言ってるじゃねえ！分かれや！」

## 林間合宿：その9

爆豪・轟と『ムーンフィッシュ』の戦いは、終始ムーンフィッシュの優勢で進んでいた。

口から飛び出す無数のしなやかで強靱、その上で伸縮自在の刃による動きに翻弄され、なかなか有効打を与えられないでいたのだ。

森の中では引火を防ぐために轟は個性の炎部分を使えず、爆豪も迂闊に爆破を繰り返すことができなくなる。その上途中で拾ったB組の円場を轟が背負っており、ガスを吸って気絶した彼を守らなければならぬというハンデもある。ただでさえ立ち回りなどの基本的な部分で負けている相手、ハンデを背負わされているのは格下であるこつちの方。これで苦戦するなという方が無理な話である。

相手にはこちらを逃がすつもりなどなく、何処へ行こうにも執拗に追ってくる。後ろはガスで塞がれており、前に行くにはムーンフィッシュを突破しなければならぬという袋小路。

爆豪は当たらない爆破を何度も繰り返したことで掌が限界を迎えようとしており、轟は氷結攻撃を刃を防ぐためにも多用しなければならぬためかなり低体温化が進行していた。これでは2人がやられるのも時間の問題であったが、突如退路を遮っていたガスの渦が消え去った。

何故……と一瞬考えたが、そもそもあのガスは敵が発生させたもの。それが消え去ったということはつまり、ガスの大元となる敵を生徒の誰かが倒したということになる。

——誰か知らんが、最高の援護だ！

仲間がやられたことを悟って、ムーンフィッシュの動きに若干の動揺が見られるようになる。今まで付け入る隙もなかったが、これなら奴を倒すところまで持つていける。

轟は顔も知らぬ恩人に感謝を告げると、爆豪の方へ向き直って立っていた作戦を実行することをアイコンタクトで伝える。爆豪もそれを察してか、いつものように威勢よく吠えてみせた。

「いくぜ爆豪。タイミングミスるなよ」

「言われるまでもねエわ！アイツはぜってエ殺すと決めてるからなあ！」

轟は背負っていた円場を「悪い」と断ってから地面に置き、超温差光線の構えを取った。この技は当てたものを何だろうと消滅させてしまう恐ろしい技であるが、今回はこれが作戦の要となる。

「おら、死ねエ！」

「肉……！肉面……！見せて！」

「誰が見せるか！大人しくくたばりやがれ！」

「当ててはやらねえ。だが……てめエのその機動力だけは奪わせてもらうぜ！『超温差光線』！」

冷気と熱気。相反する二つのエネルギーが折り重なって生まれた消滅の力を、轟はグルリと自分を回転させながら繰り出した。爆豪は空に飛び出していったし、円場は自分の足元にいるので巻き込む心配もない。

超温差光線は、辺りの木々とムーンフィッシュが機動力として使っている口の刃だけを消滅させて孤立状態とした。木を伝っていくアクロバティックな機動力と、鋭い刃による牽制のせいで近付くこともできなかつたが、これなら爆豪が接近できる。

「ああ……！肉ウ！」

「見せねエつつてんだろ！吹っ飛べエ！」

宙に投げ出されて、大きな隙を晒したムーンフィッシュ。そこへ爆豪が突撃する。迎撃しようと刃を伸ばすが、最大火力の爆破を前にして刃ごと吹き飛ばされてしまった。

どさりと音を立てて墜落する。轟が確認のために近寄ってもピクリとも動かず、その辺に生えていた蔦で簡単に拘束できた。

「つしやあ！ザマアみさらせ！」

「よし、施設戻んぞ爆豪。お前は敵のターゲットにされてんだから、ちゃんとおとなしくしとけよ」

「うっせえ、ぶっ殺せば関係ねえ！」

「だからお前はおとなしく……」

「かつちゃん！轟君！」

「お前達も無事だったか！」

「お前らA組の！怪我はねえか!？」

「あれ……円場!?助けてくれてたの!？」

ムーンフィッシュを倒した爆発を聞いて、緑谷を背負った障子と鉄哲・拳藤がやって来た。B組の生徒はB組に任せられた方がいいかと、轟は背負っていた円場を鉄哲に渡す。ここまで守ってくれてありがとうとお礼を言っ、鉄哲は円場を預かった。

「そうだ……マンダレイのテレパスはみんな聞いたかい!?敵の目的、その一つがかつちやんだってことが分かったんだ！」

「ああ、聞いてた。だからここからは、爆豪を守りつつ施設まで帰還することが大事になる」

「テレパスは聞いてたけどな……『かつちゃん』が誰のこと言ってるか分かんなかったんだよな。爆豪のことを言ってたのか」

「それで、どうやって施設まで戻んの?広場じゃあまだプツシーキヤッツが交戦中だし、道なりに戻るのは敵の目に付きやすく危険だよ?」

真つ直ぐ森を突っ切るのが一番早いけど、その手段を取るとしてどれくらい敵が潜んでいるのかが分からない。突然出くわす可能性もあるし、多少危険でも道なりに進んでいった方がいいのではないかという意見が出るが、緑谷がそれを却下して障子の力の有用性を伝えた。障子は個性によって、身体の部位を複製することができる。そのため索敵能力に優れており、この力を使えば敵との遭遇を事前に回避することが可能となる。その上で防御力に優れた鉄哲や、氷結で壁を作ることができる轟もいる。

守り抜くことに関しては、オールマイトだろうと敵じゃなくなるよいうな鉄壁の布陣が、偶然ながらも出来上がっていた。

「何だコイツら!？」

「お前中央歩けよ」

「俺を守んじやねえクソ共!散れ!」

「行くぞ!全員無事で帰るんだ!」

肉壁要員の鉄哲を前に、負傷している緑谷と気絶している円場を改

めて障子が背負い、いざという時に大きくした手で爆豪を隠せる拳藤が爆豪の隣で警戒し、轟が最後尾で目を凝らす。現状で用意できる最高の布陣を以って、彼らは爆豪護衛の任務に当たるのだった。

ずっと話し合いから蚊帳の外にされていた爆豪の声が木霊するが、障子はその叫びを無視して号令をかける。爆豪魂の叫びは、状況によって黙殺されるのであった。

「ナイフ相手の戦い方なら……心得てる！」

「あはは……痛ったあい！」

蛙吹と麗日のペアは、襲って来たトガを返り討ちにしていた。卓越したナイフ捌きで蛙吹が舌を負傷させられたものの、麗日が職場体験でプロに教わっていた『ガンヘッド・マーシャル・アーツ』によりトガを組み伏せ、行動不能にする。

すかさず蛙吹が武装を外させて、トガが抵抗できない状況を作る。武器を失って、身動きも取らせてくれず、まさに一切の打っ手なしとなったはずであったが……トガはそんなこと知ったことではないとばかりに笑い、麗日に語りかけた。

「お茶子ちゃん……素敵。あなたは私と同じ匂いがします。好きな人がいますよね？」

「へ……!?!」

「そして、その人のようになりたいて思ってますよね。分かります、私も乙女ですから。好きな人と同じになりたいのは当然ですよね同じ物を身に着けてみたり言動を真似てみたりして、でもそれで満足できなくなつてその人そのものになりたいと思うようになってちやうんですよね」

「何を、言つて……!?!」

トガは、自分は見えて分かる程ボロボロになつていて血の香りがする人が好きだという。あの動画に映っていたステインなどは、まさしく

自分の好みど真ん中であつたと笑つた。

血の匂いがする人が大好き。だから最後はいつも切り刻んで、血の匂いで埋めてやるのだと。

「恋バナって楽しいね！あなたの好みはどんな人？教えてお茶子ちゃん！」

「うっぐう……!?!」

「お茶子ちゃん!?まだ武器を隠し持って……!」

「えへへ……チウ、チウ……」

「声聞こえたぞ、あそこだ！」

「麗日さんの声だ……何処にいる!?!」

トガの狂気を孕んだ言葉に、麗日がゾツと背筋を震わせたちょうどその時だつた。森の中を一直線に突つ切つてきた緑谷達一行が現れたのだ。

新手が大勢現れたのを見たトガは、自分を抑えていた麗日が安心した隙を突き拘束から脱出して森の中に消える。「またいつか会おうね」と捨て台詞を残して消えていった彼女の視線は、傷付いた緑谷に釘付けとなつていた。

不用意に追うことはせず、蛙吹と麗日は合流することを優先した。戦闘許可は出ているが、あれは自ら身を守るためのもの。敵を見つけたからと言って戦いを挑みにいっていい訳ではないからだ。

「何だ、今の女……」

「敵よ、それもだいぶクレイジーだったわ」

「麗日さん、怪我を……!?!」

「いや、デク君の方がヤバいからね！」

無事に合流できたことを喜び話していると、拳藤からさっさと行くぞと声がかかる。

爆豪の護衛をしつつ、施設にみんなで帰還するところだということをも2人に伝えると、蛙吹は予想だにしていなかった質問をする。

「その爆豪ちゃんは何処にいるの?」

「え?かつちゃんならそこに——!?!」

何を言っているんだと思ひながら振り返ると、そこにいなければな

らないはずの人間がいなくなっていた。

この非常事態に、油断している人間など誰一人としていなかったはずなのに。爆豪の姿は影も形もなくなってしまっていた。いったい何が起きた、どうしてこんなことにと緑谷が混乱していると、爆豪を消し去った張本人の声が聞こえてくる。

「彼なら、俺のマジックで貫っちゃったよ」

「誰だっ!？」

「コイツは、ヒーロー側なんかにいるべき人材じゃねえ。俺達が、コイツがもつと輝ける舞台へ連れて行ってやるのさ!」

「っ……!?返せっ!」

返せとは妙な話だと、Mr. コンプレスは緑谷を嘲笑う。爆豪はあくまで一人の人間であり、誰かの所有物扱いを受ける謂れはない。他人を物扱いするなんて失礼な奴だと。

轟の氷結を躲しながら、言葉が続ける。あくまで自分達は価値観が凝り固まった子どもに、「進む道はそれだけじゃないよ」ということを知るための手助けをしているだけだと。今の子どもは、価値観に進む道を選ばされていると主張した。

「爆豪だけじゃない……拳藤もないぞ!」

「ああ、爆豪君を貫うのに邪魔だったからね。そのついでだし彼女も貫うことにしたんだ。『マスタード』……ガスを出してた奴な。アイツの放出する強力なガスを前にして、決して冷静さを失わない理性と瞬時に特性を見抜いた観察眼!彼女も素晴らしい敵となれる素質があると判断した!」

「この野郎!貫うなよ!」

「緑谷、落ち着け!」

轟が再び氷結を仕掛けるが、コンプレスは身を翻してその攻撃を軽く回避してみせる。ムーンフィッシュを2人だけで倒せる戦闘力、回避と小細工しか取り柄のない自分が戦っても、勝ち目はないだろうと分かっていたからこそその即時撤退であった。

——ムーンフィッシュの奴は、アレでも控訴棄却されて死刑が確定してる殺人鬼なんだがな!アイツを倒せるような相手と、単騎とはい

えど戦うなんてゴメンだね！

無線で残っている仲間達に、『目的を達成したから5分以内に合流地点に向かえ』というメッセージを入れる。

「短い間だったが、これにて幕引きだ！」

「させるか！絶対に逃がさねえ！」

爆豪とついでで捕まえられた拳藤、さらに障子はコンプレスが球を二つ持っているのを見た。2人が捕まっている球と同じ形状……ダミーという訳でもなければ、更に2人は捕まっているということ。

これ以上の犠牲を出す訳にはいかない。轟の号令を合図として、同時に全員がコンプレスを追いかけて走り出した。

く

「聞いたか茶毘！Mr.コンプレスが早くも目的を達成しやがったつてよ！ホント遅えってんだよなあ眠くなってきちまうよ！」

「そう言うな、よくやってくれてる。後は、全員がここに戻ってくるのを待つだけだ。あの女のガキも撒けたことだしな……マスキュラーの野郎はやられちまったみてえだが」

マスキュラーに足止めを任せて逃げてきた茶毘とゴムスーツの男……『トウワイス』は、合流地点で仲間が帰ってくるのを待っていた。予定ではこの場所は、ガスと炎がカムフラージュとなって見つかり辛いはずだったのだが、ガスが晴れてしまっている。その上本来は、ヒーロー側に見つかって逃げる予定もなかった。何事も予定通りには行かないものだと、茶毘は肩を竦めて小さく息を吐いた。

「そーいや茶毘、どうでもいいことだがよ！脳無って奴はどうしたんだ!?アイツはお前だけの言葉に従うんだろ!?大事なことだぜ！」

「ああ……忘れてたな。何のために俺は戦闘に加わらなかつたんだつて話だ」

「だろ!?感謝しな！」

「死柄木から貰った、俺専用の脳無……一人くらいは殺してるかな？」

「いいや……誰一人だって、殺させはしないさ」

「嘘だろもう追いついて来たってのか!? 遅すぎて欠伸が出ちまうぜ！」

「マスクュラーを相手にして無傷だと……?」

茶毘は襲撃の前に、死柄木から脳無を一体プレゼントされていた。自分の声だけに従う特別製の個体ということで、『取り敢えず生徒を殺せ』とだけ命令して放置していたのだが……いざ呼び戻してみた脳無は、風華に倒されて引き摺られながら『ネホヒヤンツ……!』と呻き声を上げていた。

「……やっと思いついた。今度こそ逃がさない」

「やべエぞ茶毘! 戦うか!」

「いや……見てくれこそ無傷だが、随分と荒く肩で息してるじゃねえか。マスクュラーに加えて脳無を相手にしてんだ、無事な訳がねえ。いくら戦闘苦手といっても、今なら殺せるだろう!」

「やってみるか……? 本気で、わたしに勝てると思ってるならね!」  
赫炎領域は既に閉じて、風華はその反動で強烈な頭痛と倦怠感に苛まれていた。その上で脳無と戦ったことで、消耗はより加速していた。

正直に言っただけは、二対一での戦いをするのはかなり辛い状況である。だが、さっきの叫びとこの2人の会話を総合して考えれば、ここが敵の合流地点ということになる。この後も、どしどしと敵が合流して数の不利はキツくなるだろう。せめて、それまでにこの2人だけでも倒しておきたかった。

——泣き言を言ってる、暇はないよね! 百からの頼まれごともしやらないきやだし……!

唇を一文字に結び、風華は覚悟を決める。どんなに体調が悪くても、体力的にキツくても、戦いを避ける理由にはならない。

そうして臨戦態勢に入った3人を——青山は息を殺して物陰から見ていた。

ガスを吸って倒れた耳郎と葉隠を、八百万に頼まれて施設まで運ん

でいたところで荼毘達を見つけてしまった。だから物陰に隠れてやり過ぎそうとしていたのだが、最悪なことに2人とも居座るつもりであるということを知ってしまった。

出るに出られず、時間だけが過ぎていく中で。ガスは晴れたし倒された脳無を引き摺って風華がやって来た。自分が恥知らずにも隠れている中で、みんなは戦っていると知った。自分だって戦わなければならないのに。倒れた2人を、施設まで送り届けなければならないに。

——僕は。僕は……！

覚悟が、どうしても決まらなかった。

## 林間合宿：その10

「ちよつとスピナー……アンタのせいよ！」

「ようやく捕まえたぞ……そして黙れ！誰かのせいとするのなら……悪事を働いた己のせいだ！」

「そういうことよ、敵のスピナー君」

「ええい、離れろ不潔女！」

虎、個性『軟体』。とても柔らかい身体で平たくなったりもできる。崩落事故などでの救助活動も繊細に行えるし、その絞め技から抜け出すのはただの力技では困難である。

どうにか広場を襲った2人を鎮圧し、捕らえることに成功したマンダレイと虎。両腕と腰を抑えつけられながら、ステインがどうのこうのと喚き散らすスピナーであったが――

「そーいや、アンタ自分の『個性』を少しも使ってこなかったわね」「うるさい、どけえ！」

――個性の話になると、うるさいどけ殺すと喚くだけの機械となる。馬鹿の一つ覚えのように同じ言葉を繰り返す様に、もうウンザリしたマンダレイは黙らせようとロープを取り出した。

「ちくしょう！ステインのご遺志を甦らせるための聖戦を台無しにしゃがって！絶対にお前は殺してやる！どけ！」

「こんな状況でまだ、そんなことを言え――!?!」

「そう……お2人とも、どいていただきましょう」

「貴様つ……黒霧!?!」

スピナーの叫びに呼応するように、湧き出てきた黒い霧。黒霧は巧みにプツシーキャッツの2人を避けてマグネとスピナーを回収し、そしてまた何処かへと消えていった。

「クソツ……やられた！」

「ここを知られていた時点で、奴の存在には警戒するべきであったのに……畜生！」

「追いかけてこは不得意か？意外と大したことないなあ雄英生！」

「クソ、このままじゃ離される一方だ！」

「諦めちゃ……ダメだ！追いつかないと……！」

「……麗日、俺達を浮かせてくれないか。そしていい感じのところ解除してくれ」

「何か、作戦があるん？」

機動力に差があり過ぎるせいで、どんなに必死に追いかけても差が付くばかりの状況。気絶している円場はB組の2人に任せて極力足手纏いは減らしているが、それでも状況は好転しない。轟は起死回生の一手を打つべく、全員に作戦を持ちかける。

まず、麗日が自分と障子を浮かせて重さをゼロにする。そうしたら浮いた自分達を蛙吹が舌を使って投げ、空中では障子が軌道を修正しつつ敵の真正面に行けるようにする。

そうして距離を近づけることができれば、麗日の個性は解除して重みを取り戻し攻撃力を確保。轟が敵を叩き落すという算段であった。

この作戦の中に、緑谷は含まれていない。足以外の全てがボロボロの緑谷は、痛みで作戦どころではないだろうという配慮であったが……爆豪を助けるためエンドルフィンを出し続けている緑谷に、痛みなど有って無いようなもの。

「お前、自分の状態分かってんのか!?左腕なんか骨まで飛び出てるぞ。そんな状態で、どうやって爆豪を助けに……」

「右腕はまだ動く……動かせる！それに痛みなんて今は知らない！僕は動けるよッ……！早くしないと手遅れになる！」

「ッ……！デク君、せめてこれ……！」

「準備できた？できてたら投げるわよ」

緑谷の執念に根負けした麗日は、木の枝と自分の服を使って腕を固定する応急処置を行なった。せいぜい気休め程度の処置だが、何もしいないよりは余程した方がマシである。

応急処置を終えると、蛙吹は重さがゼロになった3人をグルグル巻きにして投げる準備をする。そのまま勢いよく敵に向かって投げ放

ち、「必ずみんなを助けてね」と激励をかけた。

「おおおおおお!!?」

「障子、右にズレてきてる!方向転換してくれ!」

「分かっている、大丈夫だ……!」

『無重力』が解除されたよ……!轟君、ここからどうやってあそこまで行くの!?!」

障子の背中に乗った轟に、緑谷はここからどうやって追いつくつもりなのかと尋ねる。そんな緑谷の問いに対して轟は何も言わず、黙って左腕を後方へと向けた。

——ただ、放出するだけじゃない。熱を噴き出す力を活用する……

!

思い出すのは、自分の父親の戦い方。フレイムヒーロー『エンデヴァー』の必殺技、『赫灼熱拳』をイメージしていく。

炎を噴き出す力を利用して、機動力を向上させたり滞空したり格闘能力を底上げしたりと、炎を出すというだけのシンプルな個性で、エンデヴァーは実に多彩な戦法を轟に披露していた。

悔しいが、実に参考になった。扱うのを避けていたせいで制御の危なかった轟には、余計にその技術が素晴らしいものに見えていた。家庭では最低の屑でも、エンデヴァーはヒーローであるのだということを知った。

「障子……緑谷落とすなよ!赫灼熱拳、『ジェットバーン』!」

「それって、エンデヴァーのっ……!?!」

「何だ、騒がしッ……!?!」

「かつちゃんを……返せっ!」

「もう一度だ、赫灼熱拳『ジェットバーン』!」

「ぐっはあっ……!?!」

父を模倣した、轟の赫灼熱拳。エンデヴァーには出力やコントロールでは及ばないが、今の状況ならこれでも十分。逃げるコンプレスと一気に距離を詰めた上で、そのまま障子の体格を活かしてタックルを仕掛ける。3人分の重みが乗ったタックルをモロに受けて、コンプレスは地に堕ちていった。

「何だ……Mr. コンプレス!?クソツ、待ってるすぐに助けてやるから……!」

「やらせる訳ないでしょ。炎は返すよ!」

「クソガキイ!邪魔だ!」

「ああもう、鬱陶し過ぎるぜ!つてか、あのガキ共見たことあるな!誰だっけ!」

少し離れた所に落ちてきたコンプレスを、茶毘は炎で緑谷達3人を焼いて助けようとする。しかしその炎は風華の風に阻まれた上、逆に自分とトウワイスを焼き尽くすべく跳ね返ってきた。

風に炎を流されるせいで、風華に対してマトモに攻撃を加えることができない現状。ただでさえ茶毘は苛立ちを隠せずにいたが、そこに組み敷かれたコンプレスが現れたことで、その苛立ちは更に加速していくのであった。

「優先殺害リストにあつた顔だな、その地味目な緑と半分男!まあなかつたけどな!」

「チイ……邪魔だ!」

「トガです出久君!さつき見てて思ったんですけどもつと血イ出てた方がカツコいいよ!」

「はあっ!?ぐうう……っ!」

「痛つてて……まさか飛んでくるとは!身体だけじゃなく、発想までとんでやがる!」

「Mr.、目標は!」

「もちろんしつかりと……!?!」

「お前の個性は分らんが……組み伏せている間に回収させてもらつた!爆豪と拳藤……そして誰かは知らんがあと2人……!確かに取り返したぞエンターテイナー!」

トウワイスが3人をコンプレスから離させ、何処からともなく現れたトガが緑谷を足止めする。その間に脱出したコンプレスは、茶毘に言われてポケットから爆豪達を閉じ込めた球を出そうとしたが……それは障子が既に回収していた。

あの短時間で隠し場所を見つけ、その上で回収するとはまさぐり上

手な6本腕め。そう毒突くコンプレスであったが、余裕な口調は崩れていない。爆豪達を奪われたことで、荼毘が取り返そうと前に出ようとするがそれを抑える。

すると、虚空から黒い靄が噴き出した。

USJでも見た、神出鬼没のワープゲート。黒霧の登場によって、それまで戦いを続けていた敵達は戦いを止めて撤退していく。

「合図から5分が経過しました……帰りますよ」

「ごめんね出久君、またね！」

「待て、まだ目標が……」

「ああ、それなら大丈夫さ。マジックの基本……何かを見せびらかす時は、見せたくないモノがあるってことだぜ？」

「何っ……!?!」

「氷結攻撃をされた時に、氷の一部を割ってダミーを用意した。右手で持ってたモンが、右ポケットに入ってるのを見たらそりゃ嬉しくなって走り出すわな。まったく……悪い癖だぜ」

爆豪を取り返せていないと言う荼毘に、コンプレスは仮面を外して口の中に隠してあった『本物』を取り出して見せる。障子が手に入っていた球は弾け中身を曝け出し、氷が地面に落ちた。

「そんじゃ、お後がよろしいようで」

「くっそ……待てえ！」

「待てって言われて、誰が待つかって……!?!」

「優雅! いつの間そこに……!?!」

四つの球を再び口の中に閉まって、コンプレスは仮面を付け直す。そうして黒霧のワープゲートの中に退散しようとしたところで、青山が放ったレーザーが仮面を撃ち抜き、球を吐き出させた。

ここまですつと隠れていたのか。赫炎領域レッドゾーンが解除されたことで感知能力が弱くなっていった風華は少なからず驚きを見せるも、すぐに気を取り直して風で飛び散った球を回収しようとする。

「球がっ……!?!」

「みんな、早く取って！」

風で浮かせたままでは良いものの、激しい頭痛に襲われて制御が途切

れてしまう。これでは自分の元まで引き寄せるのは無理だと、風華は緑谷達3人に球を取ってくれと叫んだ。

同時に飛び出していく緑谷・障子・轟。しかし傷の痛みがぶり返したことで緑谷の足が止まり、動けるのは障子と轟だけとなる。球に飛びついて四つの内二つを回収することに成功したが、残った二つは茶毘が伸ばした腕に取られてしまった。

「哀しいなあ……轟焦凍」

「クソ……ッ！」

「確認する、解除してくれ」

「まったく……何だ今のレーザー!？」

せつかくのショウが台無しだと、コンプレスは愚痴を吐きながら指を弾いて個性を解除した。球の中に囚われていた4人の姿が露わとなり、回収に成功していた常闇と拳藤が尻餅を着く。

気を失っている葵はコンプレスが担いで、爆豪は茶毘が首を掴んで生殺与奪を握る。そうして身動き取ることを防いだ上で、黒霧が2人も含めてワープゲートに入れようとするのを見て、風華は雷上動を起動した。稲妻のラインがワープゲートまで届いたのと同時に、緑谷も爆豪を助けようと駆け出す。

「葵……絶対に助けるからね！」

「かつちゃん……！」

「デク……来んな」

「成果は上々、問題なし……良い仕事ができたな」

足がどうしても重くて、身体が思うように動いてくれない。緑谷の決死の突撃が届く前に、ワープゲートは閉じて敵連合は虚空へと消えた。爆豪と葵とそして——風華の姿ごと。

「あ……ああっ……!!」

見上げてみそこには何もない。倒すべき敵も守るべき人も全てが消えた森の中で、緑谷の叫びだけが虚しく木霊していた。

生徒数42名の内、敵のガスによって意識不明の重体となったのが15名。重軽傷者が合わせて10名と、無事に済んだのは14名だけであった。

そして——行方不明が3名。

プロヒーローは、6名の内1名が頭を強く打たれる重体。1名が大量の血痕を残して行方不明となっていた。そして軽傷が2名。

一方で敵側はマスキュラー・マスタートード・ムーンフィツシュの3名が現行犯逮捕。しかしそれ以外は全員跡形もなく姿を消した。

——完全敗北。

みんなが楽しみにしていた、そして楽しんでいた林間合宿は……最悪の結果で幕を閉じた。

く

「ゲホッ……何処……んこ……んこ……？」

「やあ、久しぶり。まさか君も来るとはね」

薄暗い中に飛ばされた風華は、辺りを見回して地理を確認しようとするがやはり分からない。何処かの屋内であるということだけは分かるが、それだけでは情報としては不足。

もつと情報を集めないのと、ズキズキと痛む頭でどうにか発電して灯りを確保する。そうして翠色の電閃が部屋の中を照らしたところで、足音と聞いただけでゾツとするような声が、とてもフレンドリーに風華に語りかけてきた。

「誰だ……？ロクな奴じゃ、ないだらけど」

「ははは……君と初めて会ったのは、このマスクを着ける前だったからね。僕が何者か分からないのも無理はないさ」

「……質問に、答えろ！」

「そうだな……何て呼んでもらうのがいいのかな？世間では、僕のことを『オール・フォー・ワン』と呼ぶけどね」

オール・フォー・ワン。その名前を聞いた瞬間に風華の背筋に悪寒が走った。自分は今、オールマイトですら倒せなかった宿敵と対峙している。そのことが、風華をより緊張させた。

「オール・フォー・ワン……！」

「いかにも。個性研究所で会って以来だね」

## 巨悪との邂逅

工場のようなマスクを着けたスーツの男。自身の名をオール・フォー・ワンと名乗る彼は、旧知の人間に話しかけるかのように、あくまでフレンドリーに風華との会話を試みていた。

迂闊に返事はできない。オールマイトが言っていた話からすれば、この男は大量の風華が見たこともないような個性を持っているかもしれない。その中にどんなロクでもない個性があるのかも分からない以上は、軽々しく会話することもできないのだ。

「個性研究所……昔ね、僕の好みに合う『個性』がないかと探りを入れていたことがあるんだ。あそこの研究員は優秀だし良識も備えていたから、結局は大した情報を得られなかったんだけどね」  
「……」

「仕方なく、サンプルだけでも欲しかったから情報収集や隠密行動に長けた『友達』の助けを借りてみたんだけど。結局手に入ったのは、君と葵ちゃんのサンプルだけ。研究員達にはすぐ勘付かれて、彼は追放されちゃったんだ」

「……だから、黒霧はわたしのことを知ってるかのような口ぶりだったんだね」

USJ襲撃の時に、黒霧は風華のことを名指して呼んでいた。その時は、自分への復讐に駆られていた敵が教えたものだと思っていたのだが。どうやら奴は、その遙か以前から風華のことを知っていたらしいかった。

なるべく自分からは話さずに、会話は受け答えをするだけに留める。頭に電流を流して、洗脳系の個性を対策することも忘れない。最新の注意を払いながら話を進めっていると、風華には初耳となる話題がオール・フォー・ワンから語られた。

「今回は、君と葵ちゃんのサンプルから造ってみた人造人間アンドロイドを向かわせたんだけど。どうだい、天威と御雷入道には会えたかな？」

「人造人間……だど!? そんな奴が……」

「そう！造るのには苦勞させられたよ。『蒼龍』は内包するエネルギー

が多過ぎて、それに耐えられる器を用意するのが大変だった。『疾風迅雷』も元の出力が低過ぎて、僕が納得できるだけの個体が完成するまで何体も造り直しを余儀なくされたね」

「まさか……葬を拉致するように促したのは、お前だったのか!？」

自分達のサンプルから造られた人造人間が襲撃に加わっていたということを知って、風華は驚きの声を上げた。敵が集合場所としていた地点にはそうだと分かるような者は見当たらなかったし、自分達の分身とでも呼べるような存在が造られていたということも初耳だったからである。

——勝己が拐われた理由は想像つくけど。まさか葬まで拐われたのはコイツが……

一つの仮説に思い当たる。爆豪が今回ターゲットにされた理由に関しては、彼の素行言動的に敵側になってもおかしくはないと、そう死柄木が判断したのだろうと考えられる。

だが、葬に関しては死柄木の手に入るような情報だけでは、敵側に引き込みたいと思うような要素は皆無と言っていい。なのになぜ、あんな瀕死の重傷を負わせてまで拐ったのか。死柄木に拐う理由がないのならば、理由があるのは——

——オール・フォー・ワンの方なのだろう。

「正解だ。弔は爆豪君を仲間として欲していたようだけど、僕は葬ちゃんの方が欲しかった。あの個性はまだまだ、いろいろな可能性を秘めていることが分かってるからね。僅かな量の細胞をチマチマと培養し続けるよりかは……オリジナルを捕獲した方が早いだろう？」

「そんなことのために……あの子は！全身傷だらけにされて、片眼を抉り取られて！そんなくだらないことのために、葬を傷付けたのか!？」

「それは結果論さ。僕としては、彼女の身体を手に入れることができればそれで良かった。抵抗されるなら、おとなしくさせる必要がある

だろ？それ故に仕方のないことだったのさ」

「屁理屈ばかりっ……並べるなア！」

なけなしの電力で纏雷を発動し、風華はオール・フォー・ワンに蹴りかかっていく。しかし相手はそれを受け止める素振りすら見せず、真正面から受け止めてみせた。鋼の塊を蹴ったような、嫌な痺れが足先から全身に伝わる。

物理攻撃が通用しないならばと、吹き荒ぶ大風を発動しようとするが……必要なだけの空気が風華の掌に集まることはなく、不発となった。

「何でッ……!?!」

「そりゃあね、風華ちゃん。僕は数多の『個性』を持つてるんだぜ？身体強化に超再生、反射やワープに加えて個性阻害とかね。『疾風迅雷』を対策することなんて容易なのさ」

「それだけじゃ……説明がつかない」

「ああ……気付けるか。流石は『空気エアの支配者』といったところかな？お察しの通り、僕のアジトは立地が少し特殊だね。僕が着けているマスクのような専用の装備がないか、君のように空気をどうこうできる個性でも持つてなければ、たちまち窒息死してしまう所なんだ」

そんな所が、日本に存在するのか？当然の疑問を抱いた風華であったが、返答は言葉ではなく衝撃波で返ってきた。

「がはッ……!?!」

『空気を押し出す』……そして『筋骨発条化』と『瞬発力増強』が四つに『膂力増強』が三つ。この組み合わせは使いやすくて楽しいんだ」  
「ただ……複数の『個性』を持つだけでなく……！併用までできるのか……!?!」

「今の手持ちじゃ、万全の君を相手にするのは骨が折れただろうけど。開闢行動隊に消耗させられてる以上、君に勝てる道理はない」

複数の個性により威力の後押しを受けた空気砲を食らい、風華は周りの機械などを巻き込んで吹き飛ばされていく。赫災領域レッドゾーンにいない今、傷を負っても治すことはできない。機械の破片が掠って切れた額から流れた血が視界を塞いでいった。

爪が碎けて破片が指先に刺さり、ボタボタと鮮血を滴らせる。ただでさえここまでの個性の酷使で頭が割れるような痛みにも襲われているのに、その上で更に身体にも傷を負わされてしまえば、風華がどれだけ我慢強かろうと関係ない。身も心も蝕んでいく激痛に、苦悶の叫びを上げた。

同時に、強い違和感に襲われる。

——な、ん……？ 空気が……!?

空気が薄い。肺が本来ならば取り込んでいて然るべき量の酸素を取り込めていない。個性研究所での個性伸ばしの中で、風華はどんな場所でも問題なく呼吸ができるようになっていたのだが……その力が全くと言っていい程機能していなかった。

「ゲホッ、なん……で……!?!」

「ここは密閉空間でね。真空にしない程度の最低限しか酸素は供給されないんだよ。どんな場所だろうと空気があるなら呼吸ができる君も、肝心の空気がなければ形なしだね」

鳴神風華、個性『疾風迅雷』。空気と電気を支配し操る強力なものだが、自力で発電できる電気とは違って、空気の方は操れる空気がなければそもそも機能しない。自分の呼吸で酸素を消費してしまっている以上は、その力も全く意味のないものとなってしまっているのだ。無いものを操ることは、如何な個性であろうとも不可能なのである。吹き荒ぶ大風が不発に終わったのも、この空間に在る空気がそもそも少なかったからという理由があった。

呼吸不全に陥り倒れた風華を見下ろし、オール・フォー・ワンは小さく頷いた。それが何を意味する仕草なのかは分からないが。風華にはそれが死神の所作のように見えていた。

このままトドメを刺されるのかと思っただが、何を思ったかオール・フォー・ワンは風華に背を向けて個性を起動する。漆黒のヘドロのような液体が彼の身体を包み、その姿を覆い隠した。先程その存在を明かしていた、ワープの個性なのだろう。

「ここいらで僕は行かせてもらうよ。風華ちゃんの個性は、僕の性に合わないからいらないかな。独りここで、海の藻屑になるといいよ。

もともと勝手に上がり込んできた君は、僕が弔に代わって始末するつもりだったんだよね」

「待て……なん、で……葬を……!?!」

「葵ちゃんの個性を量産すれば、脳無なんて目じやない強さの兵隊をたくさん用意できる。これからの敵連合の躍進のためには、強力な兵隊はどれだけ数を用意しても足りないからね」

「そんな、バカなことのために……ために……!?!あの子を利用なんて……させるものか……!」

止めようとしても、身体が動かない。脳に酸素が行き渡らないためそもそも身体に動けという命令が為されず、指先ひとつだって動くことはない。視界もぼんやりと霞んできたし、臭いも音も少しずつ遠くになっていく。

「ああ……そうだ。僕が脱出した後は、ここは自爆する手筈になっているからね。万が一生きて帰ってくることできたら拍手してあげるよ」

「……」

「それじゃ、次があればまた会おう」

「……!」

もはや声も出ない。オール・フォー・ワンが黒いヘッドロを被ってその姿を消すのを、風華は地に伏せながら見ていることしかできなかった。

役目を終えたヘッドロが消失すると、施設が赤い光に包まれて消魂しいアラーム音が響き渡る。役目を終えたことで、自爆装置が起動したのだ。

間もなく、日本海の底に建てられたこのアジトは風華を巻き込んで海の藻屑となる。その前に脱出を果たさなければならぬが、窒息して脳が死にかけている風華に動くことはできない。このまま、後は完全に脳死して、生命活動が止まるのを待つばかりというところで――

「あ……れ……?」

——まだ、命運は尽きてはいなかった。

自爆による崩壊が始まったことで、壁に阻まれていた海水が室内に侵入してきた。それにより海水に溶けた酸素が個性によって取り込まれ、風華の脳に若干の活力を与えたのだ。

活力を取り戻した脳は、瞬時に赫災領域レッドゾーンを広げて風雷回帰を発動させる。死にかけていた身体が健康な状態を取り戻し、風華に考える余裕を与えた。

窒息死からは逃れられたものの、依然として危機に在ることに変わりはない。風華は開闢行動隊との戦闘で体力をほぼ使い果たしており、赫災領域はいつまで保つか分からない。風雷回帰のおかげで水圧に潰されても再生することができているが、途中で赫災領域レッドゾーンが切れることがあれば、たちまち潰れた肉の塊と化すだろう。

——絶対に、わたしは生きて帰る！

叶えたい夢がある。帰りを待つ人がいる。風華はここで死ぬ訳にはいかないのだ。

風雷回帰にないに等しい体力を消費し続けることになるため、纏雷すらマトモに扱うことは今の風華にはできない。

それでも、どれだけの時間をかけようとも絶対に生きて帰ると己に誓った。血の匂いに誘われてやって来た深海の生物達を蹴散らしながら、風華はおおよそ3700mの深さを泳いでいく。

おおよそ370気圧の圧力が風華の身体をぐしゃぐしゃに押し潰し、光届かぬが故の低音が急速に体力を奪っていく。しかし風雷回帰によって潰れ冷えた身体はすぐに再生され、一瞬だけ浮上してまた潰れるというサイクルを繰り返していた。

——オール・フォー・ワンは、わたしだけは始末するつもりだったと言っていた。それならここには葬も勝ちもない！敵連合……死柄木が潜んでいる方のアジトにいるはず！

海から脱出したら、すぐに2人を探しに行かなければならない。敵連合のロクでもない目的に加担させられる前に、絶対に救け出す。水圧が弱くなれば纏雷も電磁波感知も再開できる。まずは一秒でも早く海から出ることが最優先。

絶対にトドメを刺さなかったことを後悔させてやると意気込みながら、風華は地上に向けて進んでいく。赫雷の閃光が、太陽光の届かない暗い海を赫く明るく照らしていた。

## 敗北

襲撃の翌日。

雄英高校の門前では、多くの近隣住民が講師陣に対する非難の声を浴びせていた。その中には敵襲撃の的になるくらいなら、この街から出ていけなどといった声もあった。もしも、雄英高校がこの街からなくなれば敵の活動はより活発化するだろうというのに。対岸の火事気分ですぐ呑気なものである。

野次馬のことは置いて。夏休みということでは生徒のいない雄英の会議室では、事の当事者である相澤とブラド以外の講師陣が全員集まって緊急会議を開いていた。議題は当然、『林間合宿襲撃事件における今後の対応・対策について』だ。

「敵との戦闘に備えるための合宿で、敵が襲来して生徒が被害を受ける……恥を承知で言うが、認識が甘かったね」

「敵活性化の恐れ……奴らは既に、超人社会を壊すための戦争を始めていたんだ。例え認識できていたとしても防げていたか……」

要は、知らず知らずの内にみんな平和ボケしていたのだとプレゼント・マイクは言う。「備えるための時間がある」……そう認識していた時点で、敵の後手に回っていたのだと。

「己の不甲斐なさに腹が立つよ……！彼ら在必死で戦っていた頃、私は半身浴に興じていた……！」

自分があの場にいられたなら……オールマイトがあの場合に来ることとは不可能であったと、本人も含めみんな分かっている。オールマイトを狙った行動に巻き込ませないために、わざわざ最強のヒーローを同行させなかったのだから。

だから、オールマイトが半身浴を楽しんでいたということは誰にも責められなかった。自分達だって情報が入るまで、呑気に休んでいたのだ。いったい誰がオールマイトを責められよう。

「体育祭の時のような……『敵に屈さない』という姿勢はもう取れませぬ。生徒が拉致されるなんて失態としてデカ過ぎる。奴らは爆豪・立甲の身柄と同時に、ヒーローへの信用も奪ったんだ」

「……行方不明は鳴神さんもよ」

「確か、一緒に黒霧のワープゲートに飲み込まれたんだったな。3人とも無事だといいが……」

「メディアは雄英への非難でもちきりさ。立甲君を狙った理由は想像がつかないが……爆豪君を拐ったのは体育祭や職場体験で、彼の粗暴な面が少なからず周知されていたからだろうね。もしも、彼が敵に懐柔されるようなことでもあったら……教育機関としての雄英はお終いさ」

一面にデカデカと今回の襲撃事件を載せた新聞を開き、根津は雄英への信頼がガタ落ちしていることを見せつける。新聞だけでなく、ニュースや週刊誌にネット記事なども同様に。ネットなどはコメント欄まで大炎上していた。

信頼云々という話が出たところで。この際だから言わせてもらおうがと、プレゼント・マイクが新たな話題を切り出す。

「……USJの時には、薄々感じていただけだったんだがな……今回の事件で決定的になったぜ。いるだろ、内通者」

それは、とてもセンシティブな話題であった。

合宿先は、プツシーキャッツの4人と教師陣しか知っている者はいないはずだった。それに、生徒も携帯電話を使えば位置情報サービスなどで情報提供が容易に行え——

——最後まで言う前に、スナイプ先生がマイクを制止した。生徒を守る教師として、その先の言葉は言ってはならないものであったから。

「止めるマイク。お前は自分が100%シロである証拠を出せるか？

ここにいる者の誰がシロで、誰がクロであると断言できるか？」

「そうよマイク、やめなよ」

「内通者がいる可能性は、確かに低くない。だけどその捜索は積極的に行うものでもない。疑心暗鬼になれば内側から崩壊していくからな」

「少なくとも、私は君達を信頼しているよ。私自身シロであるという

証拠は出せないが……」

内通者がどうこうは後にして。取り敢えず学校側が今やるべきことは、生徒の安全を保証することであると根津は言った。

「内通者の件も踏まえて……かねてより考えていたことがあるんだ。それは……」

『でーんーわーが——来た!』

「あ……すみません電話が」

「会議中つスよ!電源切つといてくださいよ!」

「何あの着信音……」

「ダツせえ……」

根津が今後の安全対策として考えていたという案を言おうとしたその時、オールマイトのスマホからとてつもなくダサい着信音が鳴った。電源を切っていなかったことを注意されるも、電話は出なければならぬのでオールマイトは席を外した。

「……ごめん、会議中だったんだ。それで何の要件だい……塚内君」

「会議中に済まないな。イレイザーとブラドの2人から調書を取っていたんだが……思わぬ進展があったぞ!」

電話を入れたのは、イレイザーヘッドとブラドキングから調書を取っていた塚内であった。

その内容は、『敵連合のアジトを突き止められるかもしれない』というもの。その発言に驚きを隠せず、オールマイトは目を見開く。

二週間程前、塚内の部下が聞き込み調査で『顔中ツギハギの男がテナントの入っていないはずのビルに入っていた』という情報を入力していた。男は20代くらいだということで、過去の犯罪者を漁ってみるも目ぼしい者はおらず。更にビルの所有者に確認を取ったところ、所謂隠れ家的なバーがちゃんが入っているという話だったため、捜査には無関係だと流されていたが——

——その『ツギハギの男』と、今回生徒を拐った敵の1人が同じ特徴を持っていた。

「事態が事態だし、情報の精査が終わり次第すぐに力チ込みをかける

！これは極秘事項だが、君だからこそ話している！今回の救出・掃討作戦、君の力を貸してくれ！」

「……私は、素晴らしい友を持ったな」

「オールマイト？」

「奴らに会ったら、こう言つてやるぜ……！『私が反撃に来た！』つてな……！」

マツスルフフォームに変わり、作戦にかける自身の意気込みを電話口から伝える。その力強い宣言を耳に入れて、塚内は「それは頼もしいことだ」と薄く微笑むのであった。

「……何を話してんだ？」

「さあな」

）

更に翌日。

緑谷はどうなったかというところ、合宿所近くの病院に搬送されて緊急手術となった。二日もの間気絶と悶絶を繰り返し、40度を超える高熱に昼夜問わずうなされ続けていた。

この間、リカバールが治療を施してくれたり起きている間に警察が訪ねてきたりということがあったのだが……緑谷の記憶には、一つとして残ってはいなかった。

「……」

茫然、放心。心ここに在らずとも言うべき虚無の表情で、ずっと天井を見つめている。ふと視線を移すと、そこには母の字で書かれた書き置きと剥かれたリングが置いてあった。

——お母さん、心臓保たないよ……！

「洸汰君……無事かな……？」

「お、緑谷！目エ覚めてんじゃん！」

「USJの時の比じゃねえ大怪我だな」

「メロンあるぜ！みんなで割り勘したんだ！」

「テレビ見たか？学校やべーぞ」

ドアを開けて上鳴が入ってくる。その後が続いてA組の仲間達がぞろぞろと入室し、意識が戻ってきた緑谷に無事で良かったと声をかけた。

「どうだ緑谷、でけえメロンだろ？」

「そだね……A組みんな来てくれたの？」

その質問に全員が声を詰まらせる。しばらくの間沈黙が続き、代表して飯田が話した。

耳郎と葉隠は未だ敵のガスによって意識が戻っておらず、別の病院に入院中。八百万は頭を強く打つていたことで手術となったため、緑谷とは別の病室で療養している。ただし、こちらは昨日無事に意識が回復したという報告が届いていた。

「だから、ここにいるのはその3人を除いた……」

「……15人だよ」

「爆豪と鳴神、いねえもんな」

「ちよつと轟、いきなり……！」

轟の言葉を聞いた緑谷の眼からツ、と一筋の涙が溢れ伝う。言葉を紡ごうとする口の震えが、彼の心に伸し掛かる悔しさをよく表していた。

「オールマイトがさ……言ってたんだよ。手の届かない場所は救けに行けないって……だから手の届く範囲の人は、絶対に救けるんだって……僕は……手の届く場所にいた」

「緑谷……」

「デク君……」

必ず、救えなければならなかった。緑谷の個性はそのために、授かったものなのだから。必ず救えるための個性だったはずなのに、あの時はどうしても身体が動かなかった。

——お前は、1人救って木偶の坊になるだけだ。

相澤先生の、言う通りになってしまった。そうならないように鍛えてきたのに、そうしないために強くなってきたのに。

結局、自分は何も変わってはいなかった。緑谷はそのことが堪らなく悔しかった。

「だったら、今度は救けよう」

「え……？」

「切島君!?! いったい何を……」

「実は、俺と轟……昨日もここ来ててよ……そこでオールマイトと警察が、八百万と何か話してるのを聞いたんだ」

『B組の泡瀬さんに協力いただいて、敵の内一人に発信機を取り付けました。これは、その信号を受信するデバイスです。捜査にお使いください』

『……相澤君は、君のことを咄嗟の判断力に欠けると評していたが。素晴らしい成長だよ！ありがとう八百万少女！』

『級友の危機に……このような形でしか協力できず悔しいですが』

『その気持ちこそ、君がヒーロー足り得る証！後は私達大人に任せておいてくれ！』

「つまり……そのデバイスを、八百万君にもう一つ創ってもらおうと……う？」

「ああ……それなら俺達も、敵連合を追える」

何を馬鹿なことを言っているんだと、飯田が切島を一喝する。オールマイトが言っていた通りこれはプロに任せるべき案件であって、生徒が出しゃばっていい舞台ではないのだと。

切島だって、そんなことは分かっている。だけどそれでは、友達が狙われているというのに何もできなかつたことへの負い目は消えないのだ。

「ダチが狙われてるって聞いて……！それでも俺はなんつにもできなかつた！しなかつた！ここで動かなきゃ俺ア、ヒーローでも男でもなくなつちまうんだよ！」

「落ち着けよ切島、ここ病院だぜ。こだわるのはいいけど今回ばかりは……」

「そうよ、飯田ちゃんが正しいわ」

「そうだよ！飯田が正しいよ……間違ってるのは俺の方だ！でもなア緑谷！」

顔を赤く染め、目尻に涙を浮かべ、切島は緑谷に手を差し出した。

「まだ……手は届くんだよ！」

プロが動くのはいつになるか分からないが、それまでならまだ救けに行くチャンスはある。行くなら速攻……今晚決行すると切島は言った。

「ヤオモモから発信機のやつ貰って……それを辿って自分らで爆豪を救出するってことだよね……?」

「敵は飯田や緑谷のことを殺害対象として、爆豪のことは殺さずに拐っていった。口ぶりからして爆豪をどうこうしたいんだろうが、爆豪が目的に沿わなければ殺されてもおかしくねえ。そうなる前に、俺と切島は行くと決めた」

「ふ……ふざけるのも大概にしたまえ！」

「飯田、落ち着け」

激昂する飯田を障子が制し、彼に代わって言葉を続ける。

障子もまた、爆豪が連れ去られるその瞬間をこの目で見ていた。だから轟の『目の前で連れ去られた悔しさ』も、切島の『何もできなかった悔しさ』もよく分かる。分かるが……これはもう、感情で動いていい問題ではないのだ。

「オールマイルト達に任せようよ☆僕らの戦闘許可はもう解除されてるし……やれることはちゃんとやり切ったと思うよ……」

「青山の言う通りだ。ついでで拐われるところだった俺は強く言える立場ではないが……」

「みんなショックなのよ。でも、一旦冷静になりましたしょう？どれ程正当な感情であっても、また戦闘を行うというのならそれは……ルールを破るといふのなら、それは敵の行為と同じよ」

沈黙が訪れる。救けに行きたいと思う理由も、救けに行つてはなら

ない理由も嫌という程分かってるからこそその静寂。診察の時間になつたと医者が緑谷を呼びに来るまで、重苦しい空気はずっと病室中に漂い続けていた。

「お話し中にごめんねー。緑谷君診察の時間だから呼びに来たよ」

「あ……すんません」

「行こうぜ……八百万の方も気になるし、この後は耳郎と葉隠の所にも行かんとだしな……」

「……重傷で動けるかも分からねえお前を誘ってるのは、お前が一番悔しいだろうと思うからだ。もしお前も来るってんなら……今晚、病院の正面玄関前で待ってるからな」

そうボソリと言い残した切島を最後に、A組のみんなは緑谷の病室を去っていった。今晚……切島のその言葉がずっと、案内されながら診察室に向かう緑谷の頭の中でグルグルと回っていた。

## 作戦決行

「君が寝込んでる間、リカバリーガールにはかなり強めの治療を施してもらってた。だからその手も動かせるとは思うけど……直視できないくらいグツチャグチャだったよ」

特に左腕が酷かった。ここは骨の一部が失われていた上に神経が完全に断裂しており、整形してその上で再生系の『個性』を持つヒーローに限界まで力を使ってもらって、漸くリカバリーガールの治療が意味を成すようになったのだ。

「再生と言っても、切れた糸を縫い合わせるように神経を繋ぎ直したんだけどね。だから麻痺系の障害は残らないけど……君、以前にも大怪我してリカバリーガールの治療受けてるみたいだけど。ぶつちやけその時とは比べ物にならない程酷いよ」

「比べ物にならない……とは？」

看護師にギプスを外してもらおうと、緑谷は夥しい傷痕が残った腕をグイグイと動かし、具合を確かめながら医者言うことを聞き返す。

これまでのカルテを借りて、その内容を確認してみたと言ったと医者は前置きして話し始める。緑谷はこれまでも何度か同じような怪我をしてきたが、毎回毎回同じような壊れ方をしているのだと。

「君の怪我はね、毎度爆竹が内側から爆発したかのような壊れ方をしてるの。んで……それが今回は特に酷い。今までは複雑骨折まではいってなかったみたいだから、まあ分かってると思うけど」

「爆竹が、内側から……僕の身体ってそんなことになってたのか……」  
「通常人の身体っていうのは、80%程度の力しか出せないようにリミッターが掛かってるんだ。でも一旦危機的状況に陥ると、脳がリミッターを外して100%の力が出せちゃうことがある。所謂『火事場の馬鹿力』ってやつだね」

「僕は……そうだったということですね」

リミッターが在るということは即ち、人の身体は100%の力に耐え切れないということ。

しかし今回、緑谷はその『火事場』状態のまままで長時間戦い続けた

上に高圧の電撃を浴びせられ続けていた。個性のおかげでタフネスが上がっていたから死は免れたものの……高電圧という強いストレスに晒され続けたことで、筋肉がすっかり萎縮してしまっている。これは腕だけではなく、全身……心臓をはじめとする不随意筋も含めた話だ。

神経を繋げ直すのに失敗していたら、確実に一生ベッドの上で生活せざるを得なくなっていたと医者は力強く断言した。強い確信を以って断言されたことで、緊張して唾を飲み込む。強い緊張状態にあるからか、梅干しを口に含んだ時のように唾液が際限なく溢れてきている。

「筋肉の話ばかりだけど、骨……そして何よりも靭帯がマズい。靭帯ってというのは関節を保持するところなんだけど、そこが酷く劣化してる。あと三度か二度か……同じような怪我が続けば、腕の使えない生活になると思っと思ってね」

「リハビリで、治るようなものなんですか？」

「そこは大丈夫だよ。こういう怪我の時、元に戻すにはリハビリあるのみだからね。両腕は、痛くても我慢してガンガン使ってって」

「はい……」

萎縮した筋肉は、時間が経って身体がストレスを忘れれば回復する。しかし、それまでは心臓の機能低下など様々な問題があるため、無理をすることは厳禁。身体の調子と相談しながら、慎重かつ積極的にリハビリを行なっていく必要がある。

「後のことは地元……雄英の方でお任せすることになってるから。君は今日で退院だね」

「はい……お世話になりました」

正直、矛盾しているような気もしたが……緑谷はそこは口に出さず、医者に礼を言ってから診察室を後にしようとする。しかし医者とは、何か思い出したかのように緑谷を呼び止め、彼に何かを渡した。「リカバリーさん、呆れてたよ。きつとこれまでもたくさん怒られてきたんだろうね。でも……君に救けられた人は確かにいる」

「これ、冴汰君の……？」

「病は気から……あんまり悩んでないで、前向きに考えてね」

「……はい！ありがとうございます！」

『きんたまなぐつてごめんなさい』

洗汰からの感謝の手紙。何度もボロボロになり死ぬような目に遭って、それでも救けると誓った男の子から……ヒーローなどロクなものではないと嫌悪していた子どもから送られてきた、純粹な感謝と謝罪の言葉が書かれた手紙を受け取り、緑谷は目尻に熱いものを感じる。今回、自分は爆豪を助けられなかった。それでも助けられた人がいるということ忘れてはいけない。

いつまでもウジウジしてはいられない。緑谷は潤んだ眼を擦ると医者に深く頭を下げ、『ありがとうございます！』といって診察室を後にした。

病室に戻って退院の準備をしながら、母に電話を掛ける。クラスメイトのお見舞いに診察と続いていたため、忘れていたのだ。電話口から聞こえてくる母の声は震えていて、ただ息子の無事を喜んでいっている訳ではないようであった。

「うん、今日で退院だけど……うん。まだ用事が残ってるから家に帰るのは明日……明後日くらいになりそうなんだ。うん……雄英も生徒を遠くに置いときたくないっほい。マスクミ対策してるってこと又聞きした。うん……大丈夫。動けるようにはなってるよ。リカバリーガールにはかなり強めに治癒してもらってたそうだし、神経も繋がって後遺症はほぼ残らないそうだから……」

「……出久」

——雄英、行かなきゃダメ……？——

返事を待つことなく、通話は切れた。母の言葉を届けなくなったスマホを鞆に戻し、緑谷は心の中で何度も謝罪を繰り返す。これからまたしても危険な目に遭いに行こうとする親不孝を、心の中で何度も何度も謝った。

「ごめん、お母さん……僕は、行かなきゃ」

言ってしまうえば、ヒーローになる程親不孝なことはないのかもしれない。見ず知らずの他人のためにその命を費やす……親の心情を考えれば、それはもう気が気でないだろう。

自分の手が届くというのなら……救けずにはいられないと、そう思ってしまうのだ。

「八百万……『考えさせてくれ』って言ってたけどどうすんのかな」

「俺らがどんだけ逸つても、結局はアイツが発信機を作ってくれなきゃ始まんねえからな……」

「……お待たせ致しましたわ」

「ごめん、遅くなったかな」

約束の時間となって、切島と轟は病院の正面玄関前で2人が答えを出しに来るのを待っていた。2人がどれだけ焦っているか、この作戦は八百万の協力がなければ始まらない。『考えさせてくれ』とは言われているが、それで答えがNOだった場合は諦めざるを得ない訳で……そうしてヤキモキしながら待っていると、緑谷と八百万は同時に玄関をくぐって現れた。

「八百万、答えは……？」

「私は、この作戦を……」

「待て」

「ッ……飯田君……!？」

「待てよ、オイラもいるぜ……」

「峰田君まで……？」

切島が八百万に考えが纏まったのかと尋ねようとすると、それを背後からの声が止めた。4人が振り返った先にいたのは、唇を一文字に結び激情を抑える飯田と……そして峰田であった。

「なぜ君なんだ……緑谷君!？俺の私的暴走を咎めヒーローでいさせてくれた君が……共に特赦を受けたハズの君がッ！なぜ俺と同じ過ち

を犯そうとしているんだ!? あんまりじゃないか……ッ!

「おい飯田、何言ってる……」

「俺達はまだ保護下にいる。ただでさえ雄英は大変な時だというのに、君達の行動の責任は誰が取るのか分かっていいのか!？」

「い、飯田君、違うよ! 僕らだってルールを破っていいなんて……」

そこまで言ったところで、緑谷の左頬に鈍い衝撃が走った。飯田が緑谷を殴ったのだ。勢いでよろけた胸ぐらを掴み、飯田は峰田が制止するのも聞かず感情を昂らせる。

「やめろよ飯田ッ、暴力は……!」

「俺だって悔しいさ! 心配してる! 学級委員長なんだからクラスメイトを心配するんだ! それ爆豪君のことだけじゃない!」

大怪我を負い、床に伏せる緑谷を見て……飯田はその姿を兄に重ねた。もし、緑谷達が暴走した挙句に取り返しつかないことになったら――

——周りの心配は、自分の心配はどうだっというのか。

「僕の気持ちは……どうでもいいというのか……」

「飯田君……」

「飯田……俺達だって何も、正面切ってカチコミをかける気なんざねえよ」

「戦闘行動なしで助け出すんだ! 要は隠密活動って訳だ……それが俺らができる、ルールには触れねえ戦い方!」

戦闘行動なしで救ける……それがいったいどういうことかとか分かって言ってるのかと、飯田は面食らって言葉を失う。そんな飯田に對して、八百万は自分はストッパーとして同行するつもりだということとを告げた。万が一の時には決してルールに触れないよう、監視の役目をする。

「八百万君、君まで……!?!」

「ごめん……飯田君。僕は切島君にまだ手は届くと言われて、いてもたってもいられなくなった。自分が動いて助けられる人がいるなら……救げたいと思っちゃうんだよ」

爆豪を救けに行く。その意思は4人とも固いということを知った飯田は、フウー、と大きく息を吐いた。話し合いは平行線……彼らを説得することはできないということに悟る。

「なら……オイラ達も行くぜ！」

「峰田君!?何で……」

「オイラ達は元々、お前らが行くのを止めるつもりで来た。でも……どうしても止められなかったならせめて、暴走して戦いになったりするだけで止めようと思ってたんだよ」

「そうだ……納得はできないが、だからこそ監視のために我々も同行する！少しでも戦闘の可能性があれば即座に撤退させるため……つまりは八百万君と同じウオッチマンという訳だな！」

行くのを止められないならば。監視役として同行すると飯田と峰田は言った。戦闘行動になりそうなら絶対に止めるし、そうなることなく救けられるのならそれに越したことはない。それに迂遠な行動を取りながら救けるというならば、人手は多い方がいいだろうと。

「皆さんのお気持ち、よく分かるからこそ妥協案を受け入れたということをお忘れなきよう」

八百万がそう言うと、峰田が小声で「戦闘皆無で救けるなんて、そもそも非現実的だけどな……」と耳打ちしてくる。その通り、冷静になれていたならそもそもこんな案は出てこない。

実際、クラスのみんなに話した時は『そんな作戦絶対に無理だ』と反対されていた。麗日などは作戦の難易度だけでなく、『爆豪君……きつとみんなに救けられんの屈辱とちやうかな……』と爆豪の心情の観点から苦言を呈している。連れ去られる直前の爆豪の言葉を聞いていた緑谷は、心当たりがあるというようにグツと唾を飲み込んだ。言葉では通じなくとも、現場をその眼で確かめれば自分達の考えがどれだけ非現実的であったかに気付くはず。八百万が同行すると決めたのは、そんな打算もあった。

「発信機の示した座標は……神奈川県横浜市神野区という所ですわ。長野から約二時間……10時頃の到着です」

「一応聞いとくが……俺達がやろうとしていることはエゴってやつだ。」

引き返すなら今だぞ」

「迷うくらいならそもそも言わねえ！アイツを敵のいいようにさせてたまるかってんだよ！」

「オイラもだ……怖い、怖いけど！何処かでまだ鳴神が頑張ってるかもしれないんだ……！アイツが頑張ってるなら、オイラが頑張らない訳にはいかねえんだよ！お前らを止められなかった以上、死なば諸共よー！」

「だが……そういう訳にはいかない。監視役として必ずや、君達にルールは犯させない！」

「緑谷さんは……どうなんですの？」

「僕は……」

——余計なお世話つてのは、ヒーローの本質でもあるんだぜ！

緑谷がヒーローを夢を諦めずに済んだのは、オールマイトに見初められたからだ。世界が誇る平和の象徴に全てを貰った。ならば……

「……後戻りなんて、できないよ」

く

「どうだいドクター、天威と御雷入道は？」

「順調に回復しとるよ。『疾風迅雷』のような高い再生能力があれば、こんなメンテナンスなど要らんのだがなあ……」

「しようがないさ。あの力を再現するには複製程度じゃ不可能って結論が出ただろ？『超再生』もキャパが足りないせいで持たせられなかったし、実験はコストと足が足りリスクを考えればやり辛い。天秤にかけて結果さ、仕方ないことだ」

「それでも……ううむ、どうしてももつたいたいと思ってしまうのは性かのう」

サンプルから複製した『疾風迅雷』には、死すら否定するあの再生能力は付いてこない。何度も実験を繰り返して結論は出ているが、今

ある『超再生』の比ではない強力な能力が手に入らないというのはドクターには悔しいものであった。未だに未練がましく唸っている。

襲撃で返り討ちに遭ったことで、大きなダメージを負った天威と御雷入道は治療を受けていた。巨大水槽に満たされた薬液に浸かり、大量の酸素と栄養を取り込んで傷を癒していく。

脳無のように知力が落ちている御雷入道は呻き声を上げるばかりであったが、天威は治療の間ずっと緑谷への復讐心で頭を満たしていた。次会った時はどうやって殺してやろうか……栄養や血液を送るためのチューブで繋がれた頭で、ずっとそんなことを考えていた。

「緑谷出久……次は必ず殺してやります！」

「いい心がけだ。次は頼むよ……僕の愛娘」

「ところで先生よ……御雷入道はいつ頃『取り入れさせる』つもりなのかね？」

「ああ……そのこともあったね」

ドクターは視線を2人の入っている水槽からもう一つの水槽へ移し、その面をコンと叩く。オール・フォー・ワンはそんな音を聞いて、意識の戻らないまま水槽で揺蕩う葵を見やる。

栄養と休養さえ摂っていれば、どんな怪我からだって快復できる龍の力。そのおかげでより多く質の良いサンプルを手に入れることができた。敵連合の戦力は、大幅に向上したと言えるだろう。後はもうこっちで数は増やせるし、オリジナルをいつまでも置いておく意味はない。

どうせ処分するのなら、最期まで敵連合のために使ってしまったおう。オール・フォー・ワンは御雷入道に葵を取り込ませることで、その力を更に引き出すことを考えていた。

「最期まで、役に立ってもらうよ」

悪は唇を歪め、ニヤリと嗤った。

## 会見と爆豪と

緑谷達が、神野に行く少し前のこと。

「雷羽ちゃん。こんな時間にどうしたんだい？」

「立甲のおじさん……お姉ちゃんは……お姉ちゃんは大丈夫なの!? 大丈夫なんだよね!？」

雄英の合宿先が襲撃を受けたというニュースが流れてから、いても立ってもいられなくなった雷羽は家を飛び出て外を走っていた。

靴も履かずに出たせいで、足の裏はアスファルトに削られて血染めになってしまっている。まだ10歳の子どもの体力では大した距離は走れず、息切れして止まっていたところで立甲は声をかけた。

心配する気持ちはよく分かる。ただ襲撃されたというだけでなく、風華は行方不明とまできてしまっているのだから。自分の娘を拐われている立甲には、その気持ちが痛い程分かっている。

「心配するのはいいよ……でもね、君がするべきことは助けに行くことじゃなくて、家で風華ちゃんの帰りを待つことだ。君のような小さな子どもが出る幕じゃないんだよ」

「でも……それじゃわたし、お姉ちゃんに何にも返せない! ずっと、ずっと……赤ちゃんの時から守ってもらってるのに……! わたしは、お姉ちゃんに何も返せてないんだよ……!」

「……雷羽ちゃん、直接行動することだけが恩返しじゃないさ。君が無事に、平和に、健やかに生きていることこそが、あの子に対する最大の恩返しだと僕は思っているよ」

だから、君が危険を犯すことはない。そう言っただけで立甲は暴走しようとする雷羽を止めた。ハンカチを渡して涙を拭わせ、頭を撫でて落ち着かせる。

「これは大人の仕事だよ。大丈夫……風華ちゃんは必ず連れ戻すから、安心して待っていてくれ」

「お願いします、おじさん……!」

——研究所は、しばらく休止だな。

久方ぶりの実戦となるが、大事な仲間を2人も奪われた怒りは計り

知れない。個性研究所の研究員達はプロヒーローとして、拐われた子ども達の奪還に当たることを決めたのだった。

「

「着いたな、神野」

「この街の何処かに、奴らが……」

神野駅を降りた6人は、既に遅い時間だがまだ人で賑わっている街並みを見て少なからず驚く。こんな賑やかな場所に敵が……そう思うと何か、平和の紙一重さというのを実感するものだ。

「よっしゃ八百万、爆豪は何処に……」

「お待ちくださいいな切島さん！ここからは、用心に用心を重ねなければなりませんわ！私達は敵に素顔を知られているのですから！」

「うん、隠密行動しないとね」

「だが、それでは搜索もままならんぞ？」

そこで自分に提案があると、八百万はあるショップを指差した。この時の彼女は何かソワソワしていて、顔も心なしか赤くなっていた。恥ずかしさと言うよりは好奇心で、『激安の王道ドンキオオテ』と看板を掲げた店に突撃していく。

小走り程度の歩幅のはずなのに、その歩く速度がめっちゃくちゃに速い。八百万の謎のテンションの高さに着いていくべく、残りの男子勢も彼女を追って店の暖簾をくぐるのであった。

「ナ、ナニミテンダオラー！スツゾオラー！」

「違う、もつと顎上げてガラ悪く！」

「パイオツカイデーチャンネーイルヨー！」

「夜の繁華街……そんな所子どもが彷徨いては目立ちますし、必要なことですわね！」

八百万の提案は、さまざまアイテムが格安で売られているショップを使って変装してしまうというものであった。ドレスとサングラスでいわゆる嬢の姿になった八百万は、どこか満足げにフンと鼻を

鳴らす。

その後ろでは、緑谷と飯田が切島から演技指導を受けていた。彼ら  
が変装しているのは、街のチンピラと客引きである。普段の彼らとは  
全く違う人種になり切らせるために、切島はかなり熱を入れて2人が  
それっぽい演技をできるようにしていた。

「変装するのはいいんだがよ……別に店で道具を買わなくても、お前  
なら創れたんじゃないかねえのか？」

「こそ、それはルール違反ですわ轟さん！私が個性で何でも創ってし  
まえば流通が……そう！国民の一人として流通をしっかりと回して  
いかねばなりませんものね！経済を！」

「ドンキ……行きたかったんだな」

「このピュアセレブめ……」

「あ、アレって雄英じゃね？」

「ツ……オ、オツラア……！」

通行人の何気ない一言だったが、今の彼らにはこれ以上ない程刺さ  
る発言でもある。取り敢えず凶星突かれたのを誤魔化そうと、チンピ  
ラらしい言動を取る緑谷だったが……通行人の話に出ていた雄英は  
自分達ではなく、テレビに映っている相澤先生達のことであると知る  
のに時間はかからなかった。

『では、先程行われた雄英高校謝罪会見のVTRをご覧ください』

「アレって、相澤先生……!?!」

「B組のブラド先生もだぜ……！」

『この度……我々の不備からヒーロー科1年生26名に被害が及んで  
しまったこと、ヒーロー育成の場でありながら敵意への防衛を怠り社  
会に不安を与えたこと、謹んでお詫び申し上げます。まことに申し訳  
ございませんでした』

「メディア嫌いの先生が……」

「悪者扱いじゃねえか……！」

メディアを嫌い普段は表に出てくることのない相澤が、髭を剃り髪  
を整えて、スーツをしっかりと着用して会見に臨んでいる。そのこと  
が、緑谷達には異様な光景に見えていた。

記者から寄せられる質問は、『生徒の家庭にはどんな説明をしていたのか』『具体的にどのような対策を行なってきたのか』など、体育祭を開催していたことから分かるようなことばかり。雄英の基本姿勢なら、メディア側も把握しているはずなのに。

『周辺地域の警備強化や、校内の防犯システム再検討……強い姿勢で生徒の安全を保障すると説明しております』

「は？」

「何言ってるんだコイツら」

「守れてねーじゃん」

厳しい声が街に響く。どんなに対策して安全に気をつけようとも、襲撃が起きて生徒に被害が出たということに変わりはない。

ヒーローは結果が全て……最良の結果を出せなかった先生達へ、厳しい視線と批判の声が街の人達から寄せられていった。

空気が澱んでいく。

「……行きましょう、皆さん。こんな所で長居している暇はありませんわ」

「発信機を二つ……？何かあったのか？」

「ええ……付けてもらった発信機は、一つだけではありませんの。なのでここからは、二手に別れて行動することを提案しますわ」

八百万が泡瀬に頼んで発信機を付けてもらっていた敵は、風華によって倒された。逮捕者の中にその敵がいなかったことから、反応の内一つはその敵のものであると分かる。

もう一つは、敵を追いかけていった風華に頼んでいたものである。こっちは既に一つ付けていたことと風華がかなり消耗していたことから、あまり期待していなかったのだが……どうやらしつかり付けてくれていたようであった。

行方不明となった3人は、恐らくこの反応のどちらか……或いは両方にいる。隠密行動を取るならば一緒に動く人数は少ない方がいいということもあって、八百万は二手に別れて行動することを提案したのである。反論もなく、全員が了承した。

「取り敢えず、ケータイで連絡はこまめに取り合おうとしてよ。どう

やって分けんだ？」

「僕らと八百万君は別れた方がいいだろうな。監視役は両方に一人は置いておきたい」

「変装のコンセプトが似てる俺が、八百万と一緒に行こう。緑谷と切島はどうする？」

「僕は……もしもの時に逃げるには機動力があつた方がいいし、轟君達と行こうかな」

「んじゃ、俺は飯田達とだな」

「決まりですわね、それでは参りましょう！」

、

ほぼ同時刻。

いつものバーに集まった敵連合は、爆豪をコンプレスの球から普通の拘束具に移して彼を仲間に引き込むべく勧誘を行っていた。

「不思議なもんだよなあ……」

どうしてヒーローが責められてる？会見のVTRを流しながら、死柄木は拘束した爆豪にそう言って語りかける。

「彼らは少し対応がズレてただけさ。守るのが仕事だからとはいうが、誰にだってミスの一つや二つはあるものだ！俺達は別に良いが、お前らはいつでも完璧でいろつて？現代ヒーローってのは堅っ苦しいモンだと思わねえか……？爆豪君よ」

「守るといふ行為に対価が発生した時点で、ヒーローはその名の持つ意義を失った。これはステインのご教示でもある！」

人の命を金や自己顕示に変換する異様。

ギチギチのルールでそれを守る社会。

敗者を励ますどころか責め立てる国民。

敵連合の戦いは今の社会に対する『問いかけ』であると、死柄木はそう言った。

ヒーローとは、正義とは何か？この社会の有り様は本当に正しいのか？そういつたことを一人一人に考えてもらおうのだと。そのために

敵連合は戦ってるのだと力説した。

「俺達は勝つつもりだ。君も、勝つのは好きだろ？ 雄英体育祭は残念だったな。鳴神がいなけりゃ君が優勝だったろうに……残念なこと、アイツに復讐する機会は二度とないが」

「死柄木、脱線してるぞ」

「おつといけねえ。茶毘、拘束外せ」

「いいのか？ 暴れるぞコイツ」

スカウトなんだから対等に扱おうと、死柄木は茶毘に命じて拘束を外させる。どうせこの状況では反抗もできないと分かっているはずだと、そういう信頼もある。

茶毘は鍵をトウワイズに渡して、彼に鍵を開けさせた。口では嫌だと言っているが、いそいそと拘束を外すのであった。

「強引な手段だったことは謝るよ。けど……我々は悪事と呼ばれる行為に勤しむだけの暴徒ではないということとは分かってほしい。君を拐ったのは分かり合えると思ったからだ」

「俺達は事情は違えど、人に、ルールに……そしてヒーローに縛られ苦しんできた。君ならその気持ちを分かって……!?!」

「死柄木ツ……!?!」

「黙って聞いてりゃダラダラと……！馬鹿は要約ができねえから話が長え！ 要は『ヒーローに嫌がらせしたいから仲間になれ』ってことだろ!?! 無駄な話ご苦労だったなア……!?!」

もつと近くで話をしようと、死柄木は拘束の外れた爆豪にゆっくりと歩み寄っていく。目線を合わせようとしやがんだところで……爆破が死柄木の顔を覆う掌を吹き飛ばした。

死柄木達の話は、爆豪には少したりとも響いてはいなかった。そもそもが的外れ……爆豪はただ個性を使って暴りたいから、ヒーローを目指しているという訳ではない。

オールマイトが、勝つ姿にこそ憧れた。

彼のようなヒーローに……勝つことで救けるヒーローに憧れた。

そんな姿をカッコいいと思い、超えてやりたいと思った。誰に何を言われようと、そこだけはもう曲がらないのだ。

「お父さん……」

飛ばされて落ちた掌を見て、死柄木は呆然としたまま立ち尽くしている。身に纏う雰囲気ガラリと変わったのを、全員が直感した。

）

「錚々たる顔ぶれが集まってくれたな」

「そりゃあそうだ！敵連合をどうにかできるかもしれないともなれば、いろんなヒーローに協力を募るのは当たり前さー」

「一週間という短い期間ではあるが、教え子が拐われたというのなら助けに行かぬ訳にもいくまい」

「フン……！ソイツに関しては、自分から拐われに行つたと聞いているがな。そもそも何故俺が雄英の尻拭いを……！」

「何を言っている、エンデヴァー。アンタも拐われた教え子を助けに来たのだろう？ならばベストジーニストとそう変わらんだろう」

No. 1ヒーロー

『オールマイト』

No. 2ヒーロー

『エンデヴァー』

No. 4ヒーロー

『ベストジーニスト』

No. 5ヒーロー

『エッジショット』

それだけでなく、神野区近辺に事務所を構えるヒーローや地方から駆けつけたヒーローなども戦力として加わっている。一介の敵組織を相手にするには異例な顔ぶれが、対策本部に集まっていた。

「あなた達まで来るとはね。いつも研究ばかりでヒーローの活動には興味がないものと、そう思っていました……」

「研究だって奉仕活動の一環。それに大事な仲間を助けるためだ、手

間も暇も惜しめんだろう」

「必ず取り戻します。そのために協力するのです」

「さあ……作戦会議を始めよう」

現在は捜査は難航中……雄英に協力してもらって社会にそう思ってもらおうよう仕向けている。誰にも意識されていない今がチャンス。ここからは完全なスピード勝負となる。

オールマイトをはじめ、日本の名だたるヒーローが集まったこの空間で、敵連合を一網打尽にするための作戦会議が始まった。

## 嵐、来たる

『こちら飯田チーム。無事に発信機の示す場所まで辿り着くことができたぞー!』

「こちら八百万チーム。こちらは少し距離が空いているため、もう少しかかりそうですわ。そちらの信号は私が確認した限り、丸一日そこから動いていないようですが……そこに爆豪さんがいるとは限りません。どうかお気をつけください」

『大丈夫だ。少しでも危険だと判断したら、すぐに止めてみせる。友であるからこそ、警察への通報も辞さないつもりだ……!』

「それでは……よろしくお願い致しますわ」

「飯田のやつ、なんて言ってた?」

「発信機の示す場所に到着したと。これから確認に当たるようですが……必要な道具などは、いったいどうするつもりなのでしょうか」

「ま、何かあんだろ。切島が用意するものがあるつつって、見舞いの後何か買ってたからな」

会話を続けていく中で、八百万は『敵がいるからと言って、爆豪もそこにいるとは限らない』と2人に釘を刺す。自分たちがどれだけの細かい情報を頼りにここにいるのかというのを、冷静に考えながら行動してほしいと。

耳郎や葉隠のように、隠密行動に優れる者はこの中にはいない。だからこそ行動は慎重に起こさねばならないし、危険だと監視役の3人が判断したならすぐに撤退するように釘を刺している。

緑谷も、轟も……一度決めてしまえば成し遂げるまでは止まらないということを知っている。そんなところを友達として、競い合うライバルとして知っているから。

それに、八百万が自信を取り戻せたのは轟の言葉があったおかげである。今回この作戦に参加したのには、そのお返しというつもりもあったが……それでもこれ以上の譲歩はできない。

——私は、轟さんに救われました。あなた達が爆豪さんを救うとい

うのなら……！あなた達のご事は私が救ってみせますわ！

「ありがとう、八百万さん。僕らができる範囲でできること……考え  
ていこう」

「ブツブツ始まったな」

「これぞ緑谷さんって感じですよ」

緑谷がブツブツとできそうな範囲のことを考えているのを聞きながら、3人は発信機の示す場所へと向けて歩いていくのであった。

「電気も点いてねーし……中も人がいるって感じはしねーな」

「木を隠すなら森の中という訳だ。廃倉庫を装ってカムフラージュして  
てるのだろうか」

「どこか中を確認できそうなトコあるか？」

先にもう一つのポイントに到着した切島・飯田・峰田の3人は、廃倉庫を装った敵のアジトに入れそうな所はないかと探しているところであった。途中酔っ払いに絡まれて離れたり、正面のドアに雑草が茂っているのを見たりといろいろあったが。未だに中の確認はできず  
にいた。

「そう多くはねえけど、人通りあるな」

「目立つ動きはできんぞ、どうするつもりだ？」

「一旦、裏に回ってみようぜ。人目も避けられるしそれで分かること  
もあるかもだからな」

細い路地裏を通って、3人はアジトの反対側へと回っていく。胸板の厚い飯田が引つ掛かりかけたりとアクシデントはあったが、回っている内に中の様子を見れそうな窓を発見した。

窓はかなり高い所にあるが、それは肩車などをすればなんとかかなる。問題なのは見た感じ中がかなり暗そうなことで、暗視ゴーグルでもあればと飯田が言う。しかし用意のいいもので、切島は事前に購入しておいた暗視ゴーグルを取り出した。それをこの中では一番軽い

峰田に渡し、中を確認させる。

「あまり身を乗り出さないようにな！何かあったらすぐに逃げ出せるようにしておくんだぞ！」

「どうだ峰田、何か見えたか？」

「いや……汚ねえだけで特に何、も……!?!」

「何だ!?!峰田、いったい何が見えたんだ!?!」

ゾクリと身体を震わせ、峰田は飯田の肩から飛び降りていく。何を見たのかと尋ねると、質問には答えずに黙ってゴーグルを渡した。仕方なくゴーグルを受け取り、代わりに自分が飯田の肩に乗る。切島が見たのは汚い空間だけだったが……

「左奥だ！切島、奥の方見てみる……!?!」

「左奥？いったい何が……うおおああ!?!」

「切島君!?!君までいったい何を見たんだ!?!」

「んだよアレ……脳無じゃねえか……!?!」

……峰田の言う通り奥の方を見ると、そこには大きな箱の中に保存された大量の脳無がいた。施設の正体は、脳無の製造・保存場であったのだ。

どうする？中に潜入して、爆豪がいるかどうかを確かめてみるか？そうやって次の行動をどうするかと話し合っていたその時……

「うおっ……!?!」

「何だツ……!?!」

「痛ってて……何が起きたんだ!?!」

……爆音が、3人を襲った。

く

『事件の最中、生徒に戦うことを促したとお聞きしました。その意図をお聞かせください』

『当時は私共が状況を把握できなかったため、最悪の事態を避けるべくそう判断致しました』

『最悪の事態ですか？25名もの被害者と3名の行方不明が出たのは

最悪ではないと?』

あの場でいう『最悪の結果』とは、生徒が敵に対して成す術なく殺されることであった。確かに今回は最悪に近い結果となってしまうが……あくまで近い結果である。

あの状況で死者が出なかつたことは、本当に不幸中の幸いであると相澤ら記者に説明した。

『被害の大半を占めているガス攻撃……敵の個性とその後の成分検査から、催眠ガスの類であつたことが分かっています。生徒のメンタルケアなども行つておりますが、深刻な心的外傷などは、今のところ見受けられていません。最悪とは未来を脅かされること……我々はそう考えております』

『拐われた2人にも、同じことが言えますか?』

体育祭準優勝、とある事件に巻き込まれた際は懸命に抵抗を続け、爆豪は経歴こそタフなヒーロー性を感じさせる。

しかし、その体育祭で見せた暴言や相手を甚振るような戦いぶりに、衆人環視の中での大喧嘩、表彰式での不貞腐れた態度。客観的に精神的に不安定な面が散見されると記者は指摘した。

それだけではなく、記者は葵の経歴の方にも言及していく。かなりの悪意を込めた言い草で。

葵は個性が発現した幼少期、個性のエネルギーが発する熱によつて死にかけてことがあつた。それ以来ずっと、個性研究所でコントロールのための特訓に勤しんできた。特訓の甲斐あつて自らの熱に焼き殺されることはなくなつたが……それでも熱が籠る体質は治らず、定期的に発散しなければ身体を焼くリスクは残つたままである。

表には出さずとも、きつと少なくないストレスが溜まっていたのだらうと記者は言う。もしも敵連合がそういつたところに目をつけた上で、2人を拉致したのだとしたら?言葉巧みに彼らを勾引かし悪の道に染めてしまったら?

『未来があるとなぜ言い切れるのです?その根拠をお聞かせください』

悪意ある言葉は、相澤を怒らせ怒りに任せた発言をした時にそれを

スクープするためのもの。相澤のメディア嫌いを知つての挑発。

相澤が表情を陰しくしながら立ち上がるのを見たブラドは、挑発に乗って隙を見せてはいけないと彼を嗜めようとするが……相澤が取った行動は挑発に乗るではなく、真摯な謝罪であった。

『行動については、私の不徳と致すところ。しかし体育祭での爆豪の言動は、彼の理想の強さに起因しています。誰よりもトップであることを求めてもがき、戦っている。アレを見て隙と捉えたのであれば敵は浅はかであると、そう考えております』

『立甲も同様です。彼女は常に、己に課された業と戦いながら研鑽を重ねています。その姿を見ている私としては……彼女が敵に勾引かされることなどあり得ないと、そう考えております』

『根拠となつてはおりませんが？感情の話ではなく具体的な対策を伺っています』

『我々は現在、警察と共に敵連合及び2人の捜索を進めております。いつまでも手をこまねいている訳ではありません。爆豪君、立甲さん、2人とも我が校の生徒です。必ず、取り戻します』

『言ってくれるなア……雄英も、先生も。そういうこつたよクソカス連合！』

わざわざ大掛かりな襲撃をかけて、成果は自分と立甲の2人だけ。さつきまでの話で自分が敵連合にとって『利用価値のある重要人物』であると言質も取れている。

心に取り入ろうとする以上、方針が変わらない限り奴らが本気で殺しに来ることはない。ならば自分はどうするべきか……

……決まっている。2、3人は道連れにした上で無事にここから脱出する。それ以外に何をするべきだというのだ。

風華は先程の話ぶりからして、どこか別の場所で始末しようとしているらしい。葵の方も情報を敵連合が漏らさない限りは、爆豪にその居場所が分かることはない。行方も無事かも分からない相手を気にするよりは、まずは自分だけでも無事であるべきだろうと爆豪は判断

していた。

「言つとくが、俺はまだ戦闘許可を解除されてねえからな！ぜってえぶっ殺してやらアー！」

「自分の立場、よく分かっているじゃないの！ホント小賢しい子ね……！」

「血イ吸つとききますか？おとなしくなりますよ」

「いや……バカだろ。その気がないなら懐柔されたフリでもしときやよかつたのに……やらかしだ」

抵抗しようとする爆豪に、敵連合の意識はそつちに釘付けになる。しかし黒霧だけは、爆破で掌を弾かれた死柄木のことを心配していた。

飛ばされた掌は、言うなれば死柄木の精神安定剤のようなもの。それをぞんざいに扱われては激怒すると思った黒霧は、冷静でいろうと死柄木を嗜めようとするが……

「……手を出すなよ、お前ら……コイツは大切な駒なんだからよ」

「死柄木弔……？」

黒霧の心配に反して、死柄木は意外と冷静であつたしあまり怒つてもいなかつた。

「できれば、少しは耳を傾けてほしかつた。君とは分かり合えると思つていたからな……」

「ねエわ、ふざける」

ならば、仕方がない……死柄木はそう言つて大きくため息を吐き、ここまで意図して避けていたモニターに目を向けた。

ヒーロー達は、敵連合の調査を進めていると会見で言つていた。ならば悠長に説得をしている時間はもうない。自分でできないのなら、できる者の力を借りる……そのために、死柄木はモニターから様子を見ている『先生』に協力を呼びかける。

「先生……力を貸せ」

『いい判断だよ……死柄木弔』

自分の手に余る案件ならば、それができる者の力を借りる……教え子の成長を受けて、オール・フォー・ワンはニヤリと顔を歪めた。

「先生だあ……!?てめエがボスって訳じゃねえのかよ、白けんな」

「黒霧、コンプレス。また眠らせてしまつとけ。ここまで人の話聞かねーとは……逆に感心するぜ。あと敵連合のアタマは俺だよ。『先生』はあくまで善意の協力者さ」

「聞いてねーんだよ。話聞いてほしけりや土下座してあと死ね!」

にじり寄る死柄木に対して、背は向けずに一歩ずつ後退していく爆豪。最大火力で吹き飛ばせればそれが簡単だが、考えなしに撃つては黒霧のワープで対応されてしまう。

どうにかして隙を作つて、この状況を覆し裏の扉から脱出する……その方法を焦れる頭で何とか考えだそうとしていると――

「どーもオ、ピザーラ神野店でーす」

「は……?何でピザ……ッ!?」

――爆音と共に壁が砕け散り、そこからオールマイトをはじめとする大勢のヒーロー達がなだれ込んで来た。壁破壊の衝撃で、スピナーとコンプレスが飛ばされ瓦礫の直撃を受ける。

「何だっ……黒霧!」

「ゲート……!」

「先制必縛……『ウルシ鎖牢』!」

「木イだど!?こんなもの……!」

連合が何事かと狼狽えている間に、シンリンカムイの必殺技が彼らを絡め捕らえる。こんな木くらい燃やしてやると、個性を発動しようとした茶毘にはグラントリノの一撃が入り、彼を失神させた。これにより動きを封じられた連合は、この拘束を突破する手段を失った。

「流石は若手実力派だシンリンカムイ!そして目にも止まらぬ古豪グラントリノ!もう大丈夫だぞ爆豪少年!何故って……」

いつもの口上。雄英に入ってからには生で聞く機会も増えた、憧れの人の決め台詞。今の爆豪にとってその言葉は、安心を齎すものであった。焦って狭まっていた視野にその大きな身体が映ると、自然に口元が歪んで笑みが溢れてくるのが分かる。

「……我々が、きた!」

ヒーロー、逆襲の時来たる。

## 逆襲の関

「あの会見、まさか……！」

「示し合わせてたつての……！」

「その通り……攻勢に出た時程、守りは疎かになるもの。ピザラ神野店は俺達だけじゃない」

エッジシヨットが扉を開けると、機動隊が突入し死柄木達に銃口を向ける。あの会見は根津に協力を頼み、まだまだ捜査は難航していると思わせるような態度を取ってもらっていた。敵もまさか、会見のその日に突入されるとは夢にも思っていなかったであろう。困惑ぶりからよく分かる。

外にも警察と、エンデヴァーをはじめとする手練のプロヒーローが包围している。突入と同時に周辺住民への避難要請も行っており、もはや全方位隙はないと言っても過言ではなかった。

「怖かったろうに……よく耐えた！だが我々が来たからにはもう大丈夫だぞ、爆豪少年！」

「こッ……怖くねーよ！ヨユーだわクソ！」

オールマイトがここまでの心労を労うと、爆豪は照れ臭そうにその言葉を否定した。口では強がっているが言葉は震えており、彼でも敵と7対1の状況は流石に怖かったのだろうと分かる。

「クソが……せっかく色々小細工を考えてたのに何で、ラスボスの方から来るんだよ……！」

既に全員拘束されており、ここから逃げ出すのは簡単ではない。先生に何度も頼りたくはなかったが仕方ないと、死柄木は『持てるだけ持ってこい』と黒霧に命令した。

——脳無だな！

当然、オールマイトも構えを取る。脳無がここに転送されることなどないとは分かっているが、念のためである。

「俺達だけじゃないつてのは……こっちだって同じだぜ！つて……おい黒霧、早く出せ！」

「すみません死柄木弔……！所定の位置に格納してあるはずの脳無が

……ない……！」

「はア!?何がどうなって……」

「やはり……君はまだまだ青二才だ、死柄木！」

「死柄木は……敵連合は舐め過ぎたのだ。」

——俺アそこだけはもう、曲がらねえ！

爆豪のヒーロー精神を。

——生徒の仕掛けた発信機の信号と、聞き込み調査によって判明した複数のアジト。拉致被害者の一人がいる場所の特定はできたので、主戦力をそこへ送り被害者の奪還を最優先とする！

警察の懸命な捜査を。

——こちらベストジーニスト、脳無格納庫の制圧無事完了した！

そして……ヒーローの怒りを。

発信機の信号の動きから特定した、いくつかのアジトを別働隊が制圧。『座標移動』の個性を持つと推測されている黒霧が、脳無を移動させるのを妨害するべく中の物を動かしておく。

これにより敵の加勢を予め防ぎ、最も警戒が薄くなる謝罪会見のその日に強襲。この場にいた敵連合の構成員を、全員捕らえることに成功した。

「おいたが過ぎたな……敵連合！死柄木、お前達はここで終わりだ！」

「クツソ……ふざけんな……ふざけんな！」

「ヒーローと警察……もう動いてたのか！」

「八百万の発信機が役に立ってたか」

「お2人とも……ヒーローが動いているなら我々の出る幕はありませんわ。ここはひとまず集合場所に戻り、飯田さん達に連絡しましょう」

「そう……ここは君達がいちやいけな所だよ」

背筋が凍るといふのはこのことだろう。発信機の示す地点に辿り着いた緑谷達3人は、そこに爆豪がいるのか確認しようと動き出したが警察とヒーローがいたので動けずにいた。

大人が行動しているのなら、子どもが要らぬ真似をして邪魔になつてはいけない。八百万が2人に別行動中の3人と落ち合う予定の場所に戻ろうと、声をかけたところ……背後から更に、別の人間が声をかけてきた。

「緑谷君だろ？変装までしてこんな所に来て……君達も爆豪君を取り戻しに来たのかい？」

「り、立甲さん……？どうしてここに」

「緑谷さん、お知り合いの方ですか？」

「知り合いと言えばそうだね。でも今はプロとしてここにいるから、本名じゃなくてヒーローネームで『アウェイク』と呼んでくれ」

声をかけてきたのは、『アウェイク』こと個性研究所の研究者である立甲醒であった。風華の担当研究員でもあり、拐われた葵の父親。緑谷も研究所を利用する時は、彼にお世話になっている。

個性研究所に務める者は一部を除き、全員がプロヒーローとしての資格を持っている。今回は相手が相手だし拉致被害者もいる、その上被害者の一人が身内ということで、敵連合逮捕に研究員総出で協力しているのであった。

「無茶するなあ、君達も。友達が拐われて心配する気持ちは分かるけど、これは大人の仕事だ。勝手な動きをして、逮捕の邪魔になつてはいけないよ」

「はい、おっしゃる通りですわ……」

「すみませんでした……」

「……まあでも、オールマイトのおかげでそろそろ終わりそうだし見

届けていくといいよ。こういった大きな事件は、職場体験じゃあ経験することもなかっただろうし……何だ？」

「何だ、コイツはツ……！トカゲ!？」

「噛みついてくるぞ！近寄らせるな！」

「何だ、何が起こってるんだ……!？」

「見ていけと言おうと思っただけど！この様子じゃあそんなこと言っつられないね！君達は警察の誘導に従って離れていて！」

「あつ、立甲さ……アウェイク！」

「何なんだアレ……脳無の新種か？」

せつかくここまで来たのなら、ヒーローが敵連合を終わらせるところを見ていくといい。そう言っつアウェイクがオールマイトの突入した穴を指すと、そこから大量の黒い化物が溢れてきた。

「オールマイト、いったい何が……!？」

「分からん……！だが、爆豪少年と敵連合の連中が連れて行かれた！私はそつちを追うが、コイツらの相手は任せてもいいか!？」

「何が起こってるんだ……脳無格納庫はベストジーニストが制圧していたはずだぞ！おいどうしたジーニスト!？応答しろ！」

「塚内、避難区域を広げろ！コイツら、何処までも湧いてきやがるぞ！」

「銃が効いてない！硬いぞこい……ぎやああ！」

「人を食って……この、化物があア！」

阿鼻叫喚。

オールマイト達、アジト内に突入したヒーローはその一部始終を見ていた。捕らえられた死柄木が負け惜しみの言葉を叫んだと思えば、突如虚空から湧いてきたヘドロのような液体が無数の化物を吐き出したのだ。その上で、ヘドロは敵連合と爆豪を飲み込んで消失させる。

黒霧はグラントリノが気絶させ、ワープによる移動や新たな戦力の投入は封じたはずだった。にも関わらず現れた、脳無とはまた違う化物。龍化した葵に似た姿をした化物の正体は何なのかは、オールマイトにはわからない。しかし、誰がこの化物どもを送り込んできたのか

は分かる。

——ワープなど、以前戦った時は持つていなかったはずだ……！雌伏の間に手に入れていたか、オール・フォー・ワン！

敵連合を逃したこともそうだが、何よりこのままでは爆豪の身が危ない。オールマイトは化物の処理をヒーローと警察に任せ、自分は全速力で敵連合を追いかけていった。

「何なんですのいったい……ッ！」

「分かんねえ……脳無ではねえみてエだが」

「あ……!? 2人とも、上見てッ……！」

「上……? いったい何があるって……ッ!？」

この場を離れようとしたところで、緑谷は恐ろしいものを見てしまった。全長40mはあろう超巨大な体躯に、左腕に備わった鉄筋のビルをいとも容易く斬り裂いた鉤爪。腰からはそれ自体が巨大な龍と思ってしまうような、蠢く七対の六百足。

そして……全身に迸るのは、他の全てを塗り潰し妖しく煌めく黒い稲妻。

「グオオオオオオオオ!!」

天を斬り裂く咆哮が轟く。葵を取り込んで更なる進化を遂げた御雷入道……改め『外道大嚴雷神』げいどおおいかづちのかみがその姿を現した。

く

「何だよ……何なんだよアイツは!？」

「切島君、声を抑えろ……！気付かれるぞ！」

峰田など、声も出せていない。それ程に目の前で起きた事態は異様なものであった。

少し前のこと。個性によっておよそ20m程に巨大化できるヒーロー『Mt.レディ』の一撃により脳無格納庫は破壊された。そのままベストジーニストや虎、ギャングオルカといった名だたるヒーロー達が突入して制圧。迅速に全ての脳無を捕らえることに成功する。

ヒーロー達は『オールマイトの方』という話をしていた。即ち、爆

豪はチーム八百万が行ったであろうその場所にいる。ならばもう自分達がここにいる意味はないし、戻って3人と合流しようとしたその時であった。

「すまないな、虎。いい『個性』だと、前々から思っていたんだが……この際だし丁度いいから貰うことにしたんだ」

悪の足音が、聞こえてきたのは。

敵連合の仲間が来た、そう判断したヒーロー達だったが暗くてよく分からない。足跡が進み靴が見えてきたところで、ベストジーニストは自身の個性を用いて男を拘束する。もしも一般人だったら大目玉だぞとMt.レディが言うが、ジーニストはそれに取り合わず縛りを強めていく。

「状況が状況だ、こういう一瞬の迷いが現場を左右する。『敵でした』では遅い……ノコノコとやって来るような奴だ、何もさせるな」

そう言って、謎の男を引き寄せた瞬間……風華の吹き荒ぶ大風にも匹敵する風の暴威が、周りのビルごとアジトを消しとばした。

「せっかく、弔が自分で考え……自分で導き始めたんだ。できれば邪魔はよしてほしかったな」

何が起こったのか？一瞬の出来事で、誰も起きたことを認識できていなかった。

一瞬……いや、一秒にも満たない短い時間。それでも男の気迫は、3人に確実な『死』を鮮明に思い浮かばせる。現実少しでもあの衝撃波のようなものがズレていたら、死んでいたのだから。

「コイツ……話が、違う……!」

ベストジーニストは、今回の作戦会議で警察から言われていたことを思い出していた。

『敵連合には、オールマイトに匹敵するブレーンがいる』

狡猾で用心深く、自身の安全が保障されない限り表に出て来ることは絶対でない……、だからこそ連合の確保から被害者の救出、ブレーンの捕捉までを可能な限り迅速に行うという手筈であったのに。

——なぜ、そのブレーンが戦場に出ているのだ!?

衝撃波が来る瞬間に、仲間のヒーロー達は可能な限り端に寄せて直

撃を回避させた。そのことをまるで子どものお遊戯会を褒めるように、乾いた拍手で男は褒めそやす。そして腕を伸ばすと、その先から飛ばされた『何か』がベストジーニストの腹を深く抉り取った。

「相当な練習量と実務経験で培われた強さ……君の個性は要らないかな。弔とは性が合わない」

一瞬で戦況がひっくり返った。逃げなければと分かっているのに、身体が動いてくれない。心の底から染み入る恐怖が、身体をこの場から動かすことを拒んでしまっているのだ。

自分の心臓の音だけが聴こえる中、聞き覚えのある声が向こうから聞こえてきた。ゲホゲホと吐き気を抑えるような咳払いに、『くっせえ……何なんじゃこりやあ!』という叫び声。別の所にいたはずの爆豪が、この場所に連れて来られたのである。

「ゲホッ……臭っせえ……!」

「また失敗したね……弔。それでも決してめげてはいけないよ。またやり直せばいい。こうして仲間も爆豪君も取り戻した……君が『大切なコマ』だと判断したからだ。いくらでもやり直せ。そのために僕がいるのだからね」

「爆豪……それに死柄木……!」

「死柄木に……師がいたのか!」

「ダメだ切島……今はダメだ!」

「分かって……クソ!」

衝動的に出ようとした切島を、峰田が止める。

補習のために最初から施設にいた切島は、みんなが生死を懸けて戦っている中で待つていることしかできなかった。なのに今、目の前に助けに来た相手がいるのに怖くて動けない。なんて情けない奴だろうと自嘲する。

まだ、自分たちには気付いていないはず。出なければあんな悠長な話はできないだろう。ここからの距離は6〜7mくらいなので、自分の硬さなら耐え切れるかもしれない。だが、その後のことがどうしても思い浮かばない。考えなしに動けば全員を危険に晒すし、早く動かなければ爆豪が再び拐われてしまう。そして……それを分かっている

るからこそ飯田も峰田も切島を止めているのだ。

——今度は、俺が守るんだ……！

救げたいと思う気持ちは変わらない。だからこそ動かさせはしない。学級委員長として、友達として止めているのだ。戦闘せずに出すという目的はもう果たせないだろう。ならば今やるべきことは無事にこの場から脱出すること。

そして、それをする機会は——

「全て返してもらおうぞ、オール・フォー・ワン！」

「また僕を殺すか、オールマイト！」

——空を駆けて、やって来た。

## 生還

とあるビーチでのこと。美しい夜景を眺めながら浜の散歩を楽しんでいたとある観光客は、水平線の向こうが赫に染まっているのを見た。

深夜ということでは少ないが、この時浜にいた人達全員が海に釘付けになっていたことから、目の錯覚ではないと分かる。ならば敵の仕業かもしれないし警察とヒーロに通報を……そう思い立ってスマホを取り出したところで、海の向こうの赫い世界は元の黒い星空を取り戻す。

「何だったの、今の……?」

「ねえアレ、誰か向こうにいない?」

「ホントだ、人いるじゃんヤバくね!」

「敵か!? いや……何処かで見たような……」

「女の子……? うわちよつと、大丈夫!」

「救急車、救急車呼ばんと!」

海の中から飛び出た小さなシルエット。いったい何者かと身構えていた観光客達であったが、すぐにその正体は分かる。

海藻が絡まる腰まで伸びた金髪に、身体中を巡るように迸る翠色のスパーク。一糸纏わぬ全裸であるその人物が浜辺に降り立ったその時、雄英体育祭を観戦していた観光客には、彼女がいったい誰なのかすぐに理解できた。

「雄英の……鳴神風華じゃん!」

「わたしのこと……知ってるんですか」

「当たり前じゃん! 体育祭優勝してたでしょアレ私生で見て……つて違う! 何で海から!」

「ちよつと事情があります……いきなりで申し訳ありませんが、どんな物でもいいので衣服を貸していただけませんか?」

息も絶え絶え、立っているのもやつとというような有様で、風華は服が欲しいと頼む。そう聞かれた観光客は変えの服は持つていなかったのだが、別の客が自分の服を貸すと申し出てくれた。服と言う

か水着であったが……夜の海でも遊ぶために持ってきてきたらしい。

人が少ないからか、そんな時間も惜しいからかは分からないが。風華は水着を受け取るとその場で着け始める。紐で大まかに調整するタイプだったこともあり、ピッタリであった。

「あの、このTシャツも要りますか？水着だけじゃ絶対足りないと思いますけど……」

「ズボンも、こんなのでいいなら……」

「ありがとうございます。行かなくやいけない所があるんですけど、流石に全裸のまま行くのはマズいと思ってたので……うっ!？」

「だ、大丈夫!?救急車……ッ!」

最低限の衣類を手に入れ、それを着込んだ風華は衣服をくれた観光客に頭を下げて礼を言う。そのまま何処かへと飛んできこうとしたところで、急に頭を抑えて呻き声を上げた。驚いた観光客が救急車を呼ぼうとするが、それを止める。どうしても今病院送りになる訳にはいかないと、強張る語気と表情で伝えていた。

左半身を蝕むように電子回路のような赫いヒビが広がっており、ずっと痛そうに頭を抱えて表情を歪ませている。どこをどう見ても大丈夫には見えないが、風華から感じる強い意志に感化された観光客はその意気を呑み、スマホをしまうのであった。

「飴玉舐めな？頭痛いなら甘い物がいいよ」

「これあげるね、自販機で買ったスポドリだけど」

「カロリーバーくらいなら……」

「本当に……どこまでも、ありがとうございます」

救急車を呼ばないならせめてと、観光客達は持っていた食べ物や飲み物を風華に渡す。渡される食品や飲み物を受け取ると、風華は感動したとばかりに何度も頭を下げた。カロリーバーを齧りスポドリで流すと、飴玉を口の中で転がして栄養と水分を身体中に行き渡らせた。

深海3700mを泳ぎ切った身体に、癒しが染み渡っていく。普通なら焼け石に水程度の小さな癒しであるが、極限状態を乗り切った今の風華にとっては大きく確かな回復であった。

「あ……そういえばここは何処なんですか？ずっと海の底にいたので分からなくて……」

「ここ？新潟県の二ツ山ビーチだけ……」

「新潟県……!?そっか、日本海の底に……」

「待って、普通にスルーしてたけど日本海の底ってヤバくない!?何で生きてんの!?!」

サラツと出て来た発言に、観光客の一人が当然の疑問をぶつける。しかし、風華は華麗にその疑問をスルーすると『ごちそうさまでした』として両手を合わせた。そしてもう一度、衣服と食糧をありがとうと彼らに対して深々と頭を下げる。

「この御恩には、本当に感謝しています。わたしはもう行かないといけませんから……いつの日か必ずお礼をさせてください」

「お礼なんていいって!いつかプロになって救ってくれれば、恩返しはそれでいいから!」

「じゃあ、一枚写真撮らせて!」

「それくらいでもいいのなら」

未来のヒーローとのツーショット写真なんて凄いレア物だと、頼まれた写真と一緒に写る風華。体調は最悪も最悪であったが、どうにか笑顔を崩さずに撮影を終わらせることができたのであった。

「どこ行くのか知らないけど、頑張つてね!」

「応援してるぜ、雄英生!」

「何か雄英ヤバいみたいだけど、それでもどうにか頑張つてけよ!」

「……本当に、ありがとうございました」

最後にもう一度礼を伝えると、風華は葵の電磁波を感じる地点に向けて飛んでいった。

オール・フォー・ワンは葵の『個性』を気に入り利用しようとしていた。どう使うのかなんて知ったことではないが、ロクな使われ方はないだろうということは確信できる。利用されるだけさせられて既に捨てられているのが最悪だが、そんなこと絶対起こさせはしない。決意した風華は、より一層飛行速度を速めていった。

身体は節々が痛むし、風華は気付いていないがヒビも少しずつ広

がっている。頭を金槌で殴られるような痛みがずっと続いているが、今はそれさえも気にせずどんどん加速する。

——待ってて、葵。必ず助けるから！

翠緑の電閃が空を伝う。雷上動の力により風華の速さは更に増していくのであった。

）

「クツソ、触んなー！」

オールマイトがオール・フォー・ワンと戦っている中で、爆豪は先程までとは打って変わり強引な方法を取るようになった連合と渡り合っていた。

オールマイトが助けに行こうとしても、オール・フォー・ワンがその度に邪魔をしてくる。ただでさえ数的不利がある上に、触られれば終わりの相手もいる。どうにか今はいなせているが、捕まるのもこれでは時間の問題だろう。

「クソ……クソッ！」

「切島、静かに……ッ！」

爆豪が逃げられれば、オールマイトは心置きなく戦えるようになるはずだ。こんなピンチの状況下にあるのに、切島達に戦うことは許されていない。

どこか一瞬でも助け出せる隙があれば、そこに乗じて爆豪を連れて逃げ出せるのに。どうしてもその隙を突く瞬間というのが、頭に——

「飯田、峰田……協力してくれ！」

「ダメだぞ切島君、戦闘は……！」

「戦闘はしねえよ……この場から逃げつつ、その上で爆豪も助け出す方法を思いついたんだよ！」

「何だそれ、ちよつと言ってみろ！」

この時、切島に名案が浮かんだ。決して戦闘行為にはならず、この場から逃げた上で爆豪を助けられる方法が。

しかし出発前に麗日が言っていたように、爆豪は助けられるのを屈

辱に思い拒むかもしれない。そうしたら全てはご破算になるが……ネガティブな皮算用は後にして、切島は概要を伝えた。

「……成る程、いけんじゃねえかコレ!？」

「そうだな……成功すれば全て好転するし、何より失敗した時のリスクも高くない。危険なバクチではあるが……やろう」

決行のタイミングは、爆豪が敵と二歩以上離れたその瞬間。

まず、後ろの壁に峰田の『もぎもぎ』を設置。飯田が前面に切島を抱え、峰田がその背中にしがみついてフオーメーションを作り、レシプロ起動と同時にもぎもぎに峰田を押し付けて反発による推進力を確保。硬化した切島が壁をぶち抜いて、即座に爆豪まで接近する。

これまで散々敵に出し抜かれて来たが、今は自分達がそれをできる立場にある。敵の手の届かない距離と速さから、戦場を横断。オール・フオー・ワンは爆豪を助けようとするオールマイトを妨害しているが、それは逆も然り。

「来いー!」

「へっ……バカがよ」

最後は切島が呼びかける。飯田でもなく峰田でもなく、今までずっと対等な関係を築いてきた切島からの呼びかけ。最も爆豪が耳を傾けてくれる可能性の高い呼びかけで、爆豪に来てもらうのだ。

目論見は成功した。爆豪は敵連合の追跡を振り切って切島の差し出した手を掴み、そのまま3人と共に動いていく。飯田のレシプロに合わせて爆破を繰り返し、遂に離脱に成功した。

「クソ、やられた……! 遠距離ある奴は!？」

「荼毘と黒霧! 両方ダウン!」

「ああもう! アンタらくっ付いて!」

爆豪を連れて行かれたことで、焦ったマグネは自身の必殺技を繰り出した。

マグネ……もとい引石健磁、個性『磁力』。自身を中心に半径4・5 km圏内の人間に磁力を付与することができる。全身・一部など力の細かな調整も可能。男がS極、女がN極となり、自身に磁力を付与することはできない。

この個性を応用した必殺技、同性の人間2人を最大限付与した磁力で反発させ撃ち放つ『反発破局夜逃げ砲』。Mr. コンプレスを射出することで爆豪を撃ち抜こうとしたが、その一撃は巨大化して射線を塞いだMt. レディに阻まれた。

「救出優先……行きな、バカガキ！」

「Mt. レディ……！」

間に合う内にもう一発、マグネはトウワイスとスピナーで夜逃げ砲を打とうとするが、その直前で謎の一撃により意識を刈り取られた。

「アレは……緑谷君の職場体験先の一撃！」

「グラントリノ……遅いですよ！」

「お前が速すぎんだ！まったくアイツら……お前に似てきてねえか!? 主に無鉄砲なところ！」

「まさか来ているとは……10代!しかし情けないが、これで心置きなく奴と戦える！」

「やられたな……一手で綺麗に形勢逆転だ」

オール・フォー・ワンは、悔しそうに言いながら指から黒いラインを伸ばした。オールマイトが回避するとそれは気絶していたマグネに当たり、彼の個性を強制的に発動させる。

その結果、この中で唯一の女性であるトガに気絶している男性陣と死柄木が引き寄せられ、先に強制発動させられていた黒霧のワープゲートの中に全員消えていこうとしていた。

「待て……ダメだ先生!アンタの身体じゃ……俺はまだアンタに……！」

「弔……君は戦い続ける」

最後にその言葉を残し、オール・フォー・ワンは消えていく死柄木達を見送った。これにより戦場に残ったのは彼とオールマイト、そしてグラントリノの3人のみとなる。

「心置きなくは戦わせない。ヒーローってのは守るものが多いよな」

「黙れ……壊し、奪い、つけ入り支配する!日常を生きる方々を理不尽が嘲笑う!私は、そんなお前が許せない！」

「2対1だ、さっさと倒すぞ！」

「いいえ……2対2ですよ」

オールマイトがオール・フォー・ワンの着けていたマスクごと顔面を殴り抜き、地べたに背を付けさせる。ここまで受けてきたダメージと経過した時間により、活動限界を迎えかけているが……人数ではこちらが有利。畳み掛けてすぐに終わらせるぞとグラントリノが言うと、上空からそれを否定する声が聞こえてきた。

「ぐはッ……赫い電撃、まさか!？」

「遅かったじゃないか、天威。ドクターから許可は出たのかい？」

「ええ。お父様を助けるため、参りました」

「新手か……しかもお父様だ?!？」

オール・フォー・ワンに向かう2人、その攻勢を紅い稲妻が止めた。傷が癒えて再出撃が可能となった天威が、不意打ちで襲ってきたのだ。

赫い電撃ということで一瞬風華の姿がチラついたオールマイトであったが、相手の姿を見たことでその考えを改める。天威と呼ばれた敵は顔立ちこそ風華と瓜二つであったが、髪色や纏う雰囲気などが全く違っていたし何より、赫災領域特有の赫い空気が広がっていないかった。

「これで数の上でも互角だ……さア、戦おう」

く

「切島君、そっちはどうなってる!？」

「爆豪の救出成功した!今は駅前の方で、衝撃波もここまでは来てねえみたいだ!」

「いいか、俺ア救われたんじゃないやねえ!一番確実な脱出経路がてめエらだっただけだ!」

「緑谷、そっちはどうだ……?」

緑谷達の方は、外道大蔵雷神の襲来によって大変な状況になってしまっているため、ヒーローが総出で避難誘導を行なっている。それに乗じて遠ざかるように逃げているところであった。爆豪はおらず

ヒーローや警察が戦っているなら、留まる意味はないのだから。

爆豪も、オールマイトの足を引つ張るのは嫌だったからと素直に助けられてくれた。自分達にできることはやり切った。

グラントリノだっているし、オールマイトが負けるなんてあり得ない。これで良かったのだと、無理矢理自分を納得させるのであった。

——ヘリ……報道のか！

不安は心にへばり付いて離れない。それでもオールマイトなら大丈夫だと、切島達は心の中で呪文のように繰り返していた。

## 龍を墮とせ

「おい研究所の！お前らこの化物どもについて何か知ってるようだな！何でもいいから情報を提供しろどこまでも湧いてくるぞ！」

「とは言ってもなエンデヴァー……俺達の知ってる葵ちゃんはこの大きな大きいし、分身を出すことも雷を操ることもできなかったはずなんだよ！」

龍の分身体『小外道衆』を払い除けながら、その弱点などについて話し合うヒーロー。しかし、この化物の元となったであろう葵の『個性』にこんなことはできないはずであった。

おかげで誰も、対処法が分からない。あの出てきた後は吠えただけで動かない親玉なら、あつちは葵に似ていることもあつて同じ対処法が使えるかもしれないのだが……どちらにせよ小外道衆に苦戦させられている今は、こつちが優先である。

「一応、気絶させれば動かなくなる！コイツら全部倒して、とつとと親玉も倒すぞ！」

「小さいの相手なら、強い火力で攻撃すればそれでいい！思いっきりやってくれ！」

「無茶を言ってくれるな、どれだけ奴ら数がいると思ってる！だが……単純で分かりやすい！」

赫灼熱拳でぐるりと辺り一帯を焼き払い、化物を気絶させていく。エッジシヨットも自身を刃に変化させて化物の中身を弄り、気絶させる。数を数えるのも億劫になる程大量に湧いて出てきた化物どもであったが、ヒーローの活躍によって順調にその数を減らしていた。

動かなくなった化物の一部からアウエイクがサンプルを採り、性質などを探っていく。機材はちよつとしたものしか用意できない都合上、大したことが分かるわけではないが……それでも何も分からず対処療法的に対応するよりはマシだろう。そうやって少しずつ情報を仕入れていく中で一つ、化物に関して分かったことがあった。

「この鱗……葵が『龍化』した時のとまったく同じものだな。やはりあの親玉は……」

よく見ると、武装の増加や体色の変化など様々な違いはあるが、実際大きい親玉の姿は龍化した葵の姿に瓜二つであった。その上小さい方の化物から採れたサンプルが同じ性質を持っているとあれば、これはもう確定と言っていいたいだろう。

あの化物の正体は、敵の手によって何らかの細工を受けた立甲葵そのものである。

まったく同じように見えても、一人一人で個性の性質が実は違っているように。造られたクローンなどはオリジナルと微妙に異なった性質の『個性』を持って産まれる。それがまったく同じ性質を持っているということは、あの小さな化物達は葵から分けられて産まれたものということになる。

生きていることが分かったのは喜ばしいが、敵対することになっては喜んではいられない。もう何年もあの子の個性について研究と分析を重ねてきた研究員達は、その強さや厄介さ、面倒臭さまで含めて全部把握しているのだから。

「だが、アレが葵なら……やりようはある！」

「アウェイク、何か分かったことは?！」

「ちよつと待つてろ、拡声器の用意をしてくる！」

大きな化物が動かない理由……何をされたのかは分からないが、葵は龍の中で戦っているのだろうとアウェイクは感じていた。それは血を分けた娘だからこそその直感か、それとも多くの個性を見てきたが故の経験則か。

今やるべきことは敵を倒すことではなく、親玉の化物を正気に戻して葵を取り戻すこと。そう結論付けたアウェイクは、『蒼龍』のウィークポイントを伝えるべく大声で叫んだ。戦場に子を想う父の怒号が木霊する。まるでそのテの『個性』でも持っているのかと思う程の大声は、近くにいた小外道衆を音のストレスで残らず失神させた。もはや一種の音響兵器だと、間近で爆音を聴いてしまった警察が後にそう証言する程であった。

「みんな!あの龍の弱点は肩甲骨の間辺りに潜んでいる本体だ!あの化物は恐らく、我が娘の『龍化』という個性を元に造られている!も

しもアレが僕の想像通りなら……そこに葵がいるはずだ！」

「娘……拐われた少女の方か！」

「傷付けずに本体を回収か、面倒な！」

葵の個性と同じ性質なら……というよりアレが葵であるのなら、本体となる人間の姿が背中中の辺りに埋まっている。そこを引つ張り出すことができれば『龍化』は解けて、あの化物どもは消失するであろうという算段であった。

だが、それをやるにはヒーロー達の火力の高さに全てが懸かっている。ただでさえ強靱無比な龍の肉体に加えて、あの装甲のような甲殻や身に纏う鎧まで突破しなければならぬのだ。生半可なパワーでは本体の回収どころか、龍に傷を付けることすら不可能。攻撃役となるエンデヴァーやエツジショットでもならなければ、最早ヒーロー側の勝利は不可能と言っただろう。

「俺達がアイツを何とか足止めする！だから本体を引つ張りだすのは頼んだぞエンデヴァー、エツジショット！」

「無茶なことを言ってくれ……！」

「だが、やれねば勝機はないぞ！」

『スキヤナ』、『セーバー』、お前達も足止めを手伝ってくれ！あと龍が受けたダメージはある程度本体にも反映される！やり過ぎて引つ張り出す前に本体が死なないように気をつけてくれ！」

「それを！」

「早く言え！」

「とは言え、足止めと言っでもどうするんだ？」

「あの巨体……生半可なやり方じゃ、確実な効果は望めんど。ただでさえ俺達の『個性』は、拘束には向かんといいのに」

スキヤナの個性は『解析』。これはラグドールの個性『サーチ』の範囲を個人対象に狭めたもの。

そしてセーバーの個性は『保存』。生物以外の物をその時の状態で固定することができる。どちらもサポート系の拘束には向かない個性であった。

しかし、アウェイクは個性で足止めができないのならアイテムを使

えばいいと言う。そのため研究所の中でも特に、アイテム開発能力に優れたお前達を呼んだのだと。使える物は何でも使う、そのために使える物を作る2人の力が必要だと言った。

材料は警察が用意した備品や、研究所から持ってきたいくつかのアイテム達。これらを上手く活用し有効なアイテムを作り出すのだ。

親玉の化物はまだ動く気配を見せない。小さい方も少なくなってきた今こそが、アイテムを作る最大のチャンスなのである。

「この辺か……エッジショット、どうだ!?お前の個性でどうにかなりそうか!？」

「無理だな……分厚い上に隙間がほぼない!本体を抉り出す作戦は不可能だ!」

「よし、ならば予定通り行くぞ!さア化物よ、俺の一撃を食らえ!赫灼熱拳『フレアバーン』!」

「グルルウ……?」

炎の噴射により強烈なスピードを得た拳が、鎧と激突して衝撃音を打ち鳴らす。鎧は少し凹みができた程度で大した損傷もなかったが、これによりここまで動きを見せていなかった外道大蔵雷神がついに動き出した。

左腕の爪を掲げ、地面に向けて振り下ろす。動作は緩慢でヒーロー達にとっては容易く見切れる程度のものであったが、ただそれだけの動作でアスファルトを超えて土の地面を露出させた。腕を引き戻す時に地面が掘り返され、それに巻き込まれた警官が何人か生き埋めにされてしまう。

「何人やられた!？」

「13人です……すぐに回収します!」

「ちよつと動いただけでこれか!バケモノめ!」

「これは、さつさと終わらせんとマズいな……!」

外道の百足のような姿をした尻尾が、本体には近づかせまいとエンデヴァー達をこぞって襲う。迎撃しようとしても殻が硬過ぎて炎は通らず、刃も通すことができない。仕方なく2人が回避すると、外道は巨体らしい緩慢な動作で振り返り、無数の眼球がへばり付いた顔面

を向けた。

間近でその異様な風貌を見たことで、一瞬怯んでしまう2人。しかしいちいち驚いたり恐れたりしては時間がないと、エンデヴァーはエツジショットを掴んで再び炎を噴射。背後に回り込んだ。

「赫灼熱拳『ストライクバーン』!」

「忍法『紙肢微塵切り』!」

背後に回れば当然、七対の百足が迎撃するためにやってくる。そこを先読みして、予め炎を溜めていたエンデヴァーが赫灼熱拳で百足を根元まで焼き尽くした。百足は炎が消えると再生する兆しを見せ始めたため、エツジショットが再生もできない程に細かく斬り刻む。またそう時間もかけずに根元から生えてくるだろうが、時間は稼げるだろう。

「砕けんのなら、剥がしてやる!」

「エンデヴァー、俺を使え!」

エツジショット、個性『紙肢』。身体を紙のように薄く引き伸ばすことができ、その速度は音速を優に超える。その力で外道の肉と鎧の隙間に入り込んでから手を繋ぎ、エンデヴァーが鎧を剥がしやすいようアイテムの役割を果たした。

エンデヴァーは薄くしたエツジショットの身体を思いつきり引つ張ってみるが、鎧の接着が強過ぎて中々外せそうにない。このままでは失敗に終わってしまうと判断し、エツジショットが戦闘不能になるのを覚悟で炎の出力を更に高めていく。

エンデヴァー最大火力、赫灼熱拳『プロミネンスバーン』。持てる中で最大の力で噴射された炎の威力は、外道の鎧を溶かした上で見事その背中を曝け出させた。

肩甲骨を守っていた鎧が剥がれ、抉り出すべき部位が露わとなる。代償としてエツジショットが火傷を負い戦闘不能となったが、そこはアウエイクがどうにかできる。エンデヴァーの手を離れ、落下していくエツジショットをキャッチし小外道衆のいない場所まで連れていくと、すぐに治療を始めた。

「アウエイク! アイテムの用意はできたのか!」

「ああ、バッチリだ！僕はエッジショットの治療に当たるから、後のことは2人に任せる！引き続き頼むぞエンデヴァー！」

「任された。さア、本体を引っ張り出すぞ！」

「なるべく早く終わらせる！」

ヒーロー達が明確に危害を加えてくるようになったからか、先程までおとなしくしていたのが嘘のように暴れる外道。緩慢で避けやすい動作しかしてきていないが、少し動かれただけでビルが倒れ道路が粉々に碎け散る。さっさと終わらせないと、街への被害は深刻なものになってしまいうだろう。

それだけは、何としても避けねばならない。完成したアイテムを持ってきたスキヤナはエンデヴァーに外道の身体を浮かせるよう指示を出し、セーバーはここまで何度も熱を放出してガタが来始めているサポートアイテムが壊れないよう、自身の個性で状態を保持した。

「アイテムその一、『強化トリモチ』！」

「これで、アイツはこの場から動けなくなる！」

エンデヴァーが力を振り絞り、外道を浮かせたところに撒かれる白い粘性の液体。着地したことでそれに触れた外道は、咄嗟にそれから離れようとするもくっ付いたところが離れない。警察が敵を無力化させるために使用するトリモチを更に強力にした拘束用具が、外道の身体を完全にその場へと繋ぎ止めた。

「アイテムその二、『耐熱ドリル』！」

「エンデヴァー、装備しろ！」

エンデヴァーが使用することを前提に、耐熱性を強化した腕に着けるタイプのドリル。放出される熱をエネルギーとして回転するドリルは、龍の甲殻を砕きながら確実に肉を抉っていく。建築業者もビツクリの突貫工事で抉られていく龍の肉體。何度も何度も掘り進めていく中で、エンデヴァーは龍の中に人のような気配を感じた。

「そこにいるのか、立甲……！貴様には焦凍の嫁となつてもらう予定なのだ、絶対に帰ってきて……ぐああア！」

「黒い雷……！」

「エンデヴァー、大丈夫か!？」

中々に気色悪いことを口走りながら、輪郭が見えてきた葵を引つ張り出そうとしたところで。エンデヴァーを黒い稲妻が貫いた。もともとある程度の防電が為されているコスチュームを貫いて、その上でダメージを与えてくる。順調だった掘削作業は強制的に止められ、口から黒煙を吐いてエンデヴァーは意識を失った。

その光景を見て、2人はすぐに同じ武装をしてエンデヴァーの救出に向かう。削った肉の内側にいるエンデヴァーは、外道が身体を再生させる時に巻き込まれて埋もれてしまう。そうなってしまうえばもう助けられないだろうから。ドリルの出力は、エンデヴァーレベルの火力がなければ再生に追いつかれてしまう小さいものなのだ。

「クツソ……硬い！」

「早く出る！エンデヴァーごと呑まれるぞ！」

実際、脱出はギリギリとなった。エンデヴァーが開けた穴はすつかり閉じられて、苦勞が水の泡となってしまう。本体を守っている部位だからか、再生が異様なまでに早かった。

「アウエイク！」

「分かっている、エンデヴァーこつちに投げて！あとトリモチはどのくらい保ちそう!？」

「2……いや、1分保てばいい方だな！」

「そんな短つ……ええい、早よ終われ！」

焦る心に追い討ちをかけるように。外道は大きく顔を上げたかと思うと、首を振り下ろして大量の小外道衆を吐き出した。警察とヒーローがやつとの思いで滅らした敵が、ここで再び今度はさつき以上の数で襲ってくる。

必死に応戦して此方にまで小外道衆が来ないようにしてくれているが、その頑張りがいつまで保つかは分からない。その上、外道はトリモチの拘束から逃れかけているときた。

ここまでののか……そう思い始めたところで、エンデヴァーとエツジショットが立ち上がる。2人とも肩で息をしており、眼には少したりとも生気が宿っていない。だがその眼は、確かに救うべき相手がいる地点を見据えていた。

まだ、誰も諦めてはいない。

「エツジシヨット、コレを！」

「さっきの連携みたいにやってくれ！ドリルじゃあの電撃を食らう距離に入っちゃおう！」

「今度は僕も着いていく……回復は任せろ！」

「ふう……今度こそ救い出すぞ！」

おう！全員が同時に吠えた。

スキヤナが葵の位置を正確に捕捉、巻き添えにしないよう攻撃する地点の指示を出す。セーバーがトリモチを追加して拘束を継続、拘束力が劣化しないよう維持し続ける。

エツジシヨットはアイテムその三『全身刃』を装着して身体を伸ばし、一つの大剣となる。エンデヴァーがそれを振るい、アウェイクは満身創痍の2人が限界を迎えないように回復し続ける役割だ。黒い雷を受ければどうなるかは、先程のエンデヴァーが証明済み。だからこそその、雷を受けないように遠く距離を取ったフォーメーション。

残りのヒーロー達と警察は、追加された小外道衆の排除と非難誘導の完遂。決して外道の犠牲となる人間が出ないように、最新の注意を払う。

「いくぞエツジシヨット！気絶するなよ！」

「そつちこそ、しっかりと力を込めろよ！」

赫灼熱拳『ジエツトバーン』による、炎の噴射で無理矢理剣を振るう力を確保。肉の中に潜む葵を傷付けないよう慎重に、かつ大胆にピラミッド状の切れ込みを入れた。深く差し込まれた剣の痛みを味わったからか、外道は雷を迸らせながら悶絶するような叫びを上げる。

そうして稲妻が止まったその瞬間。エツジシヨットを切れ込みの内側に差し込み、その肉を外道から一気に引き抜いた。じゅぼつ……と肉が抜ける音と血の滴る音が鳴り、外道の悶絶がそれらの音に更なるアクセントを加えていく。

「赫灼熱拳……『プロミネンスバーン』！」

「見えたッ……僕がキャッチする！」

引き抜いた肉に向けて、プロミネンスバーンの炎を浴びせ焼き尽くす。周りを囲む肉は焼失し、その中身である葵が遂にその姿を表した。

気を失っていた彼女は、リアクションのないまま落下しようとしアウェイクに受け止められる。

「おかえり、葵……無事でよかった！」

「怪我人と一緒に運んでもらおう。行くぞ」

敵に連れ去られたと聞いてから、研究所の仲間達ともども気が気でなかった。愛娘を生きて取り戻すことに成功して、アウェイクは安堵と喜びを抑え切れず涙を流す。それに釣られたスキヤナとセーバーの2人も、潤んだ尻指で拭くのであった。

本体であった葵が離れたことで、外道の身体は崩れ黒いヘドロのような液体となり消失した。時を同じくして、猛威を振るいヒーローと警察に多くの死傷者を出した小外道衆も消滅する。神野の戦いその一角が、ここで終わりを告げたのだった。

「あとは、オールマイトと……」

「風華ちゃん、何処に行っただんだか……」

この戦いは終わったが、まだオールマイトの戦いが残っている。敵に連れ去られた爆豪と未だ情報のない風華のことを思い浮かべ、アウェイクは一つ小さな息を吐いた。

## ワン・フォー・オールと赫い助太刀

エンデヴァーらが、外道大嚴雷神との戦いを繰り広げていた頃。オールマイト・グラントリノ対オール・フォー・ワン・天威の戦いは、より熾烈なものとなっていた。

オールマイトが拳を振るえば、オール・フォー・ワンはグラントリノを転送して盾にする。そのままスマッシュの衝撃をオールマイトに返し、両者共にダメージを与えていくのだ。

「衝赫……『大雷』！」

「ぐうッ……紅い雷、厄介な奴め！」

そうして少しでも隙ができれば、天威が見逃さずに追撃を仕掛ける。期末テストの時に風華の雷を食らっているオールマイトには、それは一度食らえば『残る』ものであると知っている。動こうとするたびに弾けて妨害してくるあのスパークは、絶対に食らう訳にはいかなかった。

オール・フォー・ワンの持つ多彩な手札と、天威の純粋に高い身体能力に、絶対に触れてはいけない紅い雷。物理にも搦手にも優れたコンビで、着実に優位を取り続けていく。

対するオールマイトは既に活動限界が近付いてきており、グラントリノも高齢故そう長い間全力で動くことはできない。また、緑谷の職場体験の時まで現場を離れていた分のブランクもある。オールマイトとオール・フォー・ワンの1対1だけならまだしも。天威とグラントリノの戦力差は、戦いを始めて時間が経った今かなり開いてきていた。

「何だったっけ？オールマイト。確か僕が許せないとか何とか言っていたよね。そういうところ、君の師匠そっくりだよ。『ワン・フォー・オール』先代継承者……志村七奈に」

「黙れ……！貴様の穢らわしい口で、お師匠の名を口にするんじゃない！」

「ワン・フォー・オールに見合わない、口先だけで実力不足も甚しい女だった……！せっかくだ、どこから話をしてやろうか？」

「俊典、見え透いた挑発に乗るんじゃないぞ！」

嗜めようとするグラントリノを、天威が蹴り飛ばしてオールマイルトと距離を開けさせる。『個性』で超加速ができるグラントリノだが、纏雷によってそれに追いつける速度を出せる天威を振り切ることができずにいた。

オール・フォー・ワンは言葉巧みにオールマイルトを挑発し、彼から烈火の如き怒りを引き出す。怒りが動きや思考単調にさせ、更に沸点が下がり挑発を受けやすくなる悪循環。グラントリノとしては止めたいが、邪魔ばかりでどうしてもできない。

「お父様のところへは行かせません。老人の相手は最期までずっと私ですよ！」

「どけやい小娘、さつきから邪魔だぜ！」

報道のヘリが飛んでいるのを見て、オール・フォー・ワンはオールマイルトをそこまで打ち上げる。その狙いに気付いたオールマイルトはトウルーフォームに戻っている右半身咄嗟に隠し、ヘリからは見えないうようにした。

同じく気付いたグラントリノも、限界まで肺に空気を溜め全力で噴射する。一気に飛び上がることで天威を振り切り、宙に投げ出されたオールマイルトを救出した。

「6年前と同じだぞ俊典！そうやって挑発に乗ったから奴を捕まえ損ねた！腹に穴を開けられた！お前のダメなところだ、奴と会話をするな！」

「すみません……！」

「まったく、邪魔をしてくれる……！」

「申し訳ありません、お父様。老人をオールマイルトの下へ行かせてしまいました」

オール・フォー・ワンは、6年前にオールマイルトと戦った時とは戦法も使う個性も違う。衝撃の反射に肉壁の転送、殴った時の感触からしてショック吸収と、恐らく超再生も持っているだろう。正面からの攻撃ではまず有効打にはならない。

勝つためには、活動限界が来る前に天威の妨害を越え虚を突いて

攻撃を加える必要がある。それを報道に活動限界のことを悟られないまま行おう、という条件も付け加えて。

『悪夢のような光景です……！突如として神野区が壊滅状態となってしまうました！現在は、オールマイトが元凶と思われる敵と交戦しております！平和の象徴と互角に渡り合い、たった1人で街を壊した上に何人ものヒーローが……』

「え、何これヤバ」

「オールマイトボコられてなかった？」

「神野って何処だっけ？」

「他のヒーローは何やってんだ!？」

中継が緊急速報として、全国のお茶の間に流されていく。それを見た人々は街の崩壊を許したヒーロー達をここぞとばかりに責め立て、そして漠然とした不安を口にする。

最近では敵が暴れ過ぎ、むしろヒーローがいいようにやられ過ぎ、平和ボケして弛んでる。しかしどうあっても、結局はオールマイトなら何とかしてくれるのだろう。そんなどこか楽観的で、無責任な言葉が様々な場所で飛び交っていた。

『大丈夫です皆さん！オールマイトはどんな時でも敵に打ち勝ち、平和を守ってきました！今回もきっとオールマイトが勝つでしょう！』  
アナウンサーの言ったこの言葉が、国民の認識を表していると言っているだろうか。

オールマイトが現場に出て解決できなかった事件なんてないし、倒れなかった敵もない。どんな状況でもオールマイトなら大丈夫という、その実かなり歪んだ信頼。敵連合が度々事件を起こしせつせと崩してきたヒーローへの信頼。しかしオールマイトへの信頼だけは、揺らいでいなかったのだ。

「せっかく弔がコツコツやってきたものを、僕が決定打を打ってしまっても良いものか……」

「この状況なら仕方ありませんよ。死柄木もそこまで道理の分からない

い男ではないでしょう」

「そうだね。なあオールマイト、君は僕のことを憎たらしいと思ってるだろうけど。それは僕の方だっておんなじ何だぜ？」

「デカいの来るぞー避けッ……！」

オール・フォー・ワンはオールマイトの師匠を殺したが、自分もオールマイトには多くの物を奪われたと言った。築き上げてきた立場、コツコツ増やしてきた強力な個性、健康な身体。だから、オールマイトには可能な限り惨たらしい死を迎えてほしいのだと言う。

攻撃態勢に入ったのを見て、オールマイトに回避しろと指示するグラントリノ。『おいおい、避けていいのかい？』とオール・フォー・ワンが言うのを聞き、ハツとしたように背後を振り返る。グラントリノが見たのは、明後日の方向へと巨大な電撃を放とうとしている天威の姿。そしてオールマイトが見たのは――

「助けて……オールマイトお……！」

――瓦礫に足を取られ、動けなくなってしまうている一般人の姿。その姿を見てしまったのは、避けることなどできるはずもなく。

「君が守ってきたものを奪おう。まずは怪我をおして通し続けたその矜持……惨めな姿を世間に晒せ」

「は……？」

「あつ……!?!」

「何だあれ」

「何だあのガイコツ……」

『は……えつと、皆さん見えますでしょうか!?!オールマイトが萎んでしまっています……?』

「オールマイト?」

衝撃波を相殺した反動で、まだマッスルフォームを維持できていた左半身もトゥルフフォームに戻ってしまう。

平和の象徴の萎びた姿が、中継を通じて全国に見せつけられている。人々を笑顔で救い出す平和の象徴は、決して悪に折れてはならない。だからこの姿を知る者には、公表しないでほしいとずっと隠し続

けてきた秘密。頬がこけ、目は窪んだ貧相なトップの姿。絶対に見せないようにしていた姿を白日の元に晒されてしまった。

「私の心は依然として平和の象徴！身体が朽ち衰えようとも、その姿を晒されようとも！一欠片とて奪えるようなものじゃない！」

「素晴らしい！まいったな、強情で聞かん坊だということ忘れてたよ。じゃあ……これも君の心には響かないのかな？」

——死柄木弔は、志村七奈の孫だよ。

オール・フォー・ワンによる、最悪の暴露。その言葉を聞いてしまったオールマイトの目から！光が消えていく。『ウソを……』とうわ言のように呟くことしかできなくなっていた。

「君の嫌がること、ずっと考えてた。モニターから見えたよ、弔に対して勝ち誇る君の姿。何も知らない癖に偉そうに説教垂れちゃって、何様のつもりだって感じだったね」

「ウソを……！」

「事実さ。君も僕がどんなことをやるかなんて分かっているだろう？」

「ダメだ……耳を貸すな俊典ツグウ……！」

「うるさい老人は嫌われますよ。黙りなさい」

止めに行こうとしても、電撃を間近で食らって動けないグラントリノにはそれが叶わない。せめて言葉で伝えようと叫ぶが、口内に天威の蹴りを食らい舌を引き裂かれてしまう。

命だけじゃなくて、心まで助けてこそその真のヒーロー。怖い思いをした時程笑え。世の中笑ってる奴が一番強いのだから。

師匠の教え。オールマイトに根付いた常に笑顔でいるという精神。それを実践できずにいた。師匠の家族を敵に落としてしまったこと、それに気付きもせずに説教を垂れたこと。それらのことが、オールマイトの心に深くのしかかるのだった。

「あれ……おかしいなオールマイト。いつもみたいな笑顔はどうした？」

「ぎっ……さ、ま……！」

「やはり……楽しいなあ！どうだい、平和の象徴？君の矜持は一欠片でも奪えただろうか」

「おおお……おおおお……！」

「負けないで……」

オールマイトの慟哭を掻き消したのは、そんな小さな救いを求める声であった。瓦礫に埋もれて身動きが取れず、オールマイトが負けたらここで死ぬしかないという一般人の、涙ながらの懇願。

「オールマイト。お願い……助けて」

中継がその声を拾ったかは分からないが……その声に呼応するよう、戦いを見守っていた者達はこぞって応援を始めた。

「オールマイトヤバくない……!?!」

「……——てや」

「そんな……嫌だよ！」

「アンタが勝てなきや……あんなバケモノ誰が勝てるってんだよ……！」

「元の姿が何だったからって、オールマイトはオールマイトのままですよ!?!」

「いつだって何とかしてくれたじゃん!」

「オールマイト……頑張れ!」

「負けるな!勝ってくれエ!」

「頑張れオールマイト!」

声援は力に変わる。最も憎むべき悪を討ち果たすために、なげなしの力を振り絞るのだ。

「勝てや!オールマイトお!」

右腕で翠緑の閃光が炸裂し、一時的にマッスルフォームを再び呼び起こす。膨れ上がった腕をゆっくりと曲げ、救いを求めて泣き叫ぶ女性に向けて笑いかけた。

「救ける……もちろんさお嬢さん。多いなア……！ヒーローつてのは、守るものが多いんだよオール・フォー・ワン！だから負けないんだ！」

「……そうかい。オールマイトよ、僕だけを見るのは悪手だぜ？」

「何を……グアアアアッ!？」

「私のことを忘れてもらっては困ります。どうですお父様、救けにはなれたでしょうか？」

いい援護だ。オール・フォー・ワンは不意打ちでオールマイトに雷撃を放った天威を称賛する。グラントリノを退けた天威は、オールマイトを倒す機会を虎視眈々と狙っていたのだ。

せつかく戻ってきたマッスルフォームがまたしても崩れ、トゥルーフォームに戻ってしまう。対象が事切れるまで延々と苦痛を与え続ける紅い雷撃を受けて、悶絶し叫ぶオールマイト。平和の象徴が痛いなどというくだらない理由で無様に喚き散らすのを聞いて、オール・フォー・ワンはそれはもう楽しそうにゲラゲラと笑っていた。

「ははは……！まさか君のそんな無様な姿が見れるなんて思ってもみなかったよ！とっても良いものを見せてもらったよ……流石は天威、僕が丹精込めて造った娘だ！」

「がっ……ぐ、ううう……！」

「お父様、もっと電力を上げてみますか？」

「ああ……そうだね。もう涙腺なんてないのに涙が溢れそうになったよ。あんまり苦しめ過ぎて限界を越えられても困るし、苦しんでいる内に引導を渡してやりなさい」

——了解です♪

天威はそう言うと言をオールマイトに翳し、電力を少しずつ上昇させていく。筋肉を、骨を、神経を凌辱する痛みに、もはや声すらも出せなくなってくるオールマイト。

象徴が敗れ、平和が崩れ去る。この光景を見ていた誰もがそんな未来を幻視した。もうオールマイトを苦しめないでくれ、あんな奴らな

んかに負けないでくれと矛盾のような叫びが響く。

「飛べ……『吹き荒ぶ大風』」

緑谷も、爆豪も……中継を見ていた誰もがオールマイトの敗北を確信したその瞬間に、神野区は赫の空気に染まった。

赫色の風が倒れたヒーロー達を包み、空へ浮かび上がらせていく。それを阻止せんと衝撃波を放ったオール・フォー・ワンであったが、放たれた衝撃波は反転して自らを襲った。その上暴風の砲弾が襲いかかってきたことで、トドメを刺す寸前だったオールマイトを諦めざるを得なくなってしまう。

「駅前の方で、救急車が何台か待機しているのを確認しました。そこまで送っていきます。虎、皆さんをお願いします」

「待てッ、お前も……!」

「わたしには、まだやることがありますので」

「……まさか、生還できるとはね」

「鳴神少女……無事、だったのか……!」

「アレが、私のオリジナル……」

意識が戻っていた虎に、ヒーロー達の後のことを任せて駅前まで送り出す。虎はいきなりのもので困惑しっぱなしであったが、すぐに気を取り直し気絶している仲間と救出したラグドールを抱え、救急車の待つ駅前まで向かっていくのであった。

目論見を崩されたことで、忌々しそうにそう呟くオール・フォー・ワン。天威も初めて実物を見た自身のオリジナルを前にして、殺意と紅い雷をバチバチと迸らせる。そんな2人の姿を見て、風華は彼らの怒りには興味がないと言ったように、一つだけ小さく語りかけた。

「お久しぶりだね、オール・フォー・ワン。拍手はどうしたんだい?」

## 残火にさよなら

「は……？」

「言つてたじゃないか。わたしがあそこから生きて帰つて来たなら、拍手して迎えてやるつて。約束を忘れたとは言わせないよ」

オール・フォー・ワンは海底のアジトで風華の前から去る時、生きて帰つて来たら拍手で迎えてやると言つた。風華はその時の口約束を、しっかりと果たさせようとしたのだ。

一瞬呆気にとられていたオール・フォー・ワンであったが、すぐに正気に戻つてパチパチと大きめの拍手を繰り返す。

「あ、ああ……そうか。そうだったね。おめでとう風華ちゃん。よくぞ水深3700mの場所にある僕のアジトから、生きて帰つて来れたものだ。本当に君が人間かどうか、疑わしくなるね」

「さんぜつ……!?そんな所に……!」

あまりに途方もない数字が出て、オールマイトは戦いの途中ということも忘れて驚いた。ギリリと輝く眼を見開いて風華を凝視すると、ここまで戻ってくるまでにかけたであろう苦労を想像する。

水深3700m……距離で換算すれば大した長さでもないが、実際は光の届かない極寒の世界であり常に、およそ370気圧の力に全身を圧されている状態となる。人間が生身で立ち入つて良い場所では断じてないのだ。

風華はそんな場所から、恐らくは赫炎領域を維持し続けながら浮上して来たのだろう。いったい何度風雷回帰を発動したのだろうか。元々着ていた服も失い、何処からか調達してきたのであろう水着姿になっている。

正直言つて、場違いな服装である。ヘリから状況を見下ろすアナウンサーは完全に言葉を失い、中継を観ていた一般人や風華の安否を心配していた雄英の面々も困惑を隠せずにいた。

「えっと、鳴神少女、そのお……」

「服装はどうでも良いです。わたしが用があるのはあなたですから。オール・フォー・ワン、ちよつとくらい良いでしょ?悪の親玉はヒー

ローのイベントを待つものだよ」

「……成る程。一理ある……かな？」

「ありませんよお父様! くっ……お父様が待つと言うのなら私が奴を殺します!」

用があるのはオールマイトだけ。だからお前らはちよつと黙つてろと風華は宣った。悪人としての矜持を持つているオール・フォー・ワンはそれを受け入れようとするが、そんなこと知ったことではない。天威は風華を殺そうと襲いかかってくる。

人造人間である天威にとつて、風華の存在は文字通り目の上のタンコブである。オリジナルが存在する以上、自分は紛い物……オリジナルが手に入らなかったから造られた代用品に過ぎない。人造人間としてもそうだが……何より一人の人間のプライドとして、それは我慢ならない事実であつた。

ここでオリジナルを斃し、自分がそれ以上の力を持つことをオール・フォー・ワンに示す。そうやって自分は『妥協の産物』ではないということアピールするのだ。

オール・フォー・ワンが動かないのなら、自分がこの女を排除するしかない。天威は全身に『威紅』を滾らせながら、風華を殺すべく飛び掛かろうとしてそして——糸の切れた操り人形のように、力なく地面に倒れ伏すのだった。

「待てって言ったでしょ。なら黙つてな」

赫災領域の中では、空気がある程度風華の思うがままに操作することができる。その力を用いて空気中の酸素濃度を少しずつ下げること、天威に呼吸不全を引き起こさせたのだ。

USJの時に戦った敵も、職場体験でのベストジーニスト達も、合宿先を襲ったマスキュラーもそうだったが。どいつもこいつも、風華の戦った相手は窒息対策を万全にしていた。おかげで相手を酸素不足で昏倒させて楽勝という手が使えず、何度も苦戦することになったのはよく覚えている。

天威の個性『威紅』は『疾風迅雷』から派生したものであるが、『疾風迅雷』とは違って空気を操る力を持っていない。その上オール・

フォー・ワンのように酸素マスクを着けるでもなく、窒息を対策してないとあれば、こうして昏倒してしまうのも無理のない話であった。

「さて……オールマイト。こんな所まで来てなんですが……わたしは戦えません。あなたが背負う重荷を少しでも軽くしてあげたいけど、今のわたしにはそれができません」

「ッ……い・鳴神少女、身体が……い」

天威を退けた風華は、静観するオール・フォー・ワンを尻目に本題に入った。

一言、一言。言葉を紡ぐ度に風華の身体には赫いヒビが入っている。それを見たオールマイトは喋らなくていい、君も早く救急車へと風華の容態を心配して言う。しかし、自分の身が危ないからといってやるべきことを投げ出す風華ではない。

「みんな、あなたの勝利を願っています。平和の象徴が悪を討ち果たすことを願っています。どれだけ惨めな姿を晒そうと……どれだけ無様な声を上げようとも、あなたはみんなのヒーローです」

「もういいッ……喋らなくていい、死ぬぞ！」

「わたしは、悔しいけどあなたと一緒に戦うことはできません。だからせめて……コレを」

差し出す両掌に赫い閃光が迸る。今の風華に生み出せる最大の電力を全て、オールマイトの勝利のために使おうとしているのだ。攻撃のためではなく協力のために、他者に自らの電気を纏わせる……誰が為の雷『天合万雷』。

疑うまでもなく感じられた。オールマイトにはこの雷の意味がよく分かっていて、自身の戦う意味を全うする……そのために背中を押してくれているのだということが、よく分かっていて。

「オールマイト……わたし達を、救ってください」

その言葉が、最後の一押しとなる。

痩せこけたトゥルーフォームから筋骨隆々なマッスルフォームへと再び変化し、纏雷やフルカウルと同じ要領で全身に赫雷を迸らせていく。やるべきことを終えて気を失った風華を遠い所まで運び、オー

ルマイトはオール・フォー・ワンに向き直る。

「……随分と待たされたよ。教え子とのお別れはもういいのかい？」

「ああ……私は死なない、生きてもう一度あの子らの元へ帰るさ。いくぞオール・フォー・ワン！黎明期より続く因縁に終止符を打とう！」

『筋骨発条化』

『瞬発力』『瞬発力』『瞬発力』『瞬発力』

『臂力増強』『臂力増強』『臂力増強』

『増殖』

『肥大化』

『鉸』

『エアウオーク』

『槍骨』

今までのように衝撃波を放つだけでは、ちよつと体力を削るだけで確実性がない。だからこそ確実に殺すために、掛け合わせられる最高・最適の個性でオールマイトを殴る。ここまで手を合わせたことでオール・フォー・ワンは確信を得ていた。

『オールマイトの中に、もうワン・フォー・オールは存在していない』

オールマイトが使っているのは譲渡した後の余韻というか、残り滓のようなもの。次の薪に聖火を託した後の残り火なのだ。

もはや、吹かずとも消えゆく弱々しい火。そこにかつて自身を恐れさせたような力はない。赫雷を分けられてある程度は持ち直したとは言え、勝利が揺らぐことはないだろう。そう確信して、オール・フォー・ワンは平和の象徴に引導を渡すべく天高くへと飛び上がった。オールマイトもまた、それを迎え撃つべく拳を振りかぶる。

「緑谷出久」

「!？」

「譲渡先は彼だろうか？力に振り回されて……まるで制御できていないじゃないか。存分に悔いて死ぬといいよオールマイト。生徒を導く先生としても君の負けだ」

「そうだよ……だから！叱らにやならんのだよ！」

二つの拳が激突し、その余波だけで建物や道路が紙切れのように吹き飛んでいく。数多の『個性』で強化されているオール・フォー・ワンの腕がギリギリと軋み、そこから赫い雷が流される。

パワーではオールマイトが上手、しかしオール・フォー・ワンは動かない。『衝撃反転』で受けるはずであったダメージを、全てオールマイトに送り返そうとする。反射できるのは衝撃だけだが、多くのものを守ってボロボロのオールマイト相手ならそれだけで十分。天威のソレと同じ残る雷も、影響が消えるまで『超再生』で粘り続けなければならない。

結末は既に決まっている。オール・フォー・ワンはマスクの下で小さくほくそ笑んだ。

「先生として……叱らねばならんのだよ！」

「何ッ……!?!?これは！」

オール・フォー・ワンは信じ難いものを見た。反射された衝撃で吹き飛ばされるはずだったオールマイトが、いつの間にか自身の背後へと回り込んできていたのだ。

天合万雷は、風華の持つ電気の力を一時的に他者にも分け与えるというものである。これによりオールマイトは、効果中は風華と同じ技をいくつか扱うことができるようになっていた。その結果使用した技が今の雷上動と、ここからの――

「衝赫……『大雷』！」おお、おいかづち

「ぐはッ……！」

——いいか、俊典……限界だって、そう感じたら思い出せ！お前のオリジンってやつをな！

オールマイトは教師だ。導いていかなければならない教え子達がたくさんいる。信じて力を託した愛弟子がいる。

平和の象徴としてだけではなく、彼らを一人前のヒーローに育て上げなければならぬ。師匠が自分にそうしてくれたように、今度は自

分がそうしていかねばならないのだ。

ここで死ぬ訳には、いけないのだ。

「ここまで醜く抗っていたとは……誤算だった」

吹かずとも消えゆく弱々しい残り火。役目を全うするまで消えぬよう、必死に抗っているのだ。右腕を囮にして背後に回るなどというらしくない小細工までして、懸命に。

「誰の影響なのか……だが、浅い！」

「そりゃあ……腰が入ってなかったからなア！」

不意を突くことだけを考えたパンチでは、腰を入れられず大した威力にはならなかった。オール・フォー・ワンは衝撃を殴られた頭部から左腕まで伝播させ、衝撃波として押し出す。ダメージをある程度逃すことに成功していた。

ワン・フォー・オールは既に、天合万雷によって何とか繋ぎ止められている状態。電力が途切れればもはや動くだけの力も維持できず、儂く消えてしまうだろう。その電力に関しても、今の一撃でかなり消費された。オールマイトは勝利する最大のチャンスを不意にしてしまった――

――皆が笑って暮らせる世の中にしたいです。そのためには『象徴』が必要です。

――まだ動けるな!?!限界超えろよ!

――何人もの人が、その力を次……そのまた次と託してきたんだよ。みんなの為に……一つの希望になりますように。次はお前の番だ。

――頑張ろうな、俊典!

「おおおおおおおオ!!」

歯を食いしばり、叫び、全霊の力を込める。残り火はここでその役目を終える。赫雷はツナギとして役割を全うしてくれた。ここでオール・フォー・ワンを倒し、平和を後に託そう。

最後の一撃。腰を入れて、爪先から肩まで全身を連動させて放つ最強の一打。そこにはどんな小細工だろうと、入る余地は存在しない。赫色の雷が何よりも激しく弾ける。ワン・フォー・オールが放つ碧色のスパークと赫い雷が混ざり合い、天に昇り曇天を晴らした。その後を見届けるかのように……星明かりがオールマイトを優しく照らす。

——さらばだ……オール・フォー・ワン。さらばだ……ワン・フォー・オール!

「UNITED STARS OF……!」

——SMASH!!!

旋風が巻き起こった。ヘリを揺らし、駆けつけたヒーロー達を吹き飛ばし、地面に巨大なクレーターとオール・フォー・ワン形の穴を開ける。

拳が離れても、オール・フォー・ワンはピクリとも動かない。『衝撃反転』『ショック吸収』『超再生』etc……数多の個性を振じ伏せて巨悪を討ち果たしたオールマイトは、静かに……そして真っ直ぐに左腕を天に掲げた。

『敵は——動かず!勝ちました!オールマイトが勝ちました!勝利のスタンディングです!』

「そうか……俊典」

グラントリノにはその意味が分かっていた。若き日にオールマイ

トが言っていたこと。この国には平和を支える『柱』がない。だから自分がその柱になるのだと。

あれは仕事だ。平和の象徴……No. 1ヒーローとしての、最後の……

「この下、2人います！あっちにも……」

「了解！」

『オールマイトの交戦中も、ヒーローによる懸命な救助活動が続けられておりましたが！死傷者はそれでもかなりの数になると予想されます！元凶の敵は今……あつ、今！オールマイトらによる警戒態勢の中移動牢に入れられようとしております！』

「こちら、毛布配布していまーす！」

「電車動きません！あちらの方で介抱施設の案内を行っています、立ち止まらずゆっくりと……」

「慎重に運べよ、身体中に酷いヒビが入ってる！不用意に動かしたら崩れるぞ！」

「この子が……最後のアレで、オールマイトを助けたんだよな。よく動けたよ……ホントに」

オール・フォー・ワンが牢に入れられ、風華もまた到着した救急車によって搬送されていく。牢の方を警戒する傍ら、オールマイトは去っていく救急車を見送って小さく『……ありがとう、君には本当に救けられたよ』と呟いた。

日本中を震撼させた神野事変。それは平和の象徴の終焉と共に終わりを告げるのだった。

## エピソード：終わりの始まり

事件の翌日、見知らぬ白い天井の下で風華は目を醒ました。服は借りた水着から病衣に変わり、腕には点滴用の針が何本も刺さっている。どうやらこの病院に入院しているらしい。

身体に入ったビビのことや、行方不明だった時のことに自身と瓜二つの敵のことなど、医者や警察から何度も事情を聞かれたことで、風華はもう一週間は病院に拘束されていた。ちなみに葬もこの病院に入院している。ベッドは隣同士であった。

「ふうちゃん……オールマイトの引退会見、アレ観ましたか？ 凄い反響でしたよね」

「一緒に見たでしよ……まさか忘れたの？ 凄い反響だったことは認めるけどさ……」

ヒーロービルボードチャートJ.P……それは事件解決数や社会貢献度に国民支持率など、諸々の情報を集計し年に二回発表されるヒーローの番付。デビュー以来不動のNo. 1であったオールマイトの引退とその場で晒したトゥルーフォームは、日本のみならずヒーローの本場アメリカをはじめ世界各国を騒然とさせた。

オール・フォー・ワンとの因縁に、かつて負った大怪我のこと。既に戦える身体ではなく、体力ももう尽きたということを発表した。事実上のヒーロー活動引退宣言である。

それだけではない。神野で重傷を負ったベストジーニストは一命を取り留めたものの、療養のためにしばらくの間活動休止。

ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツの一人であるラグドールも、事件後『個性が使用できなくなってしまふ』という変調に見舞われ活動を見合わせる事となった。現在は3人の仲間によるサポートを受け復帰方法を模索しているところだ。

「たった一夜で、多くの人が……ヒーローが打撃を受けた。これからの日本は……そして、ヒーローはどうなるんだろうね」

「決まってるじゃないですか。僕達がより良い未来をこれから創っていくんですよ。今まではオールマイトが一身に背負っていたヒー

ローへの期待や信頼を、僕らで引き継いでいくんです」

ま、その前に僕達プロじゃないですけどね。そう言つて戲けてみせる葵だったが、その眼はまったく笑っていなかった。

彼女は今回の事件、敵連合に拉致された被害者であると同時に、『外道大敵雷神』として神野の街を破壊した加害者でもある。曲がりなりにもヒーローの卵である自分が、良いように操られていたとはいえ敵の破壊活動に加担してしまったことを、ずっと気にし続けてきているのだ。

その身を犠牲にしても、多くの命を救い巨悪を討ち果たしたオールマイト。死柄木の甘言に乗せられることなく、どこまでも『ヒーロー』で在り続けた爆豪。2対1の状況に苦しんでいたオールマイトに、勝利の一押しをした風華。それらと比べて己の何と愚かなことか。そう自嘲し続けていた。隣ですつと聞き続けていた風華が、『個性』を使つてでも黙らせようかと検討するくらいには。

「これから風当たりは強くなるだろうね。葵は敵に操られてたし、わたしはわたしの人造人間そっくりさんが敵の中にいたから。何度も追求されるかな」

「雄英、追い出されるかもしれませんがね」

「……そうかもね。それでもわたし達がやることは変わらない。全力を尽くしていくだけさ」

「そうですね。風当たりの強さくらいでヒーローを諦めたら、それこそ敵になるしかなくなりますよ」

風華は死にかけ、葵は敵の破壊行為に加担してしまった。今回の事件ではお互いに悔いの残る結果となつてしまったが、いつまでもそれでクヨクヨしては仕方がない。気持ちを前向きに切り替えて、2人は腹を満たしに売店へ向かうのだった。

「お姉ちゃああああん！よかつたあ……！無事で良かったよお……」

！」

「ごめんね、雷羽。またあなたに心配をかけて」

「ううん……ホントに、もう……！」

「姉妹愛……いいものですねえ……」

体調が回復してきたことで、普通に面会もできるようになった。こごぞとばかりに抱きついて甘えてくる妹を見て、風華は心配をかけてきた分を打ち消そうとするかのようにそれを受け入れる。わしわしと頭を撫でられて嬉しそうにする雷羽を見て、葵は姉妹っていいものだなあ……と呟くのだった。

「あ……そうだ！お姉ちゃん達これから寮住まいになるんでしょ？立甲のおじさんが、普通に過ごすのはもう危険だって言ってたよ」

「そうだね。雄英の敷地内に寮ができるから、これからはそこに住むことになる。研究所の時みたいに雷羽が遊びにくることは、難しいだろうね」

「離れ離れは辛いですよ。僕としては自由に使えてた施設が使えなくなることも辛いですけど」

「わたし達のせいで研究所は大変だからね。活動もしばらくは続けられないみたいだし」

閑話休題。話は新たに建てられる雄英学生寮への引越しに移り変わった。オールマイトの引退により敵の活動がこれまで以上に活発化することが予想される中、ヒーローの卵である雄英生が普段通りに生活することは本人・家族などの安全面から厳しいだろうという予測が立てられている。

そのため、8月下旬頃に完成予定の学生寮『ハイツアライアンス』に生徒は引越す。雄英高校は全寮制に生まれ変わる。

そのための話し合いは、少し前に2人の保護者ということになっていく立甲の同伴の元行われた。血縁である葵の話し合いはすぐに終わったが、風華の話は少し時間がかかった。最終的には雷羽と叔父夫婦を危険に遭わせないためということで、寮住まいに同意したのだが。

セキュリティという面では、実は雄英と個性研究所ではそこまでの

差はない。むしろ、より利用者にプロヒーローの資格も持っているスタッフが近い分安全とも言える。それでも引越すことになったのは風華達のせいで、研究所が敵との関連を疑われているからだ。

殺到する抗議の電話に、メディアからの取材依頼や押しかけ取材。これでは利用者に安心して研究所に通ってもらうことができないため、今は熱りが冷めるまで活動を休止することになっている。さつきと活動を再開するためにも、当事者である風華と葵は邪魔なのである。

「研究所を使うのは僕達だけじゃないですからね。個性のせいでマトモに社会を生きられない者、自らの命すら脅かされている者、研究所を必要としている方はたくさんいらっしゃいます。彼らのためにも僕達はすぐに退散する必要がありますから、寂しいものではありませんが仕方がありません」

「しばらくは、あなたとこうして会ってお話しをすることはできなくなっちゃうけど……メールだとか手紙だとか、いつでもどれだけでも送ってきてくれていいからね。どこに行っちゃって、お姉ちゃんは雷羽のことを忘れてはしないから」

「うん……お姉ちゃんの方からも、ちゃんとお手紙送ってよね！約束だからね！」

長くない面会時間は終わり、雷羽は差し入れを置いて帰っていった。ずっと起こしていた身体をベッドに横たわらせ、2人は寮についてそれぞれの思ったことを話し始める。一応『部外者』である雷羽がいる場では、話せなかったことを。

「今回全寮制になったのはさ……学校の中にいるであろう内通者を炙り出すためだと思うんだ」

「内通者……確かに、敵連合は英雄のことを何でも知ってるかのように先回りしてましたからね。情報を送っている何者かがいる、そう考えるのが自然なことでしょうね。下手に動かさせるよりは監視下において泳がせる……そういう狙いなのでしょう」

敵の影響を受けた葵や、行方不明の間にオール・フォー・ワンと接触することになった風華を監視するため、という理由もあるだろう。

何せどんな影響を受けているのか分からないのだから。監視できる環境に置いておくに越したことはない。いるかもしれない内通者も含めて、そういうことなのだろうと2人は考えていた。

「やあ、お2人さん！具合はどうだい？」

「オールマイト？どうしてここに……」

「僕達のお見舞いに来てくれたんですか!？」

「その通りさー！君達……特に鳴神少女は消えない傷を負ったようだからね……私が不甲斐ないせいで君達に要らぬ害を与えてしまったこと、本当に済まなかった。この通りだ……」

雷羽が去って少してから、オールマイトが2人の病室にやって来た。入室して早々に深く頭を下げ、自身の不手際を詫げる。

オールマイトの言う消えない傷……それは風華の左半身を蝕むように付いた、赫い電子回路のようなヒビのことである。赫災領域レットゾーンが解除されてからというもののヒビ割れの進行が止まらず、個性による治療とヒビ割れの遅延を繰り返して、ようやく命を繋ぎ止めることができていたのだ。

個性の影響による傷や病気を治す手段は、ほとんど存在しないと云っていい。風華は、これから先もずっとこのヒビと共に生きていくことになる。

「大丈夫ですよ、オールマイト。わたしがやりたいことをやり通した結果ですから。これであなたを救われたのだから、安いものです」  
「オールマイトがああ敵を1人で抑えてくれたからこそ、暴走する僕を他のヒーロー達が止めることができたんです。あなたがいなければ僕はずっと暴れたままだったでしょう」

オールマイトが奮起してくれたからこそ、最悪の結果だけは免れることができた。だからそんな風に頭を下げないでほしいと2人は言う。その言葉を聞いたオールマイトは、ゆっくりと顔を上げて2人の顔を交互に見つめる。

「……ありがとう。少し気が楽になったよ」

そして、フツと笑った。

「私はもう、戦える身体じゃなくなってしまった。ナチユラルボーン

ヒーロー……『平和の象徴』オールマイトはここで終わりだ」

ワン・フォー・オールに残り火は消えて、風華が分けてくれた電力も使い果たした。絶対に折れない不動のNo. 1はもういない。

それでも、『オールマイト』はここにいる。先を行く者の責務として、これからはヒーロー科の育成に全力を注ぐと約束した。これから先の平和を担う若きヒーロー達を、全力で育てていくと誓った。

両の拳を2人に差し出し、オールマイトはニツコリと笑う。導かれる側の人間として、君達も頑張ってくれというオールマイトなりの激励である。勿論2人ともその拳を快く受け入れ、自分の拳を差し出された拳にぶつけるのであった。

「次は君達だ。私も教師としては新米……共に成長する立場にある。お互いに……これからも頑張っていこうな」

「はい！」

「もちろんです！」

〽

「えー……取り敢えず1年A組、無事にまた集まれて何よりだ」

「みんな許可貰えたんだな」

「ウチ厳しかったや」

「フツーはそうだよね……」

「透と響香は、直接ガスの被害受けたからね」

「鳴神も、その傷大丈夫なのかよ？」

雄英校舎から徒歩5分の所に建つ、築三日の学生寮『ハイツアライアンス』。相澤をはじめとするA組の面々は、その正面玄関の前に集まっていた。無事で何よりだったという相澤に、蛙吹が『先生も無事でよかった、いなくなってしまうんじゃないかと思っていた』と言った。

襲撃を許したことを発端とする今回の事件。担任2人は普通なら懲戒解雇のような重い処分を免れなかったはずだが、半年間の減給と始末書だけで済んでいた。そのことには相澤も驚いているらしい。

「ま……いろいろあるんだろうさ」

「何にせよ、みんな無事でよかったわ」

「そうだな。それじゃ、寮について軽く説明するがその前に一つ……当面は合宿の中で取る予定だった『仮免』取得に向けて動いていく」  
「そっ……いやあつたな、そんな話！」

合宿中はいろいろあつたし、襲撃のせいで頭から抜けていたとみんなが騒ぎ出す。『大事な話だ』そう言って相澤は騒ぐ生徒達を黙らせてから、飯田・切島・轟・緑谷・峰田・八百万の名前を呼ぶ。爆豪救出に赴いた6人の名前……もつとも実際に救出を果たしたのは3人だけであるが。

「その様子だと、みんなも行く素振りには把握してたみたいだな。いろいろ棚上げした上で言わせてもらうが……俺はオールマイトの引退がなけりやあ爆豪・鳴神・耳郎・葉隠以外は全員除籍してる」  
「ッ……!?!」

オールマイトの引退により、しばらくの間日本は混乱が続く。敵連合の出兵が読めない以上は雄英から人を追い出す訳にはいかないのだ。だから除籍をしないだけで……行った6人はもちろん、把握しながら止められなかった11人も自分の信頼を裏切ったことに関わりはないと相澤は言い聞かせる。

「鳴神、お前もだ。お前がオールマイトに協力したおかげであの敵を倒せたのは事実だし、行方の分からなかったお前の戦闘許可は解除できなかつたのもその通りだ。だが、生還できたならお前は真っ先にヒーローか警察に通報するべきだった。あの場所へ戦いに行く必要も理由も、本来はお前にはなかつたんだ。それを忘れるなよ」

「……もちろんですよ。忘れるものですか」  
「分かつてるならいい。最後に……理由はどうあれ君達が信頼を裏切ったことには変わりない。正規の手続きを踏み、正規の活躍をして、信頼を取り戻してくれるとありがたい」

「はいー」

話は以上だ、中に入るぞ元気にいこう。そう言って踵を返した相澤であったが、風華以外は重くなりすぎた空気のせいでまったく元気に

行く気にはなれていなかった。

この傷は戒めだ。自分が弱かったから葵も爆豪もあそこで助けることができず、身体にヒビが入る程赫炎領域レッドゾーンを酷使せざるを得なくなった。

もつと力を着けなければならない。誰もが安心できるような強いヒーローへの道はまだ遠い。オールマイトは引退し、これからの時代は否が応にも物騒になっていくだろう。そんな時代を生きていく者の一人として、そんな時代を守る一人のヒーローとしてもつと強くならねばならない。後ろの方で爆豪と上鳴が何かの茶番を繰り広げている中で、風華はただ一人決意を改めて固めていた。

——まずは、仮免からだね。

## 1章：番外編

### 鳴神風華の必殺技紹介

「ぷっはああア……！疲れた！」

「お疲れさま。フルカウルも様になってきたね」

肺に溜まった空気を一息で吐き出し、緑谷は研究室の白い床に背中を押し着ける。まさしく疲労困憊といった彼に風華がスポーツドリンクを渡すと、緑谷は待つてましたとばかりにそれを飲み干す。空になつたコップを置いて小さく息を吐くと、それまで様子を見ていた風華は小さく微笑んだ。

風華の笑顔を見て、笑われるのが恥ずかしくなつた緑谷は身体を起こして姿勢を整える。差し出されたスポーツドリンクのおかわりを受け取ると、それも一口で飲み干してやる。死人が生き返つたかのようにリラックスした表情をする緑谷を見て、風華はまた面白いものを見たように笑うのだった。

「凄い飲みっぷり。相当疲れてたんだね」

「あはは……お恥ずかしい。確かに、9%を維持し続けたまま動くのは疲れるよ。ちよつと制御が乱れただけでも痛みが出るし、インパクトの瞬間だけは更に引き上げなきゃいけないからね」

「考えることが多いと大変だよね。その分慣れたらいろんなことができるようになるから、それはそれで楽しいんだけど」

「まだまだ精進しないとだね……」

慣れてくる、そう言う風華の言葉を聞いた緑谷はふと考えた。風華の個性はとても強力で、尚且つ多彩な使い方がある。それらは彼女が研究所に入るようになってから培われたものだと分かるが、実際それはどのようなものがあるのだろうか。

「鳴神さんはいろいろ必殺技があるけどさ、具体的にどんな技なのかってのは知らないんだよね。雷上動とか吹き荒ぶ大風とかは見たことあるけど……他にもいろいろ技があるなら見てみたいな」

「ふふ……気になるかい？じゃあ訓練の休憩がてら見せてあげるよ。」

訓練の成果を単純に自慢する機会なんてそうないからね、いくらでも見てつてくれて構わないよ」

自分の必殺技が見たい、そう緑谷に請われた風華は快くその申し出を受け入れた。不用意に技を出して緑谷を巻き込まないように距離を空け、一つ目の技の用意を始めていく。

「まずはコレ……吹き荒ぶ風だね。チーフストーム。空気を集め押し固めて放つ空気砲ってヤツだ。吹き荒ぶ大風と違って威力はショボいけど、そんなに多くの空気を集めなくていい分速射性に優れる。連射もできるし破壊範囲が狭いのもいいところだね」

「鳴神さんがよく使ってる技だね！やってるのがシンプルで分かりやすいし、その上強力！確か入試の時も……その技で救ってくれたんだったね」

まずは、最も多く使う機会のある吹き荒ぶ風及びその強化版のバンバーストーム。緑谷が訓練に使っていたサンドバッグの余りに向けて集めた風を放ち、それらを穿ち抜いていく。自己再生能力を持ったサンドバッグは穿たれた孔を修復しようと白い液体を傷口から滴らせるが、そんな努力も虚しく台風の如き暴威によって粉微塵にされた。

操った空気を一点に小さく纏め、そのまま任意の方向に向けて射出する。個性研究所での訓練の中で最初に身に付けた技であった。

何かを『操る』個性を持つ者にとって、対象を集めたり撃ち放ったりするのはほとんど基本事項のようなもの。この技が最も早く身に付いたのも、そういった理由からだっったりする。

「ただ空気砲として撃ち出すだけが、この技の持ち味じゃないよ。入試の時や体育祭でやってみせたように、集めた空気を分散させることで範囲を広げたり地面に撃って強い気流を作ることまでできる。落下してくる人や物を、怪我させたり壊したりせずに安全に降ろすことができるんだよ」

「一つの技にもいろいろ選択肢があるんだよね！僕も100%ならスマッシュを地面に向けて撃てば同じようなことができるかな……いや、そうしたって僕ではできたとしても浮かせられるだけで腕が壊れ

てしまうからそのまま落下してくる人や物を支えに行くことができないな。継続して空気の流れを操り続けることができる鳴神さんならではの方法だし僕が同じようなシチュエーションで救助活動に当たるとしたら普通にフルカウルを使って落下してくる人や物にそのまま跳びついてキャッチしに行った方が確実だし非効率だけど空中にいる間にスマッシュをで更に推進力を稼いで滞空時間を減らすなどして次に行くまでのラグを少しでも軽減することができれば同じようなことはできなくとも救助は行え」

「はい、ストップ。そろそろ次の技を見せるよ」

「あッ……ごめんね、自分の世界入ってた！」

風華の技を見せてもらった緑谷は、自分にも同じようなことはできないかと考えている内に自分の世界に入り込んでしまう。ブツブツと壊れたラジオのような息継ぎもせず言葉を繰り返していたが、顔が酸欠で青くなってきたのを見た風華によって強制終了させられた。

深呼吸して息を整えたのを見届けると、風華は再び緑谷から距離を取って次の技を準備する。全身に翠緑のスパークが迸り、眩く閃いてはバチリと音を鳴らした。纏雷、身体に電気を流すことで身体機能を刺激し、活性化させる技である。

「今度は纏雷か！僕がフルカウルを編み出す時に、ヒントとして使ってくれてたヤツだね！」

「そうだね。フルカウルとの違いは自爆する心配がないことと、一応出力の上限は存在しないってところかな」

「あー……うまく言えないけど、フルカウルが肉体の強度自体はそう変わらないのに対して、纏雷はそれも含めて強化してるからって感じ？」

「フルカウルだと、身体の外側は硬くなってるみたいだね。けど概ね合ってると思うよ。そしてこの状態での攻撃は……」

纏雷とフルカウルの違いは、身体強化の方向性だけである。電気の刺激によって肉体そのものを強化する纏雷と、内側から溢れてくる超パワーを放出する形で強化するフルカウル。似たような技の微妙な

違いについて言及した風華は、立甲に追加してもらったサンドバッグを強化された足で蹴り上げた。人形の首がもげて空中に吹き飛んでいく。

「衝翠『大雷』……纏雷状態での体術のことをそう呼んでるけど、基本的には蹴り技だね」

「僕がスマッシュって呼んでるのと同じだね」

「出久のは、その前にいろいろと名前が付いてるけどね。アメリカの州の名前だっけ？」

「そうだよ、オールマイトの真似だけど……」

風華の体術は全て衝翠『大雷』の名だが、緑谷の体術はデトロイトスマッシュやデラウェアスマッシュをはじめ多くの名が付いている。オールマイトのフォロワーな緑谷らしいと、風華はそのネーミングに感心していた。

何せ自分も、妹や葵から『ださい』『丸パクリは良くない』『似合わない』『やめて』とダメ出しされていなければ、同じようなネーミングにしていたであろうから。オールマイトのフォロワーなのは、風華も同じなのである。

「と、話はそこそこに……次に見せるのはコレがいいかな。もう何度か見せてるけどね」

「雷上動……瞬間移動だね！ワープとかレポートみたいな類の個性とはまた違った、圧倒的スピードの移動法！まさに電気の力を活かしてるって感じでカッコいいよね！」

風華が次に見せたのは雷上動。空中に電気のラインを引いたら、その上に乗るようにして光の速さで移動する高速移動技である。ラインを引く時間は距離が長ければ長い程かかってしまうが、その移動速度は光の速さと同じ。手間に見合わぬ利便性を持つ風華のお気に入り技であった。

この技を編み出したのは中学生の時。葵と喧嘩になつて赫災領域レッドゾーンを暴走させてしまった時、無意識の内に使っていたのである。暴走が収まってから聞いた話と残っていた感覚を元に、普段の状態でも使えるように訓練して習得したのだ。『自分自身が雷になつたように』と

いうコツを身に付けるまでは、安定して使うにはとても苦勞していた。初めての技である吹き荒ぶ大風に並んで、風華にとっては思い入れのある技である。

「後は……電熱で対象を発火させる燎翠『火雷』に音の振動で内側を攻撃する響翠『鳴雷』。使うには得物が必要になるけど、その分射程や破壊力が向上する号翠『裂雷』とかがあるね」

「ど、どれも危険そうな技だね……」

「その通りだよ。裂雷はわたしのブレードを雄英に預けてあるから見せてあげられないけど、火雷と鳴雷に関してはこの通り」

「うわっ……！サンドバッグが一瞬でおいたわしいことになっちゃってる……コレは、人に向けるのは危険すぎて無理だね！」

鳴雷を食らったサンドバッグは、中身をグズグズにされて少し押しただけで崩れていく。火雷は発火に必要な膨大な電力でもって、サンドバッグを火にかけるまでもなく焼き尽くした。

およそヒーローが使うべきではない技の火力に、緑谷は若干顔を引き攣らせる。個性をいい感じに使っているとだいたい誉めちぎれる緑谷でも、流石にフォローし切れなかったらしい。

「取り敢えず……今のわたしが見せられる『技』はこのくらいかな。ちゃんと制御できるなら見せたいものがあっただけだね」

「赫災領域……」

「少しは参考になったなら嬉しいな。わたしの技が出久のものになった時、どんな風が変わっていくのかを楽しみにしてるよ」

「うん！鳴神さん、今日はいろいろと必殺技を見せてくれて本当にありがとう！必ずや職場体験ではこの経験を活かしてみせるよ！」

本当ならば、風華は自身のとっておきとも呼べる技を見せようと思っていたのだが。自分でも制御し切れない技を使って、緑谷にいらぬ怪我をさせてはいけないと諦めていた。

緑谷の方も、風華が見せるのを諦めていた技がどんなものであったのかを察してその名を呟く。見れないのは残念だが、暴走の巻き添えを食らうよりはマシだと判断し、諦めることにした。

「と……今日はもう上がった方がいいね。帰りが遅くなったら親御さ

心配するでしょ」

「そうだね。今日はもう帰ってゆつくり休むことにするよ。鳴神さん、今日もいろいろありがとう」

「立甲のおじさんに言っただけだよ。わざわざ出久のために待機してくれてたんだからね」

「うん、着替えたらお礼に行くよ！」

、

「立甲さん、鳴神さん。今日も研究所を貸してくれてありがとうございます。ありがとうございました！おかげ様で新しい技の構想も得られましたし、職場体験に向けていい訓練になりました！」

「はは、これからも遠慮しないでどんどん利用しに来なさい。個性に悩む者に対して、個性と向き合う場を提供するのも研究所の役割だからね。飯田君にもよろしく言っておいてくれよ」

「職場体験まではもう少しあるからね。わたしの必殺技も、詳しく見たいなら何度でも見せるよ」

「ありがとう！鳴神さんの技……吹き荒ぶ風が僕の考えた新しい技のヒントになったんだ。明日はまた吹き荒ぶ風のコツとか教えてほしいな！それじゃあ僕は帰るけど……今日も本当にありがとうございますました！」

ぶんぶんと赤べこのように頭を下げると、緑谷は風華の視界から消え去るまでお礼を言いながら帰っていった。ドップラー効果で段々と変調していくお礼の言葉が何だか可笑しくて、風華は腹を抱えて笑うのを必死に堪えるのだった。

「ふふふ……出久は締まらないね」

「笑い過ぎ。ほら、中に戻るよ」

## 鳴神雷羽の交流日誌

5月〇〇日

今日は、叔母さんと一緒にたくさんプリンを作りました。上手くできた分をお姉ちゃんに渡しに研究所に行くと、立甲のおじさんが出てきてくれたのでプリンをお裾分けしました。甘いものが大好きらしいおじさんはとても喜んでいました。葵お姉ちゃんの分も渡したけど、おじさんが勘違いして二つとも食べていないかが心配です。

お姉ちゃんがいつも使ってる研究室に行くと、いつもはお姉ちゃんと研究員さんしかいないはずの研究室に知らない人がいました。知らない人達は二人ともお姉ちゃんと同級生で、体育祭で活躍するために特訓に来たのだそうです。もじやもじやした緑色の人が緑谷さんで、メガネのロボットみたいな人が飯田さんという名前だと教えてくれました。

わたしが持ってきたプリンは多かったので、緑谷さんと飯田さんにもお裾分けして一緒に食べることにしました。緑谷さんはプリンのお味についてとても早口で喋っていて、何て言ってるのか全然聞き取れませんでした。飯田さんも食レポは下手くそで、何を言いたいのかな全然分かりませんでした。二人ともご飯の時は喋らない方が良いと思いました。

一緒にプリンを食べながら、緑谷さん達には雄英でのお姉ちゃんのことやどんな授業をしているのかなどを聞きました。ヒーロー基礎学という授業がとても面白そうで、わたしも高校は雄英に通いたいなあと思うようになりました。授業の時に敵の襲撃を受けた時の皆さんのお話は、ヒーローらしいとてもカッコいいものだと思います。

緑谷さんと飯田さんは、これからも暇さえあれば研究所に訓練をしに来るそうです。また今度会った時にも雄英のお話を聞かせてくれると、わたしが研究所を出る時に約束してくれました。新しいお話がもう待ち遠しくてたまりません。お話のお礼に体育祭では二人を応援してあげようと、わたしはコレを書きながら決意するのです。

6月〇〇日

今日は緑谷さんに会いました。明日からヒーロー事務所での職場体験が始まるので、その前の追い込みをしていたのだそうです。飯田さんはヒーローをやっているお兄さんが敵にやられたらしく、今はここにきている場合じゃないと言っていました。飯田さんのお兄さんはあのインゲニウムで、わたしでも知ってた名前にびっくりしました。

最近は週末に毎回会うので、お姉ちゃんへの差し入れのついでに緑谷さん達にも手作りのお菓子や飲み物をお裾分けしていました。緑谷さんの早口な食レポも、飯田さんの何を言いたいのかわかり辛い食レポも分かるようになってきたので、しばらくは感想をもらえないのが残念です。今日のお菓子はチーズケーキでした。

緑谷さんに職場体験でどんなヒーローのところに行くのかと聞くと、グラントリノというヒーローの事務所だと答えてくれました。ヒーローに詳しい緑谷さんでも聞いたことのないヒーローで、調べても情報が全然ありませんでした。緑谷さんはとっても張り切っていたので頑張ってくださいと言っておきましたが、何だか心配になります。

帰ろうとすると、お姉ちゃんに呼び止められてどんな訓練をしているのか見せてもらいました。体育祭でも見た緑谷さんの個性はあの時よりも更に速くなっていて、お姉ちゃんとの組手はすごいスピード感でとても見応えがありました。わたしもいつかは雄英を受験しようと思っているので、二人のように強くなろうと本気で思いました。

6月〇〇日

職場体験は今日までと聞いていたので、お姉ちゃんに会いに行くと、お姉ちゃんは葵お姉ちゃんと一緒に知らない人と組手をしていました。その人は爆豪さんという名前前で、お姉ちゃんのクラスメイトだそうです。髪の毛がツンツンしてるし、目つきがとっても悪いし、態度も粗暴そうでヒーローやれるのかなあこの人と思いました。

二対一の戦いは一方的なもので、爆豪さんは殆ど成す術なく組み伏せられていました。赫災領域の暴走を克服したお姉ちゃんと、龍化し

た時の力強さに磨きが掛かってた葵お姉ちゃん。この二人相手に15分近くも粘っていた爆豪さんはとつても凄い人なんだなと思いました。爆発の余波でモニタールームが揺れるのを、今でも覚えています。

休憩に出てきたお姉ちゃん達に、わたしはいつものように持つてきたお菓子をあげました。今日は芋羊羹です。爆豪さんはいらないと拒否しようとしていましたが、子どもの好意をヒーローが無碍に扱うんじゃないと言われて渋々ながらも受け取ってくれました。味の感想はありませんでしたが、完食はしたので美味しかったのだと思います。

爆豪さんにもいろいろと雄英でのお話を聞かせてもらいたかったけど、あんまり人のこととか興味がないタイプのようで、あんまり面白いお話はありませんでした。その代わりに、体育祭の決勝戦でお姉ちゃんと戦った時のお話を聞かせてもらいました。爆豪さんは粗暴だし口も悪いけど、いろいろ考えてて頭がいいんだなと思いました。

爆豪さんとはとつても口が悪くて、話しているとごく自然に暴言を言ってしまうみたいです。わたしの前で汚い言葉を使うなど、お姉ちゃんに逐一小言を言われ続けていました。そんな注意にも暴言で返してしていたので、アレはもう治らないのだと思います。三つ子の魂百までということわざを習ったことを思い出しました。

6月〇〇日

今日もまた、初めて来たお姉ちゃんのクラスメイトがいました。尻尾が生えてる尾白さんと、頭のいい八百万さん。そして高校生なのにわたしよりも身長が低い峰田さんです。尾白さんは峰田さんの様子を何やら不思議そうに見ていたのですが、何かいつもと違うところでもあったのでしょうか。わたしには分かりませんでした。

緑谷さん達ではなく尾白さん達が来たのは、もうすぐ期末テストがあるからだそうです。雄英は日本一のすごい学校だし、きっとそのテストも凄く難しいのだと思います。今日研究所に来た三人の中で、峰田さんが尾白さんが一番成績が低いと聞いた時は驚きました。あんまり頭良さそうには見えなかったからです。

お姉ちゃんも三人の個性訓練が終わってから、いつものように作ってきたお菓子をあげました。三人とも爆豪さんと違い、喜んで受け取ってくれた上にすっかり感想までくれました。今日のお菓子はお茶っ葉を使ったクッキーでした。八百万さんはお菓子が出るならお茶を用意してくれば良かったと言っていました。次はそうしてみようと思います。

お菓子の時間の後は、三人にわたしの勉強を見てもらえることになりました。学校の勉強で苦戦してるみたいでも、教え方が上手でとても分かりやすく、すんなりと勉強したことが頭に入りました。後で話を聞くと、八百万さんは推薦入学の上にテストでも学年主席だったそうです。そんな人に見てもらえたわたしは、すごい幸運だと思います。

お姉ちゃんが席を外している間、峰田さんにわたしから見たお姉ちゃん、どんな人なのかと聞かれました。お姉ちゃんはお父さんもお母さんも赤ん坊の頃に亡くしたわたしにとって、唯一の家族であり憧れのヒーローです。そう言うと、峰田さんは何だかとても嬉しそうに笑っていました。峰田さんにとっても、お姉ちゃんはヒーローなのだそうです。

7月〇〇日

今日もまた、知らない人達がたくさん研究所に来ていました。ツーンカラーなイケメンの轟さんと身体の大きな障子さん、ビリビリしてる上鳴さんにツンツン頭の切島さんです。最近では緑谷さんや飯田さんじゃなくていろんな人達が変わりばんこに研究所に来るのは、お姉ちゃんがクラスのみんなに研究所のことを知って欲しかったからだそうです。

今日来た四人のお兄さん達は、期末テストの反省会をすと言っていました。雄英の先生を相手にチームを組んで二対一で戦う試験で、切島さんと上鳴さんは、ほとんど何もできずに負けてしまったのだそうです。わたしは二対一でボコボコにされてた爆豪さんを見ていたので、雄英の先生は強いんだなあと思いました。

上鳴さんにわたしの個性について聞かれたので、立甲のおじさんの

許可をもらってわたしも皆さんの訓練にちよつとだけ混ぜてもらいました。わたしの個性は『電象』と言って、電気を操っているいろいろな形を創ることが出来ます。お姉ちゃんと違って風は起こせないし赫い雷も出せないけど、発電力に関してはお姉ちゃんより上の自慢の個性です。

どんなことができるのか見せて欲しいと皆さんに言われたので、見本として龍化した葵お姉ちゃんを再現してみました。かなり出来のいい作品になったし、みんなからも高評価で嬉しかったです。作ったものはしっかり動かせるというところも見せると、皆さんとても驚いていました。雄英生を驚かせることができたので、大満足でした。

今日は休憩しておやつタイムを取ることがなかったので、皆さんが帰る時に持ってきたお菓子を渡すことにしました。今日作ったのはべっこう飴で、飴が大好きなお姉ちゃんがとつても喜んで食べてたのが印象的です。上鳴さん以外は帰る時、わたしの頭を撫でながらまた研究所に来ることを約束してくれました。上鳴さん、大丈夫でしょうか。

7月〇〇日

今日はお姉ちゃんが、クラスのお友達と一緒にショッピングモールにお買い物に行く日でした。お姉ちゃんはあるお洋服に頓着しないので、前日にお買い物のためのお買い物をしました。ちゃんとその成果は実っていたのでしょうか。わたしは部外者なので葵お姉ちゃんと一緒に遊びに行つてましたが、やっぱり心配です。

そしてその心配は、予想とは全く違った形で現実となつてしまいました。何とお姉ちゃんはモールの回っている時に、緑谷さんと二人きりになったところを敵に襲われたのだそうです。幸いなことに死傷者は一人もおらず、お姉ちゃんも緑谷さんも無事だったみたいですが、警察署で確認するまでは本当に生きた心地がしませんでした。

パトカーに乗って個性研究所までお姉ちゃんを送り届けてもらう間、わたしは今日、葵お姉ちゃんと一緒にバイクでいろんな所に遊びに行ったことを話しました。警察署にいた間は何だか悔しそうに顔を俯かせていたお姉ちゃんでしたが、わたしが話している内に少しずつ

つだけ顔を上げてくれました。やっぱりお姉ちゃんは笑顔が一番です。

研究所に着いてからは、わたしや叔父さんたちもすぐ家に帰るのは危険だということで、研究所で一日宿泊させてもらえることになりました。久しぶりのお姉ちゃんと過ごせる一日でしたが、それができた状況が状況なのであまり喜べません。日付が変わる頃くらいまでずっと、お姉ちゃんとお話ししながら眠れるのを待ちました。

お姉ちゃんもそうですが、葵お姉ちゃんも何だかピリピリしているのが分かりました。もうすぐ夏休みで林間合宿が始まるのに、その出鼻から敵に遭うなんてなれば無理もないでしょう。二人ともとって強いのだし、敵に襲われたところで返り討ちにできるとは思いますが……お姉ちゃんと同じ年だったら良かったのに。思わずにはいられません。

8月〇〇日 〇〇日 〇〇日

大変なことになりました。雄英高校の林間合宿先が敵に襲われて、生徒に被害が出たそうです。ちょうど夏休みの宿題が全部終わって、もう寝ようかなと思った時にみたニュース速報は、わたしや叔父さん達を驚かせるには十分過ぎました。今はいずれ報じられるであろう次のニュースを待ちながらコレを書いていきます。

お姉ちゃんの緊急連絡先の一つでもある叔父さんのところへ、警察からの連絡が来ました。雄英の先生や生徒さんからの事情聴取で、お姉ちゃんは敵を追って行方不明になったことが分かったそうです。お姉ちゃんが行方不明。敵と一緒に何処かへいなくなってしまった。何処へ？お姉ちゃんはいったい何処へ消えたというのですか？

その日は結局、わたしは一睡もすることができませんでした。お布団を被つても目はバツチリと冴えたまま、そんなすぐには来ないと分かっている新しい情報をずっと待ち続けていました。結局お姉ちゃんのことは何も分からず、そのまま夜明けが来てしまいました。お姉ちゃんは生きています。絶対に無事です。そう信じるしかありませんでした。

朝になると、わたしは叔父さんと叔母さんに頼んで一緒に雄英高校

まで行きました。きっと忙しくて連絡が取れてないだけで、捜査は進展してるに違いありません。だから少しでも情報を得るため、雄英に説明責任を追求しに行きました。この時、一緒に立甲のおじさんも着いてきてくれました。葵お姉ちゃんが敵に拐われたのだそうです。

雄英に着くと、スーツを着た大きなネズミさんが迎えに来てくれました。なんと、この方が雄英の校長先生なのだそうです。わたし達は校長先生によって応接間に案内され、そこで今分かっているだけの情報を教えてもらえることになりました。とは言え教えられるのは、お姉ちゃんの安否に関わることだけでしたが。

今回の事件で行方不明になったのは、お姉ちゃんと葵お姉ちゃん、それに爆豪さんだそうです。葵お姉ちゃんと爆豪さんは、敵のしていた会話からして元々奴らの狙っていた標的だったらしく、お姉ちゃんは二人を追って敵のワープゲートに突入し、そのまま行方不明になったということでした。今はまだ消息を掴めていないそうです。

元々敵の狙いだったらしい葵お姉ちゃんと爆豪さんに関しては、利用しようとする意思がある分命を奪われることは考え難いそうです。しかし標的外のお姉ちゃんは、仮に敵に利用価値を見出されたとしても生きていくかどうかは怪しいとのことでした。生きていくかどうかは怪しい……わたしの頭は真っ白になり、気付いたのは家の中でした。

わたしが目を醒ました時には、もう雄英に行った日からは丸一日経っていました。その間もお姉ちゃんの行方に関して新しい情報はなく、いても経ってもいられなくなつたわたしは、無我夢中で外に駆け出して行きました。当てもなく彷徨い歩こうとしたわたしはすぐに立甲のおじさんに止められ、すぐに家に帰されたのですが。

お姉ちゃんは無事でした。先んじて行方の分かっていた爆豪さんの救出作戦の中、唐突に始まった謎の男とオールマイトの戦い。戦いの中で萎びた骸骨のようになったオールマイトが、男とお姉ちゃんに似た女にやられる中で、赫い暴風と共に現れたお姉ちゃんは身体中にヒビが入って今にも崩れそうになっていました。

取り敢えず、お姉ちゃんが生きていたことを喜んだのも束の間、お

姉ちゃんに似た白い女がお姉ちゃんに襲いかかりました。結果はお姉ちゃんによる瞬殺でしたが、とても肝が冷えました。寿命が縮むような体験とは、きつとこのようなことを言うのだと思います。もつとも、より肝が冷えたのはその次のことでしたが。

白い女を瞬殺した後、お姉ちゃんはオールマイトに向かって自分の赫い電気を差し出しました。すると萎んでいたオールマイトの身体が再び膨れ上がったのと引き換えに、お姉ちゃんは意識がプツツリと途切れたかのように倒れてしまいました。それをみた瞬間わたしは思わず叫び出し、家のちやぶ台を粉々に破壊してしまいました。

オールマイトは倒れたお姉ちゃんを人のいるところまで運ぶと、すぐに戦闘に戻りました。お姉ちゃんが託した赫い雷と共に、神野を地獄に変えた仮面の男を倒しに行つたのです。壮絶な殴り合い、託された雷と共に放たれるお姉ちゃんの技、素振りだけで雲が晴れ、満天の星空を暴き出したオールマイトの最後の一撃。その一部始終を、見届けました。

8月〇〇日

神野の時間から三日、お姉ちゃんが搬送された病院から連絡が届きました。お姉ちゃんは面会が可能になるレベルまで回復し、わたしが会いに行く許可を出せるようになったとのこと。いても経つてもいられなくなつたわたしは、すぐに叔父さんからタクシー代を貰い病院に一目散に向かいました。会う前から涙が止まらず、とても大変でした。

受付の職員さんに病室を聞いてすぐ、わたしはそこにダッシュで向かい看護師さんにきつーくお叱りを受けました。お説教から解放されて即病室に入りお姉ちゃんに会うと、わたしはお姉ちゃんに飛びついて思いつきり抱きしめました。行方不明になつたと聞かされてから、ずつとずつと心配してたんです。涙でお姉ちゃんの顔がよく見えませんでした。

ちよつとだけ落ち着いてから、お姉ちゃんと同じ病室だった葵お姉ちゃんと一緒に、いろいろと積もっていた分のお話をしました。お姉ちゃんは行方不明の間いろいろとあつたらしく、身体に赫いヒビの痕

がたくさんありました。命を承らせるために風雷回帰を使い続けた、その反動が来たのだということらしいです。

葵お姉ちゃん曰く、これからは安全の観点から今までのように会うことは難しくなるそうです。実際にどういう対策を雄英が講じるのかはまだ不明ですが、それでもこれからは生徒だけでなく、その家族をはじめ、近しい人物にまで危害が及ぶ可能性を考えなければならぬのだそうです。寂しく思うわたしに、お姉ちゃんは頭を撫でてくれました。

今までのように気軽に会いに行くことは、確かにもうできなくなるでしょう。しかし、それでわたしとお姉ちゃんの絆が切れるなんてことは絶対にあり得ません。お姉ちゃんが雄英を卒業してプロヒーローになったら。わたしがもつと成長してヒーローを目指すようになったら。きつとまた、会える日は来ます。その時を気長に待つことにしました。

く

「雷羽ちゃん、今日も日誌書いてるの？ほんとうにママな子ねえ……ウチのバカ息子にもこの持続力を見習ってほしいもんだわ」

「えへへ……これは趣味みたいなものだからね。ジロちゃんもこれくらい熱中するものあるでしょ」

「ゲームとか漫画ばかりだけどねえ……」

「立派な趣味だよ。もしかしたらそれが高じてプロの漫画家とかゲームーになるかもよ？」

月が最も高く昇る夜。雷羽はいつものようにその日あったことを日誌に書き込むと、それを褒めた叔母に照れながら話を返した。ちなみに話に出てきたジロちゃんというのは、叔母夫婦の実の子どものことである。雷羽と同じ年の小学五年生だ。

日誌を纏める習慣が付いたのは、離れて暮らす姉に自分にあったエピソードを少しでも多く伝えたかったからである。放課後や週末に気軽に会いに行けるとはいえ、その時間は限られており一度に話せる

内容も吟味する必要がある。だから会えた時にいろいろなことをしつかりと姉に話せるよう、エピソードを纏めておく。それが雷羽が日誌を付け始めた動機であった。子どもなりの工夫である。

姉に会えなかった日のことを纏めていただけた日誌は、いつしかその日あったことを纏める日誌へと変わっていった。姉が雄英に入学してからは文字量も増え、自分も姉も生活がとても充実してきたのだということ強く感じる。

姉が雄英に入学してからは、姉や雄英に関する内容が圧倒的に多くなった。クラスメイトとの交流や訓練の様子の見学、シヨツピングへの連れ出しに敵に襲われた時の焦燥や心配。書かれる内容は楽しいものばかりではないし、これからも心配になるようなことは増えていくと雷羽は思っている。しかしそれでも、この日誌を振り返った時の自分は当時を懐かしみ、幸せだったと言うだろう。雷羽はそう強く確信していた。

「今はしばらく会えないけど……またいつか日本が平和になって会えるようになったら、いっぱいお話ししようね。たくさんエピソード用意して待ってるから……期待しててね、お姉ちゃん」

いつの日か、姉との間にある隔たりが全て払われた時。自分の人生を振り返る時。自分はこの日誌を読み返して、過ごした日々は幸せなものであったと語るだろう。

そんな日が来るのはいつになるのか、それはまだ分からない。それでもいつかは必ず、そんな日が来ると確信して。雷羽は使い古してヨレヨレになったページを閉じ、眠りにつくのだった。

## 2章

### プロローグ：入れ寮

「さて……こんなものかな」

ハイツアライアンスに入った風華達は、相澤から設備や間取りなどの説明を受けた後に自分の部屋を探して入り、自分好みに作り替えていく。机の上に敷いたマットを綺麗に整えると、風華は一仕事を終えた社会人のようにフウ、と息を吐いた。

ベッドに腰を下ろし、少し考え事をする。引越し準備やマスコミのあしらいなどで、この瞬間まで一息吐く余裕もなかった風華であったが、今日はもうやることはないと相澤に言われている。やるのがないのなら、勉強なりなんなりすればいいということとは分かっているが……せつかく久しぶりにゆっくりできる環境を作れたのだ、少しくらい物思いに耽つてもいいだろうと心の中で言い訳する。

——オール・フォー・ワンは逮捕された……でも死柄木は依然健在のままだ。大きな後ろ盾を失ったアイツらは、これからどうしていくんだろうね。

考えるのは、つい先日終局したばかりの神野での一件のことであった。天威はオール・フォー・ワンと共に逮捕され、外道大巖雷神は逆に墓の中に取り込まれて彼女の力となった。奴らが拠点にしていたというバーに現れた化物や脳無はあれ以降一切姿を見せず、品切れが予想されている。

オールマイトの終焉を引き換えに、敵連合は大幅な弱体化を余儀なくされている。死柄木の幼稚な性格を考えれば、内側から瓦解しても何らおかしくない状態にあると言えた。

しかし……数を集めたり、脳無を何体も出して考えなしに暴れるだけだった死柄木は、保須の事件と風華・緑谷との問答を経てより回りとどく、周囲への影響を考えて立ち回るようになった。これまでの行動を踏まえて、死柄木も成長しているのだ。

風華は知る由もないが、オールマイトはU S J 襲撃の際に死柄木の

ことを『幼見的万能感の抜け切らない子ども大人』であると分析していた。つまりは言い換えれば、死柄木吊には成長する余地があるということでもある。彼の教師を務めていたであろうオール・フォー・ワンは既におらず、これからの死柄木は独りで敵連合を引っ張ることになる。それが果たしてどのような結果をもたらすのか。考えてもさっぱり分からないことが、風華の心に得も言われぬ不安を募らせていた。

「もしもーしー！風華いるー!?!」

「三奈……?あれ、どうしたのみんなして」

「突撃、お部屋訪問タイム!」

「いや……何の話か分かんないんだけど……」

考え事を打ち切らせるかのように、ドアをコンコンと叩く音が聞こえてくる。いったい何事かと思いつながら開けてみると、そこには一部を除いたA組の仲間達が立っていた。

何の用かと聞くと、全員を代表して芦戸が『全員の部屋を回って部屋王を決める審査をしている』と答えてくれる。寝ていた爆豪や気分が優れないらしい蛙吹、全員からスルーを食らった峰田の部屋を除けば、後は風華だけなのだそうである。

「面白いモノなんてないと思うけど……遊びに来るくらい別に構わないよ」

「よっしや、おっ邪魔しまーッす!」

意気揚々と入室するクラスメイト達。入ってすぐ彼らの目に映ったのは、緑谷の部屋でも存在が確認された大量のオールマイトグッズであった。

いつもの様子からはあまり想像もつかないようないわゆる『オタク部屋』に、少なからず面食らい言葉を失うクラスメイト。あまり自分のことを話そうとしない風華の意外な一面を見たことで、その表情は微妙なものとなっていた。

「まさかの！オールマイト塗れ二軒目!」

「ちよつと意外だったかも……」

「女子の部屋なのに……色香の欠片もねえ!」

「同志はこんな近くにいたのか……！」

「みんな……好きに言い過ぎじゃない？」

流石に、好きなものを置いていただけでここまで言われるのは不本意である。風華はみんなに抗議の意を示したが、同志として好意的な目を向ける緑谷以外からの反応は変わらなかった。

クラスメイト達が出て行ったところで、風華は勢いよく扉に鍵をかける。昔からコツコツ集めてきた好きな人のグッズに対して微妙な目を向けられるのは、友達であつてもいい気分はしないのだ。

「まったく、何でこの良さが分からないのかな」

「……鳴神ちゃん、まだ起きてるかしら」

「梅雨？体調悪いんじゃないの？」

「……今は大丈夫よ。少しだけお話ししたいことがあるの。時間を貰つてもいいかしら」

クラスメイト達が去つてしばらくした頃、再び扉を叩く音が聞こえてきた。響いてくる声から、向こうにいるのは蛙吹であると分かる。

さつきは体調が悪いそうだからと不参加を決めていた蛙吹が来たことに、風華は不思議に思いながらも扉を開けて彼女を迎え入れた。俯いて見えにくいその表情は、明らかに晴れたものではない。どんな用があるのかは知らないが、あまり良い用事ではないということは容易に察せられた。

「遅くに……めんなさいね……緑谷ちゃん達にはもう言つてあるのだけれど、鳴神ちゃんともお話ししておきたかったの」

「出久達と……そういう用件かい」

「彼らが爆豪ちゃんを助けに行くの、私は辛い言い方をしてでも止めようとしたわ。それでも今朝、みんな行つてしまったと聞いて……とてもショックだったの。それに鳴神ちゃんも……オールナイトから行方不明の間、どんなことがあつたのか教えてもらつたわ。それを聞いても私……どんなことがあつたのかつて想像ができなかったの」

「涙……ハンカチ貸そうか」

話をしている内に、蛙吹は感情を抑え切れずに涙をボロボロと流していく。自分のことを想つて涙を流す彼女を見て、風華はそつと自分

のハンカチを蛙吹へ差し出した。

いつもなら、今日みんながやっていたような集まりには率先して参加していたのに。緑谷達を止めたつもりになっていた不甲斐なきや、行方不明の間に風華が受けていたであろう苦しみを考えると、色々嫌な気持ちも溢れてきていた。何を言えば良いか分からなくなつて、みんなと一緒に楽しむなんて気分にはとてもなれなかつたのだと。

日常を取り戻すため、どれだけ悲しくてもしつかりと言葉にして蛙吹は語ってくれた。今日この瞬間までずっと、風華のことを考えてくれていた。

芦戸達が『部屋王』をやっていたのもきつと、同じ理由だったのだろうと思う。危険も規則も顧みず爆豪を助けに行つた緑谷達の気持ちは分かっていたからこそ、彼らにいつまでも後ろ暗い気持ちでいてもらわないように、寮への引越しに託けて明るい話題を作つたのだろう。

風華にもそう。ようやく日常に復帰できた彼女に気を遣つて、参加せずに部屋に籠っていたのを引き摺り出したのだ。みんな……ヒーローを目指して切磋琢磨する日常を、取り戻そうと頑張つてくれたのだ。今にして思えば、芦戸達も無理矢理元気を捻り出していた感があつたと風華は思い返す。

「ありがとう、梅雨。わたしのための想つて泣いてくれてありがとう。そして……あなたに心配をかけてしまったこと、本当にごめんなさい。これからはまた……楽しく騒げるように頑張つていこうね」

「ケロ……また、またみんなでお喋りできるようになるかしら？」

「なるさ。誰かのために泣けるんだから……きつとこれからは大丈夫だよ」

「答えになつてないわ……」

まだまだ蛙吹の涙は止まらない。彼女が落ち着いて自分の部屋に戻れるようになるまで、風華はその胸で嗚咽を受け止め続けるのであつた。

「えー……昨日も話した通り、『ヒーロー仮免』の取得が当面の君達の目標となる」

「はいー」

ヒーロー免許とは、人命に直接係るとても責任重大な資格である。当然だが、取得のための試験はとても厳しいものとなる。それは仮免ですら合格率が例年5割を切る程。生半可な実力と覚悟では、ヒーローなど夢のまた夢なのだ。

「マジか……仮免でそんなキツイのかよ！」

「そこでだ……君達には今日から、最低でも一人につき二つの『必殺技』を作ってもらおう！」

「必殺技ア!?!」

「学校っぽくて、それでいて……!ヒーローっぽいヤツきたア!」

相澤の宣言と共に、ミッドナイトをはじめとする3人の教師が入室してくる。これから始まる訓練の内容が内容だからか、3人ともそれぞれ決めポーズらしきものを取っていた。いつもなら心をくすぐるカッコいいポーズだと思っただが、今の風華は別のことを考えていた。

——必殺技、か……

風華には既に、必殺技と呼ぶべき技が幾つか存在している。瞬間移動の『雷上動』に衝赫『大雷』をはじめとする雷撃シリーズ、バンパーストーム吹き荒ぶ大風や飛行もそうだし、レッドゾーン赫災領域などもそれそのものを必殺技と呼んで差し支えないだろう。

正直なところ、そういった技のバリエーションなどで風華が困ることとはそうそうない。その代わり今は別の問題が発生しているのであるが……

左頬に伝うヒビ割れを撫でながら、風華はその原因となったであろう出来事に想いを馳せる。日本海の底にあるオール・フォー・ワンのアジトから脱出するため、風華は『風雷回帰』を何度も繰り返し使用していた。水圧に潰される度に、深海魚に身体を貪られる度に、何度

も何度も繰り返した。

その結果、反動が来たというべきか。赫災領域レッドゾーンに入り続けていると、『風雷回帰』を使った時とは反対に身体が風や電気に変換されいくようになってしまったのだ。入院中に試したところ、維持可能な時間はおよそ200秒程度。これまでは体力の続く限り何の問題もなく扱えていた力に、かなりの制限がかかってしまったのであった。

——制御できるようになって以降、赫災領域レッドゾーンにはずっと頼りっぱなしだったからね……流石に新しい戦い方を模索する必要があるかな。

諸刃の剣となってしまうた力に、いつまでも頼りきりであるわけにはいかない。そのためにも新しい戦法が風華には必要となる。今回の訓練が必殺技に関するものなのは、まさに完璧グッドタイミングと言えるだろう。

クラスメイト達が、これまで頭の中で温めていたという必殺技の構想を教え合いながら体育館に向けて移動する。そんな中でも風華は一人、己の編み出すべき技について考えを巡らせていた。

「な、鳴神さん……移動しないと先生が怖いよ？」

「あ……そうだね。ありがとう、出久」

## 必殺技作り

「必殺……ソレ即チ必勝ノ技ソシテ型！」

「その身に染み付いた技や型は、他の追隨を許さない圧倒的な力となる。戦闘とはいかに自分の得意を押し付けるか！」

「技とは己の象徴！今時必殺技の一つも持たないプロヒーローなんて絶滅危惧種よ！」

特別講師としてやって来た3人の教師、エクトプラズム・セメントス・ミッドナイトが、それぞれの必殺技論を語る。A組の生徒達は、それを神妙な面持ちで聞きながら相槌を打っていた。

必殺技を作る場所は体育館γ……トレーニングの台所ランドことTDLである。セメントス考案の訓練施設であり、彼が全面に張り巡らされたセメントを操ることで生徒一人一人に合わせた地形や物を用意することができる。少し危なっかしい略称を無視すれば、とても合理的な施設である。

「質問をお許しください、相澤先生！何故仮免を取得するために必殺技が必要になるのか、その意図をお聞かせいただきたいのですが！」  
「順を追って話すから落ち着け」

飯田がいつものように爆速で手を上げ、質問を相澤は受け流す。もはや様式美とも言える流れを済ませたことで、教師陣から今回の訓練における詳しい意図が説明された。

本試験もそうだが、仮免試験でも多くの適性を毎年違う試験内容で受験者は試される。戦闘力や機動力といった基本的なものから、情報力や判断力にコミュニケーション能力、人としての魅力に集団の統率力など。本当に様々な力を試されるのだ。

その中でも特に、戦闘力はこれからのヒーローにとって極めて重要視される項目となる。敵の活性化によって国民に不安がよぎる中で、迅速かつ安全に敵を倒せる戦闘力を持ったヒーローは、それはもう大事にされるだろう。

備えあれば憂いなし。状況に左右されることなく安定して行動することのできる必殺技があれば、そのヒーローはそれだけで高い戦闘

力を持っていることになるのだ。

「必殺技ハ必ズシモ攻撃デアル必要ハナイ。例エバ飯田君ノ『レシプロバースト』ヤ、鳴神サンノ『雷上動』……片ヤ超高速機動二片ヤ瞬間移動……ソレソノモノガ脅威デアルタメ、コレラハ必殺技ト呼ブニ値スル」

「あれ必殺技でいいのか……!」

「成る程な……自分の中に『これさえできれば有利もしくは勝てる』っていう型を作るのか」

「その通り!プロで言うなら先日も活躍してたシンリンカムイの『ウルシ鎖牢』とか、この中で言うなら鳴神さんの吹き荒ぶ大風<sup>バンバーストーム</sup>とかが、分かりやすく模範的な必殺技ね」

敵襲撃によって中断された合宿は、この必殺技を作り上げるためのプロセスであった。即ちここから後期の授業が始まるまでの夏休みは、個性を伸ばしつつ必殺技を編み出す圧縮訓練となる。

個性の成長や、編み出した技の性質に合わせたコスチュームの改良も並行して考えていく。予期せぬアクシデントが起きた分、使える時間はとても短くなってしまう。だが……ヒーローたるものそれすらも乗り越えなければならぬ。

「プルスウルトラだ……準備はいいな?」

「……ワクワクしてきたア!」

「どうしようかなア……?」

「どうしたんだい出久、ボーツとしちゃって」

「あ、鳴神さん。必殺技のことなだけどさ……僕腕に爆弾ができちゃってさ。あまり無理することができなくなってるんだ。正直なところさ、必殺技の新しいビジョンが全然見えてこなくて……」

「フルカウルとエアフォースじゃ足りない?」

緑谷は悩んでいた。林間合宿での天威との戦いによって、緑谷の腕は靱帯が劣化してしまいハビリと慎重な運用が必要となっている。

あまり無理はさせられない以上、どうしてもこの腕で扱う必殺技のイメージがでなくなっていたのだ。

まとまらない考えに唸っている時に、風華はタイミングよく緑谷に話しかけていた。話を聞いた彼女は既にある必殺技では足りないのかと聞くが、緑谷の返事は良ろしくない。どうやらそれだけでは足りないと思っっているようであった。

「新技、無理に作らなくてもいいと思うよ。出久の個性を考えれば、今以上にできそうなことといえばオールマイトが期末テストでやった……空中歩行くらいしか思いつかないんだよね。わたしに思いつかぶのはこれくらいだし、出久が自分でアイデアを出せないのなら……今は個性伸ばしに専念した方が良さと思うんだ」

「うーん……やっぱりそうか。爆弾を抱えるようになって焦ってたかな。言われてみればフルカウルもエアフォースも、まだまだ改良する余地がたくさんあるし、個性伸ばしに専念するよ」

「それが良いと思うよ。必殺技なんて、一朝一夕で作れるようなものじゃないしね。今は『12%』の定着と瞬間的な……今の限界は25%だったっけ？『25%』への引き上げを、当たり前前にできるようにすること。エアフォースの訓練も忘れずにね」

「そうだね……頑張ってくるよ。何だかこうやって話してる時、鳴神さん先生みたいだね」

緑谷の今の限界出力は、全開時の25%まで上がっている。15%を超えると行動に風圧が付随するようになるため、普段の出力は12%くらいで固定し瞬間的に引き上げるようにする。

エアフォースに関しては、命中精度の向上や範囲の自在化などが課題となる。こっちはサポートアイテムでどうにかするべき問題なので、緑谷がすべきことはあまりない。やれてデコピンで弾くようにして撃っているのを、他の部位でもできるようにすることくらいだろう。

自身の課題を明確化してもらった緑谷は、風華に礼を言うと言葉を自身に駆け出していく。その後ろ姿を見た風華は、緑谷の心の靄が取れたなら良かったと小さく微笑むのだった。

「鳴神、お前人に構ってる場合か？」

「相澤先生。大丈夫ですよ……必殺技なら今ある分だけで十分に足りてますし、やるべきことのビジョンも見えてますから。出久のモヤモヤも晴れたことですし、今からわたしも始めるところです」

「ならいい、さっさと始めろ。お前は元から完成に近い分レベルアップには手間がかかる。そのことをしつかりと自覚して、自分のやりたいうことやできることを考えた訓練をしろよ」

「勿論です。それじゃあ相澤先生……わたしも訓練行ってきましたね」

アドバイスは教師のやることだと相澤に叱られた風華は、そそくさと彼から離れるように自分も訓練に向かう。とは言え、今の時点で形にできそうな必殺技というのは思い浮かばない。なので今日はできることの再確認の時間にすることにした。

今まで『疾風迅雷』を使ってやってきたことや、難しいからやらなかっただけで、できることなどを併せていけば、クラスメイト達がやっているような技も再現できるかもしれない。そうして使えそうなものがあれば、それを鍛えるべき必殺技としようと決めたのであった。

「まずは……こんなのからかな」

左手を上空に向けて、辺り一帯の空気を少しずつ掌握していく。赫災領域なら一瞬で済ませることができのだが、今はリスクを考えて使わない。普段の力だけで熟していく。

掌握を終えれば、上空の冷たい空気を引き寄せてTDL内の気温を少しずつ下げていく。天井の方に開いた換気用の穴からしか空気を持ってこれないため時間がかかるが、それでも数十秒程で寒さに弱い蛙吹の動きが止まる程度には気温を下げることでできていた。

蛙吹は個性のせいで極端に寒さに弱いが、普通の人間でも低気温の中では身体のパフォーマンスが鈍るようになる。炎熱系の個性を持つ者や対策をしていない者でもない限り、多くの相手に対して有効なデバフとなるだろう。もちろん自分も寒さ対策をしていることは前提だが。

「燎翠……『火雷』」

高めた電熱により火炎を灯す技、燎翠『火雷』を用いて冷えた空気を逆に暖めてみる。冷えた空気に強い熱を加えることによる膨張効果による爆発を狙ってみたのだが、失敗に終わった。上空から持ってきた空気程度の冷たさでは、膨張させて武器として使うには不十分ということなのだろう。

轟レベルで冷やすことができたのなら、話は全く変わってくるのだが。風華は取り敢えずこの方法で必殺技を作るのは取り止めた。また別のアプローチを考えていくが、いい考えは浮かんでこない。

——そもそも、赫災領域なしにできそうなことはもう必殺技にしてるんだよね。やっぱり今ある技の練度を上げていくほうがいいかな……

アイデアが出ないのなら、自分も緑谷のように個性伸ばしに専念していくべきかと考える。今やっていることをより早く、より確実にできるようにすることも大事なことだ。緑谷に言ったように、必殺技などそう簡単にはできないのだから——

——出久みたいに？

さつきまでの緑谷とのやり取りから、風華は一つのアイデアを思い浮かべた。すぐさまそのアイデアを実践するべく、赫災領域を発動する。TDL中が赫い空気に包まれ、中にいた者は教師生徒を問わずその強い怒りに背筋を凍らせる。その後すぐに風華の方を見ると、皆何事もなかったかのように訓練に戻っていった。

赫災領域……林間合宿からオール・フォー・ワンとの会敵、神野での天合万雷。長時間に渡る酷使の末に、使い続けると身体を風力と電力に分解されてしまうというデメリットが付くようになった。

そのデメリットを、少しでも軽くする。これから先無闇に頼ることができなくなっただとは言え、強力な力であることは間違いない。怒りを暴走させていたあの頃よりは遥かにマシと考えて、無理なく運用していく方法を探っていくべきなのだ。

そうして思いついた一つのアイデア。緑谷が自身の技を一つ一つ昇華していつているように、ずっと両方の力を同時に使っていた赫災領域を空気と電気の片方ずつで使うようにする。

最初から違和感なく両方の力を行使することができていた風華には、一つ一つの力を分けて考えるという発想がこれまでなかった。二つの力をそれぞれで使うようにして、尚且つ技を使うその瞬間だけに発動時間を限定することができれば……きつと制限時間を大幅に引き延ばすことができるだろうという考えであった。

「空気と、電気……力を分けて使う……!」

赫に染まった空気が元の色を取り戻し、皆の背筋を強張らせていた緊張が解けていく。纏雷として身に纏う稲妻だけが赫々と弾け、風華の全身に絶え間なく迸っていた。

そのままの状態を維持しつつ、軽く動き回りながら状態を確かめてみる。赫災領域レッドゾーンの纏雷が解ける素振りはなく、出力も変化はない。問題なく運用することができているようである。

まず一つ目の試みは成功。次は反対に纏雷を解除して空気を赫く染め上げていく。怒りがもたらす緊張感に再びTDLが包まれる中、風華は指先で弾けさせたスパークが赫に染まっていないことをしっかりとその眼で確認した。

再び、キチンと運用できるかを確認する。赫い空気を左掌に集めていき、纏雷を発動。釣られてスパークが赫くならないように気を付けながら、集めた空気を弾丸として天井に撃ち放った。空気の弾丸は逸れることなく天井に巨大な風穴を開け、纏雷も翠から色を変えず弾けている。こちらの方でも目論見が成功したと、風華は一つ息を吐いた。

「よっ、鳴神少女! やってるねえ!」

「オールマイト! 怪我はいいんですか!？」

「ハハハ! 大丈夫さ、心配ありがとな! 今日は特に用事もなかったんだがね、暇だから来た!」

「そんな……今は療養に専念するべき時期なのに、わざわざありがとう……!」

赫災領域レッドゾーンの分業が成功したことで、集中している間に吹き出た汗を拭う風華。暇だからとやって来たオールマイトに声をかけられて、テンションをいつもの5割増しに上げるのだった。

「頑張ってるみたいだな！新しい必殺技はどうかかなりそうかい？」  
「そうですね……新しい必殺技という訳ではないんですけど、いい感じにできてますよ。仮免試験までにはモノにできると思います」  
「それは楽しみだな！君の実力なら余程のことがなければまず合格できるだろうが……驕らず慢心せずしつかり励んでいけよ！ところで、緑谷少年は何処だい？ちよつと話があるんだが」  
「出久ですか？彼ならあの高い所に……!?!」

オールマイトに緑谷の居場所を聞かれ、彼が訓練をしている場所を風華は指差した。セメントスが造った小高いセメントの丘を、アクロバティックに登っていく緑色のシルエット。動きが派手だから分かりやすいなあとか思いながら緑谷が着地するまでを見ていると、彼は突然丘の頂上で蹲る。

「あッ……!?!あああアッ!?!」

何事か……そんなことを考える暇もなく、事態は動き出した。痛みを抑えるように腕を抱える緑谷の背中から、黒い触手のようなものが突き出して丘を粉々に破壊したのだ。

「な、何だア!?!」

「デク君!?!何アレ……触手?」

「おい、大丈夫かよ！ダメだ近付けねエ！」

「あ、相澤先生は!?!」

「引き継ぎでB組のトコ行ってる！」

「ならば俺が呼んでこよう！緑谷君、苦しいだろうがしばし待っていてくれたまえよ！」

「オールマイト、アレは……」

「いや……ワン・フォー・オールには、そんな力はなかったハズだが……!?!」

「分からない、ですか。しょうがないね……ならばわたしが止めておきますー！」

「な、鳴神少女！気を付けておくれよ！」

先生達は黒い触手を抑えようと頑張ってくれてはいるが、セメントは破壊されてしまい、眠り香も分身も触手に払われて届かない。かと

言って他の打開策は出てこず、触手に全身を引つ張られるような感覚に激痛を味わっている緑谷を、他の生徒達を避難させながら、遠巻きに眺めていることしかできなかった。

相澤の抹消ならばあの触手を消すことも簡単なのだろうが、肝心の相澤は席を外しておりいない。暴れる触手をどうにかして抑え、相澤が来るまでの時間稼ぎをしなければならぬ……風華が飛び出していったのは、そんな思惑の真っ只中であった。

「なっ……鳴神ぎ……来ちゃ、ダメだ！」

「そういう訳には……いかないだろ！」

## ワン・フォー・オールの暴走

「出久、今どういう状況か教えて！」

「いつ……痛い……！身体がつ……外側へと引っ張られてるみたいだっ……！」

纏雷により上昇した身体能力で、風華は緑谷の身体から溢れ出る黒い触手を抑えつけていく。触手は緑谷の両腕を起点として全部で10本、それら全てを風華単独で抑えるのは無理がある。増援が欲しいところだが、今はそれも望めない。状況はとても難しいものとなっていた。

「クツソ……せめて近付けければ！」

「あの触手、もぎもぎがくっ付かねえ！」

触手の影響がない場所で待機しているクラスメイト達も、どうにかして緑谷を助けようと方法を模索している。しかし有効な対策は出ず、結局見ていることしかできていなかった。どれだけ歯痒い思いをしているのだろうか。爆豪や切島などは、歯が砕けんまでに強く口角を歪ませていた。

歯痒い思いをしているのは、緑谷を抑えている風華も同じであった。身体の内側から湧き出ている触手は引っっこ抜く訳にもいかず、かと言って彼を蝕んでいる痛みをどうこうできる訳でもない。これ以上のことができる立場にいないのである。

一応言っておくなら、A組がするべきことはこのまま緑谷を抑え続けて、飯田が相澤先生を呼んでくるまで待つことである。あの触手が個性の産物である以上、相澤の抹消なら問答無用で打ち消せる。

このまま余計な手出しはせず、相澤を待つことがこの場で取れる正解。理屈の上ではそうだと分かっているにしても、どうしてもA組の面々は自分を納得させることができなかつた。

——何か……！何かできることはないのか!?

「うう……！ううう……あ……？」

「出久……どうしたの！何が起きたの……！」

「聞こ、えるんだ……誰かの、声……？」

「声……う……声……まさか」

抑え続けてしばらくして。緑谷の身に一つの異変が起こった。頭の中で知らない誰かの声が聞こえてくると言うのだ。恐らくは黒い触手の出現に呼応したものだ。声の主が誰なのか、ワン・フォー・オールの秘密を聞いている風華は察しがついていた。

緑谷出久、個性『ワン・フォー・オール』。超常黎明期より脈々と受け継がれてきた聖火の如き個性であり、平和の象徴オールマイトより彼が9代目として授かった個性である。その力は持ち主の力を個性の中にストックして、それを次代に受け継がせることができるというもの。この個性を受け継いだ者は、先代の面影を見るのだという。

個性に残った先代の面影。緑谷に語りかける声の正体はそれだろうと、風華は予想を立てていた。もちろん、ワン・フォー・オールを持たない風華には予想することまでしかできない。だが、見れば先ほどまで痛みを苦しんでいた緑谷が嘘のように静かになっている。

それを見れば少なくとも、緑谷に聞こえた声は彼の害になるようなものではなかったと分かる。この後がどう転ぶかはまだ分からないが、風華はせめて緑谷が無事で済むようにと祈ることにした。

——お願い、出久。無事でいてよ……!!

く

「やあ、9代目。お久しぶりと言うべきかな？」

「……………!?!」

「ああ、まだ口がないのか。ごめんよ」

手放した意識の中、緑谷は謎の空間で自分と対峙する人物を見た。それは以前、職場体験での訓練中にもみた姿。巨悪を討ち果たすためにその力を次へと託した初代ワン・フォー・オールその人である。

目の前に座る初代に話しかけようとするが、緑谷は口が黒い霧に覆われており声を出せない。そのことを察しているからか、初代は自身の傍にもう一人の男を呼び出すと、緑谷の意思を無視して自分の話を始めた。傍の男は静かに、耳を傾けていた。

「ワン・フォー・オール」の訓練、随分と頑張っているみたいだね。君が力を継承したあの頃とは比べ物にならない程、今の君は成長している」

「……」

「さっきまでの訓練中、君の身体から吹き出してきた触手のようなもの。アレはここにいる彼……5代目の個性だ。今までは表面化せず、に内側に沈んでいた力……それが、いきなり現れた。ワン・フォー・オールの中にいた僕達にも予期せぬ形で」

「俺達の因子は、ワン・フォー・オールの中に混ざった状態でずっとそこに在った。受け継がれ、培われてきた力の中に埋もれて表面化するはずのなかつた小さな点さ。だが、そいつが今になって大きく膨れ上がり胎動を始めた」

緑谷が訓練を重ねるに連れて、少しずつ見えてきていたもの。培われてきた力という『膜』の隙間から見える力の核。ワン・フォー・オールそのものが成長を始めている。

「デコピンで空気砲を打ち出す技……確かエアフォースとか言ってたヤツだね。恐らくはエアフォースを撃つ時の衝撃により、力の揺らぎから飛び出してきたのだと思う」

「最初に出てきたのが俺の『黒鞭』で良かったさ。コレは良いー個性さ。だがな、ワン・フォー・オール」の力が上乘せされることで、俺の頃よりも黒鞭は大幅に強化されてる！っつと……!」

言い切ったところで、二人の身体は黒い靄に捉われ少しずつ薄れ始めた。時間切れらしい。先代達はワン・フォー・オールの中に残された心だけの存在であり、とてもフワフワしたものである。今回黒鞭の表出をきっかけに、初代と5代目が何とか出てくることを可能としたが。本来はこんなこと、できるはずがなかったのだ。

せめて消える前にと、5代目は緑谷に黒鞭を扱う上で必要な心構えなどを説く。緑谷は声を出せないなりに真摯に耳を傾け、初代はその様子を優しい目で眺めていた。

「いいか？怒りのまま振るえば、力はそれに応えてくれる。怒りは力の源だからな……肝心なのは心を制することさ」

心を制する……そう言つて、5代目は緑谷の心臓のある位置に右腕を突き出す。靄で曖昧になっている緑谷の身体は、その腕を簡単に受け入れた。

言われたことにも、心当たりがある。赫災領域のあの力を、緑谷はこの眼で見えていたから。あらゆる怒りをキツカケに、ヒーローを志した少女のことを知っているから。怒りを制しコントロールしていくことがどれだけの力を自分に与えるのか、緑谷にはそれがよく分かっていた。

「8人の人間を渡り、ワン・フォー・オールは途方もなく大きな力となった。良いか坊主！お前にはこれから6つの個性が発現するさ！心を制して俺達を使いこなせ！」

——頑張れよ、坊主。俺達がついてる。ワン・フォー・オールを完遂させるのはお前だ！

消えていく5代目、そして初代。真剣な眼で自分を見据えながら消えていく彼らを、緑谷もその想いに応えるべく真剣な眼差しで見送った。赫い稲妻が緑谷の身体を迸り、靄を晴らして意識を引き戻したのはその直後であった。

く

「あ……戻つて、きた……？？」

「出久！大丈夫、怪我はないかい……？？」

意識が覚醒した緑谷が最初に見たのは、自身をお姫様抱つこの体勢で抱える風華の姿と、ワン・フォー・オールのそれとはまた違った輝きを放つ、自身に迸る赫いスパークであった。

赫雷を分け与えることで、他者に赫災領域レッドゾーンの力を一時的に使わせることのできる『天合万雷』。これにより黒鞭に引つ張られて千切られかけていた身体を強化し、暴走が収まるまで緑谷が黒鞭に抗えるようにしたのだ。

黒鞭は個性によって現れたもの。ならば緑谷が個性を制御できる強さを得れば、必然収めることができるはず……そんな狙いもあつて



「緑谷、何なんだお前」

「僕にも……よく分からないです。今までのように出力に耐え切れなくて身体が壊れるってのとも違っていて、止められなくて……こんな力が有るなんて僕自身知りませんでした。鳴神さんが止めに来てくれてなければ、どうなっていたか……本当に訳が分からなくて、すごく恐ろしかったです」

「で、今後はどうする」

「制御します。いきなり出て来て怖かった……けどあくまでコレも個性です。セメントス先生達が身を挺してみんなを庇ってくれたおかげで、誰も傷付けずに済みました。鳴神さんが僕を止めてくれたおかげで、この力はあくまで自分の力なんだって気付くことができました。だからこれから——」

——必ず、モノにして見せます。

緑谷の言葉、目線。それが真剣なものであることを相澤はしっかりと受け取り、ならばしっかりと訓練に励めた小言を言うだけに留めた。

「じゃ出久、君は医務室だよ。相澤先生、わたしが連れて行きますね」

「おう、さっさと連れてけ」

「えっ、いや、ちよっ……」

「落ちないように、ちゃんと掴まってるんだよ」

風華は無言を言わず緑谷を背負い、そのまま医務室まで連れていく。自分もヒビをすぐに収めるために行くつもりだったので、そのついでである。風華よりも身長の高い緑谷だが、背中にかかる重みは自分の体重を軽く超えていると分かる。

いきなりおんぶされた上、その状態のまま医務室まで校舎内を回る事になった緑谷。途中ですれ違った生徒や教師に奇異の目で見られる中、彼は羞恥に顔を埋めるのであった。

「あの、鳴神さん……僕歩けるから大丈夫」

「おとなしくしてて。いきなり降って沸いた新しい力なんて、どんな影響があるのか分かったもんじゃないんだから」

「はい……」

「よろしく」

そんなやり取りがあつて、何とか無事に医務室に到着した2人。状況を聞いたリカバリーガールはすぐに緑谷を座らせ、治療を始める。黒鞭に引つ張られた上に打たれた身体は、内出血で赤と蒼に腫れ上がってしまっている。「こりやあまた酷い」という一言から始まった治療により、緑谷の身体は急速に元の色を取り戻していく。

何度かに分けて行われるリカバリーガールの治療行為。それらは恙無く完了し、緑谷は元通り動けるようになる。特に後遺症などは残っていないさそうな様子を見て、風華はそつと拳を緩めるのだった。

「緑谷少年、大丈夫だったかい!？」

「オールマイト!一応大丈夫です、もう痛みはないし身体もちゃんと動きます。けど……」

「話があるなら外でやりな。ほら、出ていった!」

「おっと、申し訳ありません!」

治療の終わった2人はリカバリーガールに医務室を追い出され、迎えに来たオールマイトと共に応接室へと向かう。風華に秘密を聞かれた時のようなポカをやらかさないよう扉をしっかりと施錠し、確認してから黒鞭について言及を始める。

「ワン・フォー・オールの力を使っていると、誰かの面影のようなものが見えることがあるんです。いつもなら見えるだけで、コンタクトを取れることなんてなかったんですが……今回、あっちの方から僕に語りかけて来ました。あの黒い触手は5代目の『個性』だって……」

「先代の『個性』か……先代の面影が見えることに関しては、私もお師匠から聞いたことがあるし自分でも見たことがある。コミュニケーションを取ることはできなかつたがね。何か情報は無かつたかい? 黒いのの使い方とか、どうして今になって出て来たのかとか……取り敢えず何か無かつたかい?」

「言つてました。ワン・フォー・オールの中に埋もれたままでははずなのに、いきなり表に出てこれるようになったと。何人もの人間に受け継がれてきたことで、個性自体が変化を始めていると……」

「今回出て来たのが5代目でしょ。初代の個性はワン・フォー・オールそのものとして、一人が出てきて他がないなんてことはないと思う。」

出久にはまだまだ出てくるんじゃないの？先代の個性」

出てくると思う、緑谷は歯切れ悪くそう答えた。先代の個性がどんなものか知らないし、しかもそれらは彼らが持つていた頃よりも強化されているという。何が出てきてどう転ぶのか分からない、そんな漠然とした不安があったのだ。

「出てくる、と思う。実際面影の中に出てきた5代目にもそんなことを言われたんだ。オールマイトは元々無個性で、初代の個性はワン・フォー・オールそのもの。だから残りは2・3・4・6・7代目の個性が出てくるんだろうね……」

「先代がどんな方々だったのか、お師匠からしつかり聞いておけばよかったな……緑谷少年、私は先代の個性などについて調べておこう。君は私が情報を持つてくるまでは無理をせず、出力の向上に努めておいてくれたまえ」

「でも、やっぱり不安ですよ。あの黒鞭の暴発はいきなり起こったものですし、今は気配が消えて出てきそうにないですけど……また暴走させてしまったらと思うと、怖いです」

「じゃあ、やることは一つだね。オールマイトにもちゃんと付き合ってもらいますよ。わたしもできる限り協力しますけど」

「いったい何をすると言うのか。緑谷が怪訝に思いながら尋ねると、風華は当たり前のことを聞くなどばかりに即答した。

「決まってるでしょ。訓練だよ」

できないことがあるのなら、できるようになるまで訓練すればいいのだ。個性研究所で10年以上それを実践してきたからこそその言葉。緑谷には語る風華の微笑みが、悪魔のそれに見えたという。

## 個性制御訓練

「さあ出久、最後の仕上げにいくよ」

「うん！鳴神さん、今日もよろしくね！」

「2人とも、あんまり無理はするなよ！」

緑谷に黒鞭が発現してから6日が経ち、オールマイトを監督として秘密の訓練を積んだ彼は、ある程度の制御が可能となっている。

今は風華を相手にした組手から、黒鞭の有効な使い方を模索しているところである。仮免許試験を明日に控えている以上、使える手札は少しでも多くあった方がいい。少しでも扱いを実践レベルに近付けるために、訓練は苛烈さを増してきていた。

「スマホのパスコードを外すように……鍵を外して中から力を引き出す！」

「……いいね。それじゃあその黒鞭で一度でも、わたしに触れてみるんだね」

「手加減なし……いくよ！」

「どこからでも、かかっておいでよ！」

黒鞭は初めて出た時の暴走からずっと、ロックを掛けられたかのように出てこなくなった。しかしそこは自分の力、緑谷はスマホの暗証番号を入れる時をイメージすることで、ロックを外して黒鞭を暴走させることなく引き出すことに成功した。

出せるようになったならば、次はそれを使いこなせるようにする必要がある。鞭ということで相手に叩きつける飛び道具として使ったり、相澤の捕縛布のように周りのものに引っ掛けて立体機動をしたりと、少しずつ練度を上げていく。

オールマイトが監督をして、黒鞭が暴走しても止められる風華がスツパー兼相手役をする。ワン・フォー・オールの秘密を知っている者以外には、事情を明け透けにできないということもあるが。この日まで何とか暴走を抑えながら、黒鞭の制御訓練をすることができた。

ちなみに、昼の訓練中は黒鞭を使っていない。サポートアイテムの

確認や新しい戦闘スタイルの開発など、やるべきことが多いからである。

「先制必縛！」

「よいいドンで始めるのに、無理があるよ！」

暴走させることなく黒鞭を引き出すことに成功した緑谷の訓練は、風華を相手とした一対一の鬼ごっこであった。オールマイトが持っているストツプウオッチが時を告げるまでに、風華を捕らえることができれば緑谷の勝ち。逃げ切ることができれば風華の勝ちである。

ただし緑谷は訓練のため、確保には黒鞭を活用していなければならぬという縛りがある。とは言えワン・フォー・オールの素の力だけで風華を捕まえるのは、緑谷には難しい話ではあるのだが。

「クツソ……分かってたけど、速い！」

「お喋りしてる暇があるなら、手を動かしなよ！」

「絶対、捕まえてやる！」

「ホラホラー！もっと早く、速くだよ！」

「うーん……やつぱり付け焼き刃では、大した戦力にはなりそうにないな。いや……あれは鳴神少女が大人気ないだけか……？」

オールマイトは2人の戦いを観察し呟く。緑谷は風華を捕らえようと懸命に駆け回り黒鞭を振るっているが、纏雷を発動している風華の機動力には翻弄されっぱなし。慣れない力を使っている分、むしろ普段よりも動きが硬くなっていた。

尚それを差し引いても、鬼ごっこで雷上動を使うのは大人気がなさ過ぎるんじゃないかとオールマイトは思っていた。瞬間移動する敵を捕まえるには移動するコースを予測しながら動かねばならず、そこに思考のリソースを割けば黒鞭の扱いが疎かになってしまう。ただでさえ風華には赫災領域レッドゾーンという切り札も残っているというのに、ハンデも含めて使える力に差があり過ぎるだろうと。

「まあ……Plus Ultraと言えばそれまでなんだけどなあ。流石に雷上動の使用は自重してもらおうべきだったかなあ……」

「どうしたの、もう終わり!?」

「まだっ……まだまだア！」

手元のストツプウオッチを確認する。残り時間はあと1分程だが、緑谷はまだ風華に黒鞭を触れさせることすらできていない。立ち回り自体は段々と洗練されてきてはいるが、この一回で風華を捕らえられるようになるのは無理だったか……オールマイトがそう思った矢先に、鬼ごっこはその展開を急激に変えていく。

「セントルイススマッシュ……エアフォース！」

「うわっ……!？」

「まだまだア……！マンチエスタースマッシュ……エアフォース！」

「ぐうう……！」

「おおっ、エアフォースを足で！」

緑谷はこれまで、制御の利かせやすいデコピンでしか使ってたかったエアフォースを、殴打や蹴りでも使うようにした。デコピンの時と比べて精度は落ちるが、その分威力は高く射程も長い。その上風華にとっても初見の技であるため、対応までにどうしても時間をかけざるを得なくなる。

ここまで思考を巡らせ続けながら黒鞭を振るってきたことで、緑谷は今までの手札では風華を捕らえることは不可能だと判断した。それ故に投入した一か八かの手札。少しずつ黒鞭の扱いに慣れてきたことで並行してできるようになった、足技をメインとして戦う『ワン・フォー・オール フルカウル シュートスタイル』。

蹴りを回避しようと後ろに飛んだ風華は、放たれたエアフォースの衝撃で吹き飛び地に足を付ける。そこに間髪入れずやってくる踵落としも回避しようとする、今度は空中で踵落としの反動を利用して勢いを付けた緑谷が、両方の足でもう一度エアフォースを放った。

左右の逃げ道を空気弾丸によって潰され、後ろに跳ぶが前に進むしか退路がなくなる風華。しかしそのか細い退路は、どこも黒鞭の射程圏内。自分に絶対有利なルールの鬼ごっこでここまで追い詰められてしまったことに、ギリリと歯を軋ませた。

「マンチエスタースマッシュエアフォース……ダブル！」

「空気の弾丸で逃げ道を塞いだ！」

「これで……チエックメイトだ！」

「甘いよ……わたしの個性を忘れたかい!？」

だが、緑谷もオールマイトも……風華本人でさえも一瞬だけ失念していた。鳴神風華という人間が持つ個性の力を。

エアフォースによって放たれた空気の弾丸、風華はそれに手を当てると更に多くの空気を集めて圧縮していく。二組の暴風は風華の掌に収まると、そのまま緑谷に向かって放たれる。

風の暴威は風華を捕らえるべく伸ばされた黒鞭を蹴散らし、そのまま緑谷の顔面と股を撃ち抜いて意識を刈り取っていく。墜落した彼が落下地点に先回りした風華によって受け止められたと同時に、ストップウオッチが制限時間を告げたのだった。

「よし……わたしの勝ちー!」

「相当ズルい勝ち方だったけどな!」

「それでも勝ちです! オールマイトは勝者をたくさん労つてくれていいんですよ?」

「ははは……まあ、事前に雷上動を縛っておかなかったのは私の責任だからな! お疲れ様!」

吹き荒ぶ大風で股間を撃ち抜かれた緑谷の痛みを想像し、無意識に股に力を込めるようになるオールマイト。流星に訓練で相手側の勝ち筋を全部潰そうとするのは良くないと風華に注意をして、白目を剥いて気絶する緑谷を叩き起こした。

足でエアフォースは撃てないと風華が油断していなければ、緑谷はそもそも追い詰めることもできていなかった。最後まで瞬間移動に翻弄され続けたまま終わっていただろう。実践ならば、相手の勝ち筋を全部潰して自分の有利を押し付けていくことは正しい戦い方と言える。しかしこれは訓練である。内容に合わせて戦法を限定することも必要だと、オールマイトは風華を諭すのであった。

オールマイトからのお叱りを受けて、風華はバツが悪そうに笑う。彼は良いところを見せようと張り切りすぎていたことを自覚し、次からはちゃんとやり方を考えると約束した。負けず嫌い故に、捕まりそうになったらまた、雷上動を使うのだろうという自覚もあったが。

「うーん……ハッ! しまった、訓練は!」

「一旦休憩だよ。わたしの技が急所に当たって出久を気絶させちゃったからね。オールマイトにやり過ぎ、大人気なさ過ぎて叱られちゃったや」

「うん……僕も鬼ごっこで雷上動はズルいと思う」

「……次からは自重するよ」

あまり反省はしてなさそうな口調で、風華は緑谷と会話しながらスポーツドリンクを流し込む。もし今後捕まえられそうになったとしても、風華はきつとその時は縛りを破るんだろうな。緑谷はそうなた時のことを考えて苦笑するのだった。

「まあ、確かにズルいとは思うけども。おかげで瞬間移動や高速移動をする相手の立ち回りとかの勉強になったよ！黒鞭もだいぶ上手く振り回せるようになってきたし！」

「新たに降って沸いた力、暴走の懸念もあるし訓練も大変だろうが……使いこなせればそれは強力な武器になる！今の段階でも、仮免許験では有効な武器になってくれるだろうな！」

「そうだね。その調子で頑張つて……」

「……見つけたぜ」

ザツ、と土を踏む音が聞こえる。誰かが様子を見にきたのだろうか、まあ大きな音を立て過ぎたかなと風華が考えながら振り向くと、そこには仁王立ちする爆豪の姿があった。

「かつちゃん!？」

「爆豪少年!？」

「勝己……」

「いつもアンタら3人……こうして夜中にコソコソしてやがったのか」

爆豪は返答を待たず、話を続ける。誰もその言葉を遮ることなく、静かに彼が言葉を紡ぐのを聞いていた。

そして、爆豪は緑谷を指差す。「ずっと気色悪い奴だと思っていた」と言い放つて。緑谷はその言葉に身構えた。爆豪が何を言わんとしているのかを察してしまったから。

「無個性で出来損ないだったハズのためエが、どういう訳だか雄英に

合格して、どういふ訳だか個性を発現させてよオ……」

——人から授かった『個性』なんだ。

——いつか、ちゃんと自分のモノにして……『僕の』力で君を超えてみせるから！

「訳の分かんねえ奴が、訳の分かんねえことを吐き捨てて……自分一人だけ納得した気になって、どんだん登って来やがる。ヘド口の時から……いや、オールマイトが街にやって来たあの時から。どんだん、どんだんとなア……」

「……」

「ずっと気色悪くて、ムカついてたぜ！訳分かんねえこと言いやがって……けどなア、神野の一件でなんとなく察しが付いた」

「……」

話に着いていけない。2人とは雄英に入学してからの付き合いになる風華は、2人が仲悪く何かしらの因縁を持つことは知っていても、それ以上のことは分からない。

分からない以上、何をしようとする場では余計なことになるだろう。風華は黙って、この話がどこかに着地するのを待つことにした。「ずっと、考えてた……」

——オールマイトから貰ったんだろ、その個性<sup>ちから</sup>。

核心を突いた発言。緑谷の失言から辿り着いた答えとはいえ、自力でその考えを持ったことにオールマイトは驚き、風華は自分が偶然聞いてしまった秘密に爆豪が自力で辿り着いたことに感心し、緑谷はその言葉が来ると分かっていたからこそ、沸いて出た生唾をグツと飲み込んだ。

「敵のボスヤロー、アイツは人の個性をパクって使ったり与えたりできるそうじゃねえか。信じらんねえけどな。プツ<sup>ネ</sup>シーキ<sup>コ</sup>ヤツ<sup>バ</sup>ツ<sup>ア</sup>の一人が個性の消失で活動休止したこと、脳無とかいうカス共が個性を複数持つていることから考えると信憑性は高え」

「……」

「そして、オールマイトとボスヤローには面識があった。個性の移動つつーのが現実的にあり得ることで、オールマイトはソイツと関わりがあつて、それがてめエの『人から個性を授かった』つつー発言と結びついた。オールマイトと会つて、てめエが変わつて、オールマイトは力を失つた」

「……」

——次は、君だ。

「てめエだけが、違う受け取り方をした」

神野の事件後、オールマイトが最後にテレビカメラに向けて放つた言葉。メディアや国民はその言葉をまだ見ぬ敵に対する警告と解釈したが、緑谷だけは違った。その言葉がこれからのヒーロー達への世代交代という意味だと理解していた。そしてその筆頭となるべきが、自分であることも。

「家庭訪問の時、オールマイトには質問したけど答えてはくれなかった。だから代わりにお前に聞いてるんだ。どうなんだ？」

「……そうだよ。それを聞いてどうするの？」

「緑谷少年——」

「待ってください」

緑谷は認めた。爆豪がここに来た時から、こうなることはもう覚悟していた。戦闘訓練の時に言いつけを守らず、余計なことを口走ってしまった報いを今、受けているのだ。

オールマイトは言うべきではないと、緑谷が語るのを止めようとする。もう今更止めても遅いと分かっているながらも、口に出た緑谷の名前。その後に続くはずだった言葉を、風華は遮った。

「戦え。今、ここで俺と」

「……」

「てめエも俺も、オールマイトに憧れたからヒーローを目指した。なのに、ずっと路肩の石ころだと思つていた奴はオールマイトに……共

に憧れた相手に認められて……だから、俺に確かめさせる。お前の何がオールマイトにそこまでさせたのか」

「かつちゃん……」

「2人とも、ここはもう寮に戻っ……」

「……ここは、見守ってあげてください」

——オールマイトは凄いんだ！どんなにピンチになったって、最後は絶対勝つんだよなあ！どんなに大変な状況でも、どんなに困ってる人がいても、笑顔でみんな、助けちゃうんだよ……！

爆豪が跳ぶ。離れていた緑谷との距離を一度の爆破で近付き、そのまま大振りの右フックを仕掛けていく。緑谷はそれに対して身構えるも、これは既に戦闘訓練で破った戦術。フェイントの可能性を考えて頭の中に迷いが生じたところで、その一撃をモロに食らってしまった。

「なあ……デク。オールマイトはてめエの憧れの方を正しいって判断したのかよ？だとしたら……俺がオールマイトに憧れたこの気持ちには、間違いだったっていうのかよ？」

「憧れに……正しいも間違いもないよ！」

こんな戦い、無意味だ。どちらが勝つてもどちらが負けても、所詮はただの喧嘩。教師の見ている前ということもあり、大目玉を喰らうだろう。

今は風華がオールマイトを制止しているが、それだって本来は間違っている。風華はオールマイトではなく戦おうとする2人を止めるべきであり、その判断は誤りと言わざるを得ない。そのオールマイトにしたって、自分では止められそうにないのなら応援を呼ぶべきで、風華の静止を受け入れて棒立ちしている場合ではない。

今この場にいる4人、全員間違っている。

「避けんじやねえ、戦え！」

それでも、爆豪は戦うことを選んだ。

「やるなら全力だ……！僕はサンドバッグになる気はないぞ、かつちゃん！」

緑谷は、爆豪を受け止めることを選んだ。

「ええい……もう！この戦い私が見届ける！この際思う存分本音をぶつけ合っちゃえよ！」

「何かある前に、わたしが止めますから」

「よろしく！」

オールマイトは、見届けることを選んだ。

そして、風華も。

「ちようどいい……黒鞭とシュートスタイルの合わせ技、君で試してやる！いくぞかつちゃん！」

「クソデクがア……調子乗ってんじゃねエ！」

どうしようもない悩みを、迷いを……戦うことで発散させたいだけなのかもしれない。それが分かっているにも、緑谷は爆豪を一蹴できなかった。思い出すのは初めてあった頃。

幼稚園から始まり、今に至るまで……2人の付き合いは10年以上にもなる。しかしその中でも2人が腹を割って話せたのは、体育祭で戦ったあの短い間だけ。お互いに、言いたいことを言い切るよりも先に体力の限界が来てしまっていた。

だから、ここで全部出し切る。あの時は言い切れなかったことから、あの時以降相手に言いたくなかったことまで全て。

「あああああ!!」

「オラアアア!!」

試合じゃない。本気の『喧嘩』が始まった。

## 緑谷出久VS爆豪勝己、三度

「なあデク！何でなんだろうなあ!?ずっと後ろにいたはずの奴の、背中を追うようになったのは！」

「ぐっ……眩しいッ！」

「クソザコのためエが力を付けて、オールマイトに認められてどんどん強くなってるのに！何で……！何で俺は、強かったはずの俺は、オールマイトを終わらせちまつてんだ!？」

「……！」

「ずっと……悩んでたんですね」

「ああ……気付いてやれなかった。私の落ち度だ」

閃光と細やかな立体機動で緑谷を翻弄し、黒鞭で掴ませずに立ち回る爆豪。攻撃と一緒に彼の口から漏れ出す心境は、今まで誰も気付けずずっと抱え込ませていたものであった。

爆破によってより高く跳躍し、もう一度爆発を繰り出して一気に緑谷との距離を詰めていく。動きを追うために視線を逐一変える隙を見逃さず攻撃を続けていき、爆豪はとにかく緑谷に考える暇を与えないように立ち回っていた。

緑谷が攻撃を回避するためにはジャンプをするか身体を丸めて受け止める必要があるが、爆豪はそんな僅かな間にも距離を詰めて追撃を繰り出すことができる。絶え間ない連続攻撃に翻弄され続けることを嫌った緑谷は爆豪の腕を蹴り弾くことで攻撃を防ごうとするが、爆豪はその動きを読んでいたかのように急速に方向転換。

「がっふ……！」

緑谷の背後に回り込み、背後から脇腹に向けて強烈な右フックをお見舞いした。

重たい一撃を食らい吹き飛ばされ、その辺の木に激突する緑谷。肺に溜まった酸素が全て抜けていくような感覚と共に、間髪入れず向かってくる爆豪の存在を知覚する。向かってくる爆豪を迎撃するべく木の幹を掴み、腕を引いて身体を大きく浮かせ大振りの右手を回避。そのままカウンターで爆豪の顎に蹴りを入れてやった。

「はあっ……息つく暇もない……!」

「何を笑ってやがんだア!? さつきから逃げ回って防戦一方……サンドバッグにやあならねえんじやなかったのかよ!？」

「ならないさー!」

「どうせまた、何か企んでんだろうよ!」

「……凄いな」

「そうですね……身体ができてきたからか、個性に振り回されることが少なくなっています。黒鞭もしっかりと制御できてるし、出力超過での激痛も出てないみたいですし、出久はまだまだ伸びますよ」

「それもそうなんだけど……それ以上に爆豪少年の方がね」

「勝己が、ですか?」

オールマイトは語る。何も鍛えていない無個性の状態からここまでワン・フォー・オールを使いこなせるようになった緑谷は凄い。現在扱える最大出力は更に上がって30%、それに加えて戦力としてギリギリ数えられるようになった黒鞭もある。そのパワーだけならば、今でもプロのトップクラスにすら通用するだろう。

だからこそ、それに食らいついていけている上に寧ろ優勢を保っている爆豪の異常さを、オールマイトは実感していた。期末試験で戦った時に彼が扱っていた爆発の威力を考えれば、今の緑谷の出力には遠く及ばなくなっているはずである。林間合宿や敵の襲撃の中で成長した、とは言えなくもないが……それにしても何故、これ程に。

悔っていた訳ではない。寧ろ爆豪の実力を正確に測れていたからこそその疑問。風華がその疑問に応えることができたのは、オールマイトの知らない爆豪を彼女は知っていたからだろう。

「確かに、林間合宿を経て勝己の爆発の威力は多少上がっています。でも、それだけじゃあ今の出久の出力を超えることはできません。だからウチに通って訓練を続ける中で……勝己はちよつとした工夫を取り入れることにしたんですよ」

「工夫を?」

「勝己の掌をよく見てれば分かりますよ。今までの彼とは少しだけ違うというところが」

「いったい何を……成程！」

風華に促され、オールマイトは爆豪の工夫が分かるという彼の掌に目を凝らす。トップヒーローとして多くの戦場を駆けてきた彼には、その工夫が何かということはすぐに理解できた。

「勝己のコスチュームに付属してる手榴弾があるじゃないですか。あれの中身は勝己が分泌した爆発性の汗です。あんまり使ってるところを見ないから分かり辛かったですけど……勝己の分泌する汗は、ある程度爆破させるまでの時間に融通を効かせることができたんですよ」

「随分と大きな爆発を起こせるようになっていたが……アレは『溜め』だったのだな！」

オールマイトがそう言ったように、爆豪はただ分泌した汗を爆発させるのではなく『溜めて』爆発させることを覚えていた。これにより底上げされた威力は爆豪の機動力をも底上げし、緑谷の出力に勝るとも劣らない状況を作れている。

職場体験以降個性研究所に通うようになった爆豪は、そこで自分の『個性』を再認識すると同時に新たな使い方を模索していた。既にレベルが上がりにくくなっている自分が、それでも更に上を目指せるように。慣れない個性の使い方に振り回されながらも、思考と努力を止めず辿り着いた答え。

「うぎっ!?!地雷……!」

「あれもまた、修行の成果と言えますね」

「緑谷少年の行動を先読みして、そこに予め罠を仕掛けておいたのか……!」

爆豪の攻撃を躲した緑谷が地面を踏み締めると、まるでそこに来ることが分かっていたかのように地面が爆発し、緑谷の体勢を崩す。分泌した汗をすぐには爆破させず、辺りにばら撒いて地雷原を創り出す。これもまた『溜め』を覚えた恩恵であった。

確実に成長している。個性の使い方が、これまで以上に磨きがかかっている。その成長は今のこの状況で歓迎すべきものではないはずなのに、緑谷の顔は微笑みを浮かべていた。

「爆発力の強化に、地雷原の作成……当たり前だけど、強くなったる……！」

「何を笑ってやがんだあ!?ピョンピョン跳ね回って避けてばっかり……サンドバッグにやならねえんじやなかったのかよ!?っていうか、さつきと同じこと言わせてんじやねえ！」

「ならない！」

元々持っていた優れた反射神経や、それを活かせる柔軟な思考と身体能力。それに加えて研究所で伸ばした新たな個性の使い方。事前に持っていた情報や、戦いの中で得た情報から予測して動く緑谷とは相性の悪い戦い方。

防戦一方、避けてばかりと爆豪に言われるのも仕方ない体たらくではある。実際黒鞭の制御にも気を回さなければならず、爆豪だけに集中して戦うことは難しいのだから。

「てめエのそういうところがなあ……その何考えてんのか分かんねえのところか！そういうのが気色悪かったんだよ！……ただけぶつ叩いても張り付いてきやがって、何も無い野郎だったくせに……俯瞰したような、見下した目で見てきやがって！」

「……っ!？」

「目障りなんだよ！見下ろしてるような……本気で俺のことを追い抜いていくつもりその態度が！」

「……そんな、風に」

——そんな風に、思ってたのか。

体育祭で戦ったあの時、緑谷も爆豪も自分の本音は出せるだけ出したはずだった。それだけでは時間が足りず、ここまで表に出ることのなかった更なる本音。

爆豪は緑谷に対して恐怖心のようなものを抱いていた。それは無個性で何もできない出来損ないだったはずの緑谷が、当然のように何でもできて誰よりも強かった自分を救けようとすることに対する気持ち悪さだけではなく、どこをどう進むにも必ず引っ付いてきて、自分のことを観察するかのようになり、見下ろすような目でずっと見続てくる。

何度も何度も、突き返した。その態度が、目線がどうしても気に入らなくて、気にならなくなるようにしようとした。それでも緑谷は決して自分の近くから離れることなく、ジツとこちらを見続ける。

そんな相手、怖いと思つて当然だろう。

突撃しようとした緑谷の足が止まる。その代わりに動いた緑谷の口は、心の堰を切るかのように言葉を紡いでいく。

「そりや……気持ち悪いって思うよ。普通ならバカにされ続けた相手とは、関わりたくないって思うようになるよね……でも」

「……」

「それでも、君の凄さは鮮烈だったんだよ」

ここまで爆豪が何度も言っていたように、緑谷にはヒーローとしてあるべきものがなかった。だからこそというべきか。自分がないものをたくさん持っていた爆豪は、緑谷にとってはオールマイトよりも誰よりも身近な、『凄い人』であったのだ。

「だから、ずっと……君を追いかけて来たんだ！」

「はっや……！」

緑谷が飛ぶ。これまでよりも更に一段と速いスピードは、ワン・フォー・オールの出力をより向上させたことを意味している。フルカウル35%、緑谷自身ですら想定外に上がったスピードは、咄嗟のガードごと爆豪を蹴りつけて吹き飛ばした。

ぶつかつた木がへし折れて、バキバキと派手に音を鳴らしていく。爆破をクツション代わりにしなければ、そのまま意識を失っていたであろうダメージに、少なからず動揺する。

「速い！」

「個性の出力が上がつた……それだけじゃない。黒鞭を勝己より後ろの木に引つ掛けてそこに行くようにして、更に加速していた……！」

「いや、爆豪少年もよく反応できたな！」

「ホントですね……攻撃自体はクリーンヒットさせられたとはいえ、凄まじい反応速度です」

プルスウルトラしたただけではない、制御に苦心していた黒鞭を活かした工夫も取り入れた一撃。戦いの趨勢を見極めていた2人は、一瞬

の攻防の中で取り入れられていた技術に心から感服する。だが、そんなところに思いを馳せている暇はどこにもない。高速の戦いは既に、新たな攻防を2人に繰り広げさせていたのだから。

緑谷が跳び、爆豪が迎撃する。蹴撃の風圧を爆風でいなしつつ、直撃させる隙を狙う。足を伸ばし切った身体は次の動きにすぐに移れる体勢ではなく右の大振りが眼前まで迫るが、黒鞭を広げてどうにか直撃だけはガード。爆風で吹き飛んでいく身体を足をジタバタさせて何とか着地し、体勢を整えてすぐさま次の攻撃に移る。

「こんなもんかよ!?!」

「はああああ?!んな訳ねエわクソが!」

「緑谷少年、随分と口悪くなっちゃって……」

「まるで、勝ちみたいですね」

緑谷は時折、口が悪くなることがある。「勝たなければ」という気持ちが高まる時になりやすいというこの癖は、彼の無意識に勝利の象徴として、爆豪の姿があるからであった。

本人は流石に気色悪いからと、このことは誰にも言わないでいる。しかし、風華の言っていたことはそれ程的外れでもなかった。

「バツ……カ正直に跳ねやがって!」

「速いつ!?!」

「空中なら、俺の方が有利だ!」

「ツ……それが、どうした!」

緑谷はここまで、跳躍からの蹴りや黒鞭を飛び道具として扱うことで攻撃を行っていた。しかしそれらは予備動作が大きく、いくら速いと言ってもまだ見てから反応が間に合うレベル。今回も跳んでからの蹴りというパターンできたのを見た爆豪は、それを撃ち落としてやらんとばかりに振り上げたその足下へと飛び込んでいった。

「んなつ……!?!」

「いつまでもワンパターン……な訳ないだろ!」

しかしそれは、緑谷の仕掛けた罠であった。何度も同じ手を繰り返していれば、爆豪がその中に生まれる隙を見逃すはずがない。必ず、どこかでカウンターを仕掛けにくる場面がくる。

黒鞭を爆豪の左右を塞ぐようにして飛ばし、直進以外の選択肢を遮断。カウンターを仕掛けてやろうと思っていたのに、実はそれは自分がやられる側であったということを理解すれば、少なからず動揺して動きに迷いが生じる。そこに渾身の一撃を叩き込むというのが、緑谷の思い描いていたシナリオであった。

「君に……勝つ！」

ワン・フォー・オール『45%』、セントルイススマッシュ。勝負の行方を決める爪先が、爆豪の顎に触れた。

「負け……るかああああ!!」

緑谷の蹴りが命中するその瞬間。爆豪は両手の爆破によって身体をコマのように回転させ、スマッシュの威力の大半を殺したのだ。その回転の勢いのまま、右の掌を緑谷の顔面へと突きつける。溜めていたありつたけの威力を解放した一撃の余波は、緑谷が周りに展開していた黒鞭の壁ごと彼を吹き飛ばしていった。

「何て、威力……!」

「どうなった……!?!」

爆風で視界を遮られ、戦いの顛末がどうなったのかが分からない。煙が晴れて見えるようになったその光景は……半死半生、息も絶え絶えになった2人がそれでも尚、拳を振りかぶる姿であった。

「かつ……んだ……!」

「まけ、ねえ……!」

「……もう終わりだよ。これ以上はダメだ」

弱々しく放たれた二つのパンチ。もうどちらにも戦う力は残っていないと判断した風華は、雷上動でその間に割り込み拳を受け止めた。

爆豪に勝ちたい。

緑谷には負けたくない。

そんな意地だけに突き動かされていた身体は、第三者の介入によってようやく、その動きを止めて意識を手放したのだった。

## 仮免試験、はじまり

「ん……あ、あれ？僕の部屋？」

緑谷が目を醒ました時、そこは寮の中の自分の部屋であった。記憶の中の自分は爆豪と互いの意地を賭けた喧嘩をしており、その途中からの記憶が曖昧になっていて思い出せない。あれだけ互いにボコボコにしたりされたりしたはずなのに、打撲痕ひとつ残っていないというのもおかしい話だ。

ちよつとしたモヤモヤを抱えながらも、時計の針が起床時間を指していることに気付くと身体を起こして部屋を出る。一階の食堂を指して歩を進めていると、ちよつど目的を同じくする風華を見かけて声をかけたのだった。

「あ……おはよう、鳴神さん」

「おはよう出久。よく眠れたかい？」

「あ……そのことなんだけどさ。実はいつの間に部屋に戻ったのかとかよく覚えてなくて」

「ま、あれだけ派手にやってちゃね。ボコボコにされまくってたし、記憶のひとつやふたつ飛んでもおかしくないよ」

緑谷は食堂へ向かう道すがら、風華に昨日の喧嘩がどういう結末に終わったのかを聞いた。お互い満身創痍になりながらも、意地だけで身体を動かして戦いを続けていたこと。最後は風華が止めに入ったことで同時にダウンし、結果は引き分けに終わったこと。あまりにもボロボロになり過ぎて『オールマイト監督の元模擬戦形式で自主トレをしていたが、白熱してやり過ぎてしまった』という言い訳も使えそうになくなってしまったことなどを聞いたのだった。

「あれ？でも、それじゃあ何で僕は無傷……」

『風雷回帰』だよ。あの重傷を2人分治し切るだけの電力供給は、かなりの無茶をする必要があったけど……どうにかなったよ」

「……ごめんなさい」

「謝る必要なんてないよ。そもそも2人の喧嘩を止めなかったわたしが悪いんだからね。相澤先生に説明するの大変だったよ」

風華とオールマイトが倒れた2人を背負って寮に戻った時、相澤は玄関前で待ち構えていた。爆発のような衝撃音が聞こえて起きてしまったので、いったい何があったのか知るためにその場へ向かおうとしたところ、気を失った緑谷と爆豪を背負った2人が帰ってくるのを見て、そつちから事情を知ることにしたのだ。

オールマイトと一緒にいたことから、黒鞭の訓練をしていたことは察していたようであったが。相澤はそのオールマイトの管理能力をあまり信用していなかった。疑り深い相澤を納得させるために風華とオールマイトがかけた説得時間は実に1時間。「監督役の言うことを信じましょう」の言葉を引き出した時は、心の中でそれはもう大きくガッツポーズをしたものであった。

「怪しまれないようにって風雷回歸で怪我を治したんだけどね……そのせいで『訓練をしてたはずなのに傷のひとつもないのはおかしくないか』って更に怪しまれちゃってさ。質問全部に即興で言い訳を考えないといけないんだ、頭がどうにかなりそうだったよ……」

「ご、ご迷惑おかけしました……」

「だからいいって。わたしは喧嘩を止めなかったんだからこれも自業自得だよ。敢えて誰が悪いかって言うのなら、そもそも最初に喧嘩をふっかけてきた勝己が悪いよ」

「確かに、そりゃあそうだよな」

「……黙って聞いてりゃ、好き勝手言ってるな」

「あ、おはよう勝己」

「かつちゃん……いたんだ」

「いたらわりイのか？」

割って入り前を行こうとはせず、珍しく2人に並び立って歩こうとする爆豪。共に食堂に向かって歩きながら、昨日の喧嘩の話をする。「……さつき、オールマイトが来た。てめエの個性はもう俺にバレた以上、これからも隠そうとする意味はねえってな。てめエの個性……『ワン・フォー・オール』つつったか。その成り立ちから今までの道のり、てめエが継ぐに至った経緯まで含めて全部聞いた」

「オールマイトが……そうなんだ」

説明を聞いて、爆豪は少しだけ荒れた。小さな頃から憧れていて、その背中を追いかけてきたオールマイト。自分のせいで一線を退かせてしまったことに、ずっと責任を感じていた。

オールマイトのような強い男になりたいと思っていたのに、自分は弱かったから。痩せこけた見窄らしい姿にさせてしまったことをずっと、悔やみ続けていたのだ。せめて恨み言の一つや二つくらい言っただけなのに、オールマイトは逆に自分を抱きしめて『その気持ちに気付いてやれなくてすまなかった』と謝罪をする。

「……そんな、聞きたかった訳じゃねんだがな」  
「？」

「何でもねえよ。……デク、てめエとオールマイトの関係を知ってんのはあと何人いんだ？」

「リカバリーガールと校長先生……生徒では鳴神さんと君だけだよ」  
秘密を共有している人数を知ると、爆豪は「隠さなければいけないなら誰にも言わない。秘密にしておいてやる」と、緑谷とオールマイトの関係について黙秘を貫くことを約束した。言いふらすことで付いてくるリスクとデメリットを考えて出した結論であるが、爆豪が2人に気を遣ってくれたことには変わりない。

「てめエのようにバラしたりはしねえ。つと……何で当事者のでめエが真っ先にバラしてんだ」

「返す言葉もないね」

「ま、いろいろあったが……結局俺のやることは変わらねえ。オールマイトをも超えるヒーローになるため、全部俺のモンにして強くなる。お前が俺や周りを見て、そうしてきたようにな。オールマイトに選ばれたお前よりも、更にも上に行くってやる」

「じゃ……じゃあ僕は更にその上に行くよー！」

2度のぶつかり合いを経て、緑谷と爆豪はこれまでの歪な関係から真つ当なライバルのような関係に変わった。いつものような言い合う姿も、こうして見ると微笑ましいもののように感じるが……風華はまだこの喧嘩を終わらせるつもりはなかった。

「楽しそうにしてるところ、悪いけどさ。2人ともまだ、お互いにやる

べきことをやってないんじゃないかい？」

「やるべきこと？」

「何言ってんだてめエ……」

「喧嘩した後、どうするか。小さな子どもでも分かっていることだと思うんだけどね」

歩く2人の足を止めさせ、風華は互いに向かい合わせにさせる。喧嘩をした後に、するべきことは何なのか。出久も勝己もそれを分かっていることはないだろうと、無言の微笑みで語りかける。

「……」

「……そう、だよね」

当然、2人は察した。緑谷は喉に引っかかって出てこない言葉を吐き出すように喉を指先でポリポリと掻き、爆豪は何だかとてもバツが悪そうな表情で頭を激しく掻いている。

そうして、無言のまま数秒が経ち。ようやくいつまでも続きそうな静寂を破ったのは――

「やり過ぎてしまって、ごめんなさい」

「今までのことも含めて……ごめんなさい」

――同時に発せられた、謝罪の言葉だった。

「……うん。これにて一件落着、だね」

、

「着いたぞ。みんなバスから降りろ」

「ここが受験会場……」

「何という数の受験者だ……全員がライバルか！」

「緊張してきたなア」

「試験って何やるんだろうな……仮免ちゃんと取れっかなあ……」

「峰田、取れるかじゃない。取ってこい」

「ウイッス！」

「この試験に合格し仮免許を取得できれば、お前らタマゴは晴れてヒヨっ子……セミプロへと孵化できる。頑張ってこい」

試験会場である『国立多古場競技場』へとやってきたA組の面々は、これから始まる仮免試験本番を意識してか、それぞれが緊張や不安の声を吐露していた。

取れるかどうか、ではない。何が何でも取りに行くのだと相澤に発破をかけられたことで、心を持ち直し改めて気を引き締める。

「わたし達は頑張った。その成果を発揮しよう」

「ああ、なってやろうぜヒヨっ子によ!」

「いつもの一発やっとか!」

「せーの! Plus…… Ultra!」

景気付けにと、みんなでプルスウルトラの円陣を組もうと音頭を取った切島。しかし途中まで言いかけたところで、それは余所者の割り込みを食らい中断されてしまう。

声のした方を振り向けば、そこには『S』の刺繍が施された学生帽を被る少年の姿。その姿を見て正体に思い至ったようで、轟と八百万の推薦組2人は驚いたような表情を見せるのであった。

「勝手に他所様の円陣に加わるのは良くないよ、イナサ」

「ああ、しまった! どうも、大変失礼いたしましたア!」

「ヒィイ!」

「何だこの、テンションだけで全てを乗り切ってきたみたいな感じの人は!」

「飯田と切島を足して二乗したような……!」

「この男……」

「……あの制服、土傑高校!」

少年と同じ制服を着た別の少年が『イナサ』と名前を呼び、円陣に割り込んだ彼を嗜める。彼らの制服をみた者達は、周りの野次馬も含めて全員がその正体を思い出した。

東の雄英、西の土傑。

並びそう称される、雄英高校と双壁を成すもう一つの名門高校。そんな同格の相手の登場に、風華は警戒してグツと目を細める。いったい何用でノコノコと姿を見せたのか。額から血を流しながら勢いよく顔を上げた少年が紡ぐ言葉を待って――

「一度言ってみたかったっス！プルスウルトラ！自分雄英高校大好きっス！雄英の皆さんと一緒に競い合えるなんて光栄の極み！今日はよろしくお願いしますっス！」

——すぐに警戒を解いた。少年の言葉はあまりにも純粹で、まっすぐで。腹に一物を抱えている様相など微塵も感じなかったから。これから合格枠を競う相手に対して、無神経過ぎるとは思ったが。

「夜嵐イナサ。昨年度……つまりお前らの年の推薦入試。トップで合格したにも関わらず、何故か入学を辞退した男だ」

「え、じゃあ一年生ですか!?ていうか推薦入試トップって……実力は轟君以上……!?!」

「雄英好き好き言ってる割に、入学は蹴るってよく分かんねえな」

「ねー。変なの」

「あなたが鳴神風華さんっスね!?!」

「え……あ、うん。そうだよ。ち、近い……」

A組のみんなが注目する中、夜嵐はそんな声を意にも介さず一目散に風華の前へとやって来た。あまりにも近過ぎる距離感と大きな声に若干怯まされる風華であったが、持ち直して会話に応じた。何故自分に対して話しかけて来たのかは知らないが、流石にここで無視するのは露骨過ぎるだろうという判断であった。正直なところ、無視して今すぐ立ち去りたいと思っっている。

「神野での中継見たっス！敵を瞬殺してオールマイトに力を託し、勝利に貢献した姿！あの姿を見て俺は本気でアンタを尊敬したっス！同じ風系の個性の持ち主で、歳も同じ人間のあの活躍！ヒーローの卵としてマジ刺激受けました！」

「そ、そう……ありがとう」

「試験ではお互い敵同士になるっスけど……その時は俺、アンタに挑戦させてもらおうっス！合格に向けて頑張らしましょう！」

「う、うん……頑張ろうね」

そこまで言うと、夜嵐は士傑の仲間達と共に会場の中へと消えていった。唐突に現れた嵐が過ぎ去っていったことを、風華は露骨に安堵して深く息を吐くのであった。身長が高く体格もいい男が、鼻先が

付きそうになる程近い距離で大声を捲し立てる。敵でもないし悪意もないと分かっている、心のざわつきを抑えられぬ相手であった。思い出しただけで顔が火照り、紅くなる。異性にあそこまで接近されるという経験は、風華にとっては初めてのもの。感情を激しく乱されてしまうのも仕方のないことである。

「おい鳴神。これからコスチュームに着替えて説明会だぞ。みんなもう先にいつてる、お前も時間を無駄にするなよ」

「もう少し……落ち着いてから行っても？」

「……まあ、少し深呼吸してからでもいい」

無駄を嫌う男、相澤消太。そんな彼ですら、ここで風華を急かし続けることは諦めた。むしろ深呼吸して心を落ち着けるように言う。それだけ今の風華は酷く狼狽していたのだ。

大きく息を吸って、吐く。未だドキドキと脈動の激しい心臓を十分に落ち着けてから、風華は誰もいなくなった道を1人歩いていく。

——あの男……夜嵐イナサ。会敵したら真っ先に潰してやる……

！

両頬を叩いて気合を入れ直しながら、そんな物騒なことを考える風華なのであった。

## 仮免試験 その1

「ええ……ではアレ、仮免のヤツ、やります。僕はヒーロー公安委員会の目良です。好きな睡眠はノンレム睡眠……よろしく」

疲れを微塵も隠し切れていない男による司会のもと、この場に集まった受験者達に仮免試験についての説明が為されていく。

ざっくりと言うならばそれは、受験者総勢1540人による勝ち抜き戦であった。ヒーローが飽和している現代社会、多くのヒーローが救助や敵対時で切磋琢磨してきた結果、事件の発生から解決までの速度はとても迅速なものとなってきている。だからこそ仮免許を取ろうと思うのなら、そのスピードについていけなければならないのだ。

「よって試されるのはスピード！この試験は条件達成者『先着』100名を通過とします」

「はあ!？」

「何だよそれ!？」

「15分の1以下じゃねえか!」

受験生の騒めきが会場中に響き渡る。それもそのはずであろう、本来ならば仮免の合格率は、例年5割程というのが当たり前だったのだから。それが1割以下となるのでは、話が違うと叫びたくなるのも無理はない。

「それで、条件というのがコレです。このボールとターゲットが鍵と なっています」

そんな喧騒もどこ吹く風か。目良は何事も起きていないかのように説明を続けていく。彼の話を目面に聞いていた者達が理解した内容は、下記の通りとなっている。

1. 身体在三ヶ所、ただし常に晒されている場所にターゲットを取り付ける。禁止となっているのは脇や足の裏、股の間など。
2. 支給される6つのボールは、ターゲットに当てるとその箇所が発光する。3つのターゲット全てが発光したならば、その受験者は脱落となる。

3. 3つ目のターゲットにボールを当てた者が、相手を『倒した』こ

とになる。2人倒したらその時点で勝ち抜き。

「入学試験と似てる……いや！」

「対人と対ロボじゃ、まるで話が違うよね」

「ボールの所持数は合格ラインぴったり……3つ目を掠め取るとか、そういった策を取ることを推奨しているということか……？」

「雄英の入試よか、幾分苛烈なルールだな」

「ルールは以上です。じゃ、展開後ターゲットとボールを配るんで、全員に行き渡ってから1分後にスタートとします」

「展開？」

試験の内容について各々が思いを馳せていると、目良は何やら意味深なことを言い出した。その言葉を疑問に思った轟がオウム返しすると、天井から不意に光が差し込んでくる。会場がダンボールのように展開し、真の姿を曝け出したのだ。

「なんて大掛かりな……」

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

「頑張つてね」

一気に広くなった空間を見回して、風華は呆れたように1人聞かれるでもなくそう呟く。仕掛けの無駄な凝り具合には最早、風華は呆れを通り越して尊敬すら抱き始めていた。

係員からターゲットとボールを受け取り、適当な位置に貼り付けると風華は空高くへと浮かび上がっていく。1分しかない準備時間の間に、なるべくアドバンテージの取れる位置を確保する。

「あ、鳴神さん！あまり仲間同士では離れずチームアップをするのが勝ち筋だと思うんだ！ここは協力して一緒に戦おう！僕らは周りに手の内もバレてることだしさ……!!」

「お断り。大所帯じゃ力を出し辛いからね。わたしは独りで行かせてもらうよ」

「鳴神さん!?!」

「俺も……個性の効果範囲が広いからな、大所帯じゃみんなを巻き込みかねえ」

「轟君も!？」

「フザけろ、遠足じゃねえんだぞ」

「かつちゃん!？」

A組の高火力な3人は、それぞれの思惑で緑谷の提案を無視し単独行動に打って出る。仲間同士固まって協力することを想定していた緑谷は、その行動に面食らうも『5!』という合図に頭を切り替え、残った仲間達と動き出した。

「出久が率いるなら、みんなは大丈夫かな。協力を無視して単独行動するんだし……わたしはわたしで頑張らないとね」

緑谷が動いたのを見た風華は、意識をそこから切り替えて周りに散らばる敵に向ける。宙に浮かぶ自分を警戒している者に、他の敵を見据えていて警戒の一つもしていない者。そして……

「さつきからずっと、見られてるね」

『4!3!2!1!』

ルール説明の時からずっと、自分に意識を向け続けている者。合格するのならば、警戒の薄い者を2人雷上動で仕留めればいいのだが。残念ながらその手は使えない。何故なら、風華はこの勝ち抜き戦のルールを聞いた時点で戦う相手を一人分、既に決めていたのだから。

「上等……」

赫災領域レッドゾーンを発動し、世界を赫く染め上げる。その力の根源である深い怒りに触れて、多くの者が恐れを抱き足を止めた。だがその中で、恐れ「お」の字も感じさせず風華に向けて突撃する旋風が一つ。試験開始を告げるアナウンスと同時に、二つの暴風は激突した。

『スタート!!』

「考えてたことは同じ……なのかな」

「ハッハ——アアア!」

「夜嵐イナサ……お望み通り、遊んであげるよ」

「これが赫災領域レッドゾーン! テレビで見た通り……めっちゃくちゃ怖いっす! だが……同じ風系の『個性』を持つ者として、アンタとは一度こうして戦ってみたかった! 力試しさせてもらおうっす!」

夜嵐イナサ、個性『旋風』。風を巧みに操るその個性でもって、雄英

の推薦入試をトップの成績で合格した実力者。

彼もまた、試験の内容を説明されてからは風華と同じことを考えていた。同じような『個性』の持ち主でありながら、雄英体育祭を優勝し神野の事件でもオールマイトを援護できる実力を持つ少女。気にならない訳がないのだ。この試験で倒すべき2人のターゲットの内、一人は必ず鳴神風華だと夜嵐イナサは心に決めていたのである。

……赫災領域レッドゾーンは初見のはずなのに、こうも落ち着いていられるのか。流石は士傑生つてところかな？これ以上続けるのもあんまり意味ない、か。

『おーつと!?開始から僅か数秒!雄英生達が続々と試験を突破していったぞ!』

「早っ!もう終わったんスか!?!」

「……目的は果たせたみたいだしね」

アナウンスを務める目良の驚きの声が会場中に響き渡る。赫災領域レッドゾーンの出現によって怯み、一瞬動きを止めてしまった者を見逃さず、雄英生達が倒していったからである。その結果、試験開始から僅か8秒という短時間で、緑谷率いる協力組は試験通過を果たしたのだった。

赫災領域レッドゾーンを発動すれば、風雷回帰の超再生に風力及び電力チャージの短縮、空気掌握の迅速化などといった利点が生まれる。しかし、敵という訳でもなく大半はそれほどの実力者でもない受験者を相手に使う意味は薄い。

それでも今回発動したのは、自己中な理由で協力を拒んだ自分が少しでも協力するため。赫い空気に触れた者は、その強い怒りに怯む。それはあのオール・フォー・ワンも例外ではない。そんなものにとただの一学生が触れてしまえば、立ち直るまでは相当な時間がかかるだろう。そんな隙を皆が見逃すはずはないと、確信しての援護であった。そしてその一瞬だけの援護は、見事功を奏したのだ。

役目を終えた赫災領域レッドゾーンを解除し、改めて風華は距離を取り夜嵐と向かい合う。笑みを絶やさないその顔を見て、改めてコイツは必ずここで倒す……と決意を固めるのであった。

「どしたんスカ、赫炎領域は使わないんスカ!？」

「うるさい。食らいな、『吹き荒ぶ風』」

吹き荒ぶ風チープストームと夜嵐の放つ竜巻がぶつかり、弾けて辺りに烈風を撒き散らしていく。その余波で何人かが吹き飛ばされていくのを尻目に、2人は次に放つ風を集める。再び吹き荒ぶ風チープストームを放つ風華だが、夜嵐はこれを更に上へ飛ぶことで回避。温存できた突風の弾丸をこれ幸いと撃ち放った。

「うおっ……マジっスカ!？」

『疾風迅雷』は空気と電気を操る個性……空気の流れだって、思うがままに操れるんだよ」

だが、撃ち放ったそれが風華にダメージを与えることはなく。逆に空気を自在に操る風華の個性によって掌握され、夜嵐自身へ牙を剥いた。

相殺して態勢の立て直しを試みるが、そうは問屋が卸さない。八方から襲い来る吹き荒ぶ大風バンバーストームを見てしまったからには、それをどうにかしなければその時点で終わりだからだ。

「うおお……ヤベエっス、マジ絶対絶命っス!でもこんな時こそ……!プルスウルトラアア!!」

夜嵐は意を決すると、ありつたけの風力を自身に集めて自身を竜巻へと変えた。そのままの勢いで襲い来る吹き荒ぶ大風バンバーストームの一つに突貫。嵐そのものと化した己の突撃により、無理矢理最小限の被害で絶対絶命のピンチを乗り切って見せたのだった。

だが、相殺したとは言え風華の必殺の一撃に突貫したことによるダメージは大きい。夜嵐ズタズタに刻まれたコスチュームを叩きながら、細かく息を吸って吐いて呼吸を整える。

鳴神はどこだ。この状況で攻撃を仕掛けてこないなんて、そんな虫の良い奴ではないだろう。

「ハッ……ハアッ……流石に……大技に飛び込むのは自殺行為だったっスね……!」

正直、このまま浮いているだけでも辛い。このまま降りて適当な相手を倒し試験を通過して、さっさと休みたいという気持ちもかなりあ

る。でも、夜嵐がそれを実行しないのは。鳴神風華という自身の上位互換たり得る強敵を、この手で越えてみたいという気持ちの方が余程強いからであった。

「見回してもどこにもいない……どこに隠れて」

「ここだよ」

「なっ……!?!」

「おっと。君の声はデカいんだよね。口は閉じててもらおうかな。……まさか吹き荒ぶ大風バンバーストームを突き破ってくるとはね。大したものだよ」

夜嵐の驚愕する声が響き渡る。それもそのはず、どれだけ探しても見つけられなかった相手が、急に自らの目の前に現れたのだから。

そんな驚きをよそに、風華は夜嵐の口元へそつと掌を当てる。理由はうるさい声を出させないようにするためと、もう一つ。『疾風迅雷』の空気を操る力を、そこで使うため。

「わたしの個性は空気を操る。空気中の酸素や水素などといった物質の濃度を変えたり、空気の流れそのものを操って風を起したり。水中にある酸素だけを取り込むことで、肺呼吸の必要なく水中で活動することなんかも可能だ。そして、その力はわたしに触れている空気が、近い範囲にある空気程精密かつ迅速な操作が可能となるんだ」

「……」

「ま、もう聞こえてないか。気絶してるや」

夜嵐の周りにある空気の酸素濃度を下げ、酸素の少なくなった空気を吸わせることで、風華は彼をたったの一息で昏倒させて見せた。意識が途切れたことで浮遊を維持できなくなった夜嵐は倒れ、ゆっくりと音もなく地に堕ちる。

気絶したままの夜嵐が、落下によって怪我をしていないことを確認しながら風華も着地する。命に別状がないことを確認すると、横たわる彼に付けられていたターゲットを、風華はしつかりと全て光らせたのだった。

「……君は最初に言ってたよね、『力試しさせてもらおう』って。これで確かめられたかい？」

力試しとは、格下が格上に対してどれだけ通用するかを確かめると

いうもの。そんな言葉を使っていた時点で、夜嵐は風華の方が格上だと認めていたということになる。風華としても、自分のことを格下だと言っている相手に負けるつもりはなかった。だから彼の望み通り、格上として格の違いを見せつける戦法をとって戦った。

赫炎領域を開始の一瞬いこう使わなかったり、吹き荒ぶ風で夜嵐の風と撃ち合ったり、逆に利用してカウンターを放ったり、彼よりも大規模な風を複数起こしたり。そうして部分部分で上回っていることを見せつけ、最後は風を操るだけではできない酸素濃度操作で瞬殺した。力試しを称して襲ってきた相手に対して、風華は十分過ぎる程力を見せたと言えるだろう。

「これに懲りたら……パーソナルスペースは弁えるようにしてね」

聞こえるはずのない捨て台詞を残して、風華は次のターゲットを探しに行くのであった。

## 仮免試験 その2

「この辺りもだいぶ少なくなってるね。わたしと夜嵐の戦いから遠ざかろうとしてたのかな？」

夜嵐を倒して辺りを見回した風華は、想定よりも遥かに人の気配が少ないことに気付く。どうやら暴風咲き乱れる風華と夜嵐の戦いに巻き込まれるのを避けるべく、皆離れていったようだ。

電磁波による探知で確かめてみたところ、だいたいのところは集団戦となっていて割り込むのは少々リスクが高い。潜伏している相手や一対一など少人数で戦っている相手が狙い目なのだが……すぐに調べられる範囲にはそんな奴は見つからなかった。

「仕方ないか……もう一回、レッドゾーン 赫災領域を発動させてみようかな」  
「その必要はないですよ」

背後から聞こえた声に、風華は反射的にブレードを抜き振り払った。声の主は咄嗟に放たれたその攻撃を軽々と避けると、近くの高台に登って上から風華を見下ろす。Sの校章が付いた帽子に、ライダースーツを彷彿とさせるコスチューム。偶然かまたは必然か、風華はまたしても士傑高校からの刺客と相對することとなった。

「ありやいや、反応が早い。でもブーツとしてたらダメですよ」  
「……随分と、かくれんぼが得意なんだね」

電磁波による感知では、近くに気絶させた夜嵐以外の気配は見つからなかったはず。なのに何故この女は、自分に不意打ちを仕掛けることができたのかを疑問に思う風華。

「何故、不意打ちができたのか不思議って感じなんですかね？ いいよ教えてあげる。私はあなたとイナサの戦いが終わってからすぐ、イナサのそばまで行って身を潜めていたの。あなたが感知能力を使おうとしてイナサから目を離れた隙にね」

「……感知能力なんて、大概は大雑把にどこに何が『居る』か、もしくは『在る』のかを探るものではない。わたしが元からそこにいた夜嵐イナサの電磁波だけを感じ取っていると、そう勘違いするように仕向けたという訳だね。そして、その目論見は見事成功した。士傑じや

忍法でも教えてるのかい？」

少女の語る説明を聞いて、風華はその隠密機動に舌を巻いた。口で言うだけならば簡単だ。気絶した夜嵐に重なって2人分の電磁波を1人に見せかけるといのはまだいい。気絶している夜嵐から放たれる電磁波は常人のそれよりも微弱であり、その差に気付かなかつた風華の落ち度である。だが、そこに至るまでに全く気付けない程音もなく素早く移動できるというのは、脅威と言う他ないだろう。

咄嗟に反撃ができたから良かったが、間に合わなければターゲットを一つ潰されていた。いくら強力な個性を持つ風華とはいえ、未知の相手とターゲット一つ分のハンデを背負って戦うのは厳しい。この不意打ちを防げたのは僥倖であった。

……周りに他の電磁波はない。つまりこの女は単独でわたしと戦おうとしているということ。どんな個性を持つてるのか知らないけど、随分と自信があるみたいだね。

「こういう乱戦が予想される試験だと、まず情報の多いところを狙うみたいな発想をする人もいるらしいの。だから雄英が早めに脱落する可能性を考えて会いに来たの。せっかくの強豪校との交流のチャンスだし、あなた達のこともつと知りたくて。とはいえ他は通過しちやっただけだから、私が会えるのはあなたしかいなかったのだけど」

「会敵した状況で……ペラペラとよく喋る」

少女の並べる御託を一通り聞き、風華はそれが仲間が来るまでの時間稼ぎでもないただの雑談だと判断した。罨でもないのにこれ以上は構ってられないと、ボールを一つ投げつける。纏雷によって強化された臂力で投げられたボールはしっかりと少女のターゲットの一つに命中して、そこを光らせたのであった。

「余計なことは、しない方がいい」

「あらま、やられた。それじゃあ仕方ない」

「っ……!?!何処に」

「こんなボールで殴ればいいじゃんね」

ターゲットが一つやられたことなど知らないとはかりに少女は笑

い、風華の見ているその前から忽然と姿を消した。一瞬驚いて身構えるが、聞こえてきた声に反応して何とか殴りつけてくるボールを回避する。纏雷の速さがなければ、確実に当てられていたタイミングであった。

距離を取った風華は体勢を立て直して反撃に出ようとするも、すんでのところで止まる。今のようになんとも目を離せば、その時点で電磁波ごと見失ってしまう。電磁波はそこにあるはずなのに、実際の居所が掴めない。あの少女を意識できない。どんなに強く見ようとしても、感じようとしてもそんな意識を逸らされてしまうのだ。

「個性、じゃないね。これは技術。僅かな挙動で自分の存在から相手の意識を逸らし、その瞬間に身を潜める。大した技術だよ」

「褒めてくれてありがとう。実際正解よ」

「最初に不意打ちを仕掛けてきたように、隠密機動が大得意という訳だ。でも……」

「ぎゃっ!?!」

相手に存在を意識させない誘導技術。恐らく士傑高校で学んだであろうそれは、もはや達人芸と読んで差し支えない練度である。だが、攻撃前に話しかけてくるということもあり、風華ならば気付いたギリギリで対処できる範囲であった。

背後からの一撃を右腕でボールを奪い止めると、雷上動で逆に背後を取り二つ目のターゲットを光らせた。ついでに地面に少女の身体を押し付けてその上に乗り、抜け出せないよう潜翠『伏雷』で拘束。最後のターゲットを光らせるまで秒読みという状況を作り出した。

「君が隠密機動なら、わたしは高速機動だ。これならご自慢の意識逸らしも、意味がないでしょ?」

「うーん、確かに動けない。これはもうダメかもしれませんね。最後に一つ、質問いいです?」

「ダメ」

「あれま、つれない人」

時間稼ぎには応じず、風華は少女の最後のターゲットを光らせた。アナウンスが試験を通過したことを伝え、それを聞いて一つの山場を

超えたことに安堵の息を吐く。

「ねえ、今なら質問いい?」

「そんなに聞きたいことあるの?……いいよ、答えられることなら答えるよ。一つだけね」

「あなたは、どうしてヒーローを志したの?」

「どうして、って……」

名誉から誇りか。もしくはお金か、はたまた誰かの為か。少女は風華に、ヒーローを目指した理由を問う。その声はまるで、風華を値踏みしているかのようで。何だか不快なものを感じながらも、風華はその質問に答えてみせた。

「オールマイトみたいになりたいって、そう思っただよ」

「オールマイトに?」

「……昔、敵に襲われたことがあってね。その時にわたしは、オールマイトに救けられたんだ。あの時の彼の背中……守られる安心感は今でも鮮明に思い出せる。あんな風になりたいと思った。あの背中に少しでも近付けたら……憧れの人に近付けたなら、それはどんなに素敵なことなんだろう、ってね。それがわたしの、ヒーローを志す理由」

「成程ね……それがあなたの理由なんだね。もっとあなたのこと、知りたくなっちゃった」

「一つだけって言ったでしょ。あんまり人の秘密に踏み入ろうとするのは良くないよ」

「あらま、ケチくさい」

まだまだ風華のことを知りたい。そう食い下がる少女であったが、風華はそれをつれない言葉で一蹴する。もうこれ以上は無理と悟った少女は、諦めて捨て台詞を残し去って行った。

去っていく背中を見届けた風華は、自分も試験通過車が案内される控え室へと向かう。中に入るとそこには、既に試験を通過し終えているA組のクラスメイト達が待っていた。

「あ、鳴神さん!無事に通過できたんだね!」

「そつちこそ。随分と早かったじゃないの」

「レッドゾーン 赫炎領域のおかげだよ!アレで他の受験者が怯んで動きを止めたこ

とで、そこを狙い打って先手を取ることができたんだ。早々に通過できたのは鳴神さんのサポートがあつてこそさー！」

「ふふ……協力できてたなら良かったよ」

緑谷が控え室に戻ってきた風華に気付き、彼女が無事通過できたことの喜びを伝える。単独で行動していた内の1人が脱落せずちゃんと戻ってきたということで、単独行動を諫められなかった身としてホツとしたとのことであった。

ちなみに風華が通過する少し前に、轟も合格して控え室に戻っている。これでA組であと通過できていないのは、爆豪と彼について行った切島・上鳴の3人。残りの枠もそろそろ少なくなってきている中で。風華達にできることといえば、通過できることを願うばかりであった。

「あと残っているのはかつちゃん達か……何か士傑の人に絡まれてるみたいだけど大丈夫かな？」

「まあ、勝己なら大丈夫でしょ。鋭児郎も電気も一緒にいるんだし、勝己も必要とあればちゃんと連携は取れるタイプだ。単独行動に拘つて、勝てる勝負を落とすようなタマじやないよ」

かくして結果は、その通りとなった。爆豪が爆破による高速機動と煙で相手を翻弄し、その間に上鳴が電撃で拘束。切島が動けなくなつた相手に向けて必殺の一撃。触れた相手を挽き肉にするという恐ろしい個性の相手であったが、3人の連携はその脅威を完全に上回っていたのだ。

士傑生を倒した勢いそのまま、元に戻つた彼の個性によって挽き肉にされていた他の受験生を3人は薙ぎ倒していく。目良のアナウンスによつて切島の試験通過が報告され、これによつてA組全員の試験通過が確定。その瞬間をモニターで確認していた風華と緑谷は、反射的に固い握手を結んだ。

「あ、ごめん……！」

「ごっちこそ。つい、反射的に……」

「仲良いよなあお前ら」

「訓練とかでもだいたい一緒だもんなあ」

他のクラスメイト達に押搦られ、2人はすぐに握っていた手を振り解いた。ほとんど条件反射的にやってしまったことはいえ、押搦られてしまうとやはり恥ずかしいのであった。

「何やってんだお前ら」

「あ、かつちゃん……」

「てめエに先越されてるとはな。まあ、そんな力がありや当然受かるか」

「え……!?かつちゃんが、え……!?」

爆豪が自分を褒めるようなことを言い、緑谷はそれはもう言葉も出ないほどに驚いた。それはそうだろう、爆豪が緑谷に対して言うことといえば、普段は怒鳴るか罵るかしかないのだから。

「ったくよ……てめエはそんなだからいつまで経ってもクソナードなんだよ。デ……出久。てめエはオールマイトに認められてんだ、ちったあ堂々としてやがれ」

「え!?あ……うん!そうだね!」

「……借り物、ちゃんとモノにしとけよ」

「……うん!」

『100人目が通過しました!終了です!これより残念ながら脱落してしまつた皆さんの撤収作業に移ります』

「終わったね」

「全員通過できて本当によかつたわ。そういえば風華ちゃん、まだターゲット外してないわね。奥の方にターゲットを外す鍵とボールの返却口があるから行つてくるといいわ」

「あ……そういえばそうだったね。今の内に外してくるよ。ありがとう、梅雨」

「いいのよ」

蛙吹に言われて、風華は控え室の奥にターゲットを外しに行く。目良から次の試験を伝えるアナウンスがされたのは、ちょうど全てのターゲットを外し終えた時であった。

『えー……通過した100人の皆さんは、こちらの映像をご覧ください』

そう言っで映し出されたのは、先程まで戦っていた会場が爆破されて粉々になっていく映像。

当然、室内は騒めく。どうしてこんな映像を？ていうか何で会場を壊してんの？出てくる疑問に答えが浮かぶのは、すぐであった。壊れた会場に現れた大勢の人間とアナウンスが、次なる試験の内容をしかと伝えてきたのだから。

『次がラストです。皆さんにはこれからこの被災現場で、バイスタンダーとして救助活動に当たってもらいます！』

## 仮免試験 その3

「災害救助演習か……さっきの試験とは随分と毛色が変わるんだね」  
「人命救助こそヒーローの本懐だからね。ヒーローを目指すのなら、やっぱりここは押さえておくべきってことなんだと思う」

崩れた会場に続々と集まる人々を見ながら、風華と緑谷はそれぞれの感想を溢した。残った100名が最低限の強さを持っていることは、先の試験で既に分かっている。ならば次に見るべきはどれだけ人の命を護り、救ける術を持っているのか。

次の試験は災害救助演習。被災現場に見立てて破壊された会場の中で、バイスタンダーとして救助を行なっていく。尚、バイスタンダーは一般市民という意味でも使われるのだが――

『当然、ここでは一般市民としてではなく仮免を取得したヒーローとして……どれだけ適切に行動できるのかを試させていただきます』

ヒーローとして、災害に巻き込まれた傷病者をどれだけ適切に救出できるのか。今回は要救助者役を務める『HUC』の皆さんと、外から受験者を観察する公安の審査員の二つの採点を受け、演習が終了した時に基準点を超えていれば合格となる。

「なあ緑谷君、これは……」

「うん、神野区を模してるんじゃないかな……」

「あの時の神野をか……わたしは着いてすぐに気絶したから、あんまり覚えてないんだよね……」

「俺達は爆豪君を敵から遠ざけ、とにかくプロの邪魔をしないことに徹していた……その中では多くの死傷者もいた……」

崩壊した会場を見て気付いた飯田は、ちようど近くにいて尚且つ同じく気付いたであろう緑谷に声をかける。実際緑谷も気付いていた。この粉々に破壊された会場は、あの時の神野区をモデルにしているのではないかということに。

神野区での大惨事を経験した者達は、声には出さずとも改めて気を引き締め直す。あの事件の真つ只中に割り込んでいった自分達は、事件を知る者として絶対に合格していなければならない。不合格に

なったならばそれは、あの事件を経て尚、何も教訓にしていないということに他ならないのだから。

「……頑張ろう」

緑谷の言葉に、風華と飯田は首肯する。オールマイト最後の戦いのその場にいた2人、試験の意図に気付いた以上モチベーションは高い。緑谷に言われるまでもないということ、その真剣な表情は如実に物語っていた。

「あ、そうだ。響香、ちよつといいかな?」

「ひゃあつ!?……風華?なんかあんの?」

「あなたにやってほしいことがあってね。頼まれてくれるかい?」

「内容によるけど……何をしろと?」

試験が始まる少し前、風華は部屋の隅で精神統一を図っていた耳郎へ声をかけた。

風華は今回の試験、常に赫災領域レッドゾーンを使うつもりである。先の試験で一瞬だけ使った時は他の受験生への足止めとして役に立ったが、次の試験では怯まず動いて貰わないと困る。他の受験者への妨害行為と見做されて、減点を食らう恐れがあるからだ。

そのためには、赫災領域レッドゾーンがあくまで救助活動のために展開されているものだということを周知しておく必要があるのだが……生憎他の79名にいちいち伝えて回る時間はない。そのため個性で大きな音を出して広範囲に情報を伝えられる耳郎に、試験が始まったら赫災領域レッドゾーンについて他の受験生に教えてやってほしいと頼みにきたのだった。

「あく……なるほど。そーいうことならウチに任せておいてよ。しっかり伝えといてあげるからさ」

「ありがとう。赫災領域レッドゾーンは時間制限がきちやったからね……少しでも無駄にしたくないんだ」

「せっかくパワーアップするんだしね。少しでも強くなる時間は長い方がいいもんねえ」

「本当だよ。あの時の無茶がなければ、ずっと時間無制限のままだったんだけどね……」

『敵による大規模破壊が発生！規模は〇〇市全域建物倒壊により傷病者多数！』

「演習のシナリオ……」

「始まった……ってこと!？」

風華と耳郎の話が続く中、突如控え室にサイレンが鳴り響く。何事かと身構えた受験者達は続くアナウンスによって、これが試験の始まりであるということを知った。

またしても壁が倒れ控え室が開いていく中で、彼らは瞬時にスイッチを切り替えて試験に臨む精神を作った。いつでも動き出せるよう身体はスタンバイさせておきながら、アナウンスを聞き逃さないよう耳を傾けるのも忘れない。

『道路の損壊が激しく、救急先着隊の到着に著しい遅れが出ると予測される！救急隊が到着するまでの間は、その場にいるヒーロー達が救助活動の指揮を執り行うこと！一人でも多くの命を救い出せ！』

「それじゃあ響香、よろしく頼んだよ」

「はいはい、ウチに任せてさっさと行きな！」

アナウンスが終了し、試験が始まる。その瞬間に風華は<sup>レッドゾーン</sup>赫災領域を発動させて会場を包み、全体の被害状況を把握。赫い世界に反応したいくつかの人の気配の中から、おそらく自分しか助けられないであろう者達を見極めていった。

『皆さーん！心配いりません、この赫い空はヒーローの個性によるものです！敵意や害意のあるものではありません、突然のことで驚かれるでしょうけど安心してください！危険なものではありません！繰り返します、危険なものではありません！』

「これが個性……？範囲広すぎだろ！」

「空飛んでるアイツの個性か……」

「ぐすつ……大丈夫なの……?？」

「響香の方はやってくれているね。さて……わたしもしつかりとやらなくちゃね」

赫災領域が広がると同時に、耳郎は事前に頼んだ通り<sup>レッドゾーン</sup>赫災領域が危険をもたらすものではないとその個性で喧伝してくれた。あちらが

約束を守ってくれているのなら、風華も約束通りしっかりと<sup>レッドゾーン</sup>を存分に活かして働くべきだ。

現状、<sup>レッドゾーン</sup>被災領域の持続時間は300秒程度。先の試験ではほとんど時間を消費しなかったため、持続時間は結構残っている。それでも救い出すべき要救助者はたくさんいる。間に合うかどうかは分からないが……気持ちは必ず、終わらせるつもりで。

「……いこう」

空を飛んで自分の目でも被害状況を確認していた風華は、雷上動で最初のHUCの元へと移動。建物が倒壊し火災が発生しているそこでは、瓦礫に潰されたり炎の中で身動きが取れなくなったりしている多くのHUCが救助を待っていた。

風華はまず風で火を払い退け、要救助者達が炎により発生する有毒ガスをこれ以上吸い込まないようにする。炎に酸素を奪われて酸欠状態になってしまうことを防ぎ、同時に視界も良くした。炎が消えて見えやすくなった視界に映ったのは、のべ11人の要救助者。目で見ただ彼らの容態と電磁波の強弱からトリアージを判断し、風華は状況の逼迫している者から救助に当たっていく。

……腹に瓦礫が刺さって大量に出血してる。呼びかけても反応はない。肌も蒼白になって脈拍も弱まっているし、呼吸もほとんどしていないけど……まだ生きてるなら、救けられる。

「……『天合万雷』、風雷回帰」

「おお……重傷者がみるみる内に回復していく！」

「治癒系の個性の持ち主か!? いや、それにしてはここに来る時に瞬間移動をしてたような……」

「うおっ、瓦礫が浮いてる……!」

「西の方角に見える大きな旗の場所に救護所が設営されています。歩くことができる方は、ご自身で救護所まで移動をお願いします。足に怪我を負って歩くことが難しい方は、わたしがお送りします。お手数をおかけしますが、少々お待ちください」

風華は腹に刺さっていた瓦礫を抜き取り、ついでに瓦礫に挟まって身動き取れなくなっている者を救い出す。本来ならば安易な除去は

不安定な状態で積み重なっていた瓦礫を崩し、要救助者を危険に晒してしまふ行為である。しかし赫災領域レッドゾーンの中にある風華の個性出力なら、そんな重なつた瓦礫ごと除去するのも容易。結果的に、HUC達は新たな危険に晒されることもなく無事救助された。

瓦礫が刺さり大量出血していた者、全身に大きな火傷を負っていた者、有毒ガスを吸って昏睡してしまつていた子ども。頭を打つてしまつて意識を失っていた者。トリアージ的に優先される者達を風華は1箇所にとめ、風雷回帰を施していく。

致死の外傷はたちまち治る。酸素を体内で大量に循環させ、吸い込んでしまつた有毒な気体を排出させることで、一酸化炭素中毒者の呼吸器の正常な働きも取り戻させた。

これで全員、一応の命の危機は去つた。風華は自力で救助所に向かうことが難しい者達を事前に用意していた担架に乗せていき、風に浮かせて運んでいく。少しの無駄な揺れもない繊細な移動に、HUC達は演技を忘れることはなくとも心の中でその個性制御技術に驚嘆した。

「な、なあ……アンタ、治癒の力が使えるんだろ？その力で俺達の足は治してくれないのか？」

「……天合万雷で他者を治すのには、大量の電力を消費します。リソースに限りがある以上は重症の方を優先する必要があります。ご期待に添えず申し訳ありませんが、まだ全員の救助が完了していない今は待つてもらいたいです」

天合万雷は他者に赫災領域レッドゾーンの電力を与え、纏雷を使わせる技である。疑似的に赫災領域レッドゾーンの力を他者にも使わせることができるのだが、風力を与えることはできず、電力しか使えない分風雷回帰による再生の効率も落ちてしまう。

そのため、自分ならともかく天合万雷で他者を治すのには大量の電力を必要とする。致死の重傷者ならばそれは尚更。赫災領域レッドゾーンの持続時間が短くなつてしまふ程に消耗するのだ。神野でオールマイトに電力を与えた時は、その時の自分が作れる全電力を与えたが……今回はそういう訳にもいかない。出力強化に会場の状態把握、要救助者の

居場所特定や電磁波感知による視覚に頼らない救助優先度の振り分けなど。多くのことができる赫災領域レッドゾーンは、できるだけ長く維持する必要があるからだ。

意識もはつきりしており、怪我があるとはいえそれも命にはかわらないものであるなら、天合万雷で電力を与える優先度は低い。そのことをできる限り丁寧に説明し、風華は質問をしてきたHUCに頭を下げた。丁寧に説明されてなんとか納得したようで、それ以上は何も言わずHUCも引き下がる。天合万雷を使わない理由の説明になんとか成功したことで、風華は軽く息を吐くのだった。

「あら、鳴神さん！要救助者の方を連れて来てくれたのですね、ありがとうございます。どうぞいますわー！」

「百。この方達はあなたに任せてもいいかな？」

「当然ですわ！では、適切な治療を施すために意識レベルや症状などの情報をくださいますか？」

「オーケー。まずは……」

連れてきたHUCの容態を、風華は分かりやすいようなるべく簡潔に八百万に伝える。情報を聞いた八百万は、他の救護所担当の受験者達と共に風華が連れてきたHUC達を引き継いで、治療を行っていく。全員が案内されていくのを見た風華は、これならもう大丈夫だろうと踵を返して再び救助へと向かっていった。

救護所から遠くの電磁波、それもかなり弱々しいそれに向けて。要救助者を感じし、高い機動力と治癒能力で生きてさえいればほぼ確実な救助を風華は行うことができる。赫災領域レッドゾーンが持続する間だけとはいえ、今最も動けるのは自分だという自負が風華にはある。だからこそ、立ち止まっているわけにはいかないのだ。

「……救けられず、申し訳ありません」

時に、既に事切れておりどう足掻いても救けようのない者もいた。ただし、そういう役割の人形であるが。そんな時は救助優先順位最下位を示す黒のタグを付ける。手が震えて動作が少し緩慢になっているのを自覚しながら、風華は人形の腕にタグを巻き付けた。

自分がもつと手際良く救助を行なっていれば、救けられていた人かもしれない。これがもしも本番だったのなら、自分の不用意や不手際がこうやって取り返しのつかない結果を生むのだ。何のためにトリアージが存在するのかということを通して、何度でも再確認し、風華は雷上動で次の要救助者の元へと向かっていく。

災害時などにおける救助優先度を示すトリアージレッド、イエロー、グリーン、ブラック。一人でも多くの被災者を救い出すのがトリアージの存在意義である。いつまでもトリアージ助かる見込みのない者ブラックに構っていては救けられる者も救けられない。ヒーローは時に非情な判断も下さなければならぬのだ。

「……爆発？　そういえば、敵による大規模テロっていうシチュエーションだったね。事件現場へ戻ってきたって訳か」

突如遠方から聞こえてきた爆音を訝しみ、風華は電磁波を確かめてみる。すると、40人分程度の電磁波が会場の壁に開いた穴から乱入してきていることが確認できた。シチュエーション的に、災害を引き起こした敵が再び襲いかかってきたといったところなのだろう。いくつかの最初からあった電磁波が救助所に敵が侵攻のを止めようと抗戦しているのが感じられる。

動きから推測するに、敵と交戦しているのは緑谷と轟であろう。氷壁で広範囲を守り、抜け出そうとしてくるのを緑谷の機動力で各個撃破。即席のコンビなら妥当だなと考えたところで、風華は敵を彼らに任せて自分は救助を続けることに決めた。敵よりも人命が優先、まだ弱々しい電磁波がいくつか残ってる以上は、そちらの方に行くべきだからだ。

「うん……やっぱり出久と焦凍だね。あの様子ならここまで戦闘の余波が来ることはなさそうかな。敵はあなた達に任せるよ、よろしくね」

レッドゾーン  
赫災領域で要救助者を感知し居場所を特定できる風華の活躍により、既に残りの要救助者は最初の3割程度にまで減っている。着実に減ってきてはいるものの、油断は禁物。再び頭の中でトリアージの意義を反芻しながら、風華は何度目かの雷上動を発動するのだった。

## 仮免試験 その4

「あ……ヒーロー！腕を怪我したんだ、お願いだから救ってくれえー！」  
「救ってくれ、とつても痛いんだ！」

「うるせえ、いちいち騒ぐな！腕の怪我なら足は無事なんだろ、救護所は向こうの旗の所だから自力で行ってこいや！」

「へっ？……はああア!？」

風華が重傷者の元へ西に東にと駆け回る中、爆豪は一次試験の時と同様についてきた2人を伴って会場を散策していた。

敵の襲撃による大規模テロというシチュエーションであるのなら、必ずどこかで再びの襲撃が行われるはず。爆豪はその時が来たら真っ先に突撃して全員ぶち殺してやるという腹積もりであったが、その最中では当然だが、風華が優先順位的に後回しにした軽傷の要救助者と鉢合わせる。助けを求めてくる彼らに対して、バツサリと切り捨てる対応はなんとも爆豪らしいと言えなくもないが……ヒーローがしている態度や口調ではないのは明白である。

「ホント相変わらずだなお前」

「自己流貫きすぎだろ……見えてないだけで大怪我してるのかもしれないえんだぞ」

「るっせえ！だったらためエらが救護所まで送り届けてくればいだろうが！ただ俺についてくるだけで済ますくらいならそれくらいやっつけ！」

「いや、お前もやれよ」

「我々の設定は救助優先度の低い軽傷者……！」

「まさか……彼はそれを瞬時に見抜いた上で、我々に『自分で動け』と……!？」

切島のツツコミに対して、爆豪は宙へ飛んでいくことで抵抗の意志を示す。飛ばれていっては仕方がないので、切島と上鳴は爆豪の発言を都合よく解釈してくれているHUCを自分達で連れていくことにしたのだった。

「すいませんね。アイツ、これからまた敵が襲ってくるかもしれないな

いって神経質になつてるんすよ」

「あの言動は俺達が代わつて謝罪します」

「成程……シチュエーションを考慮した上で未知の脅威に対する警戒を怠っていないということか」

「でも、あの言い方はないな」

救護所まで案内される傍ら、彼方へと飛び去つていった爆豪のことを2人のフォローありきで採点するHUC達。本人の性格や重きを置いている事柄に加えて、状況判断能力や要救助者への言動などヒーローとしての対応力。それらを考慮した上で彼らが下した結論は……

『あまりにも態度が悪すぎるため減点』

であつた。

それを横で聞いていた切島はまあそりやそうだよなという感想を抱き、上鳴はこれでも少しは柔らかくなつてんだよなあと、かつての切れたナイフのような爆豪に思いを馳せるのであつた。そんな要救助者の前で関係ない別のことを考えていた上鳴が、救助活動に集中していないと減点を食らうのは……それは別の話である。

く

「いくよ轟君！『45%』……セントルイススマッシュ エアフォース！」

「うぼあア!? 吹っ飛ばされるウ！」

「……ナイスだ緑谷。穿天氷壁！」

「なんだこれ……氷!? 通れねえよ！」

試験の最中、襲撃する敵役として現れたプロヒーローギャングオルカとそのサイドキック達。セメントガンを片手に救護所を破壊してやろうと襲いくる彼らを迎え撃つたのは、ちょうど負傷者を送り届けて近くにいた緑谷と轟であつた。

緑谷のスマッシュで発射されるセメントごと吹き飛ばし、開いた隙間に轟が分厚い氷の壁を展開して進路を塞ぐ。肝心のギャングオル

力には氷を掘り進むことで突破されていたが、即席のコンビはなかなかの立ち回りで襲撃を抑えていた。

「無理矢理でも距離を取らせ、進路を塞ぐ……いい連携だが、それを突破された時のこともちゃんと考えているのか!？」

「当然ですよ……緑谷!」

『30%』……!デトロイトスマッシュ!」

「ほう、成程な!だがまだ甘い!」

「ウツソだろ……あのでけえ氷砕きやがった」

「ギャングオルカもなんで、生き埋めにされそうつてのに冷静でいられるんだよ!」

「破片になったとはいえ、元の大きさを考えればまだまだかなり大きな氷塊だったのに……それを破壊するとはなんて馬鹿力だ!」

「お前が言えることか、それ?」

氷の壁を突破して、作戦は第二第三と用意しておく必要があることを指摘するギャングオルカ。轟はすかさず緑谷に指示を出し、緑谷もそれに応えてデトロイトスマッシュで氷の上側を砕き割る。崩れた氷の破片が雨のようにその下にいたギャングオルカに降り注ぎ、彼を生き埋めにせんとする。

だが、ギャングオルカにとつてはまだまだ対処可能な範囲内。自身の頭上に降ってくる氷だけを的確に攻撃して破壊し、生き埋めにされることを防いでみせた。そのパワーに驚愕する緑谷に、轟は自分を棚に上げて何を言うのだとツツコミを入れる。

ここまで立てた戦術は軽々と突破されてしまっているが、2人はそれほど焦ってはいなかった。別にここでギャングオルカを倒す必要がある訳ではないし、足止めして救護所の方に向かわせなければそれで十分であると考えていたからである。

「試験終了の条件は時間経過かそれ以外か……明言はされてないけどなにせよ、まだ救助作業が終わってない以上は絶対にここを突破されてはいけないんだよね。轟君、もっと気合を入れていこう!」

「ああ……今はこつちに関心を向けてもらってはいるけど、簡単に対処できるって思われたら無視して救護所の方に行きかねないからな。

とはいえ氷壁は簡単に砕かれるし、どうしようか……」

「別に、戦えるのは君達だけじゃないんだよね！」

「うわっ、傑物の……真堂さん!? だったよね？」

「加勢に来てくれたのか」

ギヤングオルカをどうやって足止めするかを2人が思案していると、コソコソと氷壁の後ろから抜け出そうとしていた敵の取り巻きが崩れた地面の下に叩き落とされる。下手人は民間人の救助を他の受験者に任せて加勢に来た真堂であった。試験の前に自己紹介された時のことを思い出し、小さく彼の名前を呼ぶ緑谷。

臆げにしか覚えられていなかったことに僅かに表情を歪める真堂であったが、そのことは気にしないことにしてギヤングオルカに向き直る。その後ろから着いてきた加勢の受験者も合わせて、これで数の上ではかなり有利を取れるようになった。

「むむ、人数が増えたか……これを突破するのは簡単ではないな」

この後の動きを思案するギヤングオルカ。緑谷達はその場から動かない彼にも警戒を緩めず、根気よく事態を好転させる隙を窺っている。

棒立ちとはいえ、考えなしに向かっていったって返り討ちに遭うだけ。戦うならば、数の有利と個性の多様さを活かした戦術を絡めて。そうして膠着状態が続く中——それを破ったのは空から飛んできた爆撃機であった。

虚空に煌めいた赫いスパークと共に戦場へ飛び出した爆豪は、ギヤングオルカの頭部に向けて汗が溜まりに溜まった掌を翳す。それを脅威と感じ取ったギヤングオルカは咄嗟に腕でガードし大ダメージを防ぐも、大きく後方へと吹き飛ばされた上に左腕の自由を失ってしまった。

「むっ……!?!」

「何をブーツと突っ立ってやがんだア!?!」

「かっ……かっちゃん!?!」

「数だけ集めといてよオ……動かなきゃあ意味ねエだろうが! ちったあ身体動かせ!」

敵の襲撃発生時、爆豪はその地点からは真反対とも言える遠方にいた。参戦を間に合わせようと爆破を繰り返して飛行するも、その距離はかなり開いており到着までは相当時間がかかる。

——もしかして、自分が戦場に辿り着くよりも、試験が終わる方が早いのでは？

頭をよぎるその可能性。終了条件は通達されていないためいろいろと予想できるが、「所定の時間が過ぎる」というのは普通にあり得る。もしもそうだとしたら、試験が始まって既に30分を超えている以上終了を告げられる可能性はかなり高い。爆豪も少なからず焦りを覚えたその時だった。赫いスパークを全身から迸らせながら、縦横無尽に奔走する風華を見つけたのは。

風華は当然電力を出し渋ったが、この試験中ほぼ何もしていないも同然の爆豪が不合格になるくらいならと渋々電力を分け与えた。戦闘に間に合って介入することができたなら、少なくとも何もせずただほつつき歩いていたという評価はされなくなるだろうと考えたからである。

「天合万雷……雷上動の瞬間移動か！」

「よく電力分けてもらえたな」

「救助はもう、終わりかけだったんだよ。そうじゃなきゃ断られてただろうな」

「何にせよ……心強い援軍だ！」

「……もう終わり、か」

「え？」

「お前達、撤退するぞ」

「オツケー、シャチョー！」

部下達に撤退の命令を下し、ギャングオルカは自ら開けた穴から帰っていく。その動きに困惑し一瞬警戒が緩んだ緑谷であったが、それを轟が身振りで咎め締め直させる。敵が背中を見せたとして、ヒーローは安心してはいけない。どんな時でも『最悪』を想定し、不測の事態に備え続ける。今回の場合は撤退すると見せかけての奇襲だ。

構え直した刹那、会場中にけたたましいブザーの音と目良による試

試験終了の合図が響く。配置された全てのHUCが救助されたことで、試験の終了条件が満たされたためである。

「終わりか……最後のHUCは、連れてくるだけでよかったんだね」最後の一人となったのは、風華が連れてきた救護所から最も離れた所にいたHUCであった。重傷という訳でもなかったし、意識もハッキリとしていたので救助を後回しにしていたのだ。他の優先すべき要救助者を全員救助し終えたのでようやく連れてきてみれば、それが最後の一人で試験終了のトリガーであったという訳である。

「鳴神さん、お疲れ様でした。赫災領域レッドゾーンを維持し続けた上での縦横無尽の救助活動、とても大変だったでしょう……って！鳴神さん身体のヒビが広がってますわよ!?!どれだけ無理しましたの!?!」

「ああ百、お疲れ様。……ちよつと無理したかな。赫災領域の制限時間を少し超過しちゃったや。もっと手際よくやれてれば、こんなことにならずに済んでよかったんだけどね……」

赫災領域を酷使し続けた反動……風華の左半身を蝕む亀裂は、僅かな時間制限の超過によりその規模を大きく広げていた。頬の辺りで止まっていた裂け目の端が、今は唇の先にまで届く。赫い電光と飛び散る身体の破片を供とする亀裂の広がり、その勢力を左手の指の先まで広げたところでようやくその侵攻を止めたのだった。

赫色に染まったヒビは、その奥に本来見えるはずの風華の身体を映さない。まるでその先にはもう何も存在していないかのように、それだけが存在感を醸し出していた。

赫災領域を解除して少し時間を置けば、ある程度はヒビも回復して塞がるのだが……それでも全てが塞がる訳ではなく、左目や耳の周りに首筋など一部には残り続ける。

「……もつと何か、根本的な解決が必要だね」

使い分けをすることで、制限時間を伸ばすことはできる。しかし、それでは時間制限を超過すると身体をヒビに侵食されて、その部分が消えてしまうという問題を解決したことにはならない。

今回は僅かな超過で済んだため、ヒビが少し広がった程度で済んだ。しかし実際の現場なら、もつと大規模な事件や災害はザラにある

だろう。その時に赫災領域の時間超過をしたせいで自分が消えてしまふなんて、自分にとつても救いを求める人達にとつても洒落にならない。

……研究所なら、職員さん達と一緒にいろいろアイデアを出し合えたんだけどなあ。

この制限を丸つ切り取っ払えるような、根本的な解決策が必要だし。しかし、今の風華は個性研究所のような存分に個性を振るえる環境にいない。自分では考えつかないようなアイデアや、専門的な目線からアドバイスをくれる研究者もいない。赫災領域をこれからも使っていくのならば、解決策には自力で辿り着く必要がある。

正直なところ、考えてみてもあまりいいアイデアは浮かんでこない。思いつかないのなら仕方ないこと。風華は頬を張って思考を切り替え、合否発表の場へと向かうのだった。

）

「皆さん長いことお疲れ様でした。これより合格発表を行います。……その前に一言。今回の採点方式についてですね。我々公安の審査員とHUCの皆さんによる二重の減点方式で、あなた方を見させていただきました。つまり……危機的状況の中で、どれだけ間違いのない行動を取ることができたのかを見ていたということです。合格の方は五十音順で名前が載っていますんで、今の言葉を踏まえた上でどうぞご確認くださいな」

目良による二次試験の採点方式の説明を聞いたところで、その後ろにあったモニターに合格した受験者の名前が映し出される。モニターの中にとつとあるであろう自分の名前を探し、誰もが羅列される名前を追いかけていく中で――

「あった。わたしの名前……」

——その中にある『鳴神風華』の名を、風華は見つけ出すことに成功した。

仮免試験、見事合格である。

「み、み、みみみ……緑谷出久あつたあ！」

「俺もあつた！」

「俺もだ！」

「私も！」

「私も合格ね」

「……あつたな」

「当然だろ！」

A組のみんなも、次々と自分の名前がモニターにあることを確認していく。一人、また一人と自分が合格していることを確認し、最終的に21人全員が合格していることが確認されたのだった。